

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 5832



昭和七年八月五日印刷
昭和七年八月十日發行
昭和十一年八月五日再版

不許
複製

發行所

國譯一切經 寶積部 六

編輯者兼
發行者

岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者
長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所
日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番

大東出版社

振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

索引

(頁数は通頁を表はず)

ア	阿鞞跋致	273	歡喜地	261	十惡業道	59
	阿蘭拏	52	願波羅蜜	259	十二行法輪	280
	菴婆羅果	149	君陀華	158	十二種の法輪	259
イ	園陀	386	驕梵鉢提	379	十力(佛の)	259
	一行三昧	281	灰河	162	聖慧	301
	一切智處	365	見一處の住地	352	聖種	195, 227
	一如	281	見相	47	除羯羅教	366
	因陀羅	381	見取	144	釋種	124
ウ	有愛の住地	353	現前地	261	車匿	105
	有受	144	憍薩羅	343	沙彌	250
エ	悅意華	374	意の三事	295	沙門那	63
	燃慧地	261	五事(五怖畏)	314	衆祐	395
オ	應器	210	五種の相	374	修舍佉	111
	遠行地	261	五通仙	364	周那	250
カ	戒衆	241	劫波衣	375	須跋陀	250
	戒を持ち報を求むる取	144	細食	123	滿美天	288
	覺意	296	藏學	236	勝如	266
	迦漚婆華	374	娑羅雞林	364	勝曇	343
	迦毘陀	143	娑蘭雞樹	375	神識	134
	迦蘭鳥	384	三拒の木	366	セ	
	合楯	379	三處	285	施鹿林	182
	訶羅訶羅	156	三轉	280	先際	55
キ	耆域	118	色愛の住地	353	善見	381
	祇洹園	121	色有	35	善慧地	262
ク	瞿夷	88	讖王	370	ソ	
	瞿伽離	89	尸陀林	152	僧伽梨	251
	空忍	55	七財	287	蘇合香	381
	口の四事	295	七種の學人	353	增語	354
	功德海	79	四智(羅漢の)	351	蘇摩浮帝	130
	拘毘羅	378	四重の罪	85	孫陀利	121
	拘摩華	379	四等	303	タ	
	拘羅園	380	四瀆	314	大仙	188
	拘欄荼	230	四非倒	206	大仙尊	189
	歡喜園	383	四分別辯	300	陀奴迦利華	7
			四無色定	222	チ	
			四扼	235	智波羅蜜	259
			四威儀	210	持曇天	374
			習	172	擲法	184
					住地	353
					テ	
					曇衣	252
					天帝	381

	—ト—								
童眞		263	毗羅尼	162	明處(五明)		349		
徳叉迦		156	毘蘭若	121	名稱者		190		
度法		44	頻螺	374	身の三事		395		
度無極		290		—フ—					
	—ナ—		不諳の友	348	彌樓		365		
那術		287	不動地	262	眠(羅漢の)		361		
難勝地(極難勝地)		261	富多那鬼	150		—ム—			
	—ニ—			—ホ—					
爾炎		344	寶掌	329	無闍城		343		
如		268	寶手	84	無明住地		353		
如意珠		384	方便波羅蜜	259	滅受想定		184		
忍迹		288	發光地(明地)	261	開總持		133		
	—ネ—		法雲地	262		—ヤ—			
念處		40	法壽	335	營事の比丘		235		
	—ハ—		法宅	338	扼		224		
薄拘羅		364	本宿	334		—ヨ—			
婆蹉那婆		156	梵住	172	欲愛の住地		352		
婆修吉		155		—マ—	欲取		144		
跋闍羅		380	摩訶迦旃延	263		—リ—			
跋陀婆羅		255	摩訶迦良那葉	145	力		259		
跋陀羅波梨		128	摩訶拘締羅	263	力波羅蜜		259		
八背捨		235	摩那婆	59	離垢地		261		
八由行		299	摩奴闍	66	離婆多		364		
波耶園		334	摩耶夫人	101	隣虛塵		377		
波梨耶多樹		381	魔子の導師	288		—ロ—			
頗羅墮婆羅門		124	末利夫人	343	路伽耶經		195		
	—ヒ—		漫陀河	384	六敬法		225		
必定の菩薩		10	命根	56	六處		370		
		2		—ミ—	六重法		225		

以て贈送を爲し、并に往くことを相ひ勤むるを見て、即便に閻浮提の中に生ぜんと樂ひ、涕淚哀感し、此れ自りして絶ゆるなり。

命盡き死し已るや、伽阿那の風は彼の死天を吹き、彼の風は、善香もて之れを吹きて散ぜしむるなり。是くの如くに散じ已るや、即時に三十三天を遠離して、在る所を知らず、處る所ある無く、他に生ずる能はずして、若しは想若しは知より彼れは既に退き已るなり。人間の中に生れて胎藏の中に在るや、母は則ち相に喜笑・歌舞を現し、心に染欲を喜び、心常に歡喜し、華果・樹林の處を喜び樂み、種種なる雜色の衣服に樂著し、常に飲食を喜び、藏内に住すと雖も母の脇は苦しからず、邪欲を樂まずして心に善き香華の鬘の莊嚴を喜び、臥せば則ち善き夢にして轉倒の見非ず。大仙、當に知るべし、三十三天より退いて此に生るる時、母の藏中に住するに、是くの如き相あることを。大仙、當に知るべし、其の母は、爾の時に一切、藏の過を皆悉く遠離して後則ち出生することを。大仙、當に知るべし、彼の時、童子の既に出生し已るや、身分は平正に、掌文は成就して喜ぶ可く柔軟に、腰細く、齒密に、身體柔軟にして、其の心は勝れたる功德を愛樂し、欲性もて欲事を愛し、心に細衣を愛し、林に戯るる處を樂み、身に勝れたる香を有ち、大富豊財に、金寶具足し、大姓の種族にして、常に施戒を行ふなり。欲心多き者は則ち貧家に生るれども、心に布施を喜び、黒からず白からずして手足は齊平なれば、一切見る者皆悉く愛欲するなり。性は論議を愛すれども、其の心柔軟にして瞋心に於て少く、他の妻に行ふことを樂んで自の妻妾に於て愛樂を生ぜず、諸の親舊・兄弟・眷屬に於て心愛戀せざることを。大仙、當に知るべし、三十三天より退いて人中に生るるに、本性は是くの如きことを。と。

世尊の説き已りたまふや、毘耶婆仙・一切の仙業は心に歡喜を生じ、歡じて言はく。善い哉。と。

大寶積經 (完了)

【二三】命盡き已るや、等。以下の全文は、三本並に宮本に缺けて有らざるを、當譯の臺本たる大正本には、唐の開元中に、西京崇福等の智昇の異譯本「毘耶婆問經」の末節を採つて、附加せる者に據りて補足しあり。然れども、此の「毘耶婆問經」の末節たりとも、未だ當經典の終了と爲り居らざるは、一見して明なり。

拭ひ、歎歎し吞嗟して容貌怖懼せるを見、復傷み怨んで言はく。嗚呼愛せる者、嗚呼親める者、如何ぞ我が將に死の路に行かんとするを見て、曾て與に語らず、我れ今茲の生死の長路に臨めるに、別を執るを垂れざるか。我れ汝が曹と復と見じ。嗚呼、我れ今福業盡きたる故に、此の住居を見るに、謂ふに黒闇の如くにて颯然として空曠なり。嗚呼、天樂は奏せずと爲すか。如何ぞ我れ今寂として聞く所無き。嗚呼、天中にて最も悅樂を爲せる、一切の諸天及び乾陀婆に侍衛せられたる處の、妙色堅固にして金剛を持てる者。嗚呼、我れ今豈復千眼の相もて衆中に在るを見ること得んや。嗚呼、波利耶華・拘毘羅華の我が頭上に在るもの、何故に萎み悴するか。と。時に天衆は、斯の天人の悲惱の是くの如くなるを覩て、悉く皆憂歎するなり。

爾の時に、妙なる耳璫せる者釋提桓因は、諸の天衆の百千に圍遶せる、并に舍支夫人諸餘の姪女と、及び乾陀婆等の美なる音樂を奏して隨從せると與に遊行せるが、彼の天の、五衰の相に爲つて逼害せられ、將に死路に趣かんとするを見、皆哀憐を生じて同聲にて歎じて言はく。嗚呼、奇なる哉、彼の無常の、少しの悲愍も無き暴惡なる毒害や。と。釋提桓因は、梵音聲を以て彼の天に告げて言はく。止めよ、止めよ。天子。我等も皆當に同じく斯の路に歸すべければ、戀著を生じて惡趣に墮すること勿かれ。と。時に諸の天衆も亦同じく告げて言はく。仁者、應當に具に諸善を作りたれば、人間一切衆生の福業を修むる地に往き生るべし。と。是に於て、彼の天は是くの如き言を聞くや、便ち自ら思惟すらく。【〇二】我れ今時に於ては、決定して墜落せん。と。合掌して、彼の諸來れる天に向つて言はく。汝諸人、天中に住する者、我れと與に歡喜せるに、而も我れ今墜落する時至れるに於て、是の言を作し已るか。と長歎して瞻視するに、復二相の、一つには、眼は赤蓮華の如くなる二つには、身の莊嚴の具の忽ち皆隱没するを現すなり。其に餘の諸天此の相を見るや、各天華を持ちて其の上に散じ、及び天樂を奏するに、時に死に臨める者は、餘の天衆の鼓樂・旛華もて

【〇二】千眼の相もて衆中に在る。異譯本に「千眼の帝釋天」とあり。

【〇三】我れ、乃至、墜落せん。異譯本には「我れ今實に退かん」とあり。

を惡み、但遙に相ひ視て、聲を發して戀ひ泣き、哽噎・酸楚して歎じて言はく。苦しき哉、此の細軟の身は、昔我等と與に遊行して天池の中に讌樂せること猶鶯鶯のごとくに、善法堂に於ては猶鶯鶯の如くに、歡喜園に於ては、迦蘭鳥の如くに、漫陀陀に遊べること香象に同じく、波耶園及び拘羅園に在ること猶蜂王の如くに、雜樹林に處ること天の華冠の如くなりしに、今は云何ぞ五衰の相に爲つて害を加へられ、我等を捨て離れて、將に何處に去らんとするか。と。時に彼の天人は是の悲歎を聞くと、復悲惱を増して大怖畏を生じ、便ち熱病に爲つて纏ひ擗められて、身を擧つて枯悴し、眼目憊墮すること猶商人の其の徒侶を失へるが如く、猶海を涉れる舟船の破壊せるが如く、亦人あつて如意珠を失へるが如く、又、危峯の朽壞の樹の、彼の猛風に搖動し吹き撃たるるが如く、復、龍の子の金翅鳥に爲つて銜み啄まれんとして、廻り追て戰き懼るるが如くにして、合掌して彼の諸の姦女に告げ言はく。汝等進み來り、願はくば能く手を以て摩觸し、我れに於て少しく蘇息せしめんことを。と。是の語を作すと雖も、而も諸女等は但遙に悲泣するのみにて進む者ある無く、各樹枝を執つて遙に、心の上に擲つて、是くの如き言を作さく。汝は天の福盡きたれば、當に速に彼の閻浮提の中に生るべし。と。是に於て、彼の天は是の言を聞き已るや、棄捨せられたるを知り、聲を發して怨み唱ふらく。奇なる哉、奈何ぞ我れ此の中の種種なる資具・園苑・宮殿を諸女等に與ふるに於て、眷愛に纏縛せんや。今時命終つて將に死路に行かんとするに、乃ち何ぞ遙に立ち、但我れに謂うて、當に閻浮に於て生を受くべしと言ふや。と。爾の時、彼の天は是の語を作し已つて、復常時遊ぶ所の處を親、念念に思惟し掉擧し哀歎して、大聲を發して言はく。嗚呼、善法堂・嗚呼、歡喜園・嗚呼、雜樹園・嗚呼、黃毯園・嗚呼、波露沙園・嗚呼、波梨耶園・嗚呼、光勝園等、嗚呼、緹陀の大河及び諸の宮殿・堂室・樓閣よ。我れ今時に於ては、制すること已れに由らずして、奄ち相ひ捨て離れ、此より墜落す。と憂歎すること未だ終らざるに、復諸女の驚き惶て去來し、手を以て涙を

【九一】迦蘭(Karavīra)鳥。即ち迦蘭陀鳥なり。鶯鶯の大なる者にして、喉に袋あつて水一升を貯へ、背の長さ一尺程あり。

【九二】漫陀(Mandakini)河。

又「曼陀栴池」とも曰ふ。

【九三】波耶(Paryātri)園。

異譯本に「波利耶多」とあり。波利質多羅大香樹の園林を謂ふ。

【九四】拘羅(Kovidāra)園。

異譯本に「俱耆多羅」とあり。即ち俱鞞陀羅香樹の園林なり。

【九五】雜樹林(Mitāraśayana)。

又「雜林苑」と譯す。

【九六】如意珠(Oktamāra)。意の如くに、種種の寶物貨財を出すに由つて名く。或は、佛の舍利變じて成ると云はれ、或は、龍又は摩竭魚の腹中より出づと云はる。

【九七】心の上。

異譯本に「天子の心の上」とあり。心上とは、胸の上(ホトリ)を謂ふ。

【九八】波露沙(Parusaka)園。

異譯本に「波留沙迦」とあり。

【九九】麗蓋園」と譯す。帝釋天の四苑の一なり。

【一〇〇】我に今時に於ては、乃至、此より墜落す。

異譯本に「我れ今、忽ち此の天の宮殿を捨て、自在を得ずして、便ち此を退く。」とあり。

舎支と曰へるが、歡喜園に住して天の姦女の百千は圍遶せり。容色の殊妙なること、猶華の聞き敬けるが如く、頬は紅蓮の如く、面は金色の如く、諸の鮮妙・細軟なる衣服を著つて園苑に嬉み遊ぶなり。天の妙寶華をば以て首の飾と爲し、珠の纓・環の珮は動けば妙聲を出し、額廣く平正なるに金の旒鎖を垂れ、其の眼纖長にして華の將に開かんとするが如く、堅く誠をば傾け注ぐごとと天帝に在つて、曾て願毒・鬪諍・鬻妬無く、亦復、諸べて懷胎の患を離れたり。大仙、當に知るべし。彼の夫人の耽愛の垢の重きこと餘の天女に倍し、志意驕倨なること、猶彌樓及び漫陀山の幽邃にして仰ぎ難きがごとし。肥えず瘦せず、長からず短からず、體質香潔にして諸の穢惡無きに、風は妙華を送つて結んで蓋を成すなり。而して此の夫人は、常に能く如來の種性を發揮するなり。

復次に、大仙、三十三天には、雜患の累無くして恒に樓閣・宮殿に遊戲し、其の壽とする所の命は天の一千歳なるが、壽の將に終らんとする時に、五惡の相あり。一には、清冷なる池沼の淨きこと頗膩の如くにして、觸るる所有らば人をして欣悦せしめ、微風軽く搖して雜華嘩き映れるに、此くの如き池中に、將に洗沐せんと欲するや、變じて脂膩と成るなり。時に彼の天人は、此の相を見已るや心に怖懼を生じ、水より跳ね出でて林中に奔走するに、時に諸の天女は彼れの惶遽せるを見て、亦疾く隨從して一樹の下に止り、心に憂惱を生じ、喉中哽噎して、同聲にて告げて言はく。仁者、如何ぞ速に我等を捨てて、孤り居ること此くの若くなるか。と。時に彼の天男は、聲漸く哀切にして是くの如き言を作さく。我れ昔より來、未だ曾て此の垢膩の、身に現るる有らざるなり。と。是の言を作し已るに、其の兩腋の下に忽然として汗を流せば、彼の諸の天女は此の衰相を見て、皆即速離するなり。是に於て彼の天は、諸女の去るを見て憂惱し喘息して、内に熱毒を増すや、頭上の華鬘は颯として便ち萎み頽せ、著くる所の天衣も忽ち復垢膩し、天の牀敷・雜玩等の物を皆愛樂せざるなり。彼の諸の天女は、是くの如き相を靨るや、必ず定つて死することを知り、穢氣を聞くこと

【八七】 歡喜園(Nandana)。帝釋天の四圍の一にして、喜見城の外圍、北方に在り。諸天の此所に入る者。自ら歡喜の情を起すとせらる。

【八八】 猶、彌樓及び、乃至、仰ぎ難きがごとし。

異譯本には「彌樓山の第一勝處に勝り」とあり。然らば、「須彌樓」即ち須彌山を指す者なり。而して、「漫陀山」は或は香醉山(Gandha-madana)。(第三卷、二二二頁、同名の解参照)を謂ふ者なるべし。

【八九】 常に能く等。異譯本には「口より妙香を出し、善巧の語もて、佛種を増長することを説くなり」とあり。

【九〇】 一には、原本の「一者」は、以下の文に對照するに、無意味なれば、誤記なるべし。異譯本にも、單に「地」とあり。乃ち或は「地者」なるべきか。

【九一】 將に洗沐せんと乃至成るなり。異譯本には「既に池に入り已るや油膩の汗出づ」とあり。後文と照して當に然るべし。

ることは猶佛身の如くにして、其の輝きて艶く映る所は、諸の金の聚にも其の精光を奪つて皆黒闇ならしむるなり。と。

廣博仙は言はく。如來、今は天帝を讚美したまふこと甚だ希有爲り。と。爾の時に、世尊は、廣博に告げて曰はく。彼の天帝は、是れ無常の身・下劣の身にして、脆き草の器の如く、假に剪りたる華の如く、亦畫師の圖飾せる彩繪の如く、亦工人の木に刻める形像の如く、又結べる華の久しからずして散り滅するが如くなれば、何ぞ稱歎するに足らん。復次に、大仙、我れの弟子に、神通者の阿那律と名くるあり。但父母の生ずる所の身を以ても、節節の支體の一分の力は、猶帝釋に過ぎたり。と。時に阿那律は座中に在りしが、如來の是くの如き言を説くを聞くや、便ち是の念を作さく。

今は、世尊我れを覺悟したまふなり。と。卽三昧に入るに、身光赫奕として天の新金の如く、殊勝なる冠を戴くに、珠の光輝は其の面に映じて、潤澤なること醍醐に過ぎ、其の眼は紺青にして吠瑠璃の如く、摩尼・碼碯及び日光珠をば以て臂の飾と爲し、身光・香薰は普遍に輝耀したり。時に廣博仙は、既に斯の相を覩るや、心大に驚愕し、即座より起ちて合掌し瞻仰し、希有の心を生じて高聲に唱へて言はく。奇なる哉、善い哉、我れ人身を得たること唐捐ならずと爲す。今世尊の聚會を發揮したまへるに遇ひて、昔より未だ覩ざる所を今乃ち見るを得たればなり。と。爾の時に、世尊は廣博に告げて言はく。彼の帝釋の身と阿那律と、誰れを勝劣と爲すか。と。廣博仙は言はく。彼の帝釋の身を阿那律に比するに、假使ひ百分すとも其の一にも及ばず、乃至、千分すとも亦一にも及ばざるなり。と。佛言はく。大仙、是くの如き身に於ては希有とするに足らず。福德を獲る者は、其の願とする所に隨つて身相をば成就すればなり。と。

爾の時に、衆會は歡喜の心を生じて、咸く佛に白して言はく。惟願はくば、世尊、更に我等の爲めに天の趣を説きたまはんことを。と。佛言はく。三十三天には、彼の天帝の最大夫人の名けて

【八〇】世尊我れを覺悟したまふなり。異譯本には「如來我れに加へたまふなり。」とあり。何づれも「暗示を興ふる」意なり。

【八一】今世尊の、乃至、遇ひて。異譯本の、此れに當れる者には「如來、今は一切智と相應せる語説を作して」とあり。

【八二】最大夫人。

異譯本に「第一の天后」とあり。

彼の天の會堂は、周廻方整にして、長廊は寛廣に、高樹の周密せること猶陰雲の如し。其の堂の四面に、復園苑あつて皆自由なるが、種種なる金蓮・雜華を開錯し、妙なる歌聲を出して聞く者欣悦し、拘迦那陀樹・波梨野多樹・拘毘陀羅樹にて以て叢林を爲せり。大仙・善法會堂の資玩の具は、皆是れ金・銀・諸寶等の積聚にして、瑠璃にて以て臺礎と爲し、珍奇なる寶物は庫藏に充滿し、宮殿は百千に莊嚴し、園苑は遠近に隣接して、常に安樂なるを聞きて、諸の疾苦及び餘の禍患無きを、彼の天人は諸の園林に於て遊戯既に已るや、此の堂に還り集つて娛樂を受くるなり。

復次に、大仙、三十三天に、復別殿の名けて「善見」と曰へるあり。皎きこと白日の如くに、淨きこと猶明鏡の如し。四面に周く匝すに、皆華の繒綵を以て懸け布いて莊嚴せり。千の天女あつて、藻り綴れる雜華・輝耀せる珠・金翠の網の旒をば、以て冠の飾と爲し、象・馬の車乘にて往來を踐踏するに、金塵を飛し颺げて處處黄色なり。而して彼の殿に於て六萬の柱あつて、椽椽は重疊し、遞に相ひ輝映するに、奇珍を間錯して繪るに丹彩を以てし、栴檀沈水及び蘇合香の氣氤郁烈なるを其の地に塗るに用ひたり。釋提桓因は、金剛の杵を持ち、百千の女の前後に圍遶せると與に、寶殿に來り昇り、娛翫して歡樂するなり。

大仙、當に知るべし、三十三天の中には、天王の因陀羅と名くるものあることを。其の力勇健にして、九千の象に敵し、垂れたる臂は、織好にして天象の鼻の如く、體は淨金の如くにして、筋肉は堅く密に、骨脈は露れず、臆は師子の如くにして肚は凸垂せず、其の腰は束ねて細く、金線にて貫ける纒をば以て頭の飾と爲し、珠の瓊の晃耀せる、天服の脩く委ひたるが、天の聲明に久しく已に通達し、書論を選造し、甘露を飲食し、往來には常に伊跋羅象に乗るなり。復次に、大仙、彼の天帝の然る其の色身は、諸の骨肉には非ずして純華にて成ぜられ、喉聲は清美にして、身の香の殊特なることは、假に狂象をして其の香氣を聞かしめば、皆自ら調善なるなり。形貌の端嚴な

【六】 波梨野多 (Bharitana) 樹。帝釋天の園に咲く大香樹なり。「波利質多羅樹」と同じ。

【七】 善見。謂はゆる「喜見城」中の「最勝宮」(Vajrasana Pradaha) を指す者なるよし。

【八】 蘇合香 (Turritana)。諸香を合せて、其の汁を煎じたる者を謂ふ。

【九】 因陀羅 (Indra)。即ち「帝釋天」なり。第一卷「釋提桓因」の解參照。

【一〇】 伊跋羅象。「伊羅龍象」と同じ。第四卷、同名の解、參照。

【一一】 天帝。

き敷き、三摩地に入つて七日を經る毎に、方に乃ち一度現れて息を出入するなり。彼れの定に入れる時には、隨意の風あつて念に應じて至るや、假使ひ劫火大地を燒きて一炎焔を成すとも、彼れの禪身に於ては、損害し能ふこと芥子分の如くなるも無し。而して彼れの支體は、彌樓山の如きをも常に鎮壓する所にして、難陀龍王及び跋難陀には大力勢あつて、氣を鼓して猛烈なるや、彌樓山王も之れに爲つて揺動し、呼喚を鼓ひ作すや、四大海水は變じて鹹味と爲れども、驕梵鉢提の定に入れる時には、彼の二龍王は其の威力を盡すとも、擾亂し能ふ無きなり。我が此の弟子の、合栴林に在るに、而ち諸の天女は欲愛に耽ると雖も、斯の尊者を視るや清淨なる心を發し、曼陀華及び諸の蓮華を以てして其の上に散じて合掌して恭敬し、三十三天の諸の童子等も亦來つて圍遶し、天の甘露を持ちて資格し供養するなり。而して此の尊者は、常に諸天の爲めに、合栴林に於て、修多羅及び未曾有・無問自說・本事・本生・因緣・方廣・諷誦・論議・重頌・授記・譬喻等の經を説く時に、諸の天人は斯の法要を聞き、殷勤に恭敬し尊重せざる莫きなり。

復次に、大仙、三十三天には、聚會の堂あり。其の堂に柱八萬四千あるに、皆金・銀・跋闍維の寶・碼磻の美玉并に梅檀心を以て結構して成され、懸れる鈴・垂れたる鐸は微妙の聲を出し、諸の天女を列ね、諸の幡幢を建て、蕭・笛・琵琶・空篋・琴瑟・鞞・鏡・螺・鼓の妙聲振ひ發り、天の男女の、互に相ひ愛敬して、和顔もて慈悅しつづ、恒に聚會する所なり。彼の堂中に於ては、摩尼寶を以て之れを嚴飾し、綠潤なる琉璃は淨く滑なること鏡の如く、塗香・末香・雜華は周遍し、亦飄風無く、及び諸の炎熱・毒蛇・蚊・虻も皆遠離する所なり。其に居る所の者には、惛睡・懈怠の想ある無く、微風清く和ぎて遍く林觀に入るなり。其の諸の樓閣には、幡網垂れ覆ひ、妙寶の纒を懸け、諸の華香を散じたり。百千の天女は、則ち愛染すと雖も、而も嫉妬及び鬪諍無く、面貌端正なること猶滿月の如くにして、華鬘・寶珠にて身首を嚴飾し、妙歌清淨に、往來して報まざるなり。復次に、大仙、

【七】 修多羅、乃至、譬喻。

謂はゆる「十二部經」なり。別項「十二種の法輪」參照。

【七】 聚會の堂なり。因みに、善法堂は、釋尊の母摩耶夫人の、死して初利天后に生れられたるを、釋尊は上天して、母の爲めに、三ヶ月說法せられたる處なりと謂はる。

【七】 跋闍維 (Vajra)。金剛と譯す。即ち金剛石なり。

めたる故從よりして此に來り生ずれば、諸人應當に此に來つて事を承け、歌舞・娛樂して、此の福人をして歡喜して厭ふ無からしむべし。と。此の聲を出し已るや、園林・宮殿の六萬の姪女は、天華を捧げ持ち、被服は光り耀き、身に發る所の香は蒲萄酒・蜜酒・華酒の如くにして其の香を聞かば、人をして昏醉せしむるが、同聲にて唱へて言はく。汝の積める天の福を、願はくば時に充たし奉げよ。と。是に於て童子は、群る天女と、歡喜林及び雜華林・黃髮石林・極光嚴林・日宮園苑・泉聲園苑・意樂園苑・叢花園苑に遊ぶなり。是等の如き上妙なる林苑に遊んで悅樂するに、清涼にして諸の惡風無く、華の香は芬馥とし、青摩尼寶は以て燈明を爲し、諸の蜂鳥王は微妙なる音を出し、其の鳥の毛羽は猶雜寶の如くに、天の吠瑠璃をば以て其の翳と爲し、飛び翔り群り嬉んで、遍く林樹に滿つるなり。復次に、大仙、彼の界に池あつて、月に隨ひ増減し、八功德の悅意・清冷・澄徹を具し、百華の香華は其の内に開け敷き、岸樹の行列せるに雜華は充滿せり。而して彼の池中にて、衆多の天女の遊戲し娛樂するに、諸の寶器の等は意に隨へり。而して色香妙なる食を現じ、天の甘露と名けて、拘摩華の如く、白きこと珂雪に逾へ、甘味具足して亦消化し易く、諸の苦澁・雜惡等の味無し。復次に、大仙、諸の天人あつて、報の純ならざる者は、同器にて食ふと雖も、或は赤色を感じ、或は蒼色、乃至、黃・黑・諸の雜れる等の色を感じ、天の容には別無きも、唯食に異なるのみ。大仙、當に知るべし、彼の諸の衆生の、先に捨施すと雖も後に復悔恨せる、斯の報に由る故に、果を獲ることも是くの如くなることを。復、園苑の、名けて、合栢と曰へるあつて、枝條・華葉雜糅して莊飾せる百千の叢林の、清淨にして柔軟なること猶水精の如く、華果常に茂れるが、其の林樹の間は諸べて寂靜にして、身に欲を離れたる牟尼の是れ棲み集る所なれば、天の男女にして常に入る所の者は、皆貪愛の欲樂を爲さざるなり。大仙、當に知るべし、我れの弟子の最上なる聲聞たる、驕梵鉢提は、是れ婆羅門たる清淨の族子にして、禪定・慈悲の心に住したるが、彼の等持を以て慈眼を開

【六九】 汝の積める、乃至、充し擧げよ。

異譯本に「今に於て、此れ在つて天の欲樂を受けよ。」とあり。

【七〇】 彼の界に乃至増減し。異譯本には「妙なる池水あつて、清冷なること月の如く、」とあり。

【七一】 拘摩華。異譯本には「拘物陀華」とあり。第一卷「拘物頭華」の解、參照。

【七二】 合栢(Chih-pai)。異譯本に「尸利沙栢」とあり。即ち合歌木(ネムノキ)なり。

【七三】 驕梵鉢提(Cavyanpatti)。異譯本に「伽婆波帝」とあり。即ち音譯なり。舍利弗の弟子と傳へらる。

【七四】 彼の等持を以て慈眼を開き。異譯本には「三味の眼開けて慈三昧に住し、」とあり。

爲つて將に取られんとするが如くにして、天母の手の、以て胎藏と爲すに入るなり。時に母の手掌に、即華を生ずるに因り、持ちて天父に示し、共に相ひ慶悦し、復兩手を以て其の華を摩で接むに、子を即誕孕するなり。時に彼の天母は、天父に告げて曰はく。我れ今に於ては、一の童子の増長なる勝種を誕さんと、便ち親族を會し以て歡賀を爲すに、生れて七日を滿すや、天の相は具足し、前の生を憶念——某の處より滅して今此に來り生じ、某は是れ我が父某は是れ我が母にして、曾て某の善を修せり。と——するなり。是の念を作す時に、聳然として歡欣し、便ち諸欲に於て癡愛を生じ、天界の中の宮苑園林に於て、自然に了見して貪り喜び愛著するなり。爾の時に、童子の垂るる臂の臍しく長きこと、猶象の鼻の如く、其の胸の峻實なること師子の臆の如く、腰・腹は圓く細くして垂るる腋を有つ無く、背・脊は端平にして高下の骨無く、兩髀の圓相は芭蕉の莖の如く、肌肉は光潔にして諸の薰き肝無く、眉毛及び雜鼻の穢を有つ無く、上妙なる香氣は身より流出し、華鬘・瓔珞・天衣の輕くして、密なるは、外に求むることを假らずして自然に體に被れり。時に、宮殿の中の有らゆる天女の、天男無き者は、此の童子を見るや、共に來つて圍遶して、咸く是の言を作さく。善く來れり、仁者。此の宮殿は皆是は汝の有にして、我等諸女は先より依怙無し。願はくば、相ひ侍し從はんことを。と。其の中の或は云はく。此の輩は盛年にして、乳は金瓶の如くに、面は猶紅蓮の如し。此の園苑の中には、是くの如き天樹の、拘毘羅の林は垂れ覆うて榮え、好しき六萬の天女は前後に周遍せり。善い哉、仁者、我等と永へに以て娛樂す可きこと、雲中の電の常ならずして有るが如くなれ。と。或は宮殿あつて簫鼓・琵琶、諸の雜天樂は自然に聲を發し、上妙なる敷具及び師子座には珠纒を嚴飾し、垂るるに縑絲を以てせるが、而も諸の縑絲は、是れ繭蠶の作る所に非ず。時に彼の童子は、斯の珍飾を靦て、灌頂せる王の、座に昇るが如くにして坐し、既に座に昇り已るや、諸の珍玩とする所のものは、咸く聲を出して言はく。此の善業の人は、閻浮洲にて天の福を修

【六七】 拘毘羅。

異譯本には「俱枳陀遶」とあり。第五卷「俱枳陀羅」の解、參照。

【六八】 雲中の電の、乃至、如

くなれ。

異譯本には前節の「面は、猶、紅蓮の如し。」の次に「我が身は、猶、雲中の電の行くが如くに、端正にして意ぶべし。」として入れあり。此の方、然るべし。

遂に其の上に散じて復是の言を作さく。仁者、汝は福を具へたる故に當に人間に生るべし。彼は是れ福地なれば、應に信心を以て諸の善種を植うべし。と。爾の時に彼の天は、諸女等の皆已に背き捨つるを見て、重ねて熱惱を増して、身心熾に然ゆること、蘇の滴を炎鐵の上に置くが如くに欬ち自ら銷滅し、餘の微なる灰燼も、復業風に爲つて吹かれて散ること、隣虛塵を千億分と爲したるが如くにして更に見る可からず。是に於て、彼の識は天より降下して、生を受くる處たる父母の和合して心に喜悅を懐けるを見て、便ち胎藏に入るなり。纔に胎に處る時に、母に即ち相は現れて、飲食は增多すれども血肉を嘔はず、緋衣を樂み著け、聚會の處を愛し、諸の親屬に於て倍眷念を加へ、其の子を懐くと雖も會て痛惱無く、口に涎を流す無く、身は沈重ならざるなり。亦、既に生じ已るや、入相端嚴に、其の眼紺色にして天の青寶の如くに、衆に樂んで見られ、上界の四天王の事を聞くや、自然に欣悅し、常に愛する妙香の衣を捨施するを樂み、性數食ふことを好み、常に歌舞園林を喜び、女色に留戀せざるは靡し。

復次に、大仙、若し衆生あつて、淨信心を以て、殺害及び偷盜を遠離し、諸の飲食・上妙なる資具・衣服・財寶を持ちて捨施を行ひ、勤めて誠に佛塔に散華して禮拜せば、壽命盡くる時に、身に疾苦・垢膩・臭穢無く、習ひし所の業を念するに、會て忘失せず、面は金色の如くに、鼻は陥り曲らず、心驚き惱まず、喉閉塞せず、亦喘息する無く、風刀の解截する所と爲らず、聲驚れ破れず、寢膳は安寧なり。大仙、當に知るべし。斯の人の如きは、毒も害する能はずして飲食は消化し、折傷・大枉も皆遠離することを。其の人命終するや、天諷の故を以て、三十三天の百千の樓閣に、金の摩竭魚にて門柱を莊飾し、地には勝れたる梅檀香水もて塗り灑ぎ、其の地は柔くして潔白なること霜雪に逾え、淨きこと頸珠の如く、黃檀香樹に天寶の燈燭は雜錯して行列し、天の諸の男女の、園林に遊戯して耽染狂醉せるを見るなり。既に斯れを觀已るや、遂に歡樂を生ずること、猶貫ける珠を人に

【六】復、業風に爲つて、乃至、更に見る可からず。

異譯本には「掃風の來たるあつて、彼の天の身を吹いて、一千分と作すに、碎末として散り去つて、遍く虚空に在るなり。」とあり。

【六】業風。作れる善惡の業に由つて起る所の風を謂ふ。又、劫末の大風災及び地獄にて吹くと云ふ風をも曰ふ。又、業力を風に喩へて曰ふことあり。今は初の義なり。

【六】隣虛塵。略して「隣虛」と曰ふ。色法即ち物質の最極小分にして、虚空に凝する如き者を謂ふ。謂はゆる「極微」にして、色法の根本と爲す所の者なり。

【六】風刀の解截する所と爲らず。

異譯本の此れに當る者には「根は破壊せず、筋脉は斷たず」とあり。

【六】寢膳は安寧なり。

異譯本には「臥處に於て身は廻轉せず」とあり。

【六】天諷。

異譯本には「内護」とあり。

の爲めに神の造化する所の歌舞の倡妓は、言笑し往來して、能く見る者をして其の染愛を増さしむるなり。其の宮殿の前に、樹つるに刹柱の、金銀にて間錯し縵綺にて莊嚴せるを以てし、諸の寶旛を懸けたるが風に隨つて搖ぎ颺れり。四の天王あつて、一を持國と曰ひ、二を増長と曰ひ、三を廣目と曰ひ、四を多聞と曰へるが、此の四天王は、彼の天界に於て吟嘯し歌舞し讌會し嬉遊して、安樂を具足せり。時に彼の衆中の諸の天童子は、力藝殊勝にして天の妙身を具し、臂を垂れて往來すること猶醉象の如くに、身の香は郁烈として一由旬に遍く、其の壽命とする所は天の五百年にして中天する者無し。園苑の林樹は、榮色光潔なる迦潭婆華にて以て莊嚴し、咸悉く芬馥として諸の臭穢無く、四面の階道は雜寶にて成ぜられ、百千の天女は常に歌伎を爲し、諸の寶器の中よりは妙なる音聲を出せり。善男子、彼等天人の壽の盡さんと欲する時に、三種の相あり。一には、身光は隠れ没するなり。二には、華に香氣無きなり。三には、天女の諸の伎樂を奏するを聞かず、常に歡遊する所の園林・宮苑・鳥聲の、和雅にして是の喜び好める處を皆愛樂せず、華鬘は羨み悴へて天女は悲み號び、衣には垢穢を生じ、昔より來欣び翫べる具を瞻視しても復悶絶を増し、身上に汗流れ、眼は變じ枯れ燥きて、水魚を取つて夏日の中に置きたるが如く、熱惱に逼られて地に宛轉するなり。時に諸の女等は、彼の天男の愁苦すること此くの如くなるを見て、皆來つて圍遶し、同聲にて號哭し、唱へて言はく。苦なる哉、苦なる哉。我が愛する所の者は、奈何ぞ是くの如くに、好み喜ぶ所の事の、翻つて愁苦と爲るか。今之れ云何にして、我等が輩及び遊讌の處を捨つるか。と。時に天女等は、偈を以て歎じて曰ふなり。

種種の妙なる莊嚴 仁者の遊讌する所の 最上なる福德の城は 四面に樓閣を具へ 天女は恒

に充滿し 園林は 鏡に榮茂せるに 云何ぞ歡愛を捨つるか 苦なる哉此の無常や と。

爾の時に、諸の天女等は此の偈を説き已つて、相ひ視て哽咽し、各右手を以て諸の雜華を取り、

【六〇】迦潭婆(Kadamba)華。異譯本には「迦曼婆迦」とあり。「白花」と譯す。

嚴飾して遍く華纓を垂れたるを見しむるなり。亦、既に生じ已るや、形容光り潤ひ、白服・華鬘は常に眷愛する所にして、好んで親屬と遊び、欲樂に耽著し、情に女人を戀ひて往來輕躁し、名衣・上服及び諸の園林を貪樂せざる無く、富貴の者を見て倍喜悅を生ずるなり。

復次に、大仙、四天王天に趣き向ふ者は、若し衆生あつて、憐愍の心を以て、貧窮の者を見て衣食を施し及び諸の病人には随つて醫藥を與へ、或は井泉を造り、或は池沼を施さば、其の人將に終らんとするに、形羸れ瘦せず、容色變る無く、身に垢汗無く、聲響れ破れず、亦大小便利を遺瀝せず、六塵充ち足り諸根損ずる無くして、自身の天衆の中に在るを見るなり。命既に終り已るや、色は紅蓮の如くに、口より妙香を出し、復清風の妙華の香を吹いて其の屍上を拂ふあり。是に於て、彼の識は、四天界の父母の、歎び遊んで情欲に耽醉せるを見るなり。時に彼の天父は、其の右手を以て天母の背を摩づるに、即母の髀に於て受胎を得、七日を經已つて遂に即ち誕生して、天の飾は具足するなり。大仙、當に知るべし。四天王天の居る所の地は、縱廣八萬四千由旬にして、黄金・白銀・雌黃・雄黃もて間錯して莊飾し、百千の天女は其の中に充滿し、百千の華果は人の形像の如くにして、彼の園苑に於て天の摩尼の光に常に明照せられ、樹林の枝莖には、劫波衣及び妙なる綸綵を垂れ、其の樹滑潤にして見る者欣悅し、其の龕室に於ては常に樂具を懸けて、簫・笛の儔は自然に聲を發すなり。彼の天童子は、搏食して力を爲すに、香美なる秬稻は、色は紅蓮の如くに、味は甘露に逾えたり。其の食ふ所の器は二種を具へて、一は金の器にして、二は銀の器なるが、意の樂ふ所に隨ひ、色・香・美味は皆中に於て現れ、復天の漿の、名けて華酒と爲せるあつて、香・冷・殊特にして、設ひ嗅ぐ者あるにても、亦自然に醉ふなり。彼の天人には各寢殿あつて、名けて初秋と曰へるが、遍く華條の金銀の雜寶を垂れ、娑蘭雜樹の數百千あつて其上を合せ覆ひ、復種種なる坐臥の敷具あり。六萬の天女は、顔容は殊妙に、被服は光鮮に、其の聲は響亮として韻天樂と合し、諸欲

【五六】 色は紅蓮の如くに。
異譯本には「死屍の面色は、生ける蓮花の如くに」とあり。

【五七】 劫波衣。「劫娑婆衣」にして「劫具衣」と同じ。第四卷、同名の解、參照。

【五八】 娑蘭雜樹。

異譯本には「勝れたる天樹の娑羅雜樹」とあり。乃ちの *śāli* *śāli* (陸上に生ずる蓮) なるべし。

【五九】 諸欲の爲めに、乃至、往來して。

異譯本の此れに當る者には「異心と相應せる身の、極めて軟弱なるが、歌舞し戲笑して」とあり。

聽け。今正に是れ時なり。若し衆生あつて、堅固に成就して香華の鬘を施さば、此の人は必ず當に
 持鬘天に生ずべく、臨終の時に身に妙なる香を發し、及び鮮なる華を感じ、而して復自ら種種な
 る色華の、來つて其の上に散ずるを見、或は樓閣・宮殿に諸の鈴鐸を懸け、雜華にて嚴飾したるに、
 百千の天女は而ち其の中に處るを見るなり。命終の後に、持鬘天の父母の和合すること、瞻部の人
 の如くなるを見るや、便ち愛風に爲つて飄つて胎藏に入るに、時に彼の天母は懷妊し、七日にして、
 右脇の下より遂に其の子を誕ずるなり。彼れの適に生じ已るや、其の胸前に於て、天の悦意華は
 自然に鬘と爲つて、七種の色の謂はゆる白・黒・黄・赤・天紺・紅蓮及び火銅の如くなるを具へて、光明
 炫耀し、香氣は風に因つて一由旬に遍きなり。故に彼の天を號し、謂うて持鬘と爲すなり。宮中に
 樹あつて、其の汁の香美なること猶甘露の如く、園苑の果實に八つの上味あつて、大さ・頻螺の如
 く、彼の天の食ふ所は、皆是れ甘果にして餘の搏食に非ず。凡べて饑の想あれば、果は自ら樹に
 現るるなり。履む所の地には諸の荆棘無く、鮮なる華・柔き草周く布きて清淨なり。或は宮殿あつ
 て、白華の聚の如く、或は黄金を以て屋の鸚吻と爲せり。彼の天女は、光容藻飾して、軒檻を眺望
 して相ひ與に娛樂せり。其の壽命とする所の天の二百年の、將に終歿せんとする時に、二種の相あ
 つて、居る所の樹は其の葉凋頽し枝條下に垂れ、其の華の香氣自然に隠れ没し、著くる所の華鬘は
 忽然として萎び黄み、清涼の風は變じて毒熱と爲り、最勝なる天城をば棄捨して去るなり。時に諸
 の天女は此の衰相を見るや、圍遶して悲み號び、歎じて言はく。咄なる哉、何ぞ彼れ無常の少慈悲
 も無きや。今我等の愛重する者に於て、制すること己れに由らずして、將に我等を捨てんとするこ
 と須臾に在ることや。と。時に在いて、彼の天子は、漸く熱病に爲つて逼迫せられ、遍體に火現れ、
 炎焰加はると雖も、而も熱惱の心無くして猶快樂しつつ、彼よりして没し、人間に生を受けて胎中
 に在るや、能く其の母をして、香華の鬘及び諸の果實を愛し、又、夢中に於て、常に城邑・場肆の、

【四七】 持鬘天(Atitha)とあり。

【四八】 悦意華(Mandhavya)とあり。

【四九】 頻螺(Mandhavya)とあり。

【五〇】 光容藻飾して。

【五一】 異譯本には「清淨無垢に、妙衣もて莊嚴し」とあり。

【五二】 二種の相。「二種」は「五種」の誤なるべし。

【五三】 異譯本には「則ち五相なり。何等を五と爲すか。一に謂はく、彼の天の依る所の樹枝の心(シン)は、萎み蕪(ヤブ)れて頭低く卷き屈み、其の花は香を失ふなり。二に、彼の樹に於て、心、喜樂せざるなり。三に、則ち雲萎むなり。四に、天風の涼しきもの、變じて熱の觸を爲すなり。五に、諸の天女は、心と憐愍を生じて、皆悉く憂愁するなり。とあつて、謂はゆる「天上の五衰」を謂ふ者の如し。但し、五衰の相は、諸經論に由つて異なる者あり。

【五四】 最勝なる天城をば等。是れ他の諸經論に曰ふ「本座を榮まざる者」に當るべし。

【五五】 制すること己れに由らずして。

【五六】 異譯本の此れに當る者に「命、自在ならずして」とあり。

備へ絡繩を兼ぬるを要して、爾く乃ち車と名くるを得、身の車も亦是くの如くに、諸界和合

して生じ、諸根悉く備具せるを、識に由つて能く牽挽し、肢節相ひ綴り連り、筋脈恒に過く滿

ち、鬮體を皮髮覆ひ、腸肺并に心脾、肝胃の衆和合して、建立せるを假に身と爲し、識王其の

中に處り、身に調御を爲すのみに非ず、諸の體性を了知する、是れを智識は俱なりと名くるな

り、と。

復次に、大仙、此の識は微細にして、色として見る可からず、諸根を有つ無きも、亦相ひ離れず。

若くにして、諸の丈夫の、怯弱する所あり、或は恐怖を生じ、或は尋思を起すは、皆識の増上せ

るにて智の作用には非ざるなり、と。

爾の時に、廣博仙人は、復佛に白して言はく、云何にして、一切衆生の地獄趣よりして來り生ぜ

る者、乃至、天趣よりして來り生ぜる者と觀察するか。何の業の差別にて、天人・傍生・餓鬼及び地

獄に生るるか。と。佛言はく、大仙、衆生の本性の、此に没して彼に生ずることは、是れ佛の境界

にして、五通仙の知り能ふ所に非ず。亦天・人・魔・梵・色究竟の等并に餘の聲聞の覺了する所にも非

ず。大仙、若くに、我が法に於て三垢を離るるを獲て、初果を得る時に有つ所の境界すら、尙帝

釋・那羅延天・汝諸仙等の知り能ふ所に非ざるなり、と。

爾の時に、如來の是の説を作し已るや、廣博仙人は便ち自ら思惟すらく、此の輪廻の中に、聖智

の境界には未だ曾て會遇せず、と。佛の雙足を禮し、白して言はく、我れ今に於ては、衰朽して念

を失すれば、果を獲る能はず、善提を負荷し住持することに任ふる無きも、佛・法及び離垢の僧に歸

依せん。我れ今日より諸の弟子及び眷屬と與に佛・法・僧に歸せん。惟願はくば、世尊、示教利喜せ

んと、聖智の日の常に世間に住せるを以て、煩惱の翳を除きたまはんことを。善い哉、世尊。願は

くば、一切の衆生の、天より墜つる者を演説することを爲したまはんことを。と。佛言はく、諦に

【四三】 諸界。地・水・火・風の四大界を指す。

【四六】 諸根を有つ無きも亦、相ひ離れず。異譯本には「識若し根を離れば、則ち境界無し。」あり。

【四七】 天人。異譯本には「天道」とあり。

【四八】 此の輪廻の中にて、乃至、會遇せず。と。異譯本には「生死、我れを離せり。」あり。

禍横門に盈ち、災難逼迫し、諸の疾病饒く、將に産せんとする時には、或は母の命を損じ、或は復自ら死するなり。と。

爾の時に、廣博仙人は、復佛に白して言はく。世尊、彼の初めて胎に入る時に、何なる念慧を得るか。と。佛言はく。而ち此の識の初め胎に入るに、已に閻浮洲の園苑・樹林・宮殿・池沼の、遍滿に莊飾し、親族の聚會せるを見て、情極めて慕ひ樂へども、復天慧の光明を以て、念に隨つて無量なる百千の彼彼の生れし處を憶知し、彼れは是れ我が母として、曾て五百世我れを生育せり。と。是の念を作し已るや、唱へて言はん。咄なる哉、此の世間に於ける生死は足りぬ。劬勞せる諸有をば、願はくば休息せんことを。となり。と。

時に廣博仙人は、復佛に白して言はく。世尊、彼の識は既に能く是くの如くに厭離せば、豈生死の中を出離せざらんや。と。佛言はく。不なり、大仙。彼の識には出離の相無ければ、解脱を得能ふことは是の處ある無し。而ち彼の識界は、生死の中に於て爾く厭離して能く出離せる者ならば、應に生を受くべからずと雖も。若し爾らずんば、或は福を修むるあるも、及び罪を造るに於ても、一切皆應に涅槃に趣向すべければなり。汝の言ふ所の如き識の思惟とは、是れ識の増上にして智の増上には非ず。所以は何ぞ。識は能く分別し、智は能く了知するものなれば、識・智和合せば、乃ち汝の説くが如くならん。と。

爾の時に、世尊は此の義を重ねて述べんと欲して、偈を説いて言はく。

能く諸の怨賊 煩惱を積集する者を防ぎ 智と無智と 及び慧と愚癡と共なるを了せば 見慢
 并に無明の 是等の如き一切は 少しの智を離るるものある無きを 識として能く了知するに
 由り 識智は相ひ離れずして 和合すとは我れ常に説くなり 一輪は車を爲さず 二輪にて
 も亦成ぜず 亦餘のみにも由らず 人と牛とを假り 并に輻輳を具へ 二輪相ひ致け 轆轤を

【四】 何なる念慧を得るか。異譯本に「何を憶念する所ぞ。何を見知する所ぞ。」とあり。

廣博仙人は、復、佛に白して言はく。云何なるを、是の福德の域なりと了知するか。福德に非ざるをば、我れ當に之れを捨つべければ。と。佛言はく。大仙、猶人あつて、大なる舟船に乗つて大海を渡らんと欲する時に、風濤鼓湧し、飄蕩し、龍臺・鯨鯢互に峻害を爲すが如きに、是の人船に因つて遂に彼の岸に達し、既に畏無きを得るや、船を遶ること三匝して恭敬し、祭祀して唱へて、善い哉、我れ此の船に由つて大海を渡ることを得たり。と言ふがごとし。是くの如くに、大仙、福の衆生あらば、命終の後に是の思惟を作すなり。我れの今の此の身は、善く天上に趣けば、得し所の人身は空しく過ぎざるを爲せり。此の身船に乗じて惡趣の海を度れば、善い哉、前生は甚だ恭敬す可し。と。若し復人あつて、惡趣に墮する者は、猶海を渡るに、朽爛せる船に乗つて、大海の中に於て或は沈み或は浮び、搖颺して傾き覆り、是の人殘命もて岸上に至ると雖も、復師子・虎狼の充滿せるに遇ふが如きに、罵つて、咄なる哉、此の朽ちたる故き船、大海に倒行して、我れをして怖畏し、此くの如き苦を見しむ。と言ふがごとし。惡趣に墮する識も亦復是くの如くに、其の身を毀罵して、我れ徒に養育して此の惡報に遭ふ。我れ久しく世に於て、穢草を擔ひ負へること、蠶の繭を作つて、徒に自をば纏縛するが如くにして、如何ぞ我れをして沈溺せしめたるか。と。此くの若きなり。爾の時に、彼の識は、第二身に於て、適に母胎に住すること纒に七日の中にて、能く是の念を作すなり。我れ彼より滅して此に來り生ぜること善業に由ればなり。と、其の心歡喜して、能く彼の母をして三種の相を有たしむるなり。謂はゆる母の面は、熙怡として顔容端妙に、諸の奸穢無きなり。右脚にて地を壓すること常時に倍重し、復其の手を以て數右脇を摩するなり。白色の衣を破るに、姝麗を増加するなり。惡業を造れる識も、亦七日の中には是の憶念を作すなり。我れ某城よりせるにて、會て某の罪を作れり。と。是の念を作し已つて、便ち悲惱を生じて、能く其の母をして諸の惡相を現ぜしむ。謂はゆる身體臭穢・羸瘦・萎黃にして、常に悲愁を懷き、數數變吐し、

【二】 奸穢。暗黒色なるを謂ふ。
【三】 右脚にて、乃至、倍重し。
【四】 異譯本に「多く右足を用ひて、地を踏んで壓重し」とあり。

復次に、大仙、汝の問ふ所の、福德の因縁の積聚を爲す者の如きは、荻葦の中より、燒くに因つて焔を出す如きに、而も此の光焔は、積を爲し聚を爲せりと言ふを得べからず。是くの如くに、施主の資糧を積集することも、猶影の形に隨ふがごとし。而も見ゆる無き者も、亦蒲萄・甘蔗の未だ壓せざる時には、汁の見る可からざるが如し。彼れ一節二節の中に於て、汁の積聚を求むとも、了に見る者無きも、然も彼の汁に於ては、外より得ざるなり。福德の果報も亦復是くの如くに、施主の手中・心中及び身中に於て在らざれども、亦相ひ離れざること、亦尼拘陀の子の未だ成熟せざる時には、牙の見る可からざるが如きなり。譬へば、商人の、少しの財物を持つに於ても、大城に往き詣つて貿易する所あらば、廣く財利を獲るが如く、福の報も亦爾り。蜂の、華より採るに、其の色を損ぜざるが如く、雲の涵り雨の潤ふに、誰れか積聚を其の出生に於て見るか。(然も)必ず自ら成辦するなり。と。

爾の時に、廣博仙人は白して言はく。世尊、施の差別を我れ已に了知せり。云何に、此の識は身中に住して愛著する所あるか。と。佛言はく。大仙、猶國王の、城中に住して他の軍の來ることを懼るるや、預め濠塹を作り、糧貯を積聚し、戰士を教養し、諸の幡旗を建て、醉象を調習し、嚴しく兵衆を誡めて、唱へて、警備して衣甲を著け、專情にて闘戦し、利き刀仗を執つて双を露して住れ。と言ふとも、王の福盡きたる故に、他軍は強盛にして、遂に即ち滅壞するが如し。是くの如くに、識王は身城に住して、六處に於ける無常の侵害を見るや、信の濠塹を穿ち、正念の甲を被、醉法の象を御し、意の馬を調習して、六處に告げて、今無常なる威力の軍の來たるあれば、宜しく應に速疾に施の甲を被、智の双を持ち、慚愧の弩を辦じ、戒の隄防を安んぜよ。と云はんも、時に彼の六處は、無常の軍の漸く相ひ逼迫するに爲つて、爾の時に、彼の識は、福盡きたる王の、城を棄てて走り、別に城國に住するが如きなり。と。

【三六】是くの如くに、乃至、影の形に隨ふがごとし。
 異譯本には「是くの如くに、施し已つて施す者の身は亡ぶとも、施せる福の離れざることは、影の形に隨ふが如し。是れを、施す者は福報の果を得。と名く。」とあり。

【三九】云何に、乃至、愛著する所あるか。
 異譯本には「此の識は、云何にして、是くの如くに「我れ此の身を捨つ。」と知ることを作すか。」とあり。

【四〇】識王。眼・耳・鼻・舌・身・意の謂はゆる六識なれど、又其等を統括せる阿賴耶識の如き者を豫想してあり。第三卷「識」の解、参照。

【四一】六處。「六根」を謂ふ。第五卷「六情根」の解、参照。

か。一には、如來に施さば、其の施は無上なり。二には、衆僧に施さば、其の施は無上なり。三には、說法者に施さば、是の施は無上なり。四には、父に施さば、其の施は無上なり。五には、母に施さば其の施は無上なり。復、施す者の名けて大施と爲すあり。謂はゆる位を失へる國王にするを、名けて大施と爲す。若しくば、縣官に爲つて逼迫せられて依り怙む所無き、及び疾病に爲つて痛惱せる、此くの如き人に施すを、名けて大施と爲す。若しくば、王者に爲つて棄てられて刑に臨める時、及び餘の命の難に、己れの命を捨てて彼れの命を救ふを、名けて大施と爲す。或は疾病の人に於て醫藥を施與するも、亦大施と名く。或は戒を具せる衆僧に於て、時を以てして施すも、亦大施と名く。或は智慧を求むる者に施すも、亦大施と名く。或は傍生の犢・蝦蟇・蛙・鳥及び餘の鳥獸に於てして施與する者も、亦大施と名く。或は乏劣の者に於て施して充足せしむるも、亦大施と名く。若し復人あつて、他に淨施を勧め、及び能く隨喜するも、亦大施と名くるなり。

復次に、大仙、汝の先に問ふ所の、我が滅後に於て、云何にして種植に福報を獲るか。とは、善男子、諸の如來は皆是れ法身にして、是の色身に非ざれば、若しは復在世に、或は復滅後に、有つ所の供養の福は異なる無し。轉輪王の、其の大地に於て、是くの如き言——我れの國界にて、應に人あつて、衆生を殺害し及び妄語すべからず。——を唱へんに、其の國の人は、未だ王を見、兼ねて親しく侍し衛らすと雖も、但教勅を聞くのみにて、即便に王を違奉すれば、是に於て、人は必ず歡喜を生じ、是に人は王に由つて殺害せざる故にて、天の報を生ずるを獲——出の違ふある者は惡趣に墮せん。——るが如し。是くの如くに、大仙、衆生あつて、我が色身を見ると雖も、其の戒を護らすんば何ぞ得られんや。提婆達多の如くに、我れに遇ふと雖も、猶地獄に墮つればなり。若し復人あつて、來世の中に於て我が教を勤修せば、則ち希有と爲し、我が身を見たる如くに、異なる無きなり。

せば」とあり。
【二五】平生。平素、懇親し居る者を謂ふ。
【二六】若し、乃至、施を増上せば。
異譯本に「若し、餘の人と迭に相ひ憎嫉し、彼れの物を捨つるを見て、多く布施を行はば、」とあり。
【二七】如何にして、乃至、滅壞せざるか。
異譯本には「云何に、布施して果報を失はざるに、人の戒を持つに、戒を持たざるにあるに、二つに俱に施與するは、此の義云何。」とあり。

ら受くと言はば、淨施と名けず。若し人少壯に淨信心無くして、後に病苦に遭ひ、或は死路に臨んで、楚毒身に在つて肢節分解し、閻羅の使者前に調弄し、親屬平生悲泣して相ひ視る、此くの如き時に、方に施を始むる者は、淨施を始むる者は、淨施と名けず。或は、餘の城邑をして我が施を知らしめんと念言するある者は、淨施と名けず。若し嫉妬を懷いて施を増上せば、淨施と名けず。他の豪族を慕ひ婚姻を求めんが爲めに、諸の金銀・紺綵の衣服を持ちて施與せば、淨施と名けず。若し男女及び餘の雜縁を求めんとて施與せば、淨施と名けず。若し、我れ今の施に於て來世に報を受けんと念言するあらば、淨施と名けず。貧窮の者を見ながら哀愍を生ぜずして、鬪つて錢財を持ちて富貴に施さば、淨施と名けず。或は華果を貪つて施與せば、淨施と名けず。善男子、此の三十二の愛染の施は、猶人あつて種子を携へ持ち、荒穢の田に於て種植する所にて、然く彼の種子は大地に依り、天雨の潤すに遇ひ、決定して芽を生ずれども、華實に至つては、少しく收穫を得るが如きなり。

爾の時に、廣博仙人は復佛に白して言はく、如何にして、持戒と毀戒とに施與するに、而も滅壞せざるか。と。佛言はく、大仙、若きは、復人あつて、淨く因果を信じ、歡喜の心を發して、諸の衆生の爲めに悔い悟むことある無くば、亦持戒と破戒とを分別せざるなり。復次に、善男子、五種の施あつて名けて大施と爲す。何者を五と爲すか。一には、時に施すなり。二には、道を行ずる者になり。三には、病人及び看病者になり。四には、正法を説くものになり。五には、他國に詣る者になり。復、五種あり。一には、法の施なり。二には、食の施なり。三には、居住なり。四には、燈明なり。五には、香華なり。

廣博は復言はく、何等か清淨なる。佛言はく、若し信心を發して、諸の衆生の爲めに、内に哀愍を懷きて菩提に迴向し、淨く解脱せば、清淨爲るを得。復、五種の無上の施あり。何者を五と爲す

慢の見を有つて、自ら説かず。と。とあり。

【二〇】 倒見にて施さば淨施と名けず。に「邪心の倒見にて、淨き信心無くして、財物を捨するなり。」とあり。

【二一】 恐怖して。

異譯本には「賊を畏るるを故を以て。」とあり。

【二二】 王家。「王家」の誤記なるべし。

異譯本には「王に與へて、王の讞念を望む。」とあり。

【二三】 殺害して施さば。

異譯本には「人をして、肉を取らしめて施さば。」とあり。

【二四】 他を攝めん爲めの故ならば。

異譯本には「衆生を攝むる所にて平等に施與し、和集し養育して、其の力を得んことを望まば。」とあり。

【二五】 先に打罵するに因つて。

異譯本には「若し人、他を打ち若しくば他を罵り已つて、心に悔い愧を生じて。」とあり。

【二六】 若し受くる者は、乃至、牛畜を作すべし。

異譯本には「若し人、物を捨てて、如くの人に與へ已つて、是くの如くに思量して、若し、其(ソコ)に入あつて、我が物を取らば、皆悉く我れに屬して我が乘る所と爲らん。」

す。と。或は云はん。如來は覺性をば了し已れるも猶我慢を有つ。と。——に墮せしめん。と。爾の時に、諸の比丘は、佛世尊の是の説を作せるを聞き已つて、淨信心を生じて白して言はく。世尊、廣博仙人の疑ひ問ふ所あるを、願はくば除斷を爲したまはんことを。と。

爾の時に、佛は廣博仙に告げて言はく。汝今諦に施の果報及び業の差別を聽け。若し諸べて受くる者にして、能く施主をして果報を生ぜしめは、是れを施の義と爲す。若し衆生あつて、清淨心を發して、己が財寶を以て、事を執る人をして施す所に隨はしめば、其の財寶の主を名けて施主と爲し、其の事を執る人を名けて施者と爲す。若し復人あつて、自ら己れの物を持ちて淨心にて施さば、施主爲るを得、亦施者とも名く。

復次に、大仙、三十二種の不淨の施を、汝今諦に聽け。若きは、復人あつて、倒見にて施さば、淨施と名けず。報恩に因る者は、淨施と名けず。哀愍せざる者は、淨施と名けず。色欲の爲めならば、淨施と名けず。若し火中に施さば、淨施と名けず。水中に擲たば、淨施と名けず。恐怖して施さば、淨施と名けず。五家に施さば、淨施と名けず。毒を以て施さば、淨施と名けず。刀仗を施さば、淨施と名けず。殺害して施さば、淨施と名けず。他を擲めん爲めの故ならば、淨施と名けず。稱譽の爲めならば、淨施と名けず。娼妓の爲めならば、淨施と名けず。占相に因る者は、淨施と名けず。飾好を求むる者は、淨施と名けず。朋友を結ぶ者は、淨施と名けず。莊宅の中に於て鳥獸の來り嘍ふに、歡欣せざる者は、淨施と名けず。工巧を學ぶ者をば、淨施と名けず。病に因つて醫に施すを、淨施と名けず。先に打罵するに因つて後に財物を施すを、淨施と名けず。若し疑惑を懷いて、我が今の施は報有りと爲すや。報無しと爲すや。と言はんに、此くの如くにして施す者を淨施と名けず。若し施を捨て已つて、内に熱惱を懷きて、慳み戀ひ悔い慢まば、淨施と名けず。若し、受くる者は後に當に我が爲めに牛畜を作すべしとせば、淨施と名けず。若し、福の報を我れ自

悉曇即ち梵語は、劫初に、大梵王に始まり、後、住劫に、大梵王は人と生れ、商羯羅(之れを小梵王と曰ふ。)と名けて、之れを弘めたりと曰ふ。説を指す者なるべし。因みに、異譯本の「聲論」は即ち「五明」中の「聲明」なり。

【二四】云何なれば、施を行ずるか。乃至、積を爲し衆を爲すか。

異譯本には「云何なれば、死し已つて、施福は行に墮ふか。施福とは云何。形段の衆集有つて、見るべしと爲すか。見るべかなずと爲すか。施主の施福は、何處に在りと爲すか。受くる者に在りと爲すか。施す者に在りと爲すか。」とあり。

【二五】如來の滅後に、乃至、福の報を得るか。

異譯本には「云何なれば、世尊は涅槃に入り已れるに、塔等を供養して福報を得るか。佛は涅槃に入れるに、誰れを受くる者と爲すか。」とあり。

【二六】如來には決定の智非ずと。

異譯本には「自ら説く能はずして、聲聞をして説かしむ。」とあり。

【二七】如來は乃至我慢を有つと。

異譯本には「彼の如來は、我

れ廣博にして、圍陀（むいだ）の典を作り、除羯羅教（じょきゃく）を奉持し、習行し諸の種種なる世俗の文字を造れるものなり。と。爾（そ）の時に、諸の羅漢（らかん）等は、共に相ひ謂うて言はく、而も此の仙人は何の得る所あつて、苦行することはくの如くにして、生死の中に於て解脱せざるか。と。復自ら思惟すらく、此の仙人衆（せんじん）の今佛（いふつ）の所に來れるは、當に何を問ふ所とすべきか。因縁と爲さんか。無我と爲さんか。と。

爾（そ）の時に、廣博仙人は合掌して佛に向ひ、白して言はく、世尊、佛の出現は難く、衆會も亦難し。我れ今に於ては少しき疑問あり。願はくば、哀愍を垂れんことを。と。佛言はく、大仙、汝の問ふ所を恣にせよ。當に解説すべし。と。廣博仙は言はく、云何なるを施と爲し、何者か施の義なる。云何なるは施主にして、施主は何の義なる。云何なれば、施者を施主と名けざる。云何なれば、施し已つて、若しは現在世に若しは命終の後に、施福は行に隨つて積を爲し聚を爲すか。云何なれば、施後塔廟を供養するに、誰れを受くる者と爲して福の報を得るか。と。佛言はく、大仙、汝の今問ふ所は甚だ希有と爲す。新に發意せる者を覺悟せんと欲するに爲つてなり。と。

時に、舍利弗は、衆中に在つて、髮白く面皺（おむ）みたるが、其の右手を以て眉を擡（た）げて、顧視すると久しうして、言うて曰はく、我れ昔曾て、廣博仙人は世に稱讚せらると聞きに、云何ぞ今は言問を知らざること、小童子の如くなるか。云何ぞ因縁、無我の深妙なる義を問はずして、乃ち施の果報を問ふか。と。尊者阿難は前（ま）んで佛足を禮して、白して言はく、世尊、彼の仙人は施に於て貪著（どん）せり。我れ願はくば、彼れに施の義を解説せんことを。と。佛言はく、阿難、如來に問へるに、聲聞の答ふる若きは、如來の教に非ず。と。時に舍利弗は、復佛に白して言はく、今此の仙人の彼の疑を有つて、我れ願はくば解説せん。と。佛言はく、爾（そ）らず。汝は聲聞に於て最も上首（じやうぶ）爲れど、若し我が前に於て解説する所あらば、諸の衆生をして惡趣——謗（ぼう）つて云はん。如來（に）は決定の智非

て。
【一】 異譯本に「十五日食はずして齋するあり。或は一月食はずして齋するあり。」とあり。

【二】 其の種姓を恃んで、

異譯本に「種姓の勝上なるに、

心以て足れり」と爲し」とあり。

五通を得たる婆羅門なるを自負するを謂ふ。

【七】 不清淨を見して、「不清淨」を、價値有りて見取執著するを謂ふ。

【八】 三拒の木。

異譯本には「三岐の杖」とあり。即ち「拒」を「岐」の意に用ひたるなり。

【九】 今此の、乃至、願ふ。

異譯本に「應に此の義、我れ何の因縁にて、并に諸の眷屬の、今此に來り到れるかを知るべし。」とあり。

【一〇】 有らゆる受生及び自性。

異譯本に「一切の有生と一切の諸法」とあり。

【一一】 此れは是れ、乃至、造れる者なり。

異譯本には「此れは是れ仙人にして、毘耶婆と名け、婆羅門の法は是れ其の作す所にて、四毘陀を造り、善く聲論を知り、種種の書を知るものなり。」とあり。

【一二】 圍陀。又「章陀」と書す。

第二卷「四章陀」の解、参照。

【一三】 除羯羅（Soularva）教。

の位、六萬の姝女を捨て去ること、毒食を棄つるが如くにし、山林に苦行して諸の欲樂を離れ、名稱の普く聞ゆるは、誠に虚ならざるなり。と。時に彼の衆中に、一の仙人の那刺陀と字くるありしが、遙に如來を瞻て心に歡喜を生じ、卽頌を説いて曰はく。

彼の青華の樹林の下を瞻るに 猶紫金の聚のごとき者は何人ぞ 彌樓の妙寶と流るる焰光
亦秋月の氛翳無きが如し と。

爾の時に、諸仙は皆悦豫を懷き、合掌して恭敬し、漸く佛の所に詣れり。時に於て、世尊は諸の比丘に告ぐらく。汝等觀ぜよ。彼の閻浮洲の諸の仙人等の、蓬髮上に靡き、林莽に棲み止まり、灰を塗り、粒を却けて、或は月・半月食を節して羸れ瘦せ、鹿皮・樹皮をば以て衣服に充て、髮・爪を剪らず、露地に躡り處り、或は煙炭・黑蜂の色の如くに、呪術もて火を祭り以て吉祥と爲し、空地・樹下と處に隨つて居り、或は高巖より墜ち、或は深水に投じ、炎火・赫日にて身を炙つて體を苦め、其の種姓を恃んで無上の智を離るることを。比丘、當に知るべし。此の諸の仙人の、不清淨を見して諸有に耽著し、生死に輪迴して出離する能はざることを。と。時に諸の比丘は、佛世尊の是の説を作せるを聞き已つて、同聲にて白して言はく。我等、今は如來に依つて梵行を勤修するに由つて、諸有の中に於て永く當に出離すべし。と。

爾の時に、廣博仙人は、其の同類を漸く佛の所に至り、諸の羅漢の威徳の尊嚴なるを覩て内に傾悚を懷き、躬を曲げて低く視、各散髮を結び、身に白繩を佩び、顔容黒闇に、兩日黃綠に、頭髮枯燥して、三拒の木を執り身形卑陋にして、或は虚空を行き、或は俗典を談じつつ、如來の前に至つて白して言はく。世尊、今此の衆會を、佛の知らんことを願ふ。と。時に佛は言はく。廣博、我れ已に 有らゆる受生及び自性を了知せり。と。時に、阿難陀は白して言はく。世尊、此れは何の仙人ぞ。衆に圍遶せられて、詞慧通敏にして、頂髮上に靡けるは。と。佛は阿難に言はく。此れは是

異譯本には「毘耶婆と名けて
毘陀迦離婦人の子なるが」と
あり。「毘耶婆」は「Vijaya」の音
譯なり。

【一〇】 不白仙人乃至度羅仙人
等。

異譯本には「阿斯仙童子、那羅
提婆婆・苦波那那・那茶延那・
迦摩延那・商和囉婆・鞞訶那婆・
徒羅陀等」とあり。

【一一】 一切智處。

異譯本の此れに當る者に「一
切智者」とあり。第一卷、同
名の解、參照。

【一二】 那刺陀（Nandita）。
異譯本には「那羅陀」と書しあ
り。

【一三】 彌樓（Meru）の妙寶と
流るる焰光。

異譯本に「淨き毘琉璃の如く」と
あり。然らば「彌樓」は「須
彌樓（Sumeru）」の略に、
即ち須彌山なり（第一卷、同
名の解、參照）。須彌山の南方は、
琉璃石にて成るに由り、此の
石を山に據つて名けたるなり。

然れども、別に「金山」なり。
謂はゆる「金山」なり。
（第四卷同名の解參照）今は
「金山」なるべし。而して、此
の句は「金山の妙寶の光の如
くに、流るる佛の光明」の意
なり。

【一四】 粒。「穀物」を謂ふ。

【一五】 或は月・半月食を節し

卷の第一百二十

唐 菩提流志 漢譯

廣博仙人會 第四十九

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は、無鬪戰城の恒河の岸の上に在せり。時に無量なる諸の比丘の衆ありしが、尊者阿難・摩訶迦葉・舍利弗・薄拘羅・離婆多・阿若憍陳如等は、作す所已に辦じて諸の塵染を離れ、諸漏已に盡きて復と退轉せず、禪・誦經の行は暫くの懈怠無きこと、或は群鹿の遊止するが如くに寂靜に、或は林間に在つて常に禪定に處つて、如來の光明なる教門に安住し、諸根を調伏して無所畏を得たり。時に、娑羅雞林の枝葉繁茂して香華地に布き、拘積羅鳥・迦陵伽鳥・鵝王・群蜂棲み集り和し鳴きて、能く衆生をして諸の昏墮を離れしめたり。

爾の時に、如來は諸の比丘に告ぐらく。汝等、應當に勤めて、作す所を作すに、威儀を以てして自ら蔭覆すべし。と。是の時に、西方は忽然として輝り耀くこと日輪の光の如くなりき。尊者阿難は、未だ欲を離れざるが故に、白して言はく。世尊、今の此の光明は是れ何の相ぞ。と。佛言はく。阿難、是れ五通仙の是も勝上なる者にして、黒香の子の名けて廣博と曰へるが、食を節して福れ瘦せ、身に光潤無きが、其の同行五百人と俱にして、謂はゆる。不白仙人・天人仙人・高波野那仙人・丹荼野那仙人・迦摩野那仙人・迷佉那斯仙人・疑味仙人・皮羅仙人等をば前後に圍遶して、當に來つて我れに詣るべきなり。と。

爾の時に、廣博仙人は、遙に世尊の、身・意寂靜に林藪に處在して、諸の比丘に爲つて侍し衛らるを覩て、即自ら思惟すらく。奇なる哉、尊貴なる一切智處の色相の具足することや。群臣・轉輪王

【一】 無鬪戰城。「無鬪城」と同じ。

【二】 薄拘羅 (Vāśīṣṭhi)。佛の聲聞弟子中、第一の長壽と曰はれ、身體極めて強健にして、八十年間、精進坐するに、一度も塵又は樹に倚らざりきと云はる。

【三】 離婆多。「離越」と同じ。

【四】 娑羅雞林 (Sālāyana)。異譯本に「婆羅樹」とあり。「堅固」と譯す。「婆羅林」と同じ。

【五】 迦陵伽鳥。又、「頻伽鳥」とも曰ひ「迦陵頻伽鳥」も略なり。

【六】 應當に、乃至、自ら蔭覆すべし。異譯中に「常に、當に勤め行つて、應に作すべき所の持戒、正行を作すべし」とあり。

【七】 未だ欲を離れざるが故に。異譯本に「漏未だ盡きざるが故に」とあり。未だ阿羅漢果を得ざるを謂ふ。

【八】 五通仙。有漏の禪定を修めて、五神通を得たる仙人を謂ふ。

【九】 黒香の子の名けて廣博と曰へるが。

に是くの如くに持つべし。空性の義の隱覆せる眞實を説く。と、應に是くの如くに持つべし。一諦の義を説く。と、應に是くの如くに持つべし。常住不動なる寂靜の一依を説く。と、應に是くの如くに持つべし。顛倒・眞實を説く。と、應に是くの如くに持つべし。自性清淨心を煩惱の隱覆するを説く。と、應に是くの如くに持つべし。如來の眞子を説く。と、應に是くの如くに持つべし。勝鬘夫人の正しき師子吼を説く。と、應に是くの如くに持つべし。復次に、憍尸迦、此の經の説く所は、一切の疑を斷ち、了義を決定して一乘の道に入るれば、憍尸迦、今説く所の、勝鬘夫人師子吼の經を以て汝に付囑す。乃至、法の住するを十方界に於て開示し演説せよ。と。天帝釋の言はく。善い哉、世尊。唯然く、教を受く。と。

時に、天帝釋・尊者阿難及び諸大會の天・人・阿修羅・犍闍婆等は、佛の所説を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。』

に百千俱胝の諸佛如來の能く此の義を説けるに親近したればなり。と。

爾の時に、世尊は勝光明を放つて普く大衆を照し、身は虚空に昇ること高さ七多羅の量にして、神通力を以て、足虚空を歩みて舍衛國に還りたり。時に勝鬘夫人は諸の眷屬と、世尊を瞻仰して目に暫くも捨てず、眼境を過し已つて、歡喜踊躍して、遷に共に如來の功德を稱歎し、一心に佛を念じつつ無闍城に還り、友稱王に勸めて大乘を建立して、城中の女人の七歳已上を化するに大乘を以てし、友稱大王も亦大乘を以て、諸の男子の七歳已上を化するに、國の人民を擧げて學ばざる者無かりき。

爾の時に、世尊は逝多林に入つて、尊者阿難に告げ、及び天帝を念ぜる時に、天帝釋と諸の眷屬とは、念に應じて至つて佛前に住れり。爾の時に、世尊は帝釋に告げて言はく、憍尸迦、汝當に此の經を受持して、演説し開示すべし。三十三天に安樂を得させん故に。と。復、阿難に告ぐらく。汝も亦受持して、四衆の爲めに分別して演説せよ。と。時に天帝釋は佛に白して言はく、世尊、當に何と斯の經に名けて、云何に奉持すべきか。と。佛は天帝に告ぐらく。此の經は無邊の功德を成就したれば、一切の聲聞・獨覺の力は及ぶ能はず。況んや餘の有情をや。憍尸迦、當に知るべし、此の經は甚深微妙なる大功德の聚なることを。今當に汝が爲めに略して其の名を説くべければ、諦に聽け。諦に聽きて善く之れを思念せよ。と。時に天帝釋及び阿難は白して言はく、善い哉、世尊。唯然く、教を受けん。と。佛言はく、此の經は、如來の眞實なる功德を讚歎す。と、應に是くの如くに持つべし。不思議なる十種の弘誓を説く。と、應に是くの如くに持つべし。一の大願を以て一切の願を攝む。と、應に是くの如くに持つべし。不思議なる攝受正法を説く。と、應に是くの如くに持つべし。一乘に入ること説く。と、應に是くの如くに持つべし。佛の法身を説く。と、應に

【八四】説ひ餘方に在りとも、乃至、摧伏すべきなり。

異譯本には「當に王の力及び天龍鬼神の力を以て、之れを調伏すべきなり」とあり。

【八五】逝多林。

異譯本には「祇洹林」とあり。同林の別名なり。

【八六】一切の聲聞獨覺の力は及ぶ能はず。異譯本には「一切の聲聞・緣覺は究竟して觀察知見する能はず」とあり。

何等を二と爲すか。謂はく。性清淨心の了知せられ難きと、彼の心の、煩惱に爲つて染ることも亦了知し難きとなり。此の二法の如きは、汝及び大法を成就せる菩薩にして、乃ち能く聽受せんも、諸餘の聲聞は、信に由つて解し能ふのみ。勝鬘、若し我が弟子にして、増上信の者ならば、法智に隨順して、此の法の中に於て究竟することを得ん。法智に順する者は、根・識境を觀じ、業報を觀察し、羅漢の眠を觀じ、心自在に禪樂を愛樂するを觀じ、聲聞・獨覺の聖なる神變通を觀じて、此の五つの善巧觀を成就するに由り、現在・未來の聲聞の弟子にして、増上信を因として法智に隨順せば、善く能く性清淨心の煩惱に染めらるることを解了して、究竟するを得ん。勝鬘、是の究竟は大乗の因と爲ることを、汝今當に知るべし。如來を信する者は甚深なる法に於て誹謗を生ぜざればなり。と。

爾の時に、勝鬘夫人は佛に白して言はく。世尊、復餘の義あつて能く多く利益す。我れ當に佛の威神の力を承けて、斯の事を演說すべし。と。佛言はく。善哉、今汝の説くことを恣にせよ。と。勝鬘夫人の言はく。三種の善男子・善女人あつて、甚深なる法に於て自らの毀傷を離れ、多くの功德を生じて大乘の道に入らん。何等を三と爲すか。若きは善男子・善女人等の能く自ら甚深なる法智を成就するか、或は法智に隨順することを成就するあるか、或は此の甚深なる法の中に於て解了する能はずとも、仰いで如來を推す——唯佛のみ知りたまふ所にして、我が境界に非ず。と、——あるかなり。此の三種の善男子・善女人を除き已れる諸餘の有情にして、甚深なる法に於て、己れの取る所に隨ひ、妄説に執著して正法に違背し、諸の外道の腐敗せる種子に習はば、設ひ餘方に在りとも、應に往いて彼の腐敗の者を除滅すべく、一切の天人は應に共に摧伏すべきなり。と。勝鬘夫人は是の語を説き已つて、諸の眷屬と與に佛足を頂禮せり。時に、世尊は讚じて言はく。善哉、勝鬘。甚深の法に於て、方便もて守護して怨敵を降伏することに善く能く通達せるは、汝已

も住せずして、衆苦を種々ざれば、苦を厭ひ涅槃を樂求するを得ざるなり。」とあり。因みに、「所知」或は「心法智」と曰ふは、「心所法」を指す者なるべし。

【一〇】此の本性淨なる、乃至、如來の境界なり。異譯本には「此の性清淨なる如來藏にして、客塵煩惱、上煩惱に染めらるるは、不思議なる如來の境界なり。」とあり。【一一】煩惱あるに由つて、乃至し難し。

異譯本には「然れども、煩惱有れば煩惱の心を染むる有り。自性清淨の心にして、染まるる者(コト)は、了知せられ難し。」とあり。【一二】信に由つて解し能ふの

異譯本には「唯佛の語を信するのみ。」とあり。

※ 此の間に、異譯本には「眞子章第十四」とあり。

【一三】羅漢の眠。「眠」は、其の相徴にして「了知し難きに喩へたるにて、即ち煩惱の種子の現起せざる者を謂ふ(其の現起せる者を「起煩惱」と曰ふ)前して、今「羅漢の眠」とは、前の「無明住地」の煩惱を指す者なるべし。外 此の間に異譯本には「勝鬘章、第十五」とあり。

如來藏有る故に生死有るを得。とは是れを善説と名けん。世尊、生死とは諸の受根の滅する(と)滅しつ(つ)無間に相續するに、未だ受根の起らざるとを名けて生死と爲す。世尊、生死の二法は是れ如來藏なれど、世俗の法に於て、名けて生死と爲すのみ。世尊、死は諸の受根の滅するにて、生は諸の受根の起るなれど、如來藏は則ち不生・不死・不昇・不墜にして、有爲の相を離れたり。世尊、如來藏は常恒にして壞れず。是の故に、世尊、如來藏は解脱の智識と離れずして、是れ依り是れ持ち、是に建立を爲すことに與り、亦外に不解脱の智たる諸の有爲法の依持・建立を離るることに與るなり。世尊、若し如來藏無くば、應に苦を厭ひ涅槃を樂求すること無かるべし。何を以ての故ぞ。此の六識及び所知に於ては、是くの如き七法は、利那も住せずして衆苦を受けされば、厭離して涅槃を願求するに堪へざればなり。如來藏は、前際ある無き無生・無滅の法にして諸苦を受くれば、彼れは苦を厭ひて涅槃を願求することを爲すなり。世尊、如來藏には、我・人・衆生・壽者を有つこと非ざれば、如來藏は、身見の有情・顛倒の有情・空見の有情に行ぜらるる境に非ず。世尊、如來藏は是れ法界藏、是れ法身藏、出世間藏・性清淨藏なり。此の本性淨なる如來藏は、我が解する所の如くんば、縦ひ客塵煩惱に爲つて染めらるるも、猶是れ不可思議なる如來の境界なり。何を以ての故ぞ。利那利那の善・不善の心は、客塵煩惱の染むる能はざる所なればなり。何を以ての故ぞ。煩惱は心に觸れず、心は煩惱に觸れされば、云何が法に觸れざるに而も能く心を染むることを得んや。世尊、煩惱あるに由つて隨つて心を染むるあり、煩惱に隨つて染まるとは、解し難く了し難し。唯佛世尊の、眼爲り智爲り法の根本爲り尊爲り導爲り正法の依爲るもののみ、實の如くに知見したまふなり。と。

爾の時に、世尊は勝鬘夫人を數じて言はく、善い哉、善い哉。汝の説く所の如くに、性清淨なる心の、煩惱に隨つて染めることは、了知せられ離し、復次に、勝鬘、二種の法の了知せられ難きあり。

ては、尙、境界に非ず。況んや、四依の智をや。」とあり。因みに、「四入流の智」とは謂はゆる「羅漢の四智」を意味するが如し。

【七五】 三乗の初業の。乃至。四入流を説きたまへるか。異譯本の、此れに當る者に、三乗の初業の、法に於て、當るものは、彼の義に於て、當に覺るべく當に得べければ、彼れが爲めの故に、世尊は四依を説きたまへばなり」とあり。

【七六】 世尊此の四入流は。乃至。是れ苦の滅諦なり。異譯本の、此れに當る者には、世尊、此の四依は是れ世間の法なれど、世尊、一依は、一切の依止にして、出世間上の第一義の依なり。謂はゆる滅諦なり」とあり。

【七七】 此の間に、異譯には、「自清淨草、第十三」とあり。

【七八】 前際は了知す可からず。異譯本には「本際を知る可からず」とあり。

【七九】 (滅しつ) 括弧内の語は、意義の在る者を、明瞭ならしむるために加へたり。

【八〇】 此の六識及び所知に於ては、乃至、堪へざればなり。異譯本に「此の六識及び心法智に於ける此の七法、は利那

ふは、五取蘊に於て執著して、我に爲つて異なる分別を生ずるなり。邊見に二つあり。何者を二と爲すか。謂はゆる、常見及び斷見なり世尊。若し復、生死は無常なり涅槃は是れ常なりと見ることあらば、斷・常の見に非ずして是れを正見と名く。何を以ての故ぞ。諸計度する者は、身の諸根の受くる者・思ふ者の現法の滅壞するを見て、相續有ることに於て了知する能はず、盲にして慧の目無くして斷見を起せばなり。心の相續の刹那に滅壞することに於て、愚闇にして意識の境界を了せずして常見を起せばなり。世尊、然く彼彼の義は、諸の分別及び下劣の見に過ぎたるを、諸の愚夫の、妄に異なる想を生ずるに由つて、顛倒して、謂はく斷・謂はく常と執著するなり。世尊、轉倒せる有情は、五取蘊に於て、無常なるを常と想ひ、苦に樂の想を爲し、無我なるを我と想ひ、不淨なるを淨と想ひ、聲聞・獨覺の有つ所の淨智は、如來の境及び佛の法身に於ては、未だ曾て見ざる所なり。或は衆生あつて、如來を信する故に、如來の所に於て、常の想・樂の想・我の想及び淨の想を起すは、顛倒の見に非ずして卽是れ正見なり。何を以ての故ぞ。如來の法身は、是れ常波羅蜜・樂波羅蜜・我波羅蜜・淨波羅蜜なりと、若し諸の有情は是くの如き見を作さば、是れを正見と名くればなり。若し正見の者を、眞の佛子にして、佛口より生じ正法より生じ淨法より生じて、佛法の分を得と名く。世尊、淨智と言ふ者は、則ち是れ一切の聲聞・獨覺の智波羅蜜なれど、此の淨智は、苦の滅諦に於ては尙境界に非ず。況んや、苦の滅諦は、是れ四入流の智の行する所ならんや。何を以ての故ぞ。三乘の初業の、法に愚ならざる者は、能く彼の義に於て當に證すべく當に了すべければなり。世尊は何の義の爲めの故に、四入流を説きたまへるか。世尊此の四入流は、是れ世間の法なればなり。世尊、唯一入流のみ諸の入流に於て最と爲し上と爲すは、第一義を以て是に入流と爲し、是に歸依と爲すものにして、是れ苦の滅諦なり。

世尊、生死は如來藏に依り、如來藏なる故を以て 前際は了知す可からず。と説くなり。世尊、

【六〇】五取蘊に於て、乃至、異なる分別を生ずるなり。異譯本に「凡夫は、五受蘊に於て、我見も妄想計著して、二見を生ず。是れを邊見と名く。」とあり。

【六一】若し復生死は無常なり。乃至、是れを正見と名く。異譯本には「諸行の無常なるを見るは、是れ斷見にして、正見に非ず。涅槃の常なるを見るは、是れ常見にして、正見に非ず。」と、全然、反對の説述を爲しあり。

【六二】身の諸根の、乃至、斷見を起せばなり。異譯本に「身の諸根に於て、分別思惟して、現法の壞るるを見れども、相續を有つことに於て見ずして、斷見を表すは、妄想の見るの故なり。」とあり。

【六三】心の相續の、乃至、常見を起せばなり。異譯本に「心の相續に於て、愚闇にして解せず、知らず刹那の間の意識の境界に、常見を起すは、妄想の見るの故なり。」とあり。

【六四】佛法の分を得と名く。異譯本に「法の餘財を得」とあり。

【六五】此の淨智は、乃至、行ずる所なるをや。異譯本に「此の淨智は、淨智と曰ふと雖も、彼の滅諦に於

議の法を、説いて法身と名く。世尊、是くの如き法身の、煩惱を離れざるを、如來藏と名く。* 世尊、如來藏とは、卽是れ如來の空性の智なり。如來藏は、一切の聲聞・獨覺の、未だ曾て見ざる亦未だ曾て得ざる所にして、唯佛のみ了知し及び能く證を作したまふ。世尊、此の如來藏の空性の智に復二種あり。何等を二と爲すか。謂はく。空如來藏は、謂はゆる不解脫智たる一切の煩惱を離れたるものなり。世尊、不空如來藏は、恒沙に過ぎたる、佛の解脫智たる不思議の法を具したるものなり。世尊、此の二空智に、諸の大聲聞は信ずることに由つて入り能ふ。世尊、是の一切の聲聞・獨覺の空性の智の如きは、四倒の境に於て纏縁して轉ずるものにして、是の故にて、一切の聲聞・獨覺の未だ曾て見ざる亦未だ曾て證せざる所なり。一切の苦の滅は、唯佛のみの現證にして、諸の煩惱を壞つて苦滅の道を修したまふなり。

* 世尊、此の四諦の中の三諦は無常にして、一諦は是れ常なり。何を以ての故ぞ。是の三諦の如きは有爲の相に入り、有爲の相は則ち是れ無常なればなり。無常と言ふは是れ破壊の法にして、破壊の法は諦に非ず常に非ずして、歸依の處に非ず。是の故に、三諦は、第一義を以てせば、諦に非ず常に非ずして、歸依の處に非ざるなり。世尊、一つの苦の滅諦は、有爲の相を離れたり。有爲の相を離れたるは則ち性常住にして、性の常住なるは破壊の法に非ず。破壊に非ざる者は、是れ諦は是れ常にして、是れ歸依の處なり。世尊、是の故に苦の滅する聖諦は、勝義なる故を以て、是れ諦は是れ常にして是れ歸依の處なり。

* 世尊、此の苦の滅諦は、是れ不思議にして、諸の有情の心識の境界に過ぎ、亦一切の聲聞・獨覺の智の及び能ふ所に非ず。譬へば、生盲の衆の色を見ず、七日の嬰兒の日輪を見ざるが如く、苦の滅諦は亦復是くの如くに、諸の凡夫の心識に縁ぜらるるに非ず。亦、一切の聲聞・獨覺の境界にも非ざるなり。凡夫の識をば、二邊の見と謂ひ、一切の聲聞・獨覺の智をば、名けて淨智と爲す。邊見と言

* 此の間に、異譯本には「空義隱覆眞實章、第九」とあり。

* 此の間に、異譯本には「一諦章、第十」とあり。

* 此の間に、異譯本には「一依章、第十一」とあり。

* 此の間に、異譯本には「顯倒眞實章、第十二」とあり。

一切の世間の信する能はざる所にして、唯如來・應・正等覺の知り能ふ所あるのみ。何を以ての故ぞ。此に甚深なる如來藏を説くに、如來藏は是れ佛の境界にして、聲聞・獨覺の行する所に非ず。如來藏に於て聖諦の義を説くことも、此の如來藏は甚深微妙なれば、説く所の聖諦も亦復深妙にして、見難く了し難く、分別す可からず、思量の境に非ざれば、一切の世間は信する能はざる所にして、唯如來・應・正等覺の知り能ふ所あるのみなればなり。若し無量の煩惱に纏はれたる如來の藏に於て疑惑せずば、一切の煩惱の藏を出でたる法身にも亦疑惑無きなり。世尊、若し此の如來の藏及び佛の法身たる不可思議佛の祕密の境に於て、心に究竟を得ば彼の説く所の二聖諦の義に於ても、能く信じ能く了して能く勝解を生ぜん。何等を名けて二聖諦の義と爲すか。謂はゆる有作及び無作なり。作の聖諦は、是れ四聖諦の義を圓滿せず。何を以ての故ぞ。他をば護る故にて一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修することを得る能はざるに由る。是の故に有爲・無爲及び涅槃を知らざるなり。世尊、無作の諦は、是れを四聖諦の義を圓滿すと説く。何を以ての故ぞ。

能く自をば護る故にて、一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修すればなり。是くの如くに八つの聖諦の義を説く所にて、如來は但四つの聖諦を以て此の無作の四聖諦の義を説きて、唯如來・應・正等覺のみあつて事の究竟を作したまひ、阿羅漢及び辟支佛の力の及び能ふ所に非ず。何を以ての故ぞ。諸の勝・劣・下・中・上の法にて涅槃を證し能ふに非ざればなり。云何て如來は、無作の諦に於て事の究竟を得たまふか。謂はく。諸の如來・應・正等覺は、遍く諸の苦を知り、諸の煩惱及び起煩惱の擲むる所の苦の集を斷ち、能く一切の意生身の蘊の有つ所の苦の滅を證し、及び一切の苦の滅する道を修すればなり。世尊、壞の法に非ざる故を、名けて苦の滅と爲す。何を以ての故ぞ。苦滅と言ふ者は、無始・無作・無起・無盡・常住不動たる本性の清淨にして、煩惱の纏を出でたるものなればなり。世尊、如來の成就せる、恒沙を過ぎて解脱の智を具したる不思議

異譯本に「聲聞・緣覺の功德」とあり。

※ 此の間に、異譯本には「如來藏章、第七」とあり。

※ 此の間に、異譯本には「法身章、第八」とあり。

【壹】謂はゆる有作及び無作なり。

異譯本に「謂はく。作の聖諦の義を説くことなり、無作の聖諦の義を説くことなり」とあり。因みに「有作」は、苦、集、滅、道に、各、實の存在を認めて、集を斷じて苦を滅し、道を修して滅を證する者、各、別個の造作を爲す者を謂ひ、「無作」は、煩惱即菩提と覺れば、集を斷じて道を修する造作無く、生死即涅槃と覺る故に、苦を滅して滅を證する造作を要せざる者なるべし。次下の「他をば護る故にて」「自をば護る故にて」の文、參照。

【六】他をば護る故にて。

異譯本には「他に因つて」とあり。

【七】是の故に、乃至、涅槃を知らざるなり。

異譯本には「是の故に、世尊、有爲生死、無爲の生死有り。涅槃にも亦是くの如くに、有餘及び無餘なり」とあり。

【六】能く自をば護る故にて。異譯本に「能く自力を以て」とあり。

れ有限の依なり。若し諸の有情にして、如來の調伏にて、如來に歸依して法の津潤を得、信樂の心に由つて法及び比丘僧に歸依せば、——是の二つの歸依は、法の津潤に由つて信入歸依するなれど、如來には法の津潤に非ずして信入歸依するなり。——如來と言ふは、是れ眞實の依なれば、此の二つの歸依も、眞實なる義を以てば、即究竟して如來に歸依すと名くるなり。何を以ての故ぞ。如來は此の二つの歸依に異らざればなり。是の故に如來は即三歸依なり。何を以ての故ぞ。説ける一乘の道は、如來の最勝に四無畏を具して正しく師子吼せるものにして、若しくは諸の如來の、彼の欲する所に隨つて、方便を以て二乗を説くも、即是れ大乘なるは、第一義には二乗ある無きを以て、二乗は同じく一乗に入り、一乗は即勝義乘なればなり。

世尊、聲聞・獨覺の、初め聖諦を證するに、一智を以て諸の住地を斷ずるに非ず。亦、一智にて四遍知の諸の功德の等を證するにも非ず。亦、法を以て善く此の四法の義を了知し能ふにも非ず。世尊、出世の智に於ては、四智を有つて漸く至り漸く緣すること無し。世尊、出世間の智には漸至の法無きこと、金剛の喩の如きなり。世尊、聲聞・獨覺は、種種なる聖諦の智を以て諸の住地を斷じて、出世の第一義智を有つこと無し。唯如來・應・正遍智のみあつて——諸の聲聞・獨覺の境界に非ざる——不思議なる空性の智を以て、能く一切の諸の煩惱の礙を破るなり。世尊、煩惱の礙を破る究竟の智、是れを出世の第一義智と名くれば、初の聖諦の智は究竟の智に非ずして、是れ阿耨多羅三藐三菩提に趣向する智のみ。世尊、眞の聖の義は、即二乘には非ず。何を以ての故ぞ。聲聞・獨覺は、唯少分の功德を成就し能ふを、之れを名けて聖と爲すのみ。世尊、聖諦と言ふは、諸の聲聞・獨覺の諦及び、彼れの功德に非ず。而ち此の諦は、唯如來・應・正覺のみあつて、初より始めて了知し、然る後に彼の無明の礙に藏せる世間の衆生の爲めに開示演説する故に、聖諦と名くるなり。

世尊、此の聖諦は、甚深微妙にして見難く了し難く、分別す可からず、思量の境に非ざれば、一

【六〇】 是の二つの歸依は、乃至。如來に歸依すと名くるなり。異譯本に、此れに當る者には「是の二つの歸依は、此(ココ)に二つとして歸依するに非ずして、是れ如來に歸依し第一義に歸依する者なり。是れ如來に歸依せば、此(ココ)に二つの歸依は第一義にして、是れ、究竟して、如來な歸依せらるなり」とあり。

※ 此の間に、異譯本には「無邊聖諦章、第六」とあり。

【六一】 聲聞・獨覺の、乃至。漸く緣すること無し。異譯本には「聲聞・緣覺の、初め聖諦を觀じて、一智を以て諸の住地を斷じ、一智を以て四斷智の功德に證を作し、亦善く此の四法の義を知ること、世尊、出世間の上上智を有つこと無ければ、四智漸く至り及び四緣漸く至るなり」とあり。

【六二】 四遍知。苦集滅道の四諦の理を遍く觀知する義なるべし。

【六三】 世尊、乃至。金剛の喩の如きなり。異譯本に「漸至の法無きは、是れ出世間の上上智にして、世尊、金剛の喩は、是れ第一義なり」とあり。

【六四】 彼れの功德。世尊、此の聖諦は、甚深微妙にして見難く了し難く、分別す可からず、思量の境に非ざれば、一

所知の地に於て法の自在を得、最勝無上にして、更に作す所無く更に證する所の地あるを見ず、十力を具足して最勝無畏の地に登り、一切の法に於て無礙に觀察して、正に師子吼するなり。後有を受けじ。と。二には謂はく、阿羅漢及び辟支佛は、無量なる生死の怖畏を度つて解脱の樂を受くるを得るや、是くの如き念を作すなり。我れ今已に生死の怖畏を離れて諸の苦を受けじ。と。世尊、阿羅漢・辟支佛の是くの如き觀察——後有を受けざるを謂ひたる——にては、第一なる蘇息の涅槃を證せざるなり。彼等は、未だ證せざる地に於て法に遇はざる故に、能く自ら、我れ今有餘依の地を證得したりと解了せんか、決定して當に阿耨多羅三藐三菩提を證すべし。何を以ての故ぞ。聲聞・獨覺は皆大乘に入り、而して大乘は即是れ佛乘なれば、是の故に三乘は即是れ一乘にして、一乘を證せば阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。阿耨多羅三藐三菩提は即是れ涅槃にして、涅槃と言ふは即是れ如來の清淨なる法身なり。法身を證する者は即是れ一乘にして、異なる如來無く異なる法身無し。如來と言ふは、即是れ法身にして、究竟せる法身を證せば即一乘を究竟し、一乘を究竟せば即相續を離るるなり。何を以ての故ぞ。世尊、如來の住する時には限量ある無くして、後際と等しければなり。如來は能く無限の大悲、無限の誓願を以て、世間を利益したまふ。と是の説を作す者は、是れを善説と名く。若し復説いて、如來は是れ常是れ無盡の法にして、一切の世間の究竟の依なりと言はば、亦善説と名く。是の故に、能く護る無き世間・依る無き世間に於て、後際と與に等しうして、無盡の歸依・常住の歸依・究竟の歸依と作る者は、謂はく、如來・應・正等覺なり。法は是れ一乘の道にして、僧は是れ三乘の衆なるが、此の二つの歸依は、究竟の依に非ずして少分の依と名くるなり。何を以ての故ぞ。一乘の道にて究竟の法身を證することを説かば、後に於て更に一乘の道を説くこと無ければなり。三乘の衆は、恐怖を有つ故にて如來に歸依して出でんことを求め、修學して作す所有る故にて阿耨多羅三藐三菩提に向ふものなればなり。故に二つの依は、究竟の依に非ずして是

住地を因とし、無明住地を緣とす。」とあり。

【五三】所知の地に於て法の自在を得。
異譯本に「一切の爾焰の地に於て、無礙を得て、法に自在に」とあり。本卷「爾炎」の解、参照。

【五四】一切の法に於て無礙に觀察して。
異譯本には「一切の爾炎をば、無礙智にて觀じ」とあり。

【五五】彼等は、等。此の句と前句との間に「然れども」と、如き語意の有ること、知るべし。

【五七】一乘を究竟せば、即、相續を離るるなり。
異譯本には「究竟せば、即是れ無邊にして不斷なり。」とあり。

【五八】如來の住する時には、乃至、等しければなり。
異譯本に「如來は、限齊の時を有つ無くして住し、如來應等正覺は、後際と等しく住す。」とあり。

【五九】如來は能く、等。
異譯本には、此の句の前に「如來には限齊無く、大悲にも亦限齊無ければ、」の句あり。

ざる故に、恒沙に過ぎたる等の一切の過の法の應に斷つべきを斷たず、應に盡すべきを盡さず。恒沙に過ぎたる等の一切の過の法の、斷たず盡さざる故に、恒沙に過ぎたる等の諸の功德の法をば、了せず證せざればなり。是の故に、無明住地は、一切の應に斷すべき所の法たる諸の隨煩惱の與めに、生ずる處と爲る故に、彼れに従つて心を障ふる煩惱・止を障ふる煩惱・觀を障ふる煩惱・靜慮を障ふる煩惱と、是くの如くに、乃至、三摩鉢底・加行・智・果・證・力・無畏を障ふる有らゆる恒沙に過ぎたる一切の煩惱を生ずるなり。如來の菩提たる佛の金剛智の能く斷する所の諸の起煩惱は、一切、皆無明住地に依るは、無明住地を因・緣と爲す故なり。世尊、此の起煩惱は、刹那刹那に心と相應すれども、世尊、無明住地は、無始より來心と相應せず。世尊、若し復恒河沙に過ぎたる、如來の菩提たる佛の金剛智にて應に斷すべき所の法は、一切皆是れ無明住地にて依持し建立するなり。と譬へば、一切の種子・叢林の皆大地に依つて生長せられ、若し地壞れば、彼れも亦隨つて壞るるが如く、是くの如くに、恒沙に過ぎたる等の、如來の菩提たる佛の金剛智にて應に斷すべき所の法も、一切皆無明住地に依つて生長せられ、若し彼の無明住地にして斷たば、恒沙に過ぎたる等の、如來の菩提たる佛の金剛智にて應に斷すべき所の法も、皆亦隨つて斷つなり。是くの如くに、恒沙に過ぎたる等の應に斷すべき所の法は一切の煩惱及び起煩惱は、皆已に斷つ故に、便ち能く恒沙に過ぎたる等の不可思議なる諸佛の法を證得し、一切の法に於て能く無礙の神通を證得し、諸の智見を得て一切の過を離れ、諸の功德を得て大法王と爲つて、法に於て自在に一切法に自在なる地を證して正に師子吼するなり。我が生は已に盡きたり、梵行は已に立ちたり、作す所は已に辦じたり、後有を受けず。と。是の故にて、世尊は、師子吼を以て、了義に依つて、一向に記説したまふなり。

世尊、後有を受けざる智に二種あり。何を謂うて二と爲すか。一には謂はく、諸の如來は、調御力を以て四魔を摧伏し、諸の世間に超えて一切の有情に瞻仰せられ、不思議なる清淨の法身を證し、

亦、三地の意生身の緣となるを謂ふ。

【六】 增語。「換言の語」の義なり。

【七】 最後の有の諸の菩薩等謂はゆる「最後身」の諸菩薩を謂ふ。

【八】 餘有る解脫を、乃至、解脫には非ざる等。謂はゆる「有餘涅槃」にして、一餘餘涅槃一に非ざるを謂ふ。異譯本には「餘の過有る解脫と名けて、一切の過を離れたる解脫に非ざる」とあり。

【九】 是れを少分の、乃至、涅槃界に向ふのみなり。異譯本に「是れを少分の涅槃を得と名く。少分の涅槃を得る者を涅槃界に向ふと名く。」とあり。即ち、只「向」にして「果」に非ざるを謂ふ。

【十】 靜慮を障ふる煩惱。異譯本に「禪の上煩惱」とあり。

【十一】 三摩鉢底。異譯本に「正受の上煩惱」とあり。

【十二】 加行。

異譯本に「方便の上煩惱」とあり。

【十三】 如來の菩提たる、乃至、因緣と爲す故なり。

異譯本に「如來の菩提智の斷ずる所は、一切、皆、無明住地の建立する所に依り、一切の上煩惱の起るは、皆、無明

するなり。此の三地の隨意生の身及び無漏の業は、皆無明住地をば依る所の處と爲すを以て、彼れは有の縁なりと雖も、亦能く縁と爲るなり。世尊、是の故に、三種の隨意生の身及び無漏の業は、皆無明住地を以て縁と爲すこと、有の愛に同じ。世尊、有の愛の住地は、無明住地の業と同じからず。無明住地は四住地と異にして、四住地と異なるをば唯佛のみ能く斷じたまふ。何を以ての故ぞ。阿羅漢・辟支佛は四住地を斷ずれども、漏盡の力に於て自在なるを得ずして、證を現すること能はざればなり。何を以ての故ぞ。世尊といふ言は、漏盡の増語なればなり。是の故に阿羅漢・辟支佛及び最後の有の諸の菩薩等は、無明地に爲つて覆蔽せらるる故に、彼彼の法に於て、知らず見ず。知見せざるを以て、彼彼の法に於て、應に斷ずべきを斷ぜず、應に盡すべきを盡さず。彼彼の法に於て斷ぜず盡さざる故に、餘有る解脱を得れども、一切の解脱には非ず。餘有る清淨を得れども、一切の清淨には非ず。餘有る功徳を得れども一切の功徳には非ざるなり。世尊、有餘の解脱を得て一切の解脱に非ず、乃至、有餘の功徳にて一切の功徳に非ざるを以ての故に、有餘の苦を知り、有餘の集を斷じ、有餘の滅を證し、有餘の道を修するのみ。と。

爾の時に、勝鬘夫人は、復佛に白して言はく。世尊、若し復、有餘の苦を知り、有餘の集を斷じ、有餘の滅を證し、有餘の道を修するのみならば、是れを少分の滅度と名けて、少分の涅槃を證して涅槃界に向ふのみなり。若し一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修せば、彼れは無常敗壞の世間に於て、常寂清涼なる涅槃を證するを得るなり。世尊、彼れは護る無き依る無き世間に於て、護と爲り依と爲るなり。何を以ての故ぞ。諸法の中に於て高下を見る者は、涅槃を證せざれど、智の平等なる者・解脱の等しき者・清淨の等しき者は、乃ち涅槃を證すればなり。是の故に、涅槃を等しき一味と名く。云何なる一味なる。謂はく。解脱味なり。世尊、若し無明地にして斷たず盡きずんば、涅槃の一味・等味を得ざるなり。何を以ての故ぞ。無明住地の斷たず盡き

れながら持つ食・眠・寢等の一切の煩惱なり。第二卷「思」の解、参照。
【四〇】 色愛の住地。色界の一切の思惑なり。
【四一】 有愛の住地。無色界の一切の思惑なり。
【四二】 有愛の住地とは、一切の煩惱の生ずる根本の依り處なるに由つて名く。
【四三】 此の四住地にて、乃至、心と相ひ應ずるものなり。
異譯本には「此の四住地は、一切の起煩惱を生ず。起とは、刹那の心に刹那に相應するものなり」とあり。

【四四】 無明住地。根本無明（按末無明に對す。）を指し、法執（我執に對す。）を指す。即ち煩惱該の者の心體にして、有らゆる煩惱の依る所と爲り、變易生死の因となる者なり。
【四五】 是の無明住地の如きは乃至其の力最も大なり。異譯本には「是の無明住地の力の如きは、有愛の數の四住地に於て、無明住地の其の力は最も大なり」とあり。因みに、茲に曰ふ「有愛」とは、生死の果報に執著する者を謂ふ。第二卷「有愛」の解、参照。

【四六】 彼れは有の縁なりと雖も亦能く縁と爲るなり。此の「有」は、三有の「有」なるべく、乃ち、三界の縁となると共に、

と説きたまへるは、皆是れ如來の他の意に隨へる語にして義を了せざる説なり。何を以ての故ぞ。二種の死あればなり。何等を二と爲すか。一には分段、二には變易なり。分段にて死する者は、謂はく。相續する有情なり。變易にて死する者は、謂はく。阿羅漢及び辟支佛・自在なる菩薩の意に隨ひ生ぜざる身、乃至菩提なり。二種の死の中にて、分段の死を以て、阿羅漢・辟支佛には、我が生已に盡きたりとの智を生ず。と説くなり。能く餘有る果を證得せるに由る故にて、梵行已に立ちたり。との智を生ずるなり。一切の愚夫の作す能はざる所、七種の學人の未だ成辦する能はざるところの相續する煩惱を、究竟して斷ぜざる故に、作す所已に辦ぜり。との智を生ずるなり。世尊の説きたまへる、後有を受けずとの智を生ず。とは、謂はく。阿羅漢及び辟支佛は、一切の煩惱を斷つ能はざれば、一切の受生を了せざる智なり。何を以ての故ぞ。是れ阿羅漢・辟支佛には、餘の煩惱の斷盡せざるもの有る故、一切の受生を了知する能はざるなり。煩惱に二つあり。謂はく。住地の煩惱及び起煩惱なり。住地に四つあり。何等を四と爲すか。謂はく。見一處の住地・欲愛の住地・色愛の住地・有愛の住地なり。世尊、此の四住地にて能く一切の遍起の煩惱を生ずるなり。起煩惱とは、刹那刹那に心と相ひ應ずるものなり。世尊、無明住地は、無始の時より來心と相ひ應ぜず。世尊、四住地の力は、能く遍起の煩惱の依る所と作り、無明地に比するに、算數・譬喩の及ぶ能はざる所なれども、世尊、是の無明住地の如きは、有愛住地に於て其の力最も大なり。譬へば、醜王の色力。威德及び衆の眷屬は、他化自在の諸天を蔽ふが如く、是の無明住地の如きも、四住地を蔽ひて恒河沙の數に過ぎたる煩惱に依られ、亦四種の煩惱をして久しく住せしむれば、聲聞獨覺の智にては斷つ能はずして、唯如來の智のみあつて能く斷つ所なり。世尊、是くの如くに、是の無明住地の如きは、其の力最も大なり。世尊、取は有漏の業因に縁と爲つて三有を生ずるが如くに、是の無明住地の如きは、無漏の業因に縁と爲つて、能く阿羅漢及び辟支佛と大力の菩薩の、意に隨ひ生ずる身とを生

【四】變易。

【五】菩提なり。

【六】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【七】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【八】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【九】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一〇】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一一】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一二】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一三】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一四】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一五】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一六】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一七】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一八】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

【一九】世尊の説きたまへる。乃至。一切の受生を了せざる智なり。

是くの如くに一切の聲聞・獨覺、世・出世間の有らゆる善法は、皆大乘に依つて生長することを得るなり。是の故に、世尊、大乘に住し大乘を攝受することに住するは、即聲聞・獨覺、世・出世間の有らゆる善法を攝受することに住するなり。佛世尊の説きたまへる六處の如きは、謂はく。正法住・正法滅・別解脱・毘奈耶・正・出家・受具足なるが、大乘の爲めの故に此の六處を説けるなり。所以は、何ぞ。正法住とは、大乘の爲めに説けるなり。大乘の住る者は、即ち正法の住るなり。正法滅とは、大乘の爲めに説けるなり。大乘の滅する者は、即ち正法の滅するなり。別解脱・毘奈耶の此の二法は、義は一にして名は異なり。毘奈耶とは、即ち大乘の學なり。所以は何ぞ。佛に爲つて出家して具足を受くればなり。是の故に、大乘の戒蘊は是れ毘奈耶なり、是れ正・出家なり、是れ受具足なり、世尊、阿羅漢には出家及び受具足あること無し。何を以ての故ぞ。阿羅漢は、如來に爲つて出家し具足を受けざる故なり。阿羅漢には、怖畏の想あつて如來に歸依するのみ。何を以ての故ぞ。阿羅漢は、一切の行に於て怖畏の想に住すること、人の劍を執つて來つて己れを害せんと欲するが如くなればなり。是の故に、阿羅漢は出離せる究竟の安樂を證せざるなり。世尊、依れども依ること求めざること、諸の衆生の、歸依を有つ無くして、彼の恐怖に安隱を爲さん故に歸依を求むるが如く、世尊、是くの如くに、阿羅漢も恐怖を有つ故にて如來に歸依するなり。是の故に、阿羅漢及び辟支佛は、生の法に餘あり、梵行未だ立たず、作す所未だ辦ぜず、當に斷する所あるべきも未だ究竟せざる故に、涅槃を去ること遠きなり。何を以ての故ぞ。唯如來・應・正等覺のみあつて、涅槃を證得し、無量不可思議なる一切の功德を成就し、應に斷すべき所の者を皆悉く已に斷じて究竟して清淨に、諸の有情に爲つて瞻仰せられて、二乘菩薩の境界に超過すれど、阿羅漢の等は則ち是くの如くならずして、涅槃を得と言ふは、佛の方便なればなり。是の故に、阿羅漢の等は涅槃を去ること遠きなり。世尊の、阿羅漢及び辟支佛は、解脱の四智の究竟せるを觀察して、蘇息を得。

【二九】阿羅漢は。乃至。歸依するのみ。異譯本には「阿羅漢の、如來に依つて出家して具足を受くる故は、阿羅漢の如來に歸依するは、阿羅漢に恐怖有ればなり。」とあり。

【三〇】阿羅漢は一切の、乃至、住すること。異譯本には「阿羅漢の、一切無くせんとする所に於て、怖畏の想に住すること」とあり。

【三一】生の法に餘あり、乃至、涅槃を去ること遠きなり。異譯本には「餘の生の法の盡きざる有る故に、生有り、餘の梵行の成らざる有る故に、純ならず、事は究竟せざる故に、當に作す所有るべく、彼(カシコ)に度らざる故に、當に斷つ所有るべく、斷たざるを以ての故に、涅槃界を去ること遠きなり。」とあり。

【三二】四智。「四智」には種々あれど、今は羅漢の四智を謂ふ者なり。即ち、一に、苦諦の智(我が生は已に盡きたり、との)、二に、滅諦の智(梵行已に立ちたり、との)、三に、道諦の智(作す所已に辨ぜり、との)四に、集諦の智(後の有を受けず、との)是れなり。

【三三】蘇息。異譯本には「蘇息の處」とあり。「安住處」を謂ふ。

力あるを見る。如來も此れを以て眠と爲し、法の根本と爲し、引導の法と爲し、通達の法と爲したまはん。と。

爾の時に、世尊は、勝鬘夫人の、正法を攝受して有つ大威力を説く所を聞き、歎じて言はく。是くの如く、是くの如し。善い哉、勝鬘。汝の、正法を攝受する大威徳力を説く所の如きは。大力士の、微しく觸れ末に摩すとも、大苦惱を生じて更に病を増重するが如く、是くの如くに、勝鬘、假令ひ少分なりとも正法を攝受せば、魔波旬をして痛切・愁惱・悲號・歎息せしむることも、亦復是くの如し。勝鬘、我れ常に、餘の一善法も、魔をして愁惱せしむること、猶少分、正法を攝受する如きをも見ざるなり。勝鬘、譬へば、牛王の、形色端正に身量殊特にして、諸の牛を蔽ふが如く、是くの如くに、勝鬘、大乘を修むる者は、設令ひ少分なりとも正法を攝受せば、即聲聞・獨覺の一切の善法を蔽ひ能ふなり。勝鬘、又須彌山王の高廣嚴麗にして衆山を蔽ふが如く、是くの如くに、勝鬘、初めて大乘に趣くとも、饒益の心を以て、身命を顧みずして正法を攝受せば、便ち能く其の身命を顧みつつ久しく大乘の一切の善根に住せるものに超過せん。是の故に、勝鬘、當に正法を攝受することを以て、一切の有情を開化し教化すべし。是くの如くに、勝鬘、正法を攝受せば、大福利及び大果報を獲ん。勝鬘、我れ無數の阿僧祇劫に於て、是くの如き攝受正法の有つ所の功徳を稱讚すとも邊際を得じ。是の故に、正法を攝受せば、是くの如き無量の功徳を成就せん。と。

佛は勝鬘に告ぐらく。汝今復應に我が説く所の攝受の正法は、一切の諸佛の共に愛樂する所なるを演ぶべし。と。勝鬘は白して言はく。善い哉、世尊。攝受する正法とは、則ち大乘に名く。何を以ての故ぞ。大乘は一切の聲聞・獨覺、世・出世間の有らゆる善法を出生すること、阿耨達池の八大河を出すが如くなればなり。是くの如くにして、大乘は一切の聲聞・獨覺、世・出世間の有らゆる善法を出生するなり。世尊、又一切の種子・草木・叢林の、皆大地に依つて生長することを得るが如く、

【二〇】如來も此れを以て、乃至、通達の法と爲したまはん異譯本には「佛を實眼・實智と爲し法の根本と爲し、法に通達すと爲し、正法の依と爲せば、亦悉く知見したまはん。」とあり。而して「本會」の「眼」は「事理を照了する智慧の權威ある者」の意に用ひたるが如し。

水 此の間に、異譯本には「一乘章、第五」とあり。

散亂無く正念を成熟するを以て、曾て作す所の事を終まで忘失せずして、彼れの意に隨順して之れを成熟し、彼の有情をして正法に安住せしむるものにして、是れを靜慮波羅蜜と名くればなり。應に智慧を以て成熟すべき者には、彼の諸の有情の、利益を爲さん故に諸の法義を問へるには、倦む無き心を以て、一切の諸論・一切の明處ニモウチシヨの、乃至、種種なる工巧の處をも演説して究竟を得しめん爲め、彼れの意に隨順して之れを成熟し、彼の有情をして正法に安住せしむるものにして、是れを智慧波羅蜜と名くればなり。是の故に、世尊、異る波羅蜜無く、異る攝受正法無く、正法を攝受することは卽是れ波羅蜜なり。と。

時に、勝鬘夫人は、復佛に白して言はく。世尊、我れ今佛の威神を承けたる辯才の力にて、復大義を説かん。佛言はく。云何なる大義なるか。世尊、正法を攝受する者は、異る攝受の正法無く、異る攝受正法の者無し。正法を攝受する善男子・善女人は則ち是れ攝受する正法なり。何を以ての故ぞ。若し正法を攝受する善男子・善女人は、正法の爲めの故に身・命・財を捨てば、是の人の等の如きは、身を捨つる故を以て、生死の後に老病を遠離し、不壞の常を得て變易ヘンイキある無く、究竟せる寂靜・不可思議なる如來の法身を證すればなり。命を捨つる故を以て、生死の後に、永く死を離れて無邊の常を得、不可思議なる諸善の功德を成就して、一切の佛法の神變を證すればなり。財を捨つる故を以て、生死の後に、有情に超過して無盡無減の果報をば圓滿して、不思議なる功德の莊嚴を具して、諸の有情に尊重し供養せらるることを證すればなり。世尊、身・命・財を捨てて正法を正受する善男子・善女人等は、諸の如來に爲つて記を授けられん。世尊、若し善男子・善女人にして、正法の滅せんと欲するに、諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の互に相ひ朋黨して諸の諍訟を起すあらんに、詭曲テウキョクならざる欺誑コウキョウならざる心を以て、正法を愛樂し正法を攝受して善朋の中に入らば、善朋に入る者は必ず諸佛の記を授くる所と爲ればなり。世尊、我れ正法を攝受することに、斯の大

【七】明處(Vidyā-āhānāny)。「學習して智慧の明を生ずる處」の義にして、此れを「五明處」又、單に「五明」とも曰ふ。即ち、一に、聲明(Gabha-vidyā)(言語文字の學)二に、因明(Hetuvī)(論理の學)三に、內明(Abhyākāna)(形而上の學。即ち婆羅門にては「四吠陀論」にして、佛教「三藏」十二部教を内明とす。)四に、醫方明(Cikitsā)(醫藥の學)五に、工巧明(Golpa(Karma)Sthāna)(工藝、算、曆等の學)是れにして、古代印度に於て、學者の必ず學習すべしとせられたる者なり。

爲めに不請の友と作つて大悲もて利益し、有情を哀愍して世の法母と爲るなり。又、大地の如きは、是れ四種の寶の生ずる所の處たり。何等を四と爲すか。一には、無頂のものなり。二には、上價のものなり。三には、中價のものなり。四には、下價のものなり。是くの如くに正法を攝受せる善男子、善女人の大地を建立するに、有情遇ひ已るや、四つの大寶の、一切の寶中にて最も殊勝と爲すを獲るなり。何等を四と爲すか。謂はく。諸の有情の斯の善友に遇ふや、或は人・天の善根を獲得するあり、聲聞及び辟支佛或は無上乘の善根功徳を證するあり。是れを正法を攝受せる善男子、善女人は、大地を建立し、有情遇ひ已らば、便ち能く四種の大寶を獲得すと名く。世尊、大寶を出す者をば、名けて眞實に正法を攝受すと爲す。世尊、正法を攝受すと言ふ者は、謂はく。異なる正法無く、異なる攝受無し。正法の正法たるは、即是れ正法を攝受することなり。世尊、異なる波羅蜜無く、異なる攝受正法無し。正法を攝受することは即是れ波羅蜜なり。何を以ての故ぞ。正法を攝受する善男子、善女人は、應に施を以て成熟すべき者には施を以て成熟し、乃至、身を捨てて、彼れの意に隨順して之れを成熟し、彼の有情をして正法に安住せしむるものにして、是れを施波羅蜜と名くればなり。應に戒を以て成熟すべき者には、六根を守護し、身・語・意を淨め、乃至、威儀もて、彼れの意に隨順して之れを成熟し、彼の有情をして正法に安住せしむるものにして、是れを戒波羅蜜と名くればなり。應に忍を以て成熟すべき者には、若し彼の有情は罵詈・毀辱・誹謗・擾亂すとも、無恚の心及び利益の心を以て、最上の忍力にて、乃至、顔色をも亦變異せずして、彼れの意に隨順して之れを成熟し、彼の有情をして正法に安住せしむるものにして、是れを忍波羅蜜と名くればなり。應に精進を以て成熟すべき者には、彼の有情に於て、懈怠・下劣の心を起さず、大なる樂欲・最上なる精進を起し、四威儀に於て、彼れの意に隨順して之れを成熟し、彼の有情をして正法に安住せしむるものにして、是れを精進波羅蜜と名くればなり。應に靜慮を以て成熟すべき者には、彼の有情に於て、

【二四】 不請の友。衆生の請ひ求むる無きに、菩薩の、大悲を以て、其の友と爲つて、利益を與ふる者を謂ふ。

【二五】 無頂。「無上」と同義にして、「此の上無き」意なり。

【二六】 應に靜慮を以て、乃至、是れを靜慮波羅蜜と名くればなり。

異譯本には「應に禪を以て成熟すべき者には、彼の衆生に於て、亂れざる心、外に向はざる心たる第一正念を以て、乃至、久しき時に作しし所、乃至、久しき時に所、終まで忘失せずして、時に彼れの意を護つて、之れを成熟せんとし、彼の成熟する所の衆生を、正法に建立する、是れを禪波羅蜜と名くればなり」とあり。

り。汝の説く所の義を解了し能ふあらば、彼れは、長夜に於て諸の善本を植ゑたるなり。汝の説く所の正法を攝受することの如きは、皆是れ過去・未來・現在の諸佛の、已に説き今説き當に説くべきにして、我れ無上正等の菩提を得たるも、亦復常に種種の相を以て正法を攝受することを説く。是の正法を攝受して有つ所の功德に邊際ある無きを稱揚する如き如來の智慧にも亦邊際無し。何を以ての故ぞ。是れ正法を攝受することに、大功德を有ち大利益を有てばなり。と。

時に、勝鬘夫人は、復佛に白して言はく。世尊、我れ當に佛の威神の力を承けて、更に復正法を攝受することの廣大の義を演説せん。と。佛言はく。汝の説く所を聽かん。と。勝鬘夫人の言はく。正法を攝受することの廣大なる義とは、無量なる一切の佛法を得、乃至、能く三八萬の行蘊を攝むるに爲つてなり。譬へば、劫初に初めて興る諸の色雲の、衆の寶雨を雨すが如くに、是の正法を攝受することの善根の雲の如きも、能く無量なる福報の雨を雨すなり。世尊、又、劫初に、大水の中に、能く三千大千界藏及び四百億の種種なる類洲を生ずるが如くに、是の正法を攝受することの如きは、大乘の無量なる界藏并に諸の菩薩の神通の力・種種なる法門・一切の世間及び出世間の安樂を出生し、一切の天・人の未だ曾て有たざる所を具足するなり。又、大地の四つの重擔——何等を四と爲すか。一には大海、二には諸山、三には艸木、四には衆生なり。——を荷ふが如くに、是の正法を攝受する諸の善男子・善女人の如きは、能く四種の重任を荷負するに堪ふること、彼の大地に逾えたるなり。何等を四と爲すか。謂はく。善友を離れたる無聞・非法の諸の有情の類には、人・天の善根を以てして之れを成熟し、聲聞を求むる者には聲聞乘を授け、獨覺を求むる者には獨覺乘を授け、大乘を求むる者には授くるに大乘を以てするなり。是れを正法を攝受する諸の善男子及び善女人は、能く四種の重任を荷負するに堪ふること、彼の大地に逾えたりと名く。世尊、是くの如くに正法を攝受せる善男子・善女人等は、大地を建立して能く四種の重任を荷負するに堪へ、普く衆生の、

【三】八萬の行蘊。
異譯本には「八萬四千の法門」とあり。

の弘誓を發せるを、聖主世尊は復證知したまふと雖も、而も諸の有情の、善根微薄にして或は疑網を起し、十弘誓をば成就し難きを以ての故に、彼れは或は、長夜に不善の法を習ひて、諸の苦惱を受けん。斯くの如き衆生を利益せんと欲する爲めに、今佛前に於て誠實なる誓を發すなり。世尊、我れの今此の十の弘誓願を發せること、若し實に虚しからずば、大衆の上に於て、當に天華を雨し天の妙音を出すべし。と。勝鬘夫人の、如來の前に於て斯の言を作し已れる時に、虚空の中に即天華を雨し、天の妙音を出して歎じて言はく。善い哉、勝鬘夫人、汝の説く所の如くに、眞實に異ること無し。と。爾の時に、衆會は既に斯の瑞を觀るや、諸の疑惑を無くし大歡喜を生じて、同聲に唱へて言はく。願はくば、勝鬘夫人の生るる所の處と、其の願・行を同じうせんことを。と。時に世尊は、悉く大衆に、其の願ふ所の如し。と記したまへり。

爾の時に、勝鬘夫人は、復佛前に於て三つの弘願を發し、茲の願力を以て、無邊なる諸の有情の類を利益せんとせり。第一の願は、我が善根を以て、一切の生に於て正法の智を得んとなり。第二の願は、若し我が生るる所にて正智を得已らば、諸の衆生の爲めに演説して倦むこと無けん。となり。第三の願は、我れ正法を攝受し護持せん爲めに、生ずる所の身に於て軀命を惜まじ。となり。

爾の時に、世尊は斯の願を聞き已つて、勝鬘に告げて言はく。一切の色の悉く空界に入るが如くに、是の菩薩の恒沙の諸願の如きも、悉く茲の願に入らん。此の三つの願は眞實に廣大なればなり。と。

爾の時に、勝鬘夫人は、復佛に白して言はく。世尊、今當に佛の威神を承けたる辯才の力にて、大願を説かんと欲すべし。幸に聽許を垂れたまはんことを。と。佛言はく。勝鬘、汝の説く所を恣にせよ。と。勝鬘夫人の言はく。菩薩の有つ所の恒沙の諸願は、一切皆一つの大願の中に入らん。一つの大願とは、謂はゆる如來の正法を攝受せんとなり。是の正法を攝受する如きは、眞實に廣大なればなり。と。佛言はく。善い哉、勝鬘。汝の久しく修習したる智慧・方便は甚深にして微妙な

【三】勝鬘夫人の、乃至、同じうせん。

異譯本には「恒に勝鬘と常に共に俱會して、其の行ずる所を同じうせんことを」とあり。

本 此の間に、異譯本には「三願章、第三」とあり。

本 此の間に、

異譯本には「攝受章、第四」とあり。

【三】智慧・方便。謂はゆる實智と權智とを指す者なるべし。

國に生ずべし。となり。

時に勝鬘夫人は佛の記を聞き已つて、如來の前に於て合掌して、十の弘誓を發して、是くの如き言を作さく。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、受くる所の戒に於て犯心を起さじ。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、諸の師長に於て慢心を起さじ。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、諸の衆生に於て恚心を起さじ。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、諸の己れに勝れるもの及び諸の勝りたる事に於て、妬心を起さじ。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、少食を有つと雖も慳心を起さじ。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、自ら己れが爲めに財物を受け畜へずして、凡べて受くる所あらば、貧苦なる有情の類を濟ふことを爲さん。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、恩の報を求めずして四攝の事を行ひ、貪利の心無く、厭足の心無く、限礙の心無くして衆生を攝受せん。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、諸の衆生の、依怙ある無く、幽繫・疾惱・種種なる危厄なるを、終まで捨て離さずして必ず安隱ならんことを願ひ、善き饑益を以て衆苦を免れしめん。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、若し一切の諸の惡律儀もて如來の清淨なる禁戒を毀り犯すものを見れば、凡べて我が攝むる所の城邑・聚落にて、應に調伏すべき者は而ち之れを調伏し、應に攝受すべき者は而ち之れを攝受すべし。何を以ての故ぞ。調伏し攝受するを以ての故に則ち正法は久しく住り、正法の久しく住る故にて天・人は充滿し、惡道は減少して、能く如來の法輪をして常に轉ぜしむればなり。世尊、我れ今日より乃ち菩提に至るまで、正法を攝受して終まで忘失せじ。何を以ての故ぞ。正法を忘失せば則ち大乘を忘れ、大乘を忘れれば則ち波羅蜜を忘れ、波羅蜜を忘れれば則ち大乘を捨つれば、若し諸の菩薩にして、大乘に於て決定せざる者あらば、正法を攝受すとも則ち堅固ならずして、便ち凡夫の境に超ゆることに堪任せずして、則ち大失を爲せばなり。世尊、現在・未來に正法を攝受せる諸の菩薩等の、無邊の廣大なる利益を具足せんと、斯

※ 此の間に異譯本には「十受章」とあり。

【七】 少食を有つと雖も。異譯本には「内外の法に於て」とあり。

【八】 限礙の心無くして。異譯本には「罣礙の心無くして」とあり。

【九】 善き饑益を以て。異譯本には「義を以て饑益して」とあり。

【一〇】 我が攝むる所の城邑、聚落にて。異譯本には「彼の處に於て」とあり。

歸依したてまつる 善く、心の過惡と及び身の四種とを調じて 不思議の地に到りたまへり 故に我れ今敬禮したてまつる 諸の爾炎の法を知りたまふ 智身に畢竟無くして法に於て忘失したまふこと無し 故に我れ今敬禮したてまつる 稱量に過ぎたるに稽首し 倫等無きに稽首し 法の自在なるに稽首し 思惟に超えたまへるに稽首したてまつる 哀愍して我れを覆護し 法種をして増長し 最後身に逮り及ぶまで 常に如來の前に在らしめたまはんことを 我れの福業を 此の世及び餘の生に修する所にて 斯の善根の力に由つて 願はくば佛恒に攝受したまはんことを と。

時に、勝鬘夫人は、此の偈を説き已つて、諸の眷屬一切の大衆と頂にて佛足を禮せり。爾の時に、世尊は即勝鬘の爲めにとて、偈を説いて言はく。

我れ昔菩提を 會て已に汝に開示することを爲ししが 今復我れに値遇せり 來世に及ぶも亦 然らんと。

此の偈を説き已つて、即會中に於て、勝鬘夫人に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くらく。汝今如來の殊勝なる功德を稱歎せるが、此の善根を以て、當に無量阿僧祇劫に於て、天人の中にて自在王と爲り、諸受用する所を皆悉く具足し、生ずる所の處にて常に我れに遇ふことを得て、現前に稱歎すること今の如くに異なる無かるべし。復、當に無量無數の諸佛世尊を供養すべきこと二萬阿僧祇劫を過して、當に佛と作り、號して普光如來・應・正等覺と曰ふを得べし。彼の佛の國土には、諸の惡趣・衰老・病苦無く、亦不善・惡の業道の名も無く、其の中の衆生は、形色端嚴にして、五妙の境を具して純ら快樂を受くること、他化自在の諸天を蔽ひ、彼の諸の衆生は皆大乘に趣き、有らゆる是の大乘を學ぶ如き者は、悉く彼に來り生ぜん。と。時に勝鬘夫人の授記を得已るや、無量の天・人は心に踊躍を懷き、咸く彼の佛の世界に往生せんと願ぜり。是の時に、世尊は皆授記を與へて、當に彼の

し。

【一】 應當に供養を修むべし。とあり。

【二】 心の過惡。心に屬する一切の煩惱なり。

【三】 身の四種。「殺・盜・婬・妄語」を謂ふか。或は「生・老・病・死」を指すとの説もあり。

【四】 爾炎 (Cherry) 智母。

【五】 智境 などと譯す。「五明」等の法の能く智慧を生ずる境界たるに由つて名く。別項「明處」の解、參照。

【六】 法の自在なるに稽首し。

異譯本には「無邊の法に敬禮し」とあり。但し、此れ及び前後の「稽首」の對者は、皆釋尊を指す者なり。

【七】 最後身に、乃至、在らしめたまはんことを。

異譯本には「此の世及び後生に、願はくば佛常に攝受したまはんことを」とあり。

【八】 五妙の境。

異譯本には「五欲の衆具」とあり。

【九】 有らゆる、乃至、來り生ぜん。

異譯本には「諸の善根を修習する衆生は皆彼に集らん」とあり。

卷の第一百二十九

唐 菩提流志 漢譯

勝鬘夫人會 第四十八

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は舍衛國の祇樹給孤獨園に在せる時に、橋薩羅の波斯匿王及び末利夫人は、初めて法を證し已つて共に相ひ謂うて言はく。我が女、勝鬘は、慈暁、聰慧、多聞、智慧なれば、若し如來を見たてまつらば、甚深の法に於て速に能く解了して、諸の疑惑無からん。我れ今應當に善く論ず者をして、其の誠信を發さしむべし。と。是の議を作し已つて、王及び夫人は、即便に書を作つて如來の眞實の功德を稱揚し、時に一の使の眞提羅と名くるを遣し、王の書を持ちて、無闍城に詣つて、勝鬘夫人に授け奉らしめたり。時に勝鬘夫人は、書を發いて、尋釋して頂き受け、欣慶して希有の心を生じ、眞提羅に向つて偈を説いて言はく。

我れ聞く如來の聲には 世間にて頗は遇ひ難しと 斯の言にして若し眞實ならば 當に汝に衣服を賜ふべし 若し彼の佛世尊は 世間を利せん爲めに現れたまはば 必ず應に哀愍を見しと 我れをして眞の相を視しめたまふべし と。

言ひ念ずること須臾の頃にして 佛は虚空の中に於て 不思議の身を現して 普く大光明を放ちたまへば 勝鬘及び眷屬は 皆悉く來つて集會し 合掌し瞻仰し禮して 大導師を稱讚すらく。

如來の妙なる色身は 世間に與に等しき無く 比無くして不思議なり 是の故に今敬禮したてまつる 如來の色は無盡にして 智慧も亦復然く 一切の法に常住したまふ 是の故に我れ

※此の間に、異譯本「勝鬘師子吼一乘大方便方廣經」宋代、求那跋陀羅、譯の「麗本」には「如來眞實功德章、第一」と冠してあり。

【一】 橋薩羅 (Kosala)。當時、印度十六大國の一にして、摩伽陀國の北、迦毘羅衛城の西今のオードワ (Orissa) 地方なり。

【二】 末利 (Mallika) 夫人。

又「摩利」とも書し「鬘」と譯す。

【三】 初めて法を證し已つて。異譯本には「法を信すること、未だ久しからざりしが」とあり。

【四】 勝鬘 (Sanskrit) 尸利摩羅と書す。阿踰闍國王の妃となる。

【五】 慈暁乃至智慧なれば。異譯本には「聰慧、利根、通敏にして悟り易ければ」とあり。

【六】 一の使の眞提羅と名くるを遣し。

異譯本には「即ち内人の旃提羅と名くるを遣し」とあり。

【七】 無闍城。

異譯本には「阿踰闍國 (Avalokita) とあり。

【八】 尋釋乃至希有の心を生じ。尋釋とは事の意義を尋ね究むるを謂ふ。異譯本には歡喜して頂受し、讚誦して受持し、希有心を生じ」とあり。

【九】 當に汝に衣服を賜ふべ

に奉持するか。と。佛言はく。名けて、菩薩の淨行を寶鬘の間ふ所。と曰うて、當に之れを奉持すべし。と。

佛の説きたまへることはくの如くなるや、寶鬘及び十方より諸會せる菩薩・賢者阿羅漢・天・龍・鬼神・提查瑟・阿須倫・世人は、佛の所説を聞きて歡喜せざるは莫かりき。

諸根の本末を度せんことを 是の一切の地に於て 日月も尙墮つ可くとも 佛口にて宣べられたる所には 終まで改變あらず 佛は至誠の言を出して 演べたまふ所に虚あること無く 覺道に違ふを以て 佛人中の上を成せんと授けたまへり 我が志に 佛土を嚴り淨めんと願ふ所の如きに 言ひたまふ所も亦是くの如くに 悉く我が心念を知りたまへり 彼れ此の教を聞きじるや 悦顔して猶豫無く 行を修する所にて尊と爲らんとするは 衆生を度せんと欲する故なり 我が行ずる所の如きは 當に復と無量を増すべく 其の本際を嚴治せんと我が身に淨行を奉せん 行を興發して佛を得ることは 懈怠従り致さざること 力を勤めて怯弱無きことの 由精進従り至るがごとし 布施する所を堪任し 我れに受くるに道意を以てし 未だ曾て精進を捨てずして 大哀なる如來に至らん 以て諸の衆生の爲めに本末に是くの如きを爲し 吾れ當に悉く開化すべく 佛を得て異學を度せん と。

寶髻菩薩の此の偈を説ける時に、七萬二千の人は皆無上正眞道の意を發し、悉く彼の離垢光世界に生れんと願じ、同時に聲を發して、俱に是の言を説けり。寶成如來の佛を得たまふ時に、普く吾等をして、彼の佛土に生ぜしめたまへ。と。佛は皆當に其の國に生ずべしと記説せり。

爾の時に、世尊は賢者阿難に告ぐらく。是の經典を受け、持ちて諷誦して説き、廣く衆人の爲めに其の旨を宣傳せよ。慇懃に是の經典を勸助して、天上・世間の歸伏して共に供養する所たるを要せよ。所以は何ぞ。其れは此の經を聞かば、我れ悉く決を授ければなり。其の不信の者は、本宿の徳薄きにて、其の是の經を受くるものは、徳本凡に非ず。趣に此の經を聞くすら世世に佛に値へば、何に況んや、聞き持ちて奉行して説く功勳の無限なるをや。族姓子・族姓女、若し七寶を以て此の三千大千世界に滿して、時に隨つて布施し、是くの如き比類を百千歳に於てすとも、其の此の經を聞き、歡喜して信持する功德は彼れに踰えたり。と。阿難は佛に白さく。此の經を何と名けて、云何

【三】懈怠従り致さざること。臺本には「諸法の無極に度らんと」とあれど、同一の句は、最初にも出で居ると、及び當第四句と對照して、「明本」の者を可と認めて改めたり。

【三】我れに受くるに道意を以てし。臺本には「皆我が往古を知り」とあれど、斯くては、前後の句に對して、意義は突然となるに由り、是れ亦「明本」に據つて改めたり。

より異なる談無く、説く所は、唯菩薩の慧たる諸の度無極辯才・大哀の淳一品の教を宣ぶるのみ。是れ諸の菩薩は、皆曾て訓へられたれば、諸根明達して、能く一句を以て普く一切の諸佛の道に入ればなり。如來は、總持の言教を説くを爲すに、慈心は地の如し。何を總持の言教と謂ふか。一つの絶句を以て、普く諸の章に入るなり。何を一つの句と謂ふか。謂はく。妙聖の句にして、究め盡す可からざる道品の法なり。何に盡す無き句と謂ふか。佛道の窮め盡す可からざるを謂ふなり。何に盡す無しと謂ふか。無を論ずればなり。盡す無き句の、已に能く無に入つて、普く文字に入るを謂うて、是に一つの句と爲すなり。一切の文字にて盡す可からず、復、二字を有つことも、本より未だ聞かず亦未だ行ぜざる所なり。而ち宣説する言は、一字より出で、其の一字は、二字を與にして勢を同うしたるにはあらざるなり。是を以て、一字にて宜ぶる訓誨を、設し宣布せしむとも、斯の訓誨には、念、不念無く、應、不應無く、此の句にも、念無く亦不念も無くして、無念の句を以て開化を成するなり。是れを、族姓子、總持の教に入ると爲す。寶成如來は、諸の菩薩の爲めに總持の言句を説くに、彼れ學んで此の一句に入るに於ては、便ち普く一切の佛意に入るを得るなり。我れ一劫に於て若しくは復劫を過して、分別して咨嗟すとも、離垢光世界の功德の稱は、究め盡して其の邊際を得ること能はず。寶成如來の經道を講説す德稱の慧は、思ひ議る可からず亦賜す可からず。其の佛の大徳・國土の清淨の巍巍として超絶すること、上げて及ぶ可からず。と。

寶鬘菩薩は、佛の決を授くるを聞くや、歡喜し踊躍して、頌を以て佛を讚すらく。

普く知り悉く能く見 諸法の無極に度り 如來は皆 一切の諸の瑕穢を超越したまへり

大慧なること未曾有にして 皆我が往古を知り 諸佛を供養せる數をも 佛は悉く具に之れ

を説きたまへり 去來と今の現在との 本末に是くの如きを爲し 復跡なる末世と 及び一

切人とも知りたまふ 佛に爲つて決を授けられたれば 復と狐疑を懷かじ 開化して世間

【二六】總持の言教。

異譯本には「陀羅尼の金剛句」とあり。

【二七】一つの絶句を以て、乃至、入るなり。

異譯本には「即是れ一句なり。」とあり。

【二八】盡す無き句の、乃至、是に一つの句と爲すなり。

異譯本は「此れに當るべき者の字を攝めたり。」とあり。

【二九】復二字を有つことも、乃至、行ぜざる所なり。

異譯本は「此れに當るべき者を得ず。」とあり。

【三〇】其の一字は、乃至、あらざるなり。

異譯本には「一字にも、亦復二字を合せざるなり。」とあり。

【三一】諸法の無極に度り。

異譯本に「一切法の彼岸に到るを得。」とあり。

【三二】諸の瑕穢。

異譯本に「諸の煩惱」とあり。

【三三】去來乃至是くの如きを爲し。

異譯本に「故に三世を知るに障礙無し。」とあり。

まへるを 願はくば之れを發遣することを爲したまはんことを 其の慧は望礙無く 三世に流布すれば 若干の身意を處とすれども 其の心は著する所無く 一時に悉く曉了すれども 應ずる如くに當に化を行じたまふべければ 仁師子の屬したまへる笑の 其の義は何の義と爲すか 諸天は空中に住りつつ 意内に悦豫を懷き 地上の諸の人民は 手を又いて自ら歸すれば 能仁の勝唯 殊特なる甘露味を説きたまはば 諸天神人は聞いて 塵勞の冥を消滅せんと。

佛は捷辯菩薩に告ぐらく。汝、豈寶髻を見たりと爲すや不や。此の寶髻の珠を以て如來に奉上して、無上正眞道を志願せる意は、則ち佛の原慧を供養せん爲めなり。對へて曰はく。唯然く、已に見たり、世尊。と。佛言はく。是くて、族姓子、寶髻菩薩は、恒河沙の劫に於て、恒沙の如來至眞を供養し、常に梵行を修め、無數の衆生の類を開化して三乘に立てしが、十阿僧祇劫を過して當に佛と作るを得、號して、寶成如來・至眞・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、佛世尊と號し、世界を離垢光と名け、劫を無垢と曰ふべし。其の離垢光世界は、七寶もて合成し、咸く光明を出して十方の無量の佛土を照すに、其の光は紫金にして、假し衆生をして此の光に値はしめば、一切の塵勞は悉く消滅を蒙るなり。其の土は豐樂なれども、皆諸の菩薩なれば、悉く著する所無く、異學を有つ無くして、相ひ發起する者は、普く道寶を修するなり。故を以て、如來をば名けて寶成と曰ふ。此の諸の菩薩は、皆神通を得、咸く辯才を有ち、其の土の諸天・人民は、悉く當に淳淑に平等覺に遊ふべければ、不及・無智の名を有つこと無し。其の土には、亦君主も無く、唯世尊を以て無上法王と爲すのみ。諸天・人民は、自然に化生して、女人ある無く愛欲の名無く、其の土の人民は、皆徳本を殖えて無福の者無く、諸根悉く具り、皆相好を以て其の身を莊嚴するなり。爾の時に、如來の諸の菩薩衆は、稱けて數ふ可からずして、佛の壽は十四劫なるが、初

【二〇】寶髻菩薩は、恒河沙の劫に於て、等。

異譯本には「是の菩薩の如きは、已に無量無邊の佛所に於て、等」とあり。

【二一】十阿僧祇劫を過して、等。

異譯本には「是の菩薩の如きは、未來世に於て、十阿僧祇劫を過して、等」とあり。

【二二】寶成。

異譯本には「寶出」とあり。

【二三】離垢光。

異譯本には「淨光」とあり。

【二四】異學を有つ無くして、異譯本には「初より二乘の名を聞かず」とあり。

【二五】相ひ發起する者は、乃至、修するなり。

異譯本には「常に純一大乘の法を聞くなり」とあり。

の三千佛土に當れるをば、以て如來に奉り、口に此の言を宣ぶらく。頂上の寶を以て如來に貢獻す。是の徳本に因つて、能く其の「頂相」を觀る者無きを致し、諸佛の不可思議なる聖慧の頂を逮成せんことを。と。佛は即時に笑めるに、五色の光明は其の口より出でて、央くる無き數の諸佛の國土を照し、尋いで即來り還り、佛を遶ること三匝して、忽として頂上に没したり。是に於て、會中に、菩薩の名けて「捷辯」と曰へるありしが、坐よりして起ち、偏に右肩を露し、長跪し又手して、世尊を讚歎し、頌を以て問うて曰はく。

最尊にして等倫無く、世俗の上を超え、無垢以て穢を離れたまへば、三界其の徳を稱し、其の慈は曠匹無くして、須彌山に超越したまへり、今は何にて欣笑したまへるか、願はくば慧を我が爲めに説きたまはんことを、眞諦の戒と調定とにて、性を執せる人に敬んで言ふ、我が志をして安に趣き、快き寂然を善く修めしめたまはんことを、天人の尊の此に在して、其の志甚だ堅妙なるに、何の感應を以て、哀愍して今笑むことを爲したまへるか、十方に總べて勢強く、光明の福は威を曜し、勇師子として冥を壞らんと、衆に遊んで長るる所無きこと、三界に侶ある無ければ、何ぞ能く殊なる者あらん、法宅解説を爲したまはんことを、何故にて欣笑したまへるかを、離垢の性もて遊ぶこと安く、顔色常に和悦し、名徳虚空に通じて、馳逸すること限る可からず、諸の窳冥を消除して、光明照さざる靡き安住、唯解を爲したまはんことを、何故にて欣笑したまへるかを、徳を修めて心清淨なること、金寶山の如くならんことを願ひ、常に及ばざるを訓誨したまへば、世人普く供養して、則ち最良田と爲し、衆祐の聖なること世に超えたまへり、釋師子の要を現して、演べたまふ所は虚空の如くなれば、諸天及び人民は、與に妙なる等の者無く、等しからん心は甚だ堅強なれども、祥の豊盛なるに慚愧したてまつる、巍巍たる徳の百千の、相の、華の茂り盛なるが如くに、最勝なる能仁の笑みた

【一〇】頂相。佛の「無見頂相」を謂ふ。

【一一】捷辯。異譯本には「疾辯」とあり。

【一二】殊なる者。「越え勝れたる者」を謂ふ。

【一三】法宅。佛の讚稱にして、「法藏」と曰ふが如し。

願はくば佛しゆの情じやうとする所を納受したまはんことを 是に於て意を發す悉く佛を求むることを 一切に用ふる故にて懲傷を興し 復と邪を造り放逸を爲すことをせじと 今我れ徳を立つることにて佛道を成ぜんことを と。

爾の時に太子は榮位を棄て 人の一億八萬四と 最勝の所に於て沙門と作り 意を發して佛道を志求したり 時に佛は其の志願する所を知り 最上の佛道の業を説くことを爲せるに 諸に淨法を聞きて柔順に逮り 諸の高士は無我の法に住したり と。

佛は寶髻菩薩に告ぐらく。爾の時の極妙精進を知らんと欲するか。我が身是れなり。太子の業首は彌勒是れなり。族姓子、過去の菩薩は、衆生を開化するに、以て懈り倦まずして、威徳の巍巍として量無きこと此の如くなれば、學ぶ所は日に深く、精進すること侶無きなり。是の故に、菩薩は衆生を度せんと欲せば、當に修學を念すること、彼の往世の極妙精進菩薩の徳の如くなるべきなり。と。

佛は告ぐらく。族姓子、菩薩は、四業に而ち自在を得る有つて、此の四業を以て諸佛の道法を攝取するなり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。諸魔を超越して歸伏せざる靡きなり。二に曰はく。佛土を淨めて、淨教を修せしめんと念するなり。三に曰はく。身・口・意を嚴しくして、開士の本に順するなり。四に曰はく。一切の諸佛の道品を合集するなり。是れを四法の自在の業と爲す。復、四事の、菩薩の業と爲すあり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。其の慧は、入る所の志性を曉了するなり。二に曰はく。普く衆生の根の原の、歸する所を見るなり。三に曰はく。一切の諸趣の由る所を分別し、病に應じて藥を與ふるなり。四に曰はく。明に一切の徑路を識つて、行する所に寂寞を得しめ、瞋恚を懷かざるなり。と。

是に於て、寶髻菩薩は、無數劫より限り難き百千の徳本を殖ゑたる、髻中の明月珠の、其の價此

【二五】一に曰はく。乃至。瞋恚を懷かしめざるなり。異譯本には「一には、心を知るなり。二には、根を知るなり。三には、病を知るなり。四には、能く治するなり。」とあり。

精進は、歡悦せる業首に、尋いで頌を説いて曰はく。

太子吾れ今求むる所無ければ、飲食及び衣服を用とせず、宜しく當に怖るる無き心を顯發すべし。吾れ法を以て來つて故に此に至ればなり。人中の尊の離垢光と號せる、大聖は世に現れて益する所多く、經法を講説して苦患を除きたまへば、若し人あつて聞かば甘露に逮らん。

諸佛の興出したまふことは甚だ値ひ難くして、無數の千劫にも遇はれ難く、衆人を執御して法を受けしめて、則ち世間の炬と爲つて曜きたまふに、反つて欲を以て得て放逸に、財色を貪つて自ら娛樂し、豪貴及び王位に迷ひ荒み、往き詣つて法王に見ゆることを肯てせざるなり。

財業は常無くして命は保し難ければ、佛は人の壽は朝露の如しと説きたまひ、太子自ら察すとも亦常に然るを、云何ぞ佛に聞きながら復放逸なる、仁者は曾て佛道に志せるを以て、衆生を召請して度脱せんと欲せるに、今に於て何の因にて欲に爲つて使はるるか、放逸ならば安

ぞ衆生を度す可けん、吾れ且に還つて最勝に詣らんと欲すれば、當に心を降伏して塵欲を滅すべし、仁精進を興して一切を悉み、將に後に恨んで憂惱を懷く無からんとせよ、と。時に國王子は斯の頌を聞くや、即自ら意を下して恭敬を發し、極精進を禮して足に稽首して、吾

れ今自ら仁を辱めたる罪を悔ゆ、我れ當に一切の事を棄捐して、豪貴を慕ひ國土を貪らざるべし、吾れ當に安住の所に往き至り、瓊璣を棄捐し益を見んことを求むべしとて、即一億八萬人と、各衆華を執り諸香を撃げ、俱に最勝の所に往き詣り、離垢光人中の上に見えんと、已に皆

悉く安住の所に到るや、前んで足に稽首して供養し、退いて一面に在つて佛の邊に住れり、時に於て太子は此の言を説かく、極妙精進は是れ我が師なり、心に患へ厭はず和顏にて勤めたる、此の恩徳は以て加ふる無ければ、是の供養の如きにては報ゆるに足らず、首の過を悔い

世を救護することに歸し、違失せる法王の教命に、我れ今都べて悉く自歸すること誠なれば

【二四】首。「業首」の略稱なり。

皆悉く八萬四千の菩薩を請じ會して、法の籌を行はしめて、誰れか能く太子業首の所に詣り、八萬四千歳、教化說法することに堪任する者ぞ。而して一切の苦惱に逼迫——往いて彼れに教ふと雖も、座席を接待せられず。言談すとも但罵詈・毀辱・誹謗を得るのみ。——せらるる所を患厭せざるか。と。佛は告ぐらく。族姓子、時に此の籌を行ふと雖も、八萬四千の諸菩薩の中にて、一の菩薩の、背て法の籌を受くるもの無し。時に彼の會中に、一の菩薩の極妙精進と名くるありしが、即ち坐より起ち、偏に右肩を露し、長跪し又手して、前んで佛に白して言はく。我れ能く八萬四千歳、太子業首に往來して數數相ひ見、一切の安を捨て皆衆苦を忍び、諸厄に遭ふと雖も以て患と爲さざること堪任せん。と。極妙精進の適に此の言を發するや、三千大千世界は時に應じて六反に震動し、百千の天人の虚空に住せるものは、聲を擧げて歎じて曰はく。善い哉、善い哉。無極の精進もて弘誓の鎧を被ることや。と。時に於て極妙精進菩薩は、業首太子の門前に往き詣つて住れるに、太子は方に見るや、罵詈・毀辱・患患誹謗の言語は口を衝きて其の限ある無く、土を撮んで之れを空け、瓦石もて之れを打ち、刀杖もて之れに加へたり。時に菩薩は、辱めらるること是くの如きも、患患を懷かず以て恨と爲さず、亦悔ひて還りもせず、遂に其の心を堅めて精進の鎧を被、智力益増し、大哀を興發して之れを蹙傷せり。是くの如くにするごと千歳にして、乃ち自ら前んで第一の門に入るを得たり。苦困・輕毀せらるる難に従ひ、以て患厭せざること千萬歳に至つて、轉じて復王宮の第一の庭に進み至れり。又、二萬歳にして第二の庭に至れり。是の如くにして、八萬四千歳にして第七の庭に至つて七日七夜せり。太子業首は、時に復之を見、尋いで便ち質し問はく。比丘は、何を此に來り詣つて求むる所ぞ。と。菩薩は答へて曰はく。故に來つて相ひ詣るは、名勳を相ひ稱へんとてなり。と。時に太子は、心に自ら念言すらく。怪しきこと未曾有なり。今此の比丘の戒徳重り難くして、速び能ふ者無く、諸の毀辱を被れども未だ會て懈り恥ぢざることは。と。極妙

【三】法籌(Dharma)。異譯本には、單に「籌」とあり。籌は、草の名にして、當時、此れを以て、比丘衆の數を計るに用ひたるに由り、又「數取り器」の名となれり。今は「抽籤」の意に用ひられてあり。

れを安んずることを貪らずして、一切を安んぜんことを願ふなり。三に曰はく。常に時の宜を以て道教を宣示するなり。四に曰はく。衆類の心性の行ずる所を分別するなり。是れを四と爲す。復、四あり。一に曰はく。説く所柔和にして、言辭敬ふ可きなり。二に曰はく。戒を奉ずるに、清淨なること猶日の明なる如きなり。三に曰はく。顔色常に悦んで、未だ曾て恨を懐かざるなり。四に曰はく。常に慈心を懐くなり。復、四あり。一に曰はく。心に害を懐かざるなり。二に曰はく。大哀に志すなり。三に曰はく。意に懲傷多きなり。四に曰はく。常に其の心を調するなり。復、四あり。一に曰はく。性行清淨なるなり。二に曰はく。諛語を有つ無きなり。三に曰はく。精進堅強なるなり。四に曰はく。苦樂・善惡を忍ぶなり。是れを菩薩は四法もて衆生を開化すと爲すなり。當に此の觀を作すべし。乃ち能く一切を救済することに堪任すと。

佛は告ぐらく。族姓子、往昔、過去の央くる無き數の劫の、長遠無量にして思議す可からざる爾の時に、佛あつて離垢光如來・至眞・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名け、佛世尊と號し、世界を寂然と曰ひ、劫を愛敬と名けたり。寂然世界は、豐樂安隱に、五穀平賤にして、快樂量り難く、天人學盛なりき。離垢光佛の、其の聲聞衆は、九十六億に、菩薩は八萬四千にして、其の佛の壽は三十三萬六千歳なりき。時に梵志あつて、大國王と爲りしが、王に、太子の名けて、業首と曰へるあり。端正殊好にして、見る者厭ふ無かりき。厭の年十六にして、顔貌に惑ひ、豪貴に迷ひ、荒亂・自大にして、離垢光佛に往き詣ることを肯ぜず、恭敬し稽首して禮を爲すことを修せざりき。佛は心に念言すらく。太子業首は、云何ぞ忽として、無上正眞道意もて勸助せる徳本を失ひ、本宿を識らず、而して吾我を計し、容色・財業・豪貴に荒迷し、及び自大を懷きて佛に數詣らず、既に此に來り至るとも歸命を肯ぜず、禮節を逸失するか。設し慇懃に其の本行を宣ぶることとを爲さば、必ず宿命を識り、數如來に詣り、稽首して教を受けん。と。時に於て、離垢光如來は、

【一】性行清淨なるなり。異譯本には「自心を淨むるなり」とあり。

【二】業首。異譯本には「財功德」とあり。

【三】本宿。過去世の行業を謂ふ。

従り、或は順意従り、或は所有従り、或は無所有従り、或は興盛なる従り、或は受くる所従り、或は受くる所無きにて、或は財業の治従り生じ、或は靜然として易る所無き従り取り、或は貪慕して妙顏容を求むる従り、或は惡色従り、或は色・聲・香・味・細滑の法従りして開化を致すなり。或は瞋罵・臭氣・惡味・龜堅・穢法従りして開解を得、或は共居・宿止に從つて化を受け、或は往來して數數相ひ見る従り、或は佛・法・聖衆を聞くに従り、或は歡喜従り、或は憂慙従り、或は無我従り、或は寂音従り、或は布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧の音従りして開化を受くるなり。或は衆生有爲の惱従り、或は天上世間の遭ふ所の安隱を聽聞する従りして開化を受くるなり。或は聲聞の説く所の乘教、或は緣覺乘を聽き、或は大乗を聞きて開化を受くるなり。或は常に喜んで憂惱を以てせざる従り、或は憂慙して欣豫に因らざる従り、或は貨利従り、或は踊躍して愛敬を見ざる従り、或は利を得、或は衰耗を因とする従り、或は復人あつて、四恩の因従りして開化するなり。或は内の業従り、或は外の業従り、或は眼・耳・鼻・舌・身體・手足従りして開化を受くるなり。或は娛樂歌戲を以て、或は華香を以てして開化を受くるなり。或は其の身に専ら苦患に遭ふ従り、或は常に樂む従りして開化を受くるなり。或は其の心に靜方便を得る従り、或は化作せる比丘の形像、或は復變現せる比丘尼・優婆塞・優婆夷の像従りして開化を受くるなり。或は復、佛像の容貌を現作して之れを開化し、或は釋・梵・轉輪聖王の如き俛貌にて之れを開化するなり。佛は告ぐらく。族姓子、若し若干種の變を現ぜざらしめば、其の性行を觀、其の心念に從つて開化する者は、之れを度する能はざれば、當に曉に衆生の性行を了知し、病に應じて藥を與ふべくば、度する所は乃ち廣からん。設し菩薩をして、度無極を行ぜしめば、則ち能く佛の道品の法を奉受し、亦能く神通の慧に明了にして、然る後に寂然として衆生を開化せん。菩薩は四事の法を有たば、衆生を開化せん。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく、終始の患を厭はずして、未だ及ばざるに導示するなり。二に曰はく、己

【〇五】共居・宿止。
「同居・宿泊」を謂ふ。

【〇六】四恩。

異譯本には「四攝」とあり。
【〇七】或は内の業、乃至、外の業従り。

異譯本には「或は内施を因として調伏を得、外施、内外施も亦復是くの如し。」とあり。

【〇八】菩薩は、乃至、開化せん。
異譯本には「若し菩薩あつて、四法を具足せば、則ち能く衆生を調伏せん」とあり。
【〇九】終始の患、乃至、導示するなり。
異譯本には單に「心に厭悔せざるなり。」とあり。

にして、無放逸を聖慧の原に致さば、堅要の法に逮り、無放逸を以て徳本を積累し、能く放逸ならずして、未だ曾て往古の久遠より聽聞する所の法を忘失せずして、普く能く一切の經典を執り懐き、塵勞無量の陰蓋を消化し、諸の道義に於て障礙する所無きなり。無放逸ならば、則ち能く曠野に積聚せる愚癡の冥を燒盡し、悉く能く一切の經法を將け護りて、衆相を滅除し諸根を抑制するなり。無放逸ならば、邪逕を退け捨て衆善を奉行し、力勢超殊にして具足する十力の力は、虚空の如くにして等雙無きなり。無放逸ならば、無所畏を得、一切の佛法を具足し成就して、其の原頂に歸するなり。無放逸ならば、便ち能く佛の諸の通慧を獲致するなり。と。

佛は告ぐらく。族姓子、彼の佛の、此の無放逸を説ける時に、萬二千の菩薩は、無所從生法忍を逮得したり。族姓子に於ては、憶ふ所云何。時の珍寶菩薩は、豈異人ならんかと。是の觀を作す莫かれ。所以は何ぞ。則ち汝が身是れなればなり。斯の縁に由る故に、當に此の觀を作すべし。若し菩薩をして無放逸ならしめば、乃ち宜に應じて道場を嚴り淨めて佛樹の下に坐し、如來の道に入ることを限量すべからざるを爲さんと。

佛は復寶髻菩薩に告ぐらく。謂はゆる菩薩は衆生を開化するに、若し菩薩の行にして清淨ならば、衆生の心の心に善惡を懐くを見て、便ち能く開化すること無量にして限無し。思議す可からざる衆生の類に、各無極の法を奉行せしむるに、其の菩薩は、志性調柔に、審詳に入つて、自在に幾何の人民を開化するなり。彼の、族姓子、人の根は同じからず、見る所は各異れば、是の故に菩薩は、時に隨ひ示現して、之れを誘ひ進むるなり。或は能く人あつて、禁戒を堅く正して乃ち開化を成じ、或は毀戒の因に従つて教を受くるを得、或は衣服を以て往來・交接する縁にて道化を受け、或は柔軟を以て、或は鹿麋を以て、或は毒心を懐き、或は恐怖を以て、或は苦惱を以て、或は安隱を以てして開化を受くるなり。或は言語に在いて、或は得勝従り、或は因生従り、或は志性従り、或は逼惱

【〇二】無所畏。

「四無所畏」を指す。

【〇三】一切の佛法。

「十八不共法」を曰ふ者なるべし。

【〇四】通慧。

「神通」又は「神通と智慧と」を謂ふ。「通智」と同じ。第五卷、

同名の解、參照。

同名の解、參照。

と。時に如來は、便ち菩薩の爲めに廣く分別して、此の兩句の義を説けり。斯の大慧の道の、能く當るもの莫きに於て菩薩は行する所にて、恒に生死に在つて、惡の障を逮得して潤益する所多し。と。佛の適に是れを説くや、六萬の菩薩は柔順忍を得たりき。

佛は寶髻に告ぐらく。珍寶菩薩は復問はく。何るを、菩薩は道場を嚴り淨め、佛樹に坐す。と謂ふか。と。壞世如來は、珍寶に告げて曰はく。無放逸を以てせば、道場を嚴り淨めて佛樹に坐するなり。と。彼れに於て、何を無放逸の者と謂ふか。其の佛は告げて曰はく。經典を奉行するなり。又問ふ。何なるを經典を奉行すと謂ふか。告げて曰はく。言行の相應するは、是れ無放逸なり。又、無放逸とは、自ら馳騁せず、無量なる大徳の鎧を修め、陰と合せずして五陰を越ゆるなり。布施無量にして、盡す可からざる故なり。持戒無量にして、未學を爲むる故なり。忍辱無量にして、衆苦に堪ふる故なり。精進無量にして、正士の業なる故なり。禪定無量にして、退落無き故なり。智慧無量にして、罪礙無き故なり。慈心無量にして、衆生を開化すること限る可からざる故なり。悲哀無量にして、衆生を憐傷して匱乏を濟ふ故なり。喜を行すること無量にして、法を以て衆生を歡悅する故なり。護を行すること無量にして、群生を救濟し將け養ふ故なり。生死無量にして、一切の佛道の法を長育する故なり。無量の人を化して、彼我に安んずる故なり。正法無量なるを、將に時に順隨して堅く精進する故なり。徳慧無量なるを、權方便を執つて等しく時に應ずる故なり。無量の佛に奉して、慧を具足する故なり。無量の聞を求めて、智卓然たる故なり。心無量に入つて、衆生の志性の行を親見する故なり。節徳無量にして、志閑靜に存して限有る故なり。閑居無量にして、心に將順する故なり。寂默無量にして、察する所廣普速疾に諸の通慧を具する故なり。佛は珍寶に告ぐらく。是れ無放逸の當に遊すべき所の法なり。菩薩の此の無放逸を行する者は、道場を嚴り淨め佛樹に坐するは、則ち其の義なり。又、族姓子、其の無放逸は、諸の道品の法の立つ所の本

【一〇】斯の大慧の道の、乃至、潤益する所多し。
異譯本には「菩薩、若し無礙智を具せば、名けて莊嚴と爲し、能く智の明を作さば、大利益と名く」とあり。
【一一】佛の。
異譯本に「爾の時に、彼の佛の」とあり。

に經行し、樓閣講堂も亦空に處れるに、斯の樓堂に坐して、專精に道を念じ誦誦し講論せり。彼には女人無く、亦胞胎の人無くして、皆化生なれば、女の名をすら聞かず。亦、三塗惡趣の名も無く、又、勞働勤苦の患無く、一切の衆人は、禪定の觀悅をば以て飲食と爲したり。篤信微妙にして大乘を志求したれば、彼には異乘たる聲聞・緣覺の名も無きなり。其の土の人民は皆冠幘・衣服を著し、顔色は猶天人の如くにして、假ひ出でて塵勞愛欲を學ばしむとも、尋いで皆捨離して憂累を有つこと無かりき。又、彼の如來は、亦勅して諸の菩薩等に告げて、法服を被らしめざりき。所以は何ぞ。其の人は、穢濁の心を生ぜざる故なり。而して彼の如來の形體威顏は梵天の如きを現じ、諸の菩薩衆の威儀禮節は備り悉さざる靡く、坐起安祥に經道を講説するなり。設し十方の諸佛の土に、極無く神通を變ずる菩薩あつて、天に詣つて世界を觀る者をして、諸國を通過せしめば、來つて如來に觀ゆるや、稽首し歸命して經典を説くを聽き、彼の佛土の倫匹ある無く、其の德超殊にして巍巍たること無量なるを見て、未曾有と怪み、聲を擧げて嘆歎するのみにして、乃ち捨て去るなり。佛は告ぐらく。族姓子、若し彼の如來は、諸の菩薩の爲めに道化を班宜せんとせば、虚空に踊り昇り、地を去ること六十六丈にして、微妙清淨に莊嚴せる師子の座に坐し、諸の菩薩の爲めに、上の法教を論ずるに、粗其の要を擧げ、廣くは分別せずして、屢中の義を申ぶるに、吾れの、此に於て、多く説きて殷勤なるが如きなり。所以は何ぞ。斯の諸の正士は、悉く聖慧に入れたれば、一つの章句を以ても、輒く能く百千の義に解入すれば、是の故にて、如來は約して經教を宣べて、多言を以てせざるなり。其の佛は、四つの清淨行を説くを爲せり。度無極の淨・道品法の淨・神通行の淨・衆生を化する淨、是れを四と爲すなり。

佛は寶鬘に告ぐらく。時に、彼の佛土に、一の菩薩の、名けて、珍寶と曰へるあつて、即ち自ら壞世如來に啓問すらく。何を、菩薩は生死に在つて多く諸の衆生を饒益する所に宜し。と謂ふか。

【九四】 普壞世如來。
異譯本には「一切衆生樂念如來」とあり。

【九五】 欣預。
異譯本には「喜樂」とあり。

【九六】 本を千世界に執れるに堪任せり。
佛土の模範を、千の世界に執りたるだけの價值あり。の意なるべし。

【九七】 度無極の淨。
異譯本には「波羅蜜の淨」とあり。

【九八】 珍寶。
異譯本には「寶衆」とあり。

【九九】 何を菩薩に、乃至、宜しと謂ふか。
異譯本には「云何に、菩薩は、自身を莊嚴し、亦衆生をして大利益を得しむるか。」とあり。

く、又、放逸ならずば、生死に於て、法を講ずるに倦まずして、一切の人を饒益する所多きに宜し。又、等しく諸相を集めば、生死に於て、慧を修するに宜し。諸の衆生に於て言行相應すること、を莊嚴せば、生死に於て、爲す所、時に應じて其の節を失はず、諸の衆生を饒益する所多きに宜し。一切の所有を施して惜まらずんば、生死に於て、時に隨つて開化して、各其の所得しむるに宜し。施度無極もて饒益する所多く、諸の衆生に於て清淨戒を奉ぜば、生死に於て、持戒を莊嚴して、諸の衆生を饒益する所多きに宜し。忍辱・精進・一心・智慧ならば、生死に於て、六度無極にて、諸の衆生を饒益する所多きに宜し。と。

佛は告ぐらく。族姓子、乃ち往古に去ること、央る無き數の劫の長遠量無き爾の時に、佛あつて、普瓊世如來・至眞・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名け、佛世尊と號し、世界をば名けて天觀と曰ひ、劫を、欣豫と名けたり。何の故に、其の劫を名けて欣豫と曰へるか。彼の劫の中に於て、六萬の佛の興れる時に、淨居天より無數の音を以て、佛徳——是の劫中に於て六萬の佛ありとの——を班宣するを聞きたり。時に天・世人は、皆共に此の咨嗟の聲を歌頌せしが、其に之れを聞くあるもの、歡喜せざる靡くして善心生ぜり。是の故を以て、劫を欣豫と名けたり。佛は告ぐらく。族姓子、其の佛の世界は安隱快樂にして、其の德巍巍たれば、諸天・人民は之れを觀て厭くこと無かりき。故を以て世界を名けて天觀と曰へり。其の土は微妙にして至誠に莊嚴し、雜種香を以てして其の地を成じたれば、本を千世界に執れるに堪任せり。又、其の佛土より出ず所の香熏は、則ち能く十方の無量無數の國に周遍し、栴檀の烟は其の土地を陰らせ。自然に生起して極無き蓮華を、光明耀と名け、其の蓮華の光は、常に以て大に暎きて彼の世界を照せり。人民の大小には皆神足あつて、宿德にて、居る所は香を以て樓觀・講堂・精舍・軒戶・窓牖・牀榻を爲り、茵蔕は微妙に綉縫せり。其の佛の土には、亦國邑・郡縣・村落無く、又、彼の人民は悉く神通を得たれば、虛空

むるなり。
【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

【六】能く時に、乃至、攝むるなり。

化するなり。是れを菩薩の善き權方便の大哀の行と爲す。と。

爾の時に、寶髻菩薩は、前んで佛に白して言はく。未曾有なり、天中の天。菩薩大士は、志大哀を懷きて解脱を樂はず、衆生を度せんと欲して、己れの掌を觀るが如くなるに、反つて生死に還つて惡厭せざることや。と。復、佛に問うて言はく。菩薩は何の法を遵修して生死を厭はざるか。と。佛は告ぐらく。族姓子、菩薩は二十事を有つて生死を厭はざるなり。何を二十事と謂ふか。徳本を奉行して、無極の慈に至るなり。大慈を執持して、以て大危を攝むるなり。大哀を懷抱して、弘く愍まざるを攝むるなり。衆生を開化し一切を度脱するに、常に精進を以て諸の怯劣を攝むるなり。和調の性を以て、諸の結を懷くを攝むるなり。權方便を以て、節を知らざるを攝むるなり。則ち智慧を以て、諸の愚冥を攝むるなり。一心を以て、諸の放逸を攝むるなり。能く神通を以て、諸の暢びざるを攝むるなり。聖明を以て、諸の闇塞を攝むるなり。能く時に隨ふを以て、諸の無の義を攝むるなり。其の意専ら惟うて、諸の煩惱を攝むるなり。道心を遵奉して、諸の不學を攝むるなり。而して、四恩を行じて、諸の護無きを攝むるなり。布施を以て、貧窮を攝むるなり。敬戒を以て、無禮を攝むるなり。博聞を以て、少智を攝むるなり。總持を以て、喜んで忘るるを攝むるなり。辯才を以て、頑訥を攝むるなり。上徳を以て少福を攝め、是の故に由つて乃ち大慧を成ずるなり。是くて、族姓子、菩薩は二十事を行する所にて、生死を厭はざるなり。と。寶髻菩薩は、復佛に問うて言はく。何を、菩薩は生死に於て、無數の人の爲めにとて加益を有つに宜し。と謂ふか。佛は告ぐらく。族姓子、若し菩薩をして徳を以て莊嚴せしめば、生死に於て、福を以て窮乏・危厄を潤澤するに宜し。博聞もて莊嚴せば、生死に於て、則ち辯才を以て饒益する所多きに宜し。能く其の意を執して忽忘せず、總持を逮得せば、生死に於て、一切の人をして、各各聞慧ならしむるに宜し。寶掌を逮得し、好布施を以てして自ら莊嚴し、財をば耗減せずして、此の財寶を用ひて饒益する所多

【一】 異譯本に「是くの如き五通は、漏盡きたる故と爲せども、菩薩は修習して而も漏を盡さざるは、一切の諸法を了知せんが故する爲めなり。何を以ての欲ぞ。衆生を調せん故なり。」とあり。

【二】 菩薩も是くの如くに。乃至。凡夫地に現るるなり。

【三】 異譯本に「菩薩摩訶薩も、亦復是くの如し。憐愍する故に爲つて五通を修習すれど、既に修習し已つて漏を盡すを得るに垂んとするや、而も證を取らざるなり。何を以ての故ぞ。衆生を愍む故に、漏盡通を捨てて、乃ち凡夫地の中に行くに至るなり。」とあり。

【四】 其の城とは、乃至、喻へ。異譯本には「あり。」とあり。

【五】 己れの衆を觀るが如くなるに。異譯本には「菩薩は、了了に自ら當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきことを知りながら」とあり。

【六】 二十事。異譯本には「二十一法」とあり。

【七】 大哀を、乃至、攝むるなり。

【八】 異譯本には「修する所の大徳は、衆生を調ずる行と共に成るなり。」とあり。

【九】 權方便を以て、乃至、攝

し、師子・虎狼も還相ひ食噉せるが、若し此の路を出では彼の國に至り能ひ、大城に入らば、悉く衆患を脱れて安隱無量なり。時に一人あつて、彼の國城の恩徳功勳を聞き、快樂して遠く著せるが、其の人生年に唯一子を有ちて甚だ愛重し、之れを念視して厭ふこと無かりしも、彼の國名を聞くや、子を捨てて往き、力を盡して行くことを勤め、諸の艱苦・衆難の患を忍び晝夜懈らずして陰涼に値ふを得、六藝體に備りたれば、五兵を執持して便ち越え度ることを得、其の城門に到つて門闕の上に立ち、稍復前に進んで第二門に至り、其の城門を開きて獨り住り立ちしが、即便に、生める所の一子の獨り來たるを得ざるを憶念し、子の恩情を以て、大城に入らずして尋いで更に還反り、其の子を將る來つて共に樂國に至るが如し。佛は告ぐらく。族姓子、菩薩も是くの如くに、無極の鎧を被、大精進の堅固・志性の精誠の致す所を以て大道を顯發し、淨治せる心業・淳淑の行にて諸漏盡くるを得、大哀心を興して衆生を開化せんと、其れが爲めに法を説き、慧もて生死を斷ち、無漏の究竟成就に至るを得んとするに、衆生を哀愍して救ひ護らんと欲する故に、則ち復來り還つて凡夫地に現るるなり。と。佛は告ぐらく。族姓子、其の城とは、聖慧の巍巍として諸漏已に盡きたるに喩へ、難きを涉りて遠く百千逾向なる玄に過き路を行くとは、無量なる生死の諸難に遊んで衆生を救脱するに以て拘せられざるを謂ひ、盜賊・虎狼とは、衆魔・邪見・非法の難を謂ひ、相ひ食噉すとは、三界中の陰・衰の患を謂ひ、陰涼に値ふとは、平等の行を謂ひ、六藝・五兵は六度無極・五神通を謂ふなり。其の人とは、菩薩なり。其の城に到つて門闕の上に住り外門より稍復進んで中門に至り住つて前まずとは、菩薩は而有爲より無爲に至り、諸漏已に盡き其の心明徹すれども、本願を捨てずして十方を度せんと欲すること、一子を念ふが如くなるを謂ふなり。城に入らずして還反るとは、菩薩の、一切衆生を愍傷して、中心に之れを念ふこと一子の父の如くなれば、生死諸漏の難を滅除して、法の頂に超え住して生死を出づと雖も、諸漏を盡さずして尋いで復來り還り、五趣に在つて衆生を開

や。の心意を知る意義を認むべし。【去】何を、菩薩の、過去を知る神通の清淨と謂ふか。乃至。是れ、菩薩の、往を知る。心意の清淨なる神通なり。異譯本には「云何なるは、菩薩の淨宿命智の行なるか。是の身の貪・悲・癡の因緣従りして生ぜるを了知するなり。是の身の施・戒・忍・精進・定・慧・慈・喜・捨の因緣従りして生ぜるを了知するなり。是の身の、具足を了知するなり。是の身の、具足を了知するなり。四例を因として生ぜるを了知するなり。是の身は、施の因緣の故にて財物と及び眷屬とを具足することを了知するなり。是くの如き等の智、是れを菩薩の淨き宿命智の行と名く」とあり。

【七】過去を知る神通。謂はゆる「宿命通」なり。

【去】往。

【七】「往古」即ち「過去」なり。

【七】「神足通」即ち「神境通」にして、又「如意通」とも曰ふ。

【八】「如意」の行する所に、等、異譯本には「三には、善く心・寂・謙等を了知し能ふなり。」とあり。

【八】謂はゆる神通は、乃至、住せざるなり。

此の事を致すのみ。復、己身の夾くる無き數の世を、便ち更に専ら惟ふは、布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・慈・悲・喜・護の緣なりと解することは、其の定意にて此れを逮得するなり。亦、已に其の吾我の念・心因縁の諸相の觀を受くることを致せる從り、其の相の因縁も、亦己れの爲從りして自然に受くと、思惟するなり。其の心に、自ら其の志を觀するに其の癡門に入れるをも、亦自然に受くと、此れを念識し已つて、其の色像・眷屬・勢力・名稱・豪貴・貧賤・苦樂に隨ふも、亦己身に皆自然の行として此の患を受くと爲すなり。是れ菩薩の、往を知る心念の清淨なる神通なり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の具備する。神足と謂ふか。則ち五事を以てして神足に逮るなり。何を謂うて五と爲すか。色身を示現するに、神通自在なるなり。音響を神識するに、神足悉く達するなり。心意の行する所に、神足は普周するなり。一切衆生の心に娛樂する所を、神足は皆別くるなり。見る所に親近するに、神足は咸く至るなり。坐ら十方の無數の國土を見、一切の諸佛の境界に周遍して、其の習俗に隨つて其の形體を現し、身を一切の十方の衆生に遍うして、其れが爲めに法を説き、開解して大道意を發すことを得しむる、是れ、族姓子、菩薩の行する所の神足の清淨なり。

佛は告ぐらく。族姓子、菩薩は慧眼に天眼の淨を具したれば、其の天眼は、神識に住すれども亦著する所無く、則ち天耳を致すも、本末清淨にして罣礙無きに住し、尋いで即ち衆生の心念を知つて、通達せざる無く、悉く過去・當來の處とする所を知つて、悉く能く證明すれども行する所無きに住するなり。皆諸漏生死の行を盡し、便ち神足を淨めて諸通の明徹せるなれば、謂はゆる神通は、則ち諸漏の盡きたる聖慧の門なれども、菩薩は、彼に於て、此の五通を以て自ら娛樂し、其の心は、諸漏を盡したる慧に住せざるなり。佛は告ぐらく。族姓子、譬へば居邑を去ること百千逾旬なる玄に過き路に、大なる國城あつて、其の路は艱險にして衆難計り難く、峭壁曲隘し、寇賊は抄掠

すか。或は「佛昇初利天爲母說法經の一本には「咸く三處を化す。」とあるを其の異譯本には「三界」とあれば、此の所も、「三界」を謂ふ者なるか。

【七】佛は告ぐらく。等、以下は、佛の最初に、寶髻菩薩に、菩薩の淨行として提示せる第三の神通行を明せるなり。

【七】又、五事を以て徹觀を具備するなり。乃至、達せざる所無きなり。

異譯本には「天眼の五種とは、悉く能く十方の世界を觀見し、及び十方世界の諸佛を見、亦衆生の出生・退没をも見、十方を見る所に罣礙ある無く、一切の聲聞・緣覺及び諸の天人に勝るなり。」とあり。

【七】是の比類の如くに、乃至、菩薩の眼と爲すに逮る。異譯本には「菩薩は是くの如き五事を具足して、則ち能く了了に一切の法を見る。」とあり。

【七】復、五事を以て、乃至、離きなり。

異譯本には「天耳通を得て、五種の聲を聞く。」とあり。

【七】人の心念を知るなり。謂はゆる「他心智」なり。

【七】應ずる如くに。斯の句に、即ち、説法を受け得るや否

佛は告ぐらく。寶髻、何を、菩薩は神通を成就して、清淨の行を爲す。と謂ふか。又、五事を以て徹視を具備するなり。何を謂うて五と爲すか。光明を得るに逮るを、名けて天眼と曰ふ。普く十方を照して窺冥を消し盡して觀ざる靡く、一切佛の開化す可き所を燦見して度脱する所多き故に天眼と曰ふ。遙に衆生の終始の趣く所を觀て、其の志を莊嚴するを、名けて天眼と曰ふ。皆十方の一切の形色・像貌・種類・好醜・長短を見るに、其の天眼は罣礙する所無く、意念寂滅に、其の相無爲にして、諸天・龍神及び犍沓怒・聲聞・緣覺に過ぎ、其の本末を見るに達せざる所靡きなり。是に、族姓子、是の比類の如くに五神通を致し、此の天眼を菩薩の眼と爲すに逮る、是れを菩薩の天眼の淨と爲すなり。

佛は告ぐらく。族姓子、復、五事を以て、其の徹聽を成じて聞かざる所靡きなり。何を謂うて五と爲すか。人の聲を聞き、亦復非人の聲を徹聞し、亦地獄・餓鬼・畜生の辛苦の音を聞き、一切の十方の諸佛の説法をも悉く亦之れを聞き、一切の十方の諸有の言語・音辭の同じからずして、各各別異なる億萬種の音を、皆能く聽了するなり。是れを、五事の、菩薩の神通徹聽の清淨と爲すなり。

佛は告ぐらく。族姓子、復、五事を以て、人の心念を知るなり。何を謂うて五と爲すか。悉く能く諸の天・人民・地獄・餓鬼・畜生の類の本末の因る所の心念の善惡を知り、當來の世に更に身を受くるが若きに方り、去・來・今の心に、趣く所を念ずる——決定して、來處に邪業に歸する、——を知り、衆生の心に念ずる善惡の行する所皆之れを了知し、其の心意の或は貪婬・瞋恚・愚癡を懷くを察し、其の本の行に隨ひ、應ずる如くに法を説くなり。是れを、菩薩の、諸の心念を知る清淨の行と爲すなり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を、菩薩の、過去を知る神通の清淨と謂ふか。謂はく。五事を以て古世を了知するなり。其に婬・怒・癡を受けたる者あらば、悉く自然に受くることを、熱思惟せずして

作り、不垢・不淨にして、能く煩惱を壞つて增長せしめずば、是れを正業と名く。」とあり。

【六三】正業。異譯本には「正精進」とあり。

【六四】慚愧を念じて、乃至、聽

異譯本には「諸の煩惱を攝めて、妄に起らしめず。」とあり。

【六五】其の念ずる所の者は、乃至、邪見に墮せず。

異譯本には「惡道に墮せず。」とあり。

【六六】彼れ若し。乃至、滅盡に墮せざるなり。

異譯本には「復、正定有り。一切の法の皆悉く平等なるを觀じ、若し我は淨ならば一切も亦淨なりと觀じ、若し我は空ならば一切も亦空なりと觀じ、是の觀を作すと雖も正位に入らざるなり。」とあり。

【六七】心を發す頃に、乃至、正定の淨行と爲すなり。異譯本には「是の定中に住して、一念の頃に於て、一切智を得る是れを正定と名く。」とあり。

【六八】佛は告ぐらく、等。斯の一段は以上の七覺・八道を修行する主旨目途を總括せる者なるべし。

【六九】三處。

【七〇】三不堅（身と命と財と）を指

を除いて、則ち以て諸の通慧を勸助するなり。是れを菩薩の行ずる所の正便と爲す。

佛は告ぐらく。族姓子、謂はゆる正意とは、謂はく。佛道を憶うて施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・慈・悲・喜・護を念する、是れを正意と謂ふなり。慳慳を念じて一切の塵勞の穢を聽さず。魔の便に従はず。其の念する所の者は、向ふ所の生に在いて邪見に墮せず。工に其の意を御し其の念する所を制すること、門を監する者の閉開の時を知るが如くにして、一切の諸の不善の念を除去して、思想する所に邪念を礙さざるなり。是れを正意と謂ふなり。菩薩は已に此の正意に處れども、此の中に於て、寂滅なる道性にて果證を取ることをせざる、是れを菩薩の正意の淨行と爲すなり。

佛は告ぐらく。族姓子、謂はゆる菩薩の正定とは、賢聖の行に隨つて、苦諦を知り、集諦の種を斷ち、盡諦の種を證し、道諦の種を奉ずる、是れを正定と爲す。彼れ若し正受して、己身を等とし、亦諸法を等とし、己身清淨ならば諸法も亦淨く、己身にして則ち空ならば諸法も亦空なりと、定意もて正受すること能く是くの如くならば、則ち平等に入り滅盡に墮せざるなり。是れを菩薩の正定の淨行と爲し、心を發す頃に、行ずる所平等にして、智慧の一切の聖福を具足して諸法を覺了する、是れを菩薩の正定の淨行と爲すなり。と。佛の是の正定の覺を説ける時に、千六百の天と人の弟子行者の、好んで小乗を樂み己に其の法に入れるとは、故もて無上正眞道の意を發したり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩は覺意を護ると謂ふか。將に其の心を養うて起生せざらしめんとするに、姪・怒・癡を除き、色に於ける著・痛・想・行・識を去り、三處に在いて著する所無くして獨り三界に歩み、三脫門を過つて三達智に至り、去・來・今を覩るに罣礙する所無く、衆生を開度して諸の穢垢を除くこと、猶日月の曜かざる所無きが如く、善權の智慧もて時に隨ひ三世に遊ぶを示現すること水の蓮華の如く、一切を開化して道意を發さしむるなり。是れを菩薩の覺・道の意を護る清淨の行と爲すなり。

なるか。口に出す所の言は」とあり。

【七】又、正言とは。斯の語の次に、異譯本には「凡べて説く所有らば、」の語あり。當に然るべし。

【八】慈心を奉行し、乃至、正言なり。

異譯本の此れに當るべき者には「善く有爲の相を分別し能ふ、是れを正語と名く。」とあり。

【九】亦、空と等しく、乃至、等しうするなり。

異譯本には「復次に、正語は、一切法の空・無相・無願・無生・無滅・無出・無没を説き、是れを正語と名く。復次に、正語は、有爲の苦・無常・無我・涅槃の寂靜を説き、是れを正語と名く。」とあり。

【一〇】其の正言とは、乃至、説くなり。

異譯本には「若し衆生あつて、説いて、衆生には一切壽命・士夫あること無く、一切の諸法は因縁に従つて生じ、因縁に従つて滅すること、猶子と果との如しと言はば、是れを正語と名く。」とあり。

【一一】謂はゆる正業とは、乃至、是れを正業と謂ふなり。

異譯本には「正業とは、若し業にして、能く一切の業を壞ると雖も、亦業と名けず。若し業にして、能く寂靜の因と

無常・苦・空・非身の教に等しうするなり。其の正言とは、一切の諸法に、人・壽命の等無くして、諸法は意従り縁起すること、其の種うる所に各其の實を得るが如しと説くなり。菩薩は、等しく衆生に示して、其の經法を宣べ佛道を行ぜしむるに、其の正言淨くば、則ち一切の十方の諸佛の擁護する所と爲らん。是れを正言と爲す。

佛は告ぐらく。族姓子、謂はゆる正業とは、一切の諸造る所の業を消化して、未だ曾て復と諸原基とする所を作らず。修する所の業は業の苦惱を滅し、諸べて常の業とす可きに悉く虚を立てしめ、邪業を興さず、塵勞を離れて穢濁を有つ無き、是れを正業と謂ふなり。若し菩薩あつて、此の業と及び諸法とを曉了し、諸の善本に於て造る所無くして以て徳行を修めば、是れを無作にして則ち造行を爲すと謂ひ、虚無もて空虚の宅を要すと爲し、是れを菩薩は上尊の道を行すと謂ひて、正業と爲すなり。

佛は告ぐらく。族姓子、謂はゆる正命とは、我有るを計せず人有るを計せざる、是れを正命と謂ふなり。其の正命とは、亦一切の塵勞を積集せざるなり。菩薩の正命にして則ち能く淨くば、衆生の志性を修め已つて志性を淨め、身を自ら計せず、亦壽命等をも無とし、彼・我と及び法との爲めの故に、清淨の義を行するなり。是れを正命と謂ふなり。

佛は告ぐらく。族姓子、謂はゆる正便とは、此れに於て非法の事を作さず、心に徳を捨てず。方便を作す所は、安んじて怯弱無く、正行を修せんと淳淑に之れに近く、是れを正便と謂ふなり。其の正便とは、邪便を作さず、作す所の方便を、其の言ふ所の、諸法の等と不等とを計せず、作・不作無し。との如くにし、諸法の住するが如くに、其れに順じて、行じて方便を設くる所にて、——此くの如き法を計するに、諸佛の法も亦復是くの如し。其の寂然たる如きに、因んで方便を爲すなり。——諸法をば平等にして差特を有つ無く、行する所も亦等にして、諸の衆生の爲めに、其の邪便

異譯本には「凡夫の法は因縁より生じ、辟支佛の法も亦縁より生ずと觀ぜば」とあり。

【五二】其の正見とは、乃至、吾我を見ずんば。

異譯本には「若し我と無我とに差別ある無きを觀じて、差別の見を無くせば」とあり。

【五三】若干の見を無くし、乃至平等の觀と爲せば。異譯本の、此れに當るべき者には、「一切の法に於ても亦覺觀を無くせば」とあり。

【五四】斯れを、乃至、曰ふなり。異譯本には「是れを佛法の正見と名くるなり」とあり。

【五五】漏盡きて意に解せり。異譯本には「阿羅漢果を得たり」とあり。

【五六】謂はゆる正念とは。乃至。是れを正念と謂ふなり。異譯本には「正覺とは、一切の覺を離るるなり。覺とは、名けて智慧方便にて法を觀じ法を知る」とあり。

【五七】是れを正覺と名くるには、諸法の何者は是れ垢にして何者は是れ淨なるかを觀察し、是くの如くに觀じ已つて、都べて等と不等とを覺知せず、一切の覺を離れたる、是れを正覺と名くるなり」とあり。

【五八】謂はゆる、乃至、其の説く所の者は。

異譯本には「云何なるは正語

をも亦澹泊と爲さば、乃ち正見と爲すなり。凡夫の法は成就する所無く、諸佛の法も亦究竟する無しとせば、乃ち正見と爲すなり。其の正見とは、心二つに入らずして二つを見ざる者なれば、人にも亦二つを無くして、吾我を見ずんば、則ち正見と爲すなり。若干の見を無くし、若干を以て異見を爲すことをせざる者を、平等の觀と爲せば、則ち一切の諸法に上・中・下を有つことを想念せず、一切の法に於て想見する所無くば、乃ち正見と爲すなり。其の正見とは、若干の見を無くして亦見る所も無ければ、見る所無き者を、乃ち正見と爲すなり。察す可き所の者には、形色を有つこと無ければ、諸法の形色無きを見る者を以て、乃ち正見と爲すなり。是に、族姓子、一切の法を觀じて曉ることは是くの如くならば、斯れを乃ち名けて法律を班宣すと曰ふなり。と。是の語を説ける時に、五百の比丘は、漏盡きて意に解せり。

佛は寶髻菩薩に告ぐらく、謂はゆる正念とは、諸の念と不念とを斷除し、俱に寂然を合集して、觀智の徳は澹泊の法に至つて觀する所を曉了するものなれば、諸法に於て念信する所の者を見るに、何を謂うて法と爲し何を非法と謂ふかと、諸法の各各の別異を解知すれども、相ひ親近せずして、以て是れを曉了するに、不念平等をも念ぜざるなり。況んや、信することに于てをや。未だ之れ有らざるなり。一切の念に於て念、不念無く、復と念ふ所無ければ、應・不應も無き、是れを正念と謂ふなり。

佛は告ぐらく、族姓子、謂はゆる正言とは、其の説く所の者は、身を自ら見ず、他の人を見ず。彼我に著せず。己身を危くせず、亦他をも危くせず。是れを正言と謂ふなり。又、正言とは、諸法を等しと解し、一切の法の滅盡に至るを知り、一切の法の、賢聖の法と及び解脱とに歸するを知る。是れを正言と謂ふなり。慈心を奉行して愍哀を重ね加へ、親仇をば別つ無きは正言なり。亦、空と等しく、諸法の無相・不願にして悉く作す所無く、不生不起なるを演べ、諸の法言を、一切諸法の

【三】心・意・識・乃至・離れたり。異譯本の此れに當るべき者には「諸の心・意・識・見附・覺知」とあり。

【四】尊の處る所を慕はず。異譯本の此れに當るべき者には「亦大覺・非ず」とあり。

【五】一切の法に、乃至、所を得しむるは。異譯本には「而して能く一切の諸法を對治す」とあり。

【六】八道法。異譯本には「八道」とあり。即ち「八聖道」なり。

【七】若し能く、乃至、空觀に住せざるなり。異譯本には「一切の法は、皆悉く平等なりと見るなり。是くの如き正見をば、空見と名けず」とあり。

【八】身の吾我の等。異譯本には「自ら正見有つて、是の空見に非ざればなり」とあり。

【九】亦復・身・人の望を、乃至、亦復等しければのみ。異譯本には「復・我見・衆生見・空見を有つて正見と名けず。是の三見の如きも、亦復、同見なればなり」とあり。

【一〇】凡夫の法は、乃至、曉了せば。

所の患は、悉く亦等しければのみ。空斷滅を觀ると常見もて吾有りとすることに住せず。所以は何ぞ。斷滅・常見は悉く亦等しければなり。亦、身を計せず、及び空を觀る所亦此れにも住せず。所以は何ぞ。身の吾我・空も悉く亦等しければのみ。亦復、佛・法・衆を見、空を觀る所に住せず。所以は何ぞ。佛・法・衆を見及び空を觀る所も、悉く亦等しければなり。是くて、族姓子、彼此の見有つて滅度に至ると觀る、是れを正見にて佛・法・衆を見ると爲し、其の邪見とは、顛倒を離れざるなり。若し諸見に於て、上妙・中間を想念する所無くば、是れを正見と謂ふ。所以は何ぞ。彼れが如き等觀には、則ち亦邪無ければなり。何を以て見と爲す。其の見る所の者は、當に平等と觀るべければなり。凡夫の法は以て卑賤と爲せども、學ぶ所の法は以て尊高と爲すと、是くの如き觀を見る者は、則ち邪見と爲す。凡夫の法は穢行夫だ消えざれども、菩薩の法には塵勞ある無しと、是くの如き觀を見る者は、則ち邪見と爲す。凡夫の法は以て是の漏と爲せども、學ぶ所無き法は以て無漏と爲すと、是くの如き觀を見る者は、則ち邪見と爲す。凡夫の法は衣食を求むるあれども、緣覺の法は供養を望まずと、是くの如き觀を見る者は、則ち邪見と爲す。小を有てる意は希望する所有れど、菩薩の意は希望する所無しと、是くの如き觀を見る者は、則ち邪見と爲す。凡夫の法は以て放逸と爲せど、菩薩の法は以て無欲と爲すと、是くの如き觀を見る者は、則ち邪見と爲す。凡夫の法は悉く有爲の事なれど、佛の正法は是れ無爲の道なりと、是くの如き觀を見る者は、則ち邪見と爲す。

佛は告ぐらく。族姓子、能く凡夫の法たる一切の法は皆本より淨く、其の學法も亦本より淨きを察し、諸法の悉く自然なるを觀するあらば、乃ち正見と爲すなり。凡夫の法・學する所の法も亦空なりと、法の空なるを學ぶを了せば、乃ち正見と爲すなり。凡夫の法は因縁に等しく、此の緣覺の法の如きも因縁と亦等しと曉了せば、乃ち正見と爲すなり。凡夫の法をば則ち靜默と爲し、菩薩の法

- 【三】觀覺品は、乃至、成辦するなり。
 異譯本には「作す所已に辦ずるを捨覺分と名く。」とあり。
 【四】道心を求めて、乃至、失ふ所も無きは、「菩提心を捨てざるを」とあり。
 異譯本には「菩提心を捨てざるを」とあり。
 【五】若し能く、乃至、察せば、異譯本には「諸の衆生をして、悉く法相を知らしむるを」とあり。
 【六】憂無く、乃至、過ぎたるは、異譯本には「聲聞・辟支佛乘を念せざるを」とあり。
 【七】二法。
 聲聞・緣覺の二法を指す者なるべし。
 【八】名けて覺品と曰ふ所以の者は、乃至、除去するなり。異譯本には「助菩提とは、一切の法を覺し、一切の法を知り、諸法を分別し、諸法を籌量し、諸の衆生の心性・心行を知るなり。」とあり。
 【九】是れ意覺品にして。異譯本には「是れを菩提分と名け」とあり。
 【十】衆相・因縁の著無し。乃至、忘失する所あり。異譯本の此れに當るべき者には「一切の相・一切の受に非ずして」とあり。

佛は告ぐらく。族姓子、名けて覺品と曰ふ所以の者は何ぞ。了了として諸法を曉つて達せざる所
 摩く、分別、稱量して越く所を識知し、其の威儀禮節の歸する所を解して衆生を開化せんと、彼れの
 住する所の處にて、己身に勤修して廣く道義を行じ、結縛の諸拘綴する所を除去するなり。是れ意
 覺品にして、斯れば則ち是の聖賢の行と爲せば、是の愚夫の修する所に非ず。其の聖行なるを説か
 ば、魔の行する所に非ず、是の貢高・自大の行する所に非ず。聖賢の行なれば、此れ則ち是の外道・
 異學の及び逮る所に非ず。賢聖の行する所は、色・聲・香・味・細滑の法を行ぜず。賢聖の行は、則ち
 衆衆・因縁の著無し。賢聖の行は、便ち處とする所の方面を選択する無くして、忘失する所あり。
 賢聖の行は、心・意・識・念言の行無し。賢聖の行は、見・聞・念・知・識の法を離れたり。賢聖の行は
 泥洹・造念の思想を有つ無し。一切の法に於て行する所無き者は、是れ賢聖の行なり。經典を修す
 るに、一切應と不應と、念と不念とを有つ無く、亦他の想も無きは、是れ賢聖の行なり。一切の法
 に於て悉く住する所無ければ、尊の處る所を慕はざるは、是れ賢聖の行なり。一切の法に於て錯亂
 せず、正義に順行して各各所を得しむるは、是れ賢聖の行なり。一切の法に於て未だ曾て譏訟せず、
 和同して止住するは、是れ賢聖の行なり。諸法を奉行すれども諸法の想無くして、道意を失はざる
 は、是れ賢聖の行なり。此れは、族姓子、七覺品を修する聖賢の清淨の行なり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の修する。八道法の清淨の行と謂ふか。謂はゆる八道の行とは、
 一に曰はく。正見なり。何をか正見と謂ふ。若し能く一切の諸法を奉行せば、我・不我に於て空觀に
 住せざるなり。所以は何ぞ。身の吾我の等しくして差特無きことを察すればなり。亦復、身・人・空
 を觀ることに住せず。所以は何ぞ。身・人及び空も亦復等しければのみ。亦復、人・壽命と空と別な
 りと觀ることに住せず。所以は何ぞ。人・壽命・空は心平等なるを觀ればなり。亦復、生死を有とす
 る所を觀されども、終始、空無の義を離れたり。所以は何ぞ。生死を有とする所及び終始空と見る

異譯本には「心、菩提に於て、
 退轉を有つ無き」とあり。

【云】其の意を清淨にして、
 乃至、念無き。

異譯本には、單に「四念處を修
 する」とあり。

【七】其の心、乃至、正受を爲
 す。異譯本には、單に「心を調伏す
 る」とあり。

【八】七覺品。
 異譯本には「七覺行」とあり。

即「七覺支」なり。
 【九】念覺品は、乃至、道意を
 失せざるなり。

異譯本には「終まで助菩提の
 法を失せざるを念覺分と名く。」
 とあり。

【三】法覺品は、乃至、著す
 る所無きなり。

異譯本には「取らず捨てず著
 摩他なるを擇法覺分と名く。」
 とあり。

【三】歡悅覺品は、乃至、成ず
 るなり。

異譯本には「諸の愁惱を離る
 るを喜覺分と名く。」とあり。

【三】信覺品は、乃至、至る
 を得るなり。

異譯本には「身心寂靜なるを
 除覺分と名く。」とあり。

【三】定覺品は、乃至、達至を
 得るなり。

異譯本には「解脫の味を得る
 を定覺分と名く。」とあり。

を過ぎて著する無きなり。能く破壊する無くして心常に清淨なる、是れを信力と爲し、清淨を奉行して退還せず、淨・不淨無く應・不應無きは、是れ精進力に、其の意を清淨にして群類道品の法を合集して、意無く念無き、是れを意力と爲し、其の心精進して、寂寞を修して乃ち正受を爲す、是れを定力と爲し、若く能く清淨にして、諸見に爲つて迷惑せられずして諸の徳本を奉ずる、是れを慧力と爲すなり。是れ、族姓子、菩薩の行する所の五力の清淨なり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩は、七覺品の淨を、彼れは以て發顯すと謂ふか。念覺品は、自在を得て道慧を失せざるなり。法覺品は、行する所を觀察するに、則ち時に隨ひ應じて著する所無きなり。精進覺品は、修行を勤むる所は聖礙無きに至るなり。歡悅覺品は、心に樂む所無きを成ずるなり。信覺品は、身意休息して究竟に至るを得るなり。定覺品は、志味を離れて達至を得るなり。觀覺品は、造す可き所の業を而ち成辦するなり。又、道心を求めて、亦得る所も無く亦失ふ所も無きは、是れ意覺品なり。若し將に法を護らんとするに、精進して日に新なるは、是れ法覺品なり。衆生を開化するに、以て厭倦せざるは、是れ精進覺品なり。設し法を樂んで、殷勤に思議すること樂まば、是れ悅覺品なり。若し人民を化して塵勞を滅除せんと、道を建立せば、是れ信覺品なり。若し等意に住して心壞亂せずんば、是れ定覺品なり。若し能く聖賢の慧を行じて衆人を建立することを察せば、是れ觀覺品なり。憂無く念ぜずして、若く師子の如くに聲聞・緣覺の乘に過ぎたるは、是れ意覺品なり。一切の諸法を、皆悉く清淨に此れを曉了する者は、是れ法覺品なり。其の行清淨に、身・口・意を護つて犯す所無きは、是れ精進覺品なり。淨くして著する所無く危害を離るるは、是れ悅覺品なり。嚴しく行する所を修し、當に爲すべき所の者を而ち悉く成辦するは、是れ信覺品なり。未だ曾て世の同塵に順從せずして、色像を平等にするは、是れ定覺品なり。未だ曾て二法の行に住せず、漂流を離れつつ、常に將に衆生を護り救はんとすることを見るは、是れ觀覺品なり。

不作無きなり。異譯本には「善惡に住せず。」とあり。

【七】諸垢・業邪の行を消化し。異譯本には「一切の怨務の事を遠離し」とあり。

【八】常に、乃至、勸助し。異譯本には「修むる所の定を以て、菩提に向はんことを願ひ」とあり。

【九】諸見にて識る所の衆垢を棄て。異譯本には「無明を遠離し、」とあり。

【一〇】思念を、乃至、如くにし。異譯本には「修する所の智を以て、菩提に向はんことを願ひ」とあり。

【一一】精しく學ぶことを堪任して成就を致さしむるなり。異譯本には「如法の如くにして住す。」とあり。

【一二】常に、乃至、貨を得。異譯本には「七力を具足し、」とあり。

【一三】曉了に分別して七覺意を致し。異譯本には「七覺に住するを得。」とあり。

【一四】其の意力は、乃至、慣亂せず。異譯本には「八念處を得、」とあり。

【一五】能く、乃至、清淨なる。

して、衆生の結網の縛を解散するなり。又、信力は、則ち誠信の勢を具足し、精進力は、解脱堅強にして未だ度せざる者を度し、其の意力は、慧度・知見力を解すること具足し、其の定力は、究竟なる志性の力を具足し、其の慧力は一切の衆行の原を具足す。又、信力は、能く慳貪垢穢の難を制し、精進力は、皆能く一切の所有を放捨し、其の意力は、顯す所の徳本にて道心を勧助し、其の定力は、等心にて行に違つて諸の求むる所を捨て、其の慧力は、諸べて行を修すべきには、未だ會て報を望まざるなり。又、信力は、一切の毀戒の聚を釋き除き、精進力は、慇懃に禁を修めて未だ會て違失せず、其の意力は、道心を具足して闕漏せず、其の定力は、輒ち仁和の地に歸趣することを得、其の慧力は、諸の行する所に於て皆生死を斷つなり。又信力は、諍論・瞋恚の本を離れ、精進力は、正念の行する所、忍辱に遵修し、其の意力は、道行を具足し亦法をも毀らず、其の定力は先づ自ら心を制して放逸ならざらしめて、一切衆生の類を擁護し、其の慧力は、吾我を計せず亦人の想も無きなり。又、信力は、懈怠・衆穢の塵垢を棄捐し、精進力は、皆一切の因縁を超越することを得て、惡事に迷さる所と爲らず、其の意力は、道を修行するに而も具足せしめ、其の定力は、身に休息を得て能く魔を誑げ降し、其の慧力は、諸の作す所に於て作・不作無きなり。又、信力は、諸垢・衆邪の行を消化し、精進力は、衆生を合會して之れを開化し、其の意力は、常に其の志を一にして之れを勧助し、其の定力は、常に靜寂を行じて未だ會て憤亂せず、其の慧力は、諸人の行する所の法を曉了するなり。又、信力は、諸見にて識る所の衆垢を棄て、精進力は、常に勤めて修行して博聞を求め、其の意力は、思念を嚴淨して、行する所を應ずる如くにし、其の定力は、心生ずる所無くして乃ち能く逮得し、其の慧力は、精しく學ぶことを堪任して、成就を致さしむるなり。又、信力は、常に至誠なる七財の貨を得、精進力は、曉了に分別して七覺意を致し、其の意力は、心常に整齊して未だ會て憤亂せず、其の定力は則ち七識の住を超越することを致し、其の慧力は、八邪

【一】慧度・知見力。

菩薩の十地の波羅蜜の行たる謂はゆる「十度」に對照するに、

「慧度」は空理を觀する「慧度」にして「知見力」は有相を照す「智度」を指す者なるべし。但し、異譯本には單に「解脫力を具し」とあるのみ。

【二】其の定力は、乃至、衆行の原を具足す。

異譯本には「定力に住する時は、願力を具足し、慧力に住する時は、諸の行力を具す。」として、謂はゆる「十度」中の「願度」と「力度」とを指したる形あり。

【三】其の慧力は、乃至、報を望まざるなり。

異譯本には「念力に住する時は、修むる所の善を以て菩提に向けんことを願ひ、定力に住する時は、其の心平等にて慧力に住する時は、心終まで施・戒・定の報を求めざるなり。」とあり。

【四】正念の行ずる所、忍辱に遵修し。

異譯本には單に「忍辱を修習し」とのみあり。

【五】皆一切の、乃至、迷さるる所と爲らず。

異譯本には「諸行を修する所にて、畢竟の岸に到り」とあり。

【六】諸の作す所に於て作・

てして度を得る、是れを定根と爲し、若く法界に於て礙る所無きを了し、諸の非を去る時に明法を解することに住するは、是れ智慧根なり。一切の諸の非善本を滅除して衆徳を修行する、是れを信根と爲し、諸の善本に遵つて經典に順從するは、是れ精進根に、衆善を積累して法を違失せざる、是れを意根と爲し、定意歡悅すれども、樂安を貪らずして衆生の諸徳の本を分別する、是れを定根と爲し、衆善を奉行するに其の方便に従へども、等しく道法を修する、是れを慧根と爲す。又、信もて勤修して、諸の懈廢を捨て、意に求むる所無く忘失する所無く、將に定を護らんとするに意を迷惑せざらしめ、智慧を奉行して愚癡を開化するなり。又、信を行じて邪法を棄捐し、精進を行じて吾我を放捨し、其の心專一にして貪身を度し、能く定を行するを以て諸の網たる六十二見を裂き壞り、其の智慧は一切の猗著・恩愛を蠲除するなり。是れ、族姓子、菩薩の修する所の五根の淨行なり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の行する五力の淨と謂ふか。若し此れを計せば、能く五根を立て奉行して捨てず、四魔を降し棄て、聲聞・緣覺の乘に從はずして大乘に從ひ、未だ曾て退き還らず、衆の愛欲・塵勞の穢を消し、其の願堅固にして心に自在を得、志・勇猛に存し、其の身康寧に強くして勢あるなり。諸根澹泊にして篤信を壞らざるを、是に族姓子、名けて信力と曰ふ。當に作すべからざる所は而ち之れを爲さず、其の性を制御して均調ならしむるは、是れ精進力なり。當に修すべき所の者は而ち皆之れを行ひて、其の意の勢強き、是れを意力と爲す。造る所の道業を未だ曾て忘失せずして、以て一切を度する、是れを定力と爲す。色・聲・香・味・細滑の衆念に爲つて危くせられず、一切の猶豫・衆の結に意の住する所を超越する、是れを慧力と爲す。又、信力は、他の教に從はずして受くる所あり。精進力は、當に執持すべき所を而ち忘れ捨てず。其の意力は、總持を逮得して道意を失はず。其の定力は、法を説くこと平等にして偏黨に從はず。其の慧力は、諸の狐疑を決

【八】能く五根を。乃至。勢あるなり。異譯本中、此の句に當るべき者には「菩薩摩訶薩は、五根を具足して、諸魔に爲つて破壞せられざる。故に力と爲し。乃至。身に大力を得て、善く諸根を覆ひ金剛の身を得しむる、是れを名けて力と爲す。」とありて、「力」の解釋を明白に爲しあり。

【九】諸根澹泊にして、乃至信力と曰ふ。異譯本には「菩薩摩訶薩は、信力に住する時は、終まで一切の諸惡を造作せず。」とあり。

【一〇】又信力は、他の教に從はずして受くる所あり。異譯本には「復次に、信力に住する時は他の語に隨はず」とあり。

卷の第一一十八

寶髻菩薩會 第四十七の二

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の五根の淨行と謂ふか。諸法を受けずして道義を修する、是れを信根と爲し、彼岸に度らんと願するに、人に仰ぐことを須ひざるを精進根と爲し、道意を捨てずして一切を爲す故に、是れを念根と爲し、大哀を執御して危厄を濟はんと欲する、是れを定根と爲し、能く一切の諸法を奉受して寂寞を修する若きは、是れ智慧根なり。又、族姓子、篤く一切諸佛の法を信じて道跡に順從する、是れを信根と爲し、諸佛の法を奉して未だ曾て懈倦せざるは、是れ精進根に、諸佛の法を念じ、聖義を心に存して未だ曾て忘れ捨てざる、是れを念根と爲し佛の定を修習して初より懈廢せざる、是れを定根と爲し、能く一切衆生の疑の結を除いて念願する所無き、是れを慧根と爲すなり。又、佛道を慕うて猶豫を懷かざる、是れを信根と爲し、其の性調柔に精進を順修して退還を有つ無き、是れ精進根に、徳本を勸助し長じて損する無き、是れを念根と爲し、等しく光明を演べ衆生を照して慣亂を救脱する、是れを定根と爲し、一切人の原本を分別して法を説くことを爲す、是れを慧根と爲す。一切の諸聖礙する所を超越して著する所無き、是れを信根と爲し、衆生の結を解きて諸の縛無からしむる、是れ精進根に、志をば奉行する所にて著する所無く、獨り三界に歩んで卓然として異なるある、是れを念根と爲し、諸の聖礙の因縁の由る所を知る、是れを定根と爲し、諸の著を了するに、智に猶つて達せざる無き、是れを慧根と爲す。又、違ふ所をして惑ふ所無からしむる、是れを信根と爲し、人を化して惑はず、非を捨つる時に常に悦豫を懷くは、是れ精進根に、法教に従ふ所は、常に清澄・微妙の法を行じて衆穢に迷はず道義を忘れず、日日に増修する、是れを意根と爲し、其の心清淨にして平等を奉行し、而して正受と聖慧との均平なるを以

【一】篤く一切の、乃至、信根と爲し。

異譯本には單に「諸佛の法を信するを名けて信根と爲し」とあり。

【二】一切衆生の、乃至、志願する所無き。

異譯本には單に「諸の疑網を斷するを」とあり。

【三】等しく光明を、乃至、救脱する。

異譯本には「諸の衆生を觀るに、其の心、平等なるを」とあり。

【四】一切人の、乃至、法を説くことを爲す。

異譯本には「諸の衆生の上・中・下の根を觀するを」とあり。

【五】一切の、乃至、著する所無き。

異譯本には「心淨くして濁無きを」とあり。

【六】志をば奉行する所に、乃至、異なるある。

異譯本には單に「清淨なる法を念するを」とあり。

【七】諸の聖礙の、乃至、由る所を知る。

異譯本には單に「心性の淨きを觀するをば」とあり。

を積累するを見れば、其れに代つて歡喜し、未だ曾て己れを欺し身の爲めに安を獲ず、他人の安を見れば歡悦して之れを善とし、易く養ひ足ることを知つて他の利を望まず、出家を愛樂して人に出でて學ばんことを勤め、大強なる慈を修め、常に道心を懷きて、怨親の友の樂を等しうすること虚空の如くにし、疲れ極れる者を見れば、設くるに車乘を以てして則ち無畏を以て衆生に加ふるなり。學問の者を見れば之れを敬ふこと佛の如くにし、其の未だ學ばざる者をば以て輕んじ慢らず、其の貧賤の者には施すに財業を以てし、若し疾病せば救ふに醫藥を以て命を濟ふことを得しめ、救護せらるれば恩報を行はん爲めにとて孝を以て順じ、禁戒を行ぜざる者には、能く自ら供養を修め慎んで之れに事へて其の意を失せず、恭恪無き者には勤めて之れを救濟し、世法を度せんと經て遊行する所に諸惡を犯さず、諸の世事に於て著する所無くして諸德を奉行するなり。是くて、族姓子、諸の神足の微妙巍巍たるを修めんと、行を持つことは是くの如くならば、神足を失はずして常に其れと俱に佛道を成ずるに至らん。是れを菩薩の神足の淨行と爲すなり。

異譯本の此れに當るべき者は、「口は他の衰惱の事を説かず」とあり。

化すること、其の變ずる所に從つて之れを建立するなり。已に能く建立せるも、意を發す頃に度を蒙らざる隙くして、忽然として故の如くなるなり。是れを第四に而ち得る自在と爲す。

又、族姓子、菩薩は是の四神足の行を以ひて自ら修立せば、十方の佛と共に俱に言談し、坐起・經行にも左右を離れず、諸の釋梵及び四天王・龍・鬼神・提香忍・阿須倫・迦留羅・直陀羅・摩休勒・人と非人との一切の衆生の、俱に共に相ひ隨うて、談言し說事し坐起し行歩するなり。所以は何ぞ。菩薩の神足の、微妙・巍巍卓然として異なるを有つは、往古に修行せる善法の義に缺漏ある無くして、此れを獲致せるに因る。何を、神足の往古に修行せる善法の義と謂ふか。其の身を輕便にして尊長を恭敬し、衆祐に奉事するに、趨走・給使して以て難と爲さず、謙卑・下意して自大を懷はず、口に善言を説きて衆人を悅可し、敬愛せざる莫くして自歸稽首し、禮節をば備に悉して言行相應し、其の心輕便にして慢恣を懷かず、危害の意無くして彼れに謙恭を修め、自ら其の意を伏して尊言を聽受し、教に順じて跪拜し、心を執ること柔軟にして其の志を制し、精進に修行して未だ曾て捨離せず。其の人戒の禮節を具足して、身に造り行ふ所は衆と殊特に、心懈慢せず、亦放逸ならず。其の貪欲よりして起る・我穢・瞋恚・愚癡の心、此れを彌除せんと、已に貪疾を有つ無く、瞽聵を自ら除き、志性をば起さざれば、則ち病瘳愈して衆事を度するに、負ふ所の重擔は、羸劣に因つて此の患——陰蓋の衆事——を致すに由り、其の五事を擔ふを去ることを爲し、受くる所の施には恩を以て恵み、橋道に依つて度し、大船を以て度し、四瀆を具に度して、一切衆生の類の、泛流を越ゆることに、開化する所あること超然として異なるあり。亂るる者をば之れを正し、逸るる者をば之れを定め、辯する者をば之れを立たせ、毀るる者をば之れを笑せて、迴波を礙へず。諸の狐疑を決するに、説く所殊異にして諸の動搖を安んじ、念の諸界を救うて諸の寤めざるを覺らせ、愛重する所の物を毎に以て惠施して後に悔ゆる所無く、將に衆生を濟はんとするに道意を勸助し、若し他の人の徳本

【一〇】 我穢。「貪欲を謂ふ。

【一一】 心。基本には「身」とあれども、意義通ぜざれば、明本に據り「心」と改めたり。

【一二】 瞽聵。財貨飲食を食るを謂ふ。

【一三】 五事。此の「五事」は、謂はゆる初學の菩薩の有つ「五怖畏」に、己が生活を畏

れて、布施を盡す能はざる者二に、惡名を畏れて、濟度を爲し能はざる者。三に、壽命

を畏れて、善根を盡す能はざる者。四に、惡道に墮つるを

畏れて、衆生を救ふ能はざる者。五に、多人の威徳に畏れて、教化を盡す能はざる者）

なるべきか。

【一四】 橋道に依つて度し、大船を以て度し。

異譯本には「河潤、漂葉には橋梁を造作し、或は身を以て負ひ、或は船を施して濟ひ」とあり。

【一五】 四瀆。「瀆」は濁川の義なり。而して、「賢劫慈法師品」には「猶四瀆の海に入つて、一球にして若干の別無きが如し」とあり。又、「同經、千佛名品」には「唯、天、世人の四駭瀆に墮在せるを惡む。」とあり。

以て、此の「四瀆の「四瀆流」を指す者なるを知るべし。第三卷「四流」の解、參照。

【一六】 迴波を礙へず。

法を去れば則ち輕便を達して、大哀を成ずるを致さんとして精進して輕舉し、權方便を獲已るや輕舉を誡むるなり。——を奉行するなり。是の故に因つて、四神足を成じて道の堂に昇れば、四つの自在を得るなり。何を謂うて四と爲すか。壽に於て自在なり。已に長命を得ること已に限無きに由り、短命の中に在りとも無量の壽を具したれば、衆生を勸化するに、長命の中に在つて說法を聽省させ、或は厭倦するあらば、短命を現して、法を渴仰して殷勤に義を求めしめ、在在の生るる所の天上人間にて各自在を其の壽命に於て得るなり。是れを第一に逮得する自在と爲す。又、族姓子、身口は自在なり。其の人の、身口をば逮致するに、己れの心に由つて身に猶らざれば、意を逮して形を現し、其の容貌に隨つて色像を示すなり。其の衆生の威儀・禮節・體の好醜・長短・善惡をば思惟し正定して、何の律儀を以て開化す可きかに因つて、菩薩は則ち從つて變ずる其の形貌・坐起・進止は、發意の頃に、一切の人——蜚行・喘息の人物の士にも——に身形・顔色、皆一類を爲して說法を爲すなり。是れを第二に而ち得る自在と爲す。又復、法に於て自在を得るなり。三界に於て世を度する正典を執御して、俗法を行ぜざれば、則ち習俗に隨つて普く變化を現すれども、亦、度世の慧を捨て遠からず、亦失ふ所も無く、無礙の慧に至つて、深奥の道たる十二緣起の因縁の法に而ち迷惑するものを見れば、若く天上と及び世間とに生じ、其の語言に隨ひ、無數の人をして皆律教に隨はしめ、其の好む所の上中下の願に従ひ、各其の所を得しむるなり。得る所の自在の巍巍たること斯くの如き、是れを第三に而ち得る自在と爲す。又、菩薩あつて、其の心を建立すること己れに由るを得しむるなり。其の自在とは、三千大千世界の有らゆる大海を攝めて、一海に合入して之れを建立するにも、亦往來する無くして變化を現じ、三千世界の諸の須彌山を立てて一山と爲すも、四天王及び忉利天をして合散・去來の趣く所を知らざらしめ、因つて三千世界を現變して建立を爲すに、有らゆる民人をば計つて皆數を知り、樹木・華實を虚空の中に満たしめ、其の水火を或は衆寶と

是れを名けて心と爲す。惡法を遠離する、是れを精進と名く。方便を得る故に、之れを名けて慧と爲す。」とあり。

【四】所。「所」は、臺本には「諸」とあれど、誤なるべければ、他本に據つて改めたり。

【三】又、菩薩あつて、乃至、己れに由るを得しむるなり。異譯本には「四には、願に自在を得るなり。」とあり。

佛は告ぐらく。族姓子、是の四意止に四つの精進を行す。何を謂うて四と爲すか。身の無身なるを觀じて、實の不淨を計して淨と爲す顛倒の想を棄捐し、痛の無痛なるを觀じて、苦を樂と爲す顛倒の想を棄て、心の無心なるを觀じて、無常を有常と計する想を竭き、法の無法なるを觀じて、無我を我と爲す想を捨て、遠る者は、四顛倒に於て平等を修するなれば、則ち著する所無きなり。菩薩若し能く平等を行ぜば、則ち能く一切の諸行に清淨なり。菩薩は此の平等清淨なる微妙の行を奉せば、便ち法忍の、四意斷と名くるにも、亦法忍を得るに逮るなり。何を意斷の清淨と謂ふか。行者、道法を講説するに、此の因縁——善本の法行に自然に隨順し、惡本に従はずして瑕穢を發さざる——を以て、諸の不善本の萌芽の未だ生ぜざるをば、興起せしめざらんと精進を奉するを爲し、諸の惡の適に起れる非法の事をば、尋いで便ち之れを滅せんと精進を修するを爲し、諸の善法の事の未だ興起せざる者をば、勸めて發生せしめんとし、已に興れる善法をば、益精進を加へ、其れをして具足せしめて忘失せしめざらんと精進を行するを爲すなり。又復、菩薩は、本淨業を行ぜば、能く自をば制護し善法を失はずして自在に住するを得、漸く稍長育するや、善法を顯揚し、善法已に興れば復と彼れを忘失せざるなり。族姓子、是くの如くに淨き此の四意斷を行ぜば、其の菩薩の行は心に自在を得、亂れずして精進すれば、其の淨は垢濁と俱に合せず、清淨無垢にして佛の慧に遠はざれば、則ち道教に従つて大哀を行する心心の相に、其の念する所を觀るに、精進を失はずして已に平等を行へるを見るを、意斷を得と曰ふ。所以は何ぞ。等しき安祥に従つて反邪を用ひず、安祥に因つて反邪に従はざるを以て、便ち意斷の平等三昧に逮つて、已に三昧を得るを、名けて平等の四意斷と曰へばなり。と。

佛は告ぐらく。族姓子、若し能く此の四意斷を修行せば、則ち能く四神足を具すること——貪欲を斷除せんと精進を奉行すれば、則ち道心をして靜然として穢無く、思ふ所薄歎ならしむ。已に非

【三六】是の四意止に四つの精進を行す。異譯本には「何の故に是の四念處を修するか。四つの轉倒を遠離せん爲めの故なり。」とあり。

【三七】四意斷。三十七種の道品中にて四念處即ち四意止に次いで修する道法にして、四正勤を謂ふ。意中に、決定して斷行するに由つて名づく。

【三八】又復、菩薩は、乃至、復と忘失せざるなり。異譯本には「菩薩摩訶薩は、無量世に於て善行を積集せば、是の故にて、善を性として、方便を以て惡をして生ぜざらしむ」とあり。

【三九】是くの如くに。乃至。意斷を得と曰ふ。異譯本には「若し菩薩あつて、四正勤を修して、心に自在を得て正勤せば、菩薩は爾の時に、心及び心數と大悲慈とは和合して共に行はる。故に正勤と名く」とあり。

【四〇】族姓子若し。乃至。を奉行するなり。異譯本には「菩薩爾の時に、次第に四如意足——一には欲慧なり。二には進、四には慧なり。——を修集するなり。是事念至心に菩提を念する。是れを名けて觀と爲す。大悲を修する故に覺心の輕便なる、

れに於て滅寂し、我に於て我ならずして、自然に清淨なるは、是れ中間に處るなり。人・壽命を計するには、人・壽命に於て見る所無く、清淨にして自然なる、是れを中間と謂ふ。想・無想到於て想樂する無き、是れを中間と謂ふ。顛倒して得る所の事を興す所に、而ち有とする所無き、是れを中間と爲す。虛妄愚癡は、至誠の教には悉く得可からざる、是れを中間と謂ふ。此岸・彼際に、己身を消化して著する所無からしめ、有爲・無爲に、諸の習を行はざる、是れを中間と謂ふ。生死を斷除して泥洹に去り、悉く言教無きは、是れ中間に處れるなり。

佛は告ぐらく。族姓子、其に法を觀じて、法の本より無なるを了して意止と爲す者は、法界を壞らずして其の意の自然にて意止を得るなり。彼れは法界を導いて諸法を曉了したれば、其の法界と及び人界とを計するにも、彼の法界に於て亦壞る所無く人界をも毀たずして、人界・法界の此の二事をば、等しく空界の如しとするなり。彼れの一界を以て普く諸法を見るは、慧眼を以て見たるにて、則ち法界を用ひて、佛の行ぜる所の「假使人あつて、法を選擇せずんば、彼れは則ち見る無し。」を觀じたるなり。是の故を以て、諸法は若干なるも、本よりの法無きを見、若干を觀せずして、以て法を觀じて本より無と見る若きは、肉眼の見ならず、天眼の見ならず、慧眼の見ならざるなり。所以は何ぞ。計使する眼は、想を受けざればなり。肉眼の見ならざるは、彼れの眼は生死の行に墮せざればなり。天眼を以て見る所無き若きは、彼れの眼を、放逸を行するに用ひざればなり。慧眼を以て見る所無き若きは、彼れは法を觀じて法の本より無なるを了するを爲すに、普く諸法の處る所ある無く法の住する所無きを見ればなり。已に諸法の住する所無きを見れば、則ち法を行する意は、便ち往古に誓へる所を違失せざるなり。是れを、菩薩は諸佛の教に隨つて自ら意を立て、敢て深妙の法を觀ず可きも、道心を捨てずして諸通慧すと爲すなり。是れを族姓子、菩薩大士の、本より法無きを觀ぜる意止の淨行と爲すなり。

【三四】慧眼。第二卷(十頁)同名の解及び第四卷「慧」の解、參照。

【三五】是の故を以て諸法は。乃至。便ち往古に誓へる所を遺失せざるなり。異譯本中、此の節に當るべき文には「菩薩摩訶薩は、肉眼・天眼・慧眼を以て法念處を觀ぜず。何を以ての故ぞ。是の三眼の如きは、相貌無き故なり。是の故に、法を觀ずるには則ち法眼を以てし、了了に知ると雖も而も心著せず、復著せずと雖も法界を失はざるなり。是れを佛智と名く。」とあり。

是の定を得ば、堅要の想無くして三昧より亂れざれども、其の本願にて向ひ生ずる所を示せるに従り、來つて入る所あつて復と出生するや、則ち功德の行を班宣することを以て衆生を開化するなり。是に、族姓子、菩薩大士は善き權方便もて普く經典を説くに、諸法を觀じて、本無の法に達するを意止と爲すなり。其の道を致さんと經典を遵修するあるに、若し能く道品の法を曉了せば、衆善を作らず、有常を見ず、亦著する所も無く、惡法を除かず。道心の見る所、所在に斷つこと無く、亦常をも計せず斷滅にも墮せざるなり。若し菩薩あつて、常斷滅を見る事を棄捐せば、心の平等を執つて、住する所無くして、中間に處るなり。何を中間と謂ふか。念に應じて無明を行ずることをせずして、衆冥は悉く此れを除去したる、是れを中間と謂ふ。教令を有つ無く、誨授す可き無く、無言・無説なる、是れを中間と謂ふ。要を取つて之れを言はば、無明・行・識・名色・六入・觸・痛・愛・取・有・生老・病死の憂惑の患惱の會す可き無くして、皆已に除盡したる、是れを中間と謂ふ。其の教ふる所の者に智慧を有つ無く、亦處とする所無き、是れを中間と謂ふ。其の中間なる者は、驛使を有つ無く亦遣る者も無く、是くの如き宿處に彼の有つ所を計するに、教令ある無く訓誨する者無く、是の本末を計するに、決了す可からず、未だ處とする所あらず、捉持す可からざれば、則ち著する所無く、寂寞澹泊にして忽然として已に滅する、是れを中間と謂ふ。譬へば、族姓子、呼ぶ響の出づる所は、處る所ある無きに、其に趣いて音に親近せんと、對を生じて、諦を見んとする若きは眞か僞かに墮するなり。是れを中間と爲すには、言ふ無く説く無きなり。彼れは則ち見る無く、亦、處とする所無ければなり。是くの如くに、族姓子、因にて識・色の事を興發する所、及び因の合成する所を教令する所は、二つの緣對従りす。其に中間なる者は、教ふる無く説く無きなり。是れを中間と謂ふ。因縁の合成には、義理を用ひず。其の義理とは則ち不可得なり。其れ不可得ならば、則ち重り來らず。其の重り來らざる、是れを中間と謂ふ。又、我を計る者には、則ち無我を了して此

云云」と照應する者なるべし。
 【三〇】諸の宿なる塵勞を度し已つて、「過去時に於ける有らゆる煩惱を斷じ已る」意なるべし。

【三一】其の本願にて、乃至。衆生を開化するなり。

異譯本には「願に隨ひ、往いて結業に非ざる生を生じて、欲界に生るるは、衆生の爲めの故なり。」とあり。

【三二】中間。

異譯本の此れに當るべき者には「中道」とあり。

【三三】對を生じて諦を見んとする。響を、實在る對象物として、其の實物を捉へんとする」意なるべし。

自ら念じて言はく。法起れば則ち法を起し、滅すれば則ち滅す。本末を計するに、亦、我身・人・壽命を有つ人と非人と無く、生・老・病・死と終没するは、趣く所なり。此の諸法に於ては、諸の法の合會せるにて、其の合會に因つて習俗を爲せるものなれば、設し縁の合する無くば、則ち此れを有つこと無し。其の習樂の因従り縁の會するを成じて、則ち善本と及び惡本とを興せども、無常に歸して、縁會を有つ無きを以て、無習従りして諸法を起すことあらず。と。彼れは觀することはくの如くにして、諸法の歸趣する所を見るに、亦有る所無く、空・無相・無願にして、作る所の功德及び無功德も、彼れの諸行する所は幻の如くに無常なるを曉了し、當に精進を奉じて、設し因縁を興さば、十の尊行の極上無蓋なるを有つて因縁を除去せんと、大法に志すべきなり。何を謂うて十と爲すか。身淨くして穢無く、諸相・種好・無能見頂にして、一切諸の侵枉する所を超度するなり。志性清淨にして十事を具足し、其の心清淨にして正行を具足するなり。六十億音もて口に説く所は、衆生を悦す可きなり。其の心淨ければ、常に慈仁を懷きて、一切を愍念して害を加ふる所無きなり。

其二 其の意常に定つて未だ會て亂るること有らず、辯才清淨にして、講說する所あらば法義に應じて、辯は盡す可からざるなり。大慈清淨にして、衆生を勸化して、一切泥洹の界を樂ましむるなり。大哀清淨にして、央る無き數の劫に生死を厭はざるなり。十種の力を淨めて、衆生の根原と念する所の各各不同なるを曉了するなり。清淨無畏にして、無失數の法と衆生の積聚とを分別し執御するなり。諸佛の不共の法を具へんと欲するは、去來・今の慧三世に礙無く、諸佛の法をば淨用すること能く自在にして、聖慧に歸する故なり。是れを十と爲す。彼れ已に此の尊妙・極上・無蓋の大法たる十事の行に速らんと稱量思惟するや、以て厭倦せずして功德を積累し、而して無徳の行に毀墮せずして、殷勤に精進するなり。何を諸法の根原の來たる所に、處る所無からしむと謂ふか。住する所の諸の宿なる塵勞を度し已つて、萬物一切無常なるを曉らば、便ち能く無常三昧を興成するなり。

復是くの如し。」とあり。

【二三】菩薩は、乃至、爲すなり。異譯本には「云何に菩薩は法念處を修するか。」とあり。

【二四】法起れば則ち法を起し。乃至、此れを有つこと無し。此の一段は「二因縁」の思想を曰ふ者なるべし。

【二五】諸法の歸趣する所を見るに。乃至、無常なるを曉了し。此の一段は「四眞諦」の思想を曰ふ者なるべし。

【二六】其の意常に定つて、乃至、盡す可からざるなり。異譯本に「常に禪定に入つて、四無礙智を淨むるなり。」とあり。

【二七】十種の力を淨めて、乃至、曉了するなり。異譯本には「十力を淨むるは、衆生の諸根の利鈍を知らんが爲めなり」とあり。

【二八】清淨無畏にして、乃至、執御するなり。異譯本には「四無畏を淨むるは、衆生の障、不障を知らん爲めの故なり。」とあり。

【二九】諸佛の不共の法。異譯本には「十八の法」とあり。即ち十八不共の法なり。

【三〇】何を諸法の、乃至、處る所無からしむと謂ふか。此の一句は、先の「因縁を除去せんと大法に志すべきなり。」

だ會て停住せざること、猶なほ獼猴びこう及び河の駛水しすいの如く、亦油燈の光曜の出づる所、忽然として遠く遊ぶが如くに、身形を有つこと無くして退轉し易く、諸界に貪悟する六情の患をば以て屋宅と爲しつゝ、須臾に變異して各應ずる所に隨へば、心は處を有つこと無くして獨り遊行するのみにて、堅要を有つ無く亦不要も無し。と、寂然を獨り觀するもの、是れを心に心無しと觀する意止の清淨と謂ふなり。心慧に入る所にて、心の法界は慧心の住する所なれば、其の明は本よりの淨にして、鮮潔にして穢無く、心の眞諦なるを知るなり。心に現在目の見る所を了すること、心法平等にして、慧も亦心の如く、心は三世を等しうするなり。已に能く平等なれば、便ち眞正なる心慧にて、自然に能く護持する無くして、不可見を觀るを知るなり。是れを心に心無きを觀じて意止と爲すと謂ふなり。其の本淨を計するに、則ち自然と爲し、心亦本より淨なれば、衆生の心を了するにも心淨を以てするなり。故に人民を開化せんと、其れが爲めに法を説くにも、能く己れの心の自然を解知するを以て、一切衆生も亦復自然とするなり。若し能く心の是くの如きを分別せば、其の心の相を見て、爲めに法を説くにも、心相の自然なるが如くに、衆生の心相も自然とするなり。此くの如くにして、若し能く斯の相に達せば、其れが爲めに法を説くにも、己れの心は則ち空なれば、衆生の心も亦復空なりと爲すなり。已に此の空なるを解すれば、其れが爲めに法を説くにも、己れの心を等御するなり。若し能く等御せば、而ち法を説くことを爲すにも、己れの心は則ち等なるなり。已に己れの心を等にすれば、則ち衆生を等にするなり。已に衆生を等にすれば、則ち諸法を等にするなり。已に諸法を等にすれば、則ち諸佛を等にするなり。此の眞諦を曉らば、其の心をして貪欲を離れしめずとも、欲に處らざるなり。心已に止まば、則ち法界に入り自然に趣いて、心住する所無く法に於て動くこと無し。是れを菩薩の、心に心無きを觀じたる意止の清淨と謂ふなり。

佛は告ぐらく。族姓子、菩薩は法を觀じて、本より法無きを知るを、意止の行と爲すなり。即ち

【二四】寂然を獨り觀するもの。異譯本の此れに當るべき者は「能く是くの如き無量の心を攝めて、一處に住して不動・不轉・不漏・不錯・不亂・不定ならしむるもの之れを舍摩他と名く」とあり。

【二五】心法平等。謂はゆる

【二六】慧も亦心の如く。謂はゆる「慧解脫」を曰ふ者なるべし。

【二七】其の本淨を計するに。

乃至。亦復自然とするなり。

異譯本の此れに當るべき者は「菩薩摩訶薩は、是くの如くに觀じ已つて、善く一切衆生の心性を知り、知り已るや、應ずる如くにして法を説くことを爲すに、自の心性を知るが如くに、一切衆生の心性を知ること、亦復是くの如く」とあり。

【二八】等御。平等寂靜に制御する意なるべし。

【二九】心。臺本には「身」とありたれど、「心」の誤記なるべしとて改めたり。

【三〇】等。等は「平等」の義なり。

【三一】已に己れの心を等に、

異譯本に「自心の平等なるを觀するが如くに、一切衆生心の平等なるを觀すること、亦

くして、其の心は寂定なり。其れの持つ處を求むるに、何の所より起るか。則ち更に思惟するに、心は終より從り起れど、尋いで復思惟するに、其の心は因縁と異なる異ことなりと爲さんか。と。即ち復自ら了するなり。設し因縁は異にして其の心は異らば、則ち二つの心あり。設使因縁は是れ心にして心は是れ因縁ならば、是の故を以て、心は心を見ず。心を計すれば、心を見ざるに非ざるも、猶虚偽無實の諸塵の虚空に住せるが如く、利刀もて指を傷くるに、本より時に瘡を爲せど、指の瘡已に差ゆれば患苦する所無きこと是くの如し。是の故を以て心に心を見ずして、心に見る所の者は則ち見らるゝこと無きなり。應に觀すべきことは是くの如くなれば、心の住する所の處にも、亦罪を起さず、斷滅を見ず、常存を念ぜず。亦身——身は墻壁の因縁の如し。——を有とすることも無く、亂れず離れず。弊傷をも亦有とせずして、是れ亦是の心と爲すものと異なるを有たざるなり。心を持つことは是くの如くならば、心動いて法を爲すとも、心は住する所無く亦行する所も無くして、心に心の相を見る可からざるは自然なり。是の曉了に見る所を作して、若し茲に見る所を離れずんば、其の心は寂然として明に本無きを識るなり。是れを菩薩は心に心無きを觀じて意止と爲すと爲すなり。又、族姓子、設し心起らずして見る可からずんば、則ち想を有つこと無く、應・不應無く、亦輕慢も無ければ則ち放逸せざるなり。是れを心を觀じ、本より心無きを知つて意止と爲すと爲すなり。又、心に色無きが如く、其の因縁の合と及び辯才にも亦復是くの如く、徳本に色無きこと心の如く、無爲の徳にも亦色無く、觀する所の道心にも亦復色無し。設し道心と及び勸助とをして、形色を有つ無からしめば、道も亦是くの如くに悉く有つ所無きなり。是の故に、言うて「其の心の如き者をも行にも亦之くの如くに計して、勸助・道心の若きも亦如し。其の道心の如くに人心も本より淨く、亦復道の如くに道心は本より淨く、一切の諸法も亦復斯くの如し。」と曰はん。此くの如くに心をば曉了して、普く入るを、是に菩薩は心に心無きを觀じて意止と爲すと爲すなり。衆患に惱されつゝ未

【二】其の心は、等。
異譯本には「是くの如き心と縁とは、異と爲すか。異ならざるか。」とあり。
【三】設し因縁は、等。
異譯本には「若し心は縁と異らば」とあり。
【三】設使因縁は。乃至。是くの如し。
異譯本には「若し心は即、縁ならば、應に復能く自心を觀るべからず。猶指端の自ら觸る能はざるが如くに、心も亦是くの如し。」とあり。

法の久しく存するを得ざるを曉了し、萬物の焰と生じて忽ち没するを察し、一切の法の生ずる所は影の如くにして、何所より來つて尋いで散滅するかを視、諸法を本より手掌を瞻るが如くに觀じて、何所より來り去つて何所に至るかを、即便に之れが從つて來たる所無く去つて至る所無きを了し、以て諸法を觀じて以て患を爲さず、普く一切を見て篤く信じて休息し、此れに因つて道を成ずるなり。以て道を成ずれども亦得る所も無く、復と退還もせざるなり。所以は何ぞ。能く一切衆人の根本の興る所にては、則ち滅盡を求むるものなることを遠見したるにて、己れの身にて滅を求むることを爲さざるを以てなり。是に族姓子、菩薩大士の、善き權方便にて大哀を執御せんとて、痛痒を觀じて、本より痛無きを了する意止の行にて諸の見る所を消すや、明に此に於て三界の諸痛に遇ふことを以てせず、滅にて證の際を取ることを識るなり。彼れは衆の痛に於て佛を觀じて、本より諸痛を曉了し寂默恬澹として本より有つ所無く、亦患に遭ふことも無きを歎するなり。永く患に遭ふこと無きは、諸法は皆空にして吾我を離れ、徒に合會を見るは因縁に依れるにて、悉く主ある無く亦吾我も無ければ、諸の見る所を捨て長育する所無ければなり。と。彼れの觀ずること是くの如きは、則ち眞諦の見にして、因縁にて合する所は皆得可からざればなり。已に不可得なりとせば、便ち是の察——因縁の空なる如くに、是れより興立する諸法も亦空なり。——を作さん。已に空の義に達せるは、乃ち痛に本より痛痒無しと觀ぜざるを、意止と爲せるに爲つてなり。謂はゆる寂寞にして身の澹恬なるは故諸義を選擇したる道の聖慧なればなり。是れ族姓子、菩薩の、身を觀じて、痛痒に本より痛無しと了する意止の淨行なり。

佛は告ぐらく。族姓子、菩薩の、心を觀じて、本より心無しと了するを意止の行と爲すは、道心を立て、以て心を立つるを得ればなり。己れの意の慧を以て其の心の本を求むるに、内の心を見ず、外の心を見ず、内外にも住せず。其の心の本を案するに、五陰に見ず、諸種に無く、諸入に無

異譯本の此れに該當すべき者は「菩薩は爾の時に、一切の受の無常、苦、無我なるを觀じて、樂を受くる者の即是の苦なるを知るを見、苦を受くる者の繼の如く瘡の如きを見、不苦不樂受の是れ寂靜ならざるを見、樂受は即是れ無常なりと觀じ、苦受は即是れ空無にして、不苦不樂は即是れ無我なりと觀ずるなり。」とあり。

【〇七】已に空の義に達せるは。乃至。道の聖慧なればなり。異譯本の此れに當るべき者は「菩薩摩訶薩は、是くの如くに觀ずる時に受念處を成じて、能く身心をして、皆悉く寂靜ならしめて、一切の行を知るなり。是れを一切智と名く。」とあり。

【〇八】道心を立てて、等。異譯本には「菩提心に住して、」とあり。

【〇九】己れの意、乃至、求むるに。異譯本には「是の心性を觀ずるに」とあり。

【一〇】五陰に、乃至、寂定なり。異譯本の此れに當るべき者は「陰中の心を見ず、界中の心を見ず。」とあり。

ければ則ち非作無く、已に諸の作に於て作・非作無ければ正眞の法を致して諸法に等しうし、已に諸法に等しうすれば便ち一切に通慧なる智に速るなり。是れ、族姓子、菩薩の、身を觀じて本より身無きを了する意止の行の淨なるなり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の痛痒の意止と謂ふか。謂はく。痛痒に本より痛痒無しと觀するを、乃ち意止と爲すなり。諸の苦痛を觀て、皆衆生の諸べて患難に在るを見、之れが爲めに涙を雨し大哀を達成して、是の惟念を作すなり。衆人惱に在るも、若し安を得ば乃ち痛痒無からん。と。則ち一切の危害を斷除せん爲めに、乃ち痛を觀じて本より痛無きを知る意止の行する所を致し已つて、痛痒を滅し、諸の群生の爲めに大徳の鎧を被り、先づ自ら身の非法の行を消し、亦想念をもせずして、己れの痛痒を滅し、若し痛に遭ふものあらば、普く一切の爲めに大哀を執御し、永き安を示し長く衆患を消さんが爲めに、食欲の人の爲めには、大哀を興發して先づ己れの貪を除きて欲に縛られず、設ひ身は苦に遇ふとも以て難と爲さず、瞋恚の人の爲めには、大哀を興發して己れの恚の結を斷ち、彼れ則ち不苦不樂の痛痒を觀見するなり。愚行の人の爲めには、大哀を興發して己れの癡の縛を滅するなり。彼れは痛の樂を觀じて則ち著する所無く、諸の結を消壞して自由に安く、若し苦痛を得とも以て憂慙せず、諸の爲す有るを捨つれば、則ち能く無苦樂をして、以て愚癡を壊らしむることを邊修するなり。若く樂の痛に遇ふとも積聚する所無く、若く衆患に遭ふとも身の非常なるを了し、苦の痛痒を觀じて痛の無我なるを察するなり。彼れは樂の痛に安隱を修し行ふものを觀、其の苦の痛には則ち瘡病と爲すものを觀て、是れの故を以て名けて不樂不苦と曰ふなり。——設使有つ所の安樂を觀見せんに、皆無常に歸し、其に衆苦ありとも、苦を計すれば不苦不樂にして、則ち亦我も無ければなり。と。——菩薩は、若く諸の安樂の事を見て、明に一切は本より則ち無安なるを識り、是に痛痒を觀じて痛の無きこと本にして、適に起るや尋いで滅するを知り、諸

【〇〇】已に諸法に等しうすれば等。
異譯本には「若し是くの如き諸法の平等なるを得ば、是れを一切智と名く。」とあり。

【〇一】何を菩薩の、等の時に、次に受念處を觀するに、とあり。

【〇二】衆人惱に在るも、乃至、痛痒無からん。
異譯本に「畢竟の樂は、一切の受を斷するなり。若し人、能く一切の受を斷せば、即是れ常樂なり。」とあり。

【〇三】己れは蓋本には「已」とあれど、意義通ぜず。「已」の誤植なるべければ、改めたり。

【〇四】彼れ則ち。乃至。縛を滅するなり。
異譯本には「若し不苦不樂を受くる時は、無明の心を離れて、捨心を生ずるなり。」とあり。

【〇五】彼れは痛の樂を。乃至。邊修するなり。
異譯本には「是の故に菩薩は、樂受を受くる時に貪著を生ぜず、苦受を受くる時には瞋恚を生ぜず、不苦、不樂を受くれば無明を生ぜざるなり。」とあり。

【〇六】若く樂の痛に遇ふとも。乃至。亦我も無ければなり。

有常なる無上正眞と謂ふ。」と爲すなり。と。

佛は告ぐらく。族姓子、菩薩は身を觀じて本より身無きを了するを、則ち意を一切の人身の皆悉く本より空なるに止むと曰ふ。身の空なるを解するを以て、意は著する所無く、衆生の身を觀じて佛身を立在して、當に是の觀を作すべし。若し如來の身にして諸漏を有つ無くば、吾が身も亦然りと。諸法を察して道義を奉行し、佛の教を失はずして無漏身を得、而して衆生を觀じて諸相を分別するに、無漏身——無漏清淨にして本際も亦淨き、——を以てし、其の徳本もて諸行を興立し、徳本を勸助する如きにも、亦諸漏無く、能く無漏法を速成する者を以て能く諸漏に住するなり。何をか諸漏と謂ふ。一に曰はく。欲漏なり。二に曰はく。有漏なり。三に曰はく。見漏なり。彼れ欲漏を斷ぜば、設ひ欲界に生るとも衆生を開化するなり。若し有漏を斷ぜば、生死に遊在すとも、諸漏を受くる所に於て人民を教授するなり。又、見漏とは、則ち是れ無明の癡冥なる漏なり。菩薩は彼れに於て、精進して懈らず、精進を究竟して其の根原を抜くなり。彼れ若し身を觀じて意止を奉修し、往古よりの諸の不應の行を超越し、衆穢を離れて澹泊に遊はゞ、乃ち身を觀すと爲す。便ち度する所無く亦生する所無くして、則ち爲す所無くば、乃ち身を觀すと爲す。假使己れを觀じて、身有るを見ず、亦察する所無く、身を食ることを捨てば、吾我を計せず。己に吾我無ければ則ち食る所無く、己に食る所無ければ則ち諍ふ所無く、己に諍ふ所無ければ則ち殃疊無く、己に殃疊無ければ法忍を速得し、己に法忍を速得すれば則ち歸する所無く、己に歸する所無ければ則ち卒業無く、己に卒業無くして自大に住せざれば則ち法に住し、己に法に住すれば非法を行はず、法に順じて行すれば常に法と俱に、道法を修すれば則ち法慈に逮び、己に法慈を受くれば則ち法音を聞き、己に法音を聞けば界の音を聞かず、己に界音を寂なれば便ち三昧に逮び、而して己に正受すれば則ち審諦を觀じ、己に審諦を觀すれば則ち想ふ所無く、己に想ふ所無ければ則ち作す所無く、己に作す所無

【九六】菩薩は身を觀じて。乃至。止むと曰ふ。

異譯本には「復、菩薩あつて、身念處を修めて」とあり。

【九七】衆生の身を、乃至、立在して。

異譯本に「一切衆生の身は、畢竟じて當に是れ如來の佛身——なるべしと觀察する」とあり。

【九八】見漏。

異譯本には「無明漏」とあり。

【九九】彼れ欲漏を斷ぜば。乃至。教授するなり。

異譯本には「菩薩、了了に三漏を知り已らば、衆生の爲めの故に欲界に生るとも、亦復欲漏に爲つて汚されず。色・無色界にても、亦復是くの如きなり。」とあり。

に身無きを觀じ已つて、淨き二法を得るなり。何を謂うて二と爲すか。一には、無常を見るなり。二には有常を察するなり。是の身は無常なれば久しく立つことを得ずして、老・病・俱に合會して當に死に歸すべし。と。已に此の義に達するや、身の故を用つて邪業を造らず。身を貪らざるを以て、則ち堅要の行たる三つの堅法——一に曰はく、身の要なり。二に曰はく、命の要なり。三に曰はく、財の要なり。——を修し、此の身は無常なれば、一切の衆生は以て貴重と爲せども、何の益する所ぞや。當に弊傷を行ふべし。とするなり。何をか身の要と謂ふ。身に惡を犯さず、謙卑恭順して博智に稽首するなり。何をか命の要と謂ふ。三寶に歸命し、十徳・六度・四等を奉修するなり。何をか財の要と謂ふ。己れを捐て、布施して諸の貧乏に給するなり。身は我が有に非ずして、口の言ふ所には皆多く失あり、従つて諛諂・僞辭・不正を致す。是の故を用つて、悉く此の行を棄て、復と非を爲さず。已に身無きを見壽命をも保せざれば、假使害を被るとも惡事を犯さず。身の非常にして分離の法爲るを曉れば、非宜を犯さず。一切の所有を施して貪る所無し。已に身無きを解すれば、得る所の善徳の功勳の顯著なること、稱げて限る可からざるなり。何を有常と謂ふか。設使身を觀じて身無きを了せば、時を以て、心の了する所の慧にて觀する一切智を攝取して、佛敎に違はず、法言を失はず、衆衆を壞らず、群黎を勸化し人民を執御するなり。是れを有常と謂ふ。常と言ふ所以は、盡く可からざる故なり。言ふ所の盡くる無しとは、無爲を謂ふなり。道と合同して、無終無始に玄妙に永く存する、此れを無爲と謂へば、其の無爲をば乃ち常と爲すのみ。菩薩は、彼の諸の徳本を以て諸の通慧に觀するに在いて無爲に至る、是れを有常と謂ふなり。常と言ふ所以は、空・無相・無願の故を以て菩薩の道を修するに、常に空行を奉し無相を觀じつゝ無願に著せずして、普く一切の精進の行を具する、是れを有常と謂ふなり。言ふ所の常とは、虚空の如きを謂へるにて、菩薩の等心の、空の如くにして異なる無く、思想を有つ無き、是くの如き行者を、乃ち「菩薩を、是れ

【九】菩薩の第九地に於て具する謂はゆる「十徳」は、此所に適應せず。今は「十善」を指す者なるべきか。

【一〇】四等。「四等心」の略にして、即ち「四無量心」なり。

【一一】設使身を觀じて、乃至聖衆を蒙らず。

異譯本には「無常を觀じ已れば則ち常身を得、無常に因るが故に功德身を得、無常に因るが故に佛種、法種、僧種を斷せず」とあり。

【一二】觀。此の觀は「觀達」の義なるべし。

【一三】常と言ふ所以は、乃至有常と謂ふなり。

異譯本の此れに當る句には「一切智の行する所の處は、是れ空、無相、願なり」とあり。

の菩薩は、此の智慧を以て、有る所無きを解しつゝ、皆塵勞に入つて親しく愛欲を化し、諸の生ずる所の處に在つて諸界に智慧を建立し、諸の境土に遊んで皆境界を了すれども、誠諦の智慧なれば、彼中を度せず中間に處らざるなり。其の慧は、普く入つて十方を見るに礙する所無く、用ふるに蔭蔽無く、致すに淺際無く、誠諦の慧の、明に一切諸法の本末・部黨・時節を曉るを見るなり。已にして能く眞諦の智慧の義の歸する所を識別するに、應不應無く、合無く別無く、懈無く進無く、雙ならず隻ならず。諸法を計するにも亦應合無きなり。又、族姓子、菩薩の若し智慧の事を行ずる者にして、慧を以て舍と爲さば、則ち禍堂・篤信・名徳・道法の室を成じて維持に住し、分別の智辯も一切備るは、悉く慧の事を具足したればなり。是れ族姓子、菩薩の智度無極の清淨の行を奉修したるなり。と。此の語を説き已るや、彼の時の會中の二萬二千人は皆無上正眞道の意を發し、八千の菩薩は無所從生法忍を速得し、五千の比丘は漏盡きて意に解し、一萬の天子は塵に速り垢を離れて諸法の明淨かりき。時に諸の天子は、聲を擧げて歎じて曰はく。若し衆生あつて、是の諸度無極の清淨の行の道法門を聞くことを得るに速ばゞ、則ち諸佛に授記せらるゝ所と爲らん。何に況んや、聞くことあつて能く受持し誦讀誦し奉り、行ずること上の教の如くなるものをや。と。

佛は告ぐらく。寶鬚、何を 菩薩の、佛の道品法の清淨の行と謂ふか、自ら其の身を觀じて本より身無きを知り、是れを意の止と爲して、則ち二事を以て其の志を立つるなり。何を謂うて二と爲すか。一に曰はく。荒穢なるを察するなり。二に曰はく。清淨を觀する行なり。何を荒穢と謂ふか。此の身は無常にして不淨を積み滿し、是の身は薄力にして劣つて勢無く、是の身は化立せること傾ける危屋の如きなり。何を淨を觀すと謂ふか。吾れ當に此の不淨の身を以て、精勤して空を解して如來身・法身を得、法身は巍巍として徳身は限無きに、諸の衆生の爲めに色像を示現して一切を悅可せん。と、是に族姓子、身の二事を觀じて、以て其の意を立つるなり。又、族姓子、菩薩は身に了

【八七】一萬の天子は、等。

異譯本には「十千の天人は須陀和果を得たり。」とあり。

【八八】菩薩の、等。

異譯本には「云何なるは、菩薩摩訶薩の淨き助菩提の行なるか。」とあり。

【八九】自ら其の身を、乃至、意の止と爲して。

異譯本には「身念處を觀するに。」とあり。

【九〇】一に曰はく。乃至。觀する行なり。

異譯本には「一には、不淨の行なり。二には、淨の行なり。」とあり。

の聖機として世智に超踰し、悉く衆生の志性と行する所の形色の變異との、解し難く速り難き深奥の義を見るなり。諸見を消化して、衆邪の諸べて住する所の處に於ける聖礙の事を離るゝなり。
 八二 聖慧に入つて、普く周に衆生を法の慧に入るゝなり。明に 聖藏の義の歸する所を解し、眞の入る所を了して、其の明の照す所に、錯亂する所無く亦礙る所無きなり。時節と樂ふ所の無量なるを觀察するに、見る所の諸事は、咸く皆了了として遠失する所無く、覺識誠諦にして實に滅盡せざるなり。彼れの觀察する所は一切拒ぐ無く、以て一行にして所行無きを用ひて、皆衆生の奉行する所の威儀・禮節・世間の人民の心志の趣く所を見るなり。菩薩にして悉く見ば、世を離れずして諸の世の境界を超越することを習ひ、尙未だ佛の土地を成就せずとも、皆一切因縁を作る所を越えて衆生を開化し、諸行に過ぎて普く衆徳の行を究竟し、廣く一切の因縁の心行に度つて、皆衆生の心の念する所を見、世間の法を護つて周遍せざる莫く、世俗の行する所を捨てず衆生の念に信入して、其れを計する智慧に卒暴ある無く巖險を犯さず、諸根寂定にして未だ曾て疲倦せず以て亂を爲さず、永く聖慧を觀じて常に徳と合し、佛樹に詣つて道場に坐し、衆魔を降伏して外道を捨て、受くる所あるを行すれば聖障普く徹すれども、亦取する所も無く、大聖の建つる所にて諸佛を得て衆生を可悦することに住すれども、悉く定慧も普く衆義に入つて一切の諸法の皆同味を見る、權方便の智度無極を執れども彼岸の限量す可からざるに越ゆ。此れを乃ち名けて智度無極と曰ふなり。皆能く一切の因縁を曉了して興す所の衆想の瑞應怪變は、心行の念する所に逆度を得しむれば、是れ則ち名けて彼岸に度ると曰ふなり。又此の慧を計するに、二つの清淨あり。一に曰はく、無礙なる慧想の清淨の行なり。二に曰はく、嚴の淨にして、能く人の其の惡相に當るもの有る莫きなり。復、二つの淨あり。一に曰はく、顛倒を淨除せるなり。二に曰はく、諸見を淨去せるなり。又、彼の菩薩の行する所の智慧は、普く聖明に入らざる靡く、備に悉く衆生を曉了し經典に達識するなり。其

礙なり。十には、世諦を知る
 こと無礙なり。十一には、第一義諦を知る事無礙なり。
 十二には、諸の衆生の利鈍を知る事無礙なり。とあり。
 【八二】 聖慧。善又は無漏の智慧を聖慧と曰ふ。今は、無漏の智慧を謂ふ者なるべし。
 【八三】 聖藏。「佛の教法」を指す者なるべし。

【八四】 此れを乃ち、等。
 異譯本には「是の故に、名けて般若波羅蜜と爲す。」とあり。
 【八五】 是れ則ち等。
 異譯本には「是の義を以ての故に、名けて智慧と爲す。」とあり。
 【八六】 二つの清淨なり。乃至、有る莫きなり。
 異譯本には「二つの寂靜あり。一には、礙を知る相の寂靜なり。二には無礙を知る相の寂靜なり。」とあり。

佛は告ぐらく。族姓子、譬へば、三千大千世界の有らゆる人民は、悉く畫師と爲り、各習ふ所あつて巧能同じからず、善とする所等しからずして、或は工に屋宅を畫けども體を畫くに上ならず、或は摸する者に便なれども博く採ることに能ならず、或は手足に工に耳目に巧に、或は頭首には端ならざれども身形には殊好に、或は習ふ所を能せず各異にして或は能く可なる人或は不可なる人あつて、知る所殊別に、容貌同じからざるなり。王は盡く畫師を召すに、時に應じて皆至れば、王は三界の諸形を畫作せしめんとて、之れに告げて曰はく。各自ら像を畫き、以て持ちて吾れに示せ。と。皆衆師を合して一處に聚めて、各各形を畫かしむるに、一師は最上にして、悉く其の體を得たるが若し。族姓子、憶ふ所云何。能く普く諸の能する所を備へたりと爲すや、不や。答へて曰はく。唯能くせり。佛言はく。爲りたる喻を借引して、當に斯の義を解すべし。一の畫師の、悉く諸形を圖するに、各各像を得て其の旨を失はざるが如く、此の法を學ぶことも亦復是くの如くに、殷勤に精進して、淨く梵行を修めて佛法を速成するにも、一の正行を以て悉く衆事を具するなり。此れ故に由つて、空行を具足して達せざる所墮くば、便ち一切の佛道を成就することを得て、皆塵欲・顛倒の衆想・貢高・自大を除きて放逸を樂まず、衆穢に處ると雖も與に合同せざるなり。是れを菩薩は空行を具足すと謂ふ。——是の語を説ける時に、八千の菩薩は普く空行を備へて法忍を逮得せり。——是れを菩薩の寂度無極の清淨の行と爲すと。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の智度無極の清淨の行と謂ふか。十二事を有たば、清淨の行と爲さん。何等か十二なる。過去を見る慧に罣礙無きなり。常來を見る慧に罣礙無きなり。現在を見る慧に罣礙無きなり。有爲・無爲を皆能く曉了するなり。一切の世間の有つ所の術藝の、當に造す可き業を明に解して、世を度するなり。分別して眞諦の義を説くに、其の習ふ所を知つて其の本末を宣ぶるに、一切衆生の諸根の趣く所の柔劣・明達・中容の人の去來の慧に、罣礙する所無きなり。其

とあり。

【七】 四分別辯。

【四】 四無罣礙」を謂ふ。第一卷

「四辯」の解、參照。

【五】 現世、度世の法。

異譯本に「世法及び出世の法」とあり。

【六】 志・駛水を度つて泛流を過ぎ。

異譯本に「四流生死の大海を渡り」とあり。

【七】 諸、有つ所の、等。

異譯本に「能く一切有つ所の樂樂を絶ち」とあり。

【七】 自然靜冥、等。

異譯本に「諸の法性を淨む。」とあり。

【七】 佛法に志して、等。

異譯本には「法の寂靜に向ふに非ず。」とあり。

【七】 諸べて行に住すること、

等。

異譯本に「亦法の捨性に向ふことを取り、等」とあり。

【八】 此の至誠を以て、等。

異譯本に「涼減寂靜に熾然を調伏する」とあり。

【八】 有爲・無爲を、等。以下

は、異譯本には「四には、有爲

を知ることを無礙なり。五には、

無爲を知ることを無礙なり。六

には、一切の世の作すことを

知ること無礙なり。七には、

出世を知ること無礙なり。八

には、辯才を知ること無礙な

り。九には、實を知ること無

念ずる所無きを得るなり。彼れ若し禪ならば、身有るを計せず、諸見を興さず、我・人・壽命を食らず、微妙の可と不可との事を見ず、斷滅を見ず、有常を視せず、生滅の處有ると處無きとを見ざるなり。彼れ若し禪ならば、亦衆漏の源を永く盡さず、諸佛に著せず、寂滅なる果證の跡に入らず、亦長く行する所無きに處らざるなり。若し禪を行ぜば、一心に空を解すれども、空を以て證と爲すことをせず。無相・無願を以て證と爲すことをせず。大徳の體を被、無極の慈を行ひ、大哀に住することを、一切具足して空事を奉行するなり。何をか具足して空を行すと謂ふ。布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧を想はず、善權にて諍開化する所を想はず、慈・悲・喜・護を想はず、亦 聖慧に入ることをも希望せず、道心にて觀察する所あるを想はず、志性の、意に應ずる所あるを想はず、四恩に惠施・仁愛・利人等にて一切を利する救済を想はず、其の意安詳にして存する所あるを想はず、意止・意斷・神足・根・力・覺意及び八由行を想はず、寂黙にて法を觀察すること未だ會て斷絶せず。法眼の教に隨つて炬の曜を執り、聖衆の戒に従つて常に鮮潔を修し、觀を衆生の佛身を成就することに立て、徳を以て莊嚴し、而して世雄に従つて具足の音を聞き、佛の三昧を奉して正覺の神足の辯を獲、十種の力を受け、無所畏に住し、微妙なる十八不共の諸佛の法に速らんとて、聲聞・緣覺と合同せず、諸欲の塵穢に止り處ることを拔去し、神通を離れずして衆生を開導し、四分別辯にて、精進して 現世・度世の法を明了にして衆生を教化し、衆と超異にして質直に出家し、馱水を度つて泛流を過ぎ、諸有つ所の住す可しとする所の處を斷ち、自然靜寔にして法教澹泊に、身法を觀じて貪愛する所無く、佛法に志して自然の想を了し、諸べて行に住することを超えて口の言辭を默し、説く所あらば常に佛語を宣べ、此の至誠を以て、常に然ゆるを消滅して、衆生を開化するなり。是れを具足して空を行すと曰ふなり。

【五】 斷滅を見ず。乃至。具ざるなり。

異譯本には「常見・斷見有無の見に著するに非ざる禪」とあり。而して、本文中の「有常」は、臺本には「無常」とあれど、誤なるべければ改めたり。

【六】 一心に空を。乃至。空事を奉行するなり。

異譯本に「空調伏の禪と名けて、眞に空なる禪に非ず。無相調伏の禪と名けて、眞に無相なる禪に非ず。無願調伏の禪と名けて、眞に無願なる禪に非ず。是れを菩薩は大慈大悲を具足したる一切空行の禪を成就すと名くるなり」とあり。

【七】 聖慧に入ること。異譯本には「四諦」とあり。

【八】 道心にて觀察する所。異譯本には「菩提の智慧」とあり。

【九】 志性の意に應ずる所。異譯本に「誓願の莊嚴」とあり。

【十】 其の意、安詳にして存する所あり。

異譯本に「舍摩他、毘婆舍那」とあり。

【十一】 意止、乃至、八由行。即ち四意止・四意斷・四神足。

五根・五力・七覺意・八由行・菩薩の由つて行する所の行、即ち八正道なり。

【十二】 諸欲の塵穢に、等。異譯本に「諸の習氣を斷ち、」

は以て倦まず、其の慧は究竟して心淨寂なれども、行する所の永く盡く可からざるを明にし、諸の滅を分別するに慧を以て消化すれども、而も一の心慧の起る所無きを成せば、彼れは三事を以て精進することを離るゝなり。一に曰はく、因縁に猶著するなり。二に曰はく、顛倒の事を行するなり。三に曰はく、妄想の滅するなり。若くにして三界に於て猶著する所無き、是れを精進と爲すなり。復、三事あり。何を謂うて三と爲すか。眼に著する所無く、色に猶らず、識を食らず。耳・聲・識と鼻・香・識と舌・味・識と身・煖・識と意・法・識とにも亦復是くの如くに、悉く著する所無くば、彼れは受くる所無く、亦習ふ所無し。故に精進と曰ふなり。施す無きも慳まず、戒無きも犯さず、忍無きも諍はず、進無きも怠らず、禪無きも亂れず、智無きも愚ならず、徳本を造らざるも亦不善無く、佛道を求めざるも聲聞・緣覺の地を得ず、其に行する所無きも亦不行も無くんば、則便に二つの精進の淨なるを速成せん。何を二と謂ふか。一に曰はく、内は諸の因縁を興すことに住する所無きなり。二に曰はく、外に於て、衆想・諸識を見すことを捨つるなり。是れを二つの精進と爲す。復、二つの淨なるあり。何を二淨と謂ふか。一に曰はく、内に於ては寂定なるなり。二に曰はく、外に遊ばず亦放逸することも無きなり。是れを二淨と爲す。其の根は精進にして、諸の行する所に於て行する所無く、亦輕んじ戯らざる、是れを菩薩の淨度無極の清淨の行と爲すなり。と。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の病度無極の清淨の行と謂ふか。殷勤に一心の事を合集し、應に察すべき所を觀じて以て正受するに、彼れ若し一心禪ならば、色に著せず、痛痒・思想・生死・識を棄捐するなり。彼れ若し禪ならば、眼・耳・鼻・舌・身・意の識に著せざるなり。彼れ若し禪ならば、色・聲・香・味・細軟・法を食らざるなり。彼れ若し禪ならば、地・水・火・風・空に著せず、帝釋・日月・梵天・尊豪の位に著せず、欲・色・無色の界に著せず、今世と及び後世とに猶らず、身に住せず亦處とする所無く、言辭に猶らず、心疲懈せずして、悉く住する所無く、卒無く暴無く、邊際に住せずして

【六】殷勤に、乃至、棄捐するなり。
 異譯本には「諸の禪支を取り、諸の禪支を觀じ、觀じ已つて定に入り、既に定に入り已つて、色・受・想・行・識に食著せざる是れを名けて禪と爲す」とあり。因みに「痛痒、乃至、識」とは愛・想・行・識を曰ふ者なるべし。

濟せんと欲する故なり。諸の佛法を具せんとして忍辱を行ずるは、通慧を成ぜん故なり。と。

佛は告ぐらく。族姓子、二事の法を有たば、忍辱力を浄めん。一に曰はく。精しく道業を修するなり。二に曰はく。集義力に合するなり。彼の言はるる所の、能く忍辱して身心猶る無き若きは、是れ集義の力なり。一切の法に於て著する所無く忍辱を行ずる者は、道を修する義なり。淨忍を有つ者は、能く衆生に忍ぶに無人を了知し、堪任する諸法に悉く澹泊を爲すなり。是れを淨忍と爲す。所以は何ぞ。彼れに於ては、亦忍ぶ可きと及び忍ぶに非ざると無ければ、一切の法に於て逮得する所無きを、乃ち名けて忍と曰へばなり。亦一切の法を獲可からざれば、著する所無き者を、乃ち名けて忍と曰へばなり。其に猶る所無く、忍ぶも處る所無くして、諸法を受けざる、是れを曰うて忍と爲し、取る所を以て忍辱を爲すにあらざるなり。其に我・人・壽命の法を計せざる有つて、是に忍辱と曰ひ、身命に著せずして、察すること牆壁瓦石の數の如くにするを、乃ち曰うて忍と爲すなり。と。佛は告ぐらく。族姓子、菩薩に二つの忍あり。一を身の分散の事を曉了するを曰ひ二を明に諸法の皆悉く本より無なるを識るを曰ひ、乃ち忍辱を成ずるなり。是れを菩薩の忍度無極の行は清淨なりと爲すなり。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の進度無極の、清淨爲る行と謂ふか。道心を捨てずして、業を興す可き所に未だ曾て怯弱ならず。常に勤修に遯ひて睡寐せず。徳本を離れずして功德を積集し、以て度無極より退還せざるなり。若しくは、行を造す者は、方便して法を求め、堪任して人の爲めに經典を講説し、正法を護つて度脱する所多くして厭はず、大慧もて衆生を開化し、佛土を嚴り淨めて小乗を度し、本願を具足して聖慧を究竟し、未だ曾て施・戒・博聞を遺失せずして權慧に親近し、已にして福家に至らば、當に何の意を以て勉めて群生を濟ひ憍慢無からしむべきか。とする、是れを精進と謂ふなり。彼れの何を淨と謂ふか。若し身の猶影響の如きを曉了して、言ふ所柔軟に、識

【六〇】 一に曰はく。乃至。道を修する義なり。

異譯本には「一には、智力なり。二には、修力なり。智力の故に身心を觀するを以て、是の故に忍を爲すなり。修力の故に諸法に著せざるを以て、是の故に忍を爲すなり。」とあり。且順序を前後してあり。

【六一】 彼れに於ては、乃至、無ければ。

異譯本には「一切の法に、忍無く曠無しと觀察し。」とあり。

【六二】 一を。乃至。識るを曰ひ。

異譯本には「一には、觀ずること法身の如くに著るなり。二には、觀ずること法界の如くにするなり。」とあり。

有たば、戒無極は淨し。何を謂うて二と爲すか。一に曰はく。毀辱する者あらんに、卑る身命を失ふとも終まで戒を毀らす、想念を興さず、財業を慕はざるなり。二に曰はく。周旋する所無く、亦一切の諸法を貪求せず、空無像を戒とするなり。復、二事あり。何を謂うて二と爲すか。一に曰はく。内淨くして諸の衰入を除くなり。二に曰はく。外淨くして諸の境界を捨つるなり。是れを二と爲す。復、二事あり。一に曰はく。其の道心を淨めて自然の相を解する故なり。二に曰はく。戒品清淨にして諸相を無くする故なり。と。佛は告ぐらく。是れを菩薩の戒度無極の清淨の行と爲す。と。佛は告ぐらく。族姓子、何を忍度無極の、行する所清淨なりと謂ふか。罵詈する若きには、嘿して報いざるは、是れ口の清淨なり。搗捶する若きには、受けて校はざるは、是れ身の清淨なり。瞋恚する若きには、哀んで慍らざるは、是れ心の清淨なり。毀辱する若きには、而ち恨を懷かざるは、是れ性の清淨なり。又若し人の、鹿獮の辭を發すを聞くと、以て衆生を護らんとて忿恨を興さず、設ひ刀杖もて身に加へ瓦石もて打擲するありとも、復世を護つて害を懷かず、節節に身を解くとも、以て憂感せざるは、將に道に順ぜんとする故なり。人の求め乞ふを見て瞋恚を起さざるは、四恩を濟さん故なり。慈心を發して忿恚せざるは、佛道に親まん故なり。悲哀の心を造すは、願を具足せん故なり。功勳流布して命を奉ぜざる莫きは、慙む所多き故なり。仁心の徳布施す可き所に稱うて、道法の行を爲すは、魔天を棄てん故なり。又、佛道を念じて忍辱を行するは、佛身を成ぜん故なり。若しくば、覺意を念じて忍辱を行するは、十力を具せん故なり。若しくば、慧を念じて忍辱を行するは、三達を備ふるに罪礙無からんと欲する故なり。設しくば、瞋傷を念じて忍辱を行するは、大慈を成ぜん故なり。虚妄を度することを念じて忍辱を行するは、大哀を究めん故なり。師子の如くに恐懼無き者を念じて忍辱を行するは、無所畏ならん故なり。無見頂を念じて忍辱を行するは、衆生に處るに自大ならざらん故なり。相好を具せんことを念じて忍辱を行するは、普く一切の世を救

【五〇】 周旋する所無く、等。異譯本には「無心・無相・無莊嚴にて、一切の法に於て心著する所無きなり。」とあり。

【五一】 一に曰はく。内淨くして、乃至、境界を捨つるなり。異譯本には「一には、内入を淨むるなり。二には、一切の外入を求めざるなり。」とあり。

【五二】 一に曰はく。其の道心を淨めて、乃至、無くする故なり。異譯本には「一には、菩提を願ふ心なり。二には、本菩提に向へる戒相を觀ぜざるなり。」とあり。

【五三】 魔天を棄てん故なり。異譯本の此れに當るべき句には「魔業を破らん故なり。」とあり。

【五四】 覺意。即ち「七覺支」なり。第一卷「覺」の解、參照。

【九五】 三達を等。三達とは、天眼・宿命・漏盡の三に完達するを謂ふ。

但し、異譯本には「三世の罪礙無きを知らん爲めの故なり。」とあり。

畏るるなり。六に曰はく。人を煩し擾さずして、心の憂感を止むるなり。七に曰はく。諸の衆生の苦惱に在る者を見て、之れを慇懃するなり。是れを七と爲す。復、八事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて八と爲すか。一に曰はく。諛語を有つ無きなり。二に曰はく。異を希ふ心無きなり。三に曰はく。利養を食らざるなり。四に曰はく。懼礙を捨てて、依倚する所無きなり。五に曰はく。己身の有つ所にて止足することを知るなり。六に曰はく。賢聖の禪を行じて澹怕を具足するなり。七に曰はく。閑居に處つて身命を惜まざるなり。八に曰はく。獨處を樂み衆會を遠離して道法を好み、三界を畏懼しつゝ無爲を取らざるなり。是れを八と爲す。復、九事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて九と爲すか。一に曰はく。趣く所無き律にて、衆生を教化して度を得しむるなり。二に曰はく。稍漸く定を習うて、其の原を修治するなり。三に曰はく。心をして究竟して惱熱を懷かざらしむるなり。四に曰はく。驕慢を求めて、心の念する所を止むるなり。五に曰はく。威儀禮節の正を習行するなり。六に曰はく。禁戒を超越して己身を見ざるなり。七に曰はく。未だ會て欺惑せずして群生を慇懃し、大乘を具足するなり。八に曰はく。究竟して戒法の業を成就して、缺漏せざらしむるなり。九に曰はく。心に常に念を懷きて勤めて徳本を勧め助くるなり。是れを九と爲す。復、十事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて十と爲すか。一に曰はく。身の三事を淨むるなり。二に曰はく。口の四事を淨むるなり。三に曰はく。意の三事を淨むるなり。四に曰はく。念に諛語を棄て志性質直にして、細碎ならざるなり。五に曰はく。心性に普く入つて、度を蒙らざるもの靡きなり。六に曰はく。一切覺する所に而ち節限を知り、慇懃を本と爲して悉く諸の結を解くなり。七に曰はく。心に剛鞭無く、衆生を教化するに悉く業を調和にするなり。八に曰はく。常に己身を修め、諸の等類を見ば惻恻として恭敬するなり。九に曰はく。諸の衆祐に於て、法の事を勸示するなり。十に曰はく。奉ずるに衣食を以てして世の業を離れしむるなり。是れを十と爲す。復、二事を

- 【四五】 異を希ふ心無きなり。乃至。利養を食らざるなり。異譯本には此の二つを合して「利養の爲めに、異を顯して衆を驚かざるなり。」とあり。
- 【四六】 無爲を取らざるなり。異譯本には、「九惡心を離れ、乃至心に法を護つて、身命を惜まざる故(コト)なり。」とあり。
- 【四七】 趣く所無き等。
- 【四八】 異譯本には「九惡心を離れ、九衆生の居る所の處を過ぐる故(コト)なり。」とあり。
- 【四九】 身の三事。「殺生」「偷盜」「邪淫」の三なり。
- 【五〇】 口の四事。「妄語」「虛誑語」「兩舌」「離間語」「惡口」「麗惡語」「綺語」(疑極語)の四なり。
- 【五一】 意の三事。「貪欲」「瞋恚」「愚癡」「邪見」の三なり。
- 【五二】 等類。「比丘の同類」を謂ふ者なるべし。
- 【五三】 衆祐。新譯には、Bāhū bhavaを譯して「衆祐(即ち世尊とするを常とすれど、舊譯にては往往「富福者」の名として使用あり。今も當に然るべきか)。
- 【五四】 奉ずるに衣食を以てして等。是れ亦、世の富福者に、比丘に對する善根を勤むる者なるべきか。

緣覺の意に越えたるを解し、心能く一切の諸魔を降伏して衆生に入るに、至る所に名徳は無量の寶を爲し、諸べて法を遊習して普く護る所あつて、未だ曾て忘れざるなり。是れを一と爲す。復、二事を有たば、戒度無極は清淨の行と爲る。何を謂うて二と爲すか。一に曰はく、常に慈愍を懷いて衆生を害する無きなり。二に曰はく、心道に志して性行を調柔にするなり。是れを二と爲す。復、三事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて三と爲すか。一に曰はく、身に身の三事を清淨にせば、戒は漏する無くして究竟して備り悉す。二に曰はく、言淨くして、一切説く所に諛語を有つ無きなり。三に曰はく、意淨くして、諸穢・貪欲・危害を擯除するなり。是れを三と爲す。復、四事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく、戒を具すること清淨なるなり。二に曰はく、禁を奉じて毀らざるなり。三に曰はく、此の戒法を以て衆生を教化するなり。四に曰はく、持戒の人を見れば、之れを敬ふこと佛の如くにするなり。是れを四と爲す。復、五事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて五と爲すか。一に曰はく、己身を歎ぜざるなり。二に曰はく、他人を毀らざるなり。三に曰はく、聲聞の志を捨つるなり。四に曰はく、緣覺の意を離るるなり。五に曰はく、貪著する所無きなり。是れを五と爲す。復、六事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて六と爲すか。一に曰はく、常に佛を念じて禁戒を毀らざるなり。二に曰はく、常に經法を念じて其の行を順修するなり。三に曰はく、常に聖衆を念じて佛教に違はざるなり。四に曰はく、常に施を念じて普く塵欲を捨つるなり。五に曰はく、常に禁戒を念じて復と一切の五趣を貪慕せざるなり。六に曰はく、常に諸天を念じて衆の徳本を宜ぶるなり。是れを六と爲す。復、七事を有たば、戒無極は淨し。何を謂うて七と爲すか。一に曰はく、篤く諸佛の法を信樂するなり。二に曰はく、常に自ら慚を念じて、衆の重任を爲むるなり。三に曰はく、愧を念じ道品の法を思うて、自ら大なりとせざるなり。四に曰はく、仁和にして彼我を惱さざるなり。五に曰はく、害する無くして、後世の殃罪の患を

異譯本に「菩薩若し能く是の如き法を行ぜば、即ち能く檀波羅蜜を淨むるなり。」とあり。

【三〇】 菩薩の心は、乃至、超過し。

異譯本には「一切世間の衆生を憐愍し」とあり。

【三一】 心能く、乃至、衆生、に入るに。

異譯本には「能く魔業を壞つて、諸の衆生を調じ」とあり。

【三二】 至る所に、乃至、忘れざるなり。

異譯本には「無量なる功徳の寶衆を具足して、放逸を有つ無きなり」とあり。

【三三】 身に、乃至、備り悉くす。

異譯本には「一には、身を淨むるなり。一切の身の惡業を遠離する故なり」とあり。三事とは、殺生・偷盜・邪淫の三なるべし。

【三四】 諸穢・貪欲・危害・愚癡・貪欲・瞋恚の三毒を指す者なるべし。

【三五】 害する無く、等。

異譯本の此れに當るべき句に「一現在、未來の惡業を畏るるなり」とあり。

四と爲す。復、四事を有たば清淨の施と爲す。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。身の淨きなり。二に曰はく。言の淨きなり。三に曰はく。心の淨きなり。四に曰はく。性の淨きなり。是れを四と爲す。復、三事の施の、諸の聖礙に越えたるあり。何を謂うて三と爲すか。一に曰はく。佛望を捨つるなり。二に曰はく。恨を懷くを棄捐するなり。三に曰はく。小乗を離るるなり。是れを三と爲す。復、三事の捨つることを有たば、應に施すべきに於て諸の恐懼を離る。何を謂うて三と爲すか。一に曰はく。貢高なり。二に曰はく。輕慢なり。三に曰はく。魔業なり。是れを三と爲す。復、四施の、法見の印を以てするあり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。内空なり。二に曰はく。外空なり。三に曰はく。人空なり。四に曰はく。道空なり。是れを四と爲す。復、四施の専ら惟れ精進なるあり。一に曰はく。衆生を飽滿するなり。二に曰はく。諸佛の法を具足するなり。三に曰はく。備に悉く相好の嚴容を成就するなり。四に曰はく。淨く佛土を治するなり。是れを四事と爲す。復、四施の、心に常に捨てざるあり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。意に常に道を念ずるなり。二に曰はく。常に佛を見んと欲するなり。三に曰はく。大慈を修するなり。四に曰はく。衆生の塵勞の穢を滅除するなり。是れを四と爲す。復、三施の、道場を嚴淨にするあり。何を謂うて三と爲すか。一に曰はく。我を淨むるなり。二に曰はく。人を淨むるなり。三に曰はく。道場の淨きに至るなり。是れを三と爲す。復、四施の、與ふる所清淨なるあり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。慧を以て布施するなり。二に曰はく。則ち能く衆生の心を悦す可きなり。三に曰はく。曉了に勸助するなり。四に曰はく。明解して經典を觀察するなり。是れを四と爲す。佛は告ぐらく。族姓子、是れを菩薩の修すべき所の法たる施度無極の、清淨の行を致すと爲す。佛は告ぐらく。族姓子、菩薩は戒度無極を行するに、一事を有たば清淨を致さん。何を謂うて一と爲すか。菩薩の心は而ち等倫無くして、其の心一切の世間に超過し、最尊比無くして諸の聲聞、

【三】性の淨きなり。異譯本には「願を淨むるなり。」とあり。

【三】復三事の、乃至、小乗を離るるなり。異譯本には「三礙を遠離するなり。一に、果報の礙なり。二に、聲聞の礙なり。三に、悔心の礙なり。」とあり。

【三】復三事の、乃至、恐懼を離る。異譯本には「菩薩は是くの如き施を修行する時に、三畏を遠離す」とあり。

【四】内空なり。異譯本には「内空の印なり。」とあり。以下、同様に「印」の字を加へたり。

【五】衆生を飽滿するなり。異譯本には「衆生を滿さん故に、精進を具足するなり」とあり。以下、同様に「精進」を具足するなり。の句を加へたり。

【三】衆生の、乃至、滅除するなり。異譯本には「煩惱を離るることを念ずるなり」とあり。

【七】復三施の、乃至、淨きなり。異譯本には「是くの如くに施す時に、三事を淨むるなり。一は自身なり。二には他身なり。三には、菩提なり」とあり。

【八】是れを、乃至、致すと爲す。

謂はず、聖賢に施して長益と謂はず。又、諸法の、本より悉く清淨に、等しうして差特無きを計すれば、是の故を以て施す所當に等しかるべく、是に諸法に於て各各異らざるなり。彼れ供養の具を施與する所にて、勤助する所あるにも亦若干無ければ、若し布施する時には、此の念を作さざるなり。吾れの當に獲べき福の望は、帝釋・梵天人位に於て國主・豪尊・長者を願はず亦色・聲・香・味・細滑の法を慕求せず、饒財・珍寶・重貨・眷屬・侍従をも望まず、亦五趣の生死にて周旋する所の處をも貪羨せず。聲聞・緣覺の乘を求めず。敢て施す所をば則ち用ひて、無上正眞の道を志求すべし。と。是れを勤助して差別せず、諸べて放捨す可しと謂ひ、志性は道に在いて差特の心無く、合會・別離に初より増減無くして、相の報を望まず、唯諸の及ばざる者を開度して、彼岸に越えんことを欲し、其の心質朴にして諛諂無く篤信を懷抱し、内性淳淑にして未だ會て悔い變らず、珍愛する所を施して其の心歡喜し、若し來り求むるあらば、意のままに能く惠み與へて、益用つて悅豫するなり。是れ族姓子、志性して施す所も亦別異ならざるにて、斯れを菩薩の施度無極に若干を有つ無しと謂ふなり。

佛言はく。復、八事の邪徑を棄捐するあつて、布施の業を行するなり。何を謂うて八と爲すか。吾我を見ざるなり。人有るを見ざるなり。壽有るを見ざるなり。有常を觀ざるなり。三處に住せざるなり。無の處を見ざるなり。若し布施せば則ち當に嚴淨に施すべきなり。是れ八事なり。菩薩の布施には、四住の業を棄つるなり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。非なる法を捨て、則ち經典を以て凡夫を開化するなり。二に曰はく。聲聞の意を捨てて大道に志すたり。三に曰はく。緣覺の法を捨てて平等を修するなり。四に曰はく。止る處に於て諸倚著する所を遠るなり。是れを四と爲す。當に復、四事の思想を離るべし。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。常の想なり。二に曰はく。安の想なり。三に曰はく。淨の想なり。四に曰はく。我の想なり。是れを

【三】 諸法の本より、乃至、計すれば。

【四】 異譯本に「此れに該當すべき者には、心を分別せずとは」とあり。

【五】 彼れ供養の具を、乃至、若干無ければ。

【六】 異譯本には「願を分別せずとは」とあり。

【一七】 三處。

【一八】 異譯本に「有見」とあり。「三處」とは、身・口・意の三なるべし。

【一九】 若し布施せば、等。

【二〇】 異譯本には、此れを缺きて、別に「士夫見」を入れたり。

【二一】 止る處に於て等。

【二二】 異譯本には、遠離する者として、第四に「餘習の功德」を擧げたり。

【二三】 安の想。

佛は告ぐらく。族姓子、何を菩薩の施度無極の行の清淨とする所と謂ふか。謂はく。習ふ所の慳貪の心をば、皆之れを棄捐して布施の心を習ひ、已にして能く貪慾・瑕穢の事を放捨し壞つて布施を興し勸め、一切有つ所を恵んで慍まざるなり。彼れは施を行じ已るに、而も四事に於て若干をも造さざるなり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。衆生の類に、若干を有つ無きなり。二に曰はく。一切の經法を各各異りとせざるなり。三に曰はく。勸助す可き所にも、亦差別する無きなり。四に曰はく。志性して施す所にも、亦若干無きなり。彼れ何を、諸の衆生に於て若干を有つ無し。と謂ふか。此の念を興さざるなり。吾れ當に某に施せども、甲に施さじ。某に施さば福多きも、甲に施さば福少し。某に厚く施し、甲に薄く施さん。好供を某に施さんも、趣に甲に施さん。常に當に某に施すべきも、時に一甲に施さん。親しく自ら斟酌して某に授與せんも、自ら身を勞せずして甲に授與せん。用を盡して某に施さんも、粗く甲に施さん。此の人は戒を奉すれども、斯の人は禁を毀れり。此の人は衆祐なれども、斯の人は寡祐なり。此の人は能く衆祐の徳を畢せども、斯の人は能はず。此の人は正を修すれども、斯の人は邪を行ふ。此の人は平等の業を奉行すれども、斯の人は反邪の業に墮落せり。と。佛言はく。是くの如くに、族姓子、菩薩は布施するに、皆當に是くの如き輩を棄捐して、心に平等を修めて志に若干を懷かず、常に衆生を念するに、等心にて之れに應じて以て開化し、意識を平にして戒の慈悲喜護をば遺忘する所無かるべきなり。謂はゆる等とは、猶虚空の如くに、視ること増減無きなり。是れを、衆生に若干を有つ無しと謂ふなり。

佛は寶髻に告ぐらく。何を、諸法は各各異らず。と謂ふか。假使法を説いて平等を宣べんには、亦法を奉修する者には吾れ當に經を與ふべく、法に順する能はざるには則ち授けざるなり。若しくば、普く一切の法を備へしむる者には、吾れ當に之れを與ふべく、法を具ふる能はざるには吾れ與へざるなり。と念言せざるなり。道教を興して法施を行はんと欲する者は、凡夫に施して損耗と

【一】一に曰はく。乃至、亦、若干無きなり。

異譯本には「一には、衆生を分別せざるなり。二には、法を分別せざるなり。三には、心を分別せざるなり。四には、願を分別せざるなり。」とあり。

【二】好供を、乃至、趣に甲に施さん。

異譯本には「此れには上を與へ、此れには下を與へん。」とあり。

【三】用を盡して、乃至、甲に施さん。

異譯本には「此れには全く與へ、此れには半與へん。」とあり。

【四】此の人は、乃至、能はず。

異譯本に「此れは大報を得、此れは大報を得ず。」とあり。

【五】吾れ與へざるなり。

異譯本に「受くる者には、説くことを爲し、受けざるには説かず。法を受くる者には其の須ふる所を施せども、法を受けざる者には、則ち供給せず。」とあり。

諸り、足下に稽首して、各遶ること七匝して、正しく佛前に住りしが、八千の菩薩も亦復是くの如くにし、諸天子の衆は悉く皆侍従せり。

寶髻菩薩は、前んで佛に白して言はく。唯然く、世尊、淨住如來は敬んで問ひたてまつること無量なり。志す所康寧に、輕便に住して勢力安きや。と。天中の天に、鄙身の此に詣ることを蒙る。願はくば、恩慈を垂れて、諸の菩薩大士の衆の爲めに、道教の當應に行すべき所を班宜したまはんことを。菩薩此れに住して、究竟して具足せる清淨を成ずることを得ば、而ち普く一切の徳の體を被服し、衆善平等の行を積累し、淨く其の身を修めて、皆一切群生の念する所を見、其の相行を觀じて隨つて開化するには、則ち智慧を以て姪。怒。癡を爲め、而して法を講説して妙行を致さしめん。若し衆人あつて邪法に住せば、便ち平等の教を演示することを爲すに、諸の如來に爲つて覆蓋せらるる所にて、衆生の類は皆頼を蒙るを得、一切の諸魔は便を得る能はずして、諸佛を觀るに逮るまで聖礙する所無く、敢て皆如來の清淨なる行を成ずることを遊修す可けん。此くの如き義を、何に因つて致さんか。と。佛は寶髻に告ぐらく。善い哉、善い哉。族姓子の、乃ち如來に此くの如き義を問ふことや。諦に聽け。諦に聽きて善く之れを思念せよ。吾れ當に諸の菩薩等の 行する所の清淨なるを解説すべし。と。寶髻菩薩は、諸の大衆と教を受けんとして聽けり。

佛は告ぐらく。族姓子、菩薩に 四事の法あつて、行の清淨とする所なり。何を謂うて四と爲すか。一に曰はく。度無極を行するなり。二に曰はく。常に當に諸佛の道品を遊修すべきなり。三に曰はく。神通を具足するなり。四に曰はく。衆生を開化するなり。是れを四と爲す。度無極を行ぜば勸助す可き所を、周普く衆の徳本に入れざる靡きなり。道品の法ならば、大慈に遊ぶに、時に應じ慧の入る所を曉了するなり。神通を具せば、人民の心念の行する所の善惡の業を分別するなり。衆生を化せば、大哀は堅固にして、明に志性の歸趣する所を識るなり。

【三】 志す所、乃至、安きや。異譯本には「起居輕利に、氣力安きや、不や。眷屬の大衆は、樂うて法を受くるや、不や。」とあり。

【四】 行する所の清淨なるを。異譯本には「淨行の十分の一」とあり。

【五】 四事の、乃至、清淨とする所なり。異譯本には、單に「四つの行あり」とあり。

【六】 一に曰はく。乃至。衆生を開化するなり。異譯本に「一には、波羅蜜の行なり。二には、助菩提の行なり。三には、神通の行なり。四には、衆生を調する行なり。」とあり。

【七】 度無極。「波羅蜜多」の譯語なり。第一卷同名の解説あり。

【八】 大哀は、乃至、識るなり。異譯本には「是れ菩提心の堅固なる方便なり。」とあり。

心願堅固ならば佛道に志せ 無数の菩薩は江沙の如くなるも 精進力行を以て超越したまひ

衆衆の億百千を降伏し 佛道を成ずるを得て垢の憂を離れたまへり 吾れ東方よりして發

し來れるは 其の世界を名けて善變と曰ひたるに 彼の淨住佛の左右に在りしが 釋師子に稽

首するを得んと欲してなり 假使人あつて法を聽き 若しくば十方の諸菩薩を覩んと欲し

設し彼の世尊に歸禮せんと欲せば 速疾に來つて靈鷲山に到れ 諸べて導師には衆は遇ふこ

とを得難く 經典の要には甚だ値ひ難く 人身は得難く及び閑暇もて 篤く禁戒を信すること

も誠に亦難し 假使今時に徳本を造らば 則ち衆生の邪冥に處るを見て 便ち能く心を開い

て滅度せしむれば 速に行いて俱に最勝に詣れ 若し三惡趣を解き棄て 安隱なる天人の處

を致すを得 無爲を逮得して生死を消さんと欲せば 則ち當に無等倫に往き詣るべし 良醫

王と爲つて甘露を施し 尊きこと猶導師の如くに正路を示し 彼れは法王と爲つて尊寶を執り

一切衆生の趣を降伏したまへばなり」と

時に於て、寶髻は、斯の頌を説き已り、此の頌の音を以て三千大千世界に告ぐるや、賢者舍利弗

は斯の頌を説くを聞き、前んで佛に白して言はく、唯然く、世尊、此の妙なる頌義は、何より出づ

と爲すか。と。佛言はく、東方に、此を去ること九百二十萬なる佛界を善變と名け、佛を淨住如來・

至眞・等正覺と號せるが、現に在つて法を説きたまへり。其の佛の左右に、菩薩の寶髻と名くるあつ

て、八千の菩薩と俱なるが、此の忍界に到り、來つて佛に見え、稽首・問訊して經典を咨ひ受けんと

欲し、并に十方より諸會せる菩薩を見んと欲する故に、梵天に住つて此の頌を説けるのみ。斯の頌

の音の普く三千大千世界に聞ゆるは、央くる無き數の衆生の類をして、衆の徳本を殖ゑんと、俱に

來つて佛に詣らしめんとてなり。と。是に於て寶髻は、八千の菩薩及び無央數の諸天子の衆の周匝

して圍遶せると與に、百千の伎を鼓し、諸の妙華を雨し、大光明を演べ、三千界を動して佛の所に

【三】此の妙なる頌義。異譯本には「是くの如き偈音」とあり。

菩薩・光世菩薩・大勢至菩薩・師子意菩薩・師子步菩薩・師子雷音菩薩・尊意菩薩・金剛意菩薩・金剛步菩薩・金剛幢菩薩・金剛志菩薩・步不動迹菩薩・獨步世菩薩・善明菩薩・蓮華目菩薩・蓮華淨菩薩・寶淨菩薩・鈎環菩薩・寶幢菩薩・寶事菩薩・寶印手菩薩・德曜王菩薩・淨王菩薩・執離意王菩薩・電光嚴菩薩・虛空藏菩薩・濡意菩薩・雨音菩薩・不離菩薩・意淨菩薩・雷音菩薩・解縛菩薩等と曰へり。十六の正士の薄首の等、六千の聖士の衆香首の等、三十有二の清淨行士の慈氏の等は、皆是れ賢劫の諸菩薩なり。降魔天子・淨復淨天子・善妙天子・賢護天子・雜勝天子・意勝天子・寂化音天子・善思天子等の類の二萬は、皆大乘に志せるものなり。四天王・帝釋・忍迹・梵天・魔子の導師・濡美天子并に餘の諸天・龍神・犍香愁・阿須倫・迦留維・眞陀羅・摩睺勒の等及び人非人は、稱け計ふべからず。

彼の時に、世尊は、央くる無き數なる百千の衆眷屬の與めに圍遶せられて、經を説くことを爲せるに、大清淨なる師子の牀に坐して、勇猛無爲に師子吼を爲し、日の普く照すが如く、月の盛に明なるが如く、火の冥を消せるが如くに其の座暉赫し、威光の熾熾たること釋梵に超躡し、佛身の特に顯るること、猶須彌山の大海に現るが如く、經典を説く所は、上・中・竟く語は妙善ならざる靡く、義は美を具足して究竟して清淨に、常修の梵行を廣く演べ、恩慈もて菩薩の行を宣べ、菩薩の法の、當に遵修すべき所の、名けて淨行と曰へるを講じたり。

爾の時に、東方に、此を去ること佛國九百二十萬にして、佛土の世界を善變と名け、其の佛を淨住如來・至眞・等正覺と號したるが、現に在つて法を説きたり。時に佛の左右に、一の菩薩の、彌陀鄰那朱と名くるあつて、八千の菩薩と俱なりしが、其の佛土に於て忽然として現れず、此の忍界に至つて梵天に住り、一つの寶蓋を以て斯の三千大千の忍土を覆ひ、普く天華の其の色の若干なるを雨し、梵天に在つて頌を説いて曰はく。

諸天人民は善利を獲んと 心に願はば佛たる釋師子に見えよ 惱熱語の俗事を消さんと爲す

【六】 忍迹。正法念經に題留陀天(Kurudha)を譯して、此に象濟天と云ふ。とあり。或は其れと同一の者なるべし。

【七】 魔子の導師。「大集經、菩薩念佛三昧品」には「魔王の息、導師」とあり。

【八】 濡美天。「佛所行讚」の「破魔品」に於ける「魔障百羅」は梵本には Gandhin とあり。而して「摩訶百羅」は即ち Gandhin 「濕婆」なれば「濡美」は此等の原梵語に對する音寫の假借文字にして、即ち大自在天(色究竟天)を謂ふ者なるべし。

【九】 上、中、とは、未だ説法半なるに由つて曰ふなるべし。但し、異譯本には「初・中・後に善く」とあり。

【一〇】 常修の梵行を廣く演べ。異譯本に「梵行を演宣し」とあり。

【一一】 爾の時に、乃至、善變と名け。異譯本には「爾の時、東方に、九萬二千の諸の佛世界を過ぎて、彼に世界の佛けて華華と曰へるあり」とあり。

【一二】 彌陀鄰那朱(Ratana-ndha)。註に、「昔に、寶裝と曰ふ」とあり。原梵語に照せば「彌陀鄰那朱」なるべきか。

卷の第一百一十七

西晋竺法護漢譯

寶髻菩薩會 第四十七の一

聞くことは是くの如し。一時佛は羅閱祇の雲鷲山に在して、大比丘の衆四萬二千・菩薩八萬四千と俱なりき。各十方の諸佛の世界より來つて集會せるにて、皆已に一坐補處に通達して、著する所無く畢礙する所無きを得、勇猛伏三昧の出生に從つて、上蓮華三昧・金剛道場三昧・善堅住三昧・淳淑修三昧・幢英王三昧・金剛三昧・淨德事三昧を獲たれば、分別の權行は皆諸佛の法に親近することを得て、佛樹の下に在つて降伏して諸の魔界を度する所多く、諸佛の土を建立するを得、無盡に説く所の總持を速成したれば、衆生は一切の根原を知るを得て、妙辯才を以て諸の心を悅ばす可く、師子歩の猛を爲して畏るる所無く、若しくば、衆會に入つて應に時宜に順じて文字・句を宣ふべきにも諸行を成就したれば、則ち威相を以て自ら嚴飾し、世の財を捨て、諸の外道を棄て、功勳顯れ布きて聲十方に徹り、諸佛の咨嗟する徳の量る可からざるは、悉く布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧に從つて成じたるにて、無數劫百千那術従り道業を修治したれば、一切衆生の疾を覩見して、病に應じて藥を與へて皆瘳愈せしめ、深妙に緣起の法を明にすることに入りたれば、以て斷滅・有常の事を捨て、其の行清淨に、志に瑕穢無く、心性鮮明にて、群生を開化して各各攝め護り、其の所得て教化を曉了せしむるに意に自在を得、勢力堅強なれども慈心を毀らずして、信戒・聞・施・慚・愧・智慧の具足せる七財もて衆生を化せんと欲し、善方便を以て閑居に處ることを現じ、修力を用ふる所にて善く諸願を誓ひ、聖徳無量なれども心は虚空の如くなり。其の名を光觀菩薩常明曜

寶髻菩薩會第四十七の一

二一三九

【一】 羅閱祇の雲鷲山。

異譯本（大方等大集經寶髻菩薩品）北涼、曇無讖漢譯）には「欲、色二界の中間なる大寶坊中」とあり。

【二】 無盡に説く所の總持。謂はゆる「義陀羅尼」を曰ふ者なるべし。第一卷「陀羅尼」の解、參照。

【三】 字（Akṣara）。「字」は「文」と通用せられてあり。第二卷「文」句の解、參照。

【四】 那術。「那由他」に同じ。

【五】 七財。即ち「七聖財」なり。第二卷同名の解參照。

し、是くの如し。般若波羅蜜を説き已るや、皆此の瑞を現すは、般若波羅蜜を印する故に爲つて、人をして受持して讚・毀無からしめんとてなり。何を以ての故ぞ。無相の法印は、讚・毀す可からざれば、我れ今是の法印を以て、諸の天・魔をして便を得る能はざらしむるなり。と。佛の是の經を説き已りたまふや、爾の時に、諸の大菩薩及び四部の衆は、般若波羅蜜を説きたまへるを聞き、歡喜して奉行せり。

一切の法は皆菩提の相なる故なり。若し一切衆生の行は非行の相にして、非行は即菩提、菩提は即法界、法界は即實際なるを知り、心退没せざらんと欲せば、應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。若し一切の如來の神通變化の、無相無礙にして亦方所も無きことを知らんと欲せば、應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。と。佛は文殊師利に告ぐらく。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして、惡趣に墮せざるを得んと欲せば、當に般若波羅蜜の一の四句偈をも受持して讀誦し、他の爲めに解説して實相に隨順すべし。是くの如き善男子・善女人は、當に知るべし、決定して阿耨多羅三藐三菩提を得て、則ち佛國に住することを。若し是くの如き般若波羅蜜を聞き、驚かず畏れずして心に信解を生ぜば、當に知るべし、此の輩は佛に印可せらるることを。是れ佛の行する所の大乗の法印なればなり。若し善男子・善女人は此の法印を學ばば、惡趣を超過し、聲聞・辟支佛の道に入らざるなり。超過の故を以て、爾の時に、帝釋・三十三天は、天の妙華たる優鉢羅華・拘物頭華・分陀利華・天の曼陀羅華等、天の梅檀香及び餘の末香・種種なる金寶を以ひ、天の妓樂を作して、般若波羅蜜并に諸の如來及び文殊師利を供養せん爲めに、以て其の上に散じ、是の供養を作し已つて、我れ常に般若波羅蜜の法印を聞かんと願ぜり。釋提桓因は、復是の願を作さく。願はくば、閻浮提の善男子・善女人に、常に是の經を聞くを得て、佛法を決定して皆信解せしめ、受持讀誦して人の爲めに演說せしめ、一切の諸天は、爲めに擁護を作さんことを。と。爾の時に、佛は釋提桓因に告げて言はく。橋尸迦、是くの如し。是くの如し。善男子・善女人は、當に諸佛の菩提を決定することを得べし。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、是くの如くんば、善男子・善女人の、大利益の功德の無量なるを得ることを受持したまはんことを。と。爾の時に、佛の神力を以て、一切の大地は六反に震動し、佛は時に微笑して、大光明を放つて遍く三千大千の世界を照せり。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、即ち是れ如來の、般若波羅蜜を印したまへる相なりや。佛言はく。文殊師利、是くの如

【云】 超過の故を以て。此の句に當るべき者は異譯本には無し。其の方は至當なるべし。

説くとも、衆生あつて、已に涅槃を得、今得、當に得べきこと無し。何を以ての故ぞ。決定せる衆生の相あること無ければなり。故に文殊師利は言はん。若し人般若波羅蜜を聞かんと欲せば、我れは當に是くの如くに説くことを作すべし。其の聽くある者は、念ぜず著せず、聞く無く得る無きこと、當に幻人の分別する所無きが如くなるべし。と。是くの如くに説く者は是れ眞の說法なり。是の故に聽く者は、二相を作す莫くして諸見を捨てず、而して佛法を修すれども、佛法を取らず凡夫の法を捨てざるなり。何を以ての故ぞ。佛及び凡夫の二法の相は、空にして取捨無ければなり。故に若し人我れに問はば、當に是の説を作して、是くの如くに安慰し、是くの如くに建立すべく、善男子・善女人は、應に是くの如き間に、是くの如くに住することを作して心退没せざるべくば、當に知るべし、法相は般若波羅蜜の説に隨順することを。と。爾の時に、世尊は、文殊師利を讚歎すらく。善哉、善哉。汝の説く所の如きは。若し善男子・善女人にして、諸佛を見んと欲せば、應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。諸佛に親近して法の如くに供養せんと欲せば、應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。若し如來は是れ我が世尊なりと言はんと欲せば、應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。若し如來は是れ我が世尊に非ずと言はんに、亦應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。若し阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざらんと欲せば、亦應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。若し一切の三昧を成就せんと欲せば、亦應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。若し一切の三昧を成就せざらんと欲せば、亦應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。何を以ての故ぞ。無作の三昧には、異なる相無き故なり。一切の法には生無く出無き故なり。若し一切の法の假名なるを知らんと欲せば、應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。若し一切衆生の、菩提の道を修しつつ、菩提の相を求めずして心退没せざることを知らんと欲せば、應に是くの如き般若波羅蜜を學ぶべし。何を以ての故ぞ。一

に知るべし、是の人は、已に先佛に於て諸の善根を種えたることを、是の故に比丘・比丘尼にして、是の甚深なる般若波羅蜜を説くを聞きて驚怖を生ぜずんば、卽是れ佛に從つて出家したるなり。若し優婆塞・優婆夷にして、是くの如き甚深なる般若波羅蜜を聞くを得て、心に驚怖せずんば、卽是れ眞の歸依の處を成就したるなり。文殊師利、若し善男子・善女人にして、甚深なる般若波羅蜜を習はずんば、卽是れ佛乘を修せざるなり。譬へば、大地に、一切の藥木の、皆地に依つて生長するが如し。文殊師利、菩薩摩訶薩も亦復是くの如くに、一切の善根は、皆般若波羅蜜に依つて阿耨多羅三藐三菩提を増長するを得て、相ひ違背せず。と。

爾の時に、文殊師利は佛に白して言はく、世尊、此の閻浮提の城邑・聚落にて、當に何の處に於て是くの如き甚深なる般若波羅蜜を演説すべきか。と。佛は文殊師利に告ぐらく、今此の會中に、若し人あつて般若波羅蜜を聞き、皆誓言を發して、未來世に於て常に般若波羅蜜と相應することを得ん。とせんに、是の信解に從つて、未來世の中に於て能く是の經を聽かん。當に知るべし、是の人は、餘の小善根の中より來つて能く堪受する所ならざれば、聞き已つて歡喜することを。文殊師利、若し復人あつて、汝に從つて是の般若波羅蜜を聽かば、應に是の言を作すべし。此の般若波羅蜜の中には、聲聞・辟支佛・菩薩の法・佛の法無く、亦凡夫の生滅等の法も無けん。と。文殊師利は佛に白して言はく、世尊、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の來つて我れに問うて、云何に如來は般若波羅蜜を説きたまふかと言はば、我れは當に答へて言ふべし。一切の諸法には評論の相無ければ、云何ぞ如來は當に般若波羅蜜を説きたまふべき。何を以ての故ぞ。法の、評論に與る可きあるを見ず、亦衆生の心識の知り能ふことも無ければなり。復次に、世尊、我れ當に更に究竟せる實際を説くべし。何を以ての故ぞ。一切の法相は同じく實際に入り、阿羅漢にも別の勝法無ければなり。何を以ての故ぞ。阿羅漢の法と凡夫の法とは、一ならず異ならざる故なり。復次に、世尊、是くの如くに法を

ことに、常に勤めて精進して懈怠せざるべし。是くの如くに次第漸漸に修學せば、則ち能く一行三昧の不可思議なる功德に入つて證を作すことを得ん。正法を謗り、惡業の重き罪障を信ぜざる者の、入り能はざる所を除く。復次に、文殊師利、譬へば、人あつて、摩尼珠を得て其れを珠師に示すに、珠師は答へて言はく。此れは是れ無價なる眞の摩尼寶なり。と。即ち師に求めて、我が爲めに治磨して光色を失する勿れ。と言はんに、珠師は治し已るに、其の磨く時に隨ひ、珠色の光明は表裏に映徹するが如し。文殊師利、若し善男子・善女人あつて、一行三昧の不可思議なる功德・無量の名稱を修學せば、修學する時に隨ひ、諸法の相に明達無礙に、功德の増長することを知ることも、亦復是くの如し。文殊師利、譬へば、日輪の光明の、遍滿して滅相を有つ無きが如くに、若し一行三昧を得ば、悉く能く一切の功德を具足して缺少を有つ無く、亦復是くの如くに佛法を照明すること、日輪の光の如くなり。文殊師利、我が説く所の法は、皆是れ一味・離味・解脫味・寂滅味なれば、若し善男子・善女人にして、是の一行三昧を得ば、其の演説する所も亦是れ一味・離味・解脫味・寂滅味にして、正法に隨順して錯謬の相無きなり。文殊師利、若し菩薩摩訶薩にして是の一行三昧を得ば、皆悉く助道の法を満足して、速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

復次に、文殊師利、菩薩摩訶薩は、法界に分別の相と及び一相とを見ずんば、速に阿耨多羅三藐三菩提の相の不可思議なるを得ん。是の菩提の中にも亦佛を得る無しと、是くの如くに知る者は、速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。若し一切の法は悉く是れ佛法なるを信じて、驚怖を生ぜず亦疑惑もせず、是くの如くに忍する者は、速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、是くの如き因を以て速に阿耨多羅三藐三菩提を得るか。と。佛言はく。阿耨多羅三藐三菩提を得るには、因を以て得ず、非因を以て得ず。何を以ての故ぞ。不思議界は、因を以て得ず非因を以て得ざればなり。若し善男子・善女人にして、是くの如き説を聞きて懈怠を生ぜずんば、當

菩薩摩訶薩の行處——行する處非ず不行の處非ずして、悉く一乘の、非行と名くる處に入る——と名く。何を以ての故ぞ。無念、無作なる故なり。

文殊師利は佛に白して言はく。世尊、當に云何に行じて能く速に阿耨多羅三藐三菩提を得べきか。佛言はく。文殊師利、般若波羅蜜の中に説く所の行の如くにせば、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。復、一行三昧あり。若し善男子・善女人にして是の三昧を修せば、亦速に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。文殊師利は言はく。世尊、云何なるを一行三昧と名くるか。佛言はく。法界の一相なるに、縁を法界に繋ぐる、是れを一行三昧と名く。若し善男子・善女人にして、一行三昧に入らんと欲せば、當に先づ般若波羅蜜を聞き、説の如くに修學すべし。然る後に能く一行三昧に入らば法界の如くに縁すること不退。不壞・不思議・無礙・無相なり。善男子・善女人にして一行三昧に入らんと欲せば、應に空閑に處り、諸の亂意を捨て、相貌を取らず、心を一佛に繋ぎて専ら名字を稱へ、佛の場所に隨ひ、身を端して正しく向ひ、能く一佛に於て念念に相續すべくば、即ち是の念の中に、能く過去・未來・現在の諸佛を見ん。何を以ての故ぞ。一佛の功德の無量無邊なるを念することは、亦無量の諸佛の功德（を念ずると）無二なればなり。——不思議の佛法は、等しくして分別無く、皆一如に乘じて最正覺を成じ、悉く無量の功德・無量の辯才を具せり。——是くの如くにして一行三昧に入らば、盡く恒沙の諸佛の法界に差別の相無きを知らん。阿難は聞く所の佛法に、念總持・辯才の智慧を得たること、聲聞の中に於て最勝爲りと雖も、猶量數に住すれば、則ち限礙あり。若し一行三昧を得ば、諸經の法門をば、一一分別して皆悉く了知すること、決定して礙無く、晝夜に常に説くとも、智慧の辯才は終まで斷絶せざれば、若し阿難の多聞・辯才を比するに、百千等分すとも其の一に及ばざるなり。菩薩摩訶薩は、應に是の念——我れ當に云何にせば、一行三昧の不可思議の功德・無量の名稱に速得すべきか。——を作すべくば、佛は言はん。菩薩摩訶薩は、當に一行三昧を念する

【三】 行する非ず、乃至、處に入る。
異譯本には「行に非ず不行に非ざる處にして、悉く一乘の、非行と名くる處に入る。」とあり。

【三】 一行三昧 (Ekasamāhita samādhi)。心を定めて眞如の「法を觀する者にして、此れを「理の一行三昧」と曰ふ。又、別に「事の一行三昧」あり。次下に出づる念佛三昧是れなり。

【三】 (を念ずると) 括弧内の語は、當に有るべき意義なるに由り、加へたり。

【四】 一如。不二を「一」と曰ひ、不異を「如」と曰ふ。即ち一眞如の理を謂ふ。

【五】 量數に住すれば。眼量有り、數額有るを謂ふ。

くの如くに般若波羅蜜を學ぶべし。一切法に過去・未來・現在等の相無きを知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべし。と。何を以ての故ぞ。法界の性相には三世無き故なり。一切法の同じく法界に入るを知つて、心に罣礙無からんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべし。三轉・十二行法輪を得て亦自ら證知すれども、而も取著せざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべし。慈心もて遍く一切衆生を覆うて限齊無きを得れども、亦念を作して衆生の相を有たざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべし。一切の衆生に於て諍論を起さざるを得れども、亦復諍論無き相をも取らざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべし。是處・非處等の十力・無畏を知り、佛の智慧に住し、無礙辯を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべし。と。

爾の時に、文殊師利は佛に白して言はく。世尊、我れ正法を觀するに、無爲無相・無得無利・無生無滅・無來無去にして、知る者無く、見る者無くして般若波羅蜜を見ず、亦般若波羅蜜の境界をも見ざれば、證するに非ず證せざるに非ず、戲論を作さず分別を有つ無し。一切の法は、無盡にして盡を離れたれば、凡夫の法無く、聲聞の法無く、辟支佛の法無く、佛の法も得るに非ず得ざるに非ず、生死を捨てず涅槃を證せず、思議に非ず不思議に非ず、作に非ず不作に非ざるなり。法の相は是くの如くなれば、云何ぞ當に般若波羅蜜を學ぶべき。と。爾の時に、佛は告ぐらく。文殊師利、若し能く是くの如くに諸法の相を知らば、是れを般若波羅蜜を學ぶと名く。菩薩摩訶薩は若し菩提の自在三昧を學び、是の三昧を得已つて一切の甚深なる佛法を照明し、及び一切の諸佛の名字を知り、亦悉く諸佛の世界にも了達して、障礙を有つ無からんと欲せば、當に文殊師利の説く所の般若波羅蜜の中に學ぶべし。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、何の故にて般若波羅蜜と名くるか。佛言はく。般若波羅蜜は無邊・無際・無名・無相にして思量非ず、無歸依・無洲・無渚・無犯・無福・無晦・無明にして法界に分齊を有つ無く亦限數も無き如き、是れを般若波羅蜜と名け、亦

【五】法界。此の「法界」は萬有の本體たる無差別平等の眞如を指す者なるべし。
 【六】三轉。即ち三轉法輪なり。佛の、鹿野苑に於て、聲聞衆の者に、四諦を説きたる其の方法の三種を謂ふ。即ち、一に、示轉(苦・集・滅・道の四を、各別に表示せる者)・二に、勸轉(苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修すべく、諸の修行を勸説せる者)・三に、證轉(苦・集・滅・道を、我れは已に知り、斷じ、證し、修したり)と、佛の實證を説きたる者。是れなり。
 【七】十二行法輪。「三轉」の一に、眼(見道、十六心中の四法智忍を謂ふ)・智(其の四法智を謂ふ)・明(其の四類智忍をいふ)・覺(其の四類智を謂ふ)の四種の智行を生ずる教説なり。
 【八】(等)括弧内の文字は、當に有るべき意なるに由り加へたり。「佛の十力」の解、參照。
 【九】無畏。「四無所畏」なり。
 【一〇】無礙辯。「四無礙辯」なり。

かしめ、是の人聞くを得て、重ねて甚だ歡喜するが如し、是の人の如きは、皆會て見たる故なり。若し善男子・善女人にして、般若波羅蜜を聞き、信心もて聽受して能く歡喜を生じ、樂聞して厭はず、而して更に説くことを勸むるあらば、當に知るべし、此の輩は、已に文殊師利より會て是くの如き深き般若波羅蜜を開ける故なることを。と。迦葉は佛に白して言はく、世尊、若し將來の世の善男子・善女人にして、是の甚深なる般若波羅蜜を聞き、信樂し聽受することを得ば、是の相の故を以て、當に知るべし、此の人は、亦過去の佛の所に於ても、會て聞きて修學せるものなることを。と。

文殊師利は佛に白して言はく、世尊、佛は諸法の無作・無相・第一寂滅を説きたまふを、若し善男子・善女人にして、能く是くの如くに諦に斯の義を了し、聞くが如くにして説くあらば、諸の如來の讚歎する所と爲り、法相に違はじ。是れ即ち佛説にして、亦是れ熾然たる般若波羅蜜の相なり。亦熾然として佛法を具足し、實相の不可思議に通達せりと名けん。と。佛は文殊師利に告ぐらく。我れ本菩薩の道を行ぜる時に、諸の善根を修せしも、阿鞞跋致地に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべきなり。阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべきなり。若し善男子・善女人にして、一切の法相を解せんと欲し、一切衆生の心界を知らんと欲せば、皆悉く同等に、當に般若波羅蜜を學ぶべきなり。文殊師利、一切の佛法を學び、具足して無礙ならんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべきなり。一切の佛の、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜる時の相好・威儀の無量なる法式を學べんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべきなり。一切の佛の、阿耨多羅三藐三菩提の一切の法式及び諸の威儀を成ぜざるを知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべきなり。何を以ての故ぞ。是の空法の中には、諸佛の菩提等を見ざる故なり。若し善男子・善女人にして、是等の如き相を知つて、疑惑無からんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべきなり。何を以ての故ぞ。般若波羅蜜は、諸法の生の若き滅の若き、垢の若き淨の若きを見さればなり。是の故に、善男子・善女人は、應に是

【四】世尊、佛は諸法の。乃至。實相の不可思議に通達せりと名けん。異譯本の、此れに當るべき者には、世尊、此の法は無行、無相にして、此の法を説く者も亦、無行・無相なるに、云何ぞ、世尊は有行の相を説きたまふかとあり。

優婆塞・優婆夷等も亦復是くの如くに、信樂の心あつて、若し法を聞かずんば則ち苦惱を生ずれども、若し聞くを得る時には信解し受持し、常に樂んで讀誦して、甚だ大に歡喜するなり。當に知るべし、此の人は即是れ、佛を見、亦即諸佛に親近し供養するものなることを、佛は告ぐらく。迦葉、譬へば、忉利天上の波利質多羅樹の、匏より初めて出づる時に、是の中の諸天は、是の樹を見るや皆大に歡喜して、此の樹は久しからずして必ず當に開け敷くべしとするが如し。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして、般若波羅蜜を聞くを得て能く信解を生ぜば、亦復是くの如くに、此の人は久しからずして、亦當に一切の佛の法を開敷すべきなり。當來の世に於て、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷あつて、般若波羅蜜を聞き、信受し讀誦して心悔い沒ますんば、當に知るべし、是の人は、已に此の會従り是の經を聽受し、亦能く人の爲めに聚落・城邑にて廣く説きて流布したることを。當に知るべし、是の人は、佛に護念せらるることを。是くの如き甚深なる般若波羅蜜の中に、能く信樂するあつて心に疑惑無くば、是の善男子・善女人は、過去の諸佛に於て、久しく已に修學して、諸の善根を殖ゑたることを。譬へば、人あつて、手を以て珠を穿つに、忽ち無上なる眞の摩尼寶に遇ひ、心に歡喜するが如きは、當に知るべし、是の人は、必ず已に曾て見たることは是くの如くなることを。迦葉、若し善男子・善女人にして、餘の法を修學せるに、忽然として甚深なる般若波羅蜜を聞くや、能く歡喜を生ずることも亦復是くの如し。當に知るべし、此の人は已に曾て聞ける故なることを。若し衆生あつて、甚深なる般若波羅蜜を聞き、心に能く信受して大歡喜を生ずるを得ば、是の人の如きも、亦曾て無數の諸佛に親近し、從つて般若波羅蜜を聞き已つて修學せる故なることを。譬へば、人あつて、先に城邑・聚落を經見る所にて、後に若し、人の彼の城の**有つ所の園苑・種種の池泉・華菓・林樹・男女の人民の皆愛樂す可きを讚歎するを聞き、是の人聞き已るや即大に歡喜し、更に勸めて、是の城の園苑・衆の好き嚴飾・雜華・池泉多くの諸の甘菓・種種なる珍妙・一切の愛樂を説**

【二】當に知るべし。乃至。供養するものなることを。

異譯本には「當に是の言を作すべし。我等、今日如來に見え、如來を供養したてまつることを得たり。所以は何ぞ。此の甚深微妙なる六波羅蜜を聞くを得たるを以ての故なり」とあり。

【三】譬へば人あつて、乃至、歡喜するが如きは。異譯本には「迦葉、摩尼珠師は、摩尼寶を見て心に歡喜を生じ、思量を假らずして、即ち眞偽を知るが如し」とあり。

は即ち不思議にして、不思議なる者は是れ佛の知りたまふ所なり。亦取無く不取無く、三世・去來等の相を見ず、生滅及び諸の起作を取らず、亦斷ならず常ならず。と、是くの如くに知る者、是れを正智・不思議智と名けて、虚空の、此れ無く彼れ無くして比類す可からず、好・惡無く、等しき等無く、相無く貌無きが如きなり。と。

佛は文殊師利に告ぐらく。若し是くの如くに知らば不退智と名く。と。文殊師利の言はく。無作の智を不退の智と名くることは、猶命鑕に先づ鎗打を加へば方に好・惡を知れど、若し治打せずんば能く知る者無きが如く、不退智の相も亦復是くの如くに、境界を行するに、念せず著せず、起す無く作す無きを要し、不動の不生・不滅を具足して、爾く乃ち顯現するなり。と。

爾の時に、佛は文殊師利に告げて言はく。諸の如來の、自ら己れの智を説くが如きを、誰と當に能く信すべきか。と。文殊師利の言はく。是くの如き智は、涅槃の法に非ず生死の法に非ず。是れ寂滅の行是れ無動の行にして、貪欲・瞋恚・愚癡を斷たず、亦斷たざるにも非ざるなり。何を以ての故ぞ。盡無く滅無く、生死を離れず亦離れざるにも非ず、道を修せず道を修せざるに非ず。と、是の解を作す者を正信と爲せばなり。と。佛は文殊師利に告げて言はく。善い哉、善い哉。汝の説く所の如きは、深く斯の義を解せるなり。と。

爾の時に、長老摩訶迦葉は佛に白して言はく。世尊、當に來たるべき世に於て、若し是くの如き甚深なる正法を説かんに、誰れか能く信解して、聞くが如くに受行するか。と。佛は迦葉に告ぐらく。今此の會中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の此の經を聞くことを得たる者、是くの如き人等は、未來の世に於て、若し是の法を聞かば必ず能く信解せん。甚深なる般若波羅蜜に於て、乃ち能く讀誦し信解し受持し、亦能く他人の爲めにも分別して演說せん。譬へば、長者の、摩尼寶を失うて憂愁し苦惱すれども、後に若し還得ば、心甚だ歡喜すること、是くの如きが如し。迦葉、比丘・比丘尼・

相は、等しうして分別無きなり。と。

佛は文殊師利を讚じて言はく。善い哉、善い哉。汝の、諸佛に於て久しく善根を殖ゑ、淨く梵行を修して、乃ち能く甚深なる三昧を演説することや。汝今は是くの如き般若波羅蜜の中に安住せりや。文殊師利の言はく。若し我れ般若波羅蜜の中に住して、能く是の説を作さば、即ち是れ有想にして便ち我想到に住せん。若し有想我想の中に住せば、般若波羅蜜は便ち一處とする所を有たんも、般若波羅蜜にして若し無に住せば、亦是の我想到にも亦處とする所と名けん。此の二處を離れて、住する所無きに住すること、諸佛の住の、寂滅に安處して、思議の境界に非ざる如くならば、是くの如き不思議を般若波羅蜜の住する處と名く。般若波羅蜜は、一切法の無作に處れば、般若波羅蜜は即不思議にして、不思議は即法界なり。法界は即無相にして、無相は即不思議なり。不思議は即般若波羅蜜にして、般若波羅蜜は即法界なれば、二無く別無し。二無く別無きは即法界にして、法界は即無相なり、無相は即般若波羅蜜界にして、般若波羅蜜界は即不思議界なり不思議界は即無生無滅界にして無生無滅界は即不思議界なり。と。

文殊師利の言はく。如來界及び我界は即二相ならずと、是くの如くに般若波羅蜜を修せば、則ち菩提を求めざるなり。何を以ての故ぞ。菩提の相を離れたるは、即是れ般若波羅蜜なる故なり。世尊、我相の而ち著す可からざるを知つて、知する無く著する無き若きは、是れ佛の知りたまふ所なり。不可思議を知る無く著する無きは、即ち佛の知りたまふ所なり。何を以ての故ぞ。體の本性に、有つ所の相無きを知らば、云何ぞ能く。法界に轉ぜんや。若し本性は無體にして著する無きを知らば、即ち無物と名く。若し物有る無くんば、是に處とする所無くして、依る無く住する無し。依る無く住する無くば、即ち生無く滅無し。生無く滅無きは、即ち是れ有爲・無爲の功德なり。若し是くの如くに知らば、則ち心想無く、心想無くんば、云何ぞ當に有爲・無爲の功德を知るべき。知る無き

【〇〇】處とする所「一つの事物とする所」の意なるべし。

【二】法界。此の「法界」は諸法の總稱たる謂はゆる「萬有」の意なり。

何の因縁の故にて、是くの如くに大地は六種に震動するか。と。佛は阿難に告ぐらく。我れ福田の無差別の相を説ける故に、斯の瑞を現せるなり。往昔に、諸佛も亦此の處に於て、是くの如き福田の相を説きて、衆生を利益することを作したまへるにも、一切の世界は六種に震動せり。と。舍利弗は佛に白して言はく。世尊、文殊師利は是れ思議す可からず。何を以ての故ぞ。説く所の法の相は、思議す可からざればなり。と。

佛は文殊師利に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。舍利弗の言へるが如くに、汝の説く所は實に不思議なり。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、不思議は説く可からず、思議も亦、説く可からず。是の思議・不思議の性の如きは、俱に説く可からざれば、一切の聲の相は、思議に非ず亦不可思議にも非ず。と。佛は言はく。汝は不思議三昧に入れるか。文殊師利の言はく。不なり、世尊。我れは即不思議なれば、心の能く思議する者有るを見ず。云何にして不思議三昧に入ると言はんや。我れ初發心には、是の定に入らんと欲したれど、而も今思惟するに、實に心相を無くして、三昧に入るなり。人の射を學んで、久しく習はざれば則ち巧にして、後には無心なりと雖も、久しく習へる故を以て、箭の發するもの皆中るが如し。我れも亦是くの如くに、初は不思議三昧を學ぶに、心を一つの縁に繋ぎしも、若く久しく習ふことをば成就するや、更に心想無くして恒に定と俱なるなり。と。舍利弗は文殊師利に語つて言はく。更に勝妙なる寂滅定ありや。不や。と。文殊師利の言はく。若し不思議定有らば、汝は問うて言ふ可し。更に寂滅定有りや。不や。と。我が意の解する如くんば、不可思議定すら尙得可からず。云何ぞ、寂滅定有ること問はんや。と。舍利弗は言はく。不思議定は得可からざるか。文殊師利の言はく。思議定は是れ得可き相なれども、不思議定は得可からざる相なり。一切の衆生は、實に不思議定を成就せり。何を以ての故ぞ。一切の心相は、即、心に非ざる故にて、是れを不思議定と名くるなり。是の故に、一切衆生の相及び不思議三昧の

ば、今無數の諸佛の涅槃を求むることは、徒に自ら疲勞するのみ。何を以ての故ぞ。不思議の法ならば、即是れ涅槃と等しうして異なる無き故なり。文殊師利の言はく、是の凡夫の不思議、諸佛の不思議の如きは、若し善男子・善女人にして、久しく善根を習ひて善知識に近かば、乃ち能く了知せん。佛は告ぐらく。文殊師利、汝は如來をして諸の衆生に於て最勝たらしめんと欲するか。文殊師利の言はく、我れ、如來をして、諸の衆生に於て最第一と爲さしめんと欲す。但衆生の相も亦得可からざるのみ。佛は言はく、汝は如來をして不思議の法を得しめんと欲するか。文殊師利の言はく、如來をして不思議の法を得しめんと欲す。而も諸法に於て成就する者無し。佛は告ぐらく。文殊師利、汝は如來をして說法・教化せしめんと欲するか。文殊師利は佛に白して言はく、如來をして說法教化せしめんと欲す。而も説く者も聽く者も皆得可からず。何を以ての故ぞ。法界に住する故にて、法界の衆生には差別の相無ければなり。佛は告ぐらく。文殊師利、汝は如來をして無上の福田と爲らしめんと欲するか。文殊師利の言はく、如來は是れ無盡の福田にして是に盡の相無し。盡相無きは即ち無上の福田なれど、福田に非ず不福田に非ざる、是れを福田と名く。明闇・生滅等の相ある無き、是れを福田と名く。若し能く是くの如くに福田の相を解せば、深く善種を殖うることに、亦増も無く減も無きなり。佛は告ぐらく。文殊師利、云何なれば、種を殖うとも増さず減らざるか。文殊師利の言はく、福田の相は不可思議にして、人の中に於て法の如くに善を修する若きも、亦不可思議なり。是くの如くにして、種を殖うとも増す無く減る無しと名くれども、亦是れ無上最勝なる福田なり。と。爾の時に、大地は佛の神力を以て、六種に震動して無常の相を現し、一萬六千の人は皆無生法忍を得、七百の比丘・三千の優婆塞・四萬億の優婆夷・六千億那由他の六欲の諸天は、塵に遠り垢を離れ、諸法の中に於て法眼淨を得たり。

爾の時に、阿難は座よりして起ち、偏に右肩を担ぎ右膝を地に著け、佛に白して言はく、世尊、

らく。一切の凡夫は能く此の法を信ず。何を以ての故ぞ。如來には心無く、一切の凡夫にも亦、心無き故なり。とあり。

【八】 汝は如來をして、乃至、最勝たらしめんと欲するか。異譯本には「汝は、如來を一切衆生の中に於て最勝なりと信ずるや。不や。」とあり。

【九】 我れ如來をして、乃至亦得可からざるのみ。異譯本には「世尊、我れ如來を一切衆生の中に於て最勝なりと信ず。世尊、若し我れ如來を一切衆生の中に於て最勝なりと信ぜば、則ち如來は最勝を成ぜん。」とあり。

謂ふか。と。文殊師利の言はく。不なり。世尊。我れ如來と謂はざれば、如來と爲さんや。如の相の名けて如と爲す可きある無く、亦如來の智の能く如を知る無ければなり。何を以ての故ぞ。如來及び智に、二相無き故なり。空を如來と爲し、但名字あるのみなれば、我れ當に云何ぞ是れ如來なりと謂ふべき。と。佛は告ぐらく。文殊師利、汝は如來を疑ふか。文殊師利の言はく。不なり。世尊。我れ如來には決定せる性無くして、生無く滅無しと觀する故に、疑ふ所無し。佛は告ぐらく。文殊師利、汝今如來は世に出現すと謂はざるか。文殊師利の言はく。若し如來の世に出現する有らば、一切の法界も亦應に出現すべきなり。佛は告ぐらく。文殊師利、汝、恒沙の諸佛は涅槃に入れりと謂ふや。文殊師利の言はく。諸佛は一相なれば、思議す可かず。佛は語らく。文殊師利、是くの如し、是くの如し。佛は是れ一相にして不思議の相なり。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、佛は今世に住したまへりや。佛は語らく。文殊師利、是くの如し、是くの如し。文殊師利の言はく。若し佛世に住したまはゞ、恒沙の諸佛も亦應に世に住したまふべし。何を以ての故ぞ。一切の諸佛は皆同一相にして、不思議の相なればなり。不思議の相ならば、生無く滅無し。若し未來の諸佛は世に出興したまはゞ、一切の諸佛も亦皆世に出でたまはん。何を以ての故ぞ。不思議の中には、過去・未來・現在の相無ければなり。但衆生は取著して出世有りと謂ひ、佛滅度したまふと謂ふのみ。佛は語らく。文殊師利、此れは是れ如來、阿羅漢、阿鞞跋致の菩薩の解する所なり。何を以ての故ぞ。是の三種の人は、甚深の法を聞くと、能く誹謗せず亦讚歎もせざればなり。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、是くの如き不思議をば、誰れか當に誹謗すべく誰れか當に讚歎すべきか。佛は告ぐらく。文殊師利、如來は不思議にして、凡夫も亦不思議なり。文殊師利は佛に白して言はく。佛尊、凡夫も亦不思議なるか。佛言はく。不思議なり。何を以ての故ぞ。一切の心相は皆不思議なればなり。文殊師利の言はく。若し是くの如くに、如來は不思議にして凡夫も亦不思議なりと説か

【三】 汝は如來を疑ふか。乃至。疑ふ所無し。
 異譯本には「汝、我れに於て疑を有つや。不や。文殊は佛に白して言はく。世尊、我れにすら尙、決定せる無し。何に況んや、當に疑を有つべき。何を以ての故ぞ。先づ定つて、後に疑ふもの故に。」とあり。
 【四】 諸佛は一相なれば思議す可からず。
 異譯本には「一切の諸佛は、即涅槃の相なり。涅槃の相ならば、入無く不入無し。」とあり。
 【五】 此れは是れ如來。乃至亦讚歎もせざればなり。
 異譯本には「如來に心無きこととは、唯、如來の前にて此の言を説く可し。或は漏盡の阿羅漢及び不退の菩薩の前にて此の言を説く可し。若し餘の人は此の語を聞かば、則ち信を生ぜずして、驚疑を起さん。何を以ての故ぞ。此の甚深なる般若波羅蜜は、信じ難く解し難きが故なり。」とあり。
 【六】 阿鞞跋致。「阿羅漢」と同じ。第一卷、同名の解、參照。
 【七】 世尊是くの如き不思議をば。乃至。凡夫も亦不思議なり。
 異譯本には「世尊、復、何等の人は、能く此の甚深の法を信ずるか。佛は文殊師利に告ぐ

も地獄に墮ちず、清淨なる行者も涅槃に入らずと見る、是くの如き比丘は、應供に非ず不應供に非ず、漏を盡したるに非ず漏を盡さざるに非ざるなり。何を以ての故ぞ。諸法の中に於て平等に住せる故なり。舍利弗言はく。云何なるを不退の法忍と名くるか。文殊師利言はく。少しの法も生滅の相有ることを見ざるを、不退法忍と名く。舍利弗言はく。云何なるを復不調の比丘と名くるか。文殊師利の言はく。漏盡の阿羅漢、是れを不調と名く。何を以ての故ぞ。諸の結已に盡きて、更に調する所無き故にて不調と名くるなり。若し、心行に過らば名けて凡夫と爲す。何を以ての故ぞ。凡夫衆生の、法界に順ぜざる、是の故を過ると名くればなり。舍利弗言はく。善い哉、善い哉。汝今我が爲めに善く漏盡の阿羅漢の義を解きたることや。文殊師利言はく。是くの如し。是くの如くにして、我れは即ち漏盡の眞の阿羅漢なり。何を以ての故ぞ。聲聞を求むる欲及び辟支佛の欲を斷ちたれば、是の因縁の故を以て、漏盡きて阿羅漢を得と名くればなり。と。

佛は文殊師利に告ぐらく。諸の菩薩等の、道場に坐する時に、阿耨多羅三藐三菩提を覺悟するや、不や。と。文殊師利の言はく。菩薩は道場に坐するに、阿耨多羅三藐三菩提を覺悟することある無し。何を以ての故ぞ。菩提の相の如きに、少しの法として得可き者ある無きを、阿耨多羅三藐三菩提と名くればなり。無相なる菩提に、誰れか坐し能ふ者ぞ。亦起す者も無けん。是の因縁を以て、菩薩の道場に坐するを見ず。亦阿耨多羅三藐三菩提をも覺證せざるなり。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、菩提は即五逆にして、五逆は即菩提なり。何を以ての故ぞ。菩提と五逆とに、二相無き故なり。覺・無覺無き者、見・無見無き者、知・無名無き者、分別・無分別無き者、是くの如き相を名けて菩提と爲す。五逆の相に見るにも、亦復是くの如し。若し、菩提有るを見て證を取る。と言はゞ、當に知るべし、此の輩は即是れ増上慢の人なるを。と。

爾の時に、世尊は文殊師利に告ぐらく。汝は我れを是れ如來なりと言ひ、亦我れを如來と爲すと

【一】心行に過らば。心・意・識の發動して、對境を取るを謂ふ。

【二】汝は我れを是れ如來なりと言ひ。乃至。是れ如來なりと謂ふべき。異譯本には「汝の意に、如來は是れ汝の師なりと謂ふや、不や。文殊師利は佛に白して言はく。我れは、意を有つて佛は是れ我が師なりと謂ふこと無し。何を以ての故ぞ。世尊、我れすら尙、得可からず。何に況んや、當に意を有つて佛は是れ我が師なりと謂ふべけんや。」とあり。

卷の第一百一十六

文殊師利說般若會 第四十六の二

爾の時に、舍利弗は佛に白して言はく。世尊、文殊師利の説く所の般若波羅蜜の如きは、初學の菩薩の了知し能ふ所に非ず。と。文殊師利の言はく。但初學の菩薩の知り能はざる所なるのみに非らず、諸の二乗の、作す所已に辦ぜざる者に及ぶまでも、亦未だ了知し能はずして、是くの如き説法は知り能ふ者無きなり。何を以ての故ぞ。菩提の相は、實に法として知る可きものある無き故に、見る無く聞か無く、得る無く念ふ無く、生ずる無く滅する無く、説く無く聽く無きなり。是くの如くに、菩提の性相は、空寂にして證する無く知る無く、形無く相無ければ、云何ぞ當に菩提を得る者あるべけん。と。舍利弗は文殊師利に語つて言はく。佛は、法界に於て阿耨多羅三藐三菩提を證せずや。文殊師利子の言はく。不なり、舍利弗。何を以ての故ぞ。世尊は即是れ法界なればなり。若し法界を以て法界を證すとせば、即ち是れ靜論なり。舍利弗、法界の相は即是れ菩提なり。何を以ての故ぞ。是の法界の中には衆生の相無き故に、一切法は空なる故に、一切法の空なるは即是れ菩提にして、二無く分別無き故なり。舍利弗、分別無き中には則ち知る者無く、若し知る者無くば即ち言無く説無く、言説無き相は、即ち有に非ず無に非ず、知に非ず不知に非ずして、一切の諸法も亦復是くの如きなり。何を以ての故ぞ。一切の諸法は、見の處る所ならざる決定の性なる故なり。逆罪の性の如きも思議す可からず。何を以ての故ぞ。諸法の實相は壞る可からざる故なり。是くの如くにして、逆罪にも亦本性無ければ、天上に生ぜず、地獄に墮ちず、亦涅槃にも入らざるなり。何を以ての故ぞ。一切の業縁は皆實際に住して、來らず去らず、因果非ず不因果非ざればなり。何を以ての故ぞ。法界は無邊にして、前無く後無き故なり。是の故に、舍利弗、若し重を犯せる比丘

佛も亦但名字あるのみにして、名字の相の空なるは、卽是れ菩提なれど、名字を以ひて菩提を求めざるは、菩提の相には言無く説無ければなり。何を以ての故ぞ。言説・菩提の二つは、俱に空なる故なり。復次に、舍利弗、汝の問へる、云何なるを佛と名け、云何に佛を觀するか。とは、生ぜず滅せず、來らず去らず、名非ず相非ざる、是れを名けて佛と爲し、自ら身の實相を觀するが如くに、佛を觀することも亦然る、——唯智者の、乃ち知り能ふあるのみ。——是れを佛を觀すと名く。

善男子・善女人にして、若し是くの如き甚深なる般若波羅蜜を聞き、心に決定を得て、驚かず怖れず、没ます悔いすんば、當に知るべし、是の人は即不退轉地に住することを。若し人、是の甚深なる般若波羅蜜を聞きて、驚かず怖れず、信樂し聽受し、歡欣して厭はずんば、是に即、檀波羅蜜・尸波羅蜜・毘提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を具足し、亦能く他の爲めに、分別して説の如くに修行することを顯示せん。と。

佛は文殊師利に告ぐらく。汝は何の義を觀じて、阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提に住するを爲すか。と。文殊師利の言はく。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る無し。我れ佛乘に住せざれば、云何ぞ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき。我が説く所の如きは即菩提の相なり。と。佛は文殊師利を讃じて言はく。善い哉、善い哉。汝の能く是の甚深なる法の中に於て、巧に斯の義を説けることや。汝は先佛に於て久しく善根を種ゑ、無相の法を以て淨く梵行を修したるなり。と。文殊師利の言はく。若し有相を見れば則ち無相を言はんも、我れ今有相を見ず、亦無相をも見ざれば、云何にして無相の法を以て淨く梵行を修せりと言はん。と。佛は告ぐらく。文殊師利、汝は聲聞の戒を見るや。答へて曰はく。見る。佛言はく。汝は云何に見るか。文殊師利の言はく。我れ凡夫の見を作さず、聖人の見を作さず、學の見を作さず、無學の見を作さず、大の見を作さず、小の見を作さず、調伏の見を作さず、不調伏の見を作さずして、見に非ず、不見に非ざるなり。と。舍利弗は文殊師利に語つて言はく。汝今是くの如くに聲聞乘を觀たるが、若し佛乘を觀ぜば、當に復云何なるべきか。と。文殊師利の言はく。菩薩の法を見ざれば、菩提を修行し及び菩提を證する者を見ざるなり。と。舍利弗は文殊師利に語つて言はく。云何なるを佛と名け、云何に佛を觀るか。文殊師利の言はく。云何なるを我れと爲すか。舍利弗は言はく。我とは、但名字あるのみにして、名字の相は空なり。文殊師利の言はく。是くの如し、是くの如し。我の但名字あるのみなるが如くに、

佛は告ぐらく。文殊師利、汝は已に幾所の諸佛を供養せるか。文殊師利の言はく。我れ及び諸佛は、幻化の如く如くなれば、供養と及び受くる者とを見ざるなり。佛は告ぐらく。文殊師利、汝は今佛乘に住せざる可きか。文殊師利の言はく。我が思惟する如くんば、一法をも見ず。云何ぞ當に佛乘に住するを得べき。佛言はく。文殊師利、汝は佛乘を得ざるか。文殊師利の言はく。佛乘の如きは、但名字のみあつて、得可きに非ず、亦見る可からざれば、我れ云何ぞ得ん。佛言はく。文殊師利、汝は無礙智を得たるか。文殊師利の言はく。我れは即ち無礙なれば、云何ぞ無礙を以てして無礙を得ん。佛言はく。汝は道場に坐せるか。文殊師利の言はく。一切の如來すら道場に坐したまはず。我れ今云何ぞ獨り道場に坐せん。何を以ての故ぞ。現に諸法は實際に住せるを見る故なり。佛言はく。云何なるを實際と名くるか。文殊師利の言はく。身見は是の實際と等し。佛言はく。云何なれば、身見は是の實際なるか。文殊師利の言はく。身見の如の相は、實に非ず不實に非ず、來らず去らず、自身にして非身なれば、是れを實際と名くるなり。と。

舍利弗は佛に白して言はく。世尊、若し斯の義に於て諦に了して決定せば、是れを菩薩摩訶薩と名けん。何を以ての故ぞ。能く是くの如き甚深なる般若波羅蜜の相を聞くと、心驚かず怖れず汝ます悔いさればなり。と。彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、是くの如き般若波羅蜜を聞くを得て、法の相を具足せば、是れ即ち佛の坐に近けるなり。何を以ての故ぞ。如來は現に此の法の相を覺りたまへる故なり。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、甚深なる般若波羅蜜を聞くを得て、能く驚かず怖れず、汝ます悔いすんば、當に知るべし、此の人は即是に佛を見ることを。と。爾の時に、復、無相の優婆夷あつて、佛に白して言はく。世尊、凡夫の法・聲聞の法・辟支佛の法・佛の法の是の諸法は、皆無相なり。是の故に、従つて聞く所の般若波羅蜜に於て、皆驚かず怖れず、汝ます悔いざるなり。何を以ての故ぞ。一切の諸法は本無相なる故なり。と。佛は舍利弗に告ぐらく。

【三】 汝は今、佛乘に住せざる可きか。

異譯本には「汝、佛法に住せざるか。」とあり。

【四】 汝は道場に坐せるか。

異譯本には「汝は菩提に住せりや。不や。」とあり。

【五】 如。此の「如」は不變、不異、眞實の義にして即ち「實相」の如なり。

【六】 復、無相の優婆夷あつて。

異譯本には「天女の、無縁と名くるあつて。」とあり。

次に般若波羅蜜を修する時に、恩を作す者を見ず、恩を報ずる者を見ずして、二相を思惟する心に分別無きなり。是れ般若波羅蜜を修するなり。復次に、般若波羅蜜を修する時に、般若波羅蜜を見ざるなり。復次に、般若波羅蜜を修する時に、是の佛法の取る可きを見ず、是の凡夫の法の捨つ可きを見ざるなり。是れ般若波羅蜜を修するなり。復次に、般若波羅蜜を修する時に、凡夫の法の滅す可きを見ず、亦佛の法として心に證知するものを見ず。是れ般若波羅蜜を修するなり。と。佛は文殊師利に告ぐらく。善い哉、善い哉。汝の是くの如くに、善く甚深なる般若波羅蜜の相を説き能ひしことや。是れ諸の菩薩摩訶薩の學ぶ所の法印にして、乃至、聲聞・緣覺・學・無學の人も、亦當に是の印を離れずして道果を修すべきなり。と。佛は告ぐらく。文殊師利、若し人は是の法を聞いて驚かず畏れざることを得る者は、千佛の所に從つて、諸の善根を植ゑたるのみならず、乃ち百千萬億の佛の所に至るまで、久しく徳本を殖ゑたれば、乃ち能く是の甚深なる般若波羅蜜に於て、驚かず怖れざるなり。と。

文殊師利は佛に白して言はく。世尊、我れ今更に般若波羅蜜の義を説かん。と。佛言はく。便ち説け。と。世尊、般若波羅蜜を修する時には、法の是に應に任すべく、是に應に任すべからざるを見ず。亦境界の取捨す可き相をも見ざるなり。何を以ての故ぞ。諸の如來の如きは、一切法の境界の相を見ざるが故なればなり。乃至、諸佛の境界をすら見ず。況んや、聲聞・緣覺・凡夫の境界を取らんや。思議の相を取らず、亦不思議の相をも取らず、諸法に若干の相あるを見ずして、自ら空法の不可思議なるを證するなり。是くの如くに菩薩摩訶薩は、皆已に無量なる百千萬億の諸佛を供養し、諸の善根を種ゑて、乃ち能く是の甚深なる般若波羅蜜に於て、驚かず怖れざるなり。復次に、般若波羅蜜を修行する時には、縛を見ず解を見ずして、凡夫、乃至、三乘に於て、差別の相を見ざるなり。是れ般若波羅蜜を修するなり。と。

るは、是れ般若波羅蜜を修するなり。世尊、心に怖こひひ取ること無く、法相の取る可き者あるを見ざるは、是れ般若波羅蜜を修するなり。世尊、好醜こうしゆを見ず、高下を生ぜず、取捨とつせを作さざるなり。何を以ての故ぞ。法に好醜無きは諸相を離るる故に、法に高下無きは法性に等しき故に、法に取捨無きは實際に住する故なればなり。是れ般若波羅蜜を修するなり。と。佛は告ぐらく。文殊師利、是れば諸の佛法は不勝を得るか。文殊師利の言はく。我れ諸法に勝如しょうにょの相有るを見ず。如來は自ら一切の法の空なるを覺りたまへば、是れ證知す可きなり。佛は告ぐらく。文殊師利、是くの如し、是くの如し。如來正覺は自ら空法を證したればなり。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、是の空法の中に、當に勝如として得可きものありや。佛言はく。善い哉、善い哉、文殊師利、汝の説く所の如きは是れ眞法なるか。とて、文殊師利に謂うて言はく。阿耨多羅是れを佛法と名く。法の得可き無きを、阿耨多羅と名くれればなり。と。文殊師利の言はく。是くの如くに、般若波羅蜜を修するを法器とは名けず。凡夫を化する法に非ず、亦佛の法に非ず、増長の法にも非ざればなり。是れ般若波羅蜜を修するなり。と。

復次に、世尊、般若波羅蜜を修する時には、法の分別思惟す可きあるを見ざるなり。と。佛は告ぐらく。文殊師利、汝、佛の法に於て思惟せざるか。文殊師利の言はく。不ふなり、世尊。我が思惟する如くんば、佛の法を見ず、亦是れ凡夫の法。是れ聲聞の法。是れ辟支佛の法なるを分別す可からずして、是くの如きを名けて、無上の佛法と爲せばなり。復次に、般若波羅蜜を修する時に、凡夫の相を見ず、佛法の相を見ず、諸法に決定せる相あるを見ざる、是れを般若波羅蜜を修すと爲すなり。復次に、般若波羅蜜を修する時に、欲界を見ず、色界を見ず、無色界を見ず、寂滅界を見ざるなり。何を以ての故ぞ。法の是の盡滅の相あるを見ざればなり。是れ般若波羅蜜を修するなり。復

【四】衆生界の相は。乃至。獨、空の住するが如し。

異譯本には「若し復、汝に、衆生界は何處に住するかと問はば、當に云何に答ふべきか。世尊、我れ當に答へて言ふべし。涅槃界に住すと。」とあり。

【五】一切の法に於て。乃至。亦、増も無く減も無きなり。異譯本には「法の増を爲さず、法の減を爲さざるは、是れ般若波羅蜜を修するなり。」とあり。

【五】勝如の相。「勝」と曰ふ如き相の意なり。即ち此の「如」は「事相の如」の使用法なり。

法の中にて、一法として當に得可きことある無き故なり。と。

爾の時に、佛は文殊師利に告ぐらく。若し衆生無くば、云何ぞ衆生及び衆生界ありと説くか。と。

文殊師利の言はく。衆生界の相は諸佛界の如きなり。と。又問はく。衆生界には是れ量ありや。答

へて曰はく。衆生界の量は佛界の量の如きなり。又問はく。衆生界の量は處る所有りや。不や。答

へて曰はく。衆生界の量は思議す可からず。又問ふ。衆生界の相は住すること有りと爲すや。不や。答

へて曰はく。衆生は住する無きこと、猶空の住するが如し。と。佛は告ぐらく。文殊師利、是く

の如くならば、般若波羅蜜を修する時に、當に云何に般若波羅蜜に住すべきか。文殊師利の言はく。

法に住せざるを以て、般若波羅蜜に住することを爲すなり。佛は復問はく。文殊師利、云何にして

法に住せざるを般若波羅蜜に住すと名くるか。文殊師利の言はく。住する無き相を以て即般若波羅

蜜に住すればなり。と。佛は復告ぐらく。文殊師利、是くの如くに般若波羅蜜に住する時に、是の

諸の善根は、云何に増長し云何に損減するか。文殊師利の言はく。若し能く是くの如くに般若波羅

蜜に住せば、諸の善根に於て増無く減無し。一切の法に於ても亦増も無く減も無ければ、是の般若

波羅蜜の性相も亦増も無く減も無きなり。世尊、是くの如くに般若波羅蜜を修すれば、則ち凡夫の

法を捨てず、亦賢聖の法をも取らざるなり。何を以ての故ぞ。般若波羅蜜には、法の取る可き捨つ

可きあるを見ざればなり。是くの如くに般若波羅蜜を修すれば、亦涅槃の樂ふ可く生死の厭ふ可き

をも見ざるなり。何を以ての故ぞ。生死をすら見ず、況んや復厭離することをや。涅槃をすら見ず、

何に況んや樂著することをや。是くの如くに般若波羅蜜を修すれば、垢惱の捨つ可きを見ず、亦功

徳の取る可きをも見ずして、一切の法に於て心に増減無きなり。何を以ての故ぞ。法界に増減ある

を見ざる故なり。世尊、若し能く是くの如くならば、是れを般若波羅蜜を修すと名くるなり。世尊、

諸法の生あり滅あるを見ざるは、是れ般若波羅蜜を修するなり。世尊、諸法の増あり減あるを見ざ

は舍利弗に答ふらく。菩提は實に得可からざれば、我れ當に何の法を説きて、衆生をして得しむべきか。何を以ての故ぞ。舍利弗、菩提と衆生とは、一ならず二ならずして異らず、無爲・無名・無相にして有つ所無ければなり。とあり。

【四〇】若し衆生界無くば。乃至。諸佛界の如きなり。乃至。諸佛界の如きなり。此の前に別種の事を述べて、而して「若し人あつて、汝に幾の衆生界あるかと問はば、汝は云何に答ふるか。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、若し人は是くの如き間を作さば、我れは當に答へて言ふべし。衆生界の數は如來界の如し」とあり。

【四一】衆生界には。乃至。佛界の量の如きなり。乃至。佛界の量の如きなり。「若し復、汝に、衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四二】衆生界の量は。乃至。思議す可からず。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四三】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四四】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四五】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四六】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四七】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四八】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【四九】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五〇】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五一】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五二】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五三】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五四】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五五】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五六】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

【五七】衆生界の量は。乃至。衆生界の廣狭云何を問はば、乃至。世尊、若し人、是くの如き問を爲さば、我れは當に答へて言ふべし。佛界の廣狭の如し」とあり。

る・三世に非ざる不三世に非ざる・二に非ざる相・垢に非ざる相・淨に非ざる相を觀じ、是等の如きを以て如來の衆生を利益したまふことを正しく觀ぜんと樂へばなり」と。佛は文殊師利に告ぐらく。若し能く是くの如くに如來を見れば、心に取る所無く亦取らざる無く、積聚するに非ず積集せざるに非ざるなり」と。

爾の時に、舍利弗は、文殊師利に語つて言はく。若し能く是くの如くならば、汝の説く所の如くに如來を見る者は、甚だ希有と爲さん。一切衆生の爲めの故に如來を見れども、而も心に衆生の相を取らず。一切衆生を化して涅槃に向はすれども、而も亦涅槃に向ふ相を取らず。一切衆生の爲めに大莊嚴を發せども、而も心に莊嚴の相を見ざればなり」と。爾の時に、文殊師利童眞菩薩摩訶薩は、舍利弗に語つて言はく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如し。一切衆生の爲めに大莊嚴を發すと雖も、心に恒に衆生の相あるを見ず。一切衆生の爲めに大莊嚴を發せども、而も衆生界も亦増さず減らず、假使一佛世に住すること、若しは一劫に若しは一劫を過し、此くの如き一佛の世界に、復無量無邊なる恒河沙の諸佛あつて、是くの如き一一の佛は、若しは一劫に若しは一劫を過して晝夜に法を説き、心暫くも息まずして、各各無量なる恒河沙の衆生を度して、皆涅槃に入らしむとも、而も衆生界も亦増さず減らざるなり。乃至、十方の諸佛世界にも亦復是くの如くに、一の諸佛は、法を説き教化して、各無量なる恒河沙の衆生を度して、皆涅槃に入るとも、衆生界に於て亦増さず減らざるなり。何を以ての故ぞ。衆生の定相は得可からざる故に、是の故にて衆生界は増さず減らざるなり」と。舍利弗は復文殊師利に語つて言はく。若し衆生界は増さず減らすんば、何を以ての故に、菩薩は諸の衆生の爲めに阿耨多羅三藐三菩提を求めて、常に法を説くことを行するか。と。文殊師利は佛に白して言はく。若く諸の衆生は悉く空相なれば、亦菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を求むること無く、亦衆生に而ち法を説くを爲すこと無し。何を以ての故ぞ。我が説く

【註】(1) 又「拘絀耻羅」と書す。舍利弗の舅たりし謂はゆる長爪梵志にして、羅漢と爲れり。

【註】我れは衆生を利益せんことを。乃至。積集せざるに非ざるなり。異譯本「文殊師利所說般若波羅蜜經」梁、僧伽婆羅、譯には「併せて甘露の妙法を開かん」と欲願すればなり等」とありて、其の説述の方法同じからず。

【釋】舍利弗は、乃至。當に得可きことある無き故なり。

異譯本の此れに當るべき者は「舍利弗言はく。若し一切衆生は虚空と等しくば、汝、何故に衆生の爲めに法を説きて、菩提を得しむるか。文殊師利

を發し、無量の比丘は法眼淨を得たり。

佛の此の經を説き已りたまふや、無盡無菩薩及び諸の比丘・世間の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、皆大に歡喜して信受し奉行せり。

文殊說般若會 第四十六の一

梁 曼陀羅仙 漢譯

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は舍衛國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘僧の満足せる千人・菩薩摩訶薩の十千人と俱なりき。大莊嚴を以て自ら莊嚴し、皆悉く已に不退轉地に住せるなり。其の名を彌勒菩薩・文殊師利菩薩・無礙辯菩薩・不捨擔菩薩と曰ひ是等の如きの大菩薩と俱なりき。文殊師利・童眞菩薩摩訶薩は、明相の現れる時に、其の住所より佛の所に來り詣り、外に在つて立てり。

爾の時に、尊者、舍利弗・富樓那彌多羅尼子・大目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶拘絺羅の是等の如き諸の大聲聞は、各住處より俱に佛の所に詣り、外に在つて立ちしに、佛は衆會の皆悉く集れるを知り已つて、爾の時に、如來は住處より出で、座を敷きて坐し、舍利弗に告ぐらく。汝今何故に、晨朝の時に於て門外に在つて立つか。と。舍利弗は佛に白して言はく。世尊、文殊師利童眞菩薩は、先に已に此に至つて、門外に住つて立てり。我れ實に後に於て、晚く來り到れるのみ。と。爾の時に、世尊は文殊師利に問はく。汝實に先に此の住處に來り到つて、如來を見んと欲せるか。と。文殊師利は、即佛に白して言はく。是くの如し。世尊、我れ實に此に來つて、如來に見えんと欲せり。何を以ての故ぞ。我れは衆生を利益せんことを正しく觀するに、我れ如來の如如の相・不異の相・不動の相・不作の相・無生の相・無滅の相・有ならざる相・無ならざる相・方に在らざる方を離れざ

【四】大莊嚴を以て自ら莊嚴し、等。

一般に菩薩の具足すべき種種の功德を成就せるを謂ふ。

【五】童眞(Kumarabhrta)。

即ち兜摩囉・淨多の直譯にして眞童(印度にて、八歳未滿を童と曰ふ)の義なり。文殊の釋尊在世中に、梵德婆羅門の家に生れて(文殊師利般涅槃經に據る)未だ幼童なりし頃の稱にして、又童子とも曰ふ。又童眞は沙彌の別名に使ふことあり。

【六】明相の現れる時。

拂曉、即ち「夜明けの頃」を謂ふ。

【七】摩訶迦旃延(Mahākāśyapa)。

又「迦多衍那」と書す。迦旃延は姓にして、同姓中最も尊大なりとの義なり。佛の十弟子の一人たり。

【八】摩訶拘絺羅(Mahākau-

爾の時に、會中に一の天子の、無礙光明師子幢と名くるありしが、坐よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛に白して言はく。世尊、希有なり。華逝、是くの如き法門の甚深廣大にして、能く一切の佛法を合攝することや。と。是に於て佛は無礙光明師子幢に告げて言はく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如し。善男子、若し菩薩あつて、此の法門に於て暫くも能く聽受せば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざるなり。何を以ての故ぞ。彼の善男子。善女人は、曾て諸の善根を種ゑたる故に、諸の善根を成熟せる故にて、是くの如き經典を聞くを得て、是の經典の印する所と爲る故なり。善男子、若し男子・女人あつて、此の經典を聞きて、種うる所の善根は悉く皆清淨ならば、當に佛を見、法を聞き、衆僧を供養し、衆生を成熟することを捨離せざるを得、海印の陀羅尼を捨離せざるを得、出現無盡の陀羅尼を捨離せざるを得、衆生の欲樂の心行に入る陀羅尼を捨離せざるを得、清淨なる日光幢の陀羅尼を捨離せざるを得、無垢なる月光幢の陀羅尼を捨離せざるを得、一切の結を息むる陀羅尼を捨離せざるを得、無邊にして堅きこと金剛山の如き煩惱を摧滅することの陀羅尼を捨離せざるを得、平等なる法性の言説に入る陀羅尼を捨離せざるを得、眞實なる語言・音聲に入る陀羅尼を捨離せざるを得、虚空の如くに無邊なる清淨を顯現する印を印する所の陀羅尼を捨離せざるを得、無邊なる佛身を成就し顯現する陀羅尼を捨離せざるを得るなり。善男子、若し菩薩は是くの如き諸の陀羅尼を成就せば、能く十方の一切の刹土に於て、佛身を變現して衆生を教化し、然も法性に於ては、而ち來・去無く亦復教化する衆生を有つ無く、説く所の法に於ても、文字に著せず、平等にして動く無く、現身は生死すと雖も而も起滅無く、亦少法も去・來する者ある無く、諸行の本來寂靜なるを了知して、佛の法に安住するなり。何を以ての故ぞ。彼の一切の諸法は、分別無き故なり。と。是の法を説ける時に、衆中の三萬の菩薩は、無生法忍を得、無量の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざるを得、無量の衆生は、菩提の心

方便波羅蜜を成就して大悲心を發し、又、修惑を斷じ、二乘の自度を遠離する位なり。

【毛】不動地(Immobilis)。願波羅蜜を成就し、修惑を斷じ、無相觀を發して、任運無功用即ち不動に相續する位なり。

【元】善慧地(Sadharmati)。力波羅蜜を成就し、修惑を斷じ、十力を具足して、一切の處に於て、度す可きと度す可からざるとを知つて、善く説法する位なり。

【元】法雲地(Dharmamegha)。智波羅蜜を成就し、又、修惑を斷じ、無邊の功徳を具足し發生すること、大雲の、空虚空を覆うて大水を降らすが如き位なり。

り。菩薩は將に第九の 善慧地に住せんとするに、先づ是の相——自身に轉輪王と爲つて、正法を以て教化して、無量なる百千億那由他の諸王の圍遶する所と爲り、種種なる寶にて嚴りたる鮮白の蓋にて、菩薩の上を蓋へるを見る。——あり。菩薩は將に第十の 法雲地に住せんとするに、先づ是の相——自身は眞金色と爲り、如來の三十二種の大丈夫の相を具足し、圓光は一尋にして、高廣なる師子の座に安に處り、無量なる百千億那由他の梵天の、前後に圍遶して、恭敬し供養して說法を聽くを見る。——あり。善男子、菩薩摩訶薩は三昧の力を以て、是くの如き十地の先相を顯現するなり。

復次に、善男子、初地の菩薩は施波羅蜜を圓滿し、二地の菩薩は戒波羅蜜を圓滿し、三地の菩薩は忍波羅蜜を圓滿し、四地の菩薩は精進波羅蜜を圓滿し、五地の菩薩は禪波羅蜜を圓滿し、六地の菩薩は般若波羅蜜を圓滿し、七地の菩薩は方便波羅蜜を圓滿し、八地の菩薩は力波羅蜜を圓滿し、九地の菩薩は願波羅蜜を圓滿し、十地の菩薩は智波羅蜜を圓滿するなり。

復次に、善男子、菩薩は、初の發心に不退轉三昧を得、第二の發心に善住三昧を得、第三の發心に不動三昧を得、第四の發心に不退轉三昧を得、第五の發心に寶華三昧を得、第六の發心に日輪光明三昧を得、第七の發心に成就一切義三昧を得、第八の發心に智炬三昧を得、第九の發心に現證佛法三昧を得、第十の發心に首楞嚴三昧を得るなり。

復次に、善男子、菩薩は、初地の中に於て殊勝加持の陀羅尼を得、第二地の中に於て無能勝の陀羅尼を得、第三地の中に於て善住の陀羅尼を得、第四地の中に於て不可壞の陀羅尼を得、第五地の中に於て無垢の陀羅尼を得、第六地の中に於て智輪燈の陀羅尼を得、第七地の中に於て殊勝行の陀羅尼を得、第八地の中に於て清淨分別の陀羅尼を得、第九地の中に於て示現無邊法門の陀羅尼を得、第十地の中に於て無盡法藏の陀羅尼を得るなり。と。

本生・未曾有・經・譬喻・論議・自說經・方廣・授記是れなり。〔二〕歡喜地 (Pramuditā)。菩薩は、第一阿僧祇劫の行を了へ、布施波羅蜜を成就し、初めて聖性を得て見惑を破し二空の理を證して大歡喜を生ずる位なり。

〔三〕離垢地 (Vimūṭhi)。戒波羅蜜を成就して、修惑を斷じ、戒の毘梨の垢を離れて、身を清淨ならしむる位なり。

〔四〕明地 (又、發光地) (Pratyakhyati)。忍波羅蜜を成就して、修惑を斷じ、諸察法忍を得て、智慧の光を明發する位なり。

〔五〕焰地 (又、焰慧地) (Aśrojanati)。精進波羅蜜を成就し、修惑を斷じて、慧の性をして、非常に盛ならしむる位なり。

〔六〕雜勝地 (又、極雜勝地) (Sudhīkhyati)。禪定波羅蜜を成就し、修惑を斷じて、眞俗二智の行相の互に逆背するを、合して一致せしむる位なり。

〔七〕現前地 (Abhinīkhyati)。慧波羅蜜を成就し、修惑を斷じて、最勝智を發し、染淨の差別無きを現前せしむる位なり。

〔八〕遠行地 (Dūramgama)。

故に。智を以て如來の一切智を具足する故に。無生法忍を得る故に。不退轉地を得る故に。淨く佛刹を治むる故に。衆生を成熟する故に。菩提の道場に於て一切の如來の智を圓滿する故に。衆の魔を降伏する故に。四神足に遊ぶ故に。生死・涅槃に於て俱に住する無き故に。一切の聲聞・獨覺・菩薩の功德に超過する故に。一切の諸の異論を摧伏する故に。十力・四無所畏・不共の佛法を成就する故に。無上正等覺を證得する故に。十二種の法輪を轉ずる故に。是くの如き一切は、是れ波羅蜜の義なり。

復次に、善男子、菩薩摩訶薩は、將に初の歡喜地に住せんとするに、先づ是の相——三千大千世界の中に、有つ所の百千億那由他の衆寶の伏藏を見る。——あり。菩薩は將に第二の離垢地に住せんとするに、先づ是の相——三千大千世界の地の平なること掌の如くにして、無量なる百千億那由他の衆寶の蓮華にて清淨に嚴飾せるを見る。——あり。菩薩は將に第三の明地に住せんとするに、先づ是の相——自身に甲を被、仗を持ち、勇猛堅固に怨敵を摧伏するを見る。——あり。菩薩は將に第四の焰地に住せんとするに、先づ是の相——四方に風吹きて、種種なる名華の地に布き散るを見る。——あり。菩薩は將に第五の難勝地に住せんとするに、先づ是の相——女人の首に、阿提目多華の鬘、婆利師迦華の鬘、瞻葡迦華の鬘を戴き、身に種種なる衆の莊嚴の具を佩べるを見る。——あり。菩薩は將に第六の現前地に住せんとするに、先づ是の相——華池には八功德の水澄淨に盈ち滿ち、底に金の沙を布き、寶階は四道にして、又、池中に於て優鉢羅華・波頭摩華・俱勿頭華あるを見、復、分陀利華にて莊嚴を爲せるを見、復、自身は中に於て遊戲せるを見る。——あり。菩薩は將に第七の遠行地に住せんとするに、先づ是の相——自身の左右の兩邊に皆地獄あるに、彼より超過して傷害せらるる無きを見る。——あり。菩薩は將に第八の不動地に住せんとするに、先づ是の相——自身の兩肩に師子王の相を被り、一切の諸獸は悉く皆怖畏するを見る。——あり。

【一】 欲望を知る力なり。【四】 知世間種種性力(Anā-dhatu-
jñāna-balaṃ)世間・衆生の種
類異なる性質・境遇を知る力
なり。【五】 知他衆生諸根上
下力(Indriya-vatvāra-jñā-
na-balaṃ)衆生の知解・諸根
道智力(Sāvitrī-gīṃṃi-
prāpti-jñāna-balaṃ)一切
の境界・即ち三界及び涅槃に
至る道を知る力なり。【七】 知
諸禪三昧力(Sarva-dhyāna-
vīmaṃśa-samāhi-samā-
pti-jñāna-balaṃ)有
禪と定とを知る力なり。【八】
知宿命智力(Diva-jāva-
nānasmṛti-jñāna-balaṃ)衆
生の前世の境界を知る力なり。
【九】 得天眼智力(Dyāv-utp-
āda-jñāna-balaṃ)一切の色
相及び衆生の未來に於ける生
死等を知る力なり。【十】 得
漏盡智力(Aśrava-kṣaya-jñā-
na-balaṃ)一切の煩惱を斷
盡することを知る力なり。【是
れなり】。

【一七】 無畏。
【一八】 無所畏なり。
【一六】 不共の佛法。
【一八】 不共法を謂ふ。
【元】 十二種の法。
一切經を十二種に分ちたる者
にして謂はゆる十二部經(契
經・重頌・孤起頌・因緣經・本事

を十と爲す。善男子、菩薩は「願波羅蜜」を行ずるに、十法を以て首と爲す。一には、一切法の無生なるを知るなり。二には、一切法の無相なるを知るなり。三には、一切法の無滅なるを知るなり。四には、一切法の無所有なるを知るなり。五には、一切法に於て執著する無きなり。六には、一切法の無來なるを知るなり。七には、一切法の無去なるを知るなり。八には、一切法の無自性なるを知るなり。九には、一切法の初・中・後無く平等なるを知るなり。十には、一切法に於て初・中・後に分別する無きなり。是れを十と爲す。善男子、菩薩は「智波羅蜜」を行ずるに、十法を以て首と爲す。一には、一切法に於て善く了知し決擇し能ふなり。二には、善く白法を圓滿し能ふなり。三には、菩薩の無量なる資糧を積集するなり。四には、廣大なる福・智の資糧を成就するなり。五には、大悲を圓滿するなり。六には、種種なる差別の世界に入るなり。七には、一切衆生の諸の煩惱行に入るなり。八には、意を作して如來の境界に入るなり。九には、十力・無畏・不共の佛法の殊勝なる境界に趣入するなり。十には、灌頂の位を受けて、一切智なる最勝の相を成就するなり。是れを十と爲す。善男子、是れを諸の菩薩摩訶薩は十波羅蜜を行ずるに、皆十法を以て首と爲すと爲すなり。

復次に、善男子、云何なるを波羅蜜の義と爲すか。謂はゆる、一切の聲聞・獨覺の行ずる所に超過することを明示する故に。廣大に如來の智を圓滿する故に。有爲・無爲に於て執著せざる故に。實の如くに生死の過を了知する故に。諸の未だ覺せざる者を悉く覺せしむる故に。如來の盡くる無き法藏を得る故に。無礙の解脱を得る故に。布施を以て諸の衆生を度脱する故に。持戒を以て本の誓願を圓滿する故に。忍辱を以て端嚴の相を具足する故に。精進を以て諸の佛法を究竟する故に。禪定を以て四無量を出生する故に。般若を以て諸の煩惱を滅除する故に。方便を以て諸の佛法を積集する故に。願を以て能く佛法をして圓滿せしむる故に。力を以て能く衆生をして淨信ならしむる

【一〇】力。前の「根」の作用活動の増進して、勢力有る者を謂ふ。

【一一】智。

【一二】方便波羅蜜 (Upaya-paramita)。

此れに趣向の方便善巧と拔濟の方便善巧との二種あり。

【一三】力波羅蜜 (Bala-paramita)。

此れに修習の力と思擇の力との二種あり。

【一四】願波羅蜜 (Pratidāna-paramita)。

此れに菩提を求むる願と他を利樂する願との二種あり。

【一五】智波羅蜜 (Jñāna-paramita)。

此れに法樂を受用する智と有情を成熟する智との二種あり。

因みに、以上の四波羅蜜は、「六波羅蜜」の第六「般若波羅蜜」を開いて立てたる者なり。

【一六】十力 (Daśa-bala) (Balānā)。

佛の具へたる十種の智力にして、一は、知是處非處力 (Anāyatana-jñāna-bala)。

(事の合理と不合理とを知る力なり) 二に、知三世業報力 (Kamma-vijñāna-jñāna-bala)。

(衆生の三世の因果・業報を知る力なり) 三に、知他衆生種種欲力 (Nāmadhammā

なり。七には、煩惱の怨を破るなり。八には、諸法を觀察するなり。九には、一切の衆生を成熟するなり。十には、一切智を求むるなり。是れを十と爲す。善男子、菩薩は禪波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には、善法に安住するなり。二には、心一境を緣するなり。三には、緣する境に等しく至るなり。四には、正しく定るなり。五には、禪解脱するなり。六には、根を定むるなり。七には、力を定むるなり。八には、煩惱の怨を壊るなり。九には、定の聚の圓滿なり。十には、法の三昧を護るなり。是れを十と爲す。善男子、菩薩は般若波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には、善く、諸陰を觀察するなり。二には、善く、界處を觀察するなり。三には、正しく見るなり。四には、正しく念するなり。五には、聖諦を了知するなり。六には、諸見を捨て離るるなり。七には、根を慧にするなり。八には、無生法をば忍するなり。九には、力を慧にするなり。十には、智に障礙無き。是れを十と爲す。善男子、菩薩は方便波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には、諸の衆生の心行の欲樂に入るなり。二には、力を以て諸の衆生に加ふるなり。三には、大慈・大悲なるなり。四には、衆生を成熟して厭倦する無きなり。五には、聲聞・辟支佛を捨て離るるなり。六には、殊勝智にて見るなり。七には、諸の波羅蜜を修習するなり。八には、實の如くに諸法を觀するなり。九には、不思議力を攝むるなり。十には、地を退轉せざるなり。是れを十と爲す。善男子、菩薩は力波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には、一切衆生の心行の稠林を知るなり。二には、一切衆生の煩惱行の稠林を知るなり。三には、一切衆生の意樂・勝解の稠林を知るなり。四には、一切衆生の根行の稠林を知るなり。五には、一切衆生の種種なる界行の稠林を知るなり。六には、一切衆生の隨煩惱行の稠林を知るなり。七には、一切衆生の死生行の稠林を知るなり。八には、一切衆生の三世の業報の行の稠林を知るなり。九には、一切衆生の習氣の煩惱行の稠林を知るなり。十には、疲倦無き心を以て衆生の諸の根行の稠林を成熟するなり。是れ

- 【七】 念處。
- 【八】 緣する境に等しく至る。
- 【四念處】を謂ふ。
- 【九】 正しく定るなり。
- 【一〇】 禪解脱。
- 【一】 禪に於ける解脱なり。第一卷「解脫」の解、參照。
- 【二】 根を定むるなり。
- 【三】 力を定むるなり。
- 【四】 諸陰。
- 【五】 慧。
- 【六】 忍。
- 【七】 界。
- 【八】 界處。
- 【九】 界。
- 【一〇】 界。
- 【一】 界。
- 【二】 界。
- 【三】 界。
- 【四】 界。
- 【五】 界。
- 【六】 界。
- 【七】 界。
- 【八】 界。
- 【九】 界。
- 【一〇】 界。

作す所成辦すること、譬へば貧人の無盡の藏を得て、願ふ所圓滿するが如くならんとせば、是れ第九の發心にして願波羅蜜の因と爲す。福・智の無邊なること、猶虚空の如くに、法に於て自在なること、轉輪王の已に灌頂を受けたるが如くならんとせば、是れを第十の發心にして、智波羅蜜の因と爲す。善男子、若し此の十種の發心を修習して成就せば、名けて菩薩と爲し、名けて最勝の衆生、障礙無き衆生下劣に非ざる衆生と爲すなり。然れども、實義は不可得なる故を以て、其の中に於て、衆生無く、心無く、菩提無きなり。

復次に、善男子、菩薩は施波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には、信根なり。二には、信力なり。三には、意樂なり。四には、増上なる意樂なり。五には、衆生を饒益するなり。六には、大慈なり。七には、大悲なり。八には、四攝の法を行ふなり。九には、佛法を愛樂するなり。十には、一切智を求むるなり。是れを十と爲す。善男子、菩薩は戒波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には、身業の清淨なり。二には、語業の清淨なり。三には、意業の清淨なり。四には、怨害の心無きなり。五には、惡趣を淨め除くなり。六には、八難を遠離するなり。七には、諸の聲聞・辟支佛地に超ゆるなり。八には、佛の功德に安住するなり。九には、諸の希望を滿すなり。十には、大願を成就するなり。是れを十と爲す。善男子、菩薩は忍波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には、瞋恚を捨て離るるなり。二には、其の身を計せざるなり。三には、其の命を計せざるなり。四には、信解するなり。五には、衆生を成熟するなり。六には、慈力なり。七には、法に隨順する忍なり。八には、甚深なる法の忍なり。九には、廣大なる勝忍なり。十には、無明の暗を破するなり。是れを十と爲す。善男子、菩薩は精進波羅蜜を行するに、十法を以て首と爲す。一には諸の衆生の作す所に隨つて作すなり。二には、身・口・意の業に、常に隨喜を生ずるなり。三には、懈怠無きなり。四には、務めて進趣するなり。五には、正勤を修するなり。六には、念處を修する

【五】首。
「標的」の意なるべし。

【六】正勤。
「四正勤」を謂ふ。

現在に非ず。若し此の義を知らば、是れを菩薩と名く。然れども、其の中に於ても亦得可からずして、一切の法に於て都べて得る所無しとする、是れを菩提心を得と名く。阿羅漢の阿羅漢果を得るが如きも、而ち此の中に於て都べて得る所無し。唯俗に隨ひ、説いて果を得と言ふのみ。一切の法に於て皆得る所無く、菩提の心も亦復是くの如くなれど、初業の菩薩を引き攝めんと欲する爲めの故に、菩提心を説くのみ。然れば、其の中に於ては、心無く心の名も無し。菩提無く菩提の名も無し。衆生無く衆生の名も無し。聲聞無く聲聞の名も無し。獨覺無く獨覺の名も無し。菩薩無く菩薩の名も無し。如來無く如來の名も無し。有爲無く有爲の名も無し。無爲無く無爲の名も無し。現に得ること無く、當に得べきこと無し。

善男子、我れ今言説に依らば、是くの如くに敷演せん。若し諸の衆生あつて、善根廣大にして諸の衆生に超ゆること、須彌山の一切に出過する如くならんとせば、是れ初の發心にして、施波羅蜜の因と爲す。猶大地の如くに善く能く一切の事業に安住せんとせば、是れ第二の發心にして、戒波羅蜜の因と爲す。志意勇猛に煩惱を安受すること、師子王の衆の獸を威伏して、身に怖畏無きが如くならんとせば、是れ第三の發心にして、忍波羅蜜の因と爲す。勢力雄迅に能く煩惱を伏すること、那羅延の異なる衆を摧伏するが如くならんとせば、是れ第四の發心にして、精進波羅蜜の因と爲す。功德善根を種種に開發すること、波利質多・但鞞陀羅樹の、其の華の開け敷くが如くならんとせば、是れ第五の發心にして、禪波羅蜜の因と爲す。癡の暗を除去すること、猶日輪の光明の無邊なる如くならんとせば、是れ第六の發心にして、般若波羅蜜の因と爲す。功德の意樂を一切莊嚴して、皆圓滿を得ること、大商主の、財物を豐足するに、能く巧便を以て衆の險難を抜くが如くならんとせば、是れ第七の發心にして、方便波羅蜜の因と爲す。障礙除滅の意樂の具足すること、淨き滿月の如くならんとせば、是れ第八の發心にして、力波羅蜜の因と爲す。佛土・衆生皆悉く嚴淨に、善法備り足り、

【三】若し諸の衆生あつて、乃至、智波羅蜜の因と爲す。是れ謂はゆる「十波羅蜜」の因を擧げたるなり。

【四】般若波羅蜜。即ち「智波羅蜜」に對する「慧波羅蜜」なり。

卷の第一百一十五

唐 菩提流志 漢譯

無盡慧菩薩會 第四十五

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は王舍城の耆闍崛山に在して、大比丘の衆千二百五十人と俱なりき。爾の時に、復、一萬の菩薩摩訶薩あつて俱なりき。謂はゆる、慧幢菩薩・法幢菩薩・月幢菩薩・日幢菩薩・無邊幢菩薩なり。復、十六の在家の菩薩あつて、跋陀婆羅は而ち上首爲り。復六十の比喩無き心の菩薩摩訶薩あつて、文殊師利は而ち上首爲り。復、賢劫の一切の菩薩摩訶薩あつて、彌勒菩薩は而ち上首爲り。復、六萬の菩薩摩訶薩あつて、無盡慧菩薩は而ち上首爲り。

爾の時に、無盡慧菩薩は、即、坐より起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、頭面にて禮敬し、衆の寶華を以て佛に散じ奉つて、佛に白して言はく。世尊、言ふ所の菩提心とは、何の義を以ての故に菩提心と説きたまふか。菩薩は復幾の法を以て菩提心を成就するか。云何なるは是れ菩提心なるか。菩提の中に心は得可からずして、心の中にも菩提は亦得可からず。菩提を離れて心は得可からずして、心を離れても菩提は亦得可からず。菩提には色無く相無くして、言説す可からず。心にも亦色無く相無くして顯示すべからず。衆生も亦爾く、皆得可からず。世尊、諸法は是くの如くなるに、當に何の義に依つて修行するを得べきか。と。

佛言はく。善男子、汝今我が説くことを諦に聽け。菩提には本より名字・言説無し。何を以ての故ぞ。菩提の中に於ては、名字・言説は得可からざる故なり。心及び衆生も亦復是くの如し。若し是くの如くに知らば、菩提の心と名く。菩提は過去・未來・現在に非ず。心及び衆生も亦過去・未來・

【一】跋陀婆羅。
「跋陀羅波梨」の略稱なり。
【二】無盡慧 (Aksaya-mati) 菩薩。

の諸の衆生は、已に諸佛の攝取する所と爲れることを。と爾の時に、佛は阿難に告ぐらく。若し是の經を受持する者あらば、已に先佛に於て諸の善根を種えたる故に、今此の經を得て讀誦し通利せんと欲するなり。解脱を得んと欲する謂はゆる善男子・善女人は、若しは出家して學び、若しは在家にして學ばば、此の法門にて、能く諸の漏を斷じて亦涅槃をも得ん。と。

阿難は佛に白して言はく。世尊、我れ此の經を受持せんと欲するに、當に何と此の經に名け、云何に受持すべきか。と。佛は阿難に告ぐらく。此の經を、一切の法寶を選擇すと名け、亦、聖種の儀式に安住すとも名け、亦、持戒の者を攝取すとも名け、亦、破戒の者を節解すとも名け、亦、寶梁とも名け、亦、寶取とも名け、亦、寶藏とも名け、亦、諸寶の法門とも名く。と。摩訶迦葉の間へる大乘の寶梁の經竟るや、諸の比丘衆は、佛の所説を聞きて歡喜して奉行せり。

尊重・讚歎する者無けん。何を以ての故ぞ。彼の在家の人は、輕躁・淺薄にして、現世の利を見、後世の利を見ずして、彼の在家の人は、是くの如き心を生ずればなり。此の比丘の邊にては、利益を得んと親近を用ひ、禮敬・尊重・讚歎を用ふることを爲すとも、貧窮の人を除くことを爲さざればなり。と。少善根の者なれども宿縁にて應に敬ふべき者、迦葉、是くの如き人等は、親近して持戒の比丘を禮敬し尊重し讚歎して、以て善知識と爲すのみ。

迦葉、是くの如くに説き已るは、二種の人を稱可する意なり。何等か二なる。一には、若く四聖諦を見るものなり。二には、若く生死の過患を見るものなり。復、二つあり。一には、勤め行じて四扼を離れんと欲するものなり。二には、沙門の果を得んと欲するものなり。復、二つあり。一には、専ら業報を念するものなり。二には、諸法の相の義を知らんと欲するものなり。迦葉、我れ今一切の懈怠者の門を閉塞す。謂はゆる、業を知らず業の報を知らざる者、善儀式を離るる者、後世の過惡を見ず、喻へば、金剛の如くに現世の利を見て、後世の利を見ずして、一念も解脱の門に向ふことを生ぜざる者なり。迦葉、我れ今彼の惡比丘の、應に希望に應ぜざることを説かん。若しくば是くの如き法を説かば、若しくば是くの如き法に遇はば、是くの如き法を聞き已るや、自ら行へる所を知れば、深法を解せずして之れを誹謗して謂はん。佛の説に非ずして是れ論師の作なり。或は魔の説いて用つて餘人に教ふる所のものなり。と。彼の惡比丘は、是くの如くにして、自をば害し亦復他をも害し、自ら垢汙に染り亦他をも垢汙するなり。是の惡比丘は自をば利する能はず、亦他をも利せざるなり。と。

爾の時に、摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、諸佛の大悲の故に、專行の比丘の、諸法の中に於て自在を得る者を説きたまふ如きは、如來は此の經中に於て、已に廣く説き竟りたまへり。世尊、若し衆生あつて、此の經を聞き已つて、信解し讀誦して如實の法に向はば、當に知るべし、是

妙繪衣・頭羅衣・好細の疊衣——諸の上妙なる衣を一切著け已れり。——なりしも、我れ今足ることを知つて聖種を行じ、餘の人の爲めの故に、身に妙服を捨てて家間の衣を蓄ふるなり。若し當來の比丘にして、我が此の法を聞かば、即我れを學ぶことを得よ。

迦葉、汝は本金にて縷めたる上衣を持ちたるを、我れ汝に従つて索めたるに、汝は持ちて我れに與へたり。迦葉、我れ汝を怒む故に、即汝の爲めに受けたるにて、貪の故を以てに非ず、身を嚴る故を以てに非ざるなり。迦葉、惡比丘あつて、我れを學ぶ能はず亦汝をも學べじ。貪に爲つて覆はれて、多く衣鉢を蓄へ、飲食を積集し、藏學して捨てず。亦金・銀・瑠璃・穀米・牛・羊・鷄・猪・驢・馬・車乘・型具を蓄へ、家業の須ふる所を皆求めて之れを蓄ふるなり。迦葉、智有る人は、家に在りと雖も能く善法を増すを、癡人の出家は、是の善分を得ること非ず。云何に、智人は家に在つて能く善法を増長するか。迦葉、若し出家あつて、袈裟を以て項に纏しながら、沙門の行無くして多く緣事の種種の繫縛を有ち、好き衣食を求むれど、袈裟を著け已れば在家の人は見て禮敬し、衣服・飲食・臥具・湯藥を給施して來去に迎送するなり。迦葉、在家の人は是くの如き善法を得れども、彼の出家の人には是の事ある無し。何を以ての故ぞ。彼の出家の人は、須ふる所を多く求むるのみにて、他に施すこと能はざる故なり。

迦葉、當來に比丘あつて、多く衣鉢を蓄へ、多く諸の物を有たん時に、彼の比丘は、多く諸の在家の人に爲つて、見て禮敬し尊重し讚歎せられん。何を以ての故ぞ。是の比丘は、多く他の施を受けたれば、或は持ちたるを我れに與へ、我れ須つ所あらば、能く時時に與へんと謂へばなり。迦葉、或は比丘の戒を持てるあつて、世の過患を見、善法を勤修して一切の漏を離れんと、頭の然ゆるを救ふが如くに、其の心に足ることを知つて諸の緣事を少くし、勤めて自利を修して一切惡緣の者を習ふことを離れんか、而も彼の比丘には、人の其の所に往き至るもの無く、親近する者無く、禮敬・

【三】頭羅(Tila)衣。

「頭羅」は普通「兜羅」と書す。

一般には「縷」と譯し又「揚華架」「野薑蘭」とも曰ふ。

【四】疊衣。

「南史」に謂はゆる「白疊花布」にて造りたる衣なるべし。「同書」に據れば、支那の南方の高昌國に一種の草あつて、其の實の藹の如き者より、絲を抽きて布と爲すに、甚だ軟にして白く、亦之れを「白氈」とも曰ふとあり。

食し、已にして阿耨大池に至らんと欲する時に、常に住める諸天は、池の四面に於て、面の各五里遙に梵志を遮つて、池に近らしめざりしを見ん。不淨の食を以て及び殘食を以て、此の大池を汚さんことを恐れてなり。迦葉、汝は今現に此の事——聖人の正行の威徳の故を以て、是の果を得たる——を見たるが、周那沙彌の有つ所の不淨なる糞掃中の物をば、而ち諸天は之れを取つて洗ふことを爲し、亦洗汁を以て自ら其の身を洗ひ、須跋陀梵志をば、池を去ること五里之れに近らしめざるを、迦葉、誰れか是れを聞き已つて、聖法の中に於て修學を勤めざらんや。彼の諸の聖人を、諸天、世人の、皆來つて頭面にて禮敬し供養するを、迦葉、是くの如き聖徳を求めんと欲する故に、糞掃衣を畜ふるなり。

迦葉、糞掃衣を畜ふる比丘は、聖種に安住して應に憂を生ずべからずして、糞掃衣に於ては、應に塔の想を生ずべく、應に世尊の想を生ずべく、應に出世の想を生ずべく、應に我無く我所無き想を生ずべし。是くの如くに觀じ已つて、糞掃衣を著けて、應に是くの如くに其の心を調伏すべし。心淨きに由る故に身の淨きを得れども、身の淨き故にて心の淨きを得るに非ず。と。迦葉、是の故に、當に其の心を淨むべくして、身を嚴飾する莫かれ。何を以ての故ぞ。心淨き故に由つて、佛法の中に於て梵行と名くるを得ればなり。迦葉、是くの如くに、糞掃衣を畜ふる比丘にして、能く是くの如くに學ばば、則ち我れを學びたりと爲し、亦汝に於ても學べるなり。迦葉、若く汝は能く是くの如き應衣を畜へ、則便に足ることを知つて聖種を行すればなり。

迦葉、汝は僧伽梨を、若しは牀上に著き、若しは坐處に在きて、若し、憂多羅僧にて經行せんに、則ち千萬の諸天あつて、汝の僧伽梨を禮せん。此の僧伽梨は、是れ戒・定・慧にて薰ぜられたる者の、身に覆ふ衣なればなり。迦葉、當に知るべし。汝の衣すら尙是くの如き尊重・禮敬を得れば、況んや汝の身をや。迦葉、我れ轉輪王の位を捨てて、出家して道を學ぶや、先に著くる所は、好上の

と譯す。拘尸那城の梵志にして五神通を得、非想非非想定を得たるが、年百二十にして佛に歸し、羅漢を得たる者にして、釋尊最後の弟子なり。

【二】憂多羅僧。

又、鬱多羅僧と書す。三衣の一なり。第一卷「三衣」の解、參照。

【三】僧伽梨。

「三衣」の一なり。第一卷「三衣」の解、參照。

すして、是に得易ければ邪命に非ず、他に求めず他の顔色を觀ずして捨棄せる物なれば、糞掃と異る無く、亦屬する所無し。是の故に糞掃衣と名くるなり。

迦葉、糞掃衣は是れ法幢なるは、以て大仙人なる故なり。是れ姓なるは、以て聖人なる故なり。

是れ安住なるは、以て聖種なる故なり。是れ專念なるは、以て善法の儀式なる故なり。是れ善護なるは、以て戒衆なる故なり。是れ向門なるは、以て定衆なる故なり。是れ安住なるは、以て慧衆なる故なり。是れ身なるは、以て解脱衆なる故なり。是れ順法なるは、以て解脱知見衆なる故なり。

迦葉、是くの如くにして糞掃衣を畜へば、大福德の、希求する所無く、貪著する所無く、能く慢心を離れ、能く重擔を捨つるを得るなり。

迦葉、若し比丘あつて、糞掃衣を畜へば、知足を以ての故に、諸の天・龍・鬼神は貪樂して見んと欲するなり。迦葉、糞掃衣を畜ふる比丘は、若し禪定に入らば、釋・梵・四天王は、長く跪きて合掌し、頭面にて禮を作せば、況んや餘の小天をや。迦葉、若し惡比丘あつて、勤めて衣服を求め以て身を嚴飾し、外に淨行を現して而も内に貪欲・恚・癡を具足せば、是くの如き好き嚴にて身を飾ることを作すと雖も、而も諸天・龍神は其の所に至つて禮敬・供養せざるなり。何を以ての故ぞ。此の比丘の、勤めて衣服を求め以て身を嚴飾すれども、心・心數の法の垢を除かざることを知れば、諸天は知る故に則ち遠く捨て去るなり。迦葉、汝、周那、沙彌の不淨臭穢なる糞掃中の物を拾ひ、乞食して食し、已にして阿耨大池に至つて之れを洗濯せんと欲するや、爾の時に、池邊に常に住せる諸天ありしが、皆遠く奉迎して頭面に禮を作し、彼の諸天等は、皆淨潔を樂めるに、而も周那沙彌の捉ふる所の不淨なる糞掃衣を取つて、之れを流うて垢穢無からしめ、又洗ひたる汁を取つて、自ら以て身を洗ふことを爲したるを見ん。諸天は、周那の能く淨戒を持ち、諸の禪定に入つて大威徳あるを知り、是の故に奉迎し恭敬して禮を作せるなり。迦葉、汝、須跋陀梵志の、淨潔なる衣を著て乞

【八】周那(Chandi)。

【純陀】魯那とも書す。

【九】沙彌(Samviera)。

室羅摩拏洛迦の略稱の假借文字なり。息慈、行慈、などと譯す。又、普通に「勸策男」と曰ふ。男子の、出家して十戒を受けたる者の通稱なり。

【一〇】須跋陀(Subhadra)。

又「蘇跋陀羅」と書し、「善賢」

爲めの故に、衣を以て自ら嚴飾するに非ざる故に、風吹・日曝・蚊・蛇・蟻子の諸の惡き觸を障へん爲めの故に、佛の教に安住せん故に、淨好なるを求むるに非ざる故にて、糞掃の中に於て棄物を拾ひ取るなり。と。取る時には應に二種の想を生ずべし。何等か二なる。一には、足ることを知る想なり。二には、易く養ふ想なり。復、二想を生ぜよ。一には、慢無き想なり。二には、聖種を持つ想なり。復、二想を生ぜよ。一には、以て身を嚴らずとなり。二には、心をして淨からしめんとなり。故に、迦葉、糞掃衣を畜ふる比丘は、糞掃の中に於て棄物を拾ひ取る時に、若し是の處に於て諸の親族・知識を見んに、見已るや即止めて取らずして、是の念——此の諸人輩は、或は我れを訶責して言はん。汝は是れ不淨の人なりと。——を作さば、迦葉、我れは説かん。是の比丘は淨行を得ず。と。何を以ての故ぞ。糞掃衣を畜ふる比丘は、心の堅きこと石の如くにして、外物は入らず、亦動かす能はざるものなる故なり。

迦葉、糞掃衣を畜ふる比丘は、糞掃中の物を拾ひて、應に淨く澆灌して垢膩無からしめ、洗ぎ已つて好く染め、染め已つて僧伽梨に作るに、善く合し、善く綴ぢ、善く縫ひ、善く受くべし。受け已らば、應に著くるに、綻び壞れしむること莫かるべし。

迦葉、糞掃衣の比丘の、不淨觀の中に安住しつゝ糞掃衣を著くるは、欲を離れん爲めの故なり。慈心にて糞掃衣を著くるは、瞋恚を離れん爲めの故なり。十二因縁を觀じて糞掃衣を著くるは、癡を離れん爲めの故なり。正思惟して糞掃衣を著くるは、一切の煩惱を斷ぜん爲めの故なり。諸根を攝め護つて糞掃衣を著くるは、六入を知らん爲めの故なり。諛諂せずして糞掃衣を著くるは、諸天・龍神をして喜悅せしめん爲めの故なり。

迦葉、何故に糞掃衣と名くるか。迦葉、譬へば、死屍の如きは、人の貪らざる所にして、我所の心を生ぜざる法なれば、應に除き棄つべきが如し。迦葉、是くの如くに、糞掃衣には我非ず我所非

自・他に恥づるを謂ふ。

に説法を爲すべく、乃至、食淨らば、還食を受け已つて、坐より起ち去れ。

迦葉、乞食の比丘は、應に自ら諛語を現すべからず。云何なるは、自ら諛語を現すなるか。若しくば、他人の爲めに是くの如き言を説くなり。我れ今、鹿野の食を乞ひ得たり。と。又復足らざるに、多くの衆と共に食して、我が食少なければ、我れ今饑渴して身力羸劣なり。と。迦葉、是れを自ら諛語を現すと名く。迦葉、乞食の比丘は、是くの如き事をば應當に遠離すべきなり。

迦葉、乞食の比丘は、一切の事に於て、應に捨心を生ずべく、食の鉢の中に墮する若きにも、若しは鹿若しは細、若しは少若しは多、若しは淨若しは不淨なるも、一切應に受けて心に憂喜する無かるべく、常に應に淨心にて諸の法相を觀すべし。趣に身を活すを得て聖道を行することを爲さん、是の故にて受食せよ。

迦葉、乞食の比丘は、或は時に、城邑・聚落に入つて次第に乞食するに、若し食を得ずして空鉢にて出でば、應に念すべし。如來は大威徳を有ちながら、轉輪王の位を捨てて出家を行ひ、一切の惡法を斷じて一切の善法を成じながら、村に入つて乞食せるに、尙空鉢にて出でたまへり。況んや、我れの薄福にして善根を種えざるに、空鉢にて還らざらんや。是の故に、應に憂を生ずべからず。何を以ての故ぞ。善根を種えずして鹿食・細食を得能ふことは、是の處ある無ければなり。我れの食を得ざるは、或は自ら魔を有ち、或は魔に使はれ、或は魔は諸の婆羅門・居士を覆蔽して、我れをして、食を乞うて得ざらしむるなれば、我れ當に勤修して、四魔を離れ、一切の煩惱を斷つべく、若し我れ是くの如き道を勤修し已らば、魔波旬に非ず、魔に使はるるに非ざれば、能く留雜を作さんや。と。迦葉、乞食の比丘は、應に是くの如くに聖種を受持すべきなり。

糞掃衣比丘品 第七

佛は迦葉に告ぐらく。糞掃衣を着ふる比丘は、糞掃物を拾ふには、是くの如き想を作せ。慚愧の

【七】慚愧。此の「慚愧」は、裸體のため、

今食し已らば以て道を修むるに足れば、是の故を以て食す。となり。迦葉、乞食の比丘は、此の食分を得るに、鉢中に墮つること法の如くにして得る所ならば、法の如くに利養せんと、應に梵行の比丘と共に此の食を食すべし。

迦葉、乞食の比丘は、或は時として病あるに、使人ある無くして食を乞ふ能はずんば、應に是くの如くに其の心を調伏すべし。我れ獨りて侶無く一身にて出家したるにて、法は是れ我が伴なれば、我れ應に法を念すべし。今我れ病苦すとも、世尊の、諸の比丘は應に法を念すべし。と説きたまへる如くに、我れ聞く所の法をば、應に善く思惟すべし。云何に善く思惟するか。實の如くに身を觀するなり。實の如くに身を觀じ已つて智慧を有たば、獨一心にて能く初禪を得ることの若きは、則ち是の處あり。初禪の樂を得ば、若しは一日若しは二日、乃至、七日、禪を以て食と爲さんに、其の心は歡悅せん。と。迦葉、乞食の比丘は、是くの如き法を行じて、若し禪を得ずとも、應に是くの如くに勤行して、善法の中に安住すべくんば、多くの人に知られ、諸天・龍神は食を送つて之れに與ふる有らん。此れは是れ扼を離れたる報の故なり。

迦葉、或は乞食の比丘は、天の大に雨り、或は大たる風塵に値ひて、食を乞ふ能はずんば、爾の時には、慈を以て食と爲して自ら莊嚴し、行する所の法に於て、思惟に安住せよ。若し二夜、三夜も食を得ずんば、應に是の念を生ずべし。多くの衆生あつて、餓鬼の中に墮して、惡業を作れる故にて苦惱に切められて、乃至、百歳も一唾をも得ざるに、我れ今諸の法門の中に安住したれば、應に是の念を生ずべし。身心羸れ劣れるとも、今我れ饑渴を堪忍し、勤めて聖道を修めて、應に退轉すべからず。と。

迦葉、乞食の比丘は、應に在家の人の男子・女人・童男・童女に親近すべからず。迦葉、若し乞食の比丘は、在家の人をして、食中の諸の不淨の物を擇び去らしめんには、坐する處に於て坐して、應

一切の味中に於て、應に味を好む想を生ずべからず。又、上妙なる食の中に於て、自ら其の心を勤めば、是くの如き想を生ぜよ。我れは旃陀羅の如し。應に身心を淨むべく、應に飲食を淨むべからず。何を以ての故ぞ。好食を食し已るとも、一切糞と爲つて臭穢不淨なる故に、我れは應に好食を求むべからず。と。是くの如くに心を調伏し已れ。若し城邑・聚落に入つて、次第に乞食せんに、應に是くの如き想を生ずべからず。男子我れに食を與へて、女人には非ず。女人は我れに食を與へて、男子には非ず。童男我れに食を與へて、童女には非ず。童女我れに食を與へて、童男には非ず。應に細食にして、鹿食に非ざるを得べし。應に美食にして、不美食に非ざるを得べし。應に故に與へたる食にて、故ならざるに非ざるべし。應に食を得易くして、易からざるに非ざるべし。應に速に食を得て、速ならざるに非ざるべし。若し人村に入らば、應に恭敬を得て、不恭敬に非ざるべし。應に新食にして、宿食に非ざるを得べし。應に富家の食にして、貧家の食に非ざるを得べし。男子、女人の衆は、應に來つて我れを迎ふべし。と。迦葉、乞食の比丘は、是くの如き不善の法を、應に思惟すべからず。

迦葉、乞食の比丘は、應に是くの如くに自ら莊嚴すべく、此れは是れ乞食の常に行する所の法なり。若し乞食する時には、得ると得ざるとに憂・喜を有つ無く、應に鹿・細の食の想を生ずべからず。何を以ての故ぞ。多く衆生あつて、美味に貪著すれど、味に著する故に由つて諸の惡業を作り、惡業の因縁の故にて地獄・畜生・餓鬼に墮すればなり。若し足ることを知らば、美味を貪らずして、應に細食を捨てて鹿食を受け取るべく、舌の味に著するを除いて、其の心に足ることを知り、極鹿の食を得とも、亦當に足ることを知るべければ、彼れ若し命終せば天上に生れ、或は人中に生れ、天上に生れ已つて天の美食を食へばなり。迦葉、是くの如くに、乞食の比丘は、味の愛を離れ以て心を調伏し、若し七日豆を噉ふとも亦邊を生ぜざれ。何を以ての故ぞ。趣に身を活す故にても、我れ

【六】宿食。
前日に調理したる食物を誦ふ。

勿かれや。と。

復次に、迦葉、阿蘭若の比丘の阿蘭若の法を行するに、善く阿蘭若を修する想は、猶草木・瓦石の、主無く我無く亦屬する所無きが如くに、此の身にも亦爾く、我無く命無く人無く衆生無く諍訟無く、此の法は皆縁合よりして生ずれば、此の法の中に於て、若し善く思惟せば、我れ當に一切の諸見を斷じ得べし。と常に應に空・無相・無作の法を思惟すべし。迦葉、阿蘭若の比丘の阿蘭若の法を行する時に、果・藥草及び諸の樹林の若きは、云何に和合し云何に散滅するか。此の外物の如きは、主無く我無く我所ある無く亦諍訟も無く、自ら生じ自ら滅すれども、生滅無き者なり。迦葉、艸木・瓦石の、我無く主無く亦屬する所無きが如く、此の身も亦爾く、我無く命無く人無く衆生無く諍訟無く、衆縁より生じて、縁離れば則ち滅すれば、此の如實の中には、一法の若しは生若しは滅あること無し。との、迦葉是くの如き法は、阿蘭若の比丘の、阿蘭若處に至つて應に修すべき所の行なり。

迦葉、阿蘭若の比丘は、是くの如き法を行じて、若し聲聞乘を學ばば、疾く沙門の果を得、若し障の法あつて、現世に沙門の果を得ざる者も、一佛・二佛・三佛に見ゆることを過さずして、必ず定つて一切の諸漏を斷つを得ん。若し菩薩乘を學ばば、現世に無生法忍を得、無障の法を得て、必ず未來の諸佛に見えて疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。と。此の阿蘭若品を説ける時に、五百の比丘あつて、一切の漏を斷じて、心に解脱を得たり。

乞食 比丘品 第六

佛は迦葉に告ぐらく。云何なるは、比丘の乞食なるか。迦葉、若し比丘あつて、先に本誓——我れ乞食に依つて出家せん。——に安住せば、我れ今先の誓に住せんとて、彼の比丘は、專念に諛諂ある無くして一切の請食を離れ、一切の僧中の供養を離れて、堅く自ら莊嚴せよ。乞食の比丘は、

【五】 堅く自ら莊嚴せよ、身を堅固に守れ。との意なり。

阿蘭若の比丘は、若し乞食して得ること多くば、應に知足の想を生ずべく、應に食中に於て、一搏を滅じ取つて淨石の上に置きて、是くの如くに思惟すべし。諸の鳥獸の、能く食を噉ふ者あらば、我れ以て之れに施して、彼れを受者と爲さん。と。迦葉、阿蘭若の比丘は、食し已らば、鉢を洗ひ、口を漱ぎ、手を洗ひ、應器を淨く滌ぎ、手を拭うて乾かしめ、僧伽梨衣を擧げ、阿蘭若處にて行するに、本思惟せし所の法の相を離れざるなり。

迦葉、阿蘭若の比丘の、阿蘭若の行を行するに、若し是れ凡夫にして未だ沙門の果を得ずんば、或は時として、虎狼は其の所に來り至らんも、若し見るとも、應に畏を生ずべからずして、是くの如き念を作せ。我れ本より阿蘭若處に來り至れる時に、已に身命を捨てたれば、我れ應に驚き畏るべからずして、應に慈心を修めて一切の惡を離れ、亦怖畏をも離るべし。若し諸の虎狼我が命根を斷ち、我が身肉を噉はば、當に是の念を生ずべし。我れ大利を得ん。不堅の身を以て、當に堅身を得べし。此の諸の虎狼に我れ食を與へずとも、今我が肉を噉ひ已らば、身は安樂を得ればなり。と。迦葉、阿蘭若の比丘の阿蘭若の法を行するに、應に是くの如くに身命を捨つべきなり。

迦葉、阿蘭若の比丘の阿蘭若の法を行するに、若し非人あつて、或は好色を作し或は惡色を作して、其の所に來り至るとも、此の非人に於て、愛心を生ぜず瞋心を生ぜざれ。迦葉、或は曾て佛・諸天の、阿蘭若に來り至つて諸の間難を作す所を見るあらんも、問難し已らば、阿蘭若の比丘は、力の能ふ所に隨ひ、學ぶ所の法に隨つて諸天の爲めに説け。或は時に、諸天に深き問難あつて、阿蘭若の比丘は若し答ふる能はずば、應に憍慢を生ずべからずして、應に是の言を作すべし。我れ多聞ならずとも、汝我れを輕んずる莫かれ。我れ今當に勤めて佛法を修學すべく、或る時に我れ佛法に通ずるを得じらば、能く一切をば答へん。と。又應に諸天を勸請すべし。汝等、今當に我が爲めに法を説くべし。我れ當に聽受すべし。と。又應に是くの如くに報謝して言ふべし。願はくば、嫌ふ

【四】或は好色を作し、或は惡色を作し。
或は好ましき、或は惡むべき
形貌・姿態を爲すを謂ふ。

すして、應に是の心を作すべし。此の諸の長者及び婆羅門に、多く諸縁あつて我れに食を與へざるなり。又、此の長者、諸の婆羅門は、乃至、未だ曾て心を生じて我れを念はず。況んや我れに食を與ふることをや。と。迦葉、阿蘭若の比丘は、若し能く是くの如くならば、食を乞ふ中に於て驚畏を生ぜざるなり。

迦葉、阿蘭若の比丘は食を乞ふ時に、若し衆生の若しは男若しは女、若しは童男、若しは童女、乃至、畜生を見れば、應に是の中に於て、我れは是くの如き精進を行じて是くの如き願——若し衆生の我れを見及び我れに食を與ふる者は、皆天上に生ぜんことを。——を作さんと慈悲心を生ずべし。迦葉、阿蘭若の比丘は、若しは飢食を得、若しは細食を得ば、是の食を受け已るや、應に四方を觀じて、此の村邑の中にて、誰れか貧窮の者ぞ。當に此の食を減じ以て之れに施與すべし。とすべく、若し貧人を見れば、乞うて食すべき所を、即ち半を分ち與へ、若し貧者を見ずんば、應に是の心を生ずべし。我が眼の見ざる所の衆生に、我が得る所の食の、中に於て好き者をは、願はくば之れに施與して、我れは施主と爲り、彼れを受者と爲さんことを。と。

迦葉、阿蘭若の比丘は、乞食して食を受くるを得已らば、持ちて阿蘭若處に至り、手足を淨め洗ひ、淨き沙門の儀式にて一切の淨法を具へ、法の如くに草を取り已つて結跏趺坐し、坐し已つて食するに、心に愛著無く、亦貢高無く、瞋心を有つ無く、濁亂の心無く、食せんと欲する時に臨んで、是くの如くに思惟せよ。今此の身中には八萬戸の蟲あれば、此の食を得ば皆悉く安樂ならん。我れ今は食を以て此の諸蟲を攝むれども、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得ん時には、法を以て攝め取らん。と。迦葉、又時に阿蘭若の比丘は、食して或は足らずんば、應に是の念を作すべし。我れ今身輕ければ、能く忍辱を修めて諸惡を斷除せん。大・小便を少うして身の輕きを得已りたれば、亦心の輕きを得、又、睡を少うするを得、亦、欲望をも起さず。と。應に是くの如き思惟を作すべし。迦葉、

【三】諸縁。
此の諸縁は「多くの雜事」を指す。

住し、不善の法を離れて善法門に入り、四正勤に安住し、四如意足に入り、五善根を護り、五力の中に於て自在を得、七菩提分を覺り、八聖善道分を勤行し、禪定を受持し、慧を以て諸法の相を分別すべし。と。迦葉、是くの如くに説ける法にて以て嚴飾せよ。阿蘭若の比丘は、是の嚴飾を作し已らば、山林に住して、初夜、後夜に勤めて諸行を修め、應に睡眠すべからずして常に念じて、出世の法を得んと欲せよ。迦葉、阿蘭若の比丘は、凡べて住する處にて常に道を修行するに、自ら身及び諸の衣服を廢らず、乾きたる枯草を拾ひ、以て用ひ敷き坐して自ら坐具に用ひ、常住僧及び招提僧の物を離れて、阿蘭若處に於ける衣服にて足ることを知つて、趣に身を覆ふを得よ。聖道を行ぜん爲めの故なり。

迦葉、阿蘭若の比丘は、若し食を乞はん爲めに城邑・聚落に至らば、應に是の念を作すべし。我れ阿蘭若處より是の城邑・聚落に至りたれば、食を得る若きにも食を得ざる若きにも、心に憂喜無し。と。若し食を得ずんば、應に宿業の報なるを念じて、我れ今當に勤めて福業を修習すべしと喜心を生じ、又、如來の食を乞へるにも、亦時に得ざりしを念すべし。彼の阿蘭若の比丘は、城邑・聚落に入つて食を乞はゞ、應に法を以て莊嚴し、法の莊嚴已つて、然る後に食を乞ふべし。云何なるは法の莊嚴なるか。若し意に適へる色を見るときも、應に染著すべからず、意に適はざる色を見るときも亦願を生ぜず、若しくは意に適へる聲・意に適はざる聲を聞くにも、若しくは意に適へる香・意に適はざる香を嗅ぎ、意に適へる味・意に適はざる味、意に適へる觸・意に適はざる觸、意に適へる法・意に適はざる法にも、心染著する無く、亦瞋をも生ぜずして、根門を攝め護り、一尋を諦視して、其の心を調伏し、本思ふ所の法をば心より離れしめず、食を以て心を汚さずして乞食を行じ、應に次第に食を乞ふべきなり。若く食を得る處にも、應に喜を生ずべからず、食を得ざる處にも、應に瞋を生ずべからずして、若し十家に至り若しくは十家を過ぐとも、食を得ずんば、應に憂を生ずべから

【三】根門を攝め護り。眼耳鼻舌身意の六根を制御して放逸せしめざるを謂ふ。

慈なり。六には、順なる慈なり。七には、一切法を觀ぜる慈なり。八には、淨きこと虚空の如くなる慈なり。迦葉、是くの如き八行を以て、諸の衆生に於て慈心を生ずるなり。

迦葉、阿蘭若の比丘は阿蘭若處に至り已らば、應に是くの如くに思惟すべし。我れ遠處に至ると雖も、獨にして伴侶無ければ、若し我れ善を行すとも、若しくは不善を行すとも、人の教へ呵る無し。と。復是の念を作せ、此に諸の天・龍・鬼神・諸佛世尊あつて、我が專心なるを知つて、彼れは我が爲めに證したまはん。我れ今此に在つて阿蘭若の法を行するに、我れ不善の心ならば、自在を得ざらんことを。若しくは、我れ此の極遠なる處に至り、獨にて伴侶無く親近する者無く、我が所有無ければ、我れ今當に欲覺・悲覺・惱覺を覺るべく、餘の不善の法をも亦應當に覺るべし。我れ今應に衆を樂む者に異らざるべからず。亦應に聚落に近る人に異らざるべからず。若し是くの如くに異らすんば、我れは即諸の天・龍・鬼神を誑すと爲さん。已に諸佛も我れを見たまへば、我れ亦歡悅したまはじ。我れ今若し阿蘭若の法の如くならば、則ち諸の天・龍・鬼神に呵責せられず。諸佛も我れを見たまひて即、亦歡悅したまはん。と。迦葉、阿蘭若の比丘の、阿蘭若處に住して阿蘭若の法を行するには、一心に解脱の禁戒を堅持し、善く戒衆を護つて身・口・意を淨め、諛語の行無く正命に於て淨く、心を諸の定に向け、聞く所の法の如きを應に之れを憶念すべく、勤めて正思惟して離欲・寂滅涅槃に趣き向ひ、生死を畏れて、五陰を觀すること怨家の如くにし、四大を觀すること毒蛇の如くにし、六入を觀すること空聚の如くにし、善く方便を知つて十二因縁を觀じ、斷・常の見を離れて無衆生・無我・無人・無命を觀じ、法の空相を解して無相を行じ、漸く作す所を損じて無作を行じ、心常に三界の行に驚き畏れて、常に勤めて修行すること頭の然ゆるを救ふが如くに、常に精進を行じて終まで退轉せず、身の實相を觀じて、應に是くの如き心を生ずべし。是くの如き法を觀じて、常に苦の本を知つて一切の集を斷ち、滅盡を證せんとて道を修め、慈心を行じ、四念處に安

【一】戒衆。
解脱涅槃に至るべき種種の戒を謂ふ。「戒衆」「戒蘊」と同じ。

卷の第一百一十四

寶梁聚會 第四十四の二

蘭若比丘品 第五

爾の時に、摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、若し比丘あつて、自ら阿蘭若の比丘なりと言はんに、世尊、幾所を齊へば阿蘭若の比丘と名け、幾所を齊へば乞食の比丘と名け、幾所を齊へば糞掃衣を着ふる比丘と名け、幾所を齊へば樹下の比丘と名け、幾所を齊へば冢間の比丘と名け、幾所を齊へば露處の比丘と名くるか。と。

佛は迦葉に告ぐらく。阿蘭若の比丘は、必ず阿蘭若の處を樂み、阿蘭若の處に住するなり。迦葉、阿蘭若處の若きは、謂はゆる大なる聲無く、衆闍の聲無く、麀・鹿・虎・狼及び諸の飛鳥を離れ、諸の賊盜及び牛羊を牧する者に遠つて、沙門の行處に順ぜるなり。是くの如き阿蘭若處にて、應に中に於て修行すべき彼の比丘は、若し阿蘭若處に至らんと欲せば、應當に八つの法を思惟すべきなり。何等か八なる。一には、我れ當に身を捨つべしとなり。二には、應當に命を捨つべしとなり。三には、當に利養を捨つべしとなり。四には、一切の愛樂する所の處を離れんとなり。五には、山間に於て死すること、當に鹿の如くに死すべしとなり。六には、阿蘭若處にて當に阿蘭若の行を受くべしとなり。七には、當に法を以て自活すべしとなり。八には、煩惱を以て自活するに非じとなり。迦葉、是れを八法と名け、阿蘭若の比丘の應に思惟すべき所にして、思惟し已らば、當に阿蘭若處に至るべきなり。迦葉、阿蘭若の比丘の阿蘭若處に至り已つて、阿蘭若の法を行するには、八行を以て慈を行じ、一切衆生に於て慈心を生ずるなり。何等か八なる。一には、慈を以て利益するなり。二には、慈を以て樂むなり。三には、慈を以て無き慈なり。四には、正しき慈なり。五には、異なる無き

以ての故ぞ。持戒の人あらば、人は敬禮する所なるに、僧の所有しりょうの物をば、自在なる故を以て、難じて之れを與ふればなり。迦葉、若し營事の比丘にして、常住僧の物若しくは招提僧の物を以て、及び佛の物を以て、輒たやすく自ら雜まじへ用ひば、大なる苦報を得ること、若しくは一劫を受け、若しくは一劫に過ぐるなり。何を以ての故ぞ。三寶の物を侵すを以ての故なり。迦葉、若し營事の比丘は、是くの如き罪を聞き、是くの如き罪を知りながら、故に瞋心を持戒の者に生ぜば、我れ今此れを、諸佛世尊も治する能はざる所なりと説かん。迦葉、是の故に營事の比丘は、是くの如き非法の罪を聞き已らば、應當まさに善く身・口・意の業を護つて、自をば護り亦他をも護るべきなり。迦葉、營事の比丘は、寧ろ自ら身の肉を噉くふとも、終まで三寶の物を雜用して衣鉢・飲食と作なはざれ。と。

爾まの時に、摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、未曾有みまうなり。如來の自ら慈心を以て是くの如き法を説きて、慚愧さんけい無き者に無慚愧むじんけいの法を説き、慚愧有る者に慚愧の法を説くことを爲したまへることや。と。

於て、佛塔の想を生ずるなり。而るを況んや寶物をや。若し佛の塔に於て、先に衣を以て施せるに、此の衣は佛の塔中に於て、寧ろ風吹き雨爛して破れ盡きしむとも、應に此の衣を以て寶物にも貿易すべからず。何を以ての故ぞ。如來の塔の物をば、人の與に價を作し能ふ者無く、又、佛は須つ所無き故なり。迦葉、是くの如き善淨を有てば、營事の人、三寶の物をば應に雜へしむべからず。又自の利養に於て、心常に足ることを知つて、三寶の物の中にて、我が所有の想を生ずべからず。

迦葉、營事の比丘は、若し瞋心を生じて、持戒の大徳の人の所に於て、右に遡つて之れを禮敬する者を、自在なる故を以て驅つて役使せしめば、是の故にて營事の比丘は、瞋心の縁を以ての故に大地獄に墮し、若し人と爲ることを得とも他の奴僕と作り、常に其の主の苦驅に爲つて役使し、人に鞭打せらるゝなり。復次に、迦葉、若し營事の比丘は、自在なる故を以て、更に重き制を作つて、僧の常限に過ぎて比丘を譴罰して、非時に作さしめば、是の營事の比丘は、此の不善根の故を以て、多釘小地獄の中に墮し、此の中に生れ已るや、百千の釘を以て其の身を釘控するに、其の身は熾に然えて大火焰を出すこと、大火の聚の如くなるなり。若し持戒に於て大徳を有てる者を、重き事を以て之れ怖れさせ、瞋心を以て語らば、故もて彼の營事の比丘は、地獄の中に生じて、其の得る所の舌の長さ五百由旬なるに、百千の釘を以て其の舌に釘れ、一一の釘の中より大火焰を出すなり。迦葉、若し營事の比丘は、數僧物を得ながら、慳惜して藏舉し、或は非時に僧に與へ、或は復難じて與へ、或は困苦もて與へ、或は少く與へ、或は與へず、或は與ふる者と或は與へざる者とあらば、營事の比丘は、此の不善根の故を以て、穢惡なる餓鬼に墮して、常に糞丸を食ふなり。此の人命終つて是の中に生ずるに當り、爾の時に更に餓鬼あつて、食を以て之れに示して、而も復與へず。此の鬼爾の時に、希望して得んと欲し、諦に此の食を視て目會て胸かすして、饑渴の苦を百千歳の中に受けて常に食を得ず。或る時には食を得るや、變じて糞屎と爲り、或は膿血と作るなり。何を

【三〇】ず。

蓋本には「下」の字を使用しあれど、「不」の誤植なること明なれば、原本に依つて改めた。

に當つては、應に與ふべき時に與へ、惡心ならずして與へ、非法を以て與へず、欲心にて與ふるに非ず、瞋心にて與ふるに非ず、癡心にて與ふるに非ず、畏心にて與ふるに非ず。僧の法に隨つて行ひ、在家の行に隨うて行ふに非ず。僧の制行に隨つて、自に隨へる制行に非ず。僧物に於て自在の想を生ぜず。乃至、小事なりとも、僧と共に斷じて、自在に斷ずるに非ず。若し用ふる所の物は、謂はゆる常住僧の物及與ひ佛の物、若しくは招提僧の物ならば、彼れ營事の比丘は、應當に分別すべくして、常住僧の物を、應に招提の僧に與ふべからず。招提僧の物を、應に常住の僧に與ふべからず。常住僧の物をば、應に招提僧の物と共に雜ふべからず。招提僧の物をば、應に常住僧の物と共に雜ふべからず。常住僧の物・招提僧の物をば、佛の物と共に雜ふべからず。佛の物をば、常住僧の物・招提僧の物と共に雜ふべからず。若し常住僧の物多くして招提僧に用ふる所あらば、營事の比丘は、應に僧を集め籌を行ひて欲することを索むべし。若し僧にして和合せば、應に常住僧の物を以て招提僧に分與すべし。迦葉、若し、如來の塔にして或は須ふる所あり若しくは敗壞せんと欲せば、若しくは常住僧の物若しくは招提僧の物多くば、營事の比丘は、應に僧を集め籌を行ひて欲することを索めて、是くの如き言を作すべし。是に佛の塔壞れて、今須ふる所あるに、此の常住僧の物・招提僧の物は多ければ、大德僧聽せ。と。若し僧時に到つて僧忍聽せば、若し僧にして得る所の施物の、若しくは常住僧の物若しくは招提僧の物を惜まずば、我れ今持ちて佛の塔を修治するに用ひんと。若し僧にして和合せば、營事の比丘は、應に僧の物を以て佛の塔を修治すべく、若し僧にして和合せずば、營事の比丘は、應に餘に在家の人の輩に勸化し、財物を求索して佛の塔を修治すべし。迦葉、若し佛の物多くば營事の比丘は、佛の物を以て常住の僧及び招提の僧に分與するを得ざれ。何を以ての故ぞ。此の物の中に於ては、應に世尊の想を生ずべきにて、佛の有つ所の物は、乃至、一つの線にても、皆是れ施主は信心もて佛に施したればなり。是の故に、諸天・世人は此の物の中に

【二〇】如來の塔にして乃至、敗壞せんと欲せば、佛塔に於て、必用とし、又は、破損して修繕を要する者ならばの意なり。

謂はゆる衣服・飲食・臥具・醫藥なり。若し藥を離るゝ比丘の住する所の處にては、營事の比丘は、其の住處に於て應に高聲にて大に喚ぶべからず。亦他をしても高聲にて大に喚ばしむべからず。離扼の比丘を防護せんことを欲する故なり。營事の比丘は、離扼の比丘に於ては、應に尊敬を生ずることと世尊の想の如くにして、是くの如き念を生ずべし。是くの如き比丘は、佛の法中に於て能く法の柱と作れば、當に須ふる所に隨つて之を供給すべし。と。

迦葉、若し勤めて多聞を修するものあらば、營事の比丘は、應當に勤め諭して、是くの如き言を作すべし。大徳、勤めて多聞を修めて讀誦して利せしめよ。我れ當に諸大徳の供給・使令を爲すべし。若し諸大徳にして勤めて多聞を修めば、比丘の僧中に於て是れ瓔珞なれば、能く高座に昇つて廣く正法を説き、亦自らも智慧を生ぜよ。と。營事の比丘は、應に非時に役使すべからずして、應當に擁護して多聞を修めしむべし。

迦葉、若し法を説く比丘あらば、營事の比丘は、應に事に供給すべし。應に説法の比丘を將ゐて城邑・聚落に至り、諸人を勤め諭して聽法に就かしむべく、説法の處にても亦應に供給して、説法人の爲めに好き高座を敷くべし。若し比丘あつて、強ゐて自ら力を以て説法者を壞らんと欲せば、營事の比丘は、應に往いて和解すべく、亦應に數説法人の所に往き、稱へて、善哉と言ふべし。

迦葉、若し比丘あつて、善く戒律を持ち、善く毘尼の義を持たば、營事の比丘は、應に其の所に往き、數數義を問ふべし。我れ云何にせば、事を營んで罪を得ずして、自ら損する所無く他を害せざらしむるか。と。毘尼の義を持つる比丘は、應に營事の者の心を觀て、營む所の事に隨つて法を説くことを爲すべし。謂はゆる、是れは應に作すべく、是れは應に作すべからず。と。營事の比丘は、持律の人の所に於て、一心に信を生じて禮敬して供養するに、若し比丘 僧の所有分の物ならば、應當に時に隨ひ僧に供給すべく、應に藏舉すべからず。僧の須ふる所に隨ひ、應に分與する

【七】僧。

「僧」は即ち「僧伽」にして、比丘の集團の意なり。

【八】藏舉。
沒收し保存し置く意なり。

菩薩の所に生じ、彌勒如來の世に出でん時に、彼の諸の比丘は初會の數の中に在らん。と。

三 營事比丘品 第四

爾の時に、摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、云何なる比丘は、衆事を營み能ふか。と。佛は迦葉に告ぐらく。我れ二種の比丘に、衆事を營むを得ることを聽さん。何等か二なる。一には、能く淨く戒を持てるなり。二には、後世を畏るゝこと、喻へば金剛の如くなるなり。復二種あり。何等か二なる。一には、業報を識知せるなり。二には、諸の慚愧及び悔心を有てるなり。復、二種あり。何等か二なる。一には、阿羅漢なり。二には、能く八背捨を修せる者なり。迦葉、是くの如き二種の比丘に、我れは事を營まば自ら瘡疣無しと聽さん。何を以ての故ぞ。迦葉、他人の意を護るは、此の事難きが故なり。迦葉、佛の法中に於ける種種の出家は、種種の性、種種の心にて、種種に解脱し種種に結を斷ずれば、或は阿蘭若なるあり。或は、食を乞ふあり。或は山林に住することを樂むあり。或は樂うて聚落到近つて清淨に戒を持つあり。或は能く四扼を離るるあり。或は勤めて多聞を修するあり。或は諸法を辯説するあり。或は能く戒律を持つあり。或は毘尼の儀式を善く持つあり。或は諸の城邑、聚落到遊んで、人の爲めに法を説くあり。是くの如き等の諸の比丘僧あるに、營事の比丘は、是くの如き諸人の心相を善く取るなり。

迦葉、若し阿蘭若の比丘にして空閑の處を樂まば、營事の比丘は、一切の役使をば、應に作さしむべからず。時あつて、阿蘭若の比丘は比丘の僧次に在つて役使せば、而ち營事の比丘は、應當に代つて作すべく、若し自ら作さずんば、應に他の人を僞うて代つて之れを爲さしむべく、應に阿蘭若の比丘を役使すべからず。若し道を行する時に非ずんば、少しく作さしむ可し。

迦葉、若し食を乞ふ比丘あらば、彼れ營事の比丘は、食を乞ふ比丘に於て應に好き食を與ふべし。若し比丘の能く四扼を離るゝものあらば、營事の比丘は、須ふる所の物に隨ひ應當に供給すべし。

【三】營事 (Kamudāna) 比丘。僧團を管理し、事務を執る比丘なり。謂はゆる「維那」と曰ふ者と同じ。

【四】八背捨。

「八解脱」に同じ。

【五】他人の意を護る。他人の心を尊重するを謂ふ。

【六】四扼。(Cātṛānyoga)。「扼」は「厄」の俗字なり。

但し、諸經論多くは「扼」と混用してあり(扼は纏縛の義なり)而して、又、多くは、「四扼」を「四瀑流」(第三卷「四流」の解、參照)と同一視し居れど、斯くては「本會」の説述と一致せず。且つ阿毘達磨集異門足論などには、明に之れを區別しあり。斯くて、「四扼」は寧ろ「四瀑流」の根本を爲す者とも曰ふべき「有爲の四轉倒」(第一卷「四轉倒」の解、參照)を指す者にして、隨つて、次下の文に現るる「比丘の能く四扼を離るるもの」扼を離るる比丘離縛の比丘等は、謂はゆる「八解脱定を修する者」などを謂ふ者なるべし。

きは、如來の法藥を受くと雖も、以て自ら度せざるなり。法藥とは、謂はゆる姪欲を起す若きには、應に不淨を觀すべく、瞋恚を起す若きには、應に慈心を行ふべく、愚癡を起す若きには、應に十二因縁を觀すべく、諸の煩惱に於ては應に正しく思惟すべく、衆を樂むことを離れ我が所有を捨つるには、出家の三事をば應當に愛護すべし。三者とは、謂はゆる、戒を持つこと清淨なると、其の心をば調伏すると、定に入つて亂れざるとなり。迦葉、是くの如き法藥は、我れの説く所我れの服するを聽す所なるに、此の藥を受くと雖も、以て自ら度せざるなり。迦葉、又、出世の法あり。謂はゆる空觀、無相・無作觀と陰・界・入に四聖諦及び十二因縁を知るとなり。迦葉、是くの如き法藥を、彼の人は亦復以て自ら度せざるなり。迦葉、是くの如き沙門は、臭穢不淨にして破戒を以ての故に、薄き福德の故に、極下の處に生じ、憍慢を以ての故に、此に於て命終するや、餘の處に生ぜずして、必ず當に墮して大地獄の中に在るべきこと、人の血氣を失へるは、必ず定つて死に至るが如きなり。是くの如くにして、沙門の此に於て命終して必ず地獄に墮するもの、迦葉、是れを血氣を失へる沙門と名くるなり。と。

是くの如くに説き已るや、五百の比丘は、戒を捨て、俗に還らんとせり。爾の時に、諸の比丘あつて、彼の比丘を呵つて言はく。大徳の、佛法の中に於て退いて家に還る若きは、是くの如きは善に非ず、是くの如きは法に非ず。と。佛は諸の比丘に告ぐらく。是の語を作す莫かれ。何を以ての故ぞ。是くの如き者の若きは、名けて法に順ずと爲せばなり。若く比丘にして、人の信施を受くるを欲せずして、退いて家に還る者は、是れを法に順ずと名くるは、彼の諸の比丘は、信解の心多き故に悔ゆる心を生じたればなり。と。此の語を説ける時に、彼れは聞くを得已るや、是くの如き念を作さく。我等、或は能く不淨の行を行ひて他の信施を受けたれば、應に悔ゆる心を生じて退いて家に還るべし。と。迦葉、我れ今此の諸の比丘等を説かん。此に於て命終するや、兜率天の彌勒

かるゝこと蒲生の稻の如くなりと名くるなり。迦葉、蒲生の稻は、中に種を爲さず、亦芽をも生ぜず。迦葉、是くの如くに、蒲生の沙門は、佛法の中に於て道の種子無く、賢聖の法の中に於て解脱を得ざるなり。迦葉、云何なるは形の似たる沙門なるか。迦葉、譬へば、巧工の、金を以て銅に塗るに、其の色は金に似たれども價は金と同じからずして、若し揩り磨く時は、乃ち金に非ざるを知るが如し。迦葉、是くの如くに、形の似たる沙門は、好んで自ら嚴飾して常に身を澡浴し、著衣を齊整し、沙門の儀式を一切具足し、去來・屈伸に常に儀式を正すれども、而も彼れは常に貪・患・癡に爲つて害せられ、亦利養・禮敬・讚歎に爲つて害せられ、亦我慢・増上慢・一切の煩惱に爲つて害せられ、人に爲つて貴ばると雖も法を貴び重んずる無く、常に勤めて身を嚴つて、飲食を希望して、聖法を求めず後世を畏れず、現に尊重を見すれども將來の尊重には非ず、但肌の肥ゆることを長し、利養に依るのみにて法に依るに非ず、種種の繫縛にて勤めて家業を作し、在家の心に隨ひ、亦受くる所に隨つて、苦の時には苦を受け、樂の時には樂を受け、愛憎に爲つて害せられ、沙門の法に於ては心に行ぜんと欲する無くして、諸の儀式を離れたれば、必ず當に地獄・餓鬼・畜生に墮すべきなり。彼の人の、沙門の實無く沙門の稱無くして沙門と等しからざるもの、迦葉、是れを形の似たる沙門と名くるなり。迦葉、云何なるは、沙門の血氣を失せるものか。迦葉、譬へば、男子若しくは女人若しくは童男若しくは童女を、非人は其の血氣を食はゞ、彼の人ハ羸れ瘦せん色力ある無きが如きは、血氣を失へるに由る故なり。迦葉、是くの如き人は、血氣を失へる故に、諸藥・呪術及び諸の刀仗も治する能はざる所にして、必ず死に至る。迦葉、是くの如くに、沙門にして戒・定・慧・解脱・解脫知見の血氣及び慈悲・喜・捨の血氣を持つことある無く、亦、施を行じ、調伏して身・口・意の業を護る血氣も無く、亦、四聖種に安住する血氣も無く、儀式の血氣ある無く、亦、身・口・意を淨むる血氣も無くば、迦葉、是れを沙門は血氣を失へりと名く。迦葉、血氣を失へる沙門の如

の諸の天・龍・鬼神は、持戒梵行の沙門・婆羅門を見るや、信心を増益して、此の人は佛の法中に於て利養を受くるに應ぜざる者と、禮敬し尊重するなり。迦葉、此の沙門の利を求むるや、佛の法中に於て出家すれども、一念の寂滅・離欲の心を生ずること能はず。況んや、沙門の果を得ることをや。得ること有る若きは、是の處ある無きなり。迦葉、是れを沙門の利を求むと名く。迦葉、云何なるは稗の沙門なるか。迦葉、譬へば、麥田の中に稗麥を生ぜるに、其の形は麥に似て分別す可からざれば、爾の時に、田夫は是くの如き念——此の稗麥を、盡く是れ好麥なりと謂へる——を作せども、後に穗の生ずるを見て乃ち非なるを知れば、名けて一切は是れ麥なりと言ふを得ざるが如し。迦葉、是くの如くに、稗の沙門の、衆の中に在つて、是の戒を持ち德行を有てる者に似たれば、施主は見て、時に盡く是れ沙門なりと謂へど、而も彼の癡人は、實には沙門に非ずして是れ沙門なりと言ひ、梵行の人に非ずして自ら梵行なりと言ひ、先より來の敗壞にて持戒を離れ、亦衆の數にも入らず、佛法の中に於て智慧の命無ければ、當に惡道に墮すること、猶稗麥の好麥中に在るが如きなり。爾の時に、天・龍・鬼神の天眼を有てる者は、彼の癡人の地獄に墮せるを見、見已るや各相ひ謂うて言はく、此れは是れ癡人にして、先に沙門に似せて不善の法を行ひたれば、今當に大地獄の中に墮したるが、今より已後終まで、沙門の德行及び沙門の果を得る能はざること、猶稗麥の好麥の中に在るが如くなるべし。と。迦葉、是れを稗の沙門と名く。迦葉、云何なるは蒲生の沙門か。迦葉、譬へば、蒲生は、稻苗の熟せざる故を以て名けて蒲生と爲し、實無き故を以て、風に吹き去られて堅重の力無く、稻に似て稻に非ざるが如し。迦葉、是くの如くに、蒲生の沙門は、形は沙門に似たれば、人の教呵する無けれども、徳力を有つ無ければ魔風に爲つて吹かれ、亦血氣持戒の力も無く、多聞を離れ、定力を損失し、亦智にも遠つて諸の煩惱の賊を破壊する能はざれば、是くの如き人は、輕劣無力にして魔に繫屬し、魔に爲つて鈎せられし一切の煩惱の中に没在し、魔風に爲つて吹

し。迦葉、是くの如くに、沙門の枸欄茶も、沙門に似たる行を現せども、而も龜嶺・慳慢・自高の臭穢不淨を有ち、又破戒を作し、儀式の行無く、正見を破るなり。迦葉、是くの如き沙門の枸欄茶を、智者は親近せず、禮敬して右に遶らず。惡人なる故を以て、之れを遠離するなり。迦葉、若し癡なること小兒の如くなるあらば、彼の諸の癡人に、親近し禮敬し右に遶つて其の語を信受せられて、枸欄茶華の如きも、癡人に爲つて捉へらるるなり。迦葉、是れを沙門の枸欄茶と名く。迦葉、云何に沙門は利を求むるか。迦葉、譬へば、諛諂の人の、心常に慳惜にして貪に覆はるるに爲り、若し他の財物を見れば、希望して得んと欲し、利き刀仗を畜へて慚愧の心無く、哀愍の心無くして常に害心を有ち、空澤・山林・聚落に行く若きにも、是くの如き心——他の財物に於て希求して得んと欲する——を發して、常に自ら身を藏して他をして見しめざるが如し。迦葉、是くの如くに、沙門の利を求むるや、心常に慳惜して貪に爲つて覆はれ、得る所の利に於て心に足ることを知る無く、他の財物に於て希望して得んと欲し、至る所の處の聚落・城邑にて、常に利養の爲めにして善法の爲めせず、諸の惡を覆ひ藏すあつて、謂ふらく。善比丘は我が破戒を知らん。知り已らば、戒を説く時の若きに、或は我れを驅つて善比丘より出さん。と。但恐畏の心を生じて、常に諛諂して儀式を現行すれば、一切の天・龍・鬼神の、天眼を有てる者は此れを知つて、比丘の來たる時には、賊來れり。去る時には、賊去れり。行く時には、賊行けり。坐する時には、賊坐せり。臥する時には、賊臥せり。起くる時には、賊起きたり。衣を取る時には、賊衣を取れり。衣を著くる時には、賊衣を著けたり。聚落に入る時には、賊聚落に入りたり。聚落を出づる時には、賊聚落を出でたり。食ふ時には、賊食ひたり。飲む時には、賊飲みたり。髪を剃る時には、賊髪を剃りたり。と。迦葉、是くの如くに、癡人の去來の儀式は、皆天龍・鬼神に知見せられ、見已つて訶り罵らるるは、此くの如き惡人は、即ち釋迦牟尼佛の法を壞滅すと爲して、是の諸の惡比丘を訶責することを作すなり。又、彼

し、亦愧心を以て去來し屈伸し、亦愧心を以て行・住・坐・臥し、一切の行ふ所皆愧心を有つは、惡法を覆ひ藏せる故なり。迦葉、我れ今當に説くべし。旃陀羅人の至る所の處は、善處に到らず。と。何を以ての故ぞ。自ら惡法を行へる故なり。迦葉、是くの如くに、沙門の旃陀羅の至る所の處も亦善道に到らず。多く惡業を作つて、惡道の法を遮ること無き故なり。迦葉、是れを沙門の旃陀羅と名く。

迦葉、云何に沙門は敗壞するか。迦葉、譬へば、好き酒の香味の具足せるを、是の酒の醍醐をば酔り取ること已に盡くれば、下には糟滓のみあつて、人に惡賤せられて施し用ふる所無きが如し。迦葉、是くの如くに敗壞の沙門も、法味を離れて煩惱の滓を取れば、人に惡賤せられ施し用ふる所無く、持戒の香を離れて諸の煩惱に臭ければ、若し至る處を有つとも、自ら利する能はず亦他をも益せざるなり。迦葉、是れを敗壞の沙門と名く。迦葉、敗壞せる者は、食ふ所あらば變じて糞穢と爲つて、臭惡不淨にして人に厭離せらるるが如し。迦葉、是くの如くに、敗壞の沙門も猶糞穢の如くに、身・口・意の業の不清淨なる故を以て、迦葉、是れを敗壞の沙門と名くるなり。迦葉、譬へば、敗れたる種を大地の中に種うとも、終まで芽・實を生ぜざるが如し。迦葉、是くの如くに、敗壞せる沙門は、佛法の中に在りと雖も、善根を生ぜずして沙門の果を得ざるなり。迦葉、是れを敗壞の沙門と名くるなり。迦葉、云何なるは沙門の篋なるか。譬へば、畫ける篋を、巧工は成ずる所にて、中に臭穢なる種種の不淨を盛るが如し。迦葉、是くの如くに、沙門の篋も、外に沙門に似たる行を成就すれど、内に種種の垢穢を有つて諸の惡業を行ふなり。迦葉、是れを沙門の篋と名く。迦葉、云何なるは沙門の枸欄茶なるか。迦葉、譬へば、枸欄茶の華は色鮮好なれども、其の體は堅韌なること猶木石の如くに、其の氣の臭穢なること猶糞塗の如くなれば、智ある人は若し此の華を見れば、近らず觸れず、遠く避けて去れども、愚人は若し見れば、過患を知らざれば、近いて之れを嗅ぐが如

【三】 枸欄茶。(Kuranga)「千日草」又は「千日紅」とも曰ふ。支應音義には「紅色華」とあり。

に好多くして 一切を敷誦すれば 此の心の如きは 都べて清淨ならず 諸天龍神の 天眼を有てる者と 諸佛世尊と 咸く共に知見す と。

迦葉、是くの如き惡比丘は善法の儀式を離れ、邪命の行を作せば、三惡道に墮するなり。

旃陀羅沙門品 第三

佛は迦葉に告ぐらく。云何なるは旃陀羅沙門なるか。譬へば、旃陀羅の、常に冢間に於て行きて死屍を求め、無慈悲の心にて衆生を視、死屍を見て心大に喜悅するが如きなり。是くの如く、沙門の旃陀羅は、常に無慈心にて施主の家に至つて不善心を行ひ、求むる所を得已るや貴重の心を生じ、施主の家より利養を受け已りながら、施主に佛法の毘尼を教へず。利養の爲めの故に在家に親近し、法の爲めならざる故に亦慈心も無くして、常に利養を求むるなり。迦葉、是れを沙門の旃陀羅と名く。迦葉、旃陀羅の如きは、一切の人に爲つて捨離せらる。謂はゆる大臣・長者及び諸の小王・刹利・婆羅門并に餘の庶民、乃至、下賤の遠離する所にして、共に知識と作ることを欲せず。迦葉、是くの如くに、沙門の旃陀羅も亦一切に爲つて遠離せらる。謂はゆる、持戒有徳にして人に敬はるる者たる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・鬼神及び乾闥婆は、其の破戒にして惡法を行ふことを知る故なり。迦葉、是れを沙門の旃陀羅と名くるなり。迦葉、旃陀羅の有つ所の衣服・飲食・諸の用ふる所の物は、盡く好き人の愛樂する所に非ず亦受用もせず。迦葉、是くの如くに、沙門の旃陀羅も、若く衣鉢を有つとも、用ふる所の物は、皆是れ破戒・非法なる身・口・意の業もて、諛諂して得る所なれば、持戒の沙門・婆羅門は捨てて愛樂せず、亦受用もせずして、此の人の所に於て哀愍の心を生ずるなり。迦葉、是れを沙門の旃陀羅と名くるなり。迦葉、旃陀羅の如きは、愧恥の心を以て、用ふる所の器を持ちて、他に從つて乞食す。迦葉、是くの如くに、沙門の旃陀羅も愧恥の心を以て房舎に入り及び他の家に至り、或は衆中に到り、亦愧心を以て佛所に至り、亦愧心を以て如來の塔を禮

【二】知識。
知人・識友の義なり。

比丘と名く。復、四法の成就するあらば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。

身に奸行多く、口に奸行多く、意に奸行多く、儀式に奸行多きなり。云何に身に奸行多きか。安詳として行くは、是れ身の奸行なり。左右を視ることをせざるは、是れ身の奸行なり。若しくは、左右の視ること一尋に過ぎざるは、是れ身の奸行なり。邪命して衣に著するは、是れ身の奸行なり。諛諛して空閑の處に行けども、空閑にて行する所の法を求めず、諛諛して乞食すれども、乞食の相を觀ぜず、諛諛して糞掃衣を著れども、慚愧を爲す故を知らず、諛諛して山幡・樹下に行けども、十二の緣行を分別することを知らず、諛諛して陳故の棄藥を服して、甘露の法藥を求めざる、迦葉、是れを身に奸行多しと名くるなり。迦葉、云何に口に奸行多きか。他は我れを識とす。他は我れを請す。求むる所の如きは、我れ已に得たり。我れ利養を求めずして、他は我れに細妙なる供養を送與して、我れにて皆多くの利養を得れば、我れも亦得。我れ常に善法を行すれば、供養を受くるに應ず。我れ善く問答して、我れ能く法相に順じ我れ能く法相に逆ふ。我れ一切の法に於て義・非義を解す。他は若し是くの如くに問はば、我れ能く是くの如くに答へ、答へ已つて彼れを伏して其れをして嘿然たらしむ。我れ是れを説き已つて、能く大衆をして一切喜悅せしめ、亦一切をして、歡じて、善い哉と言はしむ。彼の衆人をして、我れを請じて供養せしめ、供養を得じるや、復施主をして、我れを請じて數來たらしむ。と。迦葉、若し口を調伏せざるあつて説く所あらば、一切言ふ所は、皆正言に非ず。是れ口に奸行多きなり。迦葉、云何に意に奸行多きか。心牽連せられて利養・衣鉢・臥具・飲食・醫藥を貪求し、而も口には説いて、一切の利養は我れの須ひざる所なりと言ひ、心には實に多く求めて、而も詐つて足るを知ると言ふ。是れを意に奸行多しと名くるなり。

爾の時に、世尊は而も偈を説いて言はく。

心に利養を求めながら 口には知足を言ひ 邪命して利を求むれば 常に快樂無し 其の心

【一〇】 十二の緣行。
「十二因緣」を謂ふ。此の「行」は造作・遷流の義なり。

成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。有我をば論ずるなり。有衆生をば論ずるなり。有命をば論ずるなり。有人をば論ずるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。佛を敬はざるなり。法を敬はざるなり。僧を敬はざるなり。戒を敬はざるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。僧の和合する若きに、而も心悦ばざるなり。獨處を樂まざるなり。衆中を樂むなり。常に世俗に有つ所の言説を論ずるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。利養を求むるなり。大なる名稱を求むるなり。多くの知識を求むるなり。聖種に住せざるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。魔に繫屬するなり。魔に爲つて害せらるるなり。睡眠多きなり。善を作して喜ばざるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。佛法の中に於て朽ち敗るるなり。心に諛諛を懷くなり。煩惱に爲つて害せらるるなり。沙門の果を離るるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。婬欲に爲つて燒るるなり。瞋恚に燒かるるなり。愚癡に燒るるなり。亦一切の煩惱に爲つて燒かるるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。多く婬里に遊んで過惡なるを知らざるなり。知足を知らざるなり。多く學問すと雖も知足を知らざるなり。須ふる所の物に於て常に悟む心を懷きて、他に施すこと能はざるなり。是れを惡比丘と名く。又、四法の成就するならば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。闇より闇に入るなり。癡より癡に入るなり。聖諦を見ずして多く疑惑を生ずるなり。常に生死の繫縛する所と爲つて、涅槃の門を閉づるなり。是れを惡

【九】聖種。
「四聖種」を謂ふ。第四卷、同名の解、參照。

を知り、又是の法を離れて餘の道を行ぜば、迦葉、彼の比丘は、我が弟子に非ず、我れば彼れの師に非ざるなり。迦葉、多く惡比丘あつて、我が佛法を壞らん。迦葉、九十五種の外道は、我が法を壞り能ふに非ず。亦、諸餘の外道は、我が法を壞り能ふに非ず。我が法中に有つ所の癡人を除く。此の癡人の輩は、能く我が法を壞るなり。迦葉、譬へば、師子は獸中の王なれば、若し其の死し已るとも、虎・狼・鳥・獸は、能く其の肉を食ふことを得る者ある無きも、迦葉、師子の身中に自ら生じたる諸蟲の、還つて其の肉を食ふが如し。迦葉、我が法中に於て、是等の如き諸の惡比丘——利養を貪惜し、貪利に爲つて覆はれ、惡法を滅せず、善法を修めず、妄語を離れざる——を出して、迦葉、是くの如き比丘は、能く我が法を壞るなり。

迦葉、四法の成就するあらば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。貪・患・癡及び我慢の者、是れを惡比丘と名くるなり。復、四法の成就するあらば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを何等か四なる。傲慢・自大にして、慚無く愧無く、口の過を慎まざるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するあらば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。掉動し、他を輕んじ、利養を貪求し、多く非法を行ふなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するあらば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。多く奸偽を有ち、人を幻惑し、多く邪命を行ひ、多く惡言を説くなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するあらば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。現に他の恩を受けて、之れに報ゆるを知らざるなり。他に小恩なるに、責めて大報を望むなり。先に他の恩を受けながら、而も憶念せざるなり。親しき友を侵し損するなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の成就するあらば、當に知るべし、是れ惡比丘なることを。何等か四なる。人の信施を受けて、他の福報を失はするなり。戒を善く護らざるなり。受くる所の戒を輕んずるなり。律を堅く持たざるなり。是れを惡比丘と名く。復、四法の

り一切の法は無我なりと觀する者、涅槃は寂滅なりと觀じて願求して得んと欲するもの、是くの如き比丘は、他の信施の搏を受くること須彌の如くなりとも、必ず能く是の信施の福に報いん。若し比丘あつて、信施の主の施を受けば、此の施主をして大利益を得、大果報を得しめん。何を以ての故ぞ。常に福德を生ずるに、三種の福——一には、常に食を施すなり。二には、僧坊舎をなり。三には、慈心を行するなり。——あれど、此の三福の中にて、慈心は最も勝れたればなり。と。佛は比丘に告ぐらく。若し比丘あつて、施主より、施の若しは衣鉢・臥具・飲食・湯藥を受けんに、受け已つて無量定に入る若くんば、彼の施主をして無量の福を得、無量の報を得しむること、迦葉、譬へば、三千大千世界の有らゆる大海の如きも尙竭盡す可くとも、而も此の施主の得る所の福報の盡すを得可からざるなり。迦葉、當に知るべし。破戒の比丘は、施主の爾所の福德を損ずることを。若しくは、施主の施を受け已つて惡法を行ぜば、他の信施を損ずることを。迦葉、是くの如くに、沙門の垢・沙門の過罪・沙門の詔曲・沙門中の賊を説きたれば、迦葉、持戒の比丘は、應當に專念して、是くの如き一切の惡法を遠離すべし。迦葉、謂はゆる沙門とは、眠は色の中に流れず、耳・鼻・舌・身・と次第して、意は法の中に流れざる、是の故にて之れを沙門と謂ふなり。六入を選擇し、六通に達し、專ら六念を念じ、六敬法に安住し、六重法を行する、是れを沙門と謂ふなり。と。

比 丘 品 第二

爾の時に、佛は迦葉に告ぐらく。言ふ所の比丘の比丘たるは、能く煩惱を破する故に比丘と名くるなり。我想・衆生想・人想・男想・女想を破する、是れを比丘と謂ふなり。復次に、迦葉、戒を修め慧を修むるあらば、是れを比丘と名くるなり。復次に、迦葉、恐畏を離るる故に、三有・四流を度る故に、有及び流の諸の過患を見る故に、一切の有及び流を離るる故に、無畏道に安處する故に、是れを比丘と名くるなり。迦葉、若し比丘あつて、自ら是くの如き法及び餘の善法を成就せざること

【六】 眠は色中に流れず。眼は色を見れども色に捕はれず煩惱を起さざるを謂ふ。

【七】 六敬法。

「六和敬法」の略なり。第一卷

「六和敬」の解、參照。

【八】 六重法。

「六波羅蜜」を指す者なるべし。

こと無けん。況んや、足を擧げ足を下して去來し屈伸することをや。何を以ての故ぞ。過去の大王は、此の大地を持ちて、戒を持ちて徳を行ふことある者に施與して、中に於て道を行かしむればなり。迦葉、是くて破戒の比丘の、足を擧げ足を下す處に、一切の信施は此の人に及ばず。況んや、僧坊及び招提僧舍・經行の處にをや。若く房舍・床敷・園林有つ所の衣鉢・臥具・醫藥の一切の信施ありとも、應に受くべからざる所なり。迦葉、我れ今當に説くべし。若し沙門に非ずして、自ら我れ是れ沙門なりと言ひ、梵行に非ずして、自ら我れ梵行を有てりと言ふことあらば、必ず信施に報ゆること、一毛の端の如くなることも能はざるなり。と。何を以ての故ぞ。聖衆の福田は、猶大海の如くに最勝最妙なれば、中に於て、若し施主あつて、淨信心の故にて、施の種子を以て福田の中に種うれば、此の施主には無量施の想を起せばなり。迦葉、若し破戒の比丘あらんか、一毛を分つて以て百分と爲す如きに、若し惡比丘にして、信施を受くること一毛分の如くなりとも、受くる所の毛分に隨ひ、即施主の爾所の大海なる福報の分を損失して、報を畢ふる能はざるなり。迦葉、是の故に、應に其の心を淨くして他の信施を受くべし。と。迦葉、應に是くの如くに學ぶべきなり。と。

爾の時に衆中に、淨行・少欲もて、扼を離れんと欲する比丘二百人ありしが、是れを説けるを聞き已つて、涙を拭うて世尊に白さく。我れ今當に死すべし。沙門の果を得ざるを以て、他の信施の乃至一食をも受くることを欲せざればなり。と。佛言はく。善い哉、善い哉。善男子、汝の是くの如くに慚愧して、後世を畏るること、喻へば金剛の如くなるは、即是れ現世の瓔珞なり。善男子、我れ今當に説くべし。世に二つの人あつて、應に信施を受くべきことを。何等か二つなる。一には、勤めて精進を行するものなり。二には、解脱を得る者なり。と。佛は比丘に告ぐらく。若し比丘あつて、解脱を得る者、善法を行する者、我が説く所の如くに堅く戒を持つ者、一切の行は無常・苦な

【四】招提(Caturdasa)僧舍。招提は、正しくは「拓闢提舍」と書し、「四方」と譯す。即ち四方より來集せる僧の宿舎を謂ふ。此れに對して上擧の「僧坊」は常住僧の住舎を謂ふ。

【五】扼。繫縛の義にして「煩惱」を謂ふ。

是の故に出家の比丘の身の、袈裟を服する時に、若し未だ沙門の果を得ざる者ならば、應に八法を以て袈裟を敬ひ重んずべきなり。何等の八を、身の袈裟に於て應に起すべきか。塔の想なり。世の尊の想なり。寂滅の想なり。慈の想なり。敬ふこと佛の如くにする想なり。慚の想なり。愧の想なり。我が來世をして貪・恚・癡を離れて沙門の法を具せしむる想なり。迦葉、是れを八法にて袈裟を敬重すと名く。迦葉、若し四聖種に於て知足を行ぜずして、沙門の法を離れ、亦此の八法を以て袈裟を敬重することをせざる者あらば、而ち彼れは別に沙門に似たる 數を有つて、小地獄に墮するなり。迦葉、彼の地獄の中にて、沙門に似たる者の、中に於て罪を受くることは、衣鉢・支體皆悉く熾に然え、坐臥の處の凡べて用ふ所ある物も、亦皆熾に然ゆること大火の聚の如くなるなり。沙門に似たる者の、是くの如き罪を受くるは、何を以ての故ぞ。不淨なる身・口・意の業を成就せる故に、是の罪處に墮するなり。迦葉、若し沙門に非ずして、自ら我れは是れ沙門なりと言ひ、梵行の者に非ずして、自ら我れは梵行を有つと言ひ、若しくは、持戒の功德の具足せる人の、右に遶り恭敬尊重せらるる者あらんに、若し破戒の比丘にして、其の禮敬・供養を受けて自ら惡なるを知らずんば、彼の惡比丘は、是の不善根の故を以て八つの輕法を得ん。何等は八なるか。一には、愚癡を作すなり。二には、瘡癩なるなり。三には、身を受くること矜陋なり。四には、顔貌醜惡に、其の面側戻して、見る者嗤笑するなり。五には、轉じて女人の身を受け、貧窮なる婢使と作るなり。六には、其の形羸瘦して壽命を夭損するなり。七には、人の敬はざる所にして、常に惡名を有つなり。八には、佛の世に値はざるなり。迦葉、是く破戒の比丘にして、持戒の者としての禮敬・供養を受けば、是くの如き八種の法を得るなり。迦葉、破戒の比丘は、是くの如き法を聞き已らば、應當に持戒の比丘の禮敬・供養を受けざるべし。迦葉、若し沙門に非ずして、自ら我れは是れ沙門なりと言ひ、梵行に非ずして、自ら我れ梵行を有てりと言はば、此の大地に於て、乃至、涕唾の分の處をも有つ

【三】數。
種類即ち、形相を謂ふ。

ざる所の法を聞き已つて誹謗するなり。五には、無衆生・無我・無命・無人の法を聞き已つて、心に驚畏を生ずるなり。六には、一切の行の本來無生なるを聞き已つて、有爲の法を解して無爲の法を解せざるなり。七には、次第の法を説くを聞き已つて、大深處に墮するなり。八には、一切の法の生無く性無く出無きを聞き已つて、心迷没するなり。迦葉、是れを八法にて沙門の行を觀ふと名け、是くの如き八法をば、出家沙門は應當に遠離すべきなり。

迦葉、我れ剃頭して法服せるをば、名けて沙門と爲すと説かず。謂はゆる功德の儀式の具足せるある者を、乃ち名けて沙門と爲すなり。迦葉、沙門は身には袈裟を服し、心には應に貪・恚・癡の行を遠離すべし。何を以ての故ぞ。心に貪・恚・癡の行無くんば、我れは乃ち袈裟を著ることを聽せばなり。迦葉、若し心に貪・恚・癡の法を有ちながら、而も身に袈裟を著れば、專心に戒を持てるものを除いて、餘の、戒を持たざる人には、則ち袈裟を燒滅することと爲るなり。何を以ての故ぞ。聖人の表式は、寂滅に隨順し慈悲を行じ、心離れて欲の滅せる者の應に服すべき所なればなり。迦葉、汝今我れ聖人の表式に十二の事あるを説くを聽け。何等か十二なる。迦葉、持戒は、是れ聖人の表式なり。禪定は、是れ聖人の表式なり。智慧は、是れ聖人の表式なり。解脫は、是れ聖人の表式なり。解脫知見は、是れ聖人の表式なり。四聖諦に入るは、是れ聖人の表式なり。能く十二因縁を解するは、是れ聖人の表式なり。四無量心を行するは、是れ聖人の表式なり。四禪を行するは、是れ聖人の表式なり。四無色定を行するは、是れ聖人の表式なり。四向の正定に入るは、是れ聖人の表式なり。一切の漏を斷ずるは、是れ聖人の表式なり。迦葉、是れを聖人の十二の表式と名く。迦葉、若し比丘あつて、聖人の十二の表式を具足せずして身に袈裟を服する者は、我れは説かん。此の比丘は、是れ邪法をば行じて、寂滅をば行ぜるに非ず。佛法の行を離れて、涅槃に近かず。生死の行に順じ、魔に爲つて拘られて、生死を度らず。正法に於て退いて、邪法を行するなり。と。迦葉、

【一】四無色定 (Caturujpa-rthyam)。又「四空定」とも曰ふ。一に、空無邊處定、色の界を厭離せんと欲して、色の想を捨てて、無邊の虚空を觀じ、其の心の、空の無邊なると相應一致する者(一)、識無邊處定(前の空無邊を厭離し、心識の無邊なるを觀じて、其れと相應一致する者)(三)、無所有處定(前の心識無邊を厭離し、心識の有る無きことを觀じて、心の、無所有と相應一致する者)四に、非想・非非想處定(前の識處の有想即ち「想」と、無所有處の無相即ち「非想」とを、共に棄て、或は魔想無きを非想と曰ひ、細想有るを非非想とも曰ふ)寂然清淨無爲なる者)是れにして、此の四空定を修して得る所の果は、即ち四無色界なりとす。

【二】四向の正定。

【三】四向の修行位に於ける四向(各卷の「預流」「一來」「不還」「阿羅漢の解參照)に於て修むる正定即ち「八解脫」等指す者なるべし。

ず、心を修めず、慧を修めず、癡なること小兒の如くにして、闇冥にして知る所無く、心調伏せずして沙門の垢を成すべし。迦葉、云何なるは沙門の垢ぞ。迦葉、沙門の垢に三十二あつて、出家の人の應に遠離すべき所なり。何等か三十二なる。欲覺は、是れ沙門の垢なり。瞋覺は、是れ沙門の垢なり。憍覺は、是れ沙門の垢なり。身讃は、是れ沙門の垢なり。他を毀るは、是れ沙門の垢なり。邪に利養を求むるは、是れ沙門の垢なり。利に因り利を求むるは、是れ沙門の垢なり。他の施福を損するは、是れ沙門の垢なり。罪過を覆藏するは、是れ沙門の垢なり。在家の人に親近するは、是れ沙門の垢なり。出家の人に親近するは、是れ沙門の垢なり。衆聞を樂むは、是れ沙門の垢なり。未だ利養を得ざるを方便を作して求むるは、是れ沙門の垢なり。他の利養に於て心に希望を生ずるは、是れ沙門の垢なり。自ら利養に於て心に足ることを知らざるは、是れ沙門の垢なり。他の利養の中に於て心に嫉妬を生ずるは、是れ沙門の垢なり。常に他の過を求むるは、是れ沙門の垢なり。己れの過を見ざるは、是れ沙門の垢なり。解脱戒に於て堅く持たざるは、是れ沙門の垢なり。慚愧を知らざるは、是れ沙門の垢なり。恭敬の意無く、心慢に掉動して羞恥を有つ無きは、是れ沙門の垢なり。諸の結使を起すは、是れ沙門の垢なり。十二因縁に逆ふは、是れ沙門の垢なり。邊見を攝取するは、是れ沙門の垢なり。寂滅ならず欲を離れざるは、是れ沙門の垢なり。生死を樂んで涅槃を樂まざるは、是れ沙門の垢なり。外典を好み樂むは、是れ沙門の垢なり。五蓋心を覆ひて諸の煩惱を起すは、是れ沙門の垢なり。業報を信ぜざるは、是れ沙門の垢なり。三脫門を畏るるは、是れ沙門の垢なり。深妙の法を誦りて寂滅の行ならざるは、是れ沙門の垢なり。三寶の中に於て心尊敬せざるは、沙門の垢なり。迦葉、是れを沙門の三十二垢と名け、若し能く此の諸垢を離れば、是れを沙門と名くるなり。迦葉、又、八法あつて沙門の行を覆はん。何等か八なる。一には、師長に敬順ならざるなり。二には、法を尊敬せざるなり。三には、善き思惟せざるなり。四には、未だ聞か

離るるが故に、善く五陰を知るが故に、一切の煩惱を斷つが故に、最後身を得るが故に、生死の道を離るるが故に、一切の愛を離るるが故に、勤行して、苦を知つて集を斷じ、滅を證せんと道を修するが故に、善く四聖諦を見るが故に、佛法の中に於てして餘道を信ぜざるが故に、作す所已に辦するが故に、一切の漏を斷つが故に、八背捨を修するが故に、釋・梵天王に讀ぜらるるが故に、本より已來專心にて道を行するが故に、阿蘭若處を樂むが故に、聖法の中に安住するが故に、佛法の儀式を樂むが故に、心傾き動かざるが故に、出家・在家の衆に親近せざるが故に、心・獨行を樂むこと厚の角の如くなるが故に、人衆の惱亂多きを畏るるが故に、樂んで獨處に住するが故に、常に三界を怖畏するが故に、實の沙門の果を得るが故に、一切の希望を離るるが故に、世の八法を離るるが故に、謂はゆる利・衰・毀・譽・稱・讚・苦・樂に堅く心の動かざること、地の如くなるが故に、彼・我の意を護つて犯す所無きが故に、濁らざるが故に、正しく行するが故に、心行の成就すること虚空の如くなるが故に、諸の形相に於て心に染著無きこと、虚空の中に於て手を動すに礙る所無きが故なり。迦葉、若し能く是くの如き行法を成就せば、是れを沙門と名くるなり。と。

爾の時に、摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、未曾有なり。如來の、沙門の徳行を善く説きたまふことや。世尊、若し未來の世に諸の沙門の實の沙門に非ざるあつて、自ら我れは是れ沙門なりと言ひ、梵行に非ざる人の、自ら我れ梵行を有てりと言はんは、是くの如き人は、即已に如來の無量阿僧祇劫に修集したまへる所の阿耨多羅三藐三菩提を侵し損ぜん。と。佛は迦葉に告ぐらく。是くの如くに如來の菩提を侵損する罪は、説くとも盡す可からず。迦葉、我が滅度の後、汝及び餘の大弟子等も亦皆滅度し、又此の世界の諸の大菩薩も皆他方の諸佛の世界に至らん。爾の時に、我が法中に於て、當に比丘あつて、諸行する所に於て、心に詬曲多かるべし。迦葉、我れ今當に沙門の垢・沙門の過罪を説くべし。迦葉、後の末法の中に、當に比丘あつて、身を修めず、戒を修め

第一百一十三

北涼道 龔漢譯

寶梁聚會 第四十四の一

沙門品 第一

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は王舍城の耆闍崛山に在して、大比丘の衆八千人と俱なりき。

菩薩摩訶薩は萬六千人にして、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず、盡く是れ一生補處にして、悉く十方の諸の佛世界よりして來つて會に集れるなり。

爾の時に、摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、言ふ所の沙門とは、云何なるを沙門と爲すか。と。佛は迦葉に告ぐらく。謂はゆる沙門とは、寂滅なる故に、調伏する故に、教を受くる故に、戒身淨き故に、禪定に入る故に、智慧を得る故に、如實の義を解して解脱を得る故に、三脫門に於て疑ふ所無き故に、聖人の行する所の法に安住する故に、善く四念處を修する故に、一切の不善の法を離るる故に、四正勤に安住する故に、善く四如意足を修する故に、信根を成就する故に、佛・法・僧を信する故に、佛・法・僧を堅く信することを成就する故に、餘道の法を信ぜざる故に、勤行して一切の煩惱を離るる故に、善く七菩提分を修して一切の不善を離れ、實の如くに一切の善法を修するが故に、善く正念・正智の方便を知るが故に、一切の諸の善法を專念するが故に、善く定・慧の方便を知るが故に、五力を成就するが故に、一切の煩惱に爲つて亂されざるが故に、善く七菩提分を修するが故に、善く一切法の中の因縁の方便を知るが故に、善く聖道の方便を知るが故に、善く正見・正定の方便を知るが故に、四辯の力を得て外道を信ぜざるが故に、義に依つて語に依らず、智に依つて識に依らず、了義經に依つて不了義經に依らず、法に依つて人に依らざるが故に、四魔を

て虚しからず、厚く善法を習ひ、深心清淨にして精進を捨てず、明みやうに近ちからんことを樂たの欲よくして、一切の諸の善根を修習する故ゆゑなり。常に正しく憶念して、善法を樂む故なり。多く聞きて厭いとふ無くして、慧を具足する故なり。憍慢を破壊して、智を増益する故なり。戲論を除滅して、福德を具ふる故なり。樂んで獨處に住して、身心の離るる故なり。憒わづ鬧なうに處あらずして、惡人を離るる故なり。深く法を求めて、第一義に依る故なり。智慧を求めて實相に通達する故なり。眞諦を求めて不壞ふの法を得る故なり。空法を求めて行ずる所正しき故なり。遠離を求めて寂滅を得る故なり。是くの如くならば、普明、是こゝに菩薩は疾はやく佛道を成ずることを爲さんと。

是の經を説きたまへる時に、普明菩薩・大迦葉・諸天・阿修羅あしゅら及び世間の人は、皆大に歡喜して頂戴して奉行せり。

て渡らんか。答へて言はく。世尊、大精進を以て乃ち渡るを得可きなり。所以は何ぞ。中に壞れることを恐るる故なり。と。佛は普明に告ぐらく、菩薩も亦爾く、佛法を修めんと欲せば、當に勤めて精進すること倍復是れに過ぐべし。所以は何ぞ。是の身は無常にして決定ある無く、壞敗の相にして久しく住ることを得ず、終には磨滅に歸するに、未だ法利を得ずして中に壞れんことを恐るればなり。故に我れ大流に在つて、衆生を度して四流を斷たん爲めの故に、當に法船を習ひ、此の法船に乗つて生死に往來して、衆生を度脱するなり。云何に菩薩は法船を習ふ所ぞ。謂はく。平等心もて、一切衆生に船と爲る因縁は、無量の福を脗うて以て牢厚を爲し、清淨なる戒板に行施及び果をば莊嚴と爲し、淨心の佛道を諸の材木と爲し、一切の福德にて以て具足して堅固に繫縛することを爲し、忍辱・柔軟の憶念もて釘と爲し、諸の菩提分を、堅強なる精進もて最上妙善の法林中より出し、不可思議無量なる禪定にて、福德の業成じて善く心を寂調せるをば、以て師匠と爲し、畢竟して壞れざる大悲の攝むる所として、四攝の法を以て廣く度して遠きに致し、智慧の力を以て諸の怨賊を防ぎ、善方便力もて種種に合集せる。四大梵行にて以て端嚴を爲し、四念處を金の樓觀と爲し、四正勤行・四如意足をば以て疾風と爲し、五根にて善く察して諸の曲惡を離れ、五力にて誦り浮び、七覺にて覺悟して能く魔賊を破り、八眞正道にて意に隨ひ岸に到つて外道の濟を離れ、止を調御と爲し、觀を利益と爲し、二邊に著せずして、因縁の法を有つて以て安隱なる大乘と爲し、廣博無盡の辯才もて廣く名聞を布きて、能く十方の一切衆生を濟はんとて、自ら唱へて言はく。來つて法船上つて、安隱の道より涅槃に至れ。身見の岸を度つて、佛道の岸たる一切の見を離れたるに至れ。と。是くの如きなり。普明、菩薩摩訶薩は、應當に是くの如き法船を修習して、是の法船を以て無量なる百千萬億阿僧祇劫に、生死の中に在つて、長流に漂没せる衆生を度脱すべきなり。又、普明に告ぐ。復、法行の、能く菩薩をして、疾く成佛を得しむるあり。謂はく。諸行する所は眞實にし

解脱せり。とあり。又異譯本には「一切已に著の中より脱し去る。」とあり。

【四】四大梵行にて以て端嚴を爲し。別の異譯本の此れに當る者には「四無量を以て衆生を饒益し。」とあり。

なり。又問ふ。汝等は何の法を習行せるか。答へて言はく。得るを爲さざる故なり。斷を爲さざる故なり。又問ふ。誰れは汝を調伏せるか。答へて言はく。身に定れる相無く心に行ずる所無きもの是れ我れを調伏せるなり。又問ふ。何の行にて心に解脱を得たるか。答へて言はく。無明を斷ぜず明を生ぜざる故なり。又問ふ。汝等は誰れの弟子と爲すか。答へて言はく。得る無く知る無き者、是れにして、彼れの弟子なり。又問ふ。汝等は已に幾何を得ば、當に涅槃に入るべきか。答へて言はく。猶如來の化する所にして涅槃に入る如きには、我等も當に入るべし。又問ふ。汝等は已に已利を得たりや。答へて言はく。自ら利することは、不可得なる故なり。又問ふ。汝等は作す所を已に辦じたりや。答へて言はく。作す所は、不可得なる故なり。又問ふ。汝等は梵行を修したりや。答へて言はく。三界に於て行ぜず亦行ぜざるに非ざるは、是れ我が梵行なり。又問ふ。汝等は煩惱盡きたりや。答へて言はく。一切の諸法は、畢竟じて盡相の故無し。又問ふ。汝等は魔を破れりや。答へて言はく。陰魔は不可得なる故なり。又問ふ。汝等は如來を奉ずるか。答へて言はく。身心を以てせざる故なり。又問ふ。福田に住せるか。答へて言はく。住を有つ故無し。又問ふ。汝等は生死の往來を斷てるか。答へて言はく。常無く斷無き故なり。又問ふ。汝等は法に隨つて行ずるか。答へて言はく。無礙の解脱せる故なり。又問ふ。汝等は究竟して當に何所に至るべきか。答へて言はく。如來化人の至る所に隨ふ。と。須菩提の諸の比丘に問へる時に、五百の比丘あつて、諸法を受けず心に解脱を得、三萬二千の人は、塵に遠り垢を離れて法眼淨を得たり。

爾の時に、會中に、普明菩薩あつて、佛に白して言はく。世尊、菩薩は是の寶積經を學ばんと欲せば、當に云何に住すべく、當に云何に學ぶべきか。と。佛言はく。菩薩、是の經に説く所は、皆定れる相無くして取る可からず、亦著す可からずと學べ。是れに隨つて行ぜば大利益あり。普明、譬へば、人あつて坏船に乗つて恒河を渡らんと欲する如きには、何なる精進を以て、此の船に乗つ

【一〇】 汝等は誰れの弟子と爲すか。乃至、彼れの弟子なり。異譯本にこれに當る者には誰れは船に愈る者ぞ。乃至、身無く心無きもの、是れ我が師なり。當に我れに愈るべし。とあり。

【一一】 汝等は已に、乃至、入るべきか。異譯本に「輪の曹は、當に何時、般涅槃すべき」とあり。

【一二】 猶如來の化する所にして、乃至、入るべし。

【一三】 別の異譯本には「如來の涅槃に入りたまふ時に、我れは即、涅槃せん」とあり。又、異譯本には「化人にして般泥洹せば、我れ爾の時に、亦當に復般泥洹すべし」とあり。

【一四】 陰魔は不可得なる故なり。他の異譯本には「蘊身自ら尙得ず。何ぞ魔王の破るを有たん」とあり。

【一五】 福田に住せるか。異譯本には「已に羅漢地に住せりや」とあり。

【一六】 常無く斷無き故なり。異譯本には「本より斷ずるも見る所無し」とあり。

【一七】 汝等は法に隨つて行ずるか。異譯本には「輪の曹は、能く心地に住するか」とあり。

【一八】 無礙の解脱せる故なり。別の異譯本には「一切の執は

たり。説く所の涅槃を名けて滅と爲す者は、何を滅する所と爲すか。是れ身の中に我有るをば滅するか。人有り作有り受有り命有るを、而ち滅す可きか。と。諸の比丘は言はく。是の身の中には、我無く人無く作無く受無く命無し。而して滅す可き者は、但以て貪欲・瞋・癡の滅なる故に、名けて涅槃と爲すなり。と。化比丘は言はく。汝等、貪欲・瞋・癡は是れ定相あつて滅盡す可しと爲すか。と。諸の比丘は言はく。貪欲・瞋・癡は内に在らず、亦外に在らず、中間に在らず。諸の憶想を離れれば、是れ則ち不生なり。と。化比丘は言はく。是の故に、汝等、憶想を作すこと莫かれ。若し汝等をして憶想分別の法を起さざらしめば、即諸法に於て染る無く離る無し。染る無く離る無き者、是れを寂滅と名く。有つ所の戒品も、亦往來せず亦滅盡せず。定品・慧品・解脫品・解脫知見品も、亦往來せず亦滅盡せず。是の法を以ての故に、説いて涅槃と爲せば、是の法は皆空にして遠離し、亦取る可からざれば、汝等は是の涅槃の想を捨て離れて、想に隨ふ莫く、非想に隨ふ莫く、想を以て想を捨つる莫く、想を以て想を觀する莫かれ。苦し想を以て想を捨てば、則ち想に爲つて縛せられん。汝等、應に一切の受想の滅する定を分別すべからず。一切の諸法には分別無き故なり。若し比丘あつて、諸の受想を滅して滅の定を得ば、則ち満足して更に上ある無しと爲す。と。化比丘の是の語を説ける時に、五百の比丘は、諸法を受けず心に解脫を得たれば、來つて佛の所に至つて、頭面にて足を禮し、一面に在つて立てり。

爾の時に、須菩提は、諸の比丘に問うて言はく。汝等去つて何所に至り、今何より來れるか。と。諸の比丘は言はく。佛の説きたまふ法として、從つて來る所無く、去つて至る所無し。と。又問ふ。誰れは汝の師爲りしか。答へて言はく。我が師は、先より來生ぜず、亦滅を有たざるなり。又問ふ。汝等は何づれ従り法を聞けるか。答へて言はく。五陰・十二入・十八界ある無き、是れ従り法を聞きたり。又問ふ。云何に法を聞けるか。答へて言はく。縛を爲さざる故なり。解脫を爲さざる故

【五四】五陰、乃至、是れ従り法を聞きたり。
異譯本に「五陰無く、四大無く、六衰無きもの、是れ我が師なり」とあり。
【五五】縛を爲さざる故なり。解脫を爲さざる故なり。
異譯本に「縛る無く、亦放つ無きなり」とあり。

り垢を離れて法眼淨を得たりしも、五百の比丘は、是の深法を聞き、心に信解せず通達する能はずして坐より起つて去れり。爾の時に、大迦葉は、佛に白して言はく。世尊、是に五百の比丘は、皆禪定を得ながら、信解して深法に入る能はざる故に、坐より起つて去れり。と。佛は迦葉に語らく。是の諸の比丘は、皆増上慢なれば、是の清淨無漏の戒相を聞けども、信解する能はず通達する能はざるなり。佛の説く所の偈は其の義甚だ深し。所以は何ぞ。諸佛の菩提は、極めて甚深なればなり。故に若し厚く善根を種えず、惡知識に守られて信解力少くば、信受することを得難きなり。又、大迦葉、是の五百の比丘は、過去に、迦葉佛の時に外道の弟子爲りしが、迦葉佛の所に到つて長短を求めんと欲し、佛の説法を聞くや、少しき信心を得て自ら念じて言はく。是の佛は希有なり。快く妙語を善くす。と。是の善心を以て、命終の後に忉利天に生ぜしが、忉利天の終るや閻浮提に生れ、我が法中に於て出家を得たるなれば、是の諸の比丘は、深く諸見に著して、深法を説くを聞けども信解・隨順・通達する能はざるなり。是の諸の比丘は、通達せずと雖も、深法を聞きたる因縁力の故を以て、大利益を得、惡道に生ぜずして、當に現身に於て入涅槃を得べし。と。

爾の時に、佛は須菩提に語つて言はく。汝往いて、是の諸の比丘を將ひて來れ。と。須菩提は言はく。世尊、是の人は尙佛の説をすら信する能はず。況んや、須菩提なるをや。と。佛は即二の比丘を化作して、五百の比丘の向ふ所の道中に隨へたるに、諸の比丘は見已つて、化比丘に問はく。汝は那に去らんと欲するか。と。答へて言はく。我等は獨處に去つて、禪定の業を修めんと欲するなり。所以は何ぞ。佛の説く所の法は、信解する能はざればなり。と。諸の比丘は言はく。長老、我等も佛の説法を聞けども、亦信解せざれば、獨處に至つて禪定の行を修めんと欲するなり。と。時に化比丘は、諸の比丘に語つて言はく。我等は當に自ら高うし逆らひ謬ふ心を離るべく、應に佛の説く所の義を信解せんことを求むべし。所以は何ぞ。高る無く謬ふ無きは、是れ沙門の法なれば

【五】當に現身に於て入涅槃を得べし。異譯本に「今世に於て、皆當に阿羅漢の般涅槃を得て去るべし」とあり。

界を受けず、一切の諸の依止の法を遠離すと名くるなり。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を説いて言はく。

清淨に戒を持つ者は、垢無く有つ所無く、戒を持ちて憍慢無く、亦依止する所無し、戒を持ちて愚癡無く、亦諸の縛ある無く、戒を持ちて塵汙無く、亦違失ある無し、戒を持ちて心善軟に、畢竟じて常に寂滅にして、一切の憶想の分別を遠離し、諸の動念を解脫せば、是れ淨く佛戒を持てるなり、身命を惜まず、諸有の生を用とせず、正行を修習して、正道の中に安住せば、是れを名けて佛の法にて、眞實に淨く戒を持つと爲す、戒を持ちて世に染らず、亦世の法に依らず、智慧の明を逮得して、闇無く所有無く、我無く彼の想無しと、已に諸相を知見する、是れを名けて佛の法にて、眞實に淨く戒を持つと爲す、此れ無く彼の岸無く、亦中間もある無く、此彼無き中に於ても、亦著する所無く、縛無く諸漏無く、亦欺誑をも有つ無き、是れを名けて佛の法にて、眞實に淨く戒を持つと爲す、心名色に著せず、我我所を生ぜざる、是れを名けて、眞實に淨く戒を持つことに安住すと爲す、諸戒を持つことを行すと雖も、其の心自ら高うせず、亦以て下うすることを爲さず、戒に遇うて聖道を求むる、是れを名けて眞實に、清淨に戒を持つ相と爲す、戒を以て最なりと爲さず、亦三昧のみを貴ばず、此の二事を過し已つて、智慧を修習して、空寂にして所有無きは、諸の聖賢の性にして、是れ清淨の持戒なれば、諸佛の稱讚する所なり、心身見を解脫し、我我所を除滅して、諸佛の行する所の空寂の法を信解すること、是くの如きは聖戒を持てるにて、則ち比ある無しと爲す、戒に依つて三昧を得、三昧にて能く慧を修め、惡を修むる所を因とするに依つて、淨智を逮得るものにして、已に淨智を得ば、清淨戒を具足せるなり、と。

是の語を説ける時に、五百の比丘は、諸法を受けずして心に解脫を得、三萬二千の人は、塵に遠

【五〇】諸有の生を用とせず。異譯本に「五道を樂はず」とあり。

【五一】此れ無く彼の岸無く。此岸と彼岸、即ち迷と悟、煩惱と菩提、生死と涅槃との觀念・取著無きを謂ふ。

【五二】下うすること。豪本には「下」は「上」となり居れど、前の長行の文と對照し、及び意義の上よりして、「下」の誤記と認めて改めたり。

の如くに、好き法藥を得とも、善を修する能はずんば、自ら慧根を害するなり。迦葉、譬へば、摩尼寶珠を不淨の中に墮せば、復と著れざるが如し。是くの如くに、多聞なりとも利養に貪著せば、便ち復と天・人を利益する能はざるなり。譬へば、死人の、金の瓔珞を著くるが如くに、多聞にして破戒なる比丘の、法衣を被服して他の供養を受くることも、亦復是くの如し。長者子の、爪の甲を剪り除き、淨く自をば洗浴して赤梅檀を塗り、新しき白衣を著け、頭に華鬘を著けて、中外相ひ稱ふが如し。是くの如くに、迦葉、多聞にして持戒なるものの、法衣を被服して他の供養を受くることも、亦復是くの如し。

又、大迦葉、四種の破戒の比丘は、戒を善く持てるに似たり。何を謂うて四と爲すか。一の比丘あつて、持戒を具足して、大小の罪の中に心常に怖畏し、聞く所の戒法を皆能く履行して、身業清淨に、口業清淨に、意業清淨に、正命清淨ならんも、而も是の比丘は有我の論を説かば、是れ初の破戒の、善き持戒に似たるものなり。復次に、迦葉、一の比丘あつて、戒律を誦し持ち、説く所に隨つて行すとも、身見滅せずんば、是れを第二の破戒の比丘の、善き持戒に似たるものと名く。復次に、迦葉、一の比丘あつて、持戒を具足すとも、衆生の相を取つて慈心を行ひ、一切法の本來無生なるを聞きて心大に驚怖せば、是れを第三の破戒の比丘の、善き持戒に似たるものと名く。復次に、迦葉、一の比丘あつて、十二の頭陀を具足して修行すとも、有所得を見れば、是れを第四の破戒の比丘の、善き持戒に似たるものと名く。復次に、迦葉、善き持戒とは、我無く我所無く、作無く非作無く、所作ある無く亦作者無く、行無く非行無く、色無く、名無く、相無く非相無く、滅無く非滅無く、取無く捨無く、取る可き無く棄つ可き無く、衆生無く衆生の名も無く、心無く心の名も無く、世間無く非世間無く、依止無く非依止無しとして、戒を以て自ら高うすることをせず下うせず。他の戒にも、亦此の戒を憶想分別せざる、是れを諸聖の持つ所の戒行の、無漏不繫にして三

て、厭離を以てせず、善寂の爲めならず、得道の爲めならず、沙門・婆羅門の果の爲めならず、涅槃の爲めならずんば、是れを名聞の沙門と爲すなり。復次に、迦葉、何なるを實行の沙門と謂ふか。一の沙門あつて、身命を食らす。何に況んや、利養をや。諸法の空・無相・無願なるを聞きて、心達し隨順して説く所の如くに行じ、涅槃の爲めならずして梵行を修す。何に況んや、三界なるをや。尙空・無我の見をも起すことを樂はず。何に況んや、我見・衆生・人見をや。法に依止することを離れて一切の煩惱を解脱することを求め、一切諸法の本來無垢にして、畢竟じて清淨なるを見、而して自に依止して亦他に依らざれば、正法身を以てすら尙佛を見ず。何に況んや、形色なるをや。空を以て遠離するに、尙法をすら見ず。何に況んや、音聲・言説に貪著することをや。無爲の法を以て、尙僧をすら見ず。何に況んや、當に和合の衆あるを見るべきをや。而して諸法に於て、斷除する所無く修行する所無く、生死に住せず涅槃に著せず。一切法の本來寂滅なるを知つて、縛有るを見ず解脱を求めざる、是れを實行の沙門と名くるなり。是くの如くなれば、迦葉、汝等當に實行の沙門の法を習うて、名字に爲つて壞らるる莫かれ。迦葉、譬へば、貧窮の賤人の、富貴の名を假るが如きは、意に於て云何。此の名に稱ふや。不や。不なり、世尊。是くの如くに、迦葉、但沙門・婆羅門と名くとも、而も沙門・婆羅門の實の功德の行無くんば、亦貧人の爲せる名の壞るるが如し。譬へば、人あつて、大水に漂没しながら、渴乏して死するが如し。是くの如くに迦葉、諸の沙門あつて、多く經を讀誦すとも、而も貪・恚・癡の渴を止むること能はずんば、法水に漂没しつゝ、煩惱にて渴死して、諸の惡道に墮するなり。譬へば、藥師の藥囊を持ちて行きながら、而も自身の病をば療治する能はざるが如し。多聞の人の、煩惱の病を有つことも亦復是くの如くに、多聞を有つと雖も、煩惱を止めずんば、自ら利すること能はざるなり。譬へば、人あつて、王の貴藥を服するに、將ひ適する能はずして、藥に爲つて害せらるるが如し。多聞の人の煩惱の病を有つことも亦復是く

行ひ、とあり。

【四七】無爲の法を以て。乃至。見るべきをや。

此の文中に「僧」と「和合の衆」とを區別して述べたるは、元來、「僧」は即ち「和合の衆」の義なれど、「僧」を佛・法に對する個人的僧と見、「和合の衆」を其の僧團と見たる者なるべし。尙、第一卷「僧」及び第五卷「和合衆」の解を參照すべし。

【四八】亦貧人の、等。

異譯本に「亦貧人の、自ら大富と稱するが如し。」とあり。

【四九】譬へば、乃至、死するが如し。

異譯本に「譬へば、人の、水に爲つて没溺せられながら、反つて渴して死せんと欲するが如し。」とあり。

出家の人に二種の垢あり。何を謂うて二と爲すか。一には、煩惱を忍受するなり。二には諸の檀越を食するなり。又、出家の人に二つの雨・雹あつて、諸の善根を壞る。何を謂うて二と爲すか。一には、正法を敗り逆らふなり。二には、戒を破りながら人の信施を受くるなり。又、出家の人に二つの瘡瘡あり。何を謂うて二と爲すか。一には、他の過を求め見るなり。二には、自ら其の罪を覆ふなり。又、出家の人に二つの燒法あり。何を謂うて二と爲すか。一には、垢心もて法衣を受け著くるなり。二には、他の持戒なる善人の供養を受くるなり。又、出家の人に二種の病あり。何を謂うて二と爲すか。一には、増上慢を懷きて心を伏せざるなり。二には、他の大乘心を發せるを壞るなり。

又、大迦葉、沙門と謂ふ者に、四種の沙門あり。何を謂うて四と爲すか。一には、形服の沙門なり。二には、威儀もて欺誑する沙門なり。三には、名聞を貪求する沙門なり。四には、實行の沙門なり。何なるを形服の沙門と謂ふか。一の沙門あつて、形服具足して僧伽梨を被、鬚髮を剃除し、應器を執持することをば而ち成就すれども、身業を淨めず、口業を淨めず、意業を淨めず、身を善く護らず、慳嫉・懈怠して戒を破り惡を爲さば、是れを形服の沙門と名くるなり。何なるを、威儀もて欺誑する沙門と謂ふか。一の沙門あつて、沙門の身の四威儀を行・立・坐・臥に具足し、一心に安詳として諸の美味を斷ち、四聖種を修め、衆會を遠離し、家の憒鬧の衆より出で、言語柔軟なる、是くの如き法を行すれど、皆虚誑と爲して善法と爲さざるは、而ち空の法に於て見として得る所あり、無得の法に於て恐懼の心を生ずること、深に臨める想の如くにして、空をば論ずる比丘に於て怨賊の想を生ずればなり。是れを威儀もて欺誑する沙門と名くるなり。何なるを名聞の沙門と謂ふか。一の沙門あつて、現の因縁を以て持戒を行ひ、人をして、自ら力めて讀誦することを知らしめんと欲し、他の人をして多聞を爲すことを知らしめんと欲し、自ら力めて獨閑靜に處在して、人をして、阿練若の少欲知足の行・遠離の行を爲すことを知らしめんと欲し、但人の知ることの爲めにし

【三】二には、威儀もて欺誑する沙門なり。

異譯本に「外は沙門の如くにして、内に諛諂を懷くなり」とあり。

【四】應器（じぎ）。

比丘の食器たる鉢鉢なり。法に應ずる食器、供養を受け得る徳ある者（即ち應）の用ふる食器の義なり。

【四】四威儀（しゐゐ）。四つに各威徳を損ぜざる作法の儀則ある者を謂ふ。

【五】而ち空の法に於て見として得る所あり。他の異譯本には「止息を習はずして、見想を有ち」とあり。

【六】現の因縁を以て持戒を行ひ。

別の異譯本には「名聞・稱讃を求めん爲めに、詐つて持戒を

婆羅門あつて、好き色・聲・香・味・觸を怖畏する故にて、空閑の處に住して、獨り等侶無く、衆の憤
闘を離れ、身に五欲を離るれども、而も心に捨てざれば、是の人時あつて、或は好き色・聲・香・味・
觸を念うて、貪心もて樂著せん。而ち内を觀ぜず知らざれば、云何ぞ當に色・聲・香・味・觸を離るる
を得べき。知らざるを以ての故に、時あつて城邑・聚落に來り入り、人衆の中に在つて、還好き色・
聲・香・味・觸の五欲に縛らるるを爲すなり。空閑の處にて俗戒を持ちたる故を以て、死して天に生ず
るを得れども、又、天上の五欲に縛らるる爲め、天上より没して、亦四つの惡道たる地獄・餓鬼・畜
生・阿修羅道を脱することを得ざるなり。是れを比丘は犬の塊を逐ふが如しと名く。又、大迦葉、云
何なるは、比丘は犬の塊を逐ふが如くならざる。若し比丘あつて、人に爲つて罵られんに、而も罵
に報いず。打害・瞋毀にも亦毀に報いず。但自ら内觀して其の心を伏せんことを求めて、是くの如き
念——罵る者を誰れと爲す。受くる者を誰れと爲す。打つ者・害する者・毀る者・瞋る者も、亦復誰と
爲すか。——を作さば、是れを比丘は犬の塊を逐ふが如くならずと名く。迦葉、譬へば、善き調馬
師は、馬の懼候なるに隨ひ、即時に能く伏するが如く、行者も亦爾く、心の向ふ所に隨ひ、即時に
能く攝めて放逸ならしめざるなり。迦葉、譬へば、咽の塞る病は即能く命を斷つが如く、迦葉、一
切の見の中に、唯我見あつて、即時に能く智慧の命を斷つなり。譬へば、人あつて、縛らるる處
に隨つて解脱を求むるが如く、是くの如くに、迦葉、心の著する所に隨ひ、應に當に解を求むべき
なり。

又、大迦葉、出家の人に二つの不淨の心あり。何を謂うて二と爲すか。一には、路伽耶等の外道
の書を讀誦するなり。二には、多く諸の好き衣鉢を畜ふるなり。又、出家の人に二つの堅き縛あり。
何を謂うて二と爲すか。一には、見の縛なり。二には、利養の縛なり。又、出家の人に二つの障の
法あり。何を謂うて二と爲すか。一には、白衣に親近するなり。二には、善人を憎惡するなり。又、

るを得べき。
異譯本に「常に安隱快樂を得
んと欲して、背へて内に自ら
身を觀ぜざるなり。是くの如
くに、色・耳・鼻・舌・身を曉ら
ざるを爲さば、是の何の緣に
従つて脱するを得んや」とあり。

現在に非ず。若し過去・未來・現在に非ずんば、則ち三世を出づ。若し三世を出でば、有に非ず無に非ず。若し有に非ず無に非ずんば、即是れ起らざるなり。若し起らずんば、即是れ性無きなり。若し性無くんば即是れ生無きなり。若し生無くんば、即是れ滅無きなり。若し滅無くんば、則ち離るる所無し。若し離るる所無くんば、則ち來たる無く去る無く、退く無く生ずる無し。若し來たる無く去る無く、退く無く生ずる無くんば、則ち行業無し。若し行業無くんば、則ち是れ無爲なり。若し無爲ならば、則ち是れ一切の諸聖の根本にして、是の中に持戒ある無く亦破戒も無し。若し持戒無く破戒無くんば、是れ則ち行無く亦非行も無し。若し有行無く非行無くんば、是れ則ち心無く心數の法無し。若し心・心數の法ある無くんば、則ち業ある無く亦業の報無し。若し業ある無く業の報無くんば、則ち苦樂無し。若し苦樂無くんば、即是れ聖の性なり。是の中には、業無く業を起す者無ければ、身業ある無く亦口業も無く亦意業も無し。是の中には、上・中・下の差別ある無くして、聖性は平等なり。虚空の如くなる故なり。是の性には別無し。一切諸法と等しく一味なる故なり。是の性は遠離す。身心の相を離れたる故なり。是の性は一切の法を離る。涅槃に隨順せる故なり。是の性は清淨なり。一切の煩惱の垢を遠離したる故なり。是の性は無我なり。我、我所を離れたる故なり。是の性は高下無し。平等より生ぜざるが故なり。是の性は眞の諦なり。第一義諦なる故なり。是の性は無盡なり。畢竟じて不生なる故なり。是の性は常住なり。諸法の常に如なる故なり。是の性は安樂なり。涅槃を第一と爲す故なり。是の性は清淨なり。一切の相を離れたる故なり。是の性は無我なり。我を求むれども得可からざる故なり。是の性は眞淨なり。本より已來畢竟じて淨なる故なり。

又、大迦葉、汝等當に自ら内を觀じて、外に馳騁する莫かれ。是くの如くなるに、大迦葉、當來の比丘は、犬の塊を逐ふが如くなるらん。云何に比丘は犬の塊を逐ふが如くなるか。譬へば、人あつて、塊を以て犬に擲たば、犬は即人を捨てて往いて之れを逐ふが如し。是くの如くに、迦葉、沙門。

【元】諸法の常に如なる故なり。

他の異譯本には「當如の法なる故なり」とあり。

【四】是の性は、乃至。第一と爲す故なり。

他の異譯本には「此の性は樂なり。無爲と悉く同等なる故なり」とあり。

【四】獨り等侶無く。乃至。離

内に非ず、外に非ず、亦中間にも非ず。是の心には、色無く形無く、對無く、識無く知無く、住無く處無し。是くの如くにして、心は、十方三世の一切の諸佛も、已に見ず今見ず當に見ざるなり。若し一切の佛の、過去・來・今にも而も見ざる所ならば、云何ぞ當に有るべけん。但顛倒の想を以ての故に、心として諸法の種種なる差別を生ずるにて、是の心は幻の如くなるも、憶想分別を以ての故に、種種の業を起して種種の身を受くるなり。

又、大迦葉、心の去ることは、風の如くにして捉ふべからざるが故に、心は流水の如くにして生滅して住らざるが故に、心は燈焰の如くにして衆緣にて有るが故に、是の心は電の如くにして念念に滅するが故に、心は虚空の如くにして客塵にて汚るるが故に、心は獼猴の如くにして六欲を食るが故に、心は畫師の如くにして能く種種なる業の因縁を起すが故に、心は一定せずして種種なる諸の煩惱に隨逐するが故に、心は大王の如くにして一切諸法の増上なる主なるが故に、心は常に獨り行して、二つ無く伴無く、二心を有つこと能く一時なる無きが故に、心は怨家の如くにして能く一切の諸の苦惱を與ふるが故に、心は狂象の諸の土舎を踏むが如くに、能く一切の諸の善根を壞るが故に、心は鈎を呑みたるが如くに、苦の中にて樂の想を生ずるが故に、是の心は夢の如くに、無我の中に於て我の想を生ずるが故に、心は蒼蠅の如くに、不淨の中に於て淨の想を起すが故に、心は惡賊の如くに、能く種種なる考掠の苦を與ふるが故に、心は惡鬼の如くに、人に便を求むるが故に、心は常に高下して貪・恚に壞らるるが故に、心は盜賊の如くに、一切の善根を劫すが故に、心は常に色を食ること蛾の火に投ずるが如く、心は常に聲を食ること、軍の久しき行に勝鼓の音を樂むが如く、心は常に香を食ること、猪の喜んで不淨の中に臥すことを樂むが如く、心は常に味を食ること、小なる女人の美食に樂著するが如く、心は常に觸を食ること、蠅の油に著くが如く、是くの如くなれば、迦葉、是の心の相を求むとも而し得可からず。若し得可からずんば、則ち過去・未來・

願せば、我見に墮せず。受相觀に願せば、我見に墮せず。心相觀に願せば、我見に墮せず。法相觀に願せば、我見に墮せざるなり。——是の四念處にて、能く一切の身・受・心・法を厭ひて涅槃の門を開くなり。四正勤を以て、能く已に生ぜざる諸の不善の法、及び起らず未だ生ぜざる諸の不善の法を斷ち、未だ生ぜざる善の法は悉く能く生ぜしめ、已に生ぜざる善の法は能く增長せしむ。要を取つて之れを言はば、能く一切の諸の不善の法を斷ち、一切の諸の善の法を成就するなり。四如意足を以て、身心の重壞を治して、身に一切、如意自在の神通を得しめ、五根を以て、無信・懈怠・失念・亂心・無慧の衆生を治し、五力を以て、諸の煩惱力を障へ、七覺分を以て諸法中の疑悔・錯謬を治し、八正道を以て、邪道に墮する一切の衆生を治するなり。迦葉、是れを菩薩は智藥を畢竟すと爲し、菩薩は常に應に勤めて修習すべき所なり。

又、大迦葉、閻浮提の内の諸の醫師の中に、耆域醫王は最も第一爲るが、假令ひ三千大千世界の有らゆる衆生を、皆耆域の如くならしむとも、若し人あつて、心中の結使・煩惱・邪見・疑悔の病藥を問はば、尙答ふる能はじ。何に況んや、治し能ふことをや。菩薩は、中に於て應に是の念を作すべし。我れ終まで世藥を以て足りと爲さず。我れ當に出世の智藥を求め習ひ、亦一切の善根の福德を修すべし。と。是くの如くにして、菩薩は、智藥を得已つて、遍く十方に到り、一切衆生を療治することを畢竟するなり。何をか菩薩の出世の智藥と謂ふ。謂はく。諸法は縁合より生ずるを知り、一切の法は、我無く、人無く、亦衆生・壽命・知見無く、作る無く受くる無きを信じ、我、我所無きに信解通達し、是の空法の得る所無き中に於て、驚かず畏れず、勤めて精進を加へて、心相を求むるなり。菩薩は是くの如くに心を求むるに、何等は是れ心なるか。若しは貪欲なるか。若しは瞋恚なるか。若しは愚癡なるか。若しは過去・未來・現在にてか。若し心は過去ならば、即是れ盡滅せり。若し心は未來ならば、未だ生ぜず未だ至らず。若し心は現在ならば、則ち住るある無し。是の心は、

と爲し」とあり。
 【二】無願觀を以て、乃至、願を治し。
 異譯本には「是れ我所・非我所と、要欲もて念ずる所には、無願を以て藥と爲し」とあり。以上三は即ち謂はゆる「三脫門」なり。
 【三】四非倒。
 【四】轉倒の反對にして、即ち次に説明せる無常・苦・無我・不淨を指す。

【三】若しは過去・未來・現在にてか。
 異譯本に「過去・當來・今現在

諸天・世人は皆當に禮敬すべきなり。迦葉、譬へば、雪山王の中に生ぜる諸の藥草は、屬する所ある無く分別する所無くして、病に隨ひ服する所を皆能く療治するが如し。菩薩も亦爾く、集むる所の智藥は、分別する所無くして、普く衆生を平等に救護することを爲すなり。迦葉、譬へば、月の初めて生ずる時に、衆人の愛敬することの満月に踰えたるが如し。是くの如くに、迦葉、我が語を信する者の、菩薩を愛敬することは如來に過ぎたり。所以は何ぞ。諸の菩薩は如來を生ずるに由る故なり。迦葉、譬へば、愚人は月を捨てて星宿に禮し事ふるが如きも、智者は爾らずして、終まで菩薩の行者を捨離して聲聞を禮敬することをせざるなり。迦葉、譬へば、諸の天及び人の一切の世間は、僞珠を善く治して瑠璃の寶珠と成さしめ能はざるが如し。聲聞を求むる人も亦復是くの如くに、一切の持戒と成就せる禪定とにても、終まで道場に坐して無上道を成ずることを得る能はざるなり。迦葉、譬へば、治せる瑠璃珠の、能く百千無量の珍寶を出すが如く。是くの如くに、教化の成就せる菩薩は、能く百千無量の聲聞・辟支佛の寶を出すなり。と。

爾の時に、世尊は、復大迦葉に告ぐらく。菩薩は常に應に衆生を利せんことを求め、又正に一切有つ所の福德の善根を修習して、等心にて一切衆生に、得る所の智藥を施し與へ、遍く十方に到つて衆生を療治して、皆畢竟ならしむべし。云何なるを名けて、智藥を畢竟すと爲すか。謂はく。不淨觀にて貪婬を治し、慈心觀を以て瞋恚を治し、因緣觀を以て愚癡を治し、行空觀を以て諸の妄見を治し、無相觀を以て諸の憶想・分別の緣する念を治し。無願觀を以て一切三界を出づる願を治し、四非倒を以て一切の倒を治すること、諸の有爲の皆悉く無常なることを以て、無常の中にて常と計する顛倒を治し、有爲の苦なることを以て、諸苦の中にて樂と計する顛倒を治し、無我の法を以て、無我の中に我と計する顛倒を治し、涅槃の寂を以て、不淨の中にて淨と計する顛倒を治するなり。四念處を以て、諸に身・受・心・法に依倚することを治し——行者、身を觀するに、身相觀に

【三】屬する所ある無く。異譯本には亦、主ある無きも、しとあり。

【四】行空觀を以て諸の妄見を治し。異譯本には「疑うて信ぜざる者には、空を以て藥と爲し。」とあり。

【五】無相觀を以て、乃至、念を治し。異譯本には「欲處と色處と無色處と、若し此れを覺せんと欲する者には、無相を以て藥

若しくは一毛を破り以て百分と爲し、一分の毛を以て海の一の滯を取るが如く、一切の聲聞の有爲の善根も、亦復是くの如し。迦葉、譬へば、小なる芥子の孔の有つ所の虚空の如く、一切の聲聞の有爲の智慧も、亦復是くの如し。迦葉、譬へば、十方の虚空の無量無邊なるが如く、菩薩の有爲の智慧の甚だ多くして力の無量爲ることも、亦復是くの如し。迦葉、譬へば、刹利大王に大夫人あつて、貧賤と通じて懷妊して子を生むが如くんば、意に於て云何。是れ王子なりや、不や。不なり、世尊。是くの如くに、迦葉、我が聲聞衆も亦復是くの如くに、同じく證するに、法性の生ずることを以てするを爲すと雖も、如來の眞實なる佛子と名けざるなり。迦葉、譬へば、刹利大王の、使人と通するに、懷妊して子を生ぜば、下姓に出づと雖も、王子と名くるを得るが如し。初發心の菩薩も亦復是くの如くに、未だ福德・智慧を具足せずと雖も、生死に往來して、其の力勢に隨つて衆生を利益すれば、是れを如來の眞實なる佛子と名くるなり。迦葉、譬へば、轉輪聖王に而く千子ありとも、未だ一人の聖王の相を有つもの有らずんば、聖王は中に於て子の想を生ぜざるが如し。如來も亦爾く、百千萬億の聲聞の眷屬の圍遶するありと雖も、而も菩薩無くんば、如來は中に於て子の想を生ぜざるなり。迦葉、譬へば、轉輪聖王に大夫人あつて、懷妊すること七日なるも、是の子は具に轉輪王の相を有たば、諸天の尊重すること、餘の諸子の身力を具せる者に過ぐるが如し。所以は何ぞ。是の胎の王子は、必ず尊位を紹ぎて、聖王の種を繼げばなり。是くの如くに、迦葉、初發心の菩薩も亦復是くの如くに、未だ諸の菩薩の根を具足せざること、胎の王子の如くなりと雖も、諸の天神王は深心にて尊重すること、八解脱の大阿羅漢に過ぎたり。所以は何ぞ。是くの如き菩薩は、尊位を紹ぎて佛種を斷たずと名くればなり。迦葉、譬へば、一の瑠璃珠の、水晶の須彌山の如くなるに勝るが如し。菩薩も亦爾く、初發心より便ち聲聞・辟支佛の衆に勝るなり。迦葉、譬へば、大王の夫子の、子を生める日には、小王・群臣は皆來つて拜謁するが如し。菩薩も亦爾く、初發心の時に、

【三】我が聲聞衆も、乃至。如來の眞實なる佛子とは名けざるなり。
別の異譯本には「彼の無生の法界を得る聲聞の、我れは是れ如來の灌頂の子なりとすと、是くの如くに亦然り。」とあり。又、異譯本には「羅漢の、法中より出づるありと雖も、是れ佛子に非ざるなり。」とあり。

るが如し。道を行する比丘も亦復是くの如くに、觀する所ある法は、皆空皆寂にして堅固ある無く、是の觀も亦空なり。迦葉、譬へば、兩木相ひ磨せば、便ち火の生ずるあるに、還つて是の木を燒くが如く。是くの如くに、迦葉、眞實の觀の故に「聖智慧を生じ、聖智生じ已るや還つて實觀を燒くなり。譬へば、燈を然すに、一切の黒闇は皆自ら無くして、有るも從つて來たる所無く、去るも至る所無く、東方より來たるに非ず、去るも亦南・西・北方・四維・上下に至らず、彼より來らず、去るも亦至らず。而して此の燈明に、是の念——我れ能く闇を滅す。——を有つ無く、但燈明の法を因として、自ら闇無きなれば、明・闇俱に空にして、作ること無く取る無きなり。是くの如くに、迦葉、實の智慧生ぜば、無智は便ち滅すれば、智と無智とは二つの相は、俱に空にして作ること無く取る無きなり。譬へば、千歳の冥室の、未だ曾て明を見ざる如きに、若し燈を然す時は、意に於て云何。闇は寧、我れ久しく此に住したれば去るを欲せず。と念することありや。不なり、世尊。若し燈を然す時は、是の闇は力無くして、去るを欲せずとも必ず當に磨滅すべきなり。是くの如くに、迦葉、百千萬劫に久しく習へる結の業も、一の實觀を以てせば即皆消滅するなり。其の燈明とは、聖智慧是れにして、其の黒闇とは諸の結業是れなり。迦葉、譬へば、種の、空中に在つて生長し能ふ如きは、本より已來是の處ある無し。菩薩は證を取らば、亦復是くの如くに、佛の法を増長することとは終まで是の處無きなり。迦葉、譬へば、種は良田に在つて則ち生長し能ふが如し。是くの如くに、迦葉、菩薩も亦爾く、諸の結使を有ちつつ、世間の法を離れて能く佛の法を長ずるなり。迦葉、譬へば、高原の陸地には蓮花を生ぜざるが如く、菩薩も亦復是くの如くに、無爲の中に於ては佛の法を生ぜざるなり。迦葉、譬へば、卑濕なる淤泥の中に、乃ち蓮華を生ずるが如く、菩薩も亦爾く、生死の淤泥、邪定の衆生にて、能く佛法を生ずるなり。迦葉、譬へば、四大海の中に滿したる生蘇を有つが如く、菩薩の有爲の善根の甚だ多くして無量なることも、亦復是くの如し。迦葉、譬へば、

別の異譯本の、此れに當るべき者には「所以は何ぞ。虛空の地に落ちて身を損害せんことを恐るればなり。」とあり。
 【二】常に空の中に、乃至、畏るればなり。
 他の異譯本には「衆生の、空を造つて、彼れの之れを畏るればなり。」とあり。
 【三】譬へば、乃至、殘食するが如し。
 異譯本に「譬へば、幻師の幻作せる人の、還つて自ら幻師を取つて敬ぶが如し。」とあり。

【三】菩薩は證を取らば、乃至、是の處無きなり。
 異譯本に「是くの如くに、泥洹の中に於ては、菩薩を生ぜざるなり。」とあり。
 【三】菩薩も亦爾く、乃至、能く佛の法を長ずるなり。
 異譯本に「愛欲の中に於て、菩薩を生ず。」とあり。

と、是くの如くに知る者、是れを中道たる諸法の實觀と名くるなり。

復次に、迦葉、眞實の觀とは、空を以て故に諸法をして空ならしめざるにて、但法の性の自ら空なるなり。無相を以て、故に法をして無相ならしめざるにて、但法の自ら無相なるなり。無願を以て、法をして無願ならしめざるにて、但法の自ら無願なるなり。無起・無生・無我・無取・無性を以て、故に法をして無起・無取・無性ならしめざるにて、但法の自ら無起・無取・無性なるなり。是くの如くに觀する者、是れを實觀と名く。復次に、迦葉、無人を故に名けて空と爲すと曰ふに非ずして、但空は自ら空にして、前際は空に後際は空に中際も亦空なるなれば、當に空に依つて人に依る莫かるべし。若し空を得んために便ち空に依らば、是れ佛の法に於ては、則ち退墮すと爲すなり。是くの如くなれば、迦葉、寧ろ我見を起して積ること須彌の若くなりとも、空見を以て増上慢を起すこと非ざれ。所以は何ぞ。一切の諸見は空を以て脱することを得れども、若し空の見を起さば、則ち除く可からざればなり。迦葉、譬へば、醫師の藥を授けて病をして擾動せしむるに、是の藥内に在つて出でずんば、意に於て云何。是くの如くにして、病人は寧差ゆることを得るや、不や。不なり、世尊。是の藥出でずんば、其の病は轉増さん。是くの如くに、迦葉、一切の諸見は唯空にて滅し能ふに、若し空の見を起てば、則ち除く可からざるなり。譬へば、人あつて、虚空を怖畏して、悲ひ嗚んで胸を椎つて、是くの如き言——我れ虚空を捨てん。——を作すが如し。意に於て云何。是の虚空をば捨離せらるるや、不や。不なり、世尊。是くの如くにして、迦葉、若し空法を畏れば、我れ是の人を、狂亂して心を失せりと説かん。所以は何ぞ。常に空の中に行きなから空を畏るればなり。譬へば、畫師の白手にて夜叉・鬼の像を畫作し、見已つて怖畏し迷悶して地に躡るるが如し。一切の凡夫も亦復是くの如くに、自ら色・聲・香・味・觸を造る故にて生死に往來し、諸の苦惱を受けて、自ら覺らざるなり。譬へば、幻師の、幻人を作り已れるに、還つて自らをば殘食す

別の異譯本には「觸の滅」とあり。

【五】寧ろ我見を起して。乃至。則ち除く可からざればなり。異譯本に「人事ろ癡に著すること、大々須彌山の如くにして、呼んで有と爲すとも、其の過は言ふに足らざるのみ。人、空に著するあつて、空有りと言はば、其の過は甚だ大なり。若し、癡に著する者ありとも、空を曉らば脱するを得れども、空に著する者は、脱するを得ざればなり。」とあり。

【六】不なり、世尊。

此の句の次に、他の異譯本（佛說摩訶衍寶嚴經）曾漢譯者、失名には「所以は何ぞ。藥は體に在る故なり。」とあり。【七】是くの如き言。乃至。作すが如し。

にも非ずと觀する、是れを中道たる眞實の正觀と名くるなり。所以は何ぞ。常は是れ一邊無常は是れ一邊なるを以て、常・無常の是の中に、色無く形無く名無く知る無しとする、是れを中道たる諸法の實觀と名くるなり。我は是れ一邊、無我は是れ一邊にして、我・無我の是の中に、色無く形無く名無く知る無しとする、是れを中道たる諸法の實觀と名くるなり。復次に、迦葉、若し心に實有りとせば、是れを一邊と爲し、若し心に實非すとせば、是れを一邊と爲す。若し心識無く亦心數の法も無しとせば、是れを中道たる諸法の實觀と名くるなり。是くの如くに、善法と不善法、世法と出世法、有罪法と無罪法、有漏法と無漏法、有爲法と無爲法、乃至、有垢法と無垢法とにも亦復是くの如くに、二邊を離れて、受く可からず亦説く可からずとする、是れを中道たる諸法の實觀と名くるなり。復次に、迦葉、有は是れ一邊無は是れ一邊にして、有無の中間には、色無く形無く名無く知る無しとする、是れを中道たる諸法の實觀と名くるなり。復次に、迦葉、我が説く所の法たる十二因縁は、無明は行に縁とし、行は識に縁とし、識は名色に縁とし、名色は六入に縁とし、六入は觸に縁とし、觸は受到に縁とし、受は愛に縁とし、愛は取に縁とし、取は有に縁とし、有は生に縁とし、生は老・死・憂悲・苦惱に縁とすれば、是くの如き因縁は、但是の大苦の聚を集成することを爲すのみ。若し無明滅せば則ち行滅し、行の滅する故にて識滅し、識の滅する故にて名色滅し、名色の滅する故にて六入滅し、六入の滅する故にて觸滅し、觸の滅する故にて受滅し、受の滅する故にて愛滅し、愛の滅する故にて取滅し、取の滅する故にて有滅し、有の滅する故にて生滅し、生の滅する故にて是くの如き老・死・憂悲・衆惱の大苦は皆滅すれど、明と無明とは二無く別無じと、是くの如くに知る者、是れを中道たる諸法の實觀と名くるなり。是くの如くに、行及び非行、識及び所識、名色の見る可き及び見る可からざる、諸の六入處及び六神通、觸及び所觸、受と受の滅と、愛と愛の滅と、取と取の滅と、有と有の滅と、生と生の滅と、老死と老死の滅と、是れ皆二無く別無し

たる遺日羅經を學ばんと欲せば、とあり。

【三】所識。

恐らくは「非識」の誤記なるべし。別の異譯本には「識の滅」とあり。

【四】所觸。

是れも「非觸」の誤記なるべし。

獲三菩提に迴向して皆一味と爲るなり。迦葉、譬へば、須彌山王に、忉利の諸天及び四天王の皆依つて止住するが如し。菩薩の菩提心も亦復是くの如くに、薩婆若の依り止住する所と爲るなり。迦葉、譬へば、大國王あつて、臣の力を以ての故に、能く國事を辦するが如し。菩薩の智慧も亦復是くの如くに、方便の力の故にて、皆能く一切の佛事を成辦するなり。迦葉、譬へば、天の晴時の時には、淨くして雲翳無ければ、必ず雨の相無きが如し。寡聞の菩薩に、法雨の相無きことも、亦復是くの如し。迦葉、譬へば、天の陰雲の時には、必ず能く雨を降して衆生に充足するが如し。菩薩も亦爾く、大悲の雲より大法の雨を降して、衆生を利益するなり。迦葉、譬へば、轉輪王の出づる所の處には、則ち七寶あるが如し。是くの如くに、迦葉、菩薩の出づる時には、三十七品は世間に現するなり。迦葉、譬へば、摩尼珠の在る所の處に隨つて、則ち無量の金銀・珍寶あるが如し。菩薩も亦爾く、出づる所の處に隨ひ則ち無量なる百千の聲聞・辟支佛の寶あるなり。迦葉、譬へば、忉利の諸天の、同等園に入るや、用ふる所の物は皆悉く同等なるが如し。菩薩も亦爾く、眞淨の心の故にて、衆生の中に於て平等に教化するなり。迦葉、譬へば、呪術・藥力にて毒は人を害せざるが如し。菩薩の結の毒も亦復是くの如くに、智慧力の故にて惡道に墮せざるなり。迦葉、譬へば、諸の大城の中に棄られたる糞穢を、若し甘蔗・蒲萄の田中に置かば則ち利益あるが如し。菩薩の結使も亦復是くの如くに、有つ所の遺餘は皆是れ利益す。薩婆若の因縁の故にて是くの如きなり。

迦葉、菩薩は 是の寶積經を學ばんと欲せば、常に應に修習して諸法を正觀すべし。云何なるを正觀と爲すか。謂はゆる眞實に諸法を思惟するなり。眞實の正觀とは、我・人・衆生・壽命を觀ざる、是れを中道たる眞實の正觀と名く。復次に、迦葉、眞實の觀とは、色は常に非ず亦無常にも非ずと觀じ、受・想・行・識は常に非ず亦無常にも非ずと觀する、是れを中道たる眞實の正觀と名くるなり。復次に、迦葉、眞實の觀とは、地種は常に非ず亦無常にも非ずと觀じ、水・火・風種は常に非ず亦無常

【一八】寡聞の菩薩に、乃至、亦復是くの如し。

別の異譯本に「菩薩も亦爾り。寡聞小智にては、諸の有情に於て、終まで設法の相無し。」とあり。

【一九】菩薩の、乃至、現するなり。

別の異譯本には「七覺支有つて、恒に菩薩に隨ふ」とあり。

【二〇】譬へば、乃至、同等なるが如し。

別の異譯本には「譬へば、忉利天衆の、雜林に住する若きは、富貴を受用すること、平等無二なるが如し。」とあり。

【二一】菩薩の結使も、乃至、皆是れ利益す。

異譯本に「菩薩は愛欲の中に在り」と雖も、天上天下を益す。」とあり。又、別の異譯本には「菩薩も亦爾り、煩惱の糞地に處る若きも、能く一切智の種を生ず。」とあり。

【二三】是の寶積經を學ばんと欲せば。

異譯本には「極大珍寶の積り

たば、名けて菩薩と爲すなり。

復次に、迦葉、菩薩の福德の無量無邊なることを、當に譬喩因縁の故を以て知るべし。迦葉、譬へば、一切の大地は、衆生に用ひらるゝに、分別の心無く其の報をも求めざるが如し。菩薩も亦爾く、初發心より道場に坐するに至るまで、一切の衆生に皆利益を蒙らすれども、心に分別する無く、其の報をも求めざるなり。迦葉、譬へば、一切の水種にて、百穀・藥木の皆増長を得るが如し。菩薩も亦爾く、自心の淨きが故にて、慈悲は普く一切の衆生を覆うて、皆一切の善法を増長せしむるなり。迦葉、譬へば、一切の火種の、皆能く百穀・果實を成熟するが如し。菩薩の智慧も亦復是くの如くに、皆能く一切の善法を成熟するなり。迦葉、譬へば、一切の風種の、皆能く一切の世界を成立するが如し。菩薩の方便も亦復是くの如くに、皆能く一切の佛の法を成立するなり。迦葉、譬へば、月の初め生ずる時に、光明・形色の日に増長するが如し。菩薩の淨心も亦復是くの如くに、一切の善法を日に増長するなり。迦葉、譬へば、日の初めて出づるや、一時に光を放ちて、普く一切衆生の照明と爲るが如し。菩薩も亦爾く、智慧の光を放ちて、一時に普く一切の衆生を照すなり。迦葉、譬へば、師子獸王の、至る所の處に隨ひ、驚かず畏れざるが如し。菩薩も亦爾く、清淨の持戒と眞實の智慧にて、住する所の處に隨ひ驚かず畏れざるなり。迦葉、譬へば、善く調じたる象王の、能く大事を辦じて、身は疲れ極らざるが如し。菩薩も亦爾く善く、善く心を調じたる故に、能く衆生の爲めに大利益を作して、心に疲倦無きなり。迦葉、譬へば、諸の蓮華の、水中に生ずれども、水は著くこと能はざるが如し。菩薩も亦爾く、世間に生れ、而も世間の法は汚す能はざる所なり。迦葉、譬へば、人あつて樹を伐るに、根は在つて還生するが如し。菩薩も亦爾く、方便力の故に、結使を斷つと雖も善根の愛あつて、還三界に生ずるなり。迦葉、譬へば、諸方の流水の大海に入りたるや、皆一味と爲るが如し。菩薩も亦爾く、種種の門を以て諸の善根を集むれども、阿耨多羅三

命を惜まざるなり。諸の善根を修めて、心に厭き足る無きなり。迦葉、是れを菩薩は四法にて諸の善根を攝むと爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの無量なる福德の莊嚴あり。何を謂うて四と爲すか。清淨の心を以て法施を行ふなり。破戒の人に於て、大悲の心を生ずるなり。諸の衆生の中に於て、菩提の心を稱揚し讚歎するなり。諸の下劣に於て、忍辱を修習するなり。迦葉是れを菩薩の有つ四つの無量なる福德の莊嚴と爲す。

復次に、迦葉、菩薩と名くるは、但名字にて菩薩と爲さざるなり。能く善法を行じ平等の心を行ずるを、名けて菩薩と爲すなり。略して説かば、三十二法を成就するを名けて菩薩と爲す。何を三十二法と謂ふか。常に衆生の爲めに、深く安樂を求むるなり。皆一切智の中に住するを得しむるなり。心に他人の智慧を憎惡せざるなり。憍慢を破壊するなり。深く佛道を樂ふなり。愛敬虚しき無くして、親厚をば究竟するなり。怨親の中に於て、其の心同等に涅槃に至るなり。言に常に笑を含み、先意にて問ひ訊ぬるなり。爲す所の事業は、終まで中に息まざるなり。普く衆生の爲めに、等しく大悲を行ふなり。心に疲倦無く、多く聞きて厭く無きなり。自ら己れの過を求めて、他の短を説かざるなり。菩提の心を以て諸の威儀を行ふなり。惠施を行ふ所にて、其の報を求めざるなり。生處に依らずして、持戒を行するなり。諸の衆生の中に無礙の忍を行ふなり。一切の諸善根を修めん爲めの故に勤行に精進するなり。無色に生ずることを離れて、禪定を起すなり。方便の慧を行するなり。四攝の法に應ずるなり。善惡の衆生に、慈心もて畏るゝ無きなり。一心に法を聽き、心遠離に住するなり。心世間の衆事に樂著せざるなり。小乗を貪らざるなり。大乘の中に於て常に大利を見るなり。惡知識を離れて善友に親近するなり。四梵行を成ずるなり。五通に游戲するなり。常に眞智に依るなり。諸の衆生の邪行・正行に於て俱に言を捨棄せざるなり。常に決定して眞實の法を貴ぶなり。一切作す所は、菩提を首と爲すなり。是くの如くに、迦葉、若し人此の三十二法を有

【二〇】諸の下劣に於て、等。異譯本に「四には、下賤の人來つて菩薩を毀辱すとも、悉く當に之れを忍ぶべきなり。」とあり。

【二五】其の心同等に。異譯本に「等心にして異なる所を有つ無く」とあり。
【二六】生ぜる處に依らずして、持戒を行するなり。

別の異譯本には「戒徳を生ずる所にて、諸の輪廻を滅するなり。」とあり。
【二七】無色に生ずることを離れて、禪定を起すなり。異譯本には「無思想の禪なるなり。」とあり。

「無色」とは「無色界」を指し、「無思想の禪」とは「滅無想定」即ち「滅盡定」なり。

者なり。但世の利を増して、法の利を益せざるものなり。迦葉、是れを菩薩の有つ四つの非善知識、非善等侶と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの善知識、四つの善等侶あり。何を謂うて四と爲すか。諸の來つて求むる者は、是れ善知識なり。佛道の因縁なる故に。能く法を説く者は、是れ善知識なり。智慧を生ずる故に。能く他人を教へて出家せしむる者は、是れ善知識なり。善法を増長する故に。諸佛世尊は、是れ善知識なり。一切の諸佛の法を増長する故に。迦葉、是れを菩薩の四つの善知識、四つの善等侶と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの、菩薩に非ずして菩薩に似たるものあり。何を謂うて四と爲すか。利養を貪求して、法を求めざるなり。名稱を貪求して、福德を求めざるなり。自の樂を貪求して、衆生を救はざるなり。滅苦の法を以て樂んで徒衆を聚めて、遠離を願はざるなり。迦葉、是れを四つの、菩薩に非ずして菩薩に似たるものと爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの眞實の菩薩あり。何を謂うて四と爲すか。能く空を信解し、亦業報を信するなり。一切の法に吾我ある無きを知り、而も衆生に於て大悲の心を起すなり。深く涅槃を樂み、而も生死に遊ぶなり。作す所施を行じて、皆衆生の爲めにして、果報を求めざるなり。迦葉、是れを四種の眞實なる菩薩の福德と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの大藏あり。何を謂うて四と爲すか。菩薩あつて、諸佛に値遇する若きなり。能く六波羅蜜を聞き及び其の義をば解するなり。無礙の心を以て説法者を視るなり。遠離の行を樂んで、心に懈怠無きなり。迦葉、是れを菩薩の有つ四つの大藏と爲す。復次に、迦葉、菩薩は四法を有たば、能く魔事を過ぎん。何を謂うて四と爲すか。常に菩提の心を捨離せざるなり。諸の衆生に於て、心に 患礙無きなり。諸の知見を覺するなり。心に一切の衆生を輕んじ賤めざるなり。迦葉、是れを菩薩は四法にて能く魔事を過ぐと爲す。復次に、迦葉、菩薩は四法を有たば、能く諸の善根を攝めん。何を謂うて四と爲すか。空閑の處に在つて、詬曲の心を離る、なり。諸の衆生の中に四攝の法を行ひ、而して報を求めざるなり。法を求むる故の爲めに、身

別の異譯本には「三には、世間
に隨順せる呪術、伎藝なり。」
とあり。

【八】名稱を貪求して、福德
を求めざるなり。

異譯本には「但、聲名を欲して、
佛道を素めざるなり。」とあり。

【九】滅苦の法を以て、乃至、
遠離を願はざるなり。

異譯本には「但、口に多く説く
のみにて、餘の人を度するを
欲せざるなり。」とあり。

【一〇】菩薩あつて、諸佛に値
遇する若きなり。

異譯本に「一には、佛に見え已
つて、悉く供養して、二意無
きなり。」とあり。

【一一】無礙の心を以て説法者
を視るなり。

異譯本には「三には、常に淨心
にて師に向ふなり。」とあり。

【一二】患礙。

異譯本には「瞋恚の心」とあり。

【一三】諸の知見を覺するなり。

異譯本に「三には悉く外の餘
道を學ぶなり」とあり。

る時には、但自ら咎め責め、自ら業に依る報として、他を瞋り恨まず、信力に安住するなり。若し甚深にして信じ難き佛法を聞かば、自ら心をば清淨にして、能く悉く受持するなり。迦葉、是れを菩薩の有つ四つの直心の相と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの敗壞の相あり。何を謂うて四と爲すか。經典を讀誦して戲論を生じ、法に隨ひ行ぜざるなり。師長に奉順し恭敬して、心をして歡悅せしむる能はざるなり。他の供養を損じ、自ら本誓に違うて信施を受くるなり。善菩薩を見て、輕んじ慢つて敬はざるなり。迦葉、是れを菩薩の有つ四つの敗壞の相と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの善順の相あり。何を謂うて四と爲すか。未だ聞かざる所の經をば聞かば、便ち信受して説く所の如くに行じ、法に依止して言説に依らざるなり。師の教に隨順し、能く意旨を知つて與に言語し易くし、作す所を皆善くして師の意を失はざるなり。戒一定より退かず、調順の心を以てして供養を受くるなり。善菩薩を見ば恭敬し愛樂し、善人に隨順して德行を稟受するなり。迦葉、是れを菩薩の有つ四つの善順の相と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの錯謬あり。何を謂うて四と爲すか。信す可からざる人なるに、之れと意を同じうするは、是れ菩薩の謬なり。器に非ざる衆生に、甚深の法を説くは、是れ菩薩の謬なり。大乘を樂ふ者に、小乘を讚することを爲すは、是れ菩薩の謬なり。若し施を行ふ時に、但戒を持てるに與へ善者に供養して、惡人に與へざるは、是れ菩薩の謬なり。迦葉、是れを菩薩の四つの謬と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの正道あり。何を謂うて四と爲すか。諸の衆生に於て、其の心平等なるなり。普く衆生を化するに、等しく佛の懸を以てするなり。諸の衆生に於て、平等に法を説くなり。普く衆生をして、等しく正行に住せしむるなり。迦葉、是れを菩薩の有つ四つの正道と爲す。復次に、迦葉、菩薩に四つの、善知識に非ざる善等侶に非ざるものあり。何を謂うて四と爲すか。聲聞者の但自利を欲するものを求むるものなり。緣覺者の少事を喜び樂むものを求むるものなり。外の經典たる路伽耶毘の文辭の嚴飾を讀んで、親近する所の

【五】菩薩に四つの敗壞の相あり。

異譯本「佛說遺日摩尼寶經」

(後漢、支婁迦讖、譯)

(因みに、以下、本經を「本會」

の異譯本と爲す。)には「菩薩

に、四事の調じ難きあるなり。」

とあり。

【六】菩薩に四つの善順の相

あり。

異譯本に「菩薩に四事の調じ

易きあり。」とあり。

【七】外の經典たる、乃至、親近する者なり。

てせず、何に況んや、戲笑にをや。常に直き心を以て人と事に従ひ、諸の詔曲を離るるなり。諸の菩薩に於て世尊の想を生じ、能く四方に於て其の名を稱揚するなり。自ら諸の小乗の法を毀樂せず、化する所の衆生をも、皆悉く無上の菩提に住せしむるなり。迦葉、是れを菩薩は四法にて世世菩提の心を失せず、乃至、道場は自然に前に現すと爲す。復次に、迦葉、菩薩は四法を有たば、生ずる所の善法は滅して増長せざるなり。何を謂うて四と爲すか。憍慢の心を以て。路伽耶經を讀誦し修學するなり。利養を貪る心もて、諸の檀越に許るなり。菩薩を憎み毀るなり。未だ聞かざる所の經をば違逆して信ぜざるなり。迦葉、是れを菩薩は四法にて、生ずる所の善法は滅して増長せずと爲す。復次に、迦葉、菩薩は四法を有たば、生ずる所の善法は増長して失せず。何を謂うて四と爲すか。邪法を捨て離れ、正しき經典たる六波羅蜜の菩薩の法藏を求めて心に憍慢無きなり。諸の衆生に於て謙卑して下に下り、法の如くに施を得て、量を知り足るを知り、諸の邪命を離るゝなり。聖種に安住して他人の罪過を出さず、虚も實も人の短を求めざるなり。若し諸法に於て心通達せずんば、是くの如き念を作すなり。佛法は無量にして、衆の樂ふ所に隨つて演説を爲せること、唯佛のみ知る所にして我が解する所に非ざれば、佛を以て證と爲して違逆を生ぜじ。と。迦葉、是れを菩薩は四法にて、生ずる所の善法をば増長もて失せずと爲す。復次に、迦葉、菩薩は四つの曲心を有たば、應に遠離すべき所なり。何を謂うて四と爲すか。佛法の中に於て、心に疑悔を生ずるなり。諸の衆生に於て憍慢なるなり。他の利養を瞋り恨み、嫉妬の心を起すなり。菩薩を訶り罵り、其の惡名を廣むるなり。迦葉、是れを菩薩の四曲の心の、應に遠離すべき所と爲す。復次に、迦葉、菩薩は四つの直心の相を有て。何を謂うて四と爲すか。犯す所の衆の罪は、終まで覆藏せずして他に向つて發露し、心に蓋纏する無きなり。國界・身命・財利を失ふ若き、是くの如き急事にも、終まで安語せず、亦餘言もせざるなり。一切の惡事たる罵詈・毀謗・搗打・繫縛・種種の傷害の是の苦を受く

【二】路伽耶經。
路伽耶陀外道の經典を謂ふなり。第一卷「路伽耶陀」の解參照。

【三】聖種に安住して。
別の異譯本に「聖族を得て歡喜し」とあり。第四卷「口聖種」の解參照。

【四】菩薩は四つの直心の相を有て。
別の異譯本には「四種の法を有たば、諸の菩薩をして、柔軟の相を得しむ」とあり。

卷の第一〇二一

漢譯

普明菩薩會 第四十三

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は王舍城の耆闍崛山の中に在して、大比丘の衆八千人と俱なりき。菩薩摩訶薩は萬六千人なりしが、皆是れ阿惟越致にして、諸の佛土よりして來つて會に集れるにて、悉く皆一生に當に無上正眞の大道を成すべきものなり。

爾の時に、世尊は大迦葉に告ぐらく。菩薩は四法を有たば、智慧を退失せん。何を謂うて四と爲すか。法を尊重せず、法の師を敬はざるなり。受くる所深法を秘して説き盡さざるなり。法を樂む者あるに留難を爲して、諸の因縁を説きて其の心を沮み壞るなり。憍慢して自ら高り、他人を卑下するなり。迦葉、是れを菩薩は四法にて智慧を退失すと爲す。復次に、迦葉、菩薩は四法を有たば、大智慧を得ん。何を謂うて四と爲すか。常に法を尊重し、法の師を恭敬するなり。聞く所の法に隨ひ、清淨の心を以て廣く人の爲めに説きて、一切の名聞・利養を求めざるなり。多聞より智慧を生ずるを知り、勤求して懈らざること、頭の然ゆるを救ふが如くにするなり。經を聞きて誦持し、説の如くに行ずることを樂んで言説に隨はざるなり。迦葉、是れを菩薩は四法にて大智慧を得と爲す。復次に、迦葉、菩薩は四法を有たば、菩提の心を失せん。何を謂うて四と爲すか。師長を欺誑し已つて、經法を受けて恭敬せざるなり。疑悔の處無きに、他をして疑悔せしむるなり。大乘を求むる者をば訶罵・誹謗して、其の惡名を廣むるなり。詭曲の心を以て人と事に従ふなり。迦葉、是れを菩薩は四法にて菩提の心を失すと爲す。復次に、迦葉、菩薩は四法を有たば、世世菩提の心を失せずして、乃至、道場は自然に前に現ぜん。何を謂うて四と爲すか。命を失ふ因縁にも妄語を以

※漢譯者の氏名は、臺本には、「譯を失したれば、秦錄を附し、同を勘して編入す。」とあり。明本には「譯師の名を失す。秦錄を附し、同錄を勘して編入す。」とあり。又、宮本には、單に「失譯」とあり。而して、臺本には「是の舊寶積經の一卷は、譯を失したれば、今、梵本を勘して編入す。」とあり。斯くて何人が之れを漢譯し勘入せるかは、何づれに於ても明ならず。

【一】説の如くに、乃至、疑はざるなり。
異譯本「佛説大迦葉問大輿積正法經(北宋、施護、譯)(因みに、以下、此の經を以て、別の異譯本と爲す。)には「眞實の行を行つて、妄語せず。」とあり。

所の眼を捨てしことは稱り計ふべからざるなり。

阿難、彌勒菩薩は、往に菩薩道を修行せし時に、是の願を作して言はく。若し衆生あつて、婬・怒・癡薄くして十善を成就せば、我れ爾の時に於て乃ち阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと。阿難、當來の世に於て、諸の衆生の、薄き婬・怒・癡にて十善を成就するあらば、彌勒菩薩は、爾の時に當つて阿耨多羅三藐三菩提を得ん。何を以ての故ぞ。彼の菩薩の本願の力に由る故なり。佛は阿難に告ぐらく。我れ往昔に於て菩薩道を行するに、是くの如き言を作せり。願はくは、我れ當に五濁の惡世にて、貪・瞋の垢重く、諸の惡衆生の、父母に孝せず、師長を敬はず、乃至、眷屬は相ひ和睦せざるに於て、我れ爾の時に於て當に阿耨多羅三藐三菩提を成すべし。と。阿難、是の願の故を以て、我が今入る所の城邑・聚落には、多く衆生あつて我れを毀罵し、斷常の法を以て衆會を招集し、若し乞食を行ぜば坐むるに塵土を以てし、諸の雜毒を和して我れに與へて食せしめ、或は女人を以て我れを誹謗すれど、阿難、我れ今に於ては、本願力を以て、是等の如き諸の惡衆生の爲めに、大悲の心を起して法を説くことを爲すなり。と。

爾の時に、阿難は、佛に白して言はく。世尊、如來・應・正等覺は能く作し難きを作し、能く忍び難きを忍び、調伏せざる者を悉く調伏せしめ、是くの如き罪垢の衆生を荷擔して法を説くことを爲したまふ。と。佛は阿難に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如し。何を以ての故ぞ。如來の大悲の攝する所なる故なり。と。爾の時に、阿難は佛に白して言はく。世尊、我れ如來の堅固なる誓願を聞き、身毛皆堅ちたり。世尊、當に何と此の經に名けて、我等云何に受持すべきか。と。佛は阿難に告ぐらく。是の經をば、名けて彌勒の問ふ所と爲し、亦往昔の本願とも名け、是の名字を以て汝當に受持すべし。と。

佛の是の經を説き已りたまふや、彌勒菩薩・尊者阿難・一切世間の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所説を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。」

ぜじと。

爾の時に、太子は即身を碎き、其の骨髓を取つて彼の病人に與へ、意に隨つて用ひられて、一念の悔恨の心をも生ぜざりき。阿難、當に知るべし。爾の時の妙華太子は、豈異人ならんや。今の我が身是れなることを。四大海の水は猶測量せらるとも、我れの往昔に於て菩薩の道を行するに、身の骨髓を捨てしことは稱り計ふべからざるなり。と。

佛は阿難に告ぐらく。乃往の古昔の時に、國王あつて名けて月光と爲し、端正なること殊妙に、諸相は具足して見る者歡喜せしが、園苑より出でて、一の盲人の貧窮なる乞丐を見、悲愍の心を生じて、便ち之れに問うて言はく。汝何を須ふる所ぞ。我れ當に汝に施すべし。或は飲食・衣服・莊嚴の資具・金銀・摩尼及び諸の珍寶なりとも、汝の欲する所に隨ひ皆當に之れを與ふべし。と。

爾の時に、盲人は即偈頌を以てして、王に白して言はく。

大王は猶日月の 光明の世間を照せるがごとくに 勝れたる功德を具足したれば 久しからずして天上に生れたまはん 一切の淨妙なる色も 我れ今は悉く見ざれば 願はくは王慈悲を起して 我れに愛する所の眼を施したまはんことを と。

爾の時に、大王は即偈頌を以て、盲人に告げて言はく。

汝速に來つて眼を取れ 汝をして安樂を得しめて 願はくは我れ當に來るべき世にて 佛の清淨なる眼を得んことを 我れ菩薩の道を行じて 一切を皆當に捨つべきに 若し我れ汝に施さずんば 是れ則ち本願に違はん と。

爾の時に、月光王は即利刀を取り、自ら其の眼を挑つて彼の盲人に與へ、意に隨つて用ひられて、一念の悔恨の心をも生ぜざりき。阿難、當に知るべし。爾の時の月光王は豈異人ならんや。即我が身是れなることを。須彌山王は猶度量らるゝも、我れの往昔に於て菩薩の道を行するに、愛する

の血に於てをや と。

爾の時に、太子は卽利刀を取り、身を刺して血を出し、彼の病人をして、意に随つて用ふる所ならしめて、一念の悔恨の心をも生ぜざりき。阿難當に知るべし。爾の時の太子たりし見一切義は、豈異人ならんや。今の我が身是れなることを。四大海の水は猶測量せらるるとも、我れ往昔に於て菩薩の道を行するに、己身の血を捨てしことは稱り計ふべからざるなり。と。

佛は阿難に告ぐらく。乃往の古昔の時に、太子あつて妙華と名け、端正なること殊勝に、諸相具足して見る者歡喜せしが、園苑より出でて、一の病人の身體の羸れ瘦せたるを見、悲愍の心を生じて便ち之れに問うて言はく。汝は今此の病に、豈藥の能く療治するを有つ無きか。と。

爾の時に、病人は卽傷頰を以て、太子に白して言はく。
世に良醫ありと雖も 藥もて我が病を療する無し 世願はくは慈愍を生じて 我が爲めに憂惱を除きたまはんことを と。

爾の時に、太子は卽傷頰を以て、病人に告げて言はく。
我れ世間を利せん爲めには 一切咸く施與すれば 身分及び珍寶を 須ふる者は皆當に説くべし と。

爾の時に、病人は復傷頰を以て、太子に白して言はく。
譬へば大藥王の 意に随ひ衆病を療せるが如くに 亦日月の光の 普く諸の世間を照せるが如くならん 若し能く身體を出して 遍く我が身に塗らば 是の病の乃ち消え除きて 長夜に安樂を得んことは と。

爾の時に、太子は復傷頰を以て、病人に告げて言はく。
若し諸の衆生あつて 我が身を碎きて髓を出すとも 世間を利せん爲めならば 心に憂惱を生

願はくは我れ皆圓滿せんことを
具して 十地に安住せり。
彌勒 名稱者は 是くの如き行を勤修して 六波羅蜜を

佛は阿難に告ぐらく。彌勒菩薩は、是くの如き善巧方便に安住して、阿耨多羅三藐三菩提を積集せしが、阿難、我れは昔道を求むるに、苦を受くること無量にして、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提を積集したりき。何を以ての故ぞ。乃往の古昔の時に、太子あつて見一切義と名け、端正なることを殊妙にして、諸相具足し見る者歡喜せしが、出でて園苑に遊んで、一の病人の諸の重苦を受くるを見、悲愍の心を生じて、便ち之れに問うて言はく。汝今此の病に、豈藥の能く療治するを有つ無きか。

爾の時に病人は、即偈頌を以て、太子に白して言はく。

我が病には藥は求め難し 世間に得可からず 國王も亦有つ無し 何に況んや病惱せる者なるをや 諸論に通達して 善く醫方を説く者の 療治を爲さんと欲すと雖も 其の藥は得可れ難し と。

爾の時に、太子は復偈頌を以て、病人に告げて言はく。

金銀摩尼珠 乃至象馬に至るまで 求むる所をば皆當に説くべし 汝が爲めに憂惱を除かん と。

爾の時に、病人は復偈頌を以て、太子に白して言はく。

若し太子の血を飲まば 我れ必ず安樂を得ん 願はくは歡喜の心を生じて 我れに憂惱無きを施さんことを と。

爾の時に、太子は復偈頌を以て、病人に告げて言はく。

我れ諸の衆生の爲めには 無間獄に墜墮すること 多劫なりとも猶能く忍ばん 何に況んや身

【三】名稱者(Virtuous)。「盛名ある人」の意にして、彌勒を尊稱して言へるなり。

ことを 十方の國土中にて 如來を供養する者 及び佛の無上智を 我れ今盡く隨喜す
 罪あつて悉く懺悔せる 是の福を皆隨喜して 我れ今諸佛に禮したてまつる 願はくは無上智
 を成ぜんことを 十方の大菩薩の 十地を證せる者を 我れ今稽首して禮したてまつる 願
 はくは速に菩提を證せんことを 菩提を證するを得已らば 魔軍を摧伏し 清淨なる法輪を
 轉じて 衆生の類を饑益せんことを 常に願はくは世間に住すること 無量俱胝劫にして
 大法鼓を撃ちて 苦の衆生を度脱せんことを 我れ欲泥に没し 貪繩に繋がれ 種種に多く纏
 縛することを 願はくは佛觀察を垂れたまはんことを 衆生は垢重しと雖も 諸佛は厭ひ捨
 てたまはざれば 願はくは大慈悲を以て 生死の海を度脱したまはんことを 現在の諸の世
 尊 過去未來の佛の 行じたまふ所の菩薩の道を 我れ今願はくは修學せんことを 波羅蜜
 を具足し 六神通を成就し 諸の衆生を度脱して 無上道を證せんことを 諸法の空にして
 相無く自性無く 住無く表示無く 生ぜず亦滅せざるを了知せんことを 又 大仙尊の如
 くに 善く我無く 補特伽羅無く 乃至壽者無きことを了せんことを 諸の布施の事に於て
 我我所を執せず 衆生を安樂にせん爲めに 施與して慳吝無からんことを 願はくは我が
 物を施す所は 功用を假らずして生じ 觀察して空なるを了知して 施波羅蜜を具せんことを
 戒を持つこと 缺減無くして 佛の淨尸羅を得 住する所無きを以ての故に 戒波羅蜜を具
 せんことを 忍辱すること 四大の如くに 分別の心を生ぜずして 瞋恚無きを以ての故に
 忍波羅蜜を具せんことを 願はくは身心の力を以て 大精進を發起し 堅固にして懈怠無く
 して 勤波羅蜜を具せんことを 如幻如化 及び勇猛なる精進を以て 金剛等の三昧にて
 禪波羅蜜を具せんことを 願はくは三昧の智を證して 三脫門に入り 三世の平等なるを
 了して 慧波羅蜜を具せんことを 諸佛の妙なる色身 光明の大威徳 菩薩の精進の行を

【三】大仙尊(Mahārishi)。佛
 徳に據る尊號なり。

二には、能く愛する所の妻を施せるなり。三には、能く愛する所の子を施せるなり。四には、能く愛する所の頭を施せるなり。五には、能く愛する所の眼を施せるなり。六には、能く愛する所の王位を施せるなり。七には、能く愛する所の珍寶を施せるなり。八には、能く愛する所の血肉を施せるなり。九には、能く愛する所の骨髓を施せるなり。十には、能く愛する所の支分を施せるなり。是れを名けて十と爲す。我れ此の法を行じて能く阿耨多羅三藐三菩提を得たり。阿難、復十法を有つて能く菩提を證したり。云何なるを十と爲すか。一には、戒の功德を獲たり。二には、忍力を成就したり。三には、精進を發起したり。四には、諸の禪定を得たり。五には、大智慧を有ちたり。六には、諸の衆生に於て常に捨離せざりき。七には、諸の衆生に於て平等の心を起したり。八には、諸の空法に於て常に修習したり。九には、善く能く眞實なる空の性を成就したり。十には、善く能く無相・無願を成就したり。是れを名けて十と爲す。我れ此の法を行じて、能く阿耨多羅三藐三菩提を得たり。阿難、彌勒菩薩は、往昔に菩薩の道を行ぜるときは、手足・頭目を捨つる能はずして、但善巧方便の安樂の道を以て、無上正等菩提を積集したり。と。

爾の時に、阿難は佛に白して言はく。世尊、云何に彌勒は往昔に菩薩の道を行ぜるときに、但善巧方便の安樂の道を以て、能く無上菩提を積集せるか。と。佛は阿難に告ぐらく。彌勒は往昔に菩薩の道を行するや、晝夜六時に、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して諸佛を頂禮し、前んで是の偈を説いて言へり。

我れ今歸命して 十方の一切の佛 菩薩聲聞衆 大仙天眼の者に禮したてまつり 亦菩提心を
も禮して 諸の惡道を遠離して 能く天上に生るるを得 乃至涅槃を證せんことを 若し我
れ少罪をも作らば 心の生ずる所に隨ひ、今諸佛の前に對して 懺悔して除滅せしめん 我
れ今身口意に 集めし所の諸の功德にて 願はくは菩提の因と作して 當に無上道を成すべき

【三】大仙。
世間の仙人にして、神通を具
したる者を謂ふ。

は 諸の外道を摧伏したまふ 眉間の白毫相は 猶玻璃の光の如くに 普く世間を照して
一切に超過したまふ 世尊には與に等しきもの無く 足に千輻の輪を踏み 清淨にて世間を
化して 能く大地を動したまふ 出離の道を成就して 煩惱の海を超過し 諸の功德の財を
以て 意に隨ひ皆施與したまふ 如來は清淨戒にて 猶大地の如くに 諸の功德を出生する
に 愛憎の想を有ちたまふこと無し 智慧力の故を以て 諸法の空 衆生及び壽者の 分別
して得可からざるを了知したまへり 善く衆生の性 心行及び趣く所を了して 世の爲めに
明燈と作つて 一切を饒益したまふ 世間の苦に逼迫して 暴流に漂溺せるを 常に諸の衆
生の爲めに 大精進力を起したまふ 世尊は煩惱 生死及び病死を離れて 世に處りたまふ
こと虚空の如くなれば 一切染らるる無し 智慧の大威光もて 能く一切の闇を破して 永
く貪瞋癡を離れたまへば 我れ今稽首して禮したてまつる と。

佛は阿難に告ぐらく。賢首、菩薩の護る所の神通は、是れより已來復と退失せざりき。意に於て
云何。爾の時の賢壽は豈異人ならんや。今此の會中の彌勒菩薩摩訶薩是れなり。と。阿難は佛に白
して言はく。世尊、若し彌勒菩薩は久しく已に無生法忍を證得せば、何故に阿耨多羅三藐三菩提を
得ざるか。と。佛は阿難に告ぐらく。菩薩に二種の莊嚴・二種の攝取あり。謂はゆる衆生を攝取し
て衆生を莊嚴すると、佛國を攝取して佛國を莊嚴するとなり。彌勒菩薩は、過去世に於て菩薩の行
を修むるには、常に佛國を攝取して佛國を莊嚴することを樂へり。我れは往昔に於て菩薩の行を修
むるには、常に衆生を攝取して衆生を莊嚴することを樂へり。然るに、彼の彌勒の、菩薩の行を修
して四十劫を経たるに、我れ時に乃ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發したるが、我が勇猛なる精進力
の故に由つて、便ち九劫を賢劫の中に超えて、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。阿難、我れは十の法
を以て菩提を證するを得たり。云何なるを十と爲すか。一には、能く愛する所の物を施せるなり。

阿難に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如し。阿難、彌勒菩薩は豈唯今日のみ、能く我が前に於て偈を以て佛を讃ぜんや。乃往の過去の十無數劫に、爾の時に佛あつて、焰光遊戲妙音自在王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と號したり。爾の時に、一の婆羅門の子あつて、名けて賢壽と曰ひ、諸相具足して見る者歡喜せしが、園苑より出でて、彼の如來の端正殊妙に、諸根寂靜にして奢摩他を得たること、清淨なる池の諸の垢穢無きが如く、三十二相・八十種好にて自ら莊嚴せること、娑羅樹の其の華の開き敷けるが如く、須彌山の一切に出過せるが如く、面貌の無怙なること月の盛滿なるが如く、威光の赫奕たること日の顯曜せるが如く、形量の周圍なること尼俱陀樹の如くなるを見たり。是の時に、賢壽は佛如來の殊勝なる相を觀るや、心に淨信を生じて是の思惟を作さく。希有なり。世尊の乃ち能く是くの如き無量なる功德の莊嚴を成就したまへることや。我れも亦願はくは、當來の世に於て、是くの如き功德の身を成就せんことを。と。是の願を發し已つて、身を地に投じて、復念じて言はく。若し當來の世に佛身を得ば、惟願はくは、如來、足もて我が上を踏みたまはんことを。と。爾の時に、彼の佛は賢壽の意を知り、即其の足を以て賢壽の身を踏まんと、足を下す時に當つて、無生法忍を得たれば、世尊は迴顧して諸の比丘に告ぐらく。汝等、足を以て賢壽を踏む勿かれ。何を以ての故ぞ。此れは是れ菩薩摩訶薩にして、今已に無生法忍を證得せるが、復能く天眼・天耳・他心・宿住・神境の智通を成就すればなり。と。

爾の時に、賢壽は即佛前に於て、偈を以て讃じて曰はく。

佛は十方界に於て 最尊にして上ある無く 諸の世間に超過したまへば 我れ今稽首して禮したてまつる
如來は大光明もて 日月を掩蔽して 諸の世間に超過したまへば 我れ今稽首して禮したてまつる
譬へば師子の吼ゆれば 諸獸は咸く怖畏するが如くに 世尊の大威徳

就するなり。三には、方便行の三昧を成就するなり。四には、遍照明の三昧を成就するなり。五には、普光明の三昧を成就するなり。六には、普遍照明の三昧を成就するなり。七には、寶月三昧を成就するなり。八には、月燈三昧を成就するなり。九には、出離三昧を成就するなり。十には、勝幢臂印三昧を成就するなり。是れを名けて十と爲す。彌勒、菩薩は是くの如き法を成就し已らば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。と。

爾の時に、彌勒菩薩は是の法を聞くを得て心大に歡喜し、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して恭敬し、卽佛前に於て偈を以て讚じて曰はく。

佛は過去世に於て 愛する所の妻子 頭目及び骨髓を捨てて 施の彼岸に到りたまへり 佛は常に禁戒を護ること 犂牛の尾を愛するが如くにして 最勝にして倫匹無く 戒の彼岸に到りたまへり 佛は忍辱力を以て 違諍を捨て離れ 人の過惡を求めずして 忍の彼岸に到りたまへり 佛は精進力を以て 無上なる寂靜の 究竟して常に安樂なるを得て 勤の彼岸に到りたまへり 佛は禪定力を以て 能く諸の罪垢を滅して 天人の導師と爲り 定の彼岸に到りたまへり 佛は智慧力を以て 善く諸法の自性の有る所無きを了知して 慧の彼岸に到りたまへり 佛は菩提樹に於て 諸の魔軍を降伏し 最勝智を具足して 無上道を成就したまへり 導師は無畏力もて 波羅奈國に於て 清淨なる法輪を轉じて 諸の外道を摧破したまへり 無上なる大智慧もて 世間に超過して 能く淨光明を放ちて 善く諸の法要を説きたまへり 如來の清淨なる色 智慧及び功德は 諸の世間に超過して 能く彼岸に到りたまへり と。

爾の時に、阿難は佛に白して言はく。世尊、是の彌勒菩薩は甚だ希有と爲す。而も能く無量の辯才を成就して、衆生の念に隨ひ平等に法を説き、而も文字に於て繫著する所無きことや。と。佛は

願慧を生ぜざるなり。三には、愚癡を起さざるなり。四には、常に僞語を離るるなり。五には、空の性に住するなり。六には、心虚空の如くなるなり。是れを名けて六と爲す。彌勒、復七法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを七と爲すか。一には、正念に住するなり。二には、擇法を成就するなり。三には、精進を發起するなり。四には、常に歡喜を生ずるなり。五には、身に輕安を得るなり。六には、諸の禪定に住するなり。七には行捨を具足するなり。是れを名けて七と爲す。彌勒、復八法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを八と爲すか。一には、正見するなり。二には、正思惟するなり。三には、正語するなり。四には、正業するなり。五には、正命するなり。六には、正勤するなり。七には、正定するなり。八には、正定するなり。是れを名けて八と爲す。彌勒、復九法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを九と爲すか。一には、諸欲・惡不善の法を遠離して、初禪の尋・伺・喜・樂の心一境性に安住するなり。二には、尋・伺を遠離して二禪の内淨・喜・樂の心一境性に安住するなり。三には、喜を遠離して三禪の捨・念・慧・樂の心一境性に安住するなり。四には、憂・苦及び喜・樂を遠離して四禪の捨・念・清淨なる、無苦無樂の心一境性に安住するなり。五には、色想を超過して、異る攀緣無く、無邊なる虚空處の定に安住するなり。六には、無邊空處の定を超過し已つて、能く無邊なる識の定に安住するなり。七には、無邊識處の定を超過し已つて、能く無所有の定に安住するなり。八には、無所有處の定を超過し已つて、非想・非非想の定に安住するなり。九には、非想・非非想處の定を超過し已つて、能く滅受想の定に安住するなり。是れを名けて九と爲す。彌勒、復十法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを十と爲すか。一には、善く能く金剛三昧を成就するなり。二には處・非處の相應三昧を成

異譯本には「空を以て會と爲すなり」とあり。

【二〇】七法。

此の七法は「七菩提分」即ち「七覺支」(第一卷「覺」の解、参照)なり。

【二一】擇法。

智慧を以て法の眞偽を簡擇する義なり。

【二二】八法。

謂はゆる「八正道」なり。第一卷「八支」の解、参照。

【二三】九法。

謂はゆる「九次第定」なり。第二卷、同名の解、参照。

【二四】内淨。

心内に勝實の功德を信受するを謂ふ。

【二五】捨。

即ち「行捨」なり。第一卷「捨」の解、参照。

【二六】念。

無染著の正念を謂ふ。

【二七】五には乃至九には等。

是れ「四無色定」を擧げたる者なり。本卷の「四無色定」の解、参照。

【二八】非想非非想。

第三卷「非有想・非無想」の解、参照。

【二九】滅受想の定。

「滅盡定」に同じ。第一卷、同名の解、参照。

り、歡喜し踊躍して、佛に白して言はく。世尊、菩薩は幾法を成就せば、諸の惡道及び惡知識を離れて、能く速に阿耨多羅三藐三菩提を證するか。と。佛は彌勒菩薩に告げて言はく。善い哉、善い哉。彌勒、汝の今一切を哀愍して天・人の世間を利益し安樂にせんと欲する爲めに、能く如來に是くの如き深義を問へることや。汝應に諦に聽きて、善く之れを思念すべし。吾當に汝が爲めに分別して解説すべし。と。彌勒菩薩は即佛に白して言はく。唯然く、世尊、願樂して聞かんと欲す。と。

佛は彌勒菩薩に告げて言はく。菩薩は一法を成就せば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを一と爲すか。謂はゆる、勝れたる意樂の菩提の心を發すなり。是れを名けて一と爲す。彌勒、復二法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを二と爲すか。一には、奢摩他に於て常に勤めて修習するなり。二には、毘鉢舍那に於てして善巧を得るなり。是れを名けて二と爲す。彌勒、復三法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを三と爲すか。一には、大悲を成就するなり。二には、空の法を修習するなり。三には、一切の法に於て分別を生ぜざるなり。是れを三と爲す。彌勒、復四法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを四と爲すか。一には、淨戒に安住するなり。二には、諸の疑網を離るるなり。三には、阿蘭若を樂むなり。四には、正見の心を起すなり。是れを名けて四と爲す。彌勒、復五法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。云何なるを五と爲すか。一には、空の法に住するなり。二には、他の過を求めざるなり。三には、常に自をば觀察するなり。四には、正法を愛樂するなり。五には、他を擧め護るなり。是れを名けて五と爲す。彌勒、復六法を有たば、諸の惡道及び惡知識を離れて、速に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得するなり。云何なるを六と爲すか。一には、貪欲を有つ無きなり。二には、

- 【三】勝れたる意樂の菩提の心を發すなり。
【四】奢摩他に於て、等。異譯本には「定に住して、起す所無きなり。」とあり。
【五】毘鉢舍那に於てして、等。異譯本には「方便して、諸、見る所を別くるなり。」とあり。
【六】正見の心を起すなり。異譯本には「等觀するなり。」とあり。
【七】空の法に住するなり。異譯本には「常に德義を立つるなり。」とあり。
【八】常に自をば觀察するなり。異譯本には「自ら身の行を省るなり。」とあり。
【九】空の性に住するなり。

薩の行を行ずる時に、一切の諸魔怨敵を降伏し、實の如くに一切法の自體の相を知り、諸の世間に於て心疲倦せず、心疲倦せざる故を以て、他の智に依らずして速疾に阿耨多羅三藐三菩提を成就すと名くるなり。と。

佛の此の經を説き已りたまふや、彌勒、菩薩摩訶薩及び餘の諸の菩薩摩訶薩。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の一切の大家は、佛の所説を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。」

彌勒菩薩所問會 第四十二

唐 菩提流志 漢譯

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は波羅奈國の施鹿林の中に在して、大比丘の衆五百人と俱なりき。一切皆衆に爲つて知識せられ、其の名を阿若憍陳如・摩訶迦葉・優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・阿難・羅睺羅等と曰へるが而ち上首爲り。復菩薩摩訶薩一萬人と俱なりき。其の名を善意菩薩・増上意菩薩・堅固意菩薩・師子意菩薩・觀世音菩薩・大勢至菩薩・辯積菩薩・美音菩薩・勝幢菩薩・信慧菩薩・水天菩薩・帝勝菩薩・帝天菩薩・無雄緣菩薩・具辯才菩薩・神通妙華菩薩・彌勒菩薩・文殊師利法王子等と曰へるが而ち上首爲り。爾の時に、世尊は、無量なる百千の大家の圍遶して供養し恭敬せるにて説法を爲さんとせり。

是の時に、彌勒菩薩摩訶薩は、衆會の中に在りしが、即、座より起ち、偏に右肩を相き右膝を地に著け、合掌し頂禮して、佛に白して言はく。世尊、我れに少しき疑あり。今諮問せんと欲す。惟願はくは、如來、聽許を垂れられんことを。と。佛は彌勒菩薩に告げて言はく。若し疑ふ所あらば、今汝の問を悉にせよ。當に解説して歡喜を得しむべし。と。爾の時に、彌勒菩薩は佛の許を聞き已

【一】本會にも、蓋本には、「大寶積經」と冠しあれど、「前會」と同様の理由にて省きたり。
【二】施鹿林。
即ち鹿野園にして、又、鹿林（第一卷、同名の解、參照）と曰ふ。施鹿林とは、古昔、梵達多王の、此の林を以て群鹿に與へたるよりの名なりと云ふ。

知る心を成就するなり。彌勒、云何にせば、諸の菩薩摩訶薩は大慈の心を成就するか。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩にして、畢竟して大慈の身業を成就し、畢竟して大慈の口業を成就し、畢竟して大慈の意業を成就せば、彌勒、是くの如き諸の菩薩は、畢竟して大慈の心を成就するなり。彌勒、云何にせば、諸の菩薩摩訶薩は大悲の心を成就するか。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩にして、畢竟して譏呵す可からざる身業を成就し、畢竟して譏呵す可からざる口業を成就し、畢竟して譏呵す可からざる意業を成就せば、彌勒、是くの如き菩薩摩訶薩は、畢竟して大悲の心を成就するなり。彌勒、云何にせば、諸の菩薩摩訶薩は善く方便を知ることを成就するか。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩にして、世諦を善く知り、第一義諦を善く知り、二諦を善く知らば、彌勒、是くの如き菩薩摩訶薩は、畢竟して善く方便を知ることが成就するなり。彌勒、云何にせば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を成就するか。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩にして、是くの如くに、此の法に依つて此の法有り、此の法に依つて此の法を生ずること、謂はゆる、無明は行に縁たり、行は識に縁たり、識は名色に縁たり、名色は六入に縁たり、六入は觸に縁たり、觸は受に縁たり、受は愛に縁たり、愛は取に縁たり、取は有に縁たり、有は生に縁たり、生は老・死・憂悲・苦惱に縁たり。是くの如くにして、唯大苦の聚集あるのみ。彌勒、此の法の無き故に此の法は無く、此の法の滅する故に此の法は滅すること、謂はゆる、無明滅せば則ち行は滅し、行は滅せば則ち識は滅し、識は滅せば則ち名色は滅し、名色は滅せば則ち六入は滅し、六入は滅せば則ち觸は滅し、觸は滅せば則ち受は滅し、受は滅せば則ち愛は滅し、愛は滅せば則ち取は滅し、取は滅せば則ち有は滅し、有は滅せば則ち生は滅し、生は滅せば則ち老・死・憂悲・苦惱は滅す。是くの如くにして、唯大苦の聚集の滅のみあり。と覺知せば、彌勒、是くの如き菩薩摩訶薩は、畢竟して般若波羅蜜を成就するなり。彌勒、是れを諸の菩薩摩訶薩は、畢竟して八法を成就せば、阿耨多羅三藐三菩提より退かず、勝進の法の中に於て退かず轉ぜず、菩

佛は、復彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩は、畢竟して八法を成就せば、阿耨多羅三藐三菩提より退かず、勝進の法の中に於て退かず轉ぜず、菩薩の行を行する時に、一切の諸魔怨敵を降伏し、實の如くに一切法の自體の相を知り、諸の世間に於て心疲倦せず、心疲倦せざる故を以て、他の智に依らずして速疾に阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。何等を八と爲すか。彌勒、謂はゆる諸の菩薩摩訶薩は、深心を成就し、行心を成就し、捨心を成就し、方便を廻向することを善く知る心を成就し、大慈の心を成就し、大悲の心を成就し、善く方便を知れることを成就し、般若波羅蜜を成就するなり。彌勒、云何にせば諸の菩薩摩訶薩は深信を成就するか。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩にして、佛を讚歎し及び佛を毀訾するを聞くとともに、其の心畢竟して、阿耨多羅三藐三菩提に於て堅固にして動かす、法を讚歎し及び法を毀訾するを聞くとともに、其の心畢竟して、阿耨多羅三藐三菩提に於て堅固にして動かす、僧を讚歎し及び僧を毀訾するを聞くとともに、其の心畢竟して、阿耨多羅三藐三菩提に於て堅固にして動かす、諸の菩薩摩訶薩は行心を成就するか。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩にして、殺生を遠離し、偷盜を遠離し、邪淫を遠離し、妄語を遠離し、兩舌を遠離し、惡口を遠離し、綺語を遠離せば、彌勒、是くの如き諸の菩薩摩訶薩は、畢竟して行心を成就するなり。彌勒、云何にせば、諸の菩薩摩訶薩は、捨心を成就するか。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩にして、是れ能く捨主たるは是に施主として、諸の沙門及び婆羅門・貧窮乞丐・下賤の人等に、衣・食・臥具・病に隨へる湯藥・須ふる所の物を施すなり。彌勒、是くの如くならば、諸の菩薩摩訶薩は、畢竟して捨心を成就するなり。彌勒、云何にせば、諸の菩薩摩訶薩は善く方便を廻向することを知る心を成就するか。彌勒、若し菩薩摩訶薩にして、修むる所の善根、謂はく。身・口・意の業を、皆悉く阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、彌勒、是くの如き諸の菩薩摩訶薩は、畢竟して善く方便を廻向することを

【二】捨心。
此の捨心は、謂はゆる「布施の心」を指す。

佛の此の經を説き已りたまふや、淨信等の五百の童女及び一切世間の天・人・阿修羅は、佛の所説を聞き、皆大に歡喜して、信受し奉行せり。」

彌勒菩薩問八法會 第四十一

元魏 菩提留支 漢譯

是くの如くに我れ聞けり。一時娑伽婆は、王舍城の耆闍崛山の中に住したまひて、大比丘の衆千二百五十人と俱なりき。并に諸の菩薩摩訶薩は十千人の等なりき。

爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は、即、坐より起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛に白して言はく。世尊、我れ今少しき法を以て、如來・應・正遍知に問ひたてまつらんと欲するも、世尊の聽許したまふや、不と以したまふやを審にせず。と。爾の時に、世尊は、彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。彌勒、汝の心念に隨ひ、如來・應・正遍知に問へ。我れ當に汝が爲めに分別して解説し、汝の心をして喜ばしめん。と。爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は、佛に白して言はく。世尊、是くの如くに願樂して聞かんと欲す。世尊、諸の菩薩摩訶薩は、畢竟じて、幾の法を成就せば、阿耨多羅三藐三菩提より退かず、勝進の法の中に於て退かず轉ぜず、菩薩の行を行する時に、一切の諸魔怨敵を降伏し、實の如くに一切法の自體の相を知り、諸の世間に於て心疲倦せず、心疲倦せざる故を以て、他の智に依らずして速疾に阿耨多羅三藐三菩提を成就するか。と。爾の時に、世尊は彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。善哉、善哉。彌勒、汝の今乃ち能く如來に是くの如き深義を問ひたることや。と。佛は復彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。汝今應當に一心に諦に聽くべし。吾れ當に汝が爲めに是くの如き深義を分別して解説すべし。と。即時に彌勒菩薩摩訶薩は佛に白して言はく。世尊、是くの如くに願樂して聞かんと欲す。と。

※臺本には「本會」の名の上に「大寶積經」と冠しあれど、全卷の體制上、無きを至當と認め、明本に據つて省きたり。

【一〇】勝進の法。
「勝上の法」の義にして、廣く菩薩道の法を指す者なるべし。

世尊 人中の最殊勝は 哀愍して諸の衆生を利益したまふ 我れ今已に菩提心を發したれば

志樂と相應して調伏に住し 世の導師と爲つて安樂を施さんと 我れ當に人中の尊を供養すべし

法を聞き已つて塵垢を離れ 我等復と諸の疑惑無ければ 方に女身の衆の染汗を離れ

永く煩惱を破して魔怨を降さんと 十方の無量俱胝の佛を 我れ當に歡喜して常に供養すべし

施戒勤精進に住し、忍辱禪定にて善く心を調へ 智慧方便にて衆生を攝めて 當に最上

なる菩提の道を證すべし 無量の天人の衆を利益して 悉く大乘の 心を發起せしめんと

我等當に能く師子吼すべく 我等當に天人の師と作るべし と。

爾の時に、世尊は便ち微笑を現せるに、諸佛の常法として、種種の色光の青・黄・赤・白・紅・紫・玻

璃は、佛の口より出でて遍く無量無邊の世界、乃至、梵世を照し、佛を遶ること三匝して、還つて

頂より入りたり。

爾の時に、長老阿難は、座よりして起ち、佛に白して言はく。世尊、何の因・何の縁にて此の微笑

を現したまへるか。と。佛は阿難に告ぐらく。阿難、汝、淨信童女を見るや。不や。阿難は白して

言はく。唯然く已に見る。と。佛言はく。阿難、是の淨信等の五百の童女は、人中の壽盡くるや、

當に女身を捨てて兜率陀天に生れ、彌勒世尊及び賢劫の中一切の如來に承事し供養せん。是の淨

信童女は、八萬四千俱胝那由他の劫を過ぎて、電光世界に於て當に佛と作るを得て、光明莊嚴王如

來と號し、劫を常光と名くべし。其の佛の壽命は、兜率陀天の如くに十二千歳にして、其の國は、

純ら無量無邊の大菩薩衆を以て眷屬と爲し、是の五百の童女は、此の衆中に於て最も上首爲ること、

猶我が今の六千の菩薩に、文殊師利は而ち上首爲るが如けん。阿難、若し女人あつて、此の經を聞

くを得て受持し讀誦せば、此の女身を盡して後に復と受けずして、速に阿耨多羅三藐三菩提を證せ

ん。と。

【九】人中の最殊勝。佛徳に據る讚號なり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

他人を嫉妬せず 慳を離れて常に法を樂み 誑誑を行はずして 女人の身を厭患し 慈心もて
瞋を捨て離れ 常に實語を修め 貪を除き惡口を離れ 正見の中に安住するなり 若し女人
の身を厭ひて 應に是くの如き法を修すべくば 便ち當に速に轉ずることを得て 善丈夫の身
を受くべきなり と。

復次に、童女、八法を成就せば、能く女身を轉ぜん、何者を八と爲すか。一には、佛を尊重して
深く法を樂ふなり。二には、恭敬して戒・忍・多聞の沙門・婆羅門を供養するなり。三には、夫・男・女
及び居家に於て愛著を生ぜざるなり。四には、禁戒を受け持ちて缺き犯す所無きなり。五には、
一切の人に於て邪念を生ぜざるなり。六には、意樂を増上して女身を厭離するなり。七には、菩提
心たる大丈夫の法に住するなり。八には、世の家業を觀すること、幻の如く夢の如くにするなり。
爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

佛を敬ひ深く法を樂ひ 戒名聞を尊重し 貪愛の心を生ぜずんば 女身を速に當に轉すべし
戒を持ち慚愧を具して 妄に他の人を念せず 菩提心に安住して 餘の法を樂はずんば 是
れに由つて速に能く 不淨なる女人の身を轉ぜん 勝志もて厭ふ心を得 一切は皆幻の如し
とし 諸法は本より動く無く因縁の性は空寂なりと 如實の法を勤修せば 速に丈夫の身を得
ん と。

爾の時に、淨信童女は、持つ所の金の鬘を以て佛の上に散じたるに、虚空の中に於て眞金の宮殿・
樓閣を變成し、宮殿の中に於て、化如來あつて金座に坐せり。時に、五百の童女は、各各身の莊嚴
の具を解きて彼の佛の上に散じたるに、亦空中に於て金の樓閣・寶帳・寶蓋・種種の莊嚴と變じたり。
爾の時に、五百の童女は、大神變を見て、異口同音にて偈を説いて言はく。

思惟の者を哀愍し、常に正定に住して諸の邪定の者を攝むるなり。無上の八正道にて安隱に暴流を度り、街漂流せる者を度すは、是れ大菩提の道なり。聲聞及び緣覺は、草の筏にて唯自ら渡るに、菩薩は廣く運び濟ふこと、彼の大船師の如きなり。と。

復次に、童女、菩薩は八種の法を成就する故にて、甘露の道を證せん。何等を八と爲すか。一には、無諍の法に住するなり。二には、善く無障礙の心を守るなり。三には、常に如實の義を觀するなり。四には、菩提の心に住して、六念を修習するなり。五には、精勤して諸の波羅蜜を修習するなり。六には、善根を積集して衆生を成熟するなり。七には、大悲に住して正法を攝受するなり。八には、無生忍を得て不退轉に住するなり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

常に無諍の行を修して、大沙門の法に住し、瞋恚の過を遠離して、諸の善根を積集し、善く如實の義を觀じて、諸の無盡の辯を得、菩提の心に安住し、常に無念を念じ、一切の波羅蜜をば勤修して退轉無く、諸の方便力を得て、是れに由つて衆生を度し、能く法王の財を以て、悲心にて一切に施し、速に無生忍を證して、菩提を退轉せざるなり。若し能く是くの如くに行ぜば、佛の法は得難からずして、久しからざるに魔衆を降して、最上なる菩提を證せん。と。

爾の時に、淨信童女は、是の法を聞き已るや、歡喜して踊躍し、佛に白して言はく。世尊、幾の法を成就せば、女身を轉じ能ふか。と。佛は童女に告ぐらく。八法を成就せば、常に女身を轉すべし。何等を八と爲すか。一には、嫉まざるなり。二には、慳まざるなり。三には、誑はざるなり。四には、瞋らざるなり。五には、實語するなり。六には、惡口せざるなり。七には、貪欲を捨離するなり。八には、諸の邪見を離るるなり。童女、此の八法を修せば、速に女身を轉せん。

【八】六念。
第五卷、同名の解、參照。

空に入るなり。二には、無相を信するなり。三には、無願を信するなり。四には、無作を信するなり。五には、内に疑惑無きなり。六には、無生を忍するなり。七には、無性を決了するなり。八には、一切の法の方便に於て觀察して、如を壞らざるなり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

空無相及び無願に於て 三解脱を得ば魔怨を降さん 有爲無爲に二相無しと 無生を證せば
解脱を得 諸法は無生なりと是くの如くに忍せば 彼等は諸の魔怨を降伏せん 此の無生無
滅の中に於て 蘊界の無我なることも猶幻の如しと 決定して法の無性を了知して 如を壞ら
ざるは巧方便にして 諸法を分別するを魔業と爲せば 分別を捨離せば則ち魔を降さん 智
慧と方便と二つ俱に行じて 若しは有若しは空に住る所無き 是くの如き殊勝の法を修習せば
善方便なる妙色の身を得ん と。

復次に、童女、菩薩は八種の法を成就する故にて、菩提を離れず。何者を八と爲すか。一には、正見にして、邪見の衆生を成熟する故なり。二には、正念にして、邪念の衆生を悲愍する故なり。三には、正語にして、諸の邪語を慙む故なり。四には、正業にして諸の邪業を攝むる故なり。五には、正精進にして邪勤の者を度する故なり。六には、正命にして邪命の衆生を捨てざる故なり。七には、正思惟にして邪思惟を離れしむる故なり。八には、正定にして増進を邪定の者に發起する故なり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

正見を成就する者にて 彼の諸の邪見を化し 常に正念を修行して 邪念の者を哀悲し 清淨なる正言説にて 諸の邪語の者を慙み 正業に安住して 諸の邪業の者を攝め 常に正勤を修して 邪勤の者を捨てず 正淨命に相應して 諸の邪命の者を攝め 智者は正思惟して 邪

像を造立して蓮華の座に置くなり。六には、憂惱せる衆生に憂惱を除かしむるなり。七には、貧高の人に於ても常に自ら謙下するなり。八には、他人を惱さざるなり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

假令^{たご}ひ苦は身に逼るとも 終まで他の過を説かず 常に三寶を稱嘆せば 諸佛の前に化生せん

勤めて菩提心を發して 一切智を求めしめ 常に梵行を修せば 諸佛の前に化生せん

黄金にて佛像を嚴り 寶蓮華の座に坐き 衆生の憂惱を除かば 諸佛の前に化生せん 彼の

憍慢の人に於ても 謙下すること弟子の如くにし 他をして惱を生ぜしめずんば 諸佛の前に

化生せん と。

復次に、童女、八種の法を有たば、菩薩は頭陀の功德を成就して、常に樂んで阿蘭若の處に住せん。何等を八と爲すか。一には、欲を少くするなり。二には、足ることを知るなり。三には、善法を満足するなり。四には、善を以て自ら養ふなり。五には、常に聖種を持つなり。六には、生死の患を見て心常に厭離するなり。七には、恒に無常・苦・空・無我を觀するなり。八には、深信堅固にして他教に隨はざるなり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

少欲知足にして放逸ならず 法をば喜んで衆善を資養と爲し 愛樂して常に聖種を修め 生死

の患を見て怖心を生ぜば 是れに由つて常に頭陀を行すること 犀の一角の獨り侶無きが如く

なるを樂まん 有爲の法は苦無我なりと 慧心もて深信して正勤に住し 自ら法を見て他に

隨はず 常に空閑に處らば佛に讃ぜられん 頭陀もて遠離して惱患無く 諸の諍論衆の過失

無く 眷屬を遠離して稱譽を絶たば 是れに由つて阿蘭若に住することを樂まん と。

復次に、童女、菩薩は八法を成就する故にて、魔怨を摧伏せん。何等を八と爲すか。一には、性

し 寂靜に梵住を修せば 淨く諸の惡道を除き 常に釋梵王の爲めに 勤めて諸の義利を修めん 神通は佛刹に遊んで 佛に侍して法を聽聞すれば 善く諸の性欲を知つて 法を説いて衆生を度せん と。

復次に、童女、菩薩は八種の法を成就する故にて、陀羅尼・辯才無礙を得ん。何等を八と爲すか。一には、法を尊重する故なり。二には、和上・阿闍梨に承事する故なり。三には、法を求めて厭くと無き故なり。四には、聞くが如くに演説する故なり。五には、法を慳吝せざる故なり。六には、他の惡を揚げざる故なり。七には、法の師を愛敬すること和尚の如くにする故なり。八には、他の過を見ずして過を離るることを勤むる故なり。是れを八法と名け、菩薩は成就せば、總持を具足して辯才無礙なり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

志樂して常に法を求め 師に事へ善友に親み 遠く惡知識を離れば 無盡の藏をば持つを得ん
多く聞きて厭足する無く 勇猛に勤めて法を求め 聞くが如くにして演説して 利養を希
求せずば 清淨なる辯才を得て 能く衆をして歡喜せしめん 欣樂して法施を行ひて 慳嫉
を遠離し 法を行じて著する所無くば陀羅尼を獲得せん 戒を護つて自ら身を觀じ 他の過
失を求めずして 慈悲を依止と爲し 語を發するに非時ならずんば 當に無礙辯を得て 言説
の彼岸に度るべし 善く法を説く者に於て 愛敬すること師の想の如くにし 過を隠して惡
を離るることを勧めば 無盡の海をば持つを獲ん と。

復次に、童女、菩薩は八種の法を成就する故にて、諸佛の前に於て蓮華に化生せん。何者を八と爲すか。一には、乃至、命を失ふとも他の過を説かざるなり。二には、衆生を勸化して三寶に歸せしむるなり。三には、一切を菩提の心に安置するなり。四には、梵行して染る無きなり。五には、佛

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

等心は地の一切を荷負する如くならば、善に於て惡に於て、増減する所無し。等心は水の諸の垢穢を洗ふが如くならば、世間を養育して、煩惱の渴を除かん。等心は火の如くならば、煩惱を燒滅する。大炬の光明は、燎かざる所無し。等心は風の處無く依無きが如くならば、飄る戒聞の香は、三世に流過せん。等心は空の如くならば、離見の清淨は、遍く一切に入つて、魔を隨へず。等心は法界に、善く安住するを得ば、増せず減ぜずして、常に平等に入らん。聲聞緣覺の、得る所の解脱も、縛する者ある無く、亦解く者も無し。生死と涅槃とに、來無く去無ければ、寂靜に安住せば、遍く三世に遊ばん。と。

復次に、童女、八種の法を有たば、菩薩は菩提を出生することを成就せん。何等を八と爲すか。一には、施にして、諸の有を捨つることを出生する故なり。二には、戒にして、犯する所無きことを出生する故なり。三には、忍にして、瞋恚無きことを出生する故なり。四には、精進にして、懈退せざることを出生する故なり。五には、禪にして、方便を行ふことを出生する故なり。六には、慧にして、持戒・多聞を出生する故なり。七には、梵住にして、解脫・寂靜を出生する故なり。八には、神通にして、常に定に在ることを出生するなり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

常に施を修行せば、諸の貪の熱惱を離れ、果報を希求せずして、佛の菩提に廻向せん。持戒を大なる乗と爲し、割截すとも瞋恨する無くして、大安樂を志求せば、習を除いて眞の滅を證せん。菩薩精進を行じて、多劫に衆生の爲めに、苦を忍んで世間に遊ばば、精進力は増長せん。禪定を修行せば、諸の戲論を遠離し、諸の禪の彼岸に到らば、而ち禪に隨はずして生ずらん。大慧は等倫無く、永く諸の邊見を離れて、世の空寂なるを了知すれば、癡闇は滅して餘無

【五】梵住。

「四梵住」即ち「四無量心」を謂ふ。

【六】習。

謂はゆる「習氣」なり。第一卷、同名の解、參照。

【七】而ち禪に隨はずして生ず。入禪せずして「方便を行ふこと」とし、出生する義なるべし。

復次に、童女、菩薩は八種の法を成就する故にて、生死の中に於て疲倦を有つ無し。何等を八と爲す。一には、善根廣大なる故なり。二には、衆生を觀察する故なり。三には、佛に見えて供養を修するを得る故なり。四には、無量の諸の佛刹を見る故なり。五には、常に佛智を求むる故なり。六には、生死は猶夢の如しと了知する故なり。七には、殊勝の法に於て怯弱なる無き故なり。八には、前際及び後際の如實の際を觀察する故なり。

爾の時に、世尊は而も、偈を説いて言はく。

諸道を行ずる者の善を修めて瑕垢無きこと 空月の如くに清淨なる若きは 苦の衆生を度脱せんと 諸の功德を攝むる故に 生死に疲倦無し 衆生の性を觀察し 堅固に精進を行ひ 無量の佛刹に於て 恭敬して佛を供養する 是故に十力者は 生死に疲倦無し 無量無邊の世に 不思議の法を説きて 三寶の種を斷たざるを 當に法王を成すべく 堅く禁戒を持つ者は 生死に疲倦無し 生死の性の 夢の如く雲電の如くなるを了知して 法に於て解脱を得ば 生死に疲倦無し 菩提に安住して 喜心もて常に悅豫し 方便の岸に度らば 生死に疲倦無し 常に殊勝の法を修むること 空の月の増長するが如くにして 佛の功德を愛樂せば 生死に疲倦無し 生死に邊際無く 常に實際に住するに 一念慧もて相應せば 生死に疲倦無し と。

復次に、童女、八法を成就せば、心界は平等なり。何者を八と爲すか。一には、心を地の如くにする故なり。二には、心を水の如くにする故なり。三には、心を火の如くにする故なり。四には、心を風の如くにする故なり。五には、心を虚空の如くにする故なり。六には、心を法界に等しうする故なり。七には、心を解脱に等しうする故なり。八には、心を涅槃に等しうする故なり。是れを八種の心界平等と名く。

衆生に本より我無くして、念念に得可からずと平等に住する者は、應當に是くの如くに観すべし。一切法は平等にして、本性は常に空寂なれば、文字には分別ありとも、諸法に本より差無し。十方の諸佛土は、邊際得可からずして、其の性虚空の如くなれば、佛國は常に平等なり。三世の諸の如來は、法界平等の、無邊智に住して解脱せること、佛佛皆是くの如し。

衆生は本緣起にして、一切は皆平等なりと、善く其の行する所を知らば、應ずる如くに開悟することを爲さん。衆生は若干種なりとも、幻化の如くに、内外に取る所無く、自性常に清淨なりと了知せよ。諸乘の種種の説も、無爲の性は平等なるを、導師は善方便にて、分別して三乘を説くなり。現に煩惱魔に住すれども、煩惱に所有無く、天魔及び蘊死の境界も悉く皆空なりと。

復次に、童女、菩薩は八種の法を成就する故にて、諸の情・愛を離る。何者を八と爲すか。一には、慈なり。二には、悲なり。三には、常に利益を行ふなり。四には、世法に染らざるなり。五には、自身に著せざるなり。六には、常に定心を修むるなり。七には、身命を捨離するなり。八には、煩惱を觀察するなり。此の八法を修せば、能く情・愛を離れん。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

堅く慈心の鎧を被、一切を哀悲して、平等心に安住せば、則ち憎愛を生ぜず。智人は利益を行はんと、常に他に安樂を施して、利を得しむとも自ら高らず、輕んじ毀つて恨を生ぜず。

八風に爲つて動かさば、則ち憎愛を生ぜざれば、己に於て若しくは他に於て、憎愛の想を生ぜず。諸想を悉く捨離して、境界に著する所無く、常に自ら其の身を觀じて、軀命を惜まず。智者は苦樂に於て、動かざること虚空の如く、善く煩惱を觀察して、我我所を俱に離れて、行を持つこと恒に地の如くならば、則ち憎愛を生ぜずと。

【四】八風。
又「八法」とも曰ふ。第一卷、
同名の偈、參照。

勝解力にして、諸惡を離るる故なり。三は、加行力にして、常に善を修むる故なり。四は、淨信力にして、深く業報を信する故なり。五は、菩提心力にして、小乘を求めざる故なり。六は、大慈力にして、衆生を害せざる故なり。七は、大悲力にして、諸惡を堪忍する故なり。八は、善友力にして、時時に警覺する故なり。是れを八力と名く。菩薩は是くの如き力を成就する故に、堅固なる勇猛にて、生死の中に於て染著する所無きなり。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

志樂勇猛に 諸の詬誑を離れ 常に質直を行ぜば 正しく菩提に趣く 勝解力を以て 衆惡を遠離して 純ら善行を修せば 正勤に住す 加行具足して 恒に善く觀察し 精進堅固ならば 衆生を安樂にす 淨信力の故に 業報を了知し 佛智を信ぜば 世間を攝受す 菩提心力もて 小乘を遠離して 佛種を斷たずんば 法性に安住す 大慈力の故に 等しく衆生を觀じて 愛無く憎無くば 盡害を生ぜず 大悲力の故に 衆惡を堪忍せば 生死に染らず 亦疲厭も無し 善友の力を以て 常に相ひ警悟して 心退没せずんば 菩提に安住す 彼の勇進の者にして 是の八力を得ば 當に道場に坐して 諸の魔衆を破らん と。

復次に、童女、菩薩は八種の法を成就する故にて、平等に住せん。何等を八と爲すか。一には、一切衆生の平等にして、本より我無き故なり。二には、一切法の平等にして、諸法は寂靜なる故なり。三には、一切刹の平等にして、空界に入る故なり。四には、一切智の平等にして、平等の説法なる故なり。五には、一切行の平等にして、因縁は無性なる故なり。六には、一切乘の平等にして、等しく無爲なる故なり。七には、心平等にして、心は幻の如くなる故なり。八には、諸魔平等にして、煩惱を先と爲して不可得なる故なり。是れを八法に平等に住すと爲すなり。

爾の時に、世尊は重ねて偈を説いて言はく。

ると與に、各金の臺かつかつを持ちて、舍衛城を出でて祇陀林ぎだりんに詣り、如來の所に至つて佛足を頂禮し、右に遶ること三匝し、却いて一面に住り、即佛前に於て偈を説いて言はく。

久しく福善の清淨なる業を積んで、無邊の功德海を満足し、衆をして信樂して皆歡喜せしめた

まふ、故に我れ牟尼尊を頂禮したてまつる、威光の相の奇特なるを顯現し、法門の衆寶の處

を開示し、身光は一尋を常に照耀したまふ、我れ大慧の清涼池に禮したてまつる、^三功德の大

樹福盡くる無く、人中の最尊として世に讚ぜられ、本願の戒行は已に圓滿したまふ、故に我れ

應供尊に頂禮したてまつる、妙法に安住して常に寂然に、等心にて世間を一子の如くにし

智慧善巧に諸行を知り、平坦の路を示したまふこと導師の如し、若し堅固に勇進する者あつ

て、慈悲もて衆生の類を利益せんには、是くの如き菩薩の正しき修行を、惟願はくば如來宣説

を爲したまはんことを、云何にせば當に堅固の力もて、生死に安住して魔衆を降し得べきか

云何にせば平等の法を得て、云何に諸の衆生を成熟すべきか、云何にせば地の如く虚空の

如く、風の如く水の如く亦火の如くに、云何に法に信住すること、彼の須彌と師子王との如く

なるを得るか、云何にせば憎愛の心を遠離し、淨意質直にして諛詔無く、云何に施戒忍、精

進禪定及び解脱を出生し、智慧もて諸の煩惱の間を破り、而も常に大方便、三昧總持無礙辯に

安住し、四無量五神通に住するか、云何にせば諸佛の前に在つて、常に化生を受け宿命を知

り、頭陀無諍にして蘭若に住し、其の心を調伏して煩惱を滅し、戒を持ちて菩提の道を修習し

甘露を證して魔怨を降し、衆に安樂を施さんと法輪を轉ずるを得るか、是くの如き正道を願

はくば宣説したまはんことを、と。

爾の時に、世尊は、淨信童女に告げて言はく、菩薩若し能く八力を成就せば、生死の中に於て、堅固に勇猛にして疲倦無きなり。何等を八と爲すか。一は、志樂力にして、詭譎無き故なり。二は、

【二】大慧の清涼池。佛窟に據る譬喩的讚歎なり。
【三】功德の大樹。同様の讚歎なり。

卷の第一百一十一

唐 菩提流志 漢譯

淨信童女會 第四十

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は舍衛國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘の衆五百人と俱なりき。菩薩摩訶薩は八千人にして、一切皆是れ衆に知識せられ、陀羅尼・辯才無礙を得、諸忍を具足して魔怨を降伏し、諸の如來の得る所の法に逮れるなり。其の名を持世菩薩・持道菩薩・持地菩薩・持大地菩薩・樂慈菩薩・令信樂菩薩・妙色莊嚴菩薩・寶焰菩薩・寶幢菩薩・寶思菩薩・寶處菩薩・寶慧菩薩・寶德菩薩・寶光菩薩と曰ひたり。復、賢劫の諸菩薩等あつて、彌勒菩薩は而ち上首爲り。復、六十の等噲無き心の諸菩薩等あつて、文殊師利は而ち上首爲り。復、十六の大神あつて、賢護菩薩は而ち上首爲り。復二萬の兜率天子あつて俱に會中に在り。

是の時に、世尊は、大莊嚴藏の師子の座に處りたまひ、無量なる百千の大衆の圍遶せるを、光明照曜すること猶日月の如く、威徳の殊勝なること釋・梵王の如く、高く衆の表に出づること須彌山の如く、光焰の猛盛なること猶大火炬の如く、顧視の安詳なること大象王の如く、説法の無畏なること師子吼の如く、諸の大衆を蓋ふこと羅睺羅王の如くに、相好は莊嚴し、威光は熾盛に、梵音聲を出して遍く三千大千世界に満して、一切衆生を覺悟して普く決定の勝義に安住せしめんと欲する爲め、大衆の中に於て法を演説せり。

時に、波斯匿王の生む所の愛女を、名けて淨信と曰ひしが、年幼稚に在りながら相貌端嚴にして、諸の衆生の樂み見る所爲りしが、宿り善本を植ゑ大乘を修習したれば、五百の童女の前後に圍遶せ

【一】等噲無き心。
「等」は等類、「噲」は譬喩にして、即ち「無上に勝れたる心」を謂ふ。

て人の護持するのみに非ず、諸天・修羅・摩睺・伽・人非人等に及ぶまで、彼に來つて處を護持し、彼の處に頂禮すれば、諸の恐怖無く、縣官も惡を作す能はず、劫賊も當に害する能はざるべし。と。

佛は諸の比丘に告ぐらく。汝等、諸の比丘、若くなれど、今より去に、此の法門をば無信の人の邊にて説くことを得ざれ。亦過失を免むる人の邊にても説くことを得ざれ。亦外道の尼乾等の邊にても説くことを得ざれ。亦尼乾陀聲聞の邊にても説くことを得ざれ。阿蘭若空閑に在る者の邊にても亦説くことを得ざれ。亦至心にて請はざる人の邊にても説くことを得ざれ。と知れ。所以は何ぞ。其の過失を求むることを恐るればなり。——如來には實に過失無れど——若し出家の比丘或は在家の俗人あつて、此の事を信受して隨順せば、彼の人に應に須く、當に彼の人の邊に順すべく、應に須く、慈悲心——一ら如來の如き一種の——を起すべく、須く是くの如き心——此の人は諸佛の庫藏を持つなり。——を發すべし。と。

爾の時に、世尊は而ち偈を説いて言はく。

發心して出家せる故に 應當に佛法を行じて魔軍の衆を降伏すること 象の竹舎を壞るが如くなるべし 若し能く此の法を行じて 放逸の事を謹慎せば 生死の煩惱を滅して 當に一切の苦を盡すべし と。

佛の此の經を説き已りたまふや、其に跋陀羅長者子・大藥王菩薩及び大比丘衆・天・龍・阿修羅・乾闥婆等は、佛の所説を聞きて、歡喜して奉行せり。」

【六一】 亦外道の。乃至。亦説くことを得ざれ。

異譯本には「尼乾子・尼乾部の衆、諸の外道の中に於ても、亦之れを説く勿かれ。」とあり。

【六二】 若し出家の比丘。乃至。發すべし。

異譯本には「若し此の經典を禮拜し供養する者あらば、應當に是の人を恭敬し供養すべく、斯の人は則ち如來の藏を持つことを爲すなり。」とあり。

入と言ふは、何等を六と爲すか。一には眼、二には耳、三には鼻、四には舌、五には身、六には意なり。六入の境界と言ふは、何等を六と爲すか。一には色、二には聲、三には香、四には味、五には觸、六には法なり。此れを名けて六入の境界と爲す。諸塵の界の本體の三と言ふは、何者を三と爲すか。一には欲、二には悲、三には癡なり。彼等の發起するに三あり。何等を三と爲すか。一には持、二には信なり。復六あり。何等を六と爲すか。一には施、二には財、三には精進、四には禪定、五には善、六には非善なり。云何なるを陰と名くる。一には受、二には想、三には諸行、四には識にして、此の四陰は是れ無色なり。受と言ふは、即れ受用するなり。想と言ふは、即れ樂・苦を知り別くるなり。諸行と言ふは、見・聞・觸・受するなり。此に名けて識と爲せるは、身の爲めに主と作つて能く自在を得、一切諸物の中にて自在なるが故なり。移と言ふ者は、善く清淨戒の身業・口業・意業を成就せば、受けたる根の命終する時に、彼の時に於て、彼の識は諸陰を捨てて、更に有の生を受けず、更に迴せざるが故に一向に樂を受く。故に名けて移と爲す。是れを名けて移と爲せば、此れを離るる者をば、名けて有の移と爲さす。是くの如くに次第に別るる者をも、名けて移と爲さざるなり。と。是くの如き語を作し已るや、跋陀羅波梨及び大藥菩薩は、頂にて佛足を禮して、是の言を作さく。善い哉、世尊、善く能く我が爲めに是くの如き義、眞實なる一切智を説きたまへり。世尊、未來世に於て、此の法門は諸の迷惑せる愚癡の衆生の爲めに、當に潤益を作すべし。と。佛は彼の二人に報じて言はく。跋陀羅波梨、此の諸の如來の智には虚妄ある無きも、一切智に非ずんば亦此の眞實體を知る能はず。我れ過去に於て、無量の苦行を行じて熏修せる此の智光明は、今日説く所の如くして異なる無きなり。此に是の智光明の法の、自ら處處に流布する功德・名聞として、一切智の海藏を諸の衆生の教化の爲めの故に説かんに、在る所の處、説く所の處に、彼の處に於

然れども、後節に在る「諸入の取と言ふは」とある者と一致せず。且又、原文にては意義を成さず。加之、異譯本には「二入因」とあり。之れを總合して、「一者」は「諸」の誤寫なりと認め、「諸入」と改めたり。

【五〇】 彼等の發起するに、乃至、涕唾なり。

異譯本には「又、風、黄、痰をも亦三因と名く。」とあり。

【五一】 復六あり。乃至、非善なり。

異譯本には「又、二因あり。等」として、六を各二分して明しあり。而して、「財」に代ふるに「捨」を以てせり。

【五二】 此に名けて、乃至、自在なるが故なり。

異譯本に「識とは、是れ身の主にして、遍く諸體に行き、身に爲す所あらば、識に由らざる無きなり」とあり。

【五三】 移と言ふ者は、乃至、名けて移と爲す。

異譯本には「遷らざとは、謂はく。身・語・意淨くして、道果を證獲せば、此の人死し已るも、識は有の陰を棄てて、重ねて有を受けず、諸趣に流れず、極樂にして遷り、復と重ねて遷らざる。是れを遷らざと名く。」とあり。

るが如くなれば、心に是くの如き念を作すなり。嗚呼、我れ今何の故にて、微妙なる閻浮提を捨て、愛する所の諸の親侶を棄て、地獄に向つて速疾にして行くや。今天上の路を見ず。と。其に彼の時に於て、猶蠶蟲の絲の纏ふ所を被るが如く、速疾に生を受くる處を求めて彼れ自由ならざるは、業の纏縛する所を被つて住るを得る能はざればなり。大藥、其の地獄の衆生には、是くの如き因縁あつて、是くの如き等の諸の苦惱の事を受くるあり。と。

爾の時に、大藥王子及び跋陀羅波梨長者子は、此の事を聞き已つて身の毛皆豎ち、十の指掌を合して佛に向つて歸依し、其に大藥王子等は、發心して是くの如き願を作さく。此の聞法の因縁を藉りて、流轉生死の煩惱の内に在りとも、願はくば、惡道に生ずること莫く、願はくば、地獄の苦を受くること莫からんことを。と。

爾の時に、跋陀羅波梨は、復佛に白して言はく。世尊、我れ更に佛に、前に心に疑へる所を問はんことを欲す。と。佛は告げて言はく。跋陀羅波梨、汝の疑ふ所に隨ひ、汝が意を恣にして問へ。と。跋陀羅波梨は佛に白して言はく。世尊、何者を聚と名け、何者を積と名け、何者を陰と名け、何者を移と名くるか。と。佛言はく。跋陀羅波梨、凡そ四種の法界を以て此の身を成就せり。何者を四の諸界と爲すか。和合せる智慧と見と意と無明とにして、諸の境界を、識の此に是れ總ぶる義は、我れ已に説けり。聚と言ふは、即是れ六界と諸入と境と、六界の内に於て能なる者三と、諸

入に復二種の取あるとなり。其の内に髮・髭・鬚・衆毛・皮・肉・膿・血・涕・唾・脂・五藏・手・足・頭・面の身分支節あつて和合するが故に、名けて聚と爲すこと、譬へば、諸穀の積集——或は烏麻或は大・小麥或は豆・豌豆の——の、衆集を以ての故に積集と名くること、是くの如きが如く、是くの如くに、此の身には、身分あり支節あつて衆集するが故に、名けて積集と爲すなり。六界と言ふは、何等を六と爲すか。一には地界、二には水界、三には火界、四には風界、五には空界、六には識界なり。六

【五二】 今天上の路を見ず。異譯本に「我れ今、天の路を見ずして、但、苦の事を見る」とあり。

【五三】 何者を移と名くるか。異譯本には「云何なるを身遷らずと爲すか」とあり。

【五四】 諸の境界を、乃至、我れ已に説けり。異譯本には「四界は識を境とする、之れを名けて積と爲す。」とあり。

【五五】 聚と言ふは、乃至、二種の取あるとなり。

異譯本に「聚は謂はく。六界と六入と六入の境と三界の因と二入の因となり。」とあり。

【五六】 諸入。原漢文には「一者入」とあり。

すなり。大藥、彼の諸の衆生は、食はんと爲す故を以て、是くの如き苦事を受くるなり。復次に、大藥、彼の地獄の中の衆生は、彼の時に於て、其の神識は唯骸骨の内に在つて、彼等の神識は骸骨を離れず。神識は骸骨を離れざる故に命終を取らず。然りと雖も、而く彼等衆生は猶尙飢を惱むに、彼處にては亦食ふ事無きも、彼の處に於て微妙なる園林あつて、彼等は眼に種種の華果の種種の樹木蒼鬱として青色なるを見、亦微妙、廣大なる地方の柔軟なる青草にて覆はるるを見るなり。彼等は是くの如き園林地方の微妙なるを見るや、各各歡喜し微笑して、各各念を起して、各各汝等人輩、是くの如くに園林は微妙にして快樂を受くべく、又、涼冷たる微風ありと相ひ喚ぶに、彼等は此の事を聞見し已るや、速に來つて聚集し、即共に彼の園林の内に入り、入り已つて少時樂を受くるや、彼の樹上に於ける有らゆる華果及び諸葉等は、悉く皆鐵と成り、彼の衆生等は、即彼の鐵の枝葉・華果を被つて、其の身を撃き裂かるるなり。彼の地獄の衆生の枝葉・華果を被ること、猶竹根の如くにして撃き裂かるる時に、口に大に叫喚して處處に馳せ走るに、是くの如き時に、其の後に諸の閻羅王の人あつて、手に利き鉄を執り或は大鐵杖を執つて、其の目は畏るべく、牙齒極めて利く、頭髮は火と然えて、其の炎高大にして全身焼け然えたるが、手に種種の器械を執り、——罪人の業に隨つて生ぜる所なり。——彼の人、後に順つて趣ひ逐うて、口に是の言を唱ふらく。人等住れ。住つて走る莫かれ。汝等の自業の作る所の此の園林なるに、何故に苦み走つて、此に在つて斯の業を受けざるか。と。大藥、彼の諸の衆生の、地獄に在つて是くの如き苦惱を受くることを、當に是くの如くに觀すべし。復次に、大藥、其の地獄の人は、七日を過して後、具足して地獄の苦を受くること、猶蜂の華に採つて蜜を造るが如し。所以は何ぞ。種種に諸因を有つ故なり。神識の始めて地獄の苦を受取るを成するや、而ち彼の神識は、初め身を捨つること自由ならずして諸苦の逼る所を被り、心中樂まざるが、初め大黒闇を見て彼の處に至ること、猶人あつて賊に逼られて牽き挽かる

【五】其の地獄の人は、乃至、受くること。異譯本に「七日にして死し、還(マタ)地獄に生ずることあり、業力を以ての故なり。」とあり。

て已つて彼の地獄に在るや、卽有てる業を成就して卽彼の地獄を見るに、或は他の方に血の滌ぐが如きを見るあつて、彼れは卽心に染著の相を生じ、染著の相を生じ已つて卽地獄の身を成するたり。而して彼の神識は、猶下濕の臭爛の地の因の故にて蟲身を生ずるが如く、譬へば、屏臭の穢爛の故にて蟲を生ずるが如く、譬へば、醃内の臭壤に諸の蟲の生ずるあるが如くに、大藥、衆生の地獄に生ぜんと欲するものも亦復是くの如くなり。と。

爾の時に、跋陀羅波梨は、合掌して佛に向つて、佛に白して言はく。世尊、諸の衆生の輩の地獄に在るに、其の身に何なる色を有ち、云何にして身體を受くるか。と。佛は跋陀羅波梨に告げて言はく。若し衆生あつて、血處に染著せば、彼等の身體に血色を生じ、若し衆生あつて、毘羅尼河に染著せば、彼等の身體に卽不白・不黒の雲色を生じ、若し衆生あつて、灰河に染著せば、彼等の身體に斑駁の色を生ずるなり。而して彼等諸の衆生の、彼の處に於ける身體の柔軟なることは、猶王子の安樂に養育せる其の身の如きなり。跋陀羅波梨、彼の處に於ける諸の衆生の身を受くることは廣大にして、長さは八肘半に、其の髀鬚・頭髮は甚だ長く、其の足は畏るべく反つて後に向へり。若し闍浮提の人にして、地獄に往いて靚んと欲して、彼の地獄の人を見れば、卽使に怖死するなり。復次に、跋陀羅波梨、地獄の衆生は、復食を有つと雖も、暫時の樂も無きなり。と。

爾の時に、大藥は、復佛に白して言はく。世尊、彼の諸の衆生は、食ふ時には何等の食を有つか。と。佛は大藥菩薩に報じて言はく。大藥、彼の衆生の輩の、地獄に在つて遊歴する時に、遙に赤色の或は銍けたる銅或は銍けたる鑄石を見、見已るや各相ひ唱へて言はく。嗚呼、仁者の誰れも、食を得んと欲せば、近り來つて相ひ共に此れを食へ。と。此の聲を聞き已るや、一處に聚つて、銍銅の會り堂なる所に向つて住り已り、食を求むる故に口を張つて食はんと欲するに、而ち彼の銍銅及び鑄石は熾盛に光を放ち、是くの如き聲——多吒・多吒——を作して、其の口に入つて其の全身を然

て。
異譯本に「甚だ大に憂苦し」とあり。

【八】 毘羅尼(Virāṇī)。

宋・元・宮の三本の夾註には「階に難度と言ふ。」とあり。異譯本には「湯隴」とあり。衆生の愛欲に擬したる者なり。

【九】 灰河。

異譯本には「乳湯河」とあり。河中に火あつて物を燒く者にして、以て「三毒」「三愛」の煩惱を指す。「三愛」とは、欲・色・無色の三有に愛著するを謂ふ。

【十】 多吒(ṭṭha)。

にして走るが如く、此の神識は、初め身を捨つるや彼に至らんと欲することも亦復然く、天に生ぜんと欲せるは、即天を攀緣する念にて天の父母の一座の上に在るを見、見已つて攀緣して、即疾に即ち生を受くることを得るなり。復次に、大藥、汝の間ふ、凡べて人の初めて識を移す時に、其の識の未だ彼に至らざる時には、何處に在つて住するか。其の性をば當に云何に觀すべきか。とは、大藥、譬へば、人の影の、水中に在つて復性を現すと雖も、人の正形の色に非ざるが如く、當に是くの如くに觀すべし。大藥、彼の人影の、上下・手足正等に色を成就せる時に、水中に在つて亦是くの如き念を作さざるなり。言はく。我れ熱惱を有つ、我れ寒凍を有つ、我が身疲乏すと。彼れには是くの如き心無きなり。言はく。我れは是れ眞の體にして、前の胎に在りし肉塊の如しと。而して彼の影には擾亂の處を有つ無く、而して彼の人の身影の水中に在る時に、聲の、或は苦の聲或は樂の聲を出すことある無きなり。大藥、此の神識の、此の身をば捨て已つてより未だ彼の身に至らざるには、是くの如き形あり、是くの如き性あるなり。大藥、凡べて福を有てる神識の、初め天身を取らんと欲する時には、是くの如き受を作すなり。と。

爾の時に、大藥菩薩は、復佛に白して言はく。世尊、此の神識の、地獄の生を取らんと欲するに、云何に受くるか。と。佛は大藥に告ぐらく。汝今諦に聽け。福無き衆生の、地獄の生を取らんと欲する如き者を、我れ汝が爲めに説かん。大藥、凡べて衆生あつて、若し不善の業を造らば、彼の業の攀緣を以て攝められて彼の衆生の此の處にて其の身を捨てんと欲するに、身を捨つる時に是くの如き念を生ずるなり。我れは即是れ彼の人——此れより地獄に身を捨つる——にして、此れは是れ我が父母なりと。而して彼の人の身を捨つる時に、一つの等にて色身を成就すること、本性として有るが如く、彼の人を成就すること、本よりの身體の如くに即身分を見るなり。而して彼の人の初め身を捨つるや、憂愁の流るる所を被つて、即種種の地獄を見るなり。彼の神識の初め身を捨

彼の神識も身を成就する故を以て識ありと言ふも、亦受に由る故にても見られず、亦諸行に由る故にても見られざるなり。大藥、譬へば、日天の圓滿なる光明の照曜して、大に威光あつて顯赫として見らるゝに、而も諸の凡夫の輩は、正色を見ずして、或は黒色と言ひ、或は白色と言ひ、或は黄色と言ひ、或は綠色と言ふとも、大藥、以て身とす可からざるが如くに、神識を或は黒或は白等と見ざるなり。猶日の喩の、煖と、見らるる光明とを以てす可からずして、其の見る可き者は、但出沒し行く時なりと、是くの如くに須く觀すべきが如く、大藥、此の神識を凡べて觀せんと欲する時には、但其の諸性を取れ。と。

大藥は、復佛に白して言はく、世尊、其の識には何の諸性あるか。と。佛言はく、大藥、彼の性は受の性・取の性・諸行の性・憂愁の性・思惟の性・惱の性・喜の性・不喜の性等は、是れ識の諸性なりと、應當に是くの如くに觀すべし。復次に、神識に本性として觀す可きあり。何等を本と爲すか。謂はゆる、善心・不善心等を本と爲すなり。と。

爾の時に、大藥は、復佛に白して言はく、世尊、彼の神識の、此の身より出で已つて、云何にして速疾に而ち彼の生ずる處を受くるか。云何に此の身より出で已つて、未だ彼の身の受生に至らざる時に、何處に於て住するか。此の神識をば當に云何に觀すべきか。と佛は大藥に答へて言はく。譬へば、人あつて、其の臂織長に、手足・上下一切正等なるが、微妙速疾なる駿馬に乗つて、馳走して陣に入るに、陣に入り已つて刀架・弓箭の傷くる所を被り、其の心惱亂せるが、彼の陣内に在いて其の心迷悶して、馬より墮ちて地に倒れたるも、而も彼の人は善く戎仗を解き、地に倒れ已れるも速疾にして起き、手に其の馬を執へ即便に上に驅るが如し。譬へば、彼の人の地に倒れし時に速疾に馬を得、馬を得已るや即彼の馬に乗るが如く、彼の馬を速疾に得て速疾に乗るが如くに、彼の神識も亦是くの如しと應當に知るべし。彼の人の、賊に趁れて心に恐怖を生じ、彼の馬に乗つて速疾

【四三】猶、日の喩の。乃至。諸性を取れ。

異譯本には「能く但、照熱の光明・出沒の環運の諸作用の事を以てして、日有るを知るが如く、識も亦是くの如くに、諸の作用を以てして、識有るを知るなり。」とあり。此の説述は然るべし。

【四四】復次に神識に。乃至。本と爲すなり。

異譯本には「復・善・不善の業の、熏習して種と爲るあつて識を顯すことに作用す。」となり。【四五】何處に於て住するか。異譯本には「何の相を作すか。」とあり。

うし坐せるを見る。同じく坐せるを見已るや、其の玉女は將に手を其の身上に置かんとするに、其の玉女は兩手にて香華を掬ひ滿し、既に華を掬ひ已るや、彼の天に白して言はく、大に善し、大に善し。願はくば、吉利の事あらんことを。と。天の童子を生まんと欲する時至つて、彼の玉女は是の語を作し已つて、手にて卽華を索め、索め已つて復索むるに、華を索むる時に、而ち彼の衆生は卽命終を取るに、彼れは諸根を捨つると共に識は諸根の境界を捨て、諸大を捨つる時に、四陰に定無く體に色無くして、人の馬に騎らんと欲するが如く、或は日天の如く、或は明珠の如く、或は火炎の如く、或は水月の如く、或は幻化の如くに、身の攀縁せる善業にて、速疾なること筒の出す氣の如くに移り去るなり。而して彼の神識は彼の處に生れんと欲するや、彼の華に因つて、父母の天欄の上に坐せるを見、彼の天の和合するを見るや、其に神識は華の内に於て形を有つて出づるなり。彼の時に、微妙の風あつて甘露の味と和合して吹くに、而ち彼れは起ち已り、彼の識は七日の内に於て、頭に天冠を戴きて天童子と生るゝなり。と。

爾の時に、大藥菩薩は、復佛に白して言はく、世尊、彼の神識は既に色を有つ無きに、云何にして因縁に爲つて色を成就し、云何にして因縁に爲つて現見するか。と。佛言をく。大藥、譬へば、二木の和合し、各各相ひ措れて火を出すが如し。而して彼の火は、木の内に在いて見られず、木を離れて火を得られず、亦一つの因にて火を生じ能ふに非ず、亦因無くして火を出し得るに非ず。是れ木の上に卽色を見得るに非ずして、因を以ての故に出づるにて、出でて乃ち色を見れども、亦木を離れて別に色の得らるるあるに非ざること是くの如し。是くの如くに、大藥、彼の識は、父母の和合の故を以て身を受くるを成就すれども、其の識は亦身内に在いても見られず、亦身を離れても彼の識を有たざるなり。大藥、譬へば、火の出で已つて然る後に色を見るも、亦熱の故にて色あるを見らるるにも非ず、亦赤き故にて色を見ると言はるるにも非ざることが如く、是くの如くに、大藥、

異譯本には「天父、天母は同じく一座に上ばるに、天母の手の中より自然に花の出づるを、天母は花を見て、顧みて天父に謂はく」とあり。

人命終の時に即不顛倒を得、鼻を見るに嗚り縋れず、口氣臭からず、彼の人の耳目は青蓮華の色に似、身分・支節更に離解せず、彼れ亦流血もせず、亦糞尿をも生ぜず、諸の身の毛孔も亦摺り折れず、諸用も復青色無く、手に黄色無く、手脚不動にして、亦申び縮まずして命終を取るなり。大藥、彼の人の命終の時には預め天相あり。謂はゆる、現前に輦輿を見るに、彼の輦輿に千數の柱あつて、莊嚴するに諸の鈴網を懸け、其の鈴は好ましき微妙の聲を出せり。種種の微妙なる香華あつて其上に散じて、又、好妙なる香氣を出せり。復、種種の瓔珞あつて、其の上を莊嚴せり。復、無量の諸の天童子あり。彼れは是くの如きを見已るや大歡喜心を生じ、彼れ歡喜心を生じ已るや身に於て二相を生ず。齒白きこと猶、君陀華の如くに其の兩目を顯現するに、甚だ大には開かず甚だ大には閉ぢず。其の聲は微妙・哀美にして、二足の下は猶蓮華の色 of 如くなり。而して彼れの死屍は、命終の後にも身心冷えず熱せずして、彼の亡人に眷屬ありとも、甚だしくは悲戀せざるなり。而して彼の人の法に依つて命終を取らんと欲する時に、其の時は正に日初めて出でて諸方に黒闇ある無く、了了として衆色を覩見し、諸方に復善妙なる香氣の遍滿するあつて求たるなり。其の人の終らんと欲するに臨む時に、兩目は閉ぢずして、其の見る所、諸方に迷惑を有つ無く、若しくは如來の像を見て、即信心を得て清淨の意を發すなり。復、心に喜愛する所の諸の眷屬を見て、歡喜の心を以て其の身を抱くこと、猶人の死し已つて還り活くるが如く、亦遠く行ける人の歸るが如くにして、諸の眷屬を慰め諭して是くの如き言を作すなり。諸の眷屬等、憂ふる莫かれ、愁ふる莫かれ。一切有らゆる生ずる者には、皆是くの如き別離の法あるなり。と。大藥、彼の衆生は、若し福業強くば、——若しくは内に布施の心を發し、其の辯才もて數數自ら布施の功德を讚歎し歌詠し、或は種種の功德の因縁にて、——彼の人は是くの如き語を作し已つて意に睡眠を樂欲し、身心に安樂の其の體に遍滿するを得て、安穩に身命を捨つるなり。身命を捨つる時に、上に諸天の共に榻を同じ

【一〇】 二相。

臺本には「相二」とあれど、明本には「二相」とあり。又、宮本の夾註にも「二相」とあり。由つて改めたり。然るに、又本文を見るに、二相にあらずして多相なり。乃ち「二」は恐くは誤謬なるべし。因みに、異譯本には、相の數に關する語は無し。

【一一】 君陀(Kundha)華。

即ち白茉莉華にして、鮮白比無しと曰はる。

【一二】 身心。

異譯本には單に「身」とあり。然るべし。

【一三】 上に諸天の。乃至、彼の天に白して言はく。

是くの如くに、此の識の牢固なること猶なほ金剛の如くなれど、而も受くる身は此に堅牢ならざるなり。
と。

爾の時に、大藥は、復また世尊に問はく。彼の識は既に是れ軟弱なるに、云何にして堅牢の身を破壊し、而して移つて彼の世に至るか。と。佛は大藥に告ぐらく。譬へば、水の流の注そぎ下つて山の内に在り、還山を穿つて出づるが如し。大藥、汝が意に於て云何。彼の水に何の堅牢あるか。大藥は佛に報じて言はく。世尊、其の山の體の是れ堅韌なること金剛の如くにして、彼の水滴の本性の柔軟なること猶夢の如くに、觸るゝを爲す者の安樂なること是くの如くなり。と。是くの如くに、彼の識の本體は柔軟なれども、能く大身を破り即出で去るを得るなり。と。

爾の時に、大藥は、復佛に問うて言はく。世尊凡べて衆生あつて、衆生界より身を捨て命終る後に、云何にして諸天の身を受け、云何にして復また諸趣の身を受くるか。と。佛は大藥に告げて言はく。大藥、汝諦に聽け。我れ當に汝が爲めに此の事を解説すべし。大藥、凡べて衆生あつて、衆生の體を捨て、命終の後に、福業の事を行ぜざるを以て身を受くるを以て、彼の身を還し捨つるには、其の識は人身の見を捨て、天身の見を得る。彼れ既に天眼を得已れば、即六欲の諸天を見、又、六欲の天宮を見るなり。而して彼の人身の破るゝを見る時に、復天上の園林たる歡喜林・瓊亂林等の彼の處に高座あつて、天衣もて上を覆ひ、處處の臺殿・微妙なる樹林の處處に、端正なる玉女あつて聚るを見る。而して彼の識は、常に華あつて諸事を莊嚴せるを見、心に喜んで見る者は種種の瓔珞・耳環・臂釧なり。而して彼れ座上看るに、天童子を、其の玉女及び天子の二人は歡喜して共に見るある見る。而して彼の天童子の生れ已るや、復更に天の童女を生ずるを見る。彼の天童子は、童女を見已るや即欲心を生じ、欲心を生じ已るや即歡喜を得、歡喜を得已るや即體に遍うして心意歡喜するを得、心意歡喜し已るや、彼れは爾の時に於て即身色を變じて色は猶蓮華の如くに、其の

【三七】 諸趣の身を受くるか。異譯本に「地獄等の中に生るるか」とあり。
【三八】 凡べて衆生あつて、乃至、六欲の諸天を見。異譯本に「衆生の臨終の時に、福業にて養する者は、本の視を棄てて天の妙視を得、天の妙視を以て六欲天を見」とあり。
【三九】 瓊亂林。異譯本には「雜花園」とあり。

つて、婆蹉那婆（Pāṭalikā）と名け、復毒藥（Vatāhūḍḍi）あつて、訶羅訶羅（Kālakā）と名けて、將に芥子（Kāśī）の如くならんとするを、難陀（Nanda）・波難陀（Pāṇḍita）等に與ふるに、食せば即ち速疾に命終るが如し。大藥、汝が意に於て云何。龍毒と藥毒と、何づれの毒力は大なるか。龍毒大なりと爲すか。藥毒大なりと爲すか。大藥を報じて言はく、世尊、我が意の見る如くんば、其の難陀・波難陀の毒は、多く其の婆蹉那婆の毒は少し。と。佛は大藥に告ぐらく。是くの如し。是くの如くに、大身の、九千の象の力に敵ふありと雖も妨無し。其の識は小にして定れる色無く、見る可からずと雖も、但此の識は業の縁に因つて大身を成就するなり。大藥、譬へば、尼拘陀の子（Nigāḍā）の、其の形は小なりと雖も、能く大樹を成就し、枝條長廣にして數百千の地を覆蓋するに妨無き如きに、大藥、汝が意に於て云何。其の子の形及び樹の身の二種は、何づれは是れ大なるか。大藥は佛に報じて言はく、世尊、小孔を以て虚空に比するが如し。と。佛は復大藥に告ぐらく。而して彼の樹は、子の内に在いて見る可からず、亦子を離れて樹を生ぜざるなり。大藥、彼の微細の子に、廣大なる樹を有つことは是くの如きが如く、是くの如くに、色無くして識は大なる色身を成就し、識に因る故に色身を現すれば、識を離れて色身をば見る可からず。と。

爾の時に、大藥は、復佛に白して言はく、世尊、其の識の牢固なること猶金剛の如くなるに、云何にして羸弱の身を成就するか。と。佛は大藥に告ぐらく。譬へば、人あつて、貧窮にして自ら濟ふ能はざるに、忽然として如意寶珠に値遇し、彼の人は珠を得て執り已るや、造す所意の如くに即稱ふを得て、樓觀・池臺・城門・坑塹を成じ、周く高門を匝し、園林の華果・枝葉、鬚鬚として其の上を彌く覆ひ、及び餘の資財の諸物は皆悉く心の如くに自然に化作するに、大藥、彼等の諸事は悉く、皆羸弱にして速疾に破壊・離散する法なり。然る後に、彼の人手に執れる如意珠を忽然として失落するや、彼等の樂事は即滅して現れざる如し。大藥、彼の如意珠の、千の金剛もて破るとも終まで壞る可からずして、此の功能あれば、意の念する所に隨ひ皆悉く果を剋くすることは是くの如きが如く、

頭龍（Mūḍhaka）なり。須彌を繞りて、龍の頰を食ふ。と云はる。

【三】 德叉迦（Takkāḍḍa）。「多舌」と譯し、龍王の王と云はる。

【四】 婆蹉那婆（Pāṭalikā）。宋元宮三本の夾註には「階に牛糞子の齊と言ふ」とあり。

【五】 訶羅訶羅（Kālakā）。同三本の夾註には「階に速殺と言ふ」とあり。

【六】 其の難陀。乃至。毒は少し。

異譯本も同様。「龍の口の毒は大にして、小毒の藥毒は、甚だ微少と爲す」とあれど、斯くては、本文の前後の意義と一致せず。即ち其の反對に言はざるを得ず。而して、兩譯本の誤れる一致に由つて、梵原本に於て、既に過ちたるを推すべし。

【七】 識に因る故に、乃至、見る可からず。

異譯本に「識の中に身を求むるに、身は得可からざれど、若し識を除かば、身は則ち有る無し」とあり。

餓鬼・畜生の中に顯現するなり。大藥、此の諸の業の此の識に隨ふことを、大藥、應に須く是くの如くに知り是くの如くに見るべし。と。

大藥は、復佛に白して言はく。世尊、此の識は、云何にして諸根を成就して大身を受け、云何にして諸根を捨つるか。と。佛は大藥に告ぐらく。譬へば、獵師の深き山林に入り、手に強弓を執り、即ち毒藥を取つて其の箭鏃に塗り以て大象を射るに、而ち彼の毒滴は少しく皮に入つて血に至ると雖も、毒氣は移り行いて遍く身中に満ち、一切の諸根の境界に至り、根をして閉塞せしめ、諸節を屈折し、血をして色を變じて諸の身分に遍うし、遂に即ち身を捨てしめて、其の毒還つて木入る所の處に至つて、自然に外に出づるが如し。大藥、其の毒藥の一滴の極甚に微小にして、其の象身の極めて大なるが、汝が意に於て云何。大藥は佛に報じて言はく。世尊、計るに、毒藥は極めて微小にして其の象身は須彌山の如くなれども、藥毒移り行く所以に體に遍きなり。と。佛は大藥に告ぐらく。是くの如くに、此の神識も身を捨つる時に、諸根を捨て諸界を捨つる次第も亦復是くの如し、是くの如し。と。

大藥は、復佛に白して言はく。世尊、云何にして是くの如き廣大の身を受けて、曾て難を畏れざるか。と。佛は大藥に告ぐらく。譬へば、須彌山の高さ八萬四千由旬なるに、而ち彼の山に二つの龍王、一を難陀と名け、二を優波難陀と名くるあつて、之れを遶ること三匝して彼の山を住持し、而して彼の龍王の喘息の氣にて、海水は飲むに堪へず、彼の龍王の息を出入する時に、彼の須彌山は即ち動き、彼の龍王の身の廣大にして多力なる如くに、彼の婆修吉・徳叉迦龍王も亦復然るが如きに、大藥、汝が意に於て云何。彼の龍王等の識は、欲ふに蚊子の識と一つの等なりや。不と以して、汝は別見する勿きや。大藥王子は佛に白して言はく。世尊、我が意の見る所の如くんば、彼の龍王及び蚊子の識は、一つの等にして異なる無きなり。と。佛は復大藥に告ぐらく。一つの毒あ

【一九】云何にして、乃至、曾て難を畏れざるか。

異譯本には「云何にして、微細の識は、大なる身を住持して、疲倦せざるか。」とあり。

【二〇】彼の龍王の、乃至、飲むに堪へず。

異譯本は「二龍の大に息して、須彌を搖振するや、内海中の水は、成く變じて毒を成し」とあり。「喘息」とは、大なる呼吸を謂ふ。

【二一】婆修吉（Vasudhaka）。「多頭」と譯し、謂はゆる「九

と二つの別體ある無きこと。是くの如きが如く、是くの如くに、此の身内には諸業有り、業に従つて身有れども、其の身は業の内在に在いて見る可からず、業は身の内在に在いて見る可からず。華の成熟して然る後に子を成ずるが如く、是くの如くに、身は成熟し已つて諸業は現るべし。種子は、何の地方にても、彼の地方を有たば即華を有ち、華を有たば然る後に子を有つこと。是くの如きが如く、是くの如くに、此の身の有らゆる生るゝ處に、彼の處に於て善及び惡の便即に現るゝ有るを見るなり。然れども、彼の諸業の根には色を有つこと無し。人は身に因つて影を有つに、而も彼の影には定無く色無く、還つて人に隨つて行けども、彼の影は人に倚り住せず、亦身を離れて影の現す可きも有らざるが如く、是くの如くに、此の身内に善惡の相を現じ、隨つて相ひ離れざることは、身の行く處に隨逐して行き、其の業處處に隨逐して、其の業は身を離れて有らず、亦身を離れて業の現することも有るべからざるなり。諸の藥の、若しは辛き若しは甜き若しは苦き等を、人飲服し已れば能く諸病を除き、既に其の身の諸惡を除けば、其の柔軟を成じ好顔色を現し、衆人の見る者は、形相にて、此の人身の甘藥に値へるを知るべし。然れども、彼の諸藥の等の味及び力には色を有つこと無く、其の味力の色は現るゝを得可からずして、唯人身に在る形色の端正の現る可きのみなること。是くの如きが如く、是くの如くに、此の善業にも色無きも、而も人身に至つて、美き飲食の故、身に好服を著くる故、其の人の諸根具足せる故を以て快樂を受け、復金銀・珍寶を以て此の身を莊嚴して富貴の形勢を有つは、此れは皆是れ善業の境界なり。其の勢を失して福業を有つ無きは、貧窮困苦して資財に遠離し、恒常に乏少にして他の物を規り求め、飲食鹿漚に行・住・坐・臥悉く皆下劣にして、好福の報の、身體を養育する無く、生れて醜陋なる所は、此れは皆是れ不善業の境界なり。猶明鏡の、其の明の故を以て、面形の妍醜は分明に顯現すれども、而も彼の鏡内の影には、色を有つ無きこと。是くの如きが如く、是くの如くに、善惡の力の故に由つて、此の識は人中若しくは地獄。

【二〇】彼の諸業の根には色を有つこと無し。
異譯本には「彼の業には、形無く、亦麁相も無し。」とあり。

能く微細の小身を成就して、彼の識は蚊子及び象と一種にして異らざるに妨無きなり。大藥、譬へば、小なる燈燭の光の、或は壁に在り或は室に在つて、能く大なる黒闇の分を滅するが如くに、此の識も亦復是くの如くに復微小なりと雖も、能く大小の形色を成すものにして、皆業に因つて受くるが故なり。と。

爾の時に、大藥は、復佛に白して言はく。世尊、彼の業には何の色あり、何の體あり、幾種の因を應當に觀すべきか。と。佛は大藥に報じて言はく。諸業の境界は是れ微妙にして、快樂を受けて天の飲食を受得することは、譬へば、二人あつて、同じく共に遊行して曠野に至るに、然るに彼の二人の一人は、忽ち涼冷なる清水に値ひて之れを飲むを得たれども、一人は飢渴して命終せる如きは、而ち彼の水の自ら彼の人の口に入る能はざるは、亦此の一人に於て飲を與へざる者無けれども、但因縁を以ての故に、一人は水の涼冷なるに値ひて之れを飲み、一人は値はざりしものなることは是くの如し。是くの如くに、此の善・不善の法も亦復是くの如く、黒月・白月の如しと善・不善を應に須く當に見るべし。譬へば、生果の熟し已るや、變じて別色を成すが如きは、然く彼の色は火力の多き故を以て、其れをして成熟せしむることは是くの如きなり。是くの如くに、此の身は福力の故を以て、大富長者の家に生じて、多饒なる財寶にて現に快樂を受け、天宮に在つて天の快樂を受くことを顯現するも、然る後に、天の自在なる勢を失するや、即無福の勢を顯現するなり。猶種子を地上に於て種うるに、樹を生じて以後、其の種子は樹上に於て現ぜず、亦枝より枝にも移らず、亦樹の内に在いても顯現せず、亦人あつて、手にて彼の子を執つて樹上に置くことも無く、亦根よりも移されども、彼の種子の現る可きことは是くの如きが如く、是くの如くに、此の諸の業の若しは善若しは惡の、身内に倚り住すれども而も顯現せざるなり。種子に從つて然る後に華あり、華に從つて然る後に子あるに、其の華は種子の内に在らず、其の子も亦華の内に在らざれども、子と華

【五】彼の業には、乃至、應當に觀すべきか。

異譯本には「諸の業の相性は、彼れ復云何。何の因縁を以てして、顯現するを得るか。」とあり。

【六】諸業の境界は、乃至、受得することは。

異譯本に「語の天宮に生れて、天の妙膳を食ひ、安寧快樂なるは、斯れ皆業果の致す所なり。」とあり。

【七】猶種子を、乃至、樹上に於て現ぜず。等。

異譯本には「譬へば、種子の如きは、之れを地に種うるに、果は樹首に現ず。然れども、其の種子は、等」とあり。

即ち天宮——欲天の中に於て種種なる五欲の樂事を受くる——を見、是くの如きを見已つて便ち欲心を生じ、因つて即是くの如くに念智を起すなり。我れ今應に須く彼の處に至るべきのみ。と。彼れ是くの如き欲心を生じ已つて、染著の念を發して心に有相を取り、復其れを見る故に身を尸陀林内に棄て在き、彼れ是くの如きを見已つて便ち是の念を作すなり。是の我れは天の識なり。此に善根を造り已りたれば、我れ當に天上に向はんを欲す。と。

爾の時に、大藥王子は、復佛に白して言はく。世尊、彼の識は既に是くの如くに故尸に著せば、云何ぞ即ち故尸に入らざるか。と。佛は大藥王子に告げて言はく。大藥、譬へば、人あつて鬚髮を剃除し、既に鬚髮の地に落つるを見て、是くの如き念——我が此の鬚髮は好黒にして香潔なれば、願はくば、我れ此の髮をば、還して頭上に著くること舊の如くならんことを。——を作すが如し。大藥、汝が意に於て云何。彼の頭髮は、還つて更に頭に著き能ふや。不と以すや。と。大藥は言はく。不なり、世尊。佛言はく。大藥、是くの如し。是くの如くに、彼の人の神識は其の身を捨て已るに、還つて中に入つて更に依り住せんと欲する者は、是の處無きなり。と。

爾の時に、大藥王子は、復佛に白して言はく。世尊、此の識は既に是れ微細にして、正色の廣大無邊なるある無きに、云何ぞ來つて、大白象の身の復金剛を破り能ふ身に就き能ふか。既に千象の力無きに、云何ぞ、人生れて即ち千象の力を持ち能ふか。と。佛は大藥に告ぐらく。譬へば、風界の色無く見る可からずして山谷の間に住るに、而も彼の風は彼の山谷より出で已るや、須彌等の高次の山を摧折崩倒し、其れをして破裂せしめ能ふが如し。大藥、汝が意に於て云何。彼の風界は何の色を有ち、彼の山は復何の色なるか。大藥は佛に白して言はく。世尊、彼の風は柔弱にして復色身無しと。當に是くの如くに見るべし。佛は復大藥に告げて言はく。大藥、彼の風界の軟弱にして、色體無きが如くに、彼の識も亦復然く軟弱にして復色身無し。然れども、其れは能く大身を成就し、

の戒取は、是れ有漏にて之れを種植し、識に於て善惡の業を執つて、識は淨淨ならざれば、煩惱の因の故にて、熱惱の苦を受くるなり。是れを戒取の因を見るゝと爲す。とあり。

【三】此の識は法界を持する故に。乃至染著の念を發して心に有相を取り。

異譯本には「識は、法界の與めて微妙の觀を持ち、肉眼の依る所に非ざるをば以て見因と爲し、此の微妙の觀と福境と合して、天宮に於ける欲樂・嬉戲を見、見已つて歡喜して、識は便ち繫著して、是くの如き念を作さく。我れ當に彼に往くべしと。染愛戀念をば而ち有の因と爲し」とあり。

【四】尸陀林(Shitram)寒林と譯し、一般に死屍を棄つる處を謂ふ。

【五】是の我れは天の識なり。乃至。天上に向はんを欲す。異譯本には「此の屍は、是れ我が大善知識なり。其れに由つて、諸の善業を積集せる故にて、我れをして、今は天の報を獲しむ」とあり。而して、此の説述は、後文と對照して、其の可なるを見る。

離る。而ち彼の二人は、欲樂を受くる時に心に歡喜を生ずれども、既に欲を受け已るや、復の欲想無くして還つて各相ひ離れ、或は厭離を生ずるなり。欲想は是くの如し。是くの如くに、此の識は身の攀緣に因つて歡喜の心を生じて、受想を増長すれども、猶人身の、女色を見るに因つて即欲想を生じて、各各身を著くれども、欲を受け訖じるや、還つて復厭離して去るが如く、此の識も亦然く、既に身を受け已り、還つて復捨て去つて厭離の想を生ずるなり。復次に、父母の欲事に因つて來り、中陰にて受けたる身にて、業もて、攀緣せる此の識は、申より欲因に入るあつて身を成就すれど、而も彼の業には色無く、其の男子と女人との因にも亦色無きも、但因をば受けて攀緣する故に欲の想を生じて、即ち色を有つ、是の故を受の欲想と言ふなり。色にて受くる欲想の故を、名けて欲を受くと爲す。

復次に、大藥、持戒の攀緣に因る故にて、後の果報を受くる此の事云何。我れ汝が爲めに説かん。持戒と言ふは、身に殺生を斷ち、他の物を盜まず、邪姪を行はず、妄言せず。飲酒鬪亂せず、謹慎して放逸ならざるなり。是に攀緣を爲して後世の須陀洹果、斯陀含果を受けんと欲するに、即ち後有の或は天身或は人身を受け、而して彼れの有てる善業の或は有漏或は無漏にて、諸陰等を成就して彼の處を潤し、識にて受持せる或は善或は不善の諸業にて識等を成就し、諸の欲事を受け已つて還つて自ら厭離するなり。是の故を、此れを持戒に因る故にて後の果報を受くと名くるなり。と。

爾の時に、大藥王子は、佛に白して言はく。世尊、此の識は、云何にして天身を受け、復云何にして地獄の身を受くるか。と。佛は大藥王子菩薩に告げて言はく。大藥、汝今諦に聽け、我れ當に汝が爲めに此の事を解説すべし。大藥、此の識は、法界を以て持する故に、生れて天と作らんと心に見るなり。而ち彼の天の見るは、肉眼に在らずして、彼の見體の見る所は即れ受くる因なり。故に見を受因と名くるなり。而ち此の人の見る所の天見は、即れ福をば攀緣せる善の成就にして、

- 【七】(然れども)。括弧内の語は、當に有るべき者なるに由り、加へたり。
- 【八】彼の種子種多るなり。乃至。識は彼の世に至るなり。異譯本には「又種子の、將來の果たる味・色・香・觸を持ちて、遷り植つて生ずるが如く、識も此の身を業つるや、善惡業の受想・作意を持ちて、來生の報を受くることも、亦復是くの如し。とあり。
- 【九】還つて復捨て去つて、等。異譯本の此れに當る者には「報盡くるや分離して、業に隨つて報を受くるなり。」とあり。
- 【一〇】父母の欲事に因つて、乃至。受の欲想と言ふなり。異譯本には「父母の因緣に、中陰は之れに對し、業力を以て識を生じて、身果を獲るも、愛情及び業には、俱に形質無し。欲の色相の因にて欲を生ずる。是れを欲の因と爲す。」とあり。
- 【一一】即ち後有の或は天身。乃至。彼の果報を受くと名くるなり。
- 異譯本には「是の因を以ての故に、勝有、謂はく、人天等の身を受くるを獲るは、斯れは皆是れ皆有漏の善にして、無漏の善に非ず。無漏の善には、陰熟の果無ければなり。今此

故に、常に臭穢・不淨の處を樂み、心既に愛樂すれば、臭穢の物を得て便ち歡喜を生ずるが如く、是くの如くに、此の識も惡の果報を得るや、不淨なる意を生じ、或は貧賤の家に生れ、或は下劣の家に生れ、或は餓鬼に生れて、恒に糞穢の物を食ひて心に歡喜を生ずること然く、此の識は是くの如くに惡の果報を受くるなり。彼の勝天の神靈に色形無しと雖も、但最勝・最妙の果報を受くるが如く、是くの如くに、此の識も色を有つこと無しと雖も、但最勝・最妙の果報を受くるは、業に隨つて身を受くればなり。彼の色無き 富多那鬼の、人身に倚著して恒に樂んで諸の糞穢を食ふが如く、是くの如くに、此の識も、不淨業の中に在つて、恒に下賤の處を樂むなり。跋陀羅波梨、汝當に知るべし、此の不淨の識の是くの如くなることを。跋陀羅波梨、彼の鬼形の、人の身中に在つて而も色を有つ無きが如くに、此の識も善・不善の果報を受くることも、彼の鬼神の如くなり、汝應當に是くの如くに知見すべし。と。

爾の時に、大藥王子は、佛に白して言はく。世尊、凡べて欲を受くること云何。と。佛は大藥に答へて言はく。當に人あつて各各和合する故に、欲の想を生ずることを見るべし。譬へば、木を以て火を鑽るに、人身の力に因り然る後に火を出すが如く、欲を受んと欲するは、男子の意に於て觸を感ずるに因り、後に欲事を生ずるなり。譬へば、華に因つて子を成ずるに、然も彼の華の内には、初は子ある無きも、華ある故に、然る後に子を結んで見る可きが如く、是くの如くに、此の身生じ已つて然る後に識は見る可きも、而も此の身内には、亦識の見る可き無きなり。(然れども)識を以ての故に、身内に骨・髓・肉・血等不淨の物あるなり。彼の種子の種を已るや華を生じ、華に因つて色・香・味等を受くるも、既に果を成じ已るや還つて滅するが如く、是くの如くに、此の識も身を成じ已るや亦復還つて滅し、但善惡の受心・想意を取つて識は彼の世に至るなり。彼れ男女は、和合して歡喜の心を生じ、彼の交會して相ひ持つに因つて不淨を出し、不淨を出て已るや還つて各相ひ

は、しとあり。

【五】 富多那 (Pitana) 鬼。臭餓鬼と譯し、餓鬼中の最勝なる者と云はる。

【六】 凡べて欲を受くること云何。異譯本には「云何に欲の因る見るか」とあり。

の舌には色あれども、彼の味には色無く、此の身内に有つ所の骨・髓・肉・血は是れ色を有てども、受くる所の者には是れ色無きが如く、是れを名けて識の罪福を受くる者と爲す。と。

爾の時に、跋陀羅波梨は、佛足を頂禮して佛に白して言はく。世尊、罪福を受くる者は是れ誰ぞ。と。佛は跋陀羅波梨に告ぐらく。汝諦に聽き、諦に受けよ。我に汝が爲めに説かん。實を見たる者あらば、彼れは此の識を見る。而も此の識は菴婆羅果を掌中に見るべきが如くなるを得べからず。此の識は眼の道に住せざれば、亦眼を以ても見るを得能ふに非ず。彼の恒河沙の數の如來の、此の識を見るが如くに、我れも亦然く色をば見らるゝこと無し。唯愚癡の輩は知らず見ざる故に、我れ爲めに説けども、但識の名のみを有つて、以て見る可からず。跋陀羅波梨、此の識の罪福を受くる如きを、我れ汝が爲めに説かん。汝當に諦に聽くべし。譬へば、人あつて、陰鬼、或は羊頭鬼、或は乾闥婆鬼、或は天神に著かるゝ如きは、汝が意に於て云何。彼の人の身内に、彼の諸鬼、或は陰鬼等の見る可きありや、不と以すや。跋陀羅波梨は言はく。世尊、彼の鬼は人の身中の或は内或は外に在りとも、實に見る可からず。但彼の諸鬼は、人の身内に在るのみにて、亦色を有つ無ければなり。跋陀羅波梨、彼の天神の最勝なるものゝ人の身中に在る如きは、最妙の香華・塗香・末香并に諸の華鬘及び飲食を取り、皆最上なる殊勝を取るなり。是くの如くに、此の身も最勝なる業を取る時に、識を以ての故に受けて、或は王位を取つて治化自在に、或は富饒なる大長者家を取り或は天の果報を受け、是くの如くに此の識は福を受く。此の最勝なる天神の靈の、人の身内に在つて、最勝なる祭祀を受くるが如くに、或は王位を受け、或は富饒を受けて、彼の人身を潤して歡喜せしむることは是くの如くに、此の識の福の果報を受くることも、亦復是くの如し。跋陀羅波梨、彼の不淨なる毘舍闍鬼神の、人の身中に在つて不淨なる諸物の臭穢を受け、或は圍屏の内に在つて諸の祭祀を受け、祭祀を得已つて即ち歡喜を生ずるや、而ち彼の人は、不淨なる鬼神の力を被る

至、是れを名けて識と爲す。
異譯本に「身の諸大諸入諸陰、彼れは皆是れ識なり。有らゆる色體たる眼・耳・鼻・舌及び色・聲・香・味・觸等、並に無色體たる苦樂を受くる心も皆亦是れ識なり」とあり。
【九】是れを名けて等。
異譯本には「福・非福の果を知識することも、亦復是くの如し」とあり。此の説述は、然るべし。
【一〇】實を見たる者あらば、彼れは此の識を見る。異譯本に「未だ諦を見ずして、而も識を見能ふこと非ず」とあり。
【一一】菴婆羅果。
異譯本に「阿摩勒果」とあり。「阿末羅果」に同じ。第三卷、同名の解、參照。
【一二】陰鬼。
或は謂はゆる、中陰中の亡靈を指す者なるか。
【一三】羊頭鬼。
或は頭鬼(Umunda)即ち頭痛者を謂ふ者なるか。因みに、異譯本の此れに當る者には、「塞建陀等の鬼神」とあり。塞建陀(Satata)は「瘦」「作嘔」などと譯し、小兒の病を主る鬼神とせられたり。
【一四】是くの如くに、乃至、受けて。
異譯本には「是くの如くに、此の識の、福に資せらるる者

尊に、甚深なる義の處を解釋したまはんことを勸請すべし。と。

爾の時に、大藥王子菩薩摩訶薩は、世尊を瞻仰して、世尊の喜悅微笑して清淨なること、猶初秋の蓮華の始めて開ける如くなるを見るや、見已つて歡喜し、爾の時に、大藥王子菩薩は佛に白して言はく。世尊、我れ渴仰する故に正法を聞かんことを樂ふも、慮るに、世尊の具に我が與に顯に法要を説きたまはずして、我が疑を決せざらんことを恐る。又、世尊の、久しからずして當に涅槃を取りたまふべきことを恐る。又諸の衆生の、善惡の業報を了知する能はずして、恒に生死を受けて、煩惱をば捨離し能はざることを恐る。と。佛は大藥に告げて言はく。大藥、我れ往昔に於て、故に此の偈の爲めに、大山崖より身を投じて布施し、復無量無邊の難行・苦行して、百千億等の種種なる諸事を行したれば大藥、汝の有つ所の疑をば、但當に我れに問ふべく、以て難しと爲す莫かれ。我れ汝が意に隨つて、當に分別して説くべし。と。爾の時に、大藥は復佛に白して言はく。世尊、此の識は何の色ぞ。佛は大藥に告げて言はく。大藥、此の識は、幻師の火の如く、人の水内の影の如く、風輪の定無く定れる色ある無きが如く、衆生の眼にて見る虚空の如く、似たる愛の如し。大藥は復問はく。其の愛とは云何。佛言はく。猶人の射るに、眼根あるを以て箭の去るを見たる時の如きなり。人の明淨の鏡を執るに、其の鏡内に於て己が面形を見れども、若し鏡を除き已らば、形は便ち見えざるが如く、此の識も亦爾く、人の身より移る其の識界には、唯罪福を見るのみ。譬へば、生盲の人の、日天の出づる時、中の時、後の時を見ず、夜も亦月天の出づる時、闇の時を見ずして、並に皆見ざるが如く、此の神識も亦復是くの如くに、其の身内に於て見るを得可からず。大藥、此の身内の愛著及び取及び想を、智者は但識あるのみ。有らゆる、此の身に和合集聚せる諸界・諸入・諸陰等、有らゆる色の者たる眼・耳・鼻・舌及び色等、諸べて或は苦或は樂を受くる意等にて諸色を有つ所の者、是れを名けて識と爲す。大藥、人の、舌を以て味の或は苦或は辛を知るに、而ち彼の

【四】此の識は何の色ぞ。

異譯本に「識の相は云何。」とあり。

【五】似たる愛の如し。

異譯本には「渴愛の像の如し。」とあり。

【六】猶人の射るに、乃至、見たる時の如きなり。

異譯本の此れに當る者に、人の可意の色に對して、眼根の之れに趣くが如きを、名けて

「渴愛と爲す。」とあり。

【七】此の識も亦爾く、乃至、唯罪福を見るのみ。

異譯本には「識の遷運すること、亦復是くの如くに、善

惡の業形と識の色像とは、皆見る可からず。」とあり。

【八】有らゆる此の身に、乃

卷の第一百一十

賢護長者會 第三十九の二

爾の時に、衆中に一の王子の菩薩摩訶薩あつて、名けて大藥と爲ししが、座よりして起ち、衣服を整理し、合掌して佛に向つて、佛に白して言はく。世尊、彼の神識は、此の身より移つるに、當に何の色を有つべきか。と。佛は彼の大藥菩薩を讚じて言はく。善い哉、善い哉、大藥の是くの如きことや。是くの如き汝の問ふ所の此の義は、其の義甚深にして、唯諸の如來にして乃ち知り能ふのみ。然り、此の識は、如來を除いて、更に人にして知り能ふ者ある無し。と。爾の時に、跋陀羅波梨は、佛に白して言はく。世尊、希有なり。此の大藥王子の、能く甚深の事——最も微に最に細に、最も深に最も密なる——を問ふことや。と。佛は跋陀羅波梨に報じて言はく。是くの如きは、跋陀羅波梨、此の大藥王子は、往昔に於て、已に曾て毘婆尸世尊を供養して、善根を種ゑたる故なり。跋陀羅波梨、此の大藥王子は、昔五百世に、曾て外道と作りしが、爾の時に當つて、嘗て此の識の義を問ひたり。然れども此の大藥王子は、爾の時に當つて、此の識の中に於ても亦了知し能はずして、此の識は何より來り何に去るか此の義をば了せざりき。我れ今應當に、其れに、此の義を決了することを爲さすべし。と。爾の時に、跋陀羅波梨長者子は、大藥王子を讚じて言はく。大藥、善い哉、善い哉。仁者は、智慧廣大にして邊際ある無ければ、乃ち能く世尊に甚深の義を問へり。我れ今大藥に勸請す。願はくば、世尊に此の義——一切の難に入つて、智者の巧に解する深意、——を問はれんことを。此の蘇摩浮瑛をして、少事——而ち先に佛に問へるに——娛樂せしむる勿かれ。所以は何ぞ。其の故は、數數惱亂して、不善を世尊に問ひたてまつればなり。但佛世尊の世に出でたまふこと甚だ難く、世間に此くの如き法會の聚集は復難し。是の故に、汝今應當に世

本賢護長者會、第三十九の二。
「臺本」は、「麗本」に據つて、「本會」の「第二」として、異譯本「大乘顯識經」卷の下の全文語及び思想の内容を對照するに、「本會」と異譯本とは、大に異り。由つて、「本會」は、「明本」に據ることと爲せり。
【一】彼の神識は、乃至、何の色を有つべきか。
異譯本は「識は身を捨てて、何なる色像を作すか。」とあり。
【二】毘婆尸(Vipashy)。「種見」一勝觀などと譯す。過去七佛の第一佛にして、釋尊の、過去世に菩薩たりし時、第三阿僧祇劫の滿時に此の佛に遭ひ、初めて、百大劫、種種の福を修し、又其の佛を讚ぜる精進力に由つて、九劫を超越して成佛せりと云はる。故に此の佛の出生は、釋尊より九十一大劫前なるなり。
【三】此の蘇摩浮瑛をして、乃至、世尊に問ひたてまつればなり。
異譯本の此れに當る者には「事實の問は、其の義淺狹なること、彌瓊兒の如く、心は外境に遊んで、内を知らず。」とあり。

或は微妙なる鞞摩^{けんま}を見、或は微妙なる園林、——其の園林の内には、種種の樹木の、新に生ぜざるあつて、蒼鬱^{そういつ}として愛すべく、或は妙池あり。——を見、或は種種に諸事を成就せるを見るなり。彼れは是等の如き諸相を見て心に歡喜を生じ歡喜を生じ、已つて六〇安隱如法に命終を取り、彼の人の神識は猶馬^{なま}に乗るが如くなり。と、應當に是くの如くに觀すべし。馬に乗ると言ふは、譬へば、人あつて、戰場の内^{なま}に在るに、身に好牢^{こうらう}の鎧甲^{がいこう}を著け、善く馬を持ち轡^{たる}を控へて、速疾に驅騎するが如きなり。是くの如くに、此の識は、纏^{せん}縁^{えん}せる鎧甲の善果報を著け、速疾に出入の息^{いき}に乗り、諸界・諸人等を捨て、捨て、已つて、後に諸梵天、乃至、阿迦膩吒^{あかじだ}等の天の微妙の處に生ずることを取るなり。

顔容變惡に、憊として血氣無く、色死して土白なるは、羸の、識を資けて、諸の善の報を獲るが如し。」とあり。

【五八】 法界を取り、受を取り已り。

異譯本には只「法界の受を取りり」とあり。

【五九】 來世に於て正念を得、天の念を得て。

異譯本には「中陰を受け、天の妙念を得て」とあり。

【六〇】 安隱如法に。

異譯本には「安樂無苦に」とあり。

の時の身業既に盡くるを受くるや、諸大を捨つること、譬へば乳を以て水に和し、火を以て煎煮するに、熱氣を得るを以て、乳と水と各別るる如きに、而も彼の水の有つ所の脂膩味、彼れには色ある無きこと、眞月はくの如く。是くの如くに、死人の身は別れ、諸大も亦別るるあり、神識も亦別るるあるも、彼の識は諸大を取り及び法界を取り、已にして法界の薫を以て、善及び悪を念取して來世に至るなり。譬へば、摩訶迦良那蘇の蘇は、種種の藥味を取つて力めて煎するに、其の内に、或は辛きあり或は苦きあり或は酢きあり或は鹹きあり或は淡きあり或は甜きあるを、諸味を取り已つて體に入れて色香等の味を成熟するに、取り已らば、彼の蘇の體は捨て移つて、藥味を成するが如し。此の識も亦復是くの如くに、身を捨て已るに、善を取り及び惡を取り及び法界を取つて、此の識は移り去るなり。彼の蘇味の體と言ふは即以て身に喩ふ。彼の諸藥の和合の聚集と言ふは、彼の諸根に喩ふ。諸藥の色・香・味・觸と言ふは、識の移り去るに喩ふ。故に識を言ふなり。諸味の將に去らんとするは、即是れ識の移るなりと。應當に是くの如くに觀すべし。人の色の別異と言ふ者は、或は善色或は惡色なるが、或は體に入れる大眞藥の蘇の執消するは、即是れ善業に喩ふと、當に是くの如くに觀すべし。若しくは彼の大眞蘇をば食し已るに因つて、痰黄色を出すと言ふは、即是れを不善の業に喩ふと、當に是くの如くに觀すべし。大摩訶迦良那蘇の實の、是くの如きが如くに、此の識を應當に觀すべし。摩訶迦良蘇の、諸藥の色味を取り、取り已るや大眞藥蘇を成すれども、而も彼の蘇には手足及び諸根ある無く、但彼の味を取ること、是くの如く、是くの如くに、此の識は、身を捨て已り及び諸界を捨てて、唯法界を取り、受を取り已り、善及び惡を取つて去くなり。眞月、彼の人は身を捨て已るや、來世に於て正念を得、天の念を得て、或は六欲の諸天を見、或は十六の大地獄を見、或は身憍諸根の具足せるを見て、彼れは爾の時に於て、是くの如くに知ることを作すなり。此れは是れ我が身なり。と。彼の人は、命終の時に、彼れの念に種種の相を見るなり。

【五】 聚り已れる、乃至、取色と名く。
 異譯本には「凡て有らゆる色は、皆四大にて生ず。是れを色因と爲す」とあり。
 【五〇】 此の身の正住の時の、乃至、諸大を捨つること。
 異譯本には「衆生は業に隨ひ報を得、識の流相續し、身を持ちて絶えざるも、期異り報終るや、識は身を棄捨し、業に隨つて遷り受くることは」とあり。
 【五五】 水。
 臺本には「乳」とあれど、明本の「水」の方然るべきに由り、改めたり。
 【五六】 摩訶迦良那(Mahakant) 臺本の夾註に「隋に大眞藥蘇と言ふ。」とあり。異譯本には「大吉善蘇」とあり。因みに「蘇」は「蘇」の誤用なるべし。
 【五七】 彼の蘇味の體と言ふは、乃至。即是れを不善の業に喩ふと。當に是くの如くに觀すべし。
 異譯本には「蘇の實は、身の如く、諸藥の味・觸の、蘇を資成するは、業の識を資くるが如く、大吉善を服して、悅澤充盛に、光色美好に、安隱にして患無きは、善の識を資けて、諸の樂の報を獲るが如く、蘇を服すること法に違ひて、

の業に隨つて行くを知る。是等の如くに知る故に、名けて識と爲す。復次に、此の身は、一切の諸業を造れるを知る故に、名けて識と爲す。猶風界の、或る時は冷え或る時は熱し、或る時は臭に隨つて氣あり、或る時は香に因つて氣ある故に風爲るを知るが如く、是くの如くは是の識の體には色ある無きも、取の因を以ての色なる故に、或は欲取の因の故に、或は見取の因の故に、或は戒を持ち報を求むる取の因の故に、乃至有受をば受くる因の故にて、身體を受くる色をば成就する故に、言うて識と爲すなり。と。

爾の時に、彼の衆中に一の長者あつて、名けて蘇摩浮塔と曰へるが、座よりして起ち、十の指掌を合して佛に白して言はく。世尊、其の色を云何に須く觀すべく、取を云何に須く觀すべく、欲取を云何に須く觀すべく、見取を云何に須く觀すべく、戒取を云何に須く觀すべきか。と。佛は眞月に告ぐらく。凡べて智ある者は、汝の間ふ所を知らんと欲す。當に是くの如くに知るべし。眞月、若しは善の色あり若しは非善の色あるを、肉團の時より須く觀すべし。筋・血脈及び氣脈・衝・縫・腦・大腸・小腸・肺・心・肝・腎・脾・膽の諸藏、脂・髓・血・痰・涕・唾の不淨・臭穢の非常に畏るべき、毛髮・髭鬚・皮膚の叢覆・聚集と、衆り已れる有らゆる諸の色は、皆四大に爲つて成ぜられ、四大は色を取つて以て身を成ずる故に取色と名く。蘇摩浮塔、彼の身は、父母の和合を以て成ずるに、牢觀の者、彼れは即是れ地大なり。有らゆる穢軟の者、彼れを名けて水大と爲す。有らゆる燥もて成熟する者、彼れを名けて火大と爲す。有らゆる搖動・屈伸する者、彼れを名けて風大と爲す。有らゆる知る者、彼れを聲・香・味・觸等の界と名く。念知する所の者なる故に、名けて識と爲すなり。と。

爾の時に、蘇摩浮塔は、復佛に白して言はく。世尊、云何にして、死する時に彼の色の界を捨て、云何にして、彼の識は彼の身より出で、云何にして、彼の身をば捨て已るに、是くの如くに知るかと——此れは是れ我が身なり。——を作すか。と。佛は眞月に報じて言はく。眞月、此の身の正住

【四六】是くの如くに、乃至、言うて識と爲すなり。

異譯本には單に「是くの如くに、識には形質無く、視聽の取る所に非ざるも、因縁を以ての故に、識の相は具に顯れ、識に由つて身を持ち、身に苦樂を知り、等」とあり。

【四七】欲取。色・聲等の五塵の境に貪欲・取著するを謂ふ。

【四八】見取。五蘊の法に於て、我見・邊見等を妄計し取著するを謂ふ。

【四九】戒を持ち報を求むる取。外道の非理の戒に取著し、修行するを謂ふ。因みに、以上の三種に、我見・我慢等の我説に取著する「我語取」を加へて、之れを「四取」と稱す。但し「本經の解」は必ずしも此れと一致せず。

【五〇】有受。有受は「有執受」と同義なるべし。即ち「自身に屬する四大」の如きは、我が心識に依つて執持・取受せらるゝに由つて名く。蘇摩浮塔。臺本の夾註に「附に眞月と言ふ。」とあり。

【五一】其の色を云何に須く觀すべく、取を云何に須く觀すべく。異譯本には「云何に色因を見るか。」とあり。

【五二】戒取。前述の「迷を持ち報を求むる取」なり。

れ彼の時に於て是くの如き諸業を作り、我れ過去に是くの如き身體なりき。と知るべけんや。但識を因として受くるのみ。譬へば、蠶虫の、自身の口を以て絲縷を出し、繭を作つて其の身を纏繞して、中に於て即ち死することは是くの如きが如く、是くの如くに、此の識も、自ら身を生じ已つて還つて自ら業を造ること、猶蠶虫の、絲を出し纏繞して、即ち自ら滅するが如くに、身は移つて彼に向ふなり。譬へば、蓮華の、水中に生じて即ち妙なる色・香・味あるに、而も彼の華の内に水の正體として見るを得べき無きも、彼の華滅し已つて有らゆる地方に子を中心に置くや、即色、香の住する所あることは是くの如きが如く、是くの如くに、此の識の移る所の處に、諸の根・境・界は共に移つる者無く、受も亦移る無くして、其の移る所の者は唯法界あるのみ。譬へば、如意珠の、至る所の處に隨ひ、之れを須つある物をば、即、念に隨つて得るが如く、猶日天の光明の、自ら日に隨逐し行き、日の至る所の處に、光も亦彼に至ることは是くの如きか如く、是くの如くに、此の神識の移り至る所の處に、受・想・法の界等は相ひ隨つて離れざるなり。

復次に、此の識は、身を捨て已つて一切の諸有を取ることは、取を聚集し已つて肉無く骨無けれども、來つて後身に就き、彼にて色身の有及び諸の觸等の事を取るに、天眼にて觀見せる善惡を以て受取すること、譬へば、小棗・千年の棗・菴摩羅果・迦毘陀等の果の成就する時に、各一味の、或は苦或は酢或は甘或は鹹等の諸の六味あり。而して、彼の諸果の熟し已るや、在る所の地方に、其の味内に在る子は、彼の處に移つて各自に味を有つことは是くの如きが如く、是くの如くに、此の識子の移る所の處に、彼れ自ら觸を有つて隨ひ、福及び無福も、念に及ぶ有るを以て、自ら隨つて移るなり。

復次に、此の識の、身を捨つる時には、是くの如き念を作すなり。我れ今此の身を捨つるが如し。と。故に此の念識を名けて識と爲す。善業・不善業を知り、此の業我れに隨つて行くを知り、我れ此

【四三】此の識は、乃至、受取すること。

異譯本に「識は、身を棄捨しながら、一切の性を攝るは、色因を身―骨肉無き身―と爲して、諸根有る故に、受の妙念を有つて、善惡を受取すること」とあり。

【四四】迦毘陀。「俱舍陀羅」と同じかるべし。第五卷、同名の解、參照。

【四五】是くの如くに、乃至、自ら隨つて移るなり。

異譯本に「是くの如くに、識の種も、其の遷る所に隨ひ、受念の善惡は、咸悉く之れに隨ふなり」とあり。

なることを當に知るべし。身滅し已れば、識形ある無きが如きも、彼の明鏡に面形を現し已り、又、清水の中に更に面形を見するが如く、此くの如くに、識は此の身形を捨て已るや、彼に至つて復餘の諸陰を受くるなり。譬へば、尼拘陀樹の子或は優曇婆羅等の諸樹の子は、復細小なりと雖も而も能く極大の樹枝を生じ、大樹枝を生じ已れば、彼の形を捨てて復更に餘の處に生ずるが如く、而して彼の子界の、樹形を捨て已るや、時に隨つて乾枯して復の本味無く、其の本味滅し已るや、彼の樹は即ち乾枯・萎悴するなり。是くの如くに、此の識は、微細にして定れる色形無く、諸身を生じ已つて、更に復捨てて、更に前と別の體を成就するなり。猶大麥・小麥・烏麻の小粒・大粒等の、子の、地方とする所に隨ひ、彼の地方に散處するや、即ち便に根を著くことは是くの如きが如く、是くの如くに、此の識は有らゆる衆生の身内に、彼處に移るや、即ち取あり受あつて住し、或は福を受け或は罪を受け、此の世より移つて彼の世に至るなり。猶蜜蜂の、其の味を華内に覓め、其の味香を取るや、而ち其の華を捨てて、更に別の華に移り、或は惡華を捨てて好華に移り至り、華上に坐し已つて彼の華に樂著し、彼の香味を取ることは是くの如きが如く、是くの如くに、此の神識は、多くの善根を以て、或は天身を受け、天身を受け已つて惡果を以ての故に、復地獄・畜生・餓鬼等の身を受け、受け已つて復別の身を受くるにて、此の神識の云何を須く觀すべし。譬へば、鬱金香の子、或は紅藍華の子、或は分陀利華の子の如き、其の體は、本より分色に隨つて定らずして、彼の子の内には芽を見る可からず、亦定れる色も無きも、而も彼の子の地に入つて水の潤澤を得るや、即ち便に芽を生じ、芽を有ち已るや然る後に華を生ずるなり。而して彼の色は、子を以て見るを得べからず、亦子を離れても芽及び色あらざること是くの如し。是くの如くに、此の識の、此の身を捨て已つて彼の身を成ぜんと欲するに、彼の肉團には未だ諸根あらず。何に況んや、諸入をや。既に諸根及び入無し。豈、天眼・天耳及び香・味・觸の體あつて、知る有ることを得とすべけんや。理として、豈、我

に、受・想・行及び諸の心所有ち、父母を緣と爲し、因緣和合して身の現するを有つとあり。

ことを爲すことは是くの如し。是くの如くに、此の識は、身體に於て倚り住する處無く、眼に在らず、耳に在らず、鼻に在らず、乃至、亦意にも在らざるなり。猶子より芽を生ずるに、生ずる所の子、芽は、取受を以て本と爲して彼の處をば取る故に、即便に胎を受け、胎を受け已れば即、觸を有ちて、芽を生じ已れば時に依つて即枝・葉・華あり、枝・葉・華あれば即子あることは是くの如きが如く、是くの如くに、此の識は先づ身體を成就し、身體成就し已れば、其の神識は住す可き處無きも、亦神識を離れて身を有せざるなり。彼の種子の、樹より熟し已つて然る後に子有つて、果を生じて子を有つに非ざること、是くの如きが如く、是くの如くに、此の身の命終の時には、身體の中より此の神識は顯現して、受を以て和合し、愛を以て相ひ縛し、念を以て相ひ執して、善の攀緣と和合し、或は非善の攀緣と和合し、風界を以て相ひ持し、智熏にて、業緣たる父母の和合を逐ひ、然る後に此の識は顯現するなり。跋陀羅波梨、譬へば、善く成就せる好明鏡にて面形を見るが如きは、其の面無くして面形を見るを得るに非ず、亦明鏡無くして面形ある可きに非ずして、明鏡及び面の兩縁和合して、面形あるを得るが如く、而も其の面形に色ある無く、亦受も無く、亦識ある無く、但身の轉動に隨つて、其の鏡内の形も亦轉動し、身の言語・移徙・轉動・伸縮・俯仰の如くに、作す所の者に隨つて、其の鏡内の面形も、亦是くの如き事相の顯現を作すなり。跋陀羅波梨、汝が意に於て云何。其の面形は何事に因る故にて、形を鏡中に現すか。跋陀羅波梨は佛に白して言はく。世尊、人の身體に因る故にて、彼の鏡中には是くの如きを現すにて、其の身の色に隨ひ、面も亦是くの如き色を有ち、彼の形も亦是の色の如くに、或は諸根の具足或は不具足を、彼の面形は、明鏡中に於て亦復是くの如くに、其の形相を現すなり。と。跋陀羅波梨、彼の明鏡の面形を成就するは、身あるを以ての故に、彼の明鏡中に形を現すが如く、是くの如くに、此の身は、識を因として受あり、取あり、識あり、諸行の思念あつて、身體を成就するなり。彼の明鏡と言ふは、彼の緣たる父母の和合

を攝持することも、亦復是くの如くに、攝持する所に隨ひ、善・不善を成じて、遷化して報を受くるなり。とあり。
 【三九】此の神識は、乃至、成就するが如し。
 異譯本には「此の識は、積無く、業無く、亦生長も無きこと、譬へば、芽の生ずるに、種の變ぜずして生ずるに非ず、然れども、芽の生ずる時には、種は則ち變毀するが如し。」とあり。
 【四〇】彼の子の、乃至、是くの如し。
 異譯本に「此れに當る者には「樹頭」に止るか。賢護は佛に白して言はく。不なり、世尊。芽は止る所無し。と。是くの如し、賢護。」とあり。此の文は、前後と照應して、合理的なり。
 【四一】受を以て和合し。乃至、此の識は顯現するなり。
 異譯本には「識に因つて受あり、受に因つて愛あり、愛に繋著して便ち念を生じ、識は念を攝取して、善惡の業と風大と並に父母の因縁の和合を知念するに隨ひ、識は便ち之れに託するなり。」とあり。
 【四二】識を因として。乃至、當に知るべし。
 異譯本に「識の因に由るが故

か。汝の意に於て云何。彼の生盲の人は、睡眠に、夢みる所を云何にして見るを得たるか。跋陀羅波梨は佛に白して言はく。善い哉、世尊。惟願はくば、我が爲めに、此の事を云何にして見るを得るかを解説したまはんことを。と。佛は跋陀羅波梨に告ぐらく。跋陀羅波梨、汝當に知るべし。内眼を以て、智力に因つて、彼の生盲の人は夢中に在つて見たるにて、實眼にて見たるに非ざるなり。跋陀羅波梨、夢中の人の、色を見ること少時正念なりしが如くに、其の死人の、内色を見ることも亦復是くの如きなり。

復次に、跋陀羅波梨、更に汝が爲めに、其の死人の神識は種子の如くに移ることを解かん。譬へば、種子を地上に散ずるに、四大を受取することは其の如きが如くに、此の識は、正念を受くることを已に受け、受け已つて善及び不善を受け、已にして身を捨て已つて然る後に移るなり。跋陀羅波梨は復而尊に問はく。云何にして、此の識は善及び不善の識を受け、然る後に移つるか。と。佛は跋陀羅波梨に告ぐらく。譬へば、蓮華色摩尼寶の、色影に隨つて變ずること、若し黒の影形を置かば即黒に變じ、若し白の中に置かば即變じて白と爲り、其の影形の在る所の處に隨つて、彼の摩尼寶は即其の色を、安置する所の處に同じうし、其の地分の色に隨つて即隨變するが如し。是くの如くに、此の識も善及び惡を受けて、即移り去ることも亦復是くの如きなり。と。

爾の時に、跋陀羅波梨は、復佛に問うて言はく。世尊、此の神識は何の體にて現ずるか。と。佛は跋陀羅波梨に告ぐらく。此の神識は、形無く、聚る處無く、積貯の處無く、畢竟して不可得なれば、言ふを得可からず。此の神識の、生有り滅有り惱有ることも、亦言ふ可からず。跋陀羅波梨、譬へば、子より芽を生ずるに、亦爛れたる子の、芽を生ずることを得べからず。亦壞れたる子の芽を生ずる非ずして、彼の好子は乃ち芽を生ずること、成就するが如し。跋陀羅波梨が意に於て云何。彼の子の芽は何の處に住するか。或は莖に在り、或は葉に在り、或は根に在るか。彼の子の樹枝に在る

に隨ひ、生ずる所便ち異なるなり。』とあり。

【三〇】 此の識も一法界を有つて。異譯本には「一の識法界」とあり。

【三一】 復次に跋陀羅波梨。乃至。色の界と爲すなり。異譯本には「賢識、識には、手足無く、支節、言語無けれども、法界の中にて、念力強大なるに由り、衆生の死する時に、識は此の身を棄つるや、識は念力の與めに、來生の種と爲り、即ち識を離れて法界を得ず、法界を離れて亦識をも得ずして、識は、風大の與めに、微妙なる念の界・受の界・法の界と和合して遷るなり。』とあり。

【三二】 内眼を以て、乃至、非ざるなり。異譯本に「夢中に見るの者を、内眼の所と名け、是れ慧の分別にして、肉眼にて見たるに非ず。』とあり。

【三三】 此の識は、乃至、然る後に移るなり。異譯本に「識は、念に爲つて、善・不善等の四法の攝持を受け、身を棄てて遷化することも、亦復是くの如し。』とあり。

【三四】 是くの如くに、乃至、亦復是くの如きなり。異譯本に「善・不善の法の識

熟すれども、而も彼の^{三三}地界は是れ一にして、水・火・風大も亦然ること、是くの如し。是くの如くに、

此の識も、一法界を有つて、一切の諸有の中にて身を成就し、然る後に、或は黒或は白或は赤等の色、或は本性の剛強、或は本性の調柔を生ずるなり。

復次に、跋陀羅波梨、命終の時に、此の神識は身を捨て已つて、後身の種子の因を成じて、手足等の體を作さんと欲するに、而も當時未だ身分あらざるなり。而ち彼れは地分を捨てて法界分を取り、而して彼の諸界は念と共に和合するなり。然るは、彼の念は、信敬力の故を以て、法界と念と和合して識を取れば、識を離れて法界をば見る可からず、亦法界を離れたる識は因を有たざるなり。然うして、彼の識は風に助けられて、自餘の法界をば、皆微妙なる謂はゆる念の界・受の界・法の界・色の界と爲すなり。と。

爾の時に、跋陀羅は佛に白して言はく、世尊、彼の識は、云何にして色を有つか。と。佛は跏趺羅波梨に告ぐらく、凡そ二種の色あり。一には内、二には外なり。内色と言ふは何ぞ。謂はゆる眼なり。外とは是れ色なり。若くにして眼識有る、彼れを内色と名く。耳は内にして、聲は外なり。鼻は内にして、香は外なり。舌は内にして、味は外なり。身は内にして、觸は外なり。意は内にして、法は外なり。跋陀羅波梨、譬へば、生盲の人の、夜睡眠中に、種種の天の妙なる諸色の最勝最上なるを夢見して、彼の人見已つて最勝の喜樂を生じたれど、睡眠覺め已るや便即に見えず。天の曉くるに至るに及び、他に向つて説かく。諸人輩、我が昨夜の眠中の夢を聴けや。我れ最妙最上の端正なる婦女の形を見たり。復、丈夫の百千數の衆を見たり。復、園林を見たるが、此の中、彼處にて我れ皆、或は人あつて、身體柔軟に、手足端嚴に、臂・膊・膝・長く、身體纖細に、腰・膀の正等なるを夢見したり。とて、彼の生盲の、夢中に見る所の諸人の身體の形容及び莊嚴の瓔珞を、皆悉く具に説くが如し。爾の時に、彼の生盲の人の、是くの如くに説く所の形體の生ずるを識は見ざる

穢惡の所を纏ば、其の風便ち臭く」とあり。

〔二〕彼の風は、乃至、即多きに至るが如く。

異譯本には「若し風は香・臭に俱に至らば、風は則ち香・臭を並に兼ぬれども、盛なる者は先づ顯れ」とあり。

〔三〕是くの如くに、乃至、見るが如し。

異譯本に「福德の人の、命盡きて識の遷るにも、亦復是くの如くに、安隱にして覺せざること、夢の遷化するが如くにして、恐懼する所無し」とあり。

〔四〕云何ぞ識の別るを知る

異譯本には「識は何(イツコ)より入るか」とあり。

〔五〕妙香の移徙。此の句には、括弧内の語を有すべく、異譯本にも「麝香の香の油の内に入るが如く」とあり。由つて附加したり。

〔六〕復次に、乃至、是くの如くに見るべし。

異譯本には「識の遷運することとは、日の光を流すが如く、摩尼の照すが如く、木の火を生ずるが如く」とあり。

〔七〕彼の地界は、乃至、是くの如し。

異譯本には「同一の大地に等しく四大を表つて、各其の種

識は、此の身體を捨つるや、即彼の罪福を受くること、譬へば、風界の、山首より出でて、二三九 瞻婆の林に至るや、觸に因る故にて微妙の香を受け、臭穢の處に至り、或は尸臭の處に至るとも、二三九 跋陀羅波梨、彼の風は多くの處に至るに隨つて、多くの氣を取つて彼れ即多きに至るが如く、猶彼の風界の、彼の香氣を將ゐて過ぐれども、而も彼の風界に色ある無く、及び彼の香にも亦色無きが如く是くの如し。是くの如くに、此の識は身を捨て已つて、善惡を將ゐて移つることも、是くの如くに次第して去るなり。彼の識の移らんと欲するや、猶睡夢の人の、一切の諸物の有るを知れども、身は本の處を移らざること、是くの如きが如く、是くの如くに福を有つて亦生ずるにも、識を移さんと欲する時には、猶夢に請事を見るが如し。然うして、此の識は咽喉より出でず、亦諸孔よりも出でずして、其の識の出づる時にも、亦復諸孔を求めざるなり。と。

爾の時に、跋陀羅波梨は、佛足を頂禮して、佛に白して言はく。世尊、云何なれば、或は鷄卵・鵝卵の、二三九 鞞内こくわいに在つて、其の鞞に孔無きに、云何ぞ識の別るを知る。而して鞞の破れざるに、其の識は云何にして移り徙るか。と。佛は跋陀羅波梨に告ぐらく。譬へば、瞻婆等の諸の華を以て、烏麻に薰じて善く熟し、然る後に壓して油を取つて、此れは是れ瞻婆等の華の油と言ふが如し。彼の香は、烏麻を破壊せずして香氣の移徙する如きは、彼の香は烏麻に著せざれども、麻及び華の共に和合する故に因つて香氣相ひ著くと、然る後に香氣は麻子の邊より孔を求めずして然る後に入ると、彼の二つに因る故に、其の香の移徙することは是くの如し。是くの如くに、此の識は耶鞞を破壊せずして、妙香の移徙する如く、此の識の轉移することも、亦復是くの如し。と汝當に是くの如くに知るべし。三三 復次に、此の識の移徙せざること、猶日火・摩尼寶等の光明の如しと、應に是くの如くに見るべし。復次に、此の識の移徙すること、猶種子の至る所の地方に子を種うるが如し。而して彼の種子を地内に擲ち置くに、芽・莖・葉・華・果・子の、或は白或は赤或は黒を生じ、各自に味力を有つて成

異譯本には「六根・六境・五煩惱陰に、識は遇く之れに止り、其れに染せられざれども、此れに由つて、識の事用を顯すなり。」とあり。

【三】 此の種種の身は識に由つて作す所なり。

異譯本に「識は能く身を生ずること、工の機關を作るが如し。」とあり。

【三】 此の識は、乃至、憶念の意の成就すること。

異譯本には「識には形質無けれども、普く法界を持ちて、智力具足したれば、乃ち能く宿命の事を知るに至ること。」とあり。

【四】 是くの如くに此の識は、乃至、染められざるなり。

異譯本には「識も亦是くの如くに、猶狗として不淨の類を食ふ諸の惡趣の身に處ると雖も、而も彼の染汚する所と爲らざるなり。」とあり。

【五】 善惡の行ふ所に隨ふとは。

異譯本に「善惡の業に隨ひ、遷つて餘の報を受くることとは。」とあり。

【六】 瞻婆の林。

異譯本に「鬱鞠衆香の林」とあり。

【七】 臭穢の處に至り、乃至、至るとも。

異譯本には「鬱鞠・死屍・臭惡。

は手足の正等以び然らざるとを知らされども、彼の胎に在る者は、或は熱食を以て觸るる故に、覺し已つて即動くこと是くの如きなり。是くの如くに、此の識の來去・申縮は、眼の開閉と共に、昔造りし所の諸業の故にて、有らゆる境界に即ち笑ひ語言する等、諸有の生れながらに得たる所の色身の内に識を住すれども、然も諸の衆生は、我が身内に住する所の識に、何の體あるかを知らざるなり。跋陀羅波梨、此の識は善く成就せる故に、一切の諸有に流至すれども、然も諸有に染著せざるなり。跋陀羅波梨、諸有及び、識の六根の境界たる是の六界處には、四大處あり、五陰處あれども、跋陀羅波梨是くの如き識等の境界をば汝當に知るべし。跋陀羅波梨、譬へば、木人の一機關を以て、一切の諸事を作す——走り跳ねて種種の諸伎を現す。——が如きことを。跋陀羅波梨、汝が意に於て云何、彼の木人は何の因縁を有つて是くの如き事を作すか。跋陀羅波梨は佛に白して言はく。世尊、如來の問ひたまふ所は我が境界に非ず。我れに智の答へ能ふもの無ければなり。と。佛は復言はく。跋陀羅波梨、彼れは巧なる智慧力に由つて種種の事を作せるにて、而も彼の巧なる業には色ある無くして、智を以て生ずる所なること是くの如し。是くの如くに、此の身人は識の巧に由る故に生ぜるにて、此の種種の身は識に由つて作す所なり。此の識は、身を造せる故に生ずれども、而も此の識は盡く可きある無きこと、猶法界に修薰せるとき故に、往昔の諸身に、憶念の意の成就すること、猶日光の如くに、此の識は須ふるに應じて、當に見るべきなり。譬へば、日光の、穢惡臭惡なる諸の尸を照すとも、亦其れに爲つて染められずして、而も其の臭穢は日光の生ずる所を離れざること是くの如きが如く、是くの如くに、此の識は、初め生じて、糞穢の所に在つて諸の不淨を食はんと欲し、又、猪・狗等の腹内に在つて胎を受くとも、然も彼の識は臭穢に爲つて染められざるなり。

復次に、跋陀羅波梨、此の識は身を捨て已るや、善惡の行ふ所に隨ふとは、此の義何ぞや。此の

是くの如し。
 異譯本には「衆生の死する時には、識は業に爲つて纏にれつつ、報盡くるや命終ること、猶、滅盡に入る如き、阿羅漢の滅盡定に入る如き、其の阿羅漢は、身の滅するに從つて轉ずるなり。一の如きなり」とあり。
 【七】我れは是れ。乃至。有つ觸なり。
 異譯本には「我れは某乙なりとすると、生平に作る所の事業とは、臨終に成く現じて、憶念明了に、身と心との二受は、逼ること切なり」とあり。
 【八】然り、子有れば。乃至。智及び子の故に名けて識と爲す。
 異譯本には「識を名けて種と爲し、能く炎類・雜報の身芽を生じ、知覺・想念も同じく識に包まる」とあり。
 【九】彼の間に。乃至。見る可からざるなり。
 異譯本には「間には形質無く、常、無常の能く其の處を得るもの非ず」とあり。
 【一〇】此の識は、乃至、染著せざるなり。
 異譯本に「識の自性は遍く諸の處に入れども、諸の處の染汚する所と爲らず」とあり。
 【一一】諸有及び、乃至、汝當に知るべし。

ことを。是くの如くに次第して、此の識にも當に知るべし、皆亦色無きことを。と當應に是くの如くに観すべし。而して、汝の間へる、此の識は云何に此の身を捨てて彼の世に至るか。とは跋陀羅波梨、夫れ命終の時に、此の識は業を以て持せる故に、此の業は命の盡くる時に及ぶこと、譬へば、寂滅三昧に入る人の、識身の體あるに、此の識身の體の滅し已つて、然る後に寂滅の内に入つて住するが如くに、是くの如し。是くの如くに、此の識は死人の邊に於て、身及び諸大を捨て、捨て已るや唯念力のみ有つて、是くの如くに、我れは是れ彼の某甲なりと知るなり。凡べて、人の身を捨つる時には、二種の觸・正念あり。何等を二と爲すか。一には、正念なり。二には觸なり。而して彼の人命終の時に、身に於て觸を有つて二受す。一には、身の受なり。二には、念の受なり。死の後念に有つ觸なり。

復次に、汝の間ふ識とは、何の義ぞ。然り、子有れば能く芽を生じ、智従りして識の即名けて念と爲すを生ず。是の故に、智及び子の故に名けて識と爲す。然る後に、還觸を受けて苦・樂をば智知するが故に、名けて識と爲す。後に復善惡を受けても、亦能く善惡の境界を知る故に、名けて識と爲す。猶子より芽を生じて、其の身を成就するが如くなる故に、名けて識と爲すなり。

復次に、跋陀羅波梨、汝の又問ひて言へる、此の識は云何にして身を捨て已つて移つて彼に向ふかとは、譬へば、鏡中に身形を照現するが如く、又泥團の模内に身形を鑄出するが如く、又復日の出づる時に能く諸の闇を滅すれども、其の日没し已るや、還つて復闇を生ずるが如し。然り而して、彼の闇には常の定ある無く、常の定無き處非ず。然く彼の闇には、色無く受無くして見る可からざるなり。是くの如くに、此の識の身に生じ已るや、闇の離れたる明の如くに身に生ずれども、亦然く、其の人、此の識を見ざるなり。然く識を此の身に受くることは、譬へば婦人の受胎せるが如し。然く此の我が懷胎は、男爲るか女爲るか、或は黒か或は白か、或は諸根の具以び不具と、或

が如く、又、風身の勝力に従つて風は色に觸るを得、風力に因つて香は遠きに至るを得るが如く、是くの如くに、識に従つて受有り、受に従つて覺有り、覺に従つて法有り、法に能く善と不善とを了知するなり。」とあり。

【二】二つの身勝。識と根との強勝を謂ふ者なるべし。

【三】譬へば畫師の。乃至。是くの如し。

異譯本に「又、畫工の、新に壁板を理むるに、諸べて畫く所の處の法に如くに端潔なるも、意に隨つて圖繪を爲せる所の衆像なれば、則ち工の識智には、俱に形色無くして、而も種種の奇容・異狀を爲すなり。」とあり。

【四】是くの如くにして、乃至。實には色ある無く、等。異譯本には「是くの如くに、識智は形無くして六色を生ずるなり。謂はく、眼に因つて色を見れども、眼識には形無く、等」とあり。

【五】意に當つて有つ諸大には。乃至。當應に是くの如くに觀すべし。

異譯本の此れに當る者には「法人の諸境に皆悉く形無く、識に形色無きこと、亦復是くの如し。」とあり。

【六】夫れ命終の時に、乃至、

勝處たる、或は黒或は白をも見るを得べからざること、跋陀羅波梨是くの如し。是くの如くに、此の神識の界も亦復是くの如し。色を以て見るを得べからず、亦色の體にも至らずして、但入る所の行を以て體と作して色を現すものにして、此の識界も亦復然ることを當に須く知るべし。云何にして、彼の處に於て此の識界は、受・觸と名くる法界を得るか。復、云何にして、此の識界は、此の身を捨て已つて後に、愛・觸等を受くるか。譬へば、風界の能く香氣を移す故の如きは、此の華香は風の吹き來たるに従ふを知る。而も其の風界は、實には華香を持ちて來らず、亦風無くして華香の能く來たるに非ずして、彼の香には色無く、彼の風にも亦色無く、其の彼の香を聞く根も亦色無きこと、跋陀羅波梨是くの如し。是くの如くに、彼の死人の識の移らんと欲するや、觸・受等及び諸界を持ちて已に彼の世を有せるが、父母の和合の故を以て、然る後に識有るを知る可く、其の識有る故に、即ち受有り觸和合有つて成ずるを知ること、猶勝人の識の強勝なる故に香の根有り、香根の勝れたる故に勝れたる香有るが如し。復、二つの身勝有る故に、二つの事勝の見可き有り。二つの事勝とは、謂はゆる色に觸るる其の風多き故に、華香も亦多きこと是くの如きなり。是くの如くに、識の大なる故を以て受も亦大なり。受の大なる故に識も亦大なり。識の大なる故に諸界も亦大なり。然うして、此の善・此の惡を知るなり。譬へば、畫師の既に善く板を成就せる如きは、欲の出で向ふに隨つて作れるにて、即ち能く善き意解を爲せる故に、隨つて色をば能く作れるなり。然れば、彼の畫師に若し色無くんば、色を現す可からざること是くの如し。是くの如くにして、此の識は六色身を成就す。謂はゆる、眼に因つて色を見て識智を有つ所にて、眼に因つて見る色には、實には色ある無く、耳に因つて聞く聲には亦色無く、鼻に因つて聞く香には亦色無く、舌に因つて知る味には亦色無く、身に因つて覺する觸には彼の觸にも亦色無く、意に因つて有つ諸大には彼れにも亦色無く、知る有る所の者にも亦色無ければ、當に知るべし、彼の境界の内にも亦色ある無き

【七】 色を以て、乃至、亦色の體にも至らずして。

【八】 但入る所の行を以て、乃至、須く知るべし。

【九】 云何にして、彼の處に於て、乃至、受くるか。

【一〇】 愛・觸等。此の「愛」は「受」の誤寫なるべし。

【一一】 是くの如くに、彼の死人の識の移らんとするや、乃至、此の善・此の惡を知るなり。

【一二】 衆生の身死して、識は受・覺の法界を持ち、以て他生に至り、父母の縁に因つて識は之れに託するや、受・覺の法界は、皆識に隨ふこと

も、亦復是くの如し。花の勝力に従つて鼻に嗅ぐ有り、嗅ぐ勝力に従つて香の境を得る

【一三】 衆生の此れに當る者には「因縁の故を以て、種種なる功用的殊異を顯示すなり。當に知るべし、受・覺の法界も亦復是くの如くに、色無く形無きも、因縁の故を以て、功用を顯發することを」とあり

【一四】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【一五】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【一六】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【一七】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【一八】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【一九】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【二〇】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【二一】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【二二】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

【二三】 衆生の此れに當る者には「衆生の、此に死して、受・覺の法界・識界は、皆身を捨離し、識は受・覺の法界を運んで、餘の身を受くる者は」とあり

したまへば我れ今心中に疑あるを問ひたてまつらんと欲す。惟願はくば、世尊、我が爲めに解説して、疑を斷つを得しめたまはんことを。と。爾の時に、佛は跋陀羅波梨長者子に告げて言はく。跋陀羅波梨、汝心に疑あつて斷除せんと欲せば、今正に是れ時なり。汝の間ふ所を恣にせよ。我れ當に汝が爲めに分別して解説すべし。と。爾の時に、跋陀羅波梨長者は即佛に白して言はく。世尊、諸の衆生に等しく神識あるを知られども、而も是の神識は猶寶篋の未だ之れを開かざる時の如くに、其の中は是れ何等の寶なるかを知らず。世尊、此の神識の相貌は云何。復、何の因縁にて、名けて神識と爲すか。世尊、云何なれば、人死して手・脚・眼無きに、命終の時に、諸根の滅せんと欲し諸大の分れんと欲するに、而も此の神識は、云何にして此の身中よりして移り出づることを得るか。世尊、而して此の神識は、復云何なる色、復云何なる體にして、身中より云何に離るるを得、此の識は云何に此の身を捨てて別の身を成就し、云何に此の諸大・諸入を捨てて後の世に向ひ、云何に各々の別の身を成就するか。世尊、人は今既に死せるに、未來の諸入は云何にして隨順するか。云何にして此の世にて作れる諸の善根にて、未來世に於て果報を受くるか。既に是れ此の世の諸入・陰等にて造作せる善根なるに、其の人は、云何なれば、更に復後の別の諸陰の中に於て其の果報を受くるか。云何にして此の識は彼の處にて身を得、云何にして諸入の體は彼の處に隨ふか。と。爾の時に世尊は長者を讚じて言はく。善哉、善哉、跋陀羅波梨の是くの如きことや。是くの如くに汝が問ふ所の如きを、汝今至心に諦に聽き、諦に受けよ。我れ當に汝が爲めに神識の去來・移滅を説くべし。跋陀羅波梨、猶風大の如きは、形色無くして覩見すべからずと雖も、然れども因縁に由つて形色を現すなり。形色を現すとは、其の義云何。譬へば、風の諸の樹木を吹き動して發起し、山壁・水崖に觸れ已つて聲を作す如きは、冷熱の因縁の生ずる所なるを以て是の故に能く受く。然れども、彼の風の體には手・足・目等を見るを得べからず。亦復是くの如くに、諸色の上に於て増益せる

【五】神識。

異譯本には單に「識」とあり。即ち謂はゆる「魂」を指し、唯識家の「第八阿賴耶識」に當る。

【六】諸色の上に於て増益せる勝處たる。色に於て一つの特殊の色たる」の義なるべし。

阿難、爾の時に、此の跋陀羅波梨長者は、彼の佛の邊に於て聲聞僧と作つて、名けて法髻と爲ししが、持戒は完からずして多く毀缺あり。而も善く諸佛の教法を宣説して、未だ聞かざるものを開示したり。是の大法師は、一ら修多羅藏を聞總持し、亦律藏をも持ちて、諸の衆生の爲めに常に法要を説けるに、博識辯聰に義味甚深に、音聲朗徹にして、人をして樂んで聞かしたれば、法を聽くを得たる者は、心に歡喜を生じて、永く即ち復と諸の惡道に墮せざりき。阿難、彼れは是くの如き法施の因縁を以て、九十一劫恒に天人に生れて端正・富貴なりき。阿難、是の長者子の得る所の妙車の因縁の報をば、我れ更に汝が爲めに次第に解説せん。阿難、是の跋陀羅波梨長者は、彼の樂光佛の世に於て法師と作りし時に、諸の梵行持戒の比丘の羸瘦・頓乏し力弱くして堪ふる無きを見るや、凡べて須ふる所あれば、悉く皆布施せり。復鞋襪・靴履等の物を造り、歡喜して施與せり。此の功德に藉つて、今妙車の如意の果報を感じたるなり。復次に、阿難、往昔に佛あつて、迦葉多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひしが、爾の時に、彼の佛は長者に告げて言はく。未來世に於て佛あつて、名けて釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひ、彼の佛世尊は當に汝に記を授くべし。と。阿難、此の跋陀羅波梨長者に、我れ須く之れに教へて、其れをして解を生ぜしむべし。と。爾の時に、阿難は重ねて佛に白して言はく。希有なり、世尊。此の長者子の是くの如くに富饒にして、多く財産を畜へながら、而も性柔和にして貢高を生ぜず、五欲に在ても其の心を染めざるこゝとや。と。佛は阿難に告ぐらく。汝今當に知るべし、凡べて是れ智者は、資財及び諸の五欲を以て、心に憍傲を生ぜざることを。阿難、此の長者子は、妙法の因を以て、多く種種なる無盡の福報を受くるものなり。と。

爾の時に、跋陀羅波梨長者は佛の許可を蒙りたれば、疑ふ所を問はんと欲し、即便に一心に、佛の前に在つて長跪合掌して、佛に白して言はく。大慈世尊は一切の衆生を攝受せんと、衆生を哀愍

【四】 聞總持。即ち聞陀羅尼にして、又法陀羅尼とも曰ひ、四種陀羅尼の一なり。教法を開きて、忘れず執持するを謂ふ。

千萬の衆は、勝げて計るべからず。又彼の諸の城の周匝四邊の園圃の雜樹數百千種は、華果繁茂し、枝葉扶疎し、蜂衆く競ひ來つて其の香味を採りてあり。又彼の諸の城には、多く象馬及び諸の車乘あり。阿難、彼の諸の城内の有らゆる大富の長者・居士・商主及び商人は、恒常に一心に、皆共に跋陀羅波梨の有つ所の功德を稱歎し、十の指掌を合せて頂禮・讚誦すれば、況んや彼れの名聞をや。心に皆願樂して、覩見せんと欲するなり。又其の國主波斯匿王は、跋陀羅波梨長者の資財の富饒・形勢の福德を見て、自身の卑慙なること猶貧人の如しとして、其の財寶を羨めり。阿難、其に彼の眞月長者童子は、一食の時毎に即ち千種の珍味あつて、晨昏に左右に須ふる所自ら然り。又、五千の姪女あつて、圍遶して承奉し以て娛樂を爲せり。阿難、是の眞月長者童子の受くる所の快樂を天帝釋に比するに、已に勝ること千倍なるも、跋陀羅波梨の形貌・顔色・庫藏・資財の受樂の果報に匹ふれば、百倍すとも其の一にも及ばざるなり。復次に、阿難、是の跋陀羅波梨長者に一つの妙車あつて、名けて奪意と爲したるが、奇巧精麗なること人間に無き所なり。而ち此の車中には天の寶座あつて、其の車は純ら天の諸の雜寶を以て彫飾・間錯し、彼の諸の天寶の碼磧・金剛・眞珠・珍貝は、光明顯耀して虚空の星の莊嚴せるが如く、是くの如くにして、其の車の行く時に迅疾なること風の如し。阿難、跋陀羅波梨は、意に海内に至つて珍寶を採らんと欲する時に、彼の車中に坐するに、意の如くに即至つて快樂を受け、已にして若し家に還らんと欲せば、念に應じて便ち至るなり。と。

爾の時に、阿難は佛足を頂禮し、合掌恭敬して佛に白して言はく。希有なり、世尊。此の跋陀羅波梨長者は、往昔に何等の善根を造つて、今世に乃ち爾く斯の果報を受くるか。と。爾の時に、世尊は阿難に告げて言はく。長老阿難、汝知らんと欲せば應當に諦に聽くべし。此れの因縁は、皆過去に諸佛の邊に於て善根を種植したるに由り、今是くの如き勝上なる果報を得るなり。阿難、我れ念ふに、往昔に一如來あつて世に出現し、名けて樂光多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へり。

て、顧晒して行步するに、庠序として進み止まる。逶迤たる髪は紺青にして、細く潤ひて柔軟なるを、巧に結梳を爲したれば、能く人を驚かし惑はす。是等の如き諸の姝女の中に在つて、或は侍し或は憑るを、彼の諸の姝女は皆専ら夫に奉すれば、清淨の名聞は處處に流布せり。然れども、此の姝女の種姓は最大なれば、其れの家中に處りても亦好き名聞にして、並に大家に匹偶して嫡婦と爲るに堪へたり。是くの如き種種の等の莊嚴あり。長者賢護の家中は稱量す可からずに、宅は甚だ寬曠なり。又其の長者の食せんと欲する時には、則ち六萬の雜種の羹臠飯食の微妙なる香美あつて、猶天の厨の若くにして異なる無きなり。其の飯は悉く是れ粒糧にして、色・味充盈して八功德を具し、意に隨つて進み啖ふに、口に入るや便ち銷し、食し已るに、隨順して妨礙する所無く、果報の感は心に稱ふを致すこと自然なり。又復食し已つて、身體光鮮にして諸の臭穢無し。又其の長者の家内には、復六萬の鞏鞏あつて、各種珍奇に莊嚴せる眞珠を以て間錯して上下正等に、悉く妙衣あつて以て其の上を覆へり。又、香華を以て各各布散し、水は地に灑いて塵埃ある無く、清淨にして潤澤なり。又、其の家内には、種種なる最上の音聲あつて、手にて打ち、指にて彈き及びび氣に吹く、其の響微妙に鳴り、亮なること神に入り、歌曲も正しく得たること猶白鶴の聲のごとくにして、心に樂み聞かる。此くの如くに微妙に其の家を莊嚴せり。又其の家内には、園林・樹木扶疎として茂り盛んに、華卉に交紅紫を加へて鮮潔なり。其の樹林の間には、復諸鳥あつて、各各好音聲を出して、其の音の和雅なること猶天宮の如くなり。約するに、須彌山の衆寶もて合成せる龍窟と異なること無し。又、種種なる燈明を然せるが、其の燈の光明は、風無きに動搖して處處に洞徹り、朗夜赫奕として晝と殊らず。又復其の家の住する所の國界に六萬の城あり。其の城に各街巷あつて、相當せる樓櫓・却敵は悉く皆具足せり。彼の城には、處處に諸國の商人は往來・聚集して、種種の形狀・種種の語言もて、種種の珍奇なる衆の雜寶貨を共に相ひ貿易して、城市を嘖嘖する百

【三】却敵。障壁垣牆の類を指す。

足して説かんには、復切利の帝釋天王のと雖も猶及ぶこと能はず。況んや、復人間のをや。此の閻浮提にて能く及び得る者は、是の處ある無く、唯一人の長者の童子の蘇摩浮帝と名くるものを除くのみ。と。爾の時に、阿難は即佛に白して言はく。唯然く、世尊、此の跋陀羅波梨長者の家宅の中に、何の殊勝あつて、世尊は乃ち爾く稱譽したまふか。と。

爾の時に、佛は長老阿難に告ぐらく。汝當に至心にて諦に聽き諦に受くべし。是の長者の子の有つ所の資財・善根の廣大なるを、我れ今汝が爲めに次第に宣説せん。阿難、是の長者の子に、凡そ六萬の最大なる商主あつて、恒に其の後に隨へるが、彼の諸の商主は、各無量の奇異なる財寶・種種の富饒を有てり。其の跋陀羅波梨の家内には、恒常に六萬の上妙なる六合の牀榻を鋪き設け、雑色の被褥にて以て其の上を覆へり。復眞緋雜色の縵縵を以て用ひて倚枕と爲して、兩邊を持ち夾み、雑色の妙衣橋奢耶等は一一の處に皆四具を有てり。又火浣布及び麻紵と、諸の是の四方の土地に出す所の種種なる衣服・衆の雜異の物を皆悉く具足して、其の家を莊嚴せるが、彼の衣裳は悉く皆柔軟にして、猶手掌の如くに清淨に光り潤へり。其の宅の處處には、周遍して皆眞珠の瓔珞を懸け、以て校飾と爲せり。復、六萬の姝女あつて、端正なること殊絶に、身體は柔軟・細滑にして戲笑に閑ひ、善巧なる語言と姿態の艶美とは、人の意を承け接ぎて、曠恚にて之れを見るものも自然に歡喜し、憂感にて遇ふ者も便ち欣慰を生じ、調謙なる音辭もて心を開き目を悦ばす。並に皆孝順に瞻仰して己れの夫には婦禮を具足し、餘の男子に於ては欲心を遠離せり。或は復時あつて、自ら慚愧・羞恥を知り、合掌して眉を低め躬を曲げて恭敬して、専ら其の夫に向つて復と餘を顧みる無し。或は復時あつて、各各其の夫婿を別して憐愛する爲めの故に、心に妬嫉を生じて、争鬪して相ひ嫌ひ、眉を皺め、頰を感むること猶深き鈞の如くなるも、假に此れは戲を爲せるには、實には妬心無きなり。手・爪は纖く長く、指節は圓く腫しく、踝・腕は細く密にして、欲に醉へる身に似たる妖冶も

【二】蘇摩浮帝(omanabuti)。臺本の夾註に「隋に眞月と言ふ」とあり。
但し異譯本「大乘顯識經」(唐、日照(中印度)の地婆訶羅)譯)には「月實童眞」とあり。

然として傾かず動かざりき。爾の時に、世尊は跋陀羅波梨長者の内心は如くに渴仰を生ぜるを見已るや、如來は即ち更に身より妙光を放てり。而して彼の光明の出で照せる時に、其に跋陀羅波梨長者は即無畏を得たれば、地よりして起ち、佛を遶ること三匝し、復更に佛世尊の足を頂禮し、禮し已るや長く跪いて、佛に白して言はく。惟願はくば、世尊、我れを哀愍したまはんことを。惟願はくば、世尊、我れに教示したまはんことを。大聖世尊、我れ佛の邊に於て信心未だ久しからざれば、是の故にて、世尊、但當に我が爲めに、現事に隨逐して、一つの法門を説きたまふべし。我れ今渴仰して聞かんことを欲す。諸法をば、生死の中の煩惱に逼らるるを以て、多く疑惑を以て、恒に分別す。是の義を以ての故に、惟願はくば、世尊、慈悲もて憐愍して、我が爲めに法を説きて、我れをして疑を決せしめたまはんことを。大聖世尊、我れに正知無き故に迷惑を有つて、生・老・病・死の煩惱の海洋を出離することを知らず。唯大聖尊は是れ一切智にして、世間に希有に、猶如意珠のごとくに、能く一切衆生に諸藥を與へて成就せしめたまふ故に。又復世尊は猶父母の如くにして、一切衆生をして、等しく善き果報を得しめたまふ即是れ根本を爲したまへば。と。爾の時に、世尊は跋陀羅波梨長者に告げて、是くの如き言を作さく。跋陀羅波梨、若し疑あらば、今汝の間ふことを恚にせよ。我れ當に汝が爲めに分別して解説すべし。と。爾の時に、跋陀羅波梨長者は、佛の印可を蒙り、内に歡喜を懷き、心の疑を問はんと欲して即便に起立し、却いて一面に住りしが、一面に住り已るや、其の身の威光は圓滿に具足せり。

爾の時に、長老阿難比丘は、既に彼れを見已つて、即佛に白して言はく。希有なり、世尊。此の長者の子跋陀羅波梨は、身光・徳力諸王の威に勝れ、殊妙・絶群・端正にして愛すべく、世間の内に於て獨り變ある無きことや。と。爾の時に、世尊は阿難に告げて言はく。長老阿難、汝今此の跋陀羅波梨長者の、家中に有つ所の衆の樂事を聞かんと欲するか。乃至、其の快樂の果報を受くるを、具

卷の第一百九

隋 闍那崛多 漢譯

賢護長者會 第三十九の一

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は王舍大城に在し、迦蘭陀長者の竹園に住して、諸の比丘衆千二百五十人と俱なりき。作す所已に辨じて後有を受けざるものにして、長老舍利弗は衆の首爲り。時に諸の比丘は、世尊を圍遶して法を聽受せんと欲し、身心調順にして睡眠ある無かりき。爾の時に當つて、如來世尊の面貌容色は、猶初日と開き敷ける蓮華との如くに端嚴に顯耀し、微笑したまへること熾怡たり。爾の時に、彼の諸比丘等は、是くの如き念を作さく。今婆伽婆は、何等の法門を宣説したまはんと欲して、面相は乃ち、然く是くの如くに光顯するか。と。

彼の時に當り、一の最大なる巨富の商主長者の子に、跋陀羅波梨と名くるありしが、其の一千の眷屬の圍遶せると與に、威力大地を震動するに似たらんと欲し、安祥に徐歩して世尊の前に向へり。爾の時に、賢護長者の子は、宿福の因縁にて天の果報を受け、身體柔軟なること猶初めて出でたる新嫩の華枝の如くにして、佛の所に詣れり。佛の所に到り已つて、如來の最勝最妙なる容色・寂靜澄定なる功德藏の身の、猶金樹の如くに光耀顯赫して、竹林に遍滿せるを觀見するや、是の時に賢護は、即、佛の所に於て淨信心を生じ、十の指掌を合せて是くの如き念を作さく。世間の中に於て大なる名聞を得たまへること、此れは虚説の謂ならず。薩婆若・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と言ふ者斯れ眞實なり。と。爾の時に、賢護は即便に低頭して佛足を頂禮し、兩膝を地に著け、一心に頭を擧げて世尊を諦に視て、目未だ曾て瞬かず。是くの如くに如來を瞻仰せる時に、其の身儼

【一】跋陀羅波梨 (Bhadraśīla)。臺本の夾註に「隋に賢護と言ふ」とあり。又「仁賢」と譯し、即ち謂はゆる「十六正士」の一人にして、在家の菩薩なり。

か。と。佛は阿難に告ぐらく。是の經を名けて、方便波羅蜜と爲し、亦轉方便品と名け、亦方便調伏と名けて、是くの如くに奉持せよ。と。佛の是れを説き已りたまふや、智勝菩薩は、心に歡喜を生じ、及び聲聞・辟支佛乘を學び菩薩乘を學べる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、并に諸の天・龍・鬼神・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等は、是れを説くを聞き已るや、讚じて言はく。善哉、善哉。今大乘方便經を説き竟りたまへり。と。』

報——此の業をば作り已つて是くの如き報を得、彼の業をば作り已つて是くの如き報を得、是くの如き業を作らば是くの如き報を得ること。——を示現するを、衆生は聞き已つて、是くの如き業を作り、是くの如き業を離れ、不善業を離れて善業を修習したればなり。

善男子、今方便を説き已り、方便を示現し已れり。此の諸方便を堅く持ち秘藏して、應に下劣の人・薄き善根の者に説くべからず。何を以ての故ぞ。此の經は聲聞・辟支佛に行ぜらる處に非ず。況んや、下劣の凡夫の信解し能ふことをや。何を以ての故ぞ。此の人は諸の方便を學ぶこと能はさればなり。所以は何ぞ。此の方便經は、其の用ふる所に非ざる故にて、餘の凡器の受持し能ふ所に非ずして、唯菩薩のみあつて、此の方便法に於て能く説き能く學べばなり。善男子、譬へば、夜闇に大明燈を然すに、室中の一切の所有を見るを得るが如く、善男子、菩薩は是くの如き諸方便を聞き已るや、即一切の菩薩の行する所の道を見、我が應に學ぶべき所として、一切の如來の行及び菩薩の行に於て、已に彼岸に到り、善く菩薩の道を行する者は、以て難しと爲さざるなり。善男子、我れ今當に菩提の道を得んと欲する諸の善法を説くべくば、謂はゆる善男子・善女人は、百千由旬を過ぎたるに、此の方便經を説く處あるを聞くととも、當に彼に往いて聽くべし。何を以ての故ぞ。若し菩薩は此の方便經を聞き已つて、光明の行を得ば、一切法の中に疑悔の心を除けばなり。爾の時に、四衆及び諸の人・天の寶器を成せる者は、此の經を説ける時に、悉く聞き悉く知れども、寶器に非ざる者は、此の會に在りと雖も、此れは聞かず知らざるなり。此の經中に於て、耳にすら尙聞かず。況んや、口に説くことをや。寶器に非ざる故は、是れ如來の是の法を説ける時に、聞かず知らずして、佛の神力を蒙らざりしを以ての故なり。と。此の經を説き已りたまふや、七萬二千人は阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。

爾の時に、尊者阿難は、佛に白して言はく。世尊、當に何と此の經に名けて、云何に奉持すべき

【三】光明の行を得ば。
別の異譯本に「則ち光明を蒙らば」とあり。

ありき。如來は是くの如き義を見なければなり。又頗羅墮婆羅門は、五百種を以て惡罵し已れるに、佛世尊の捨心二四を生ぜるを見たり。善男子、是に婆羅門は是くの如きを見已るや、信敬の心を生じ、佛・法・僧に歸依して解脱の根を種えたり。是れを如來の方便と名く。

善男子、提婆達多は、菩薩と世世共に一處に生じたるが、此の輩も亦是れ菩薩の方便なり。何を以ての故ぞ。我れ提婆達多に因る故にて六波羅蜜を具滿し、亦多く無量の衆生を利益したればなり。云何にして爾を知る。善男子、爾の時に、衆生は快樂して施を行するを知らず、受くる者を知らざるを、菩薩は爾の時に、布施を行することを教へんと欲するに、是の時に提婆達多は嫉妬心を起し、菩薩の所に至つて、國城・妻子及び頭目・手足を求めたり。爾の時に菩薩は歡喜して施與せる時に、無量の衆生あつて、菩薩の施を見て心に歡喜を生じ、布施を信解して是くの如き言を作せり。菩薩の施の如くに、我れも亦是くの如くに布施を行じて、願はくば菩提を成ぜんことを。と。善男子、提婆達多は、或は菩薩の持戒の清淨なるを見知り已つて、菩薩の持つ所の戒を破らんと欲せり。爾の時に、菩薩は淨戒を毀たざりし時に、無量の衆生あつて、菩薩の持戒を見て、亦持戒の菩薩に效ひて戒を持ち、或は他人に爲つて輕毀・惡罵せらるるも、惡心を生ぜざりき。爾の時に、屬提波羅蜜を具足せるに、無量の衆生あつて、菩薩の忍を以て心を調ぜるを見て、亦菩薩に效ひて忍辱を行じたり。善男子、當に知るべし、提婆達多は大に菩薩を利益せることを。善男子、今の提婆達多、大なる醉象を放つて如來を害せんと欲し、亦耆闍崛山に於て大石を推し下せる如きも、俱に是れ如來の方便の示現にして、業報の罪には非ず。何を以ての故ぞ。此の方便に由つて、無量の衆生を利益したればなり。

善男子、如來の總じて説ける十業の因縁は、皆是れ如來の方便にして、是れ業報には非ず。何の以ての故ぞ。衆生は業因にて得る所の果報を知らざれば、衆生の爲めの故に、如來は是くの如き業

【二四】捨心。此の捨は謂はゆる「行捨」なり。第一卷「捨」の解、參照。

當に、是の念を作すべし。佛は是れ法王にてすら、尙七覺の法を聽いて病を除くを得たまへり。何に況んや、我等往いて法を聽かさらんや。法を恭敬せざらんや。と。善男子、諸天を調伏し、人の苦患を除かん爲めの故に、又法を敬重せんことを示現する是の故にて、是くの如き言——迦葉、我れ今背痛む。汝當に七覺の法を説くべし。——を作せるなり。何を以ての故に、法を尊重する故なるか。如來には尙重なる四大の身ある無し。何に況んや、病あることをや。是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、釋種の破れし時に、如來は自ら我れ頭痛すと言へるか。善男子、或は衆生あつて、是くの如き言を作さん。世尊は、親族を利益する能はず、亦於愍せず、安隱を欲せずして出家し已り、種族に意斷ちて、救護するを欲せず。と。是の諸の衆生は、知らざる故にて是くの如き言を作すなり。善男子、如來は諸の苦の本に於て、已に其の邊に到れるなれど、如來は是の衆生の心に念する所を知る故に、舍耶樹の下に坐して、自ら頭痛すと言へるなり。善男子、吾れ爾の時に於て、尋いで阿難に向つて、我れ頭痛すと説ける時に、斷見の三千の天子あり、復無量に殺生を好む者あつて、皆共に集會せしかば、彼れ斷見の天子及び殺を好む者に、業障を示現せん爲めの故に、是の言——吾れ眼を以て他の殺生せるを見て、心に隨喜せし故に、今頭痛を得たり。——を作せるに、是の法を説き已るや、七千の人。天は皆調伏を得たり。是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、頗羅墮婆羅門は、五百種を以て佛を罵詈せるに、如來は聞き已つて、能く忍びたるか。善男子、如來は能く神力を以て、此の婆羅門を擲つて餘の世界に置き、亦神力を以て、婆羅門をして、乃至、一言の罵詈の聲をも出す能はざらしめ能ふなり。善男子、時に彼の衆中に、多く人天ありしが、如來の能く惡罵を忍んで、説かず、答へず、捨心・等心・利益心・堪忍心を生ぜること、前は後の如く後は前の如くなるを見て、爾の時に、四千人の、阿耨多羅三藐三菩提心を發す

【三】釋種。第二卷「釋氏」の解、參照。但し、別の異譯本には「舍夷國」とあり。「舍夷」は即ち「摺婆」なり。

【三】如來は、乃至、舍耶樹の下に坐して。別の異譯本には「黎庶の意を護らんとて、枯樹の下に坐して」とあり。

【三】頗羅墮 (Bharadvāja) 婆羅門。婆羅門六姓の一なり。異譯本には「莊嚴幢婆羅門」とあり。

くの如き味を得ず。と。阿難は此の麥を食ひ已るや、七日七夜更に飲食せざりしも、飢渴の想無かりき。善男子、是の故に當に知るべし。是れ如來の方便にして、是れ業障に非ざることを。善男子、沙門・婆羅門の、戒を持てるあつて、我が如くに他の請を受け已り、而して請主の荒迷して供給する能はず、或は作ることを肯ぜざるを知らば、是の縁の故を以て、如來の已に許せる所の處にて、必ず請に就くことを現し、及び業報の縁の故を示現せんと欲せよ。善男子、當に知るべし。如來の常法として、他の請を受けて供給を得ずと雖も、請主をして惡道に墮せしめざることを。善男子、彼の五百の比丘の、如來と共に夏安居して馬麥を食せる者の若き、四百の比丘の、多くは淨の故にて貪欲心を生ずるを見るものありき。彼の諸の比丘は、若し細食を食はば、欲の心を増益すれども、若し麤食を食はば、心則ち貪欲に爲つて覆はれざるものなりしかば、彼の諸の比丘は、三月を過し已るや、姪欲の心を離れて阿羅漢果を證したり。善男子、五百の比丘を調伏し、五百の菩薩を度せん爲めの故に、如來は方便力を以て、三月、馬の麥を食ふことを受けたるにて、是れ業報には非ざるなり。是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、如來は十五日に、戒を説ける時に、長老迦葉に、我れ今背痛む。汝今七覺の法を説け。と告げたるか。善男子、爾の時に、八千の天子あつて、聲聞の法を以てして自ら調伏して、彼の衆中に在つて和合して共に坐せしが、善男子、彼の諸天子は、過去世に於て、是れ大迦葉に教化せられし者にして、佛・法・僧に於て放逸ならざるは、彼の諸天子は、數迦葉比丘の説ける七覺の法を聞きたればなり。善男子、此の諸天子は、迦葉比丘を除かば、若し百千の諸佛は、其の爲めに法を説くとも解せしむる能はざるなり。爾の時に、迦葉は諸天子の爲めに廣く七覺の法を説けるに、諸天子は、迦葉比丘より七覺の法を聞き已るや法眼淨を得たり。善男子、衆生の、病苦身に纏ひて、説法の處に至るを得る能はざるある若きにも、法を聽きて恭敬せんとて、彼の諸人等は、

【一〇】淨の故にて貪欲心を生ずる。淨食即ち滋養食のために、姪欲を生ずるを謂ふ。
【一〇】細食。「細」は精好の義にして、即ち滋養なる美食を謂ふ。

【一〇】十五日に戒を説ける時に、謂はゆる「布薩」の時なるを指す。第四卷、同名の解、参照。

め、本失へる心を而ち還し得しめんとな爲せり。善男子、我れ彼の五百の菩薩の、馬の中に墮せる者を惡み、畜生を脱離するを得しめんとな欲せり。是の故を如來は知る故にて、請を受けたり。善男子、是の時に、五百の馬は食ふ所の麥の半を減じ、持ちて僧に施し、大馬の半分をば如來に施し奉れり。爾の時に、大馬は五百の馬の爲めに、馬の音聲を以てして、爲めに法を説き、亦過を悔いて、今當に佛及び比丘僧を禮すべしと教へたり。此の事を説き已つて、復是の言を作さく。汝等當に食ふ所の半分を以て、僧に供養すべし。と。爾の時に、五百の馬は過を悔い已つて、佛及び僧に於て淨信心を生じ、三月を過し已つて、其の後久しからずして、是の五百の馬は命終つて兜術天上に生じたるが、彼の五百の天子は、即天より來つて佛の所に至つて如來を供養せり。爾の時に、如來は即爲めに法を説けるに、法を説くを聞き已るや、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ることに必定せり。彼の時に、五百の馬の子は、善く其の心を調伏したれば、將來の世に於て辟支佛を得ん。彼の日藏大馬は、當來の世に於て、無量の諸佛を供養して助菩提の法を成ずるを得、然る後に佛と作り、號して善調如來・應供・正遍知と曰はん。善男子、世中の上妙の美味として、如來は得ざるることある無し。善男子、如來は草木・土塊・瓦礫を食ふと雖も、三千大千世界の中に、是くの如き味の、如來の食ふ所の草木・土塊・瓦礫の味に似たる者無し。何を以ての故ぞ。善男子、如來大人は、味中の上味の相を得たればなり。若し如來は、最庵の食を以て口中に著き已らんに、其の得る所の味は、天の妙食に勝れり。善男子、是の故を以て、如來の食ふ所は最も是れ勝妙なるを知る。善男子、爾の時に、阿難は心に憂惱を生ずらく、轉輪聖王の種にして出家・學道して、下賤の人の如くに此の馬の麥を食ひたまふ。と。我れ爾の時に於て、阿難の心を見たれば、阿難の心を見已るや即阿難に一粒の麥を與へて、阿難に語つて言はく。汝此の麥を嘗めて、味を何如と爲す。と。阿難は嘗め已るや、希有の心を生じて、佛に白して言はく。世尊、我れ王家に生れ、大王家に長じたるも、未だ曾て是

【七】是の時に、乃至、如來に施し奉れり。
異譯本には「乃ち苾芻と與に彼の馬の所に往き、食ふ所の麥を以て、即ち取つて之れ食し、我れ自ら食し已つて、復、彼の五百の苾芻に授けたり。」とあり。

んや。何を以ての故ぞ。如來は一切の衆生に於て、偏心を有つこと無ければなり。是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、諸の婆羅門は婆羅門の女の孫陀利を殺して、祇洹園の斬草中に埋めたるか。善男子、如來は是の時に是の事あるを知りたれども、捨てて説かざりしなり。如來は一切智心を成就して障礙ある無ければ、神力を以て、此の刀をして女のに入らざらしむ可きも、我れ爾の時に於て、孫陀利女の命根の將に盡きんとして、必ず他に爲つて殺さるるを知りたればなり。此れを以て方便して、諸の外道をして、不善の障をば露墮せしむるには、此くの如き諸事を、唯佛のみ之れを知ることに處くに如かずとし、是の事に安住して、多くの衆生をして、清淨心を生じて善根を増益せしめんとて、爾の時に如來は七日舍衛大城に入らざりき。城に入らざるにて、已に爾の時に、六十億の天を調伏せしが、七日を過し已つて諸天・世人は集會し共に來つて我が所に至りたれば、爾の時に、如來は四衆の爲めに説法せるに、説法を聞き已るや、八萬四千の人の、諸法の中に於て法眼淨を得たるありき。是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、如來及び僧は、毘蘭若の聚落到に於ける三月の中に在つて、馬の麥を食したるか。善男子、我れ昔時に於て、此の婆羅門の、必ず初より、始めて佛、僧を請ぜる心を捨てて、飲食を給せざるを知り、而も故に往いて請を受けたるなり。何を以ての故ぞ。彼の五百の馬の爲めの故なり。此の五百の馬は、先世の中に於て已に菩薩乘を學び、已に曾て過去の諸佛を供養せしも、惡知識に近きて惡業の縁を作り、惡業の縁の故にて畜生の中に墮せるなり。五百の馬の中に一の大馬あつて、名けて日藏と曰へるが、是れ大菩薩なり。是の日藏菩薩は、過去世に於て、人道の中に在つて、已に曾て是の五百の小馬に、菩提心を發すことを勧めたれば、此の五百の馬を度せんと欲する故に、馬の中に現生し、大馬の威徳に由る故にて、五百の馬をして自ら宿命を識らし

【三】孫陀利(Sundarī)。婆羅門外道の一少女なりしが、外道は彼の女を殺して祇洹園の邊に棄て、以て釋尊を陷棄せんとしたる者なり。

【四】祇洹園。「祇陀林」と同じ。第二卷、同名の解、參照。

【五】此れを以て方便して、乃至、處くに如かずとし。異譯本には「又、是の因縁を以て、諸の外道をして、其の心を攝伏して、自の罪を止息せしめんと欲し」とあり。

【六】毘蘭若(Veruṇṇa)。釋尊を請じて安居せしめんと約しながら、棄てて顧みず。以て僧團を飢ゑしめたる者なり。

つて、如來に傾き向ひ、信敬心を生じたれば、我れ是の時に於て、即爲めに法を説けるに、一切の法に於て法眼淨を得たり。善男子、彼の時の婆羅門・長者は、其の後久しからずして、又、世尊に大威徳あるを聞き、渴仰の心を生じて即佛の所に至り、頭面にて禮を作し、佛に向つて過を悔いたれば、彼の時に、如來は即其の爲めに四聖諦の法を説けるに、一の説法の時に、二萬人の、一切法の中に於て法眼淨を得たるあり。是の故に、如來の城に入つて乞食し、空鉢にて出でたるは、是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、旃遮婆羅門の女は、木の杵を以て腹に繫いで如來を誹謗して、是の言——沙門瞿曇は、我れをして妊身せしめたるに由つて、應當に我れに衣被・飲食を與ふべし。——を作したるか。善男子、如來は此の事の中に於て、都べて業障無し。若し業障あらば、我れ此の旃遮婆羅門の女を擲つて、恒河沙の世界の外に置き能はんや。如來は方便を以ての故に、此の業障を現して、知解せざる衆生を化せんが爲めの故なり。何を以ての故ぞ。當來の世に、諸の比丘の、我が法中に於て出家・學道し、爾の時に、或は他人に爲つて謗られ、是の縁の故を以て、心に慚愧を生じて、或は佛法を樂まず、戒を捨てて俗に還らんとするあらんに、彼の諸の比丘は、若く謗られ已つて、當に如來を念すべし。如來は一切の善法を成就し、大威徳を具したまへるすら、尙誹謗を被りたまへり。而るを況んや、我等は誹謗を被らざらんや。と。是れを思念し已らば則ち慚愧を除き、慚愧を除き已らば當に淨妙なる梵行を修習し得べきなり。善男子、旃遮婆羅門の女は、常に惡業に爲つて覆はるる故に、性多く不信なれば、今此の女身をば佛法の中に於て調伏するを得ず。常に惡業の覆蔽する所と爲り、乃至、夢中にも亦誹謗を生じ、覺め已つて心喜ぶなれば、此の女は人中の命終るや、當に地獄に墮すべきなり。善男子、我れ能く餘の方便を以て、此の女人の諸の不善の業を除き、生死を度せしめて、能く救と作ることを爲さん。善男子、或る時に、如來は餘人を救はざら

【二】旃遮婆羅門。旃遮摩那婆羅門の略なり。

【三】或る時に、如來は餘人を救はざらんや。異譯本には「佛の救護を爲すこと、其の事云何。」とあり。

を盈すことを求めじ。と。是くの如くに説き已れり。淨居天子は諸の比丘に語つて言はく。大徳、如來法王は餘の好藥を求めて陳故の藥を捨てたまへば、諸大徳も餘の藥を求むべし。と。諸の比丘は是の語を聞き已るや、疑心を除去して更に餘の藥を求めたり。更に餘の藥を服するや然る後に病を除き、病を除き已るや、七日を過ぎずして阿羅漢果を證したり。善男子、若し如來は餘の藥を求めずんば、彼の諸の比丘も亦餘の藥を求めざれば、餘の藥を求めずして能く諸病を除き、及び諸結を斷ちて阿羅漢果を證する若きは、是の處ある無きなり。是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、如來は城に入つて乞食せるに空鉢にて出でたるか。善男子、如來には業障ある無し。爾の時に、如來は當來の比丘を憐愍して護念せんとてなり。或は比丘あつて、城邑棄落に入つて乞食せんに、自ら福德無くして、乞食すとも得ざらんか、彼の比丘は當に是の念を作すべし。如來世尊は功德成就したまへるにも、城に入つて乞食せるに、空鉢にて出でたまへり。何に況んや、我等の善根微薄なるをや。我等應に乞食して得ざるを以て、憂惱の熱を生ずべからず。と。是の故にて、如來は城に入つて乞食し、空鉢にして出づることを示現せるなり。善男子、汝若し惡魔波旬は、能く城中の長者・婆羅門の心を覆蔽せる故に、乃ち一搏食をも與へざるに至れりと謂はば、善男子、斯の觀を作す莫かれ。何を以ての故ぞ。惡魔・波旬は、如來の食を斷絶する能はさればなり。爾の時に、佛は神力の故にて、惡魔波旬をして、彼の城中の人を覆蔽せしめたるにて、是の惡魔の力の能ふ所に非ず。我れ爾の時に於て、都て業障無く、彼の衆生を化せん爲めの故に、空鉢にて出づることを示現せるのみ。爾の時に、我れ及び比丘僧は、食し已るを得ざりしかば、一切の魔天及び諸の餘の天は、是くの如き念を作さく。佛及び衆僧は、食し已るを得ずして、頗は憂ふるあらんか。と。即其の夜に於て、佛及び僧を見るに、乃至、一念の憂惱を有つ無く、心も亦高まらず、亦復下まらざること、前の如くに後も亦是くの如くなりき。善男子、爾の時に、七千の天子あ

【〇〇】心も亦高まらず、乃至、亦是くの如くなりき。別の異譯本に「心、増減せざること、前後、適に等しかりき。」とあり。終始、心の平靜、安易なるを謂ふ。

告ぐらく。我れ過去世に大海の中に入り、覆を持ちて人を刺して其の命根を断ちたり。阿難、此の業縁を以て是くの如き報を得たるなり。と。善男子、我れ是の業縁を説き已るや、彼の時に二十の怨賊の、二十人を害せんと欲せる者は、是の思惟を作せり。如來法王すら尙是くの如き惡業の報を得、況んや我等の輩にして此の報を受けざらんや。と是の二十人は、即坐より起つて、頭面にて佛を禮して、是くの如き言を作さく。我等今日佛に向つて過を悔いて敢て覆藏せず。世尊、我れ先に惡心にて彼の人を害せんと欲し、を、今重ねて過を悔いて敢て覆藏せず。と。爾の時に、世尊は彼の人の爲めの故に、作業の縁及び盡業の縁を説きしに時に、二十人は是の法を聞き已るや、即、正解を得、及び四萬の人も亦正解を得たり。是の故に、如來の、佉達羅の刺の足を刺すを示せるは、是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、如來は先に諸の病無きに、而も 耆城藥王より 優鉢羅華を索めて之れを嗅がんと、令をば下だしたるか。善男子、爾の時に、如來は解脫戒を制して未だ久しからざる時なりしが、時に五百の比丘の、是れ最後身なるあつて、常に餘の諸の林中に在つて道を修めしに、彼の諸の比丘は、是くの如き病を得て 陳故の藥にては治する能はざる所なりしも、彼の諸の比丘は、佛の戒を敬慎して、餘の藥を求めず餘の藥を服せざりき。善男子、爾の時に、如來は是くの如くに思惟せり。何の方便を作して、餘の藥を服することを聽さんか。若し我れ聽さば、彼の諸の比丘は當に餘の藥を求むべく、當に餘の藥を服すべし。何を以ての故ぞ。若し如來は聽さずんば、後の諸人輩は當に聖法を犯すべし。と。是を以て、如來は方便を行ぜん故に、耆城藥師より優鉢羅華を求めて之れを嗅がんと、令をば下だせるなり。時に淨居天は、即彼の比丘の衆中に至つて、是くの如き言を作さく。大徳、餘の藥を求むべし。病を守つて死する莫かれ。と。比丘は答へて言はく。我等敢て世尊の教に違はじ。我等自在なるを得じ。我等寧ろ死すとも佛の教に違はじ。我等長好の藥

【七】耆城。「耆婆」と同じ。

第二卷、同名の解、參照。

【八】優鉢羅華を、乃至、下

だしたるか。「青蓮華の藥の汁を求めたるは、當に何に用ふべきを要したる。」とあり。

【九】陳故。陳も故も古（フ）ル）き義なり。

善男子、如來は一切衆生の爲めの故にとて、是の方便、佉達羅の刺を示現することを作したり。善男子、爾の時に、佉達羅の刺の如來の足を刺したるは、善男子、佛の神力の故にて刺して足に入らしめたるなり。何を以ての故ぞ。如來は金剛の身なれば、壞り能ふ者無ければなり。善男子、昔舍衛城中に二十の人ありしが、皆是れ最後身なりき。彼の二十の人に更に怨家二十人ありしが、各各思惟すらく。我れ當に爲めに親友と作つて、其の舍に至り其の命根を奪ふべし。と。人に向つては説かさりき。善男子、彼の時に二十の最後身の者及び二十の怨家の人は、佛の神力の故を以て共に佛所に至れり。善男子、如來は爾の時に、是の四十人を調伏せん爲めの故に、大衆の中に於て、大目犍連に告げて言はく。今此の地中より佉達羅の刺を出して、吾が右足を刺さんと欲す。と。未だ足に至らざる間に、此の佉達羅の刺は即、地より出でて長さ一肘なり。出づる時に當つて、目連は佛に白して言はく。世尊、我れ今當に此の刺を取つて、他方の世界に擲ち善くべし。と。佛は目連に告ぐらく。汝の能ふ所に非ず。此の佉達羅の刺の、今此の地に在るを汝は抜く能はず。と。爾の時に、目連は大神力を以て、前んで此の刺を抜かんとせるに、時に于いて三千大千の世界は皆大に震動し、一切の世界は刺に隨つて擧がれども、刺の乃至一毛をも動す能はず。善男子、爾の時に、如來は神通力を以て四天王の天に上りしに、彼の佉達羅の刺も亦佛に隨つて去けり。爾の時に、如來は復三十三天・夜摩天・兜術天・化樂天・他化自在天に至りしに、刺も亦隨つて去き、乃至、梵天にも亦復是くの如くなり。爾の時に、如來は梵天より還つて、閻浮提の舍衛城中の本坐せる處に至りしに、刺も亦逐つて此の地中に還り至り、堅に如來に向へり。爾の時に、如來は即右手を以て佉達羅の刺を捉へ、左手を地に安じ、右脚にて之れを踏むに、爾の時に三千大千世界は皆大に震動せり。時に尊者阿難は即坐より起ち、偏に右肩を袒ぎ、佛の爲めに禮を作し、合掌して佛に向つて、是の言を作さく。世尊は往昔に何等の業を作して、是くの如き報を得たまへるか。と。佛は阿難に

【六】佉達羅。「佉陀羅」に同じ。第一卷、同名の解、参照。但し別の異譯本には「銃杖」とあり。

縁の障礙の罪の故を以て、一一の菩薩の初發心より、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を成するに至るまでの爾の時に、惡人は其の中間に於て常に地獄に在ればなり。汝は導師爲れば、方便を作して、彼の惡人をして地獄に墮せず、彼の五百の菩薩にも、亦復其の身分を全うするを得べからしむべし。と。善男子、爾の時に、大悲導師は是くの如くに思惟すらく。何の方便を作さば、彼の惡人をして地獄に墮せず、五百の菩薩に其の壽命を全うせしめんか。と。是くの如き思惟を作し已れども、乃ち一人に向つても是の事を説かざるなり。爾の時に、風を待ち、餘に七日あつて、當に閻浮提に還るべし。七日過ぎ已つて、是くの如く思惟すらく。更に方便無し。唯此の一の惡人を除くあらば、爾く乃ち此の五百人をして、壽命を全うするを得しむべし。と。復是の念を作さく。若し我れ餘の人に向つて此れを説かば、五百人は當に惡心を生ずべし。惡心を生じ已つて此の惡人を殺さば、彼の諸人等は當に惡道に墮すべし。と。善男子、大悲導師は是くの如くに思惟すらく。我れ今當に自ら之れを殺すべし。我れ此の人を殺す故を以て、百千劫に惡道の中に墮して地獄の苦を受くと雖も、我れは能く之れを忍ばん。惡人をして、五百の菩薩を害し、此の惡縁にて地獄の苦を受くることを作さしめじ。と。善男子、爾の時に、大悲導師は哀愍の心を生じて、是の方便を作せり。吾れ五百人を護らん故に此の惡人を害せん。と。是の時に、導師は、卽、鬪矛を以て惡人を刺し殺し、諸の賣人をして、安隱に閻浮提に還り至るを得しめたり。善男子、汝疑を有つ勿かれ。爾の時の導師は則ち我が身是れなり。五百の賣人は、此の賢劫の中の五百の菩薩是れなり。當に此の劫中に於て阿耨多羅三藐三菩提を成すべし。善男子、我れ爾の時に於て、方便を行せる大悲の故にて、卽百千劫の生死の難を超越するを得たり。時に彼の惡人は、命終の後に善道の天上に生じたり。善男子、汝今當に知るべし。菩薩には是の障礙の業報の如きもの有つて、而して百千劫の生死の難を超越するを得たりと謂ふ勿きことを。卽時に是れ菩薩の方便力なればなり。

【五】爾の時の導師は。乃至。善道の天上に生じたり。別の異譯本には、此れに當るべき文に「彼の大導師は、衆の賣人に大哀を興すに由つて、權方便にて、壽終の後に、第十二光音天上に生れたり。時の大導師とは、則ち吾が身なり。斯の方便を以て、千劫の生死を越え、死して則ち天に昇りたるなり。同船の五百の賣人は、斯の賢劫の中に、五百の佛の興る者是れなり。」とあり。其の「天上に生れたる者」を、「彼の惡人」の事とせざるは、當に然るべし。

惱の病を除き已つて、一切の法に於て障礙ある無きも、能く一切の法を示現し、是の不善の業を以ての故に、是くの如き報を得ることの、是くの如き縁を現して、衆生をして一切の身・口・意の業障を除きて、淨行を行ぜしめんと欲するなり。善男子、譬へば長者の子若しくは居士の子を、父母は愛念して其の乳母を與ふるに、時に乳母は、病痛ある無きも、嬰兒の爲めの故に自ら苦藥を服して、乳をして清淨なるを得しめんと欲するが如し。善男子、如來も亦復是くの如くに、是の一切世界の父として、業報を知らざる衆生を教化せん爲めの故に、如來には病無きも、而も衆生の爲めに作病を示現——是の業の故を以て是くの如き報を得、此の業の故を以て是くの如き報を得。と、——するを、衆生は聞き已つて心に驚畏を生じ、諸の惡業を除きて惡縁を作らざるなり。と。

佛は復智勝菩薩に告ぐらく。善男子、乃往の過去の世に、然燈佛に遇へる時に、五百の賈人の、珍寶を求めん爲めに大海に入るありき。善男子、時に賈人の中に一の惡人あつて、多く奸偽を懷き、常に惡業を行ひて初より悔ゆる心無く、善く兵法を知つて恒に寇賊を爲し、他の財物を奪ひて以て産業と爲し、狀を賈人の如くにして、諸の賈人と共に同じく一船に載れり。時に彼の惡人は、是くの如くに思惟すらく。此の諸の賈人は大に珍寶を得たれば、我れ今當に此の諸の賈人を殺し、其の珍寶を取つて閻浮提に還るべし。と。是くの如くに思惟し已つて、諸人を殺さんと欲せり。善男子、爾の時に、人あつて名けて大悲と曰ひしが、彼の衆中に於て大導師を作したり。時に彼の導師は、夜に於て、夢中に、海の鬼神の來つて是の言を作すを見たり。汝、此の衆中に一の惡人あり。是くの如き相貌にして、恒に寇賊を爲して他の財物を劫せるが、彼の人は今是くの如き惡心を生じたり。我れ當に此の五百人を殺し已つて、其の財物を取つて閻浮提に還るべし。と。若し此の惡人は、本心を遂ぐるを得て五百人を殺さば、大惡逆の業を作さん。何を以ての故ぞ。此の五百人は、皆是れ阿耨多羅三藐三菩提に向つて退轉せざる菩薩なれば、若し此の惡人は諸の菩薩を殺さば、此の業

佛なり。衆生の中に於て最尊・最勝なり。と。是くの如き願を作して言はく。我れも來世に、是くの如き智慧威徳を成就することを得ん。と。是れを如來の方便と名く。

善男子、我れ先に衆生に示現せる十業の因縁——或は是れ菩薩として、或は是れ如來として、此の十の中に於て示現せる方便——を説くことに於ては、唯智者のみあつて、能く是の義を知らん。善男子、應に念を生ずべからず。謂はく、菩薩に當に微細の罪あるべく、若しくは菩薩は是くの如き微細なる不善の法を成就したれば、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざる者なり。と。是の處ある無し。何を以ての故ぞ。善男子、如來は一切の善法を成就し、一切の不善法を斷ちて、生死の業報の習氣もある無ければなり。遺餘の斷滅せざる者ある若きは、是の處ある無し。何に況んや、障礙の業報あらんや。善男子、衆生あつて、業報無しと謂ふて業報を信ぜざる若きに、是の衆生の爲めに業報の因縁を示現すれども、如來には實には業報無し。我れは是れ法王なれども尙業報を受く。況んや、餘の衆生にして受けざらんや。とする、彼の衆生の爲めに是くの如き示現を作すなり。是の故に、如來は自ら業縁を現せども、善男子、如來は一切の業障ある無きこと、譬へば書師は善く書論を學べるも、諸の幼童に教ふるには、諸の幼童に隨つて諸の書章を讀するが如し。是れ書師の、諸の書章に於て障礙を有てるに非ざるなり。書師は是くの如き念を作すなり。彼れ諸の幼童は當に我れに隨つて學ぶべければなり。と。善男子、彼れ書師は達せざる爲めの故に、是くの如くに唱ふることを作すに非ざるなり。善男子、如來も亦復是くの如し。一切の法に於て善く學び已れるに、是くの如くに説き是くの如くに示すは、餘の衆生に行業をして清淨ならしめん爲めの故なり。善男子、譬へば、大藥師の善く一切の諸病を療治し能ひて、自らは病ある無きも、諸の病人を見て、其の前に於て自ら苦き藥を服するに、諸の病人は、是の藥師の苦藥を服するを見已るや、然る後に效ひ服して、各病を除くを得るが如し。善男子、如來も亦復是くの如くに、自は一切の煩

【四】我れ先に衆生に示現せる。乃至。能く是の義を知らん。別の異譯本には「如來の現する所の餘殃に十あるは、是れ亦、世尊の善權の方便なり。」とあり。

しが、彼の諸天等は、如來の結跏趺坐せるを見て心に歡喜を生じ、歡喜を生じ已るや、是くの如くに思惟せり。今我れ當に、沙門瞿曇の心は、何を依る所とするかを求むべし。と。彼の諸の天人は、七日七夜に於て、是の求を作し已りしも、如來の一念の依處を得ざりき。彼の時に、諸天は倍喜悅を増し、三萬二千の天子の、阿耨多羅三藐三菩提心を發せるあつて、是くの如き願を作せり。我等も未來世に於て、當に是くの如き寂滅の行もて、仰いで菩提樹を観ることを得べし。と。是の故に、如來は成道を得已つて、七日七夜に於て結跏趺坐して、仰いで菩提樹を観て、目暫くも胸かざりしなり。是れを如來の方便と名く。

何の縁を以ての故に、如來は本菩薩の道を行ぜる時に、無量阿僧祇劫に於て行じて、諸の一切衆生に解脱の藥を與へんと願じながら、何を以て、方に梵王の請を待つて、然る後に法を説きたるか。善男子、如來は是くの如くに知ることを有てり。多く天人あつて、梵王に歸依し梵王を尊重して、彼の諸の衆生は、是くの如くに知ることを——梵天王は、我等の世界を化生して最尊なり。若し梵王を除かば、更に能く世界を造る者ある無し。と——を作す。善男子、爾の時に、如來は是くの如くに知り已つて、今我れ當に梵王の勸請を待つべし。若し彼の梵王にして一首を傾けば、諸べて梵王に歸依すべき衆生は、悉く皆歸依して、當に相ひ謂うて言はん。梵王すら勸請して、如來は法を説きたまへば、爲めに請ぜずんば非ず。と。善男子、如來に大威徳ある故に、梵王は我が所に來り至つて説法を勸請したれば、法を説きて法輪を轉じたるなり。善男子、若し我れ神力を以て、梵王をして請ぜしめずんば、然く彼の梵王は、先に心あつて能く來つて佛に請ふ無きなり。善男子、諸の衆生は梵王に依る故に、衆生をして梵王より離れしめんと欲するに由つて、其の勸請を待ち、梵王を以て證故と爲せるなり。善男子、爾の時、梵王の、如來を勸請して法輪を轉ざる彼の時に、六十八百千の梵天は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發して是くの如き言を作せり。此れは眞に是れ

【三】六十八百千。異譯本には、兩本共に「六百八十萬」とあり。

處ところある無し。善男子、爾そのの時に、菩薩は菩提樹下に坐して是くの如くに思惟せり。四天下に於て、誰れを最尊第一と爲すか。此の四天下は、今誰れに屬すと爲すか。と。菩薩は卽惡魔波旬の、欲界の最尊なるを知つて、今我れ魔と共に闘つて、魔は若し如かすんば、一切の欲界の有らゆる衆生は、悉く皆如かざるなり。爾そのの時に、當に諸天の大衆の、和合して菩提樹の下に來たり到るあつて、到りまゐるや必ず信心を生じ、魔衆・天衆・諸龍・鬼神・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の、是くの如き一切の衆は、來つて菩提樹を遶り、彼の諸の衆等は、菩薩師子の遊戯を見、見まるや、或は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、或は菩提の心を發し、或は信心を生じ、彼の人、乃至、菩薩を見る因縁の故にて、盡く解脫を得べし。と。善男子、菩薩は是くの如くに思惟し已つて、眉間の白毫相さうの光を放つて、能く波旬の宮殿をして黒闇ならしめたり。爾そのの時に、三千大千世界をば、光明を以て照せる故にて普く大に明ならしめたるが、此の光明の中に、是くの如き聲を出せり。彼の釋種の子は、出家して道を學べるが、今當に阿耨多羅三藐三菩提を成じて、魔の境界に過ぎ、魔衆に勝出し、當來の一切の魔衆を滅損すべく、今彼の菩薩は魔と共に戰はん。と。善男子、爾そのの時に、波旬は是の聲を聞き已るや、心大に憂愁せること、箭の心に入るが如くなりき。時に魔波旬は、四種の兵を嚴えんにし、三十六由旬を滿みして、一切皆來つて菩提樹を圍み、菩薩の爲めに大留難たうなんを作さんと欲したり。爾そのの時に、菩薩は大慈悲及び大智慧に住し、智慧を以て報ひられたる金色の手にて、以て地を指せるに、指し已るや、一切の魔衆は、時に尋いで散壞せり。魔衆の壞れ已るや、八萬四千萬の天・龍・鬼神・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・拘槃荼等の是くの如き大衆は、菩薩の威德・身體の微妙・容顏の端嚴・威力の勇健を見て、阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の緣を以ての故に、如來は七日七夜に於て、結跏趺坐けつがふざを捨てずして、仰いで菩提樹を觀て、目暫くも瞬またたかさざりしか。善男子、爾そのの時に、色界の天あつて寂滅じやくめつの行を行ぜ

卷の第一百八

大乘方便會 第三十八の三

何の縁を以ての故に、菩薩は食し已り、氣力の充足を得て菩提樹に至り、羸瘦を以て菩提樹に至らざりしか。善男子、菩薩は能く飲食せずして身體羸異なりとも、阿耨多羅三藐三菩提を成ず。況んや麻米を食せるをや。爾の時に、菩薩は當來の衆生を愍む爲めの故に、此の上妙の食を食せるなり。何を以ての故ぞ。衆生は善根未熟なれば、飲食を噉はずして道を求めんと欲するに、彼の諸の衆生は、飢渴の苦の故にて智慧を得る能はざるも、若し安樂にて行ぜば能く智慧を得ん。諸法を照明することは苦行には非ざればなり。是の故に菩薩は、衆生に、安樂の行を行じて智慧を得ることを示し、亦當來の衆生を愍む故に、衆生をして、我れに效うて此の妙食を食せしめんと欲し、是の故に、修舍佉女の食を食し已つて、三十七助菩提の法を成じて阿耨多羅三藐三菩提を得、食を施せる女人も亦助菩提の法を成就せるなり。復次に、菩薩は、一禪の中に在つて歡喜心を生ずるや、百千劫に於て食せずとも、能く住するなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は吉安天子より草を求めて座を敷きたるか。善男子、過去の諸佛は解脱の座を敷くに、統縦たる妙物を以てせざるなり。亦、吉安天子の助菩提の法をも成就せんと欲してなり。爾の時に、吉安は菩薩に草を與へ已つて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。善男子、今我れ當に受記を與ふべし。彼れ吉安天子は、未來の世に於て、當に成佛して無垢如來應・正遍知と曰ふを得べし。と。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は菩提樹下に坐せるに、惡魔波旬をして、菩提樹下に至つて、菩薩をして即阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむるを欲せざらしめたるか。善男子、魔は本より菩提樹下に至る能はず。我れ召さざるに而も此に來り能ふ若きは、是の

【一】食し已り。
異譯本には「乳糜を受け、食し已り」とあり。

【二】修舍佉の *śiṣya*。普通「須闍多」と書す。優婁頻螺 (*Uśala*) 村の長、難提迦 (*Nandika*) の女にして、釋尊に乳糜等の美食を奉れる者なり。

復次に、菩薩の、五人を教化し及び自ら業報——業障の故を以て六年苦行す。との——を示すことを爲すは、餘の衆生の、持戒の沙門・婆羅門を知らず見ざる故に、是くの如き惡言を説くが如きには非ず。若しは知り若しは知らざるも、若しは解し若しは解せざるも、彼の諸の衆生は、長夜に諸の苦惱を受けて利益を得ず、三惡道に墮する彼の衆生の爲めに、自ら作業を現し亦受報を現すなり。是の故に、如來は現に是の報を受くれども、菩薩には一切の障礙の業報ある無し。衆生の持戒の沙門・婆羅門を誹謗して、憂惱心を覆ひ、解脫を得ず、道果を得ざるもの有るを以て、衆生の憂惱の心を除かん爲めの故に、現に是の如き業報を受くるものにして、彼の諸の衆生は是くの如き念を作せばなり。一生の菩薩の、迦葉佛を誹謗したるも、而ち彼の菩薩は尙解脫を得たり。況んや、我れは知らずして惡言を作せるをや。是の故に、我れ今當に自ら過を悔いて、一切の惡業を更に作るを得ざるべし。と。復次に、善男子、諸の外道を調伏せん爲めの故に六年苦行したるにて、實業の障礙に非ずとは何を以ての故ぞ。世間の沙門・婆羅門は、日に一麻・一米を食うて清淨なる解脫を得と謂ふを、菩薩は彼れを調伏せん爲めの故に、日に一麻・一米を食ふことを示現して、菩薩の、龜澁を食ふが若きも尙聖道をも得る能はず。何に況んや、清淨なる解脫をや。と。(是の故に、菩薩は是くの如き言——我れ禿頭の道人を見るを欲せず。何ぞ禿人の能く菩提を得るあらん。菩提の道は甚深にして得難し。——を作せり。)是の故に、菩薩は此の縁を以ての故に、六年の苦行を現して、五百二十千の龜行の諸天・外道・神仙・龜行の菩薩を調伏することを爲せるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。

【三】五人。謂はゆる「五比丘」なり。第一卷、同名の解、參照。

【三】一米。

異譯本には「一麥」とあり。

【二】括弧内の一節。是れ錯簡に由る衍文なること明なり。

異譯本「大方廣善巧方便經」にも是れ無し。但し別の異譯本に有るを見れば、梵原本に於て、既に譯りたる者なるを知る。

【三】五百二十千の龜行の諸天外道、等。

別の異譯本には「外道の五百二十萬人をして、平等の慧に住せしめ、等」とあり。

故に復其の所に至り、樹提梵志に向つて、是くの如き言を作さく。汝我れと共に佛所に至つて、禮拜・供養・恭敬・尊重・讚歎すべし。諸佛世尊の出世は甚だ難ければなり。と。彼の樹提梵志は、瓦師の歎する故を聞けども、去くを肯ぜず。彼の時に、瓦師は尋いで前んで、手を以て梵志の髪を捉へて強く牽き、將に去いて佛所に向はんとせり。彼の時に、五人は心を傾けて樹提梵志に隨逐して、遂に佛所に至れり。時に國の常法として、若し他の髪を捉へんに、設し其れを官に告げば、捉ふる者は應に死すべきなり。爾の時に、五人は邪見を生じながらも、樹提梵志の、他に其の髪を捉へらるるを見、心傾き隨逐して、彼の如來の法に何の功德あつてか、乃ち瓦師をして、死罪を計らずして樹提の髪を捉へ、將に佛所に至つて禮拜・供養・恭敬・尊重・讚歎せしめんとするか。と。爾の時に、五人は其の心傾きて、迦葉佛の所に向ひ至りしが、既に佛を見るを得るや、本願還り發つて、信敬の心を生じたり。信敬の心を生じ已るや、即佛前に於て樹提を呵責すらく。是くの如くに、世尊に是くの如き威徳あること、本聞けるが如きのみ。何ぞ心に信敬せざるを得ん。と。善男子、爾の時に、五人は迦葉佛の威徳を見、又辯才を聞きて、阿耨多羅三藐三菩提の心を還し發せり。爾の時に、迦葉佛は、五人の已に専心を得るを見て、爲めに菩薩藏を説きて、不退轉輪の陀羅尼・金剛句の無生法忍を次第して説くや、爾の時に、五人は即無生法忍を得たり。善男子、我れ今已に佛智を具足するを得たるも、彼の時に樹提梵志は、若し當に迦葉佛を讚歎して、外道の師を讃ぜざるべくば、彼の五人の佛所に至る若きは、是の處ある無きなり。況んや、信敬の心を生ずることをや。善男子、樹提梵志は、五人を化して菩薩乘を學ばせん爲めの故に、般若波羅蜜の果報を以て方便を行じて、是くの如き言——我れ禿頭の道人を見るを欲せず。何ぞ禿人の能く菩提を得るあらん。菩提の道は甚深にして得難し。——を作せるなり。善男子、不退の菩薩は、佛に於て疑無く、菩提に於て疑無く、佛の法に於て疑なし。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。

【三】我れ今已に佛智を具足するを得たるも。
異譯本には「迦葉如來は、即我が爲めに阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまへり。」とあり。

菩提の心を失ひたり。善男子、彼の時に、五人は迦葉佛の時に於て、外道に奉事して佛法を信ぜず、外道の語を解して佛語を解せず、外道の法を解して佛の法を解せざりき。彼の時に、五人は外道の師に事へしが、彼の師は自ら言はく。我れは是れ佛世尊にして、是れ一切智なり。我れも亦菩提の道を有てり。と。爾の時に、樹提梵志は、方便を行じて五人を誘引し、還つて寶器を成ぜしめんと欲する故に、彼の五人の外道の邪心を轉ぜんと欲し、方便を以ての故に、瓦師の所に至つて是くの如き言を作さく。我れ今禿頭の道人を見んと欲するも、何ぞ禿人の能く菩提を得るあらん。菩提の道は甚深にして得難し。と。善男子、是の語を説き已り、復少時を経て、樹提梵志は、彼の五人と與に一の屏處に在りき。爾の時に、瓦師は便ち其の所に至りて、其の所に至り已るや即樹提梵志に向ひ、迦葉佛如來・應・正遍知を讚じ、復樹提に向つて是くの如き言を作さく。汝我れと共に佛所に至るべし。と。善男子、爾の時に樹提梵志は、是くの如くに思惟すらく。此の五人の者は、善根未だ熟せざれば、若し我れ當に迦葉佛を讚じて外道の師を非るべくば、而ち此の五人は、心に當に疑を生ずべくして、佛所に至る若きは是の處ある無し。と。爾の時に、樹提は自ら本願を護らん故に、般若波羅蜜の報行の方便の故にて、是くの如き言を作さく。我れ此の禿頭の道人を見るを欲せず。何ぞ禿人の能く菩提を得るあらん。菩提の道は甚深にして得難し。と。云何なるは、般若波羅蜜の報の菩薩の行なる。般若波羅蜜には、菩提の想ある無く、佛の想ある無ければ、爾の時には、佛を見ず、菩提を見ず、亦内に於ても菩提を見ず、亦外に於ても菩提を見ず、亦内に於ても菩提を見ず。是くの如くにして、悉く菩提の空にして法ある無きを知るなり。爾の時に、樹提は一切の法に所有無きを知る故に、方便を行じて、是くの如き言——我れ禿頭の道人を見るを欲せず。何ぞ禿人の能く菩提を得るあらん。菩提の道は甚深にして得難し。と。善男子、復異時に於て、樹提梵志は、彼の五人と河水の邊に至りしが、爾の時に、瓦師は佛の神力を承け、五人を化せんが爲めの

【二〇】瓦師。
別の異譯本に「陶家者、名は難提和(音に、歎彌と言ふ。)」とあり。

【二一】般若波羅蜜の報行の方便の故にて。
異譯本に「般若波羅蜜多力に護らるる故を以て、是れよりして善巧の方便を出生し」とあり。

【二二】亦内外に於ても菩提を見ず。
異譯本に「中間にも在らず」とあり。

上服及び諸の瓔珞を食らざることを知らしめんと欲してなり。復次に、菩薩は是くの如くに觀したるなり。我れ今是くの如くに學ぶことを作して、亦諸人をもして學ばしめん。我れ諸の所有を捨てて佛法に於て出家せば、諸人も是くの如くに學び已つて、一切の愛する所の物を遠離して、四聖種の行を持たんとて、唯父母の放たざるを聽かずして出家するを得たるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は刀を以て自ら其の髪を下したるか。善男子、三千大千世界の中に於て、天・龍・鬼神・乾闥婆・人非人の、能く當に菩薩の威徳に近くべき者ある無し。何に況んや、能く與に髪を剃ることをや。復次に、菩薩は、衆生をして、深く菩薩の出家を欲することを信ぜしめんと欲することを示現せん故に、自ら刀を持ちて髪を下したるなり。復次に、菩薩は、淨飯王の爲めの故なり。爾の時に、淨飯王は惡心を生じ、自ら豪族なるを恃んで、傲慢して言はん。誰れか我が子の髪を剃りしか。我れ當に誅戮すべし。と。爾の時に、淨飯王は、菩薩の自ら刀を持ちて髪を下せるを聞かば、王は是れを聞き已つて惡心即ち滅すればなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。善男子、汝今善く聽け。何の縁を以ての故に、菩薩は苦行すること六年なりしか。善男子、是れ菩薩の宿業の餘報にて此の苦を受けしに非ざるなり。衆生をして、一切の惡業の報中に於て、能く惡心を生じて、菩薩に歸向せしめんと欲してなり。

復次に、善男子、昔迦葉佛の時に、菩薩は爾の時に、是くの如き言——我れ此の禿頭の道人を見ることが欲せず。何ぞ禿人の能く菩提を得ることあらん。菩提の道は甚深にして得難ければなり。——を作せる此くの如き輩も、亦是れ菩薩の方便を行ざるを示せるなり。此に説く所の者にて、當に其の義を知るべし。何の縁を以ての故に、菩薩は是の龜惡の言を作せるか。善男子、爾の時、迦葉佛の世に出でたる時に、婆羅門の名けて 樹提と曰へるあつて、親友五人を有ちしが、皆是れ大婆羅門の子なりき。先に大乘を學びしが、彼の時には、五人は久しき來、惡知識に親近したる故に、

【二七】 樹提。
別の異譯本には「優多羅摩納
(音に、上志と言ひ、一名は始
花)」とあり。

めんと欲する故に、是の故にて、菩薩は閻浮樹の下に在つて、坐禪して思惟せるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は五欲を以て自ら樂まずして、城を出でて遊觀せるか。善男子、老・病・死を見ることを示現する故にて、諸の眷屬をして、菩薩は老・病・死を畏るゝ故に出家して道を學びたること知らしめんと欲してなり。貢高を爲し眷屬を損減する故にて出家したるに非ずして、眷屬を利益せんと欲する故に出家したるなり。菩薩は在家の過患を見る是の故にて出家したるにて、此の菩薩は、一切衆生に老・病・死の苦を示さすことを爲せるなり、是の故にて、菩薩は五欲を樂まずして城を出でて遊觀したるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は夜半に出家せるか。善男子、衆生の善根を利益せんことを示現せんと欲してなり。——菩薩は住する所の處に隨ひ、衆生の善根を増益するなり。——善男子、亦白淨の法を爲めん故に五欲を捨離せんとて、眷屬に告げずして便ち出家したるなり。諸の歡樂を離れて、終まで白淨の法を離れざらんと、是の故にて菩薩は夜半に出家したるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は睡眠を以て宮人・伎女を覆蓋し、然る後に出家せるか。善男子、出家の過をして悉く諸天に在らしめんと欲してなり。故は、眷屬諸親にして、或は菩薩の出家を見れば便ち瞋憤の心を生ずるあらん。若くなれば、菩薩は是くの如くに思惟せるなり。是人惡心を我れに有たば、便ち當に長夜に苦を受けて三惡道に墮すべけれども、彼の眷屬諸親は、是くの如くに知る——此れは是れ、諸天は睡眠を以て覆ひ、故に門を開きて引き道き、空に昇つて去りたるにて、菩薩の過に非ざるなり。——ことを作さば、爾の時に諸人は信心を増益して、諸天の所に於て不信心を生ぜん。と。是の故に、菩薩は是くの如き過を見て、睡眠を以て宮人・伎女を覆蓋し、然る後に出家せるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は車匿・白馬及び寶衣・瓔珞を遺して家に送り還したるか。善男子、眷屬をして、菩薩は在家の名衣、

【三】衆生の善根を、乃至、欲してなり。
異譯本には「迦毘羅城の一切の人民をして、皆見ざらしめんと欲せる故なり。」とあり。

ん爲めの故に、納れて以て妻と爲したるなり。復次に、大心の衆生の、居家に處在して、五欲・財寶・僮僕・眷屬の種種を受け已るあるを、菩薩は彼の衆生に、居家・五欲・財寶・僮僕・眷屬を捨てて、出家を行ぜしめん爲めの故に是の事を示すなり。是の故は、菩薩は居家・五欲・財寶・僮僕・眷屬に處ることをば、捨て、出家することを示さば、衆生は見已つて、是くの如くに思惟すればなり。菩薩の受くる所の五欲の、最妙にして上無きすら、尙能く之れを捨て、出家せり。何に況んや、我等にして出家せざらんや。と。復次に、菩薩の有つ所の妻婦・男女は、皆是れ本菩薩の道を行ぜる時に、諸の善法を以て化せられし所の者にして、此の諸の衆生も亦是の願を作せるなり。若く此れを以て、菩薩の、乃至、一生まで、常に當に妻子・眷屬と作ることを爲すべし。と。亦是くの如き諸人の白淨の法をも増益せんと欲する故に、是の故にて菩薩は妻子・眷屬に處りたるなり。復次に、菩薩の宮殿に處れるは、四萬二千の姪女を教化して阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめ、亦餘人をして、惡道に墮せざらしめんと欲する爲め、是の故に、菩薩は宮殿・妻子・眷屬に處在したるなり。復次に、一切の女人は、盡く欲火に爲つて燒かるゝも、若し菩薩を見れば、即姪欲を離るればなり。復次に、菩薩は諸身を變作して、顏貌・修短本と異なる無きに、彼の女人は、化の菩薩と共に相ひ娛樂して、各自自ら謂ふらく、實の菩薩と共に相ひ娛樂す。と。彼の時に、菩薩は常に禪定に在つて安樂行を修したれば、化の菩薩の五欲を受くる如きには、欲想ある無く、眞實の菩薩にも亦復是くの如くなるは、然燈佛より來、乃至、一生まで已に姪欲を離れたればなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。二三〇二四〇〇二五〇二六〇

車 匪・健陟の本願も亦復是くの如し。何の縁を以ての故に、菩薩は閻浮提樹の下に在つて思惟せるか。善男子、七億の諸天を教化せんと欲する爲めなり。復次に、菩薩は、父母をして、菩薩の必定して鬚髮を剃除し、法服にて出家することを知らしめんと欲してなり。復次に、菩薩は、智慧を増益すること示現せんと欲して、閻浮樹にて蔭に隨へるなり。菩薩は衆生をして善根を増益せし

【三】車匪・健陟の本願も亦復是くの如し。
 異譯本には「菩薩の王宮に處れる時に、一切の象馬・奴婢を受くと雖も、而も彼の一切は皆是れ宿世の殊勝なる願力なるを、菩薩は成就を爲さん故にて、乃ち攝受したるなり」とあり。

【四】車匪(Ohrudata)。又、閻浮迦と書す。佛の四門出遊及び出城入山の際に隨從せる馭者兼護衛の武士なり。後、出家して、謂はゆる六群比丘の一たり。

【五】健陟(Kanṭhalaka)。又、健德と書し、正しくは建陀歌と書す。(俗に、訛稱してコンデイと曰ふ。悉多太子の要乗せる白馬にして、入山の際にも乗りし所の者なり。

盡さんと欲するを知れる故に來たり下つて生ぜるにて、菩薩の咎には非ざるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は善く書・論・博奕・射・御・軍策・計謀・種種の伎藝を學べるか。善男子、世法を學べる故にて、菩薩は三千大千世界の中に於て、一事として知らざる者ある無きも、若しは偈、若しは辯、若しは應辯、若しは呪術、若しは戲笑、若しは歌舞・作樂、若しは工巧を、菩薩は生れたる時に已に一切善く知れるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に菩薩は、妃・姪女の眷屬を納れたるか。善男子、菩薩は欲を以ての故ならざるなり。何を以ての故ぞ。菩薩は是れ欲を離れたる丈夫なればなり。爾の時に、菩薩は若し妻婦男女を（納るることを）示現せずば、衆生は當に謂ふべし。菩薩は是れ男子に非ず。と。衆生は若し是の疑を作さば、無量の罪を得れば、彼の疑を斷たんと欲する故に、釋種の女を取りたるなり。羅睺羅を有てるを示現せるは、若し人、羅睺羅は是れ父母の和合の生なりと謂はば、斯の觀を造す莫かれ。而ち羅睺羅は天上の命終り、來たり下つて胎に入れるにて、是の父母の和合の故の生には非ず。又羅睺羅に本願ありし故なり。若し一生補處の菩薩あらば、我れ當に子と作ることを爲すべし。となり。瞿夷も、本然燈佛の時に於て、是くの如き言を作さく。今より已後、願はくば、此の梵志の乃ち一生補處に至るまで、常に我が夫と爲し、我れ其の妻と爲るを爲さん。と。爾の時に、菩薩は即七枝の優鉢羅華を受け已つて、是くの如き言を作さく。我れ受せずと雖も、今當に此の善女人の願を滿すべし。と。是の願を作し已りたれば、七華の善根を離さずして、是の故に菩薩は納れて以て妃と爲したるなり。復次に、一生の菩薩の、官殿・姪女の中に處ることを成就して示現せるは、爾の時に、菩薩は妙色なる諸天の供養を成就し、出家の釋種の女を成就して、悉く是くの如き衆事の具足せるを見んとて、其の心專一にて、是くの如き願を作して菩提心を發せるなり。願はくば、我れ是くの如き衆事を具足せんことを。と。是の故に、菩薩は瞿夷をして、此の心を發さしめ

【二〇】博奕。廣く勝負を爭ふ遊戯を謂ふ。

【二一】（納るることを）。括弧内の語は、本文の省略法なるを補ふために、挿入したり。

【二三】受せずと雖も。執著せざるを謂ふ。

す、輕の爲めの故にて笑はざるなり。爾の時に、菩薩は是くの如くに思惟せり。是の諸の衆生は、本より欲・恚・癡及び諸の煩惱を有てるが如くに、今も亦是くの如くなり。我れ本より已に勤めて阿耨多羅三藐三菩提を發さしめたるが、我れ今已に成じたるに、而も彼の衆生は懈怠・懶惰の故に、生死の苦惱の海中に在つて未だ煩惱を斷ぜず。此の衆生の如きは、我れと同時に菩提心を發したるが、我れ今已に阿耨多羅三藐三菩提を成じたるに、而も彼の衆生は懈怠・懶惰の故に生死の苦惱の海中に在り。是の下劣の衆生は、利養の爲めに勤精進して一切智を求めざりしかば、是の諸の衆生は、今猶我れを禮敬し供養す。我れ爾の時に於て大悲心を生じたるが、我れ今已に願ふ所を滿せり。と。是の因縁を以て、菩薩は大笑せるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は生ぜる時に、身體清淨にして先より垢穢無かりしに、釋提桓因及び梵天王は菩薩を洗浴せるか。善男子、菩薩は釋・梵の諸天をして供養を興さしめんと欲する故に、亦世法の初生の嬰兒の如きは、應に洗浴すべきを以ての故に、是の故にて菩薩は身は無垢なりと雖も、而も釋・梵をして洗浴せしめたるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は空閑處に在る時に、即道場に至らずして還つて宮に入りしか。善男子、諸根をして具足せしめんと欲する故に、宮殿に處るを示し、五欲もて自ら娛み然る後に四天下を捨てて出家を行ぜるは、復餘の人を化して、五欲を捨てて鬚髮を剃除し、法服にて出家せしめんと欲する爲めの故に、是の示現を示せるなり。是の故に、菩薩は復還つて家に入り、空閑の處に於て即道場に詣らざりしなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は適に生じて七日にして、摩耶夫人は尋いで便ち命終せるか。善男子、此れは是れ摩耶夫人の命根の盡きたる故にして、菩薩の咎には非ざるなり。菩薩は先に兜術天に在りし時、天眼を以て、摩耶夫人の命根の、十月を滿し已つて餘は七日の在るを觀じ、爾の時に、菩薩は便ち兜術天より來れるなり。菩薩は方便を以て、摩耶夫人の命根の

【一〇】 是の諸の衆生は、乃至是の因縁を以て、菩薩は大笑せるなり。
 異譯本には「我れ善く一切衆生をして、悉く能く我れと同じく菩提心を發さしめんと欲し、我れ當に菩提を得已らば、廣く衆生を度して輪廻の苦より出ずべし」と、我れ是の事に於て、懈怠の想無かりき。我れ一類の衆生を觀るに、下劣の心、迷亂の作意を起して、下劣解脫の道に於て、廣大なる精進を發起する能はず。是れ復、云何。謂はゆる大悲の心を具ふる者は、能く精進を起せども、彼の類の衆生には、是くの如き行無ければなり。我れ彼れをして、是くの如き廣大なる精進を成就して、最上の解脫を得しめんと欲し、是の故にて、我れ一切智の果を取りたれば、此の因縁に由つて心に歡喜を生ず。と。其の喜の因を以て、大笑の相を現せるにて、菩薩の掉舉の相に非ざる故「コトガラ」なり」とあり。此の説明は、當に然るべし。

【一〇】 菩薩は、乃至、宮に入りしか。

異譯本には「菩薩は生じ已つて、便ち園中より菩提場に詣つて等正覺を成ぜざりしか。」とあり。

の縁を以ての故に、菩薩の初めて生ぜる時に、釋提桓因は賣衣を以て承け取りて、餘の天人にては非ざりしか。善男子、釋提桓因は昔此の願を發したればなり。菩薩若し生ぜば、我れ當に賣衣を以て承け取るべし。と。菩薩の善根の妙なるを以ての故に、餘の天に増益して信敬・供養したるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は生れし時に、即行くこと七歩にして、六に非ず八に非ざりしか。善男子、必定の菩薩には、大神力・勤精進・大丈夫の相有つて衆生に示現せんと欲するに、餘人は是くの如くに示現——若し七歩を以て餘の衆生を益するには、菩薩は六歩を行き、若し八歩を以て餘の衆生を益するには即ち七歩を行く。——する能はざるなり。是の故に、菩薩は人の扶持する無くして七歩を行きて、六に非ず八に非ざらしめたるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は七歩を行き已つて是くの如き言——我れは世界の中に於て、最尊・最勝にして老・病・死を離れたり。——を唱へたるか。善男子、爾の時に、衆中の釋梵の諸天及び諸天子は、心に憍慢を懷きて、自らはれ世界の中の尊なりと言ひ、彼の諸天子は、傲慢にして自ら高り、心に恭敬する無ければ、爾の時に、菩薩は是くの如き念を作せり。彼れ諸天子は、是の慢心を有ち、慢心の故を以て長夜に三惡道の中に墮在せん。と。是の故に、菩薩は是くの如き言——我れは世界に於て最尊・最勝にして老・病・死を離れたり。——を説けるなり。菩薩は爾の時に、是くの如き言を唱ふるや、其の音遍く三千大千世界に聞え、或は諸天の、菩薩の生れし時に未だ來集せざりし者ありしも、此の聲を聞き已るや皆悉く來集せり。爾の時に、欲色界の天は、合掌して恭敬し、菩薩に向つて禮して、各相ひ謂うて言はく。未曾有なり。と。是の故に、菩薩は七歩を行き已つて、眞實の言——我れは世中に於て最尊・最勝にして、老・病・死の苦を離れたり。——を作せるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に七歩を行き已つて、便ち大笑せるか。善男子、菩薩は欲の爲めの故にて笑はず、慢の爲めの故にて笑は

【二五】善男、必定の菩薩には、乃至。八に非ざらしめたるなり。

別の異譯本の此れに當る者には「是れ正士吉祥の應と爲す。應に七覺意にて不覺を覺すべき者なり。古より今に迄るまで、未だ能く七歩を現行せる者あらざるなり。」とあり。此の説明は合理的なり。

【二六】必定の菩薩(Avivahita)又、不退轉とも曰ふ。佛道を退轉せず、必ず定つて涅槃を得る菩薩を謂ふ。

【二七】釋梵の諸天及び諸天子。別の異譯本には「釋、梵、梵志及び諸天子」とあり。

つて母邊に在つて、禮敬して圍遶せり。是の時に、諸天は菩薩の身の處る所の高樓は、純ら七寶を以て莊嚴して、天の所有に非るを見たり。是の瑞を見已るや、二萬四千の天子あつて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は右脅より胎に入りたるか。善男子、或は衆生あつて、是くの如き疑を作さん。謂はく。菩薩は父母の精の和合よりして生ぜり。と。彼の疑を斷ちて、化生なるを現さんと欲する爲めの故に、脅より入れるなり。既に脅より入り已れば、入る處ある無く、而して。摩耶夫人は、昔より來未だ會て是くの如き身心の快樂を得ざりしなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何を以ての故に、菩薩は空閑の處にて生じ、家中及び城内に非ざりしか。善男子、菩薩は先より來常に空閑の處を樂み、空處を讚歎し、山林閑靜の處を讚歎して、寂滅を行じたればなり。菩薩若し家中に處つて生ぜば、天龍・鬼神・乾闥婆等は、華香・末香・塗香、諸の天の百千無量の伎樂を持ちて來たり供養せずして、爾の時の迦毘羅城の有らゆる人民は、其の心荒迷して放逸なれば、自ら高りて菩薩を供養する能はざればなり。是の故に菩薩は空閑の處に於いて生れて、城内及び家中に於てせざりしなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩の母は。絳頼叉樹の枝を仰ぎ攀ちて菩薩を生みたるか。善男子、衆生は摩耶夫人の菩薩を生む時に、諸の苦惱を受くること餘の女人の如くならんかと疑を生ずれば、彼の衆生に、快樂を受けたることを示さん故に、樹枝を仰ぎ攀ちて菩薩を生みたるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は正念を以て右脅より出でて、餘の身分にては非りしか。善男子、菩薩は淨く三千大千世界の最尊・最勝なるを行すれば、女根に因つて住せず、女根に因つて出でざるなり。是れ。一生の菩薩の示現にして、是くの如きは餘の梵行の人には非るなり。是の故に菩薩は右脅より出で、既に出生しるも亦出づる處無きこと、前の如くに後も亦是くの如きなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何

【二】摩耶 (Māyā) 夫人。天臂城の釋迦、善覺長者の長女にして、淨飯王の夫人となり、悉多太子を生み、七日にして没して、初利天に生まると云はる。

【三】絳頼叉樹。佛母の攀ちたる樹は、普通阿輪伽 (Aśoka) 樹、即ち無憂樹とせらる。而して、此の樹は、又單に畢利叉 (Bilva) と曰はる。斯くて「絳頼叉」の「絳」は、原文には「絳」(コウ)とあれど、「絳」(ア)の誤記なるべく、由つて改めたり。

【四】一生。「一生補處」の略なり。

に、兜術天より來たるに、母胎に入らずして亦能く即阿耨多羅三藐三菩提を成すれども、若し入らずんば、諸の衆生の、或は當に疑を生じて、是くの如き言——是の菩薩は何處より來れるか。若しは天、若しは龍、若しは鬼神、若しは乾闥婆、若しは變化の作なるか。——を作さん。是くの如き疑を作し已らば、法を聽く能はず、修行して諸の煩惱を斷すること能はざらん。是の故に、菩薩摩訶薩は母胎に入らずして、阿耨多羅三藐三菩提を成するに非ざるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。善男子、菩薩は實に母胎に處れりと、是くの如き見を謂ふ勿かれ。何を以ての故ぞ。

菩薩摩訶薩は、實には母胎に入らざればなり。所以は何ぞ。菩薩は無垢定に入り、此の定より起たすして兜術天より下り、乃至、菩提樹下に坐したるに、兜術の天人は是くの如き念を作せり。菩薩は、命終し已つて更に此に還らず。と。菩薩は、是の時に兜術天に在つて、實には自ら動かすして、胎に入り、五欲を受け、若しくば出家及び苦行を現したるを、一切の衆生は之れを以て實と爲したり。而も菩薩に於ては、皆是れ變化にして、菩薩は變化して胎に入り、欲を受け、自ら娛樂し出家して苦行するを現したるは、悉く是れ菩薩の變化の爲す所なり。何を以ての故ぞ。菩薩は爾の時に行する所清淨にして、更に胎に入らず、久しく厭離せるを以ての故なり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、身を白象に似せて母胎に入るを示したるか。善男子、此の三千大千世界に於ては、菩薩は最尊にして、白淨の法を成就したる故に、白象に似せて母胎に入るを現したるにて、更に天・人・鬼神にして、能く是くの如き作して、母胎に入る者無きなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。何の縁を以ての故に、菩薩は胎に處ること十月を足滿して、然る後に乃ち出でたるか。善男子、餘の衆生の、或は是の心——十月を滿さざる若き此の童子の身は、或は具足せざらん。——を生ぜん。是の故に、菩薩は胎中に處つて十月を滿足すること現したるが、初め胎に入りしより十月を滿すに至るまで、其の中間に於て、常に諸天あつて、來

【一〇】無垢定。
異譯本には「無垢寂靜の三摩地」とあり。

【一一】或は具足せざらん。身體不具ならん」の意なり。

たまへるか。世尊、爾の時に是くの如き言を作したまへるには、何等の義あるか。と。

佛は徳増菩薩に告ぐらく。善男子、汝は如來・菩薩に於て疑を生ずる莫かれ。何を以ての故ぞ。佛及び菩薩は、不可思議の方便を成就して、佛及び菩薩は、種種の方便に住して、衆生を教化すればなり。善男子、汝今諦に聽き善く之れを思念せよ。經あつて方便波羅蜜と名くるを、今當に汝が爲めに之れを説くべし。爾の時の菩薩の、然燈佛より來漸く方便を學びたるを、今亦當に汝が爲めに少しく開示し分別すべし。善男子、菩薩摩訶薩の然燈佛に見えし時に、即無生法忍を得たるが、是れより已來錯謬・戲笑・失念ある無く、定心ならざる無く、智慧減ぜざりき。善男子、菩薩摩訶薩は、其の本願の如くに、無生忍を得たる七日の後に、便ち能く阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得るなれど、若し欲せば、百劫にも亦能く菩薩摩訶薩と成るを得て、衆生の爲めの故に。一切の有を受け、在る所の處に隨ひ、智力の故を以て其の求むる所に隨ひ、願する所を畢ふるを得て、後に乃ち阿耨多羅三藐三菩薩を成ずるなり。善男子、菩薩摩訶薩は、方便力を以て、無量億劫に世界に住すとも、亦憂愁も無ければ爲めに厭離せざるなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。復次に、善男子、菩薩摩訶薩の有つ所の禪定に、若し聲聞にして入らば、身心動かさずして、心に便ち自ら涅槃に入ると謂ひ已れど、若し菩薩にして入らば、身心精進して懈怠ある無く、四攝の法を以て衆生を攝取し、大慈悲の故に、六波羅蜜を以て衆生を教化するなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に、善男子、菩薩は其の本願の如くに、兜術天宮に處つて能く阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉ずることは、爲して能はざるに非ざるも、菩薩は兜術天上に於て、是くの如くに思惟せり。閻浮提の人は、此の兜術天上に至つて法教を聽受し能はざるも、兜術の天人は閻浮提に下つて法を聽き能ふ。と。是の故に、菩薩は兜術天を捨てて、閻浮提に於て阿耨多羅三藐三菩提を成じたり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に、善男子、菩薩は其の本願の如く

【八】一切の有。謂はゆる「諸有」なり。第一卷、同名の解、參照。

【九】兜術天。兜率陀天と同じ。第一卷、同名の解、參照。

あつて、是くの如き言——我れ當に汝と共に、去く所の處に至るべし。——を作すとは、是れ餘の菩薩なり。薄福の衆生の、聞いて信ぜざる者は、是れ一切の邪見の外道及び其の弟子なり。大空の澤中より出づる者は、是れ一切智心を勤修する者なり。一尺の窄道とは、是れ法性の門なり。其の道の左右に大なる深坑あつて、深さ百千肘とは、是れ聲聞・緣覺の乘なり。道の左右に於て、板を以て之れを換くとは、智慧の方便なり。匍匐して進むとは、是れ菩薩は四攝の法を以て一切衆生を攝むるなり。怨賊後に在つて随つて怖れしむとは、是れ魔及び魔民と深く六十二見を起せる衆生の、并に菩薩を輕んじ誘ふ者なり。後を顧みずとは、是れ忍辱波羅蜜をば専心に具足せるなり。左右を視ずとは、是れ聲聞・緣覺の乘を讚げざるなり。大城とは、是れ一切智の心なり。漸く過ぐるを得已つて遂に彼の城を見、既に城を見已りたれば心に怖畏無しとは、是れ菩薩の、佛及び佛の行する所を見、一心に佛の智慧・威徳を敬ひ、善く般若波羅蜜の方便を學び、漸漸に宜に隨ひ、一切衆生に附き近きて疑難ある無きなり。城に入つて老・病・死無しとは、是れ菩薩は無量の衆生を利益して老・病・死を離すなり。法を説く者とは、是れ如來・應供・正遍知なり。世尊、我れ今一切の菩薩を敬禮す。と。是の語を説き已るや、十千の人天は阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。爾の時に、世尊は摩訶迦葉を讚じて言はく、善い哉、善い哉。汝能く諸の菩薩摩訶薩を勸發して、汝能く無量の功徳を成就せることや。菩薩摩訶薩は、業の能く自をば害し及び他を害する若きは、終まで之れを爲さず。言説の能く自をば害し、他を害するある若きも、亦爲さざる所なり。と。

爾の時に、徳増菩薩摩訶薩は、佛に白して言はく、世尊、若しは業若しは言にて、能く自をば害し他を害することは、一切の菩薩は爲さざる所の者なるに、世尊は何の故に、昔迦葉佛の時に於て、一生を餘して在りしに、大梵志と作つて名けて 樹提と曰ひ、是くの如き言——菩提の道は甚だ得難しと爲すに、何ぞ禿人の、能く此の事を辦するあらん。我れ見ることを欲せず。——を作し

【三】法性の門。
異譯本には「最上の法界」とあり。

【四】善く般若波羅蜜の方便を學び。
別の異譯本には「智慧・善權の諸の度無極を曉り」とあり。

【五】一生を餘して在りしに。
異譯本に「一生補處の菩薩爲りし時に」とあり。

【六】樹提(Shudra)。
菩提の道は、乃至、欲せず。

別の異譯本に「是に剃頭の沙門に親ゆるを爲すことを用ひん。安ぞ能く道を有たん。佛道は得難ければなり。」とあり。

ば老・病・死無し。城に向ふ道は唯廣さ一尺にして、其の路は端直なり。彼の澤の衆中に、一の智人の聰利敏智なるあつて、欬然として心を起し、大慈悲を以て、一切の衆生を利益し安樂にせんと欲し、此の人即空澤の中に於て、高聲に唱へて言はく、諸人當に知るべし。此を去ること遠らずして、一つの大城あり。豐樂・熾盛にして端嚴淨妙に、多く天・人あつて居止する所の處たり。若し衆生の、彼の城中に入るあらば、老・病・死無く、亦老・病・死を離るる法をも説くと。仁等來たる可し。當に共に彼に詣るべし。我れ諸人の與めに大導師と作らん。と。彼の空澤の中に下劣の衆生あつて、希望の心を生じて解を求むるを得んと欲しながら、是くの如き言を作さく。若し能く我れをして此の澤中に住せしめば、我れ當に教を受くべし。若し我れをして此の澤を出でしめんと欲せば、則ち受くること能はず。と。上なる衆生あつて、是くの如き言を作さく。我れ當に汝と共に去く所の處に至るべし。と。此の空澤の中の薄福の衆生は、是くの如き唱を聞けども、聞き已つて信ぜずして、智人に隨はざるなり。世尊、爾の時に、智人は空澤より出でて四に向ひ、顧み望み見るに、一つの道の、唯廣さ一尺にして迫近・狭小なるあり。其の道の左右に大なる深坑あつて、深さ百千肘なり。其に智慧の人は、道の左右に於て、板を以て之れを挿き、其の人此れに於て、匍匐して進んで左右を視ざるに、怨賊後に在り隨つて之れを怖れしむ。其の人、爾の時に亦後を顧みず、其の心をば勇銳にして怖畏を生ぜず、漸くに過ぐるを得已つて遂に彼の城を見たり。既に城を見已りたれば心に怖畏無く、城に入れる後は老・病・死無く、亦大に無量の衆生を利益せんと、老・病・死を離るる法を説くを爲せり。世尊、大なる餓空の澤とは、是れ生死の餓なり。大高なる牆あつて無色界に至るとは、是れ無明・有愛なり。而して此の澤中に多く衆生ありとは、是れ一切の生死の凡夫の人なり。城に向へる道の唯廣さ一尺とは、一枝の道なり。彼の澤の衆中に智人ありとは、是れ菩薩摩訶薩なり。下劣の衆生の、怖望して解を欲しながら、澤に於て動かざる者は、是れ聲聞・緣覺なり。上なる衆生

卷の第一百七

大乘方便會 第三十八の二

爾の時に、尊者阿難は佛に白して言はく。世尊、譬へば、須彌山に、若し諸の雜色の其の邊に至らば、同一の金色なるが如く、世尊、若し衆生あつて菩薩の邊に至らば、瞋心の若き、淨心の若き、欲染心の若き、是くの如き一切は、悉く皆同一の薩婆若の色なり。世尊、我れ今日より、諸の菩薩に於て尊重の心を生ずること須彌山の如くにせん。世尊、藥王の、名けて悉見と曰へるあつて、若しくば瞋心あり及び清淨心にても、此の藥を服する者は皆除愈するを得て、彼の藥は一切の諸毒を除き能ふが如く、世尊、菩薩も亦是くの如くに、若し瞋心・清淨心を有つて菩薩の所に至る者をば、菩薩は悉く能く一切の貪・恚・癡の病を除くことを爲すなり。と。爾の時に、世尊は阿難を讚じて言はく。善い哉、善い哉。汝の説く所の如し。と。

爾の時に、摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、未曾有なり。菩薩摩訶薩の最尊第一なることや。菩薩摩訶薩の諸の禪定を修する若きは、禪定を修し已つて、還つて欲界に入つて衆生を教化するなり。空・無相・無作を行す——用つて衆生を化して、聲聞・緣覺を成ぜしむるもの。——と雖も、大慈悲を以て、自は終まで薩婆若の心を離れざるなり。世尊、菩薩摩訶薩の行する所の方便は不可思議にして、是くの如くに色・聲・香味・觸の縛を受くと雖も、而も其の中に於て愛著する所無きなり。世尊、我れ今、樂說辯才を以て、諸の菩薩の少分の功德を説かん。と。佛は迦葉に告ぐらく。汝の説く所を恣にせよ。と。世尊、譬へば、大なる餓空の澤に大高なる牆あつて、無色界に至れる如きに、彼の 大なる餓空の澤には、唯一つの門あつて、此の澤中には多く衆生あり。澤を去ること遠からざるに、一つの大城あつて、豐樂・熾盛にして端嚴淨妙なり。若し衆生の、彼の城中に入るあら

【一】樂說辯才。菩薩の「四無礙辯」の一なり。第一卷「四辯」の解參照。

【二】大なる餓空の澤。別の異譯本に「大曠野」とあり。

に佛は 賢者阿難に告ぐらく 汝今善く 我れの説く所を聽け 菩薩の行する所は 思議す
可からず 無上の智慧 及び方便を以て 愛作菩薩は 數數發願すらく 女人我れを見て
若し欲心を發さば 時に尋いで 女人の身を離るるを得 男子と成るを得て 人に爲つて尊ば
れんと 阿難汝觀ぜよ 徳力の是くの如くなることを 若し非法を犯さば 應に惡道に墮
すべきに 健士之れを行するや 魔衆を壞るを得て 彼れをして天に生じて 天人と爲るを得
しむることを 今此の天子は 我れを供養し 其の心に恭敬して 正に菩提に向ひたれば
彼れは當に 無量の世尊を供養して 來世に成佛して 號して善見と曰ふべし 此の五百人
の 菩提に向へる者も 亦當に作佛して 天人の師と爲るべし 佛に是の徳あれば 誰れか
供養せざらん 是の處を深く信ぜば 無量の樂を得ん 一の女人のみに非ず 二に非ず三
に非ず 無量なる百千 那由他億も 愛作を見て 淫欲の心を發さば 尋いで即命終して 男
子と爲ることを得れば 大醫藥王として 大名稱を有てる 是くの如き菩薩をば 誰れか尊敬
せざらんや 欲心を生ずと雖も 更に快樂を得れば 況んや菩薩に於て 恭敬の心を生ずる
をや と。

是くの如き願ねがひ一切智を求むることを發たすなり 假たひ行する所をして 劫じふは恒沙ごうさの如くなら
 しむとも 終はつまで 佛の智慧より退轉たいてんせじ 善知識 愛作菩薩あいさくぼさつに遇あひたれば 今我れ當に
 眞法しんぽうを以て供養くやうすべし 若し餘の供養くやうならば 供養くやう爲るに非ずして 唯ただ菩提ぼだいを發たすのみ 是
 れ眞の供養くやうなり 菩提の 最勝最尊さいじふさいそんなるを行じて 更に欲を以て 諸の女人を視みじ 我れ
 願ねがはくは 是の女身を離はなれたる如くに 諸佛の説きたまふ 四無所畏しむそふいに向はんことを と。
 我れの父母は 尋たづいで 曉あかつに 我が身の壞やぶれて碎爛さいらんせるを見て 悲かなみ號なび啼哭なみし 父母は之れ
 を 比丘の爲す所と謂いひ 怨うらを稱なへ啼哭なみして 比丘を呵罵かましたれば 佛の神力しつりきもて 彼かの天子
 をして 父母の所に至つて 呵責かさくし諫諭けんごんせしむらく 此の比丘に於て 曠志くわうしを生ずる勿かれ
 長夜ちやうやに於て 諸の苦惱くなんを受くる莫なかれ 德増女人とくぞうにうじんは 先に命終めいしゆし已るや 卽すな三十三天さんじふさんてんに
 上生じやうじやうするを得 女身を離はなれて 男子なんしと成るを得 天人の身と爲つて光明くわうめい遠く照せば 父母は今
 當に 世尊せそんの所に詣いたるべく 先まの不善ふぜんの心をば 今應いまに悔過くわいこすべし 若し如來 諸佛世尊しよぶつせそんを
 除のぞかば 更に人の 歸依きいす可たき者ものある無しと 無畏むふいの心を以て 父母を勸諭くわんごんしたれば 卽時すな
 に父母は 佛の名を聞くを得 尋たづいで共に和合わがくして 釋迦牟尼佛しやくぢあんにぶつの所に至いたり 佛の所に
 至り已るや 頭頂づうぢやうにて 二足の尊そんを敬禮けいらいし 今は本の曠志くわうし心を 悔過くわいこし 人中にんぢゆうの尊そんを 恭敬けいけいし
 尊重そんじゆうして 今は應いまに問とふべきことを 如來にうらいは自ら知りたまふ 云何いんがに 佛法ぶつぽう及び僧しやうを供養くやうし
 云何いんがに 善行ぜんぢやうを行することを修習しゆぢゆうするか 是くの如くに問とふ所を 願ねがはくば之を説くことを爲
 したまはんことを 若し聞くを得うれば 專心せんしんに修行しゆぢゆうせんと 佛は父母の 其の心の決定けつぢゆうせ
 るを知り 天人てんじんの師しは 是くの如き言ことばを説とかく 若し一切いっけつの諸佛しよぶつを 供養くやうせんと欲せば 專
 心に堅固けんこに 菩提ぼだいの心を發たせと 德増とくぞうの父母 及び諸の眷屬けんじやくの 其の數具すうぐ足して 五百人ごひやくにんに
 滿みちたるが 天人てんじんの師しの 是くの如き言ことばを聞くや 菩提ぼだい心を發たして 大願だいがんを作なせり 爾すなの時

【三】 彼の天子。
 夫の三十三天さんじふさんてんに生れたる德増
 天子てんしを謂いふ。

し、右に遶ること三匝し、合掌して佛に向ひ、即傷を説いて言はく。

天人の尊は 思議す可からず 菩薩の行する所も 亦議る可からず 如來の法は 思議す可からず 大名稱の者も 亦議る可からず 我れ昔舍衛にて 曾て童女と爲つて 長者の家に在つて 名けて徳増と曰へり 其の年幼少に 顔貌端正なりしかば 父母は愛念して 爲めに遮護を作せり 如來世尊には 輕戲ある無くして 子の愛作といふ有つて 大威徳を有つて 舍衛城に入つて 乞食を行じ 漸く我が父の 止る所の舍に到れり 我れ時に其の好妙の音聲を聞きて 心大に歡喜し 即食を持ちて出でたり 時に尋いで 大心を行する者如來の子たる 愛作菩薩に向へり 菩薩を見たる時に 已に我が心に在いて 其の淨妙なるを觀て 心に染欲を生じたり 我れ若し 内心の願ふ所を得ずんば 便ち當に即時に身命殞没すべかりしも 我れ爾の時に於て 口に言ふこと能はず 手に持ちたる食も 之れに與ふること能はず 内心熱を懷きて 姪欲を發し 是の時身熱して 尋いで便ち命終せり 我れ時に命終するや 一念の頃を経て 尋いで三十三天に 上生するを得たり 最下なる 女人の身を離れて 男子を成するを得 人に爲つて讃ぜられ 勝妙なる宮殿は 自然にして出で 種々の妙寶の 人の珍とする所をも 一萬四千の姪女を 具足し 是くの如き眷屬は 是れ我が所有たり 我れ此の縁を以て 尋いで宿命を觀じて 自ら思惟して 即往の因を知れり 欲心を發せるに因つて 是くの如き報を得たることを 我れ染心を以て 愛作を視たるが 菩薩を見るに由つて 喜ばしき光明を得たることを 我が身の出す所の 光明の焰は 彼の業縁に因つて 是くの如き報を得たるなれば 我れは終まで 二乗を求むることを願せずして 願ふ所の處は 唯佛のみ之れを知りたまふ 姪欲の心にて 得る報すら尙爾り 何に況んや能く 善心を作して供養することをや 我れの今に於ける如きは 世尊に向つて

【三】輕戲ある無くして、子の愛作といふ有つて。父母の和合に由るに非ずして、教法の弟子なるを謂ふ。

性本空なればなり。耳・鼻・舌・身・意の法にも、亦復是くの如くに、薄皮・厚皮・血肉・脂肪・髮毛・爪齒・骨髓・筋脈と、足より頂に至るまで、是くの如くに觀じ已らば、若しは内若しは外に、一法として愛著す可きものある無し。と。若しは瞋若しは癡にも、一切の法に於て實の如くに觀じて、即欲心を離れて無生忍を得たり。無生忍を得已るや、其の心歡喜し、踊躍すること無量にして、即虚空に昇ること高さ一多羅樹にして、舍衛城を遶ること七匝せり。爾の時に、世尊は愛作菩薩の虚空に飛騰れること、猶鶉王の墜する所無きが如くなるを見、佛は是れを見已るや、阿難に告げて言はく。阿難、汝は愛作菩薩の虚空に飛騰れること、猶鶉王の如くに墜る所無きを見るや。不や。と。阿難言はく。唯然く、已に見る。と。佛は阿難に告ぐらく。是の愛作菩薩は、欲心を起すに因つて諸法を推求して、即魔衆を壞りたれば、當に法輪を轉すべし。と。

時に德増女は、命終の後に三十三天に生れ、女身を轉じて男子と成るを得、自然に七寶の宮殿の、縱廣正に等しく十二由旬なるに處り、萬四千の諸の天の姪女あつて、以て侍衛を爲せり。是に德増天子は、宿命を識るを得たれば、先の業行を推して、何の業縁を以てして此に來り生ぜるかと、是くの如くに思惟し已るに、舍衛城中にて長者の女と作つて、愛作菩薩に淫欲の心を生じ、欲心熾盛にして即身は命終したるが、便ち女身を轉じて男子と成るを得、我れ是の事を以て無量の神力を得たることを見たり。爾の時に德増天子は、是くの如くに思惟すらく。淫欲を起すに因つて是くの如き報を得たれど、今我れ愛作菩薩に於て、心甚だ清淨にして、禮敬し供養せん。我れ今は先に五欲を受けたることに住する若きは、此れ我が宜に非ず。と。是くの如くに思惟し已つて、當に如來に詣るべく、并に愛作菩薩を見て禮敬し供養せんと欲すとて、時に德増天子は、其の眷屬と天の華香・塗香・末香を持ち、即初夜に於て佛の所に來り至り、自ら光明を以て普く祇洹を照し、入つて世尊に觀え及び愛作を見て、即天華・末香・塗香を以て佛に供養し、佛足及び愛作菩薩・一切の大衆を頂禮

夫の善く戦法を知れるもの、一の利刀を藏して、行く人を衛り送るに、而も彼の衆中に、一人の、能く此の人の密に奇謀を懐けるを知るものある無くして、反つて之れを輕んじ、更に憐愍を生じて敬重する心無く、各相ひ謂うて言はく。彼の人には、器仗無く亦伴黨も無くして、此れは健士に非ず復勢力無ければ、自身をすら救はず、何ぞ能く人を濟はん。此れの賊を壞る若きは、是の處ある無し。彼の人、必ず當に諸の困厄を受くべし。と。時に彼の士夫は遂に空澤に至るに、群賊は俱に發りたり。爾の時に、士夫は宰として自ら莊嚴し、時に尋いで即藏する所の刀を出し、始めて一刀を擲つや、群賊命を喪ひ、諸賊既に壞るれば、復還つて刀を藏むるが如し。善男子、方便を行する菩薩は、善く智の刀を藏し、而も方便を以て、五欲に處つて共に相ひ娛樂するは、衆生を化せんが爲めなるを、聲聞は此の方便の菩薩の、五欲に處つて共に相ひ娛樂するを見て、方便を知らざる故に、濁心を生じ或は復憐愍して、放逸を爲すと謂ひ、是くの如き人は、尙自をすら度せず。何に況んや、能く一切衆生を救はん。能く魔を壞る若きは、是の處ある無しとすれど、爾の時に菩薩は善く方便を用ひ、智慧の刀にて、其の求むる所の如くに、諸の煩惱を斷ちて盡く摧滅せしめ、智慧の刀を以て、淫佛土の諸の女人無きに至り、乃至、一念の欲想もある無きなり。と。

爾の時に、菩薩の、名けて愛作と曰へるあり。舍衛城に入つて、次第に食を乞ふこと漸々にして、遂に一の長者の家に至れり。長者に女の名けて徳増と曰へるあつて、高樓の上に住みしが、彼の時に、女人は菩薩の聲を聞くや、尋いで食を持ち、出でて愛作菩薩に向へり。女は菩薩を見て、其の形容・相好・音聲を取るや、欲心即起り、欲に爲つて燒れて、即時に命終して骨節は解散せり。愛作菩薩も徳増女を見るや、亦惡覺婬欲の心を起したるも、時に于いて、愛作菩薩は即自ら思惟すらく。云何なるは彼の法にして、法をば善を爲すこと云何。彼の眼は何者ぞ。此の眼の眼たる性は知るに非ずして、但是れ肉團なれば、愛せず知せず、思はず覺せずして、分別する所無けん。其の

【七】 行く人。
別の異譯本には「大買人」とあり。

【八】 濁心を生じ。
別の異譯本の、此れに當る者には「悅可せざる所にして」とあり。

【九】 云何なるは彼の法にして。乃至。其の性、本、空なればなり。
異譯本には「今此の女人をば、我れ何の處に於て可愛を生ずるか。若し彼の眼根をば愛す可しと爲さば、眼は是れ無常、敗壞の不淨なる肉團にして、彼の自性は空なれば、何の愛樂する所ぞ。」とあり。

詐つて身を捨つることを許して、重んずる所の物を既にし惜む所無からしめ、後彼の物を得、彼の物を得已るや、驅逐して去らしめて、悔ゆる心を生ぜざるが如し。善男子、方便を行ずる菩薩の、能く宜よろしに隨つて方便を行ずることを知ることも是くの如し。一切衆生を教化するに、其の欲する所に隨つて身を現じて、須もちふる所の物に於て心に慍いん惜しやく無く、乃至、身を捨つるを爲して、衆生の爲めの故に善根を愛樂あいらくして、果報を求めざるも、諸の衆生の善根を作し已まつて心退轉じたいする無きを知るや、即爾すなはの時に於て心に捨離しつりを生じ、現ずる所の五欲に永く戀著けんじやくする無きなり。善男子、譬へば、蜜蜂の、畜生の中に在つて、一切の華に於て香味に著ますと雖も、而も其の中に於て依止いしの想無く、華・葉・華・香かうに愛著あいじやくする所無くして、持たずして去るが如し。善男子、菩薩摩訶薩の方便を行ずるも亦復是くの如し。衆生を化せんが爲めに五欲に處まれども、法の無常なるを見て、常想を以てして愛を起さざれば、又自ら害せず、亦他をも害せざるなり。善男子、小なる種子の芽を生すと雖も、然も、其の本の色は虧損こせんする所無くして、異物を生ぜざるが如し。善男子、是くの如くに空・無相・無作・無我の智慧の種子の菩薩は、煩惱を五欲の娛樂ごらくに有つと雖も、三惡道の芽を生ぜず善根の色を損ぜず、亦退轉たいぜんもせざるなり。善男子、譬へば魚師の、食を以て網に塗り、之れを深淵に投ずるも、既に求むる所を滿さば、即尋つひいで牽き出すが如し。善男子、方便を行ずる菩薩も亦復是くの如し、空・無相・無作・無我の智慧を以て其の心を熏修し、結んで以て網あみと爲し、一切智心いっさいちじんをば以て塗食と爲して、五欲の汗泥あせぢの中に投ずると雖も、其の願ふ所の如くに牽き出すや、欲界の命終めいしゆうの後に梵世ぼんぜに生ずるなり。善男子、譬へば人あつて、善く呪術を知り、官くわんに爲つて執とへられて五つの繫縛けいばくを被るや、此の人自ら呪術の力の故を以て、即五縛ごばくを斷ち、願に隨つて去るが如し。善男子、是くの如くに、菩薩摩訶薩の方便を行ずるや、五欲に處つて共に相ひ娛樂し、衆生を化せんが爲めに其の求むる所の如くにすと雖も、一切智いっさいちの呪を以て、五欲の縛を斷ちて梵世ぼんぜに生るゝなり。善男子、譬へば、士

【云】官に爲つて、乃至、被るや。
異譯本の此れに當る者に「秘密の五種の縛中に於て、繫縛を受くるも」とあり。

て、彼の女の欲に暫く悲心を起せる爲めに、即ち三三 十百千劫の生死の苦を超越するを得たり。善男子、汝是くの如くに觀ぜよ。若し餘の衆生ならば、愛欲に由る故にて地獄に墮せんも、方便を行ぜる菩薩ならば由なほ、梵天に生ずるなりと。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。

佛は復また智勝菩薩に告ぐらく。善男子、若し舍利弗・目犍連等にして方便を行せば、瞿伽離ニニをして地獄に墮せしめざるなり。何を以ての故ぞ。善男子、我れ念ふに、過去世の鳩留孫佛の時に、一比丘の、名けて無垢と曰へるあつて、空林野に在つて窟中に止住せしが、窟を去ること遠からずして、四五 五仙人ありき。爾の時に當つて、卒に大雲を起して大雨を降せり。時に貧女あつて、道にて暴雨に遇ひ、寒裸恐怖して、即、無垢の住する所の窟中に入れり。時に雨既に止みければ、無垢比丘は此の女人と共に窟より出でたり。時に五仙人は此の事を見已るや、心に荒穢を生じて各相ひ謂うて言はく。無垢比丘は、心に奸諂を懷いだきて不淨の行を作せり。と。時に無垢比丘は、彼の仙人の心の念ずる所を知り、即、身を虚空に踊らすこと高さ七多羅樹なりき。時に五仙人は無垢比丘の虚空に上昇するを見、見已るや、復相ひ謂うて言はく。我等見る所の書記・經論にては、若し人ひと不淨の行を作さば、是くの如くに虚空に飛昇すること能はざるも、若し淨行を修せば則ち能く是くの如しとなり。と。彼の時に、仙人は即無垢に向ひ、五體を地に投じて合掌し、過を悔いて敢て覆藏せざりき。佛は智勝菩薩に告ぐらく。善男子、爾の時に無垢比丘は、若し是くの如き方便にて虚空に飛昇することを作さずんば、此の五仙人は、即此こゝに生身にて地獄に入りしなり。善男子、爾の時の比丘は豈異人いんじんならんや。即ち彌勒菩薩は是れなり。善男子、汝今當に知るべし。舍利弗・目犍連にして、若し是の方便の、虚空に飛昇する如きを作さば、瞿伽離比丘は地獄に墮せざりしことを。善男子、汝今當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩の行する所の方便の如きは、聲聞・緣覺の有つ無き所なることを。善男子、譬へば姪女の、善く六十四態を知つて、財寶の爲めの故に、媚言もて他を誘ひ、

【三】 十百千劫。異譯本には「十千劫」とあり。又、別の異譯本には「百千」とあり。

【四】 瞿伽離 (Kodhita)。又、瞿和離と書す。提婆達多ていばだたの弟子にして、舍利弗目連は某女と姦通せりと誣陷し、生きながら墮獄せりと傳へらる。

【五】 五仙人。異譯本には「五通の仙人」とあり。又、別の異譯本には「五神仙」とあり。「五通」は「五神通」の略なり。

若し。若し實に犯罪して、百千劫に於て大地獄に墮すとも、世尊、此の菩薩は諸の惡及び地獄の苦を受くることに堪へて、此の善根を以て、一人をも捨てざらんと願するなり。と。爾の時に、世尊は衆尊王菩薩を讚じて言はく。善い哉、善い哉、善男子。菩薩は是くの如き悲心を成就せば、五欲を受くと雖も、重罪を犯さずして諸罪を離れ、及び一切惡道に墮する業に遠るなり。善男子、我れ念ふに、過去の阿僧祇劫の、復是の數に過ぎたる時に、梵志の、名けて樹提と曰へるあつて、四十二億歳に於て、空林の中に在つて常に梵行を修せり。彼の時に、梵志は是の歳を過し已つて、林中より出でて、極樂城に入りしが、彼の城に入り已るや、一女あるを見たり。彼の時に、女人は此の梵志の儀容の端嚴なるを見て、即欲心を起し、尋いで梵志に趣き、手を以て足を執へ、即時に地に躡れたり。善男子、爾の時に、梵志は女人に告げて曰はく。姉は何をば求むる所ぞ。と。女は曰はく。我れ梵志を求む。と。梵志言はく。姉我れは欲を行はじ。と。女曰はく。若し我れに従はずんば、我れ今當に死すべし。と。善男子、爾の時に、樹提梵志は是くの如くに思惟すらく。此れ我が法に非ず、亦我が時にも非ず。我れ四十二億歳に於て淨梵行を修せるに、云何ぞ今に於て當に毀壞すべき。と。彼の時に、梵志は強ひて自ら頓に抱きて七歩を離るゝを得たるが、七歩を離れ已るや、哀愍の心を生じて是くの如くに思惟すらく。我れ戒を犯して惡道に墮すと雖も、我れ能く地獄の苦を堪忍せん。我れ今是の女人の此の苦惱を見るに忍びざれば、是の人をして、我れを以て死を致さしめじ。と。善男子、爾の時に、梵志は又是くの如くに思惟し已るや、還つて女の所に至り、右手を以て捉へて是くの如き言を作さく。姉起て。汝の欲する所を恣にせよ。と。善男子、爾の時に、梵志は十二年の中に於て共に家室を爲し、が、十二年を過し已るや、尋いで復出家し、即時に還四無量心を具し、具し已つて命終して梵天の中に生れたり。善男子、汝、疑を有つ勿れ。爾の時の梵志は即我が身是れにして、彼の女人は今（三）瞿夷（四）是れなることを。善男子、我れ爾の時に於

【三】極樂城。
異譯本には「神通」とあり。又、別の異譯本には「沙場園」とあり。

【四】瞿夷(Gopika)。詳には瞿比迦と書し「明女」と譯す。舍夷長者の女(或は善覺王の女とも云ふ)にして、悉達太子の第一夫人即ち耶輸陀羅(Cradhānā)なり。之れを時に橋曼彌(Gautami)と呼ぶは、瞿曼(Gautami)の女性名詞にして、即ち瞿曼の妃の意なり。異譯本にも「彼の時の伽吒女人は、今の耶輸陀羅是れなり」とあり。

に乞食して彼の女の家に至り、即其の舍に入り、時に尋いで是くの如き法門を思惟せり。若しは内の地大若しは外の地大は、是れ一つの地大なれば、地大の心を以て、女人の手を執つて共に一牀にて坐せん。と。衆尊王菩薩は、即、坐上に於てして偈を説いて曰はく、

如來は 凡夫の行ふ所の欲を讚歎したまはず 欲及び貪愛を離れば 乃ち天人の師を成ぜん
と。

佛は阿難に告ぐらく。時に彼の女人は、此の偈を聞き已るや心大に歡喜し、踊躍すること無量にして、即、坐より起ちて衆尊王菩薩に向ひ、足を接し敬禮して、是の偈を説いて言はく。

我れ愛欲を貪らず 貪欲は佛の呵したまふ所なればなり 欲及び貪愛を離れば 乃ち天人師を成ずればなり と。

是の偈を説き已つて、是くの如き言を作さく。我れ先に生ぜる所の惡欲の心を、今過を悔ゆるに當り即善欲——菩提心を發して一切衆生を利益せんと願欲する。——を生ぜり。と。佛は阿難に告ぐらく。爾の時に、衆尊王菩薩は彼の女人に勸めて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめ已つて、即、坐より去れるなり。阿難、汝是の女人の專心なる福報を觀ぜよ。我れ今正遍知を以て記せん。彼の女人は、此に於て命終して、女身を轉ずるを得て當に男子を成ずるを得べく、將來の世の九十劫に於て百千無量阿僧祇の諸佛を供養し、一切の佛法を具足して、佛を成爲するを得て無垢煩惱如來・應供・正遍知と號せん。彼の佛の成道し已るや、是の世時に當つて、一人も不善の心を起すものある無けん。阿難當に知るべし。方便を行する菩薩の、攝むる所の眷屬は、終に三惡道に墮せざること。と。

爾の時に、衆尊王菩薩は、空中より下つて佛足を頂禮し、禮し已るや佛に白して言はく。世尊、菩薩は方便を行するには、一人の爲めに大悲心を起して善法を合集する若きにも、犯罪に似たるが

や、即時に大地は六種に震動せり。衆尊王菩薩は、大衆の中に於て、虚空に上昇すること高さ七多羅樹にして阿難に語つて言はく。尊者、何ぞ犯罪有るもの能く空に住せんや。阿難、此の事を以て世尊に問ひたてまつるべし。云何なるは罪の法にして、云何なるは罪に非るかを。と。爾の時に、阿難は憂愁して佛に向ひ、右膝を地に著け、手にて佛足を執りて、世尊、我れ今過を悔ゆ。是くの如き菩薩に我れ其の過を求めたることを。世尊、我れ今過を悔ゆ。唯願はくば、聽許したまはんことを。と。佛は阿難に告ぐらく。汝應に大乘の居士に於て、其の罪を求算すべからず。阿難、汝は聲聞人なるも、障の處に於て寂滅定を行するに、留難ある無くして一切の結を斷ず。阿難、方便を行する菩薩も是くの如くに、一切智心を成就するに、中宮に在つて姦女と共に相ひ娛樂すと雖も、魔事及び諸の留難を起さずして、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。何を以ての故ぞ。阿難、方便を行する菩薩は、是くの如き衆生を受くるあるに、三寶を以て阿耨多羅三藐三菩提の若きを動化せざること無ければなり。阿難、若し大乘を學する善男子、善女人ならば、一切智心を離れずして、可意の五欲を見る若きにも、即便に中に在つて共に相ひ娛樂するを、阿難、汝應に是の念を作すべし。此くの如き菩薩は、即是れ能く如來の根本を成ずるなり。と。佛は阿難に告ぐらく。汝今諦に聽け、諦に聽け。何の緣を以ての故に、衆尊王菩薩摩訶薩は此の女人と同一の牀にて坐せるかを。阿難、彼の女人は、曾て過去の五百世の中に於て、衆尊王菩薩の婦と作りしが、彼の女人は本の習氣の故もて、衆尊王菩薩を見て心に愛著の繫縛を生じて捨てざりしも、此の衆尊王菩薩の威徳の端正・持戒力の故をば見已るや、歡喜踊躍して、一つの獨處に在つて是くの如き心を生ぜり。若し衆尊王菩薩にして、能く我れと共に一牀にて坐せば、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提の心を發すべし。と。阿難、爾の時に衆尊王菩薩は、彼の女人の心の念する所を知れり。是くの如くに知り已るや、即晨朝に於て、衣を著け鉢を持ちて舍衛城に入り、次第

【二〇】大龍。大徳の菩薩を大龍の威力に喩へて尊稱したるなり。

【二七】汝は聲聞人なるも、乃至一切の結を斷ず。

異譯本には「聲」は、聲聞乘中の初二果の人の、無漏道を求むるに、以て難しと爲さざるが如く」とあり。

【二八】阿難、方便を行する菩薩は、乃至、無ければなり。

異譯本には「菩薩は已に眷屬の纏縛を離るる故に、已に能く佛法僧寶に安住し、淨信を壞らずして、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざればなり。」とあり。

【二九】可意。自己の意に適せるを謂ふ。

【三〇】五百世。

異譯本には「二百生」とあり。又、別の異譯本には「百生」とあり。以て梵原本に於ても、一種ならざるを推すべし。

爾の時に、智勝菩薩は佛に白して言はく。世尊、未曾有なり。菩薩摩訶薩の方便を行じて、即ち施に於てする時に、此の施を以ての故に、一切の佛法及び諸の衆生を攝することや。と。佛は智勝菩薩に告ぐらく。善男子、汝の説く所の如くに、菩薩摩訶薩の方便を行するや、方便力を以ての故に、少施を行ふと雖も、得る所の福德は無量無邊阿僧祇なり。と。佛は復智勝菩薩に告ぐらく。善男子、菩薩摩訶薩は不退轉地に至ると雖も、亦方便を以てして施を行するなり。是れを菩薩は方便を行すと名く。善男子、時あつて、悪知識は菩薩に教へて言はん。汝何ぞ久しく生死に處ることを用ふる。此の身に於て早く涅槃に入るべし。と。菩薩は知り已らば、應に之れを離るべし。我れ是くの如くに大莊嚴して一切衆生を教化するに、是の人は我が爲めに諸の留難を作す。若し我れ生死の中に在らずんば、何ぞ能く無量の衆生を教化せんや。と。智勝菩薩は佛に白して言はく。世尊、若し衆生あつて、妄想の故を以て、四重の罪を犯せるにてもか。と。佛は智勝菩薩に告ぐらく。善男子、若し出家の菩薩は、妄想の故を以て四重の罪を犯すとも、方便を行せば、菩薩は能く盡く除滅すれば、我れ今亦犯罪及び受報の者もある無しと説かん。と。智勝菩薩は佛に白して言はく。云何なるは菩薩の犯罪なるか。と。佛は智勝菩薩に告ぐらく。善男子、菩薩は「解脫戒を百千劫中に行じて、果を啖ひ草を食ひ、能く衆生の善惡の語を忍ぶと雖も、若し聲聞・緣覺と思惟の法を共にせば、善男子、是れを菩薩摩訶薩は重罪を犯すと名くるなり。善男子、聲聞の人の重禁を犯せるが如きは、即ち此の身に於て入涅槃を得ること非ず。善男子、菩薩も是くの如くに、聲聞・緣覺と思惟の法を共にすることを除かすして、捨てず悔いざる者は、終まで阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ざるなり。佛の法を得る若きは、是の處あること無し。と。

爾の時に、尊者阿難は佛に白して言はく。世尊、我れ今晨朝に舍衛城に入つて次第に食を乞ひたるに、衆尊王菩薩の、一の女人と同一の牀にて坐するを見たり。と。阿難の是の語を説き已る

【二】何ぞ能く無量の衆生を教化せんや。

此の句に次いで、異譯本には「我れ今、應に、此の因縁を以て自ら其の心を壞るべからず。

何を以ての故ぞ。我れ輪廻の中に於て、一切衆生を度脱せんと欲して、設ひ極重の罪を有つとも、亦、善根を斷たざればなり。」とあり。是れ當に然るべし。

【三】四重の罪。「四波羅夷」に同じ。第五卷「波羅夷」の解參照。

【四】解脫戒。「別解脫戒」の略名なり。第一卷、同名の解參照。

【五】若し、乃至、共にせば。異譯本に「但、彼の聲聞・緣覺の法の中に於て、相應せる作意を爲すのみ。」とあり。

【六】衆尊王菩薩。異譯本には「光衆王」とあり。

又別の異譯本「慧上菩薩問大善權經」(西晉・慧法護譯)には「重勝王」とあり。

僧に施すに用ひ、一人に施すが若きにも、以て愧と爲さずして、應に是の念を作すべし。佛の説きたまふ所の如くんば、心だに廣大を増さば、財施を以てするより勝れり。と。我れ財施は少しと雖も、一切智心を以て、是の善根にて一切智を成じ、諸の衆生をして悉く、寶手を得ること、猶如來の如くならしめんと願するなり。と。是の縁を以ての故に、施・戒・禪定の福處を具足する、是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり、復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行するに、若し聲聞・緣覺の多く利養・尊重・讚歎を得るを見れば、是に自ら菩薩は二つの縁を以て其の心を慰喻するなり。何等を二と爲す。謂はゆる、菩薩を因とする故に諸の如來あり。如來を因とする故に聲聞緣覺あり。と。是くの如くに思惟して、二乗の人は利養を得と雖も、我れは猶彼れに勝れり。彼れの食む所の者は是れ我が父の物なれば、云何ぞ中に於て希望を生ぜんや。と。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行して施を行ふ時に、六波羅蜜を具足するなり。何等を六と爲す。善男子、菩薩は方便を行する時に、若し乞見を見れば、憐愍の心を除いて大施を具足するなり。是れを檀波羅蜜と名く。自ら禁戒を持ちて持戒の者に施し、破戒の人を見れば勸めて戒を持たしめ、持戒を勸め已つて然る後に給施するなり。是れを尸波羅蜜と名く。自ら瞋恚を除きて慈愍を行ひ、心に穢濁無くして衆生を利益せんとて、心を等しうして施すなり。是れを瞋提波羅蜜と名く。若し飲食・湯藥を施さんには、即時に具足し、身・心精進して、去來進止し屈伸・俯仰するなり。是れを毘梨耶波羅蜜と名く。若し施を行じ已つて、其の心に定を得て、歡喜悅預して專念にして亂れざる、是れを禪波羅蜜と名く。是くの如くに施し已つて、諸法を分別して、施す者は是れ誰れぞ。誰れを受くる者と爲すか。誰れは報を受くる者ぞ。と是くの如くに觀じ已るに、一法として、名けて、施す者、若しは施を受くる人及び報を受くる者と爲すものを有つ無き、是れを般若波羅蜜と名く。善男子、是れを菩薩摩訶薩は方便を行するに、六波羅蜜を具すと名くるなり。と。

【七】一切智心を以て、乃至、願するなり。

異譯本には「若し我れ是の一切智心を以て此の乞人に施さば、即ち是くの如き善浪方の故を以て、當に寶手を以て常に珍寶を出して、普く一切衆生に施さん」とあり。

【八】寶手。手より隨意に財寶を出す名を寶手者と曰ふ。

【九】心を等しうして。

異譯本には「等住心を起して」とあり。

【一〇】其の心に定を得て、乃至、亂れざる。

異譯本に「心は一境に住して、散亂を起さざる」とあり。

量の戒・定・慧・解脫・解脫知見を得る、是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行するに、若し十方世界の衆生の、諸の樂を受くるを見れば、見已るや是くの如き念を作すなり。願はくば、一切衆生の一切智の樂を得んことを。と。若し十方世界の衆生の、諸の苦の報を見れば、諸の衆生の爲めに、諸罪を懺悔して是の大莊嚴を作すなり。是の衆生の受くる所の苦惱の如きを、我れ悉く代つて受け、彼れをして樂を得しめん。是の善根を以て、願はくば、一切智を成じて一切衆生の苦惱を除かんことを。と。是の因縁を以ての故に、畢竟して一切の諸苦を受けずして純ら諸樂を受くる、是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行するに、若し一佛を禮して恭敬し供養し尊重し讚歎せば、是の念を作すなり。一切の如來は一法界・一法身・一戒・一定・一慧・一解脫・一解脫知見と同じ。と。是の念を作し已つて、當に知るべし、一佛を禮して恭敬・供養・尊重・讚歎する若きに、即是一切の諸佛を禮拜して供養・恭敬・尊重・讚歎することを。一佛を供養する若きに、即是に十方の諸佛を供養することを。是くの如くにして十方の佛を供養し已る、是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行するに、若し鈍根の者なりとも、應に自ら輕んずべからずして、乃至、若し能く一四句の偈に通利せば、是の念を作すなり。一四句の偈を解する若きは、即一切の佛法を知るなり。一切の佛法は、皆此の一偈の義中に攝在すればなり。と。是くの如くに通達し已つて、心に懈怠せず、諸國の城邑・聚落に至る若きにも、慈悲心を以て廣く人の爲めに説いて、利養・名聞を求めずして、讚歎して是の如き願を作すなり。此の四句の偈を他をして聞かしめ、是の善根の因縁の方便を以て、願はくば、已に一切衆生をして多聞ならしめんこと、皆阿難の如くに、及び如來の辯を得しめん。と。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行するに、若し貧窮の家に生ぜば、是の菩薩は、乃至、乞食して一の搏食を得るが若きにも、持ちて

【六】一四句の偈を。乃至。攝在すればなり。吳譯本には「諸べて、大衆を修する者あつて、若し能く此の一四句の偈に於て、其の義を解了せば、即ち能く彼の一切の語言に於て義趣に通達し、等」とあり。

智勝菩薩に告ぐらく。善男子、汝の間ふ所を恣にせよ。當に汝が爲めに説いて、汝の疑ふ所を斷つべし。と。爾の時に、智勝菩薩は佛に白して言はく。世尊、言ふ所の方便は、何等を菩薩の方便と爲すか。世尊、云何に菩薩摩訶薩は方便を行するか。と。是くの如くに問ひ已れるに、佛は智勝菩薩を讃じて言はく。善い哉、善い哉、善男子、汝諸の菩薩摩訶薩の爲めの故に方便の義を問へるは、利益する所多く、安樂にする所多し。世間を愍念して、唯天・世人を利益し安樂にせんとて、未來の諸の菩薩の智慧及び去來現在の諸佛の法を攝めんと爲す故に。善男子、當に汝が爲めに説くべければ、諦に聽け。諦に聽きて善く之れを思念せよ。と。智勝菩薩は教を受けんとて聽けり。

善男子、方便を行する菩薩は、一の搏食を以ても一切の衆生に給施するなり。何を以ての故ぞ。方便を行する菩薩の、一の搏食を以ても下畜生に至るまでに施與するは、一切智を求めんと願じつつ、是れを以て菩薩は一切衆生に與へて、之れを共にして阿耨多羅三藐三菩提に迴向すればなり。是れを以て、二つの因縁を以て一切衆生を攝取するなり。謂はゆる、一切智心を求め及び方便を願するなり。善男子、是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名く。復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行するに、若し施を行ふ人を見れば隨喜の心を生じ、此の隨喜の善根を以て一切衆生に與へて、之れを共にして阿耨多羅三藐三菩提に迴向せんと願するなり。是の方便に、菩薩は亦、施す者受くる者一切智心を離れざらんことを願じ、假令ひ受くる者は是れ二乗の人なりとも、亦一切智心を離れざらんことを願するなり。是れを菩薩摩訶薩は方便を行すと名くるなり。復次に善男子、菩薩摩訶薩は方便を行するに、若し十方世界の無主の華樹及び種種の香を見れば、合集して以て諸佛に供養せんと願するなり。若しくば、十方世界の中の有主の華香の、若しは香若しは葉の風に吹るるを見れば、一切合集して、以て十方の諸佛を供養せんと願するなり。是の善根を以て、若しは自ら爲めにし、若しは一切衆生の、一切智心を具せんが爲めにするなり。是の善根の因縁を以ての故に、無

【五】無主の華樹及び種種の香。「無主」とは「所有主」無き者を謂ふ。異譯本「佛說大方廣善巧方便經」(北宋、施護、譯)には「一切の微妙の爰す可き香樹、華樹」とあり。

等は定つて常に無上覺を成すべし。と。是に於て、王子及び諸の同伴は、既に供養を興して五神通を獲、即佛前に於て種種に變現し、出家して道を爲めたり。爾の時に、諸の菩薩摩訶薩及び諸の天人の有らゆる、大菩提に趣向せる者は、彼の王子の、諸の同友と與に、衆の樂む所に隨ひ神變を現せるを見、皆大に歡喜して、咸く是の言を作さく。師子王子の問ふ所の疑惑を、如來法王は悉く除斷を爲したまへることは是くの如し。世尊は不可思議にして、如來の正法及び能く信受すること、乃至、果報も不可思議なり。如來の功德は無量無邊にして、一切の法に於て明達したまはざる靡く、世の導師と爲して、未だ度せざる者を度せんと、普く能く十方世界に遍うして、悉く已に三世の諸法を了知したまへり。誰れか智者にして、是くの如くに安樂の處に生ずる功德の衆を聞くことを得るあつて、猛利の信樂を發起して、菩提を趣求せざらんや。と。

佛の是の經を説き已りたまふや、師子王子等五百の同友は、歡喜して奉行せり。」

大乘方便會 第三十八の一

東晉 竺難提 漢譯

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は舍衛國の祇樹給孤獨園の精舍に在して、大比丘八千人と俱なりしが、皆學・無學の大聲聞衆なりき。菩薩摩訶薩は萬二千人にして、皆神通を得て衆に知識せられ、陀羅尼・無礙辯才を得、諸の法忍を得、無量の功德を皆悉く成就せり。

爾の時に、如來は三昧より起つて、無量なる百千萬億の衆生に恭敬し圍遶せられて、法を説かんと爲せり。爾の時に、衆中に菩薩摩訶薩の、名けて智勝と曰へるありしが、即、座より起ち、右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向つて、佛に白して言はく。世尊、一事を問ひたてまつらんと欲す。唯願はくば、聽許したまはんことを。若し佛聽したまはば、乃ち敢て諮請せん。と。佛は

んと。

爾の時に、王子は諸の大衆と是の偈を聞き已るや、咸く是の言を作さく。佛の説きたまふ所の如き此の諸の妙行を、我等今より盡く當に修學すべし。と。是の時に、如來は即微笑を現し、大光明を放つて遍く無量無邊の世界を照せり。是に於て、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、何の因縁を以て此の微笑を現したまへるか。願はくば、宣説を爲して疑惑を斷除したまはんことを。と。

爾の時に、佛は彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。善男子、此の王子等五百の同友は、皆往昔に於て、無上正等の菩提を求めん爲めに、十那由他八十億の諸佛を恭敬して供養せり。而して我れ往燃燈佛の時に在つて、婆羅門の子と作つて彼れを成熟せり。然れば、彼の諸人は、未來世の彌勒佛等の諸の世尊の前に於て、恒に化生を受けて親しく供養を承げ、是くの如くに十億の如來に事へ奉ること三百劫を滿し、其の最後の佛の無邊智と號すに、善く諸法を學ばん。時に無邊智佛は、彼の諸人の心の欲樂を知り、各應ずる所に隨ひ、阿耨多羅三藐三菩提の記——同じく安樂光嚴劫の中に於て等正覺を成じて、皆智慧幢相と號し、此の諸佛の利の有つ所の莊嚴も、亦西方の無量壽國の如くに、等しうして差別無し。——を授くることを爲さん。善男子、若し衆生あつて、此の説く所を聞いて信解を生じ、當に大菩提を成すべしと發願せば、應に知るべし、是の人の獲る所の功德は、三世の中に於て倫匹ある無きことを。善男子、若し人あつて、能く六百劫の中に、恒に衆寶を以て諸の佛刹に廻うして如來に施し奉らん、若しくば復人あつて、是の經典を聞かんに、生ずる所の善根は、前の功德に比ぶるに、算數・校計も及ぶ能はざる所なり。と。是の法を説ける時に、衆中の八十億の衆生は、一時に阿耨多羅三藐三菩提に趣き向ひ、又此の三千大千の世界は皆悉く震動して天より妙華を雨せり。

爾の時に、王子は五百の同友と與に、授記を聞き已るや、歡喜踊躍して咸く念言を作さく。我

【四】智慧幢相。

異譯本「佛說太子嗣護經」(西晉、竺法護、譯)には「若那伎頭陀耶」とあり。
又、別の異譯本「佛說太子和休經」(譯者失名)には「若那頭陀耶」とあり。

るか」と。

世尊は答へて曰はく。

燈ともを施ほさは天眼を感じ 樂がくを奉らば天耳を成じ 二邊を遠離する 故に他心智を獲とく」と。

王子は又問はく。

云何にせば淨土と 及び衆の圓滿とを得 隨體ずたいの圓光を獲るか 功德海當とくどくうみに説きたまふべし

と。

世尊は答へて曰はく。

願に由つて淨土を得 忍力は衆をば成就し 衆に妙寶の帳さばりを施さば 周遍なる圓光を得ん

と。

王子は又問はく。

云何にせば生ずる所の處にて 菩提心は壞れず 乃至夢中に於ても 亦忘失することある無き

か」と。

世尊は答へて曰はく。

凡すべて遊行する所の處 城邑聚落じゆりやくの中にて 衆を化して菩提に趣かば 菩提の心は壞れず

と。

王子は又問はく。

云何にせば大牟尼 衆に爲つて愛せられて 一切の法を攝取するか 唯願ただはくば人尊説きたま

はんことを」と。

世尊は答へて曰はく。

勝志にて具足を樂たのむ 菩提心より退かずば 此れに由つて諸法を攝とめて 衆に爲つて愛せられ

【三】 功德海(Chaitanya)。佛徳に由る讚號なり。

せしめん と。

王子は又問はく。

云何にせば長壽を得 少病の身を獲 壞り難き眷屬を感ずるか 願はくば牟尼宣説したまはんことを と。

世尊は答へて曰はく。

害せずんば長壽を得 他の憂を除かば少病に 諍訟をば和合せしめば 壞り難き眷屬を得んと。

王子は又問はく。

云何にせば財富を得 資具に損減無く 世世の生ずる所に於て 大威徳を成就するか と。

世尊は答へて曰はく。

嫉まずんば財富を得 慳む無くんば資具増し 謙下せば尊貴を成じて 威徳の自在を有たんと。

王子は又問はく。

云何にせば大力を獲 衆魔は害する能はずして 威勢は常に超勝するか 唯願はくば人尊説きたまはんことを と。

世尊は答へて曰はく。

恒に上味の食を施さば 恐怖に安隱ならしめ 斯れに由つて大力を得て 威勢は常に超勝せんと。

王子は又問はく。

云何にせば 天眼及び天耳を成就することを得 云何にせば能く 種種なる衆生の心を了知す

世尊は答へて曰はく。

諸の法施の中に於て 曾て障礙を爲さずんば 此れに因るが故に恒に、諸の如來に値遇するこ
とを得 と。

王子は又問はく。

云何にせば諸難を離れ 而して善趣に生じ 云何にせば世世の中にて 性は常に放逸無きか
と。

世尊は答へて曰はく。

淨信ならば諸難を離れ 戒を持たば善趣に生れ 空を修習するに由つて 生ずる所に放逸無し
と。

王子は又問はく。

云何にせば神通を獲 及び宿命智を證し 能く永く諸漏を盡すか 願はくば佛開演を爲したま
はんことを と。

世尊は答へて曰はく。

乘を施さば神通を得 教授せば宿命を成じ 二邊を捨離せば 是れに由つて諸漏を盡さん
と。

王子は又問はく。

云何にせば淨業成じ 魔網は縋する能はず 而して世世の中に於て 衆に爲つて愛せらるるか
と。

世尊は答へて曰はく。

勝解せば淨業を成じ 精進せば魔を摧伏し 説の如くにして修行せば 生ずる所に衆をして愛

【二】乘。大小乗の「度世の法」を曰ふ者なるべし。

心を修めば三昧を得 忍せば陀羅尼を獲 衆生を敬重せば 言を發するに人は信受す と。
王は又問はく。

云何にせば正念を得 具足せる智慧生じ 法の如くにして修行するに 堅固にして壞られざる
か と。

世尊は答へて曰はく。

諳はずんば正念を得 巧に觀ぜば智慧生じ 修むる所の行を尊重せば 法を護る心堅固なり
と。

王子は又問はく。

云何にせば妙相を成じて 三十二 八十隨形好を具足し 觀る者樂んで厭ふ無きか と。

世尊は答へて曰はく。

施に由らば諸相を得 慈を行はば隨好を獲 心を衆生に等しうせば 觀る者厭足する無し
と。

王子は又問はく。

云何にせば梵音 迦陵頻伽の聲を得 云何にせば世間の 見る者をして皆歡喜せしむるか
と。

世尊は答へて曰はく。

誠言ならば梵音を獲 迦陵は軟語に由り 綺言兩舌を離れば 見る者皆歡喜せん と。
王子は又問はく。

何等の業行に由らば 諸佛の前に生じて 能く微妙の義を請ふことを得るか 唯願はくば如來
説きたまはんことを と。

【一】心を衆生に等しうせば、平等無差別に觀するを謂ふ。

卷の第一百六

唐善提流志 漢譯

阿闍世王子會 第三十七

是くの如くに我れ聞けり。一時佛は王舎城の耆闍崛山の中に在して、大比丘の衆千二百五十人と俱なりき。

爾の時に、阿闍世王の愛する所の子の、名けて師子と爲せるが、其の同友五百人と俱にして、皆已に阿耨多羅三藐三菩提に趣向し、各種種の幢旛、寶蓋を持ち、王舎城より耆闍崛山に往き、如來の所に到つて禮拜して供養せり。是に於て、王子は合掌し恭敬して、佛に白して言はく。惟願はくば、如來我が爲めに諸の菩薩の行を宣説したまはんことを。と。

爾の時に、王子は即頌を説いて言はく。

云何にせば端正を得て 蓮華の中にて化生するか
云何にせば宿命を知るか 願はくば佛宣説を爲したまはんことを。と。

爾の時に、如來は諸行に了達して、彼岸を究竟したれば、間に隨つて答ふるに即頌を説いて曰はく。忍辱ならば端正を得 施さば蓮華にて化生し 法施せば宿命を知らん 汝當に是くの如くに解すべし。と。

王子は又問はく。

云何にせば 三昧陀羅尼を成就するを得 凡べて發言する所有らば 皆人をして信受せしむるか。と。

世尊は答へて曰はく。

長夜に安からざらん。と。是に於て、彌勒菩薩は復佛に白して言はく。世尊、惟願はくば、之れを説きたまはんことを。世尊にして若し説きたまはば、能く多く一切世間の天・人の大衆を利益せん故に。と。佛は彌勒に告ぐらく。是の經典の如きは、往昔已に七十四億百千那由他の諸佛世尊あつて、此の方に於て稱揚し讚説せるにて、皆文殊師利及び善住意天等の問答・證論に因つてなり。と。彌勒菩薩は、復佛に白して言はく。世尊、是の文殊師利及び善住意天子は、此の法門を開けること其れ久しきか近きか。と。佛は彌勒に告ぐらく。乃往に七阿僧祇劫を過して、佛世尊あつて普華最上師子遊步勝功德衆如來・應供・正遍覺と號せしが、是の善男子等は、彼の佛の所に從つて、初めて此の經を聞ける所なり。と。是の經を説ける時に、衆中に若干の恒河沙の衆生あつて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、復前の數に倍せる衆生は不退轉に住し、復前の數に倍せる衆生は、塵に遠り垢を離れて法眼淨を得たり。

爾の時、世尊の此の經を説き已りたまふや、是に於て、文殊師利と善住意天子と、及び彼の十方の諸の菩薩衆、及び彼の一切の諸の天子の衆、及び尊者舍利弗・尊者摩訶迦葉・諸の比丘の衆、乃至、有らゆる天・人・阿修羅・諸の龍・鬼神の一切の衆等は、佛の所説を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。

【三四】此の方に於て稱揚し讚説せるにて、別の異譯本に「此の地處に於て、此の法門を説きしが」とあり。

の諸の如來・應供・正遍覺は、斯くの如き説——一法として、能く衆生をして、生死の中に於て煩惱を滅除し、涅槃に解脱せしむることある無く、亦衆生有法の生滅無く、乃至、過失ある無く、出無く動無し。との——を作したまひ、是くの如くに、未來・現在に説く所も亦然り。と。若し此等の法は是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は闍浮提に弘つて、遍く流布を行はんとは、是れ眞實の語なり。又、世尊の此の法を説きたまへる時の如きに、菩薩は是の三昧の諸の陀羅尼門を得ることある無く、亦復彼の諸佛の説きたまへる所の語言・句義無く、乃至、一の文字、句をも説かず、人の聽聞すること無く、人の解を得ること無く、人の成佛すること無しとの、此等の如き法は是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は弘く闍浮提に遍く流布を行ひ、熾然として滅せずとは、是れ眞實の語なり。世尊の説きたまへる如き、戒身ある無く、三昧ある無く、智慧ある無く、解脱ある無く、解脱知見ある無しとの、此等の如き法は是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は弘く闍浮提にて普く流布を宣べ、熾然として滅せずとは、是れ眞實の語なり。世尊の説きたまへる如き、諸の菩薩等は、布施を行ぜず、禁戒を持たず、忍辱を修せず、精進を發さず、禪定に入らず、般若を得ず、菩提を求めず、諸地に轉ぜず、佛道を得ず、諸力を得ず、無畏を得ず、諸相を得ず、諸辯を得ず、法輪を轉ぜず、衆生を度して正覺を取らしめず。との此等の如き法は是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は、弘く闍浮提にて普く流布を宣べ、熾然として滅せずとは、眞實の語と爲さん。と。文殊師利の、此の誠實の誓を宣べたる時に、三千大千世界の大地は六種に震動せり。

爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩は、佛に白して言はく。世尊、何の因縁を有つて、今此の世界は是くの如くに大に動くか。と。佛は彌勒菩薩に告げて言はく。彌勒、汝今應に是くの如き事を問ふべからず。所以は何ぞ。末世の衆生は、鈍根にして信少ければ、聞くとも解する能はずして疑慢に墮し、

【三】亦、衆生有法の生滅、乃至、動無く。
別の異譯本には「衆生あるに非ず、法の生あるに非ず、法の滅あるに非ず、失非ず、動非ず。」とあり。

【三】末世の衆生は、乃至、安からざらん。
別の異譯本に「少信の衆生は、聞くとも解すること能はずして、則ち怖畏を生ぜん。」とあり。

苦、無常若しは空、無我は是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は閻浮提に弘つて、熾然として滅せざらんと、誠實の語を爲さん。と。文殊師利の言はく。世尊、世尊の説きたまへる如き、我無く、人無く、衆生無く、壽命無く、丈夫無く、摩奴闍無く、摩那婆無く、煩惱無く、清淨無きこと、是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は閻浮提に弘つて、熾然として滅せざらんとは、是れ誠實の語なり。世尊の説きたまへる如く、生死無く、涅槃無く、貪欲無く、瞋恚無く、愚癡無く、名無く、色無く、因無く、果無く、有無く、知無く、身無く、身の證無く、心無く、心の果無く、念無く、念の處無く、發無く、發の處無く、色無く、受無く、想無く、行無く、識無く、眼無く、色無く、耳無く、聲無く、鼻無く、香無く、舌無く、味無く、身無く、觸無く、意無く、法無く、欲界無く、色界無く、無色界無く、斷無く、常無しとの是等の如き法は是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は閻浮提に弘つて、熾然として滅せざらんとは、是れ誠實の語なり。世尊の説きたまへる如き、須陀洹無く、須陀洹の果無く、斯陀含無く、斯陀含の果無く、阿那含無く、阿那含の果無く、阿羅漢無く、阿羅漢の諸法無く、辟支佛無く、辟支佛の諸法無く、如來無く、如來の諸法無く、證平等無く、力無畏無く、智果無く、聖證無く、空無く、無相無く、無願無く、離欲の處無く、本性を得る無く、平等ある無く、證處ある無く、暗無く明無く、縛無く解無く、彼岸無く此岸無く中間無く、念無く覺無しとの此等の如き法は是れ實言ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は閻浮提に弘つて、遍く流布を行ひ、熾然として滅せざらんとは、是れ誠實の語なり。世尊の説きたまへる如く、諸の法門に於て、衆生の解脫を信じて果を得るに、相應不相應すること有る無くして、合せず散ぜず。との是等の如き法を實言と爲さば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は閻浮提に弘つて遍く流布を行ひ、熾然として滅せざらんとは是れ眞實の語なり。世尊の説きたまへる如きは、過去

諸の善男子・善女人等をして、咸く之れを聞くことを得しめたまはんことを。と。文殊師利の是の請を作せる時に、即三千大千世界の一切の音樂をして、鼓たざるに自ら鳴り、一切の諸樹に自然に鬱茂し、一切の衆華に咸悉く開き敷かしめたり。又此の三千大千世界は六反に震動し、大光明を放つて遍く三千大千世界を照し、日月の光を奪うて復と現れざらしめ、百千億の天は、歡喜踊躍して未曾有を得、虚空に住して、天の華香・種種なる諸華及び諸の華鬘・塗香・末香を雨すこと、雨の如くにして下し、香氣氤氳として十方に充滿し、天の樂音の其の聲の和雅なるを作して、一切咸く共に叉手し合掌して、同聲にて稱讚すらく。希有なり、希有なり。奇特なる法門を、今此の文殊師利大士の説く所にて、我等をして聞かしめたることや。我れは福會を爲せり。生れしより今に至つて、再び閻浮にて大法輪を轉ぜるに遇ひたればなり。諸の衆生の、善根を具足せるあつて、然る後に乃ち此の深法を聞くことを得れば、若し諸の衆生にして、聞き已つて信じ行ぜば、當に知るべし、是の人は已に曾て一切の諸佛を供養し、亦已に甚深の法忍をも得たりと爲すことを。若し衆生あつて、此の經典を聞きて、驚かず怖れず、退かず、没ますして、深心にて愛樂せば、當に知るべし、是の人は二乗の善根の中を経ずして來れることを。と。

爾の時に、文殊師利は、佛に白して言はく。世尊、今此の奇瑞にて、將に是の法門の、未來世の閻浮提の中に於て、遍く流布を行ひ、住持して滅せざるを爲す無からんとするか。と。佛言はく。是くの如し、是くの如し。向に現るる所の瑞は、唯是の經の、閻浮提に於て遍く流布を行ひ、住持して滅せざるに爲る故なり。と。文殊師利の言はく。惟願はくば、世尊、更に誠實を建てて、此の經典をして、世の流れ行くに従ひ、熾然として滅せざらしめたまはんことを。と。佛言はく。文殊師利、若し三解脱門にて能く涅槃を證すること、是れ誠實ならば、後の末世の五百歳の時に於て、此の經の法門は閻浮提に弘つて、熾然として滅せざらんと、誠實の語を爲さん。文殊師利、若しは

隨ひ形像を現して、諸の佛事を作さんと欲すること、意の如くに即能くするなり。所以は何ぞ。一切の諸法は皆幻化の如くなればなり。是の義を以ての故に、作す所の、心に隨ふことは、譬へば日月宮輪の虚空の處に住して、初より曾て下らされども、諸の器中に入つて、其の光普く照して周遍せざること摩きが如く、菩薩も是くの如くに、安住不動にして、心に隨つて普く十方の佛前に現じて、或は聲聞・緣覺等の身を現じ、或は梵王・帝釋等の像を現じ、或は四天・轉輪王の事を現じ、或は國主・大臣の政化を現じ、是くの如くに、乃至、一切の惡趣の衆生の形類を示現すること、意に隨ひ即能くし、而も亦初より興作の想も無きなり。と。

稱讚付法品 第十

爾の時に、世尊は文殊師利に告げて言はく。文殊師利、若し此の修多羅の甚深なる法門を聞くことを得るあらば、佛の世に興りたるに値ひたると、等しうして異なる無し。文殊師利、若し此の經を聞かば、須陀洹を證せると異なる無く、斯陀含を證せると異なる無く、阿那含を證せると異なる無く、阿羅漢を證せると異なる無し。何を以ての故ぞ。彼の如くには異なる無きを以ての故なり。文殊師利、又若し此の經を聞きて心に信解を生ぜば、彼の後身の菩薩の、菩提樹下に於て道場に坐して、必ず正覺を成ずると、一ら等しうして異なる無し。何を以ての故ぞ。斯の法門の如きは、即ち是れ三世の諸佛世尊の要道なる故なり。と。是に於て文殊師利は佛に白して言はく。世尊、是くの如し、是くの如し。佛の説きたまふ所の如くに、空の異なる無きが如く、無相の異なる無きが如く、無願の異なる無きが如く、如くの異なる無きが如く、法界の異なる無きが如く、實際の異なる無きが如く、平等の異なる無きが如く、解脱の異なる無きが如く、離欲の異なる無きが如きなり。と。

爾の時に、文殊師利は、佛に白して言はく。世尊、惟願はくば、如來の是くの如き甚深なる法門を護持して、後の末世の五百歳の時に於て、當に此の經をして、闍浮提に於て遍く流布を行ひて、

ことを見るや。舍利弗は言はく。不なり。文殊師利の言はく。是くの如くに舍利弗、彼の劍は既に無く、復業報無くば、誰れか斯の業を造り、誰れか報を受くる者ぞ。而も反つて、我が報を受くる處を問ふか。舍利弗は言はく。大士は何の義を以ての故に、復是くの如くに説くか。文殊師利の言はく。我が見る所の如くんば、實に法の業・報・熟とする者ある無し。所以は何ぞ。一切の諸法には、業無く、報無く、業報の熟無き故なり。と。

爾の時に十方世界より諸來れる菩薩摩訶薩等は、同じく佛に請うて言はく。世尊、惟願はくは、世尊の威徳の力を以て、是くの如き文殊師利を、十方の諸佛世界に至つて斯くの如き法を説かしめ、彼の衆生をして咸く聽聞するを得ること、我れの如くに異なること無からしめたまはんことを。と。是に於て、文殊師利菩薩摩訶薩は彼の十方の諸菩薩に語つて言はく。諸の善男子、汝今宜しく各一心に自の佛世界を觀察すべきなり。と。時に彼の十方の諸の菩薩衆は、文殊師利より是の語を聞き已るや、即各本の自の佛世界を觀るに、皆文殊師利の、其の佛前に處つて、諸の大衆の爲めに斯くの如き法を説けるを觀、復各彼に皆善住意天子あつて、是の法門を問へるを見、又各彼の十方の佛國の諸菩薩等の、悉く皆大に集れるを見、又皆彼の諸天子の衆の、其の數の多少も、此と殊らざるを見、又各彼の佛界の清淨なる莊嚴の微妙なることも、此と異なる無きを見たり。彼の諸の菩薩摩訶薩の衆は、是くの如きを見已るや、殊特の心を生じ、未曾有を得、同聲にて讚じて言はく。甚だ奇なり、甚だ特なり。今此の文殊師利の道德巍巍として斯の世界に處り、安住不動にして、而も能く普く十方の佛前に現することや。と。爾の時に、文殊師利は、彼の十方の菩薩衆に告げて言はく。諸の善男子、汝今當に聽くべし。譬へば幻師の既に善く學び已るや、本の座を離れずして、能く種種なる色像を幻作するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是くの如くに、既に能く般若波羅蜜を善く學ぶことを、幻の法の如くにし已らば、即ち一切の幻の如き法の中に於て、其の十方の諸の佛國土に

【三】既に能く、乃至、已らば。異譯本に「眞に學んで般若波羅蜜を曉了し、法の幻なるを分別して、悉く其の旨に通ぜば」とあり。

世間の大地をして震動せしめたるか。と。時に十方の諸佛は、各各其の弟子に告げて曰はく。諸の善男子、今世界の名けて娑婆と曰へるあつて、彼の土に佛の釋迦牟尼如來・應供・正遍覺と號せるあつて、現在說法したまへり。然るに彼の世界に、一の上首の菩薩摩訶薩の文殊師利と名くるあつて、久しく已に阿耨多羅三藐三菩提より退かざるが、新學の菩薩の執著の心を破壊せんと欲する爲めの故に、射ら利劍を乗り、馳走して彼の釋迦如來に趣きて深法を顯發せり。是の因縁を以ての故に、大地をして是くの如くに震動せしめたるなり。彼の佛世尊は、智劍の故に因つて甚深の法を説きて、復無量無邊なる阿僧祇の衆生をして、法眼清淨に、心に解脫を得、深法忍を證して、菩提に安住せしめたまへり。と。

爾の時に、世尊は是くの如き大神變を建立せる時に、方便力を以て、彼の衆中の一切の諸來れる新學の菩薩の、善根微少に、未だ分別を離れずして相を取る衆生をして、皆悉く彼の劍を執れる事を親す、亦其の説く所の法を聞くことをも得ざらしめたり。

爾の時に、尊者舍利弗は、文殊師利に白して言はく。大士、仁は今已に極猛なる惡業——是くの如き大・人の大師を害せんと欲する——を造りたるが、是の業若し熟せば、當に何に於て受くべきか。と。時に文殊師利は、舍利弗に告げて言はく。是くの如し、大徳。汝の説く所の如きも、我れ今唯能く是くの如き極重たる惡業を造作したるのみにて、實に何の處に於て受くるかを知らざるなり。然れども、舍利弗、吾が見る如くんば、當に化人の幻業の熟する時の若くに、我れも斯くの如くに受くべし。所以は何ぞ。彼の幻化の人には心の分別無く、念想を有つ無くして、一切の諸法は皆幻化する故なり。又、舍利弗、我れ今汝に問はん。汝の意に隨つて答へよ。意に於て云何。汝の意の如くんば、實に劍を見るや。舍利弗は言はく。不なり。文殊師利の言はく。又定つて、彼の惡業の得可きを見るや。舍利弗は言はく。不なり。文殊師利の言はく。又定つて、彼の果報を受くる

【九】 實に何の處に於て受くるかを知らざるなり。

別の異譯本に「此の行の何の處に於て熟するかを知らざるなり。」とあり。

【一〇】 吾が見る如くんば、乃至、受くべし。

別の異譯本に「何の處にか、幻人の幻化の業にして熟せば、我れも是くの如くに熟せん。」とあり。

法の、和合し集聚し決定して成就して、名けて、佛と爲し法と名け僧と名け父と名け母と名け阿羅漢と名くるを得て、定つて取る可き者を有たば、則ち應に盡とすべからず。然り而して、今此の一切の諸法は、體無く實無く有に非ず眞に非ず、虛妄轉倒にして空なること幻化の如し。と。是の故に、中に於て、人の罪を得るもの無く、罪の得可き無ければ、誰れを殺す者と爲して、復殃を受けんや。と。彼の菩薩は、是くの如くに觀察し、明了に知り已るや、即時に無生法忍を獲得し、歡喜踊躍して、身を虚空に昇らすこと高さ七多羅樹にして、偈を以て歎じて曰はく。

諸法は幻化の如くなるを、斯に分別に由つて起れば、是の中には所有無く、一切の法は皆空なり。顛倒虛妄の想たる、愚癡にて我心を取り、我が昔の愆を計念し、作せる所の業の中に甚だ過去に大逆を爲し、父母の良田を殺し、羅漢の比丘を殺し、是に極重なる惡を爲したれば、彼の惡業を以ての故に、我れ當に大苦を受くべしと、疑網に没せる衆生の、法を聞き悔いて惑の除けるは、大名我が毒を抜き、我が疑心を破散したまへばなり、我れ已に法界の衆の惡は有る所無きを覺れるは、諸佛巧に方便もて、善く我等が意を知り、方便もて衆生を度して、諸の疑の縛を解くことを爲したまへばなり、何の處に諸佛あるか、法僧も亦復然く、父母は本より自ら無く、阿羅漢は空寂なれば、是の處に殺ある無く、云何ぞ業の果あらん、幻の生ずる所無きが如くに、諸法の性は是くの如し、文殊大智の人は、深く法の源底に達し、自ら手に利劍を握つて、如來の身に馳せ逼りたるは、劍の如くに佛を亦爾く、一相にして二ある無く、無相にして生ずる所無ければにて、是の中に何の殺をか云はん、と。

此の執劍の妙法門を説ける時に、十方の恒河沙の等の如き諸佛の世界は六種に震動せり。時に彼の十方の諸佛の世界に、一切の諸佛は現前に説法せしが、彼の佛の侍者は、各本國の大衆會の中に於て、座よりして起ち、咸く其の佛に請うて言はく、世尊、今の此の神變は是れ誰れの威徳にて、

【二〇】定つて、乃至、盡とすべからず。別の異譯本に「逆つて取る可きを有たば、則ち離とす可からず。」とあり。因みに「盡」も「離」も、謂はゆる「解脱」を指す者なるべし。

【二七】良田。善良の福田の義にして、父母は、我れに取つて善良なる福利を生ずるに由つて名く。

【二八】大名。「佛」の諱稱なり。

爾の時に、會中に五百の菩薩の、已に四禪を得、五通を成就したるあつて、然も是の菩薩は禪坐より起ちて、未だ法忍を得ずと雖も亦誹謗もせざりき。時に、諸の菩薩は宿命に通ぜる故に、自ら往昔行ぜる所の惡業の、或は父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、或は佛寺を毀ち、塔を破り、僧を壞るを見たり。彼等は明に是くの如き餘業を見て、深く生ぜる憂悔は常に心を離れず、甚深の法に於て證入する能はず、我心にて彼の罪を分別して未だ忘れず。是の故にて、深法忍を獲る能はずりき。爾の時に、世尊は、彼の五百の菩薩の分別の心を除かんと欲せん爲めの故に、即威神を以て文殊師利を覺悟したるに、文殊師利は佛の神力を承け、座よりして起ち、衣服を整理し、偏に右の髻を袒ぎ、手に利劍を執り、直ちに世尊に趣きて逆害を行はんと欲したり。時に佛は遽に文殊師利に告げて言はく。汝住れ汝住れ。應に逆を造すべからず。我れを害することを得る勿かれ。我れに必ず害を被らせんとならば、善く害を被らするを爲せ。何を以ての故ぞ。文殊師利、本より已來、我無く人無く丈夫ある無きに、但是の内心にて我、人あるを見るのみなれば、内心の起る時に、彼れは已に我れを害するを、即ち名けて害と爲すなり。と。時に諸の菩薩は佛の説を聞き已るや、咸く是の念を作さく。一切の諸法は悉く幻化の如くにして、是の中に、我無く、人無く、衆生無く、壽命無く、丈夫無く、摩奴闍無く、摩那婆無く、父無く、母無く、阿羅漢無く、佛無く、法無く、僧無くして、是の逆ある無く、逆を作す者無ければ、豈逆に墮することあらんや。所以は何ぞ。今此の文殊師利は、聰明聖達し、智慧倫に超えられたれば、諸佛世尊は此等を稱讚したまひ、已に無礙なる甚深の法忍を得、已に曾て無量なる百千億那由他の諸佛世尊を供養して、諸の佛法に於て巧に分別して、知つて能く是くの如き眞實の法を説き、諸の如來に於て等しく恭敬を念じたるに、而も忽として劍を掲げて如來に逼らんと欲するや、世尊は遽に告げて、且く住れ、且く住れ、文殊師利。汝我れを害する無かれ。若し必ず害せんには、應當に善く害すべし。所以は何ぞ。是の中に、若し一

【三】然も是の菩薩は、乃至亦、誹謗もせざりき。

別の異譯本に「時に彼の菩薩は、三昧に依つて起てども、未だ法忍を得ざりき。」因みに、此の「法忍」は「無生法忍」の略なり。

【四】汝住れ。乃至。乃ち名けて害と爲すなり。異譯本に「且く止れ。且く止れ。逆を造すを得る勿くして、當に善く害するを以てすべし。所以は何ぞ。皆、心從り因を發して、心は害を生ずるにて、心已に起る頃に、便ち殺を爲すを成ずればなり。」とあり。

【五】摩奴闍(Manusu)の「人」の總稱にして、即ち人類なり。

幻三昧の甚深なる境界を見聞せんと欲するか。と。善住意は言はく。大士、我れ誠に見んことを願ふ。と。時に文殊師利は言の如くに即如幻三昧に入れるに、時に應じて、十方の恒河沙の等の如き諸佛の國土の一切の境界は、自然に前に現じたり。是に於て善住意天子は、悉く東方の恒沙の佛土の、其の中に有つ所の種種なる衆くの事を見たり。——或は比丘の、是の經典の如きを稱揚し宣説するを見、或は比丘尼の像を見、或は優婆塞・優婆夷の像を見、或は大梵天王・天帝釋・四天王大王を見、或は人間の轉輪聖王を見、或は一切の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽を見、乃至、一切の鳥獸の種類の若干の形貌・好醜を見るに、皆法を説くことを爲したり。——此の東方の如くに、南・西・北方、四維・上下の一切の十方に、咸く是くの如き恒河沙の等の如き諸佛の國土あつて、有つ所の事業も亦皆是くの如くに等しうして異なることある無く、盡く是れ文殊師利の威神力なり。時に善住意天子は、既に是くの如き十方の佛土の一切の境界を見、歡喜踊躍して自ら持つ能はず。是に於て、文殊師利は三昧より起てるに、善住意天子は一心に敬仰して、文殊師利に白して言はく、大士、向に十方の諸佛の國土の無量の境界を見るに、佛事も亦殊なるに、而も各斯の經典の如きを宣説したり。と。爾の時に、文殊師利は善住意天子に問うて言はく。天子、意に於て云何。汝の向に見る所の東方に有つ所の一切の境界を、實なりと謂ふべきか。と。善住意は言はく。不なり。大士。文殊師利の言はく。此の東方の如くに、及び餘の九方も是くの如くに、十方に有つ所の境界も復實と爲すか。と。善住意は言はく。大士、一切皆虚にして實ある無きなり。所以は何ぞ。一切の諸法は本より生あること無きこと、其れ猶幻化の世間を欺誑することく、一切の諸法の轉變推移して常存無き者は、皆是れ虚妄の顯現の爲す所なれば、其の體を窮むれば、實に了に得可からずして、不作・不生・不起・不滅なればなり。と。是に於て、文殊師利は善住意を讚じて言はく。善い哉、善い哉、天子。誠に汝の言の如し。と。

是の故にて我れ眞の沙門と言ふなり。天子、若し眼は漏せず、耳は漏せず、鼻は漏せず、舌は漏せず、身は漏せず、意は漏せずんば、我れ復説いて眞の沙門と爲すなり。天子、若し説に依止せず、證に依止せず、處に依止せずんば、我れ復説いて眞の沙門と爲すなり。天子、若し去る處無く、來たる處無く、傷無く、瘡無くんば、我れ復説いて眞の沙門と爲すなり。天子、是を以て彼の句は、沙門に非ず婆羅門に非ざるを、我れは乃ち説いて眞の沙門と爲すなり。と。

爾の時に、善住意天子は、文殊師利を讃じて言はく。善い哉、善い哉。大士、實に未曾有なり。仁者は志金剛の如くにして、其の宣説する所に、章句を有つ無く、亦處とする所も無く、心感く了達して遺餘する所無し。と。文殊師利の言はく。天子、我れは心剛ならず。所以は何ぞ。吾れ自ら意を放つて、心柔忍に安んず。是の故に剛ならざるなり。と。善住意は言はく。大士、是の義云何。文殊師利の言はく。天子、吾れ恣心を以て、聲聞地に入り緣覺地に處れば、是れを放心と謂ふ。吾れ又心を恣にして、諸の毘勝生死の内に入つて、亦貪・悲・癡等の煩惱過患をも惡まざれば、是れを放心と謂ふ。と。時に善住意天子は、復文殊師利を讃じて言はく。善い哉、善い哉。希有なり、大士。仁は過去に久しく諸佛に供じ、衆の徳本を植ゑたるに由る故に、能く宣説の妙なること斯くの若きなり。と。文殊師利の言はく。天子、吾れ佛に供ぜること無く、善根をも植ゑざりき。所以は何ぞ。吾れ初より宿昔の所を見ず、更に文亦當來に作す所をも知らず。作す所ありと雖も、亦作を有つこと無し。諸佛の法に於て未だ曾て建立せざれば、云何ぞ能く衆の徳本を植うることあらんや。と。

神通證說品 第九

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、我れ昔曾て如幻三昧を開きしが、惟願はくば、慈を垂れて此の正受を顯したまはんことを。と。文殊師利の言はく。天子、汝、如

【三】漏せず。第二卷「漏」の解、參照。

【三】惟願はくば、乃至、顯したまはんことを。異譯本に「願はくば、定の意を顯して、正受する所を示さんことを。」とあり。

まで、我れ報恩を念ずとは言はざるなり。又復、天子、恩を報ぜざる者は、佛世尊の平等を宣説したまふが如し。謂はく。一切の法は、悉く作る所無く作る處ある無くして皆平等に入り、轉じ還ることある無く、亦超越も無く、自非ず他非ず、作・不作無しと。是の故に、我れ報恩無しと爲すなりと。

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、仁は何の處に住して、是くの如き説を作すか。忍に住して説くや。法に住して説くや。と。文殊師利の言はく。天子、我れの住する所は、忍に非ず法に非ず。善住意は言はく。大士は、實に何の處に住する故にて是くの如くに説くか。文殊師利の言はく。天子、我れ住する所無きこと化人の身の如く、我れは是くの如くに住するなり。善住意は言はく。大士、彼の化人は復何に依つて住するか。文殊師利の言はく。天子、如くの住するが如く、化は是くの如くに住するなり。天子、若く是くの如くなれば、汝は云何ぞ、何の處に住すと云ひ、忍と爲し法と爲すかと、斯くの如くに問はんや。天子、是の故に我が言ふ所は、忍は但其名のみあつて、名は住する處無く、法も亦是くの如くに、住する處ある無く、動轉を有つ無く、亦分別も無し。と。天子、當に知るべし。一切の諸法は悉く住する處無く、而して住と言ふは、是れ如來の、諸の衆生の爲めに、是くの如き説を作したまふを謂ふなり。所以は何ぞ。佛の説きたまふ所の如くんば、如來は彼の如法の法の中に住し、一切衆生も亦復是くの如くに如かに住して、初より移動せずと。如く衆生にして如ならば、即如來も如に、如來にして如ならば即衆生も如に、衆生と如來とは二無く別無きなり。と。

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士は、沙門那を言ふ所にて、沙門那とは義何の謂ぞや。文殊師利の言はく。天子、若し沙門に非ず婆羅門に非ずんば、是れを則ち名けて眞の沙門と爲すなり。所以は何ぞ。彼れの、欲界に著せず、色界に著せず、無色界に著せざるを以て、

【二九】忍。此の「忍」は謂はゆる「安忍」の義にして、主觀的認識の意なるべし。

【三〇】沙門那。第一卷「沙門」の解、参照。

は言はく。不なり、大士。文殊師利の言はく。是くの如し、天子。此の義を以ての故に、我れ是くの如くに説くなり。汝今若し能く聖僧を破壊せば、吾れ將に汝の是くの如き梵行に同ぜんとす。と。文殊師利の言はく。天子、若し人、佛を見せば、彼れは則ち佛に著せるなり。若し人、法を見せば、彼れは則ち法に著せるなり。若し人、僧を見せば、彼れは僧に著せるを爲せるなり。何を以ての故ぞ。佛・法・僧は得可きに非ざるを以ての故なり。天子、若し人、佛を見せず法を聞せず僧を識せずんば、彼れは佛に背かず法を謗らず僧を破らずと爲すなり。何を以ての故ぞ。其の佛・法・僧を得ざるを以ての故なり。天子、若し人、佛を愛し法を愛し僧を愛せば、彼れ佛・法及び僧に染著することを爲せるなり。天子、當に知るべし。若し人、佛・法・僧に著せずんば、是れを則ち名けて欲を離れたる寂滅と爲すことを。天子、此の義を以ての故に、我れ是くの如くに説くなり。汝今若し能く佛・僧に於て染著せずんば、我れ則ち汝の是くの如き梵行に同ぜん。と。

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、希有なり、希有なり。今日乃ち能く是くの如き甚深なる義の處を宣説せることや。我れ大士に於て、何を以て恩に報ぜんか。と。文殊師利の言はく。天子、汝恩に報する莫かれ。善住意は言はく。大士、我れ今云何ぞ報ぜざるを得んや。文殊師利の言はく。天子、汝、恩に報する莫かれ。所以は何ぞ。天子、汝能く是くの如くに恩に報ぜざる者は、即報することを爲すなればなり。善住意は言はく。大士、仁は今寧恩に報すること無かる可きか。文殊師利の言はく。天子、是くの如し、是くの如し。我れ恩を報せず、亦報ぜざるにも非ず。善住意は言はく。大士、仁は何の義を以て更に是の説を作すか。文殊師利の言はく。天子、凡愚の人は、種種の法を造り、種種の見を起し、種種の行を行ひ、是くの如き種種の見行を作すを以て、是の故に念言するなり。我れ當に恩を報すべし。と。天子、此れ正行の善男子に非ざるなり。其れ正行を有てる善男子とは、乃至、少しの作の、或は作・不作を有つ無ければ、彼れは終

と。是くの如くに觀する時に、能く染むるものを見ず、染めらるゝものを見ず、染むる事を見ざるなり。見ざるを以ての故に則ち取を有つ無く、取らざるを以ての故に則ち捨を有つこと無く、捨てざるを以ての故に則ち受を有つこと無くして、捨てず受けざれば則ち離欲の寂滅涅槃と名く。是くの如くに、乃至、一切の受心にも亦是くの如くに説くなり。天子、當に知るべし、是くの如くなれば、殺の法は、殺に即して即生することを。是の故に、彼の殺を行ふ時に先づ其の頭を斬るは、是れを眞の殺と爲すと言ふを得るなり。是の義を以ての故に、我れ此くの如くに説けるなり。と。

爾の時に、文殊師利は、復善住意天子に語つて言はく。天子、汝は今若し能く諸佛に違背し、法・僧を毀謗せば、吾れ將に汝の是くの如き梵行に同ぜんとす。と。善住意は言はく。大士、仁は今何の故にて、復是くの如くに説くか。と。文殊師利の言はく。天子、汝の意の如きは、何を以て佛と爲すか。善住意は言はく。大士、如如の法界を、我れは是れ佛なりと言はん。文殊師利の言はく。天子、意に於て云何。如如の法界に染著せらるゝか。善住意は言はく。不なり、大士。文殊師利の言はく。天子、是の義を以ての故に、我れ是くの如くに説くなり。汝今若し能く諸佛を毀謗せば、吾れ將に汝の是くの如き梵行に同ぜんとす。と。文殊師利の言はく。天子、汝の意の如きは、何を以て法と爲すか。善住意は言はく。大士、欲を離れたる寂靜を、我れ名けて法と爲さん。文殊師利の言はく。天子、意に於て云何。彼の寂靜なる法に、染著せらるゝか。善住意は言はく。不なり、大士。文殊師利の言はく。是くの如し、天子。此の義を以ての故に、我れ是くの如くに説くなり。汝今若し能く正法を毀謗せば、吾れ將に汝の是くの如き梵行に同ぜんとす。と。文殊師利の言はく。天子、汝の意の如きは、何を以て僧と爲すか。善住意は言はく。大士、爲す無き法の者、是れを聖僧と名く。世尊の説の如くんば、一切の聖人は爲す無きを以て名を得たる故に、爲す無き法を聲聞僧と名く。文殊師利の言はく。天子、意に於て云何。是の爲す無き法に、執著せらるゝや。善住意

【一八】如如の法界に染著せらるるか。別の異譯本に「眞如の法界を、汝は染し能ふや不や。」とあり。

爾の時に、文殊師利は、復善任意天子に語つて言はく。天子、我れ復汝に語らん。汝若し十惡の業道を修行し、復能く「黒濁の垢法を成就し、一切十善の業道を放ち捐て、清白なる法を破壊し離散せば、我れ當に汝と共に梵行を修せん」と。善任意は言はく。大士、何の義を以ての故に、復是くの如くに説くか。と。文殊師利の言はく。天子、有つ所の一切の染濁・清白は皆悉く平等なり。彼れ平等なれば、我れ此くの如くに汝の梵行に同ずることを得るなり。天子、意に於て云何。汝何の法を以て染濁の平等と爲すか。善任意は言はく。貪らず、作さず、退かず、墮せざるを以て、是れを染濁平等と謂はん。文殊師利の言はく。天子、復何の法を以て白淨の平等と爲すか。善任意は言はく。法性及與び實際の三解脱門の如きを以て是に白淨の平等と謂はん。文殊師利の言はく。天子、吾れ即ち汝をして、眞法界の中に、修行を具足して周旋往返せしめん、其の事可なるか。善任意は言はく。不なり、大士。文殊師利の言はく。天子、是の義を以ての故に我れ斯の説を作すなり。染濁・清白を一切等しうせば、然る後に方に共に梵行を修すべし」と。

爾の時に、文殊師利は、復善任意に語つて言はく。天子、汝今若し能く應に死すべき人を取り、手に利刀を執つて其の頭を斬らば、吾れ當に汝に是くの如き梵行を許すべし」と。善任意は言はく。大士、何の義を以ての故に、復此の説を作すか。文殊師利の言はく。天子、殺す可き者は誰に、何者は是れ頭に、誰れか能く殺を行ふか。天子、汝今當に知るべし。須く貪欲を殺すべく、須く瞋恚を殺すべく、須く愚癡を殺すべく、乃至、我慢・嫉妬・欺誑・詭曲・執著・取相及び受・想等をも、天子、是れを殺す可しと爲すことを。天子、若くにして、人一心專精に自ら守つて、貪欲心發らば、即應に覺知して、方便もて散除し、還つて寂靜ならしむべし。云何に散除する。應に是の念を作すべし。此れは是れ空、此れは不淨なり。此の欲心の生ずる處、滅する處を求むるに、何所より來り、去つて何所に至るか。是の中に、誰れか染め、誰れか染を受くる者にして、誰を染の法と爲すか。

【二五】黒濁の垢法。「煩惱惡業」を指す。
 【二六】清白なる法。「正善の行爲」を指す。

【二七】汝今若し、乃至、是くの如き梵行を許すべし。
 異譯本に「若し劍にて頭を撃つて害殺せば、斯の人は乃ち梵行を修せん」とあり。

と名く可けんも、若し爲作無くんば、何をか梵行と名けん。又復、天子、若し見得する有らば梵行と名けんも、若し見得する無くんば、何をか梵行と名けん。善住意は言はく。大士、仁は今寧當に梵行無かるべきか。文殊師利の言はく。是くの如し、是くの如し。天子、我れに梵行無し。所以は何ぞ。夫の梵行とは、則ち梵行・非梵行に非ざる故を、我れは梵行と名くれればなり。と。時に善住意天子は文殊師利を讚じて言はく。善い哉、善い哉。大士、仁は樂説の辯才を具足せるを以て、能く是くの如き障礙無き説を作せりと。文殊師利の言はく。天子、若し吾れ無礙辯を具足せば、即障礙を成ぜん。何を以ての故ぞ。凡べて是の我及び我所に取著することは皆分別に由り、一切の分別は障礙に非ざる無き故なり。と。

爾の時に、文殊師利は、復善住意天子に語つて言はく。天子、汝若し能く一切の衆生の命根を斷除するに、然も刀を執らず、杖を持たず、楯を把らず、塊を捉らずして事を行はど、吾れ當に汝の梵行を修するに同せん。と。善住意は言はく。大士、復何の義を以て、斯くの如くに説くか。と。文殊師利の言はく。天子、衆生と言ふ者は、意に於て云何。善住意は言はく。大士、我れの衆生と言ふ衆生は、乃至、一切但名字あるのみ。皆想もて取るが故なり。文殊師利の言はく。天子、是の故に、我れは、汝今當に須く我想を殺害し、人想を殺害し、衆生想を殺害し、壽命想を殺害し、乃至、名字等の想を滅除し、是くの如くにして殺すべきを言へるなり。善住意は言はく。大士、當に何の殺具を以て殺を行ふべきか。文殊師利の言はく。天子、吾れ常に彼の利き智慧の刀を用ひて殺害を行ひ、殺を行ふ時に當つては、彼の利き智刀を應に是くの如くに執り、當に是くの如くに害すべく、然も亦執持の想及び害の想を有つ無きなり。天子、是の義を以ての故に、汝當に善く知つて我想及び衆生想を殺害すべく、是れを眞に一切の衆生を殺すと名く。是くの如くならば、吾れ當に汝に梵行を許すべし。と。

【三】夫の梵行とは、乃至、梵行と名くれればなり。

別の異譯本に「此の梵行は、則ち梵行、非梵行に非ざるを以ての故に。是くの如くならば、我れも梵行を行はずと言ふを得。」とあり。

【四】命根 (Vijñāna) 命根即ち壽命に對する小乘有部の見解は、第一卷、「命想」の解の如し。大乘唯識に在つては、第八識の種子の中に、人の一生の心身を相續せしむる能力有るを、假に命根と名くる者とす。而して「根は保持増進の義に據つて附加したるなり。」

如來・應供・正遍覺を供養すと雖も、我に取著するを以て是くの如き甚深なる經法を聞かずんば、終まで解脱して速に涅槃を證せざるなり。と。

爾の時に、世尊は文殊師利を讚じて言はく。善い哉、善い哉、文殊師利。是くの如し、是くの如し、誠に汝の言ふ如し。若し是くの如き甚深微妙なる經典を聞くことを得るあらば、佛の出世に値へると等しうして異なる無し。何を以ての故ぞ。若し須陀洹果を證せんと欲するあらば、此の經を聞くを要し、斯陀含を證せんと欲し、阿那含及び阿羅漢を證せんと欲せば、此の經を聞くを要すればなり。所以は何ぞ。我に著せざるを以て乃ち能く法を證し、此の法を證する時に、見る所ある無く得る所無き故なり。と。

爾の時に、世尊は尊者舍利弗に告げて言はく。舍利弗、汝當に知るべし。此の五百の比丘は地獄に墮つと雖も、後に獄より出でて速に涅槃を證すれど、彼の愚癡なる凡夫の人の見得に没し疑心に墮墜しつゝ如來を供養することの、解脱を得能ふに非ざるなり。舍利弗、是の諸の比丘は、還つて復此れを因として、乃至、解脱して速に涅槃を得れど、是の餘の人は速に解脱し能ふに非ざるなり。所以は何ぞ。此の深法門を聞かざるを以てなり。故に舍利弗、若し善男子・善女人あつて、是くの如き甚深なる法門を聞くを得一耳を経ば、信受せずして地獄に墮つと雖も然も速に解脱すれど、其に見に墮して地獄に入る者は、未だ解脱する能はざるなり。と。

破凡夫相品 第八

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、仁は今我れに梵行を修することを許すか。と。文殊師利の言はく。是くの如し。天子、汝今若し能く作し求むることを念ぜず、進み趣くことを思はざることすくの如くならば、吾れ將に汝に梵行を許さんとす。と。善住意は言はく。大士、何の義を以ての故に、斯くの如くに説くか。文殊師利の言はく。天子、若し爲作有らば梵行

【一〇】見得に没し、疑心に墮

墜しつゝ。

別の異譯本には、單に「見、疑の中に墮し」とあり。「見得」とは、對象を認識し、取著する義なるべし。

【一一】汝今若し、乃至、吾れ將に汝に梵行を許さんとすと。

異譯本には「則ち梵行を修するに、設し鞭の身をして、梵行を勧めず、梵行を修せずんば、乃ち可と爲すのみ」とあり。

【一二】天子若し。乃至。若し見得する無くんば、何をか梵行と名けん。異譯本に「其れ受くる所あらば、彼れ乃ち修行せんも、其(ソ)に受けざる者は、何を行ふ所にてか行と名く可けんや」とあり。

り。是の故に一切の諸佛・世尊及び諸の聲聞・緣覺・菩薩は、皆頭鈍に墮して、諸の凡夫には非ず。所以は何ぞ。一切の凡夫は、數の中に在るに、諸餘の智人は盡く頭鈍に入ればなり。須陀洹の如く、行を障礙せん故の貪欲の心行すら、尙數の中に墮す。何に況んや、愚癡なる諸の凡夫等にして數に非ざらんや。天子、是の故に、我れは頭鈍と爲し、我れは實に彼の陀羅尼を得ずと言ふを得るなり。何を以ての故ぞ。乃至、一法たりとも我れ得る所無き故なり。と。是の法を説ける時に、彼の大衆の中に、五百の比丘の、此の法門を聞きて信受する能はざるあつて、大恐怖を生じて誹謗の心を起し、惡心を生じ已るや棄捨して去りしが、即自ら身の大地獄に墮せるを見たり。

爾の時に、尊者舍利弗は、文殊師利に白して言はく。大士、仁は今且く住つて、此くの如き甚深なる經典を説くこと勿かれ。所以は何ぞ。今此の會中の五百の比丘は、此の法門を聞きて信受すること能はず、大怖畏を生じて誹謗の心を起したれば、即自ら身の已に地獄に處るを見ればなり。と。文殊師利は舍利弗に語つて言はく。舍利弗、汝今當に妄に分別を起すべからず。何を以ての故ぞ。乃至、一法として地獄に墮つる者ある無ければなり。所以は何ぞ。一切の諸法は、生ずる所無き故なり。汝今云何ぞ忽に斯の言を發し、我れをして休止して是の法を宣ぶる勿からしむるか。舍利弗、若し善男子、善女人の我見に依止し、人見に依止し、衆生見に依り、壽者見に依り、諸見に依り已つて、復恒沙の如來・應供・正遍覺及び比丘僧を供養するに、一切の衆具をば須ふるに隨ひ給し奉り、是くの如き供養を、其の形・壽を盡して休廢を有つ無しと雖も、若し復人あつて、我が説く所の甚深なる法門の、一切世間の信する能はざる所を聞き、謂はく。空・無相・無願・無作・寬大・寂靜にして、無生・無滅・無我・無人・無衆生・無壽命・無常・苦・無我の是くの如き諸法をば聞き已り、誹謗して地獄に墮つとも、然も舍利弗、即此の善男子、善女人は、是くの如き甚深なる法を聞くを得已らば、地獄に墮つと雖も、地獄より出でて速に涅槃を得れども、若し善男子、善女人にして、復恒沙の數の

【七】數。此の「數」は數類の義なり。第五卷、同名の解、參照。

【八】須陀洹の如く、乃至、尙數の中に墮す。

異譯本に「諸の明智の者の、諸趣を消除せんとする道迹も、亦然く生死を離れず」とあり。

【九】無作・寬大・寂靜。

異譯本の此れに當る者には「怖怕・寂靜」とあり。

く、知る無きなり。是の故に唯字句のみと言ふを得。と。

爾の時に、世尊は文殊師利を讚じて言はく。善い哉、善い哉文殊師利。汝今已に陀羅尼を得たる故にて、乃ち能く是くの如くに分別して説けることや。と。文殊師利は佛に白して言はく。世尊、我れ實に彼の陀羅尼を得ず。何を以ての故ぞ。世尊、是の陀羅尼を得るある若きは、斯に則ち名けて愚癡の凡夫と爲し、佛世尊及び諸の菩薩は陀羅尼を得るに非ざればなり。所以は何ぞ。世尊、彼の凡夫たる癡の衆生の等は、取著を有つ故に陀羅尼を得るなり。何等に取著するか。謂はゆる、我に取著する故に陀羅尼を得、人に取著する故に陀羅尼を得、壽命に取著する故に陀羅尼を得、丈夫に取著する故に陀羅尼を得、斷滅に取著する故に陀羅尼を得、常恒に取著する故に陀羅尼を得、貪欲に取著する故に陀羅尼を得、瞋恚に取著する故に陀羅尼を得、愚癡に取著する故に陀羅尼を得、無明に取著する故に陀羅尼を得、有愛に取著する故に陀羅尼を得、身見に取著する故に陀羅尼を得、五陰に取著する故に陀羅尼を得、十二入に取著する故に陀羅尼を得、十八界に取著する故に陀羅尼を得、憶念に取著する故に陀羅尼を得、分別に取著する故に陀羅尼を得、六十二見に取著する故に陀羅尼を得、是くの如くに、乃至、一切の諸行に取著する故に陀羅尼を得、是の故に凡夫は陀羅尼を得るなり。所以は何ぞ。法を彼の愚癡に爲つて取著する若きは、是れ則ち凡夫の得る所にして、佛は得と謂ふに非ず、聲聞の得るに非ず、辟支佛の得るに非ず、菩薩の得るに非ざればなり。是の義を以ての故に、唯彼の凡夫のみ陀羅尼を得るなり。何を以ての故ぞ。彼の諸の凡夫は、愚癡を以ての故に取得を有つと言はれ、佛世尊及び菩薩等には非ざればなり。と。

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、仁は若し陀羅尼を得ずんば、將に彼の頭鈍の位に墮する無きか。と。文殊師利の言はく。是くの如し。天子、我れは眞の頭鈍なり。何を以ての故ぞ。夫れ頭鈍とは、知る所無く、我が行する所の處をば知る可からざる故を謂ふな

【六】何を以ての故ぞ。異譯本には、此の句の次に下の句を加へてあり。得る所無き故に、執持す可き無し。」

卷の第一百五

善住意天子會 第三十六の四

破二乘相品 第七の二

爾の時に、善住意天子は、文殊師利を讃じて言はく。善い哉、善い哉。大士、仁は、今眞に是の聰辯・利智もて、快く斯くの如き甚深なる空忍を説けることや。と。文殊師利の言はく。天子、我れに是の聰辯・利智の如きは非ず。夫れ利智の者は、則ち是れ一切の嬰兒凡夫なり。何を以ての故ぞ。天子、一切の凡夫に、是れを利智と名くればなり。何等か利智なる。謂はゆる地獄の利智・畜生の利智・餓鬼の利智・閻摩の利智、乃至、三界の一切の利智と、是くの如くに取著し相應するを利智と言ふを得るなり。所以は何ぞ。生死煩惱の先際を知らざる故なり。天子、是の故に彼の諸の凡夫は、貪欲の利に著し、瞋恚の利に著し、愚癡の利に著し、乃至、彼の諸見の與めに名色に取著し相應する故に利智と言ひ、諸佛世尊及び聲聞・緣覺・得忍の菩薩に斯の利智ありと謂ふに非ず。是れを乃ち名けて、一切の凡夫の、相を取る利智と爲すなり。と。是に於て善住意天子は、復文殊師利に問うて言はく。大士仁の今説く所は、智を顯にせんと欲するや。文殊師利の言はく。不なり。善住意は言はく。句に隨はんと欲するや。文殊師利の言はく。是くの如し、是くの如し。天子、我れ字句に由るのみ。善住意は言はく。大士、仁は今何故に斯くの如くに説くか。文殊師利の言はく。天子、諸の菩薩の若きは、一字一句に於ても初より移動せず。然も彼の字句の義門の處の近遠・淺深とする所を皆實の如くに知るなり。謂はく。空の處を知り、無相の處を知り、無願の處を知り、遠離の處を知り、無所有の處を知り、無生の處を知り、如々の處を知り、而も其の間に於て、受くる無く、作す無く、解く無

【一】今眞に、乃至、説けることや。

異譯本には「慧を執つて、深妙の法忍を顯宣し、空行を興隆せることや。」とあり。

【二】空忍。空理の認識、即ち諸法の空性に體達せる者を謂ふ。

【三】我れに乃至凡夫なり。異譯本に「吾れ慧を執らず。

一切の愚慧の凡夫の士は智慧を執へ求む。」とあり。

【四】生死煩惱の先際。別の異譯本には「前際」の諸の有爲の行」とあり。

【五】先際。「前際」に同じ。三際の一なり。第四卷「三際」の解、參照。

は是くの如くなれば、云何ぞ聖説と相應するを得ん。所以は何ぞ。世尊は恒に、若し人能く三解脱門に入らば名けて涅槃と爲すと説きたまひ、又佛の説の如くんば、若し三十七種の助菩提の法を修行するあらば、便ち涅槃を證すればなり。然り而して、今は文殊師利は、更に是くの如くに、應に是の助菩提の行を修すべからず、亦彼の三解脱門にも入る莫かれと説くは、將文殊師利の虚妄の説に非ざるか。——を有つあり。是に於て文殊師利は、諸の比丘及び衆會の咸く皆疑を有てるを知り、卽尊者舍利弗に語つて言はく。大徳、汝今に於ては、最も世尊の説を信ぜることを證すべし。汝は智慧第一なればなり。大徳、汝は何時に於てか離欲の法を證し、且法を證する時に當つて豈四諦を見ざりしか。舍利弗は言はく。不なり。と。豈、三十七の助菩提の分法を修せざりしか。曰はく。不なり。と。豈、三解脱門に入らざりしかや。曰はく。不なり。大士、我れ爾の時に於て、乃至、一法も見れる可く、除く可く、修す可く、證す可く、選擇す可き者を有てること無かりき。所以は何ぞ。一切の諸法は、無爲・無生・無言にして是れ空なればなり。若し是れ空ならば、何の證す可きを有たん。と。此の法を説ける時に、衆中に三萬の比丘の、法に於て漏盡き心に解脱を得たるあり。

分を修せず、八聖道を修せず、三十七の助菩提の法を修せず、三解脱門を證する莫かれ。何を以ての故ぞ。天子、彼の聖諦は無生の相に入つて、念知す可からず修證す可からざればなり。所以は何ぞ。彼の無生の中にて、云何ぞ證を言はんや。天子、是の故にて我れは言はん。夫の念處とは、一切の諸法を念するに非ず思ふに非ざる故に念處と言ふ。と。天子、若し比丘にして、欲界に住せず色界に住せず無色界に住せずんば、故もて比丘を、四念處に住せずして四念處を思ひ修すと云はん。云何に思ひ修するか。彼の思はず修せざる如き故を思修と言ふなり、是くの如くに次第して、乃至、三十七種の助菩提の法にも、應に是くの如くに知るべし。天子、若し彼の禪行の比丘は、一切の法に於て悉く得る所無くば、得る所無き故に思念せず分別せず、修せず證せざるなり。何を以ての故ぞ。天子、彼の諸法には但名のみあつて、三十七の助菩提の法の如きも、彼れ名を有つと雖も而も得可からずして、唯分別の因縁の故を以て生ずるのみなればなり。一相にして無相なるを、是くの如き名を以て故に是くの如くに説けども、其の説も亦無き故に、彼れ復名字にて證知すと雖も終まで得可からざるなり。是れを則ち名けて、實の如くに三十七種の助菩提の法を覺知すと爲すなり。と。

時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、言ふ所の禪行の比丘とは、何等を名けて禪行の比丘と爲すか。と。文殊師利の言はく。天子、若し彼の比丘は、一切の法に於て但一行を取つて極めて隨順する者、謂はゆる無生なる、是れを禪行と爲す。又復少法も取る可きを有つ無き、是れを禪行と爲す。又何の法をも取らざる、謂はゆる此の世・彼の世を取らず、三界を取らず、乃至、一切の諸法を取らずして、是くの如くに平等なる、是れを禪行と爲す。天子、禪行の如きは、乃至、一法の相應をも有つ無くして、合ふ無く散る無き、是れを禪行と爲すなり。と。

爾の時に、彼の會の大衆に、多く無量なる百千の衆生の、咸く疑心——今此の文殊師利の説く所

【三】彼の聖諦は、乃至、修證す可からざればなり。異譯本には「眞の正諦には、苦諦ある無く、習を斷ずることある無ければ、習・不習無く、亦、盡もある無ければ、盡の證を爲さず、亦、道もある無ければ、由つて行ずる所無ければなり」とあり。

爾の時に、文殊師利は、復善住意天子に語つて言はく。天子、我れ彼の人には是くの如き出家是くの如き戒を與へ已つて、當に復教へて言ふべし。諸の善男子、汝今若し能く阿蘭拏（四〇）に行かず聚落に在らず、近きに處らず遠きに住せず、獨り坐せず衆と居らず、多言せず、杜默（四一）せず、食を乞はず請を受けず、糞掃衣を事とせず他より衣鉢を受けず、多食せず少欲ならず、多求せず知足せず、樹下ならず露地ならず、腐爛藥を服せず肉と酥とを受けずして、善男子、汝若し能く一切の頭陀（四二）に於て分別を起さずんば、是くの如き行者を、則ち頭陀を具足して行ぜりと名くるなり。何を以ての故ぞ。若し憶念分別を以て行ぜば、即是に我慢の心にて諸相を見ればなり。天子、若し是くの如くに行ぜば、則ち是くの如くに念すればなり。我れ糞掃衣を受け、我れ乞食を行じ、我れ樹下に住し、我れ露地に坐し、我れ阿蘭拏を行じ、我れ腐爛藥を服し、我れ少欲に、我れ知足に、我れ頭陀を行す。と。天子、若し正行ならば、是くの如き念を生ぜざるなり。所以は何ぞ。彼れを爲すに、一切の分別を有つこと無き故なり。彼れ爾の時に於て、尙我をすら見ず。況んや當に頭陀の功德を有つことを計すべけんや。有つことを見る若きは、是の處（四三）ある無きなり。天子、是の故に若し是くの如くに頭陀を行じて、憶念せず分別せざるあらば、我れは則ち説いて眞の頭陀と爲すなり。何を以ての故ぞ。天子、斯くの若き人は、貪欲を拂ひ去り、瞋恚を拂ひ去り、愚癡を拂ひ去り、三界を拂ひ去り、五陰を拂ひ去り、十二入を拂ひ去り、十八界を拂ひ去れば、是くの如きを、我れ説いて眞の頭陀と爲せばなり。何を以ての故ぞ。彼の頭陀は、取らず捨てず、思はず念せず、修せず行せず、法に非ず非法に非ざるを以てなり。是の故に、我れ眞の頭陀なりと説くなり。と。

爾の時に、文殊師利は、復善住意天子に語つて言はく。天子、我れ彼の人には是くの如き出家是くの如き行を與へ已つて、當に復教へて言ふべし。諸の善男子、汝今若くにして、能く四聖諦を觀ぜず、四念處を修せず、四正勤を修せず、四如意足を修せず、五根を修せず、五力を修せず、七覺

【四〇】阿蘭拏。「阿蘭若」に同じ。第一卷同名の解參照。
 【四一】近きに處らず遠きに住せず。
 【四二】別の異譯本に「聚落に近ならず、聚落に遠ざからず」とあり。

し、是くの如くに受具せば、我れ復彼れに教へて、是くの如くに言はん。曰はく。汝、今若し能く彼の一切の三千大千世界の篤信なる檀越の供養の衆具を受くとも、而も能く中に於て、分別を起さず報恩を念ぜずんば、是れを乃ち名けて清淨なる持戒と爲す。と。善住意は言はく。大士、何の義を以ての故に、斯くの如き説を作すか。文殊師利の言はく。天子、謂ふ所は、若し人、彼の施す者を受くる者・財物の三事を取らば、故もて是に報恩を爲さん。又若し彼れを見ば是に報恩を爲し、若し彼れを思惟せば是に報恩を爲し、若し彼れを分別せば是に報恩を爲せど、天子、若し彼れを見ず、彼れを取らず、彼れを思惟せず、彼れを分別せずんば、彼れは何の報ゆ可きを有たん。何を以ての故ぞ。本より來畢竟清淨なるを以てなり。是くの如きは報の故なれば、天子、彼れ若しは取り、若しは見、若しは思惟し、若しは分別し及び報を念する者、是れを凡夫と謂ひて、阿羅漢には非ず。所以は何ぞ。是れ諸の凡夫は、一切の時に於て常に取善を行つて、此れは受け彼れは與ふ。彼れは垢にして此れは淨し。と思量し分別し、是の分別を以ての故に報恩を有てばなり。云何に報恩する。謂はく。諸の凡夫は、生死の有に於て後生の身を取り、是の故に、彼に於て報恩を行はんと欲するなり。天子、諸の阿羅漢は、後の有を受けざらんと、畢竟じて見ず思量せず分別せず、此彼を有つ無くして更に身を受けざれば、當に何の處に於て恩を報ぜんや。天子、若し彼の施を受けば、當に三淨を行ひ、然る後に乃ち受くべきなり。何をか三淨と謂ふ。一には、己身を見ざれば、即ち施す者無きなり。二には、他人を見ざれば、即ち受くる者無きなり。三には、財物を見ざれば、即ち施す事無きなり。天子、是くの如くに三淨ならば則ち畢竟淨なり。斯くの如くに淨め已らば、復何にして報を用ひんや。天子、是の義を以ての故に、我れ是くの如くに説くなり。若し三千大千世界の篤信なる檀越の一切の衆具を受くとも、分別せず報を念ぜずんば、是れを世間の眞勝なる福田と名け、是れ眞の出家にして、是れ淨く戒を持てるなり。と。

貌ある無きに、或は青或は黄或は赤或は白及び玻璃色ありと言ふを得可きか。善注意は言はく。不いなり、大士。文殊師利の言はく。天子、彼れをば何等と名け、云何にして説くか。善注意は言はく。彼れを無爲と名け、實に説く可からず。是くの如くなれば、乃至、意作することも亦然り。文殊師利の言はく。天子、意に於て云何。彼の無爲をば、有爲と作す可きや。善注意は言はく。不いなり、大士。文殊師利の言はく。天子、是の義を以ての故に、我れ斯くの如くに説くなり。彼れ若し持たずんば、眞の持戒と名くと。天子、増上の戒學・増上の心學・増上の慧學と言ふ若き者の、學爲る實際をば、當に是くの如くに知るべし。持つ所無き故に増上の戒學と言ひ、知る所無き故に増上の心學と言ひ、見る所無き故に増上の慧學と言ふと。是くの如くにして、心分別せざる故に、憶念せざる故に、殊異を生ぜざる故に、最上の心學と名け、心學の如くに戒・慧も亦爾るなり。天子、若し心得ずんば則ち戒を念ぜず。若し戒を念ぜずんば則ち慧を思はず。若し慧を思はずんば則ち復と一切の疑惑を起すこと無し。既に疑惑無くんば則ち戒を持たず。若く戒を持たざるを則ち名けて眞の持戒と爲すなり。天子、當に知るべし、彼の持戒には則ち欲する所無く、欲する所無き故に則ち退還する無く、退還無き故に彼れ則ち清淨に、彼れ清淨なる故に則ち解脱を得、彼れ解脱する故に則ち精進なるを得、彼れ精進なる故に則ち漏を有つ無く、彼れ漏無き故に則ち正行に住し、正行に住する故に則ち像貌無く、像貌無き故に即是れ虚空なることを。何を以ての故ぞ。彼の虚空には形相無きを以ての故なり。是の故に、天子、若し人あつて、能く是くの如くに學ばば則ち不學と爲し、彼れ學ぶ無き故にて則ち眞學と爲すなり。何の處に於て學ぶか。謂はく。處無きなり。學ぶに云何にして處無きか。謂はく。空平等なればなり。天子、若し能く正しく空平等に住せば、是れを則ち名けて、眞に戒學に住すと爲すなり。と。

爾の時に、文殊師利は、復善注意天子に語つて言はく。天子、若し人、能く是くの如き出家を作

【三〇】 是くの如くなれば、乃至、意作することも亦然り。別の異譯本に「若し有爲に非れば、彼れを身・口・意の業と説く能はず。」とあり。

【三一】 彼の無爲をば有爲と作す可きや。

別の異譯本に「若く有爲に非ざるを、彼れは取らるるや。不や。」とあり。

【三二】 學爲る實際。

別の異譯本には「彼の學の如の際」とあり。

【三七】 最上の心學。

別の異譯本に「勝心の學」とあり。

【三八】 彼れ清淨なる故に、乃至、漏を有つ無く。

別の異譯本に「若し清淨ならば、彼れは和合せず。若し和合せずば、彼れ則ち漏ならず。」とあり。

【三九】 彼れ漏無き故に則ち正行に住し。

異譯本の此れに當る者に「其(ソコ)に漏無ければ則ち平等を行じ、平等に行ずれば則ち得る所無く、亦、戒をも受けず。」とあり。

轉倒發り、乃至、八邪・九惱・十不善の業道等發る故を、正戒を受くと名くるなり。天子、譬へば、一切の種子・草木・樹林は、皆大地に依つて生長を得れども、其の地は平等にして、心念の作る無きが如く、是くの如くに、天子、佛法の中の正受戒の若き故をば、具足し成就するなり。天子、譬へば、一切の草木の種子の、大地に依つて住して増長を得るが如くに、天子、當應に是くの如くに具に正戒を受くべきなり。所以は何ぞ。戒に住する故に道法の増長すること、彼の種子の如くに戒も亦復然ればなり。又、種子の増長する如きを成就と名くるを得れば、是くの如くにして戒に住する故に有つ所の、一切の菩提を助くる分法の、出生し増長するを成就と名くるを得るなり。天子、是れを過去・未來・現在の諸佛世尊、一切の聲聞の受くる正戒と爲すなり。謂はゆる彼の三脫門に入つて、一切の戲論・語言の滅する處なり。天子、當に知るべし、若し能く是くの如くに具戒を受けば、是れを正を受けて不正に非すと名くるなり。と。

爾の時に、文殊師利は、復善住意天子に語つて言はく。天子、我れ今更に是くの如くに出家し是くの如くに受具せるに於て、是くの如くに教へて曰はん。諸の善男子、汝今若し能く禁戒を持たざることは是くの如くんば、則ち眞實に持つと爲すなり。と。善住意は言はく。大士、何の義の故を以て、斯くの如き説を爲すか。文殊師利の言はく。天子、一切の諸法は、悉く取らるゝ無き故に持つ可き無し。云何ぞ此の戒をば、而ち獨り持つことあらんや。天子、戒を若し持つ可くんば、則ち三界をも持たん。天子、汝が意に於ては、何を以て戒と爲すか。善住意は言はく。大士、若し能く波羅提木叉を具足せば、是れを名けて戒と爲さん。文殊師利の言はく。天子、云何なるを名けて波羅提木叉と爲すか。善住意は言はく。大士、謂はゆる、身及び口・意の三業を持ちて具足する、是れを則ち名けて波羅提木叉と爲すなり。文殊師利の言はく。天子、意に於て云何。今是の現前の何處に、是の身業の作す可きあるか。是くの如くに、過去・未來にも亦作すことある無し。彼れに皆作無く像

【三】——十不善の業道等、乃至、名くるなり。異譯本に「十不善業に、其の中に在りと雖も、而も著する所無き、是れを正戒と謂ふ。」とあり。

【三】 汝今若し、乃至、爲すなり。別の異譯本に「是くの如くに學ぶに當つて、憶念して、我れ是くの如くに學ぶと取る莫くんば、是に汝は出家せよ。」とあり。

つて斯の法を説くのみ。汝應當に知るべし、此れは是れ最下の癡人の、法を得んと求欲せる妄想の取著なることを。是の故に、如來は彼の著を斷ぜん爲めにとて、是の思量分別を演説して不作の事を作すなり。と。是に於て、善住意天子は文殊師利を讚じて言はく。善い哉、大士。快く是くの如き甚深なる法門を説きたることや。と。爾の時に、世尊も亦復文殊師利を讚可して言はく。善い哉、善い哉、文殊師利。汝今乃ち能く是くの如き説を作せることや。と。

爾の時に、文殊師利は、復善住意に語つて言はく。天子、若し復人あつて、我が所に來り詣つて出家を求めば、我れは當に彼れに教へて、是くの如き言を作さん。諸の善男子、汝今若し能く具戒を受けずんば、是くの如くにして則ち眞の出家と名くるなり。と。善住意は言はく。大士、何の義を以ての故に是くの如き語を作すか。文殊師利の言はく。天子、世尊の説の如くんば、唯二種の、具戒を受くる法あり。何等を二と爲すか。一には、正平等戒を受くるなり。二には、邪不等戒を受くるなり。是の中、何等は邪不等戒なるか。謂はく。我見に墮し、人見に墮し、衆生見に墮し、壽命見に墮し、士夫見に墮し、斷見に墮し、常見に墮し、邪見に墮し、憍慢に墮し、貪欲に墮し、瞋恚に墮し、愚癡に墮し、欲界に墮し、色界に墮し、無色界に墮し、取著・分別に墮するなり。天子、是に略説を爲さば、一切の不善なる法の中に於て、惡知識に隨逐して一切の法を妄取することに墮し、解脱を要とする處に出づることを知らざるに墮するなり。天子、當に知るべし、是れを邪不等戒を受くと名くるなり。天子、是の處の何者は、是れ正平等戒を受くるなるか。謂はく。空は是れ平等なり、無相は是れ平等なり、無願は是れ平等なり。と、天子、若し能く是くの如くに三解脱門に入つて、實の如くに覺知せば、分別せず思念せずして、一切の法に於て退轉を有つ無きなり。天子、是れを正平等戒を受くと名くるなり。復次に、天子、若しは貪欲發り、若しは瞋恚發り、若しは愚癡發り、若しは愛・無明發り、我見發り、我見を根本と爲せる六十二見發り、三邪行發り、四

る所なり。」とあり。

【三】是の故に、乃至、不作の事を作すなり。と。別の異譯本には「如來は乗作を有つ無きことを讚説したまふ。」とあり。

【三】一には、乃至、受くるなり。異譯本には「一には、正眞の戒なり。二には、邪偽の戒なり。」とあり。

彼れ即大に 見相を有てることを。天子、是の故に、我れは以て袈裟を取り善けずんば、而ち清淨を得及び解脫を得と説くなり。所以は何ぞ。天子、諸佛世尊の大菩提の處には、袈裟あること無ければなり。善住意は言はく。大士、何の法は是れ袈裟なるか。文殊師利の言はく。天子、汝何の法を袈裟と爲すかと問はば、貪欲は是れ袈裟なり、瞋恚は是れ袈裟なり、愚癡は是れ袈裟なり、因は是れ袈裟なり、諸見は是れ袈裟なり、名色は是れ袈裟なり、妄想は是れ袈裟なり、執著は是れ袈裟なり、取相は是れ袈裟なり、語言は是れ袈裟なり。是くの如くに、乃至、戲論の一切の諸法は、皆是れ袈裟なり。若し諸法に善不善無く、思無く念無きを知らば、是れを無袈裟と名く。若し袈裟無くば則ち有つ所無く、若し有つ所無くば則ち垢濁無く、若し垢濁無くば則ち障礙無く、障礙無き故に亦作すあること無し。是れを思量と謂ふ。善住意は言はく。大士、思量を言ふ所にて、思量とは、何の義を以ての故に名けて思量と曰ふか。文殊師利の言はく。天子、彼の思量とは、法の平等なるに於て、増減を有つ無く、作すと作さざると無き故に思量と言ふなり。天子、若し能く法に於て増減を作さずんば、世尊の説きたまへる如くに、應に復と想念、分別を起すべからざる故に、思量と言ふなり。善住意は言はく。何等をば名けて増減を作さずと爲すか。文殊師利の言はく。天子、平等に過るなり。平等に過り已らば、法は得可からず。謂はゆる、過去に得可からず、未來に得可からず、現在に得可からずして、彼の法は如に非ざれば、増減の作無く、吾の作無く、人の作を有つ無く、衆生の作無く、壽命の作無く、斷の作を有つ無く、常の作を有つ無く、陰・入・界を分別する作を有つ無く、佛・法・僧を分別する作を有つ無く、亦是の持戒の作、是の破戒の作、是の煩惱の作、是の清淨の作、是の得果の作、是の須陀洹の作、是の斯陀含の作、是の阿那含の作、是の阿羅漢の作、是の辟支佛の作、乃至、此れ是の空の作、是の無相の作、是の無願の作、是の明解脫の作、是の離欲の作を念することある無きなり。是くの如きは、天子、此れ皆彼の無聞の凡夫の、思量し分別するに爲

【三】 見相。相を見取する義にして、謂はゆる、阿頼耶識の見分の如きなり。
 【四】 諸佛世尊の、乃至、無ければなり。
 【五】 別の異譯本には「袈裟は是れ濁にして、如來世尊の菩提には濁無ければなり」とあり。
 【六】 何の法は是れ袈裟なるか。
 【七】 別の異譯本には「何の法は是れ濁なるか」とあり。
 【八】 貪欲は是れ袈裟なり。
 【九】 別の異譯本には「貪欲は是れ濁なり」とあり。
 【一〇】 因みに、以下、本文の袈裟に當る別の異譯本の語は「皆濁」の言を用ひたり。
 【一一】 平等に過ぎるなり。乃至。法は得可からず。
 【一二】 別の異譯本には「當に平等に度るべし。已に平等に度らば、其(ソコ)に諸法に於て得不得無し」とあり。
 【一三】 彼の法は如に非ざれば別の異譯本に「彼の法は虚妄なれば」とあり。「彼の法」とは、謂はゆる想念・分別の諸法を曰ふ。
 【一四】 是くの如きは、乃至、別の異譯本に「此くの如き若干種の想を興造して、是くの如くに法を行じ道を修するは、若く、斯れ愚癡なる凡夫の念す

する故に則ち平等を見ず、又我を見る故に則ち衆生を見、衆生を見る故に則ち鬚髮を見、鬚髮を見る故に剃除の想を生ずるなり。天子、彼れ若し我が相有るを見ずんば則ち他の相を見ず、他の相無き故に則ち我慢無く、我慢無き故に則ち吾我無く、吾我無き故に則ち分別無く、分別無き故に則ち動搖無く、動搖無き故に則ち戲論無く、戲論無き故に則ち取捨無く、取捨無き故に作・不作無く、斷・不斷無く、離無く合無く、滅無く増無く、集無く散無く、思無く念無く、説無く言無く、是くの如くにして則ち眞實に安住すと名くるなり。善住意は言はく。大士、實の義は云何。文殊師利の言はく。天子、言ふ所の實とは、卽是れ虚空なり。是の虚空の如くなるを、名けて實と爲すことを得るは、起る無く盡くる無く、減る無く増す無ければなり。是の故を以て、虚空を言うて實と爲して、性空を實と爲し、如如を實と爲し、法界を實と爲し、實際を實と爲せども、是くの如き實は、則ち亦實ならざるなり。何を以ての故ぞ。彼の實の中は得可からざればなり。故に名けて不實と爲すなり。と。

爾の時に、文殊師利は、善住意に語つて言はく。天子、若し復人あつて、我が所に來り詣つて出家を求めば、我れは當に彼れに教へて、是くの如くに言ふべし。曰はく。諸の善男子、汝今若し能く彼の袈裟の衣を取り著けずんば、吾は則ち汝を以て眞の出家と爲さん。と。善住意は言はく。大士、何の義の故を以て復是くの如くに説くか。文殊師利の言はく。天子、諸佛世尊は法を取ることある無く、凡べて宣説する所は取著を爲さざるなり。善住意は言はく。何等を取らざるか。文殊師利の言はく。天子、色の若しは常・無常を取らず。乃至、識の若しは常・無常を取らず。眼の若しは常・無常を取らず。乃至、意の若しは常・無常を取らず。乃至、法の取らず、貪欲を取らず、瞋恚を取らず、愚癡を取らず、顛倒を取らざるを謂ふなり。天子、是くの如くに、乃至、一切の諸法をば皆悉く取らず、而も亦捨てずして、合はず離れざるなり。天子、若し袈裟を取らば、當に知るべし、

【三】 實の義は云何。別の異譯本に「言ふ所の實とは是れ何の言語ぞ。」とあり。

【三】 汝今若し、乃至、取り著けずんば。別の異譯本には「袈裟を取らず、袈裟を著けずして、是に汝出家せず。」とあり。

子、汝今應に出家の心を發すべからず。汝若し出家の心を發さずんば、我れ當に汝に眞の出家の法を教ふべし。と。所以は何ぞ。天子、出家を求むる若きは、則ち欲界を求め、亦色界を求め、無色界を求め、復世間の五欲の樂を求め及び未來の果報の諸事を求むればなり。若く善男子にして、求むる所あらば、彼れは法を證せず。法を證せざる故に、彼れは則ち心を見るなり。是の故にて、天子、若し取る所無くんば、彼れは法を證することを爲し、法を證するを以ての故に則ち心を見ず。心を見ざる故に則ち出家せず。出家せざる故に則ち出家の心無く、出家の心無き故に、彼れは則ち發さず。發さざるを以ての故に、則ち生を有つ無く、生無き故を以て彼れは則ち苦を盡し、苦を盡す故を以て則ち畢竟して盡し、畢竟して盡す故に彼れは則ち盡す無く、盡す無き故を以て則ち盡す可からず。盡す可からざる者は則ち是れ虚空なればなり。と。天子、我れ時に彼の善男子の所に於て是くの如き教を作さん。復次に、天子、若し復人あつて、我が所に來り詣つて出家を求めば、我れ復彼れに教へて、是くの如くに言はん。諸の善男子、汝今出家の心を發す莫かれ。所以は何ぞ。彼の心は、生ずること無くして發すことを得可からざれば、汝は異つて此の心を保つことを爲す莫かれ。と。復次に、天子、若し更に人あつて、我が所に來り詣つて出家を求めば、我れ復彼れに教へて、是くの如くに言はん。曰はく。諸の善男子、汝今若し鬚髮を斷除せずんば、是くの如くにして汝は則ち眞實の出家なり。と。

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、何の義の故を以て、斯くの如き説を作すか。と。文殊師利の言はく。天子、世尊の説法には、斷除する所無し。善住意は復問うて言はく、何等をば斷たず、亦復除かざる。文殊師利の言はく。天子、色の法をば斷たず亦除かず、受・想・行・識をば斷たず亦除かざるなり。天子、若し復人あつて、是くの如き念——我れ鬚髮を除きて、乃ち出家を爲す。——を作さば、當に知るべし、彼の人は則ち我の相に住せることを。我の相に住

- 【七】若し取る所無くんば、乃至、則ち心を見ず。
 別の異譯本に「若し少しの處にも著すること無くんば、彼の人は心に得る所無し。」とあり。
- 【八】彼れは則ち發さず。
 異譯本に「心を發して沙門と爲らざるなり。」とあり。
- 【九】則ち生を有つ無く。
 異譯本に「則ち生ずる所無し。」とあり。
- 【一〇】盡す可からざる者は、等。
 異譯本の此れに當る者には「其の盡く可からざるは、此れ行ずる所無きなり。」とあり。

するを得ず、色は識の中に於て轉入するを得ず。天子、^三是くの如くに、乃至、一切の法に於て、皆應に是くの如くに四句を作つて説くべし。又眼は耳の中に於て轉入せず、耳は眼の中に於て轉入せず。鼻は舌の中に於て轉入せず、舌は鼻の中に於て轉入せず。身は意の中に於て轉入せず、意は身の中に於て轉入せざるなり。所以は何ぞ。一切の諸法は、其の性各異にして自の境界を行じ、頑癭無知にして覺識を有つ無く、亦草木・牆壁・瓦石の如く、鏡中の像の如く、幻の如く化の如くにして證し觸る可からず、一相にして無相なればなり。是の義を以ての故に、一切の諸法には超・轉を有つ無く、出でず入らず、去る無く來たる無きことを、天子當に知るべし。若し諸の菩薩は、是くの如くに、彼の一切の法に超・轉無きを解知せば、復更に諸地の分別を有たず、亦道に入ること無く、地を捨つることもある無く、亦退・轉することも無くして、彼の菩提の超・轉の中に於て失滅あること無きなり。何を以ての故ぞ。若し人、彼の陰・界・諸入を見ることはれ眞實ならば、彼れに超・轉無ければなり。所以は何ぞ。一切の法性の本淨なる故を以てなり。天子、是れを菩薩は道地を超越すと名く。天子、譬へば、幻師の十種の聲典・宮闈を化作し、即ち化人をして其の内に居處せしむるが如し。天子、意に於て云何。彼の人の宮闈に、定れる所ありや、不や。善住意は言はく。無きなり、大士。文殊師利の言はく。是くの如し、是くの如し。天子、菩薩地に超・轉有るを見る者も、其の事此くの若きなり。と。

破二乘相品 第七の一

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に問うて言はく。大士、或は時に人あつて、大士の所に至つて出家を求めば、大士は爾の時に當に云何に答へ、云何に出家の、^六度法を説くこと爲し、云何に戒を授け及び戒を持つことを教ふべきかと。文殊師利の言はく。天子、若し其人あつて、我が所に來り至つて出家を求めば、我れ當に彼れに教へて、是くの如くに言ふべし。曰はく。諸の善男

【三】是くの如くに、乃至、一切の法に於て——説くべし。別の異譯本にも「是くの如くに、乃至、一切の諸法をば、皆亦是くの如くに、皆四種にて説かん。」とあれど、異譯本には「要を取つて之れを言はば、皆是れ四種の四大の成ずる所に於て」とあり。

【四】一切の諸法は、乃至、境界を行じ。異譯本に「趣く所各異に、境界殊別にして」とあり。

【五】彼の菩提の、乃至、無きなり。別の異譯本には「菩提の轉行は、是の失滅に非ず。」とあり。

【六】度法。度即ち轉迷開悟の法を曰ふ。第一卷「度」の解参照。

知らば、念想を有つ無く、衆の色に爲つて傷め敗られず。乃至、意法にも亦是くの如きなり。天子、若し其の六情に著無く縛無くして、壞る無く傷む無くば、是くの如き菩薩は法忍に住せるなり。法忍に住する故に、一切の法に於て分別する所無く、生・不生無く、漏・不漏無く、善・不善無く、爲・不爲無く、世法及び出世法を念はずして、分別せず思惟せざる、是れを則ち名けて無生法忍と爲すなり。と。此の法を説ける時に、六萬三千の衆生あつて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、一萬二千の菩薩は無生忍を得たり。

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、云何に菩薩摩訶薩は、勝行を發起して、超越し轉増して諸地に入るや。と。文殊師利の言はく。天子、誰れは、其の間に於て能く勝行を發し、而も諸地に超え轉ずる有るを言へるか。善住意は言はく。大士、仁は豈に諸の菩薩等の、殊勝を行する所にて、彼彼を轉じ増し、乃至、超越して能く十地を滿すことを知らざるか。文殊師利は善住意に語つて言はく。然らず。天子、我れ佛の説きたまへるを聞くに、一切の諸法は猶幻化の如し。と。汝は信ぜざるか。善住意は言はく。大士、世尊の誠言をば誰れか敢て信ぜざらん。文殊師利の言はく。天子、彼の幻人及び幻は豈勝行を有つて超越し轉入し、乃至、十地を具足することありや。善住意は言はく。不なり。大士。文殊師利の言はく。是くの如くに、天子、若し幻人及び幻をして、能く超行・轉入あらしめば、則ち吾等も亦當に、是くの如くに超越し轉入すべし。何を以ての故ぞ。世尊の如きは、一切の諸法は皆幻化の如しと説きたまへばなり。故に轉入すること無し。天子、是の故に諸地に轉入ありと説く者の若きは、即轉入には非ずして、我れも亦地に轉入ありと言はざるなり。所以は何ぞ。一切の諸法には轉入無き故なり。是の故に、法は法の中に於て轉入するを得ず。謂はゆる、色は受の中に於て轉入するを得ず、受は色の中に於て轉入するを得ず。想は行の中に於て轉入するを得ず、行は想の中に於て轉入するを得ず。識は色の中に於て轉入

【二】六情。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根に據つて生ずる情識を謂ふ。

如くに忍する故に、一切の法は染無きこと虚空の如しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には破壊無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には斷無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には垢無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には淨無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には空無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には相無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には願無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法は貪・瞋・癡を離ると、是くの如くに忍する故に、一切の法は如如なりと、是くの如くに忍する故に、一切の法は法性なりと、是くの如くに忍する故に、一切の法は實際なりと、是くの如くに忍する故に、一切の法は分別無く、相應無く、憶念無く、戲論無く、思惟無く、作無く、力無く、羸劣・虛誑なること、幻の如く、夢の如く、響の如く、影の如く、鏡の像の如く、芭蕉の如く、聚沫の如く、水泡の如しと。是くの如くに忍する故に、忍す可き所の者も、亦忍す可き無くして、法に非ず非法に非ず、但名字を以て斯の法を説くのみ。然るに、彼の名も亦得可からずして、本性は自ら離れたる、是くの如きを忍と言ふと、信解樂入して、惑ふ無く疑ふ無く、驚く無く怖るる無く、動く無く没む無く、身に遍滿し已り正受して行すれども、其の身を得ず、亦住する處も無きなり。文殊師利、是れを菩薩摩訶薩は諸法の中に於て無生忍を得、乃至、一切の想を行ぜずと爲す故なり。と。

爾の時に、文殊師利は、復佛に白して言はく。世尊、謂はゆる忍とは、云何なるを忍と爲す。乃至、境界に爲つて壞られざる故に、名けて忍と爲さん。と。時に彼の善任意天子は、文殊師利に問うて言はく。大士、何の等は境界に爲つて壞られざるか。と。文殊師利の言はく。天子、謂はゆる眼は、何の法は眼を壞るか。謂はく。彼の善色・惡色は是に能く眼を壞るなり。色の、眼を壞るが如くに、彼の聲の、耳を壞り、乃至、法の、意を壞ることも亦是くの如し。天子、若し菩薩は、眼にて色を見るとも、相を取らず耽り好まず、分別せず思惟せず、愛せず厭はずして、本性の空なるを

す解かず、取らず捨てず、近よらず遠からざるなり。是の故に迦葉、當に是くの如き法門を覺了すべし。若く諸佛世尊の皆得ざる者は、則ち彼等は法に非ずして聞く無きに、凡夫は一切斯に得。と。是の故に、凡夫は能く作し難きを作せど、諸佛の作すに非ず、辟支佛の作すに非ず、阿羅漢の作すに非ず。是れを乃ち名けて凡夫の作と爲すなり。と。迦葉は復問はく。作とは何の等ぞや。文殊師利の言はく。斷を作すなり、常を作すなり、染著を作すなり、依止を作すなり、憶念を作すなり、取捨を作すなり、乃至、彼の一切の戲論・分別・隨順・高下等の事を作すなり。是の故に大徳迦葉、是くの如き諸法をば、諸佛世尊は皆作す所無く、已に作し今作し當に作すべきことある無く、唯彼の凡夫のみ能く作し難きを作すなり。と。

爾の時に、文殊師利は復佛に白して言はく。世尊、言ふ所の無生忍とは、云何なるを名けて無生忍と爲すか。世尊、復何の義を以てして、更に名けて法無生忍と爲し、菩薩は云何にせば斯の忍法を得るか。と。佛は文殊師利に告げて言はく。實には、人あつて、生法の中に於て無生忍を得ること無し。言ふ所の得とは、但語言・文字あるのみ。何を以ての故ぞ。無生の法は、得可からざる故に、攀縁を離れたる故なり。法忍を得ずして得る所無きを得、得る無く失ふ無き、是の故にて無生法忍を得と言ふなり。復次に、文殊師利、彼の無生法忍とは、謂はゆる、一切の法は生すること無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法は來たる無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法は去る無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には我無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には主無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法は取る無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法は捨つる無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法は有る所無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法は實無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には等無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には等しき等無しと、是くの如くに忍する故に、一切の法には比無しと、是くの

【二】一切の法には比無しと、別の異譯本には「一切法忍には相似無し」とあり。

る時に、二萬三千の菩薩は無生忍を證し、五千の比丘は諸法の中に於て漏盡きて解脱し、六十億の諸天子は塵垢を遠離して法眼淨を得たり。

爾の時に、尊者大迦葉は、佛に白して言はく。世尊、今此の文殊師利は、乃ち更に斯に能く作し難きを作し、是くの如き甚深なる法門を宣説して、諸の衆生をして利益する所多からしめたりと爲さん。と。文殊師利は迦葉に謂うて言はく。大徳迦葉、我れ實に作し難き事を爲さず。所以は何ぞ。一切の諸法は、皆作す所無く、亦復已に作し今作し當に作すべきこと無ければなり。唯、大迦葉、我れの諸法に於て作・不作非ざる其の義も亦爾り。又大迦葉、我れ衆生に於て度脱を有つ無く、亦繫縛も無し。所以は何ぞ。一切の諸法をば有つ所無きが故に。迦葉、云何ぞ世尊の前に於て、是くの如き言を發すか。能く作し難きを作せり。と。又大迦葉、我れは作す所無ければ、慎んで、我れを能く作し難きを作せりと言ふ勿かれ。又大迦葉、我れ實に作さざるが、獨り我れの作さざるのみに非ず如來も亦作したまはず、辟支佛も亦作さず、阿羅漢も亦作さざるなり。又大迦葉、何等の人あつて、能く作し難きを作すか。若し正しく言はんと欲せば、能く作し難きを作すは、但彼の一切の嬰兒凡夫のみと、斯くの如くに説かば是れを善説と名けん。所以は何ぞ。諸の如來の如きは、皆悉く已に得、今得、當に得べきことある無く、乃至、一切の聲聞・辟支佛も亦得る所無きに、唯彼の凡夫のみ一切を皆得ればなり。と。時に大迦葉は復文殊師利に白して言はく。大士、一切の諸佛は何の等を得ざるか。と。文殊師利の言はく。一切の諸佛は、我を得ず、福伽羅を得ず、衆生を得ず、壽命を得ず、士夫を得ず、斷を得ず、常を得ず、諸陰を得ず、諸入を得ず、諸界を得ず、諸の名・色を得ず、欲界を得ず、色界を得ず、無色界を得ず、分別を得ず、思惟を得ず、念慮を得ず、因生を得ず、顛倒を得ず、貪・恚・癡を得ず、此の世を得ず、彼の世を得ず、我を得ず、我所を得ず、乃至、一切の諸法を得ざるなり。大徳迦葉、是の一切の諸法を次第に得ざるが如くに、亦復失はず、縛ら

【七】我れ、衆生に於て、乃至、亦繫縛も無し。
異譯本に「衆生を度せず。亦、縛する所も無し。」とあり。

【八】福伽羅を得ず。
異譯本には「我身を得ず。」とあり。

【九】念處(Sam'yapashana)。
觀察する智を念と曰ひ、觀察せらるる境を處と曰ふ。斯くて、智を以て對境を觀察するを念處と曰ふ。

【一〇】我を得ず。此れは前と重複し居れり。而して、異譯本「聖善住意天子所問經」にも重複しあれど、「如幻三昧經」には無し。或は重複し居る者は、前の者を「我身」と見、後の此の者を「我心」と見たるにあらざるか。

見は發るなり。我見を根本と爲したる六十二見は發るなり。佛の想は發るなり。法の想は發るなり。僧の想は發るなり。自の想は發るなり。他の想は發るなり。地の想は發るなり。水の想は發るなり。火の想は發るなり。風の想は發るなり。空の想は發るなり。識の想は發るなり。四顛倒の想は發るなり。四識住は發るなり。五蓋は發るなり。八邪は發るなり。九惱は發るなり。十惡業道は發るなり。と天子當に知るべし。我れ今要を擧げて之れを言はば、一切の分別・一切の分別の處・一切の語言・一切の諸相・一切の進趣・一切の希求・一切の取著・一切の思想・一切の意念・一切の障礙を、菩薩は皆當に發すべきことを、汝應に實の如くに知るべし。天子、是の義を以ての故に、汝今若し能く此の諸法に於て、愛著せず思想せずば、是れ則ち名けて眞實なる發心と名くるなり。と。爾の時に、世尊は文殊師利を讚じて言はく。善い哉、善い哉。文殊師利、汝今乃ち能く諸の菩薩の爲めに、具に是くの如き初發心の義を宣べたることや。文殊師利、汝往昔に於て、已に曾て無量無邊なる恒河沙の數に過ぎたる諸佛世尊を供養したれば、能く斯れを説けるのみ。と。

爾の時に、尊者舍利弗は、佛に白して言はく。世尊、今此の文殊師利の説く所の、菩薩の最初の發心と及び無生法忍を獲るとの先後の二事は、平等にして差無きか。と。佛は舍利弗に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如し。舍利弗、昔然燈世尊は我れに記を授けて、摩那婆、汝は未來に於て阿僧祇劫を過ぎて、當に成佛して釋迦牟尼如來・應供・正遍覺と號すべしと言ひたまへるが、舍利弗、我れ彼の時に於ても、亦此の心を離れずして無生忍を得たるなり。是くの如くにして、舍利弗、汝當に知るべし。彼の一切の菩薩の初發心の義は、文殊師利の言ふ所の如くにして異なる無きなり。と。爾の時に、文殊師利は佛に白して言はく。世尊、我れ佛の説きたまへる所の義を解する如くんば、皆是れ初發なり。何を以ての故ぞ。世尊の説きたまふ如くんば、一切の初發は皆是れ不發にして、其の不發なる者は即是れ菩薩の最初の發心なればなり。と。是の法を説け

【五】十惡業道は發るなり。「十惡業道」とは「十不善行」と同じ。(第二卷同名の解參照)。異譯本には「十惡の業は、其れをして原に反らしむるなり。」とあり。

【六】摩那婆。「摩納」と同じ。第二卷同名の解參照。

する無きや。と。善住意の言はく。發行する無きに非ず。文殊師利の言はく。是くの如し、是くの如し。天子、是の義の故を以て、我れ此の説を作すなり。若し能く貪欲・恚・癡を發すあらば、唯彼の諸佛・聲聞・緣覺・不退の菩薩は乃ち發し能ふのみ。と。天子、當に知るべし、依處を有つ無き、是れを名けて發と爲し、取著を有つ無き、是れを名けて發と爲すことを。既に依處無く又取著無ければ、是れ即ち句無し。斯れを謂うて發と爲し、是の無分別の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不可生の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不實の句、斯れを謂うて發と爲し、是の非物の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不來の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不去の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無生の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無攀緣の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無證の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不諍の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不思議の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無壞の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無言の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不破の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無字の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無執の句、斯れを謂うて發と爲し、是の無住の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不取の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不捨の句、斯れを謂うて發と爲し、是の不拔の句、斯れを謂うて發と爲すことを天子當に知るべし。是れを菩薩の初發心と爲すなり。天子、發心の菩薩は、若し是くの如き一切の諸法に於て、愛著せず思想せず、見ず知らず、聞かず識らず、取らず捨てず、生ぜず滅せずんば、是れを則ち名けて眞の發心と爲すなり。天子、是の菩薩摩訶薩は、若し能く是くの如き法界、是くの如き平等、是くの如き實際に依止せば、是くの如き方便として則ち彼の貪欲・瞋恚・愚癡等は發るなり。又若し決して、能く是くの如くに依止せば、則ち彼の眼・耳及び意等は發るなり。則ち彼の色の取、乃至、識の取等は發るなり。是くの如くにして、則ち一切の諸見は發るなり。無明・有愛は發るなり。乃至、十二因縁の有分は發るなり。五欲の衆事は發るなり。三界に愛著することは發るなり。我見は發るなり。我所

【三】句無し。

異譯本には「句述ある無し。」とあり。因みに、以下の各「句」字に對する異譯本の語は、皆「述」と爲してあり。

【四】是くの如き方便として。異譯本には「是くの如き實際の善權方便として」とあり。

卷の第一百四

善住意天子會 第三十六の三

破菩薩相品 第六

爾の時に、文殊師利は佛に白して言はく。世尊、佛の説きたまへる菩薩摩訶薩の初發心の如きは、何の義の故を以て初發心と名くるか。と。佛は文殊師利に告ぐらく。若し菩薩あつて、三界の一切を等觀する想生ぜば、是くの如きを最初の發心と言ふを得。文殊師利、是れを菩薩の初發心と名くるなり。と。文殊師利は復佛に白して言はく。我れ佛説の義を解する所の如くんば、若し菩薩あつて貪欲の心生ぜば是れ初發心なり。瞋恚の心生ぜば是れ初發心なり。愚癡の心生ぜば是れ初發心なり。世尊の説きたまふ如きを、將に是れ初發心と爲すと謂ふこと無からんとす。と。

爾の時に、善住意天子は、文殊師利に問うて言はく。大士、若し諸の菩薩の、貪・恚・癡を起すを初發心と名けば、有らゆる一切の、縛を具せる凡夫を、皆即名けて發心の菩薩と爲さんや。所以は何ぞ。彼の諸の凡夫は、昔より今に至るまで、常に是くの如き貪・恚・癡等の三毒の心を發せる故なり。と。文殊師利は善住意に語つて言はく。汝の、一切の凡夫は昔より已來常に能く是の三毒の心を發すと云ふは、是の義然らず。何を以ての故ぞ。一切の凡夫は心力羸劣にして、是の貪・恚・癡を發起する能はずして、唯諸佛世尊、一切の阿羅漢・辟支佛・不退轉地の諸菩薩等は、乃ち能く是の貪・恚・癡を發すあるのみなれば、是の故に凡夫は發すことを得る能はざればなり。と。善住意は言はく。大士、仁は今何故に斯くの如き説を作して、此の會衆をして、識らず知らずに諸の疑網に陥らしむるか。深く怖畏すべし。と。爾の時に、文殊師利は善住意に語つて言はく。天子、意に於て云何。彼の飛鳥の空中に往來する如きに、彼の鳥の足跡は、虚空の中に在つて發行する有りや、發行

【一】等觀。平等無差別の觀察を謂ふ。

【二】彼の鳥の足跡は。乃至發行する無きに非ず。他の異譯本にも「彼の鳥の跡の相は、行ずるありと言ふを得るや。行ぜずと言ふを得るや。天子言はく。行ず。」とあれど、異譯本には「豈畏れて經るを爲し、通過するに依止するありや。答へて曰はく。經過して虚空を畏れず。」とあり。

て著^{ちやく}する所無き 故に名けて菩薩と爲す 能く己^{おの}が肉身を捨てて 終^ままで亦^{また}依止^{よぢ}する無く
 是^{こゝ}くの如くに眞實^{しんじつ}を覺るを 乃ち名けて菩薩と爲す 持戒^{ぢけい}の彼岸^{ひがん}に至^{いた}れども 亦^{また}彼岸^{ひがん}を念^{おも}は
 ず 戒行^{けいぎやう}の法の 無生^{むじやう}亦^{また}無盡^{むじん}の如くなるを覺るなり 慈心^{じしん}を衆生^{じゆじやう}に遍^{あま}うするも 衆生^{じゆじやう}の相^{さう}
 得^えず 彼の衆生^{じゆじやう}の際^{さい}は 但^{ただ}假言^{かりげん}を以て宣^のぶること覺るなり 勇猛^{ゆうめう}に大精進^{だいしやうじん}して 深心^{しんしん}に有爲^{うゑゐ}
 を厭^{いと}へど 三界^{さんがい}の空虛^{くうきよ}なるを見^みば 無上^{むじやう}の等覺^{とうかく}を證^{あかし}するなり 常に微妙^{めうみやく}の禪^{ぜん}に入^いつて 著^{ちやく}す
 る無^なく依^よる所無^なく 住^すする無^なく攀緣^{はんげん}する無^なく 智者^{ちぢやう}は定^{じやう}つて是^{こゝ}くの如きなり 能^よく利^きき智^ち刀^{とう}
 を以て 諸^{しよ}の見^{けん}の縛^{はく}を斷除^{だんじゆ}すれど 法界^{ほふがい}の性^{じやう}の 割^わく無^なく亦^{また}傷^{やぶ}つく無^なきを觀察^{くわんさつ}するなり 若^し
 し人眞^{しん}に 一切^{いっけつ}の法^{ほふ}の實^{じつ}の如^{ごと}きを覺^あ了^{りょう}して 時^{とき}に應^おじて衆生^{じゆじやう}を利^きせば 乃ち名けて菩薩^{ぼさつ}と爲^なす
 なり と。

【三〇】 戒行の法の、乃至、無
 盡の如くなるを覺るなり。
 異譯本の此れに當る者には
 「佛戒に隨順する義は、起す無
 く有つ所無きなり。」とあり。

あつて、彼の名を離れ已らば別の衆生無しと覺るなり。是の故に一切衆生は即一衆生にして、彼の一衆生は即一切衆生なり。是くの如くなれば、衆生は即衆生に非ず。と。若し能く是くの如くに分別する無くば、是れを菩薩摩訶薩は一切の法を覺ると爲す。又復云何に一切の法を覺るか。能く是くの如くにして菩提の道を覺る故なり。是れを菩薩摩訶薩は一切の法を覺ると爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を明さんとて、偈を以て頌して曰はく。

眼と及び耳とは 自體は常に空寂なりと覺つて 我れ能く覺ると言はざる 是れを名けて菩薩と爲す 鼻と及び舌とは 本性有る所無しと觀じて 我れ覺ると分別せざる 是れを名けて菩薩と爲す 智慧にて身を觀察し 亦意を覺ることも自然に 覺り已つて他の爲めに説く 是れを名けて菩薩と爲す 色聲香味觸 意の樂ふ所の諸塵は 本性空なりと覺知する 是れを名けて菩薩と爲す 色及び受想 諸行と識心とは 一切斯れ幻に同じと覺る 是れを名けて菩薩と爲す 五陰の聚は夢の如くにして 彼れに一相も無しと覺り 我れ知ると分別せざる 是れを名けて菩薩と爲す 生ぜず亦出でず 作す無く復言無く 是くの如くにして 唯名のみと説けども 彼の名も亦物に非ず 貪欲瞋恚は 斯れ分別に由つて起り 彼の分別も體無く 畢竟じて終まで 自ら空なりと覺る 癡も亦分別にて生じ 因縁にて生ぜざるを分別し 此れを縁じて諸見を生ずれど 諸見も得可からず 三界は空にして 一切眞實無しと覺察し 彼れに於て動されざる 故に名けて菩薩と爲す 欲界は成就せず 皆分別に縁つて起り 色有に色有無く 一切は牢固ならず 衆生の行ずる所は 智者は悉く 貪欲と瞋恚と及び彼の愚癡等なるを明了にす 一切の諸の衆生は 即彼れ一衆生にして 智者は無として覺る所にて 彼の衆生を念はず 諸法の起る所は 悉く顛倒因り生ずるを 彼の顛倒なるを覺らば 顛倒の眞相を知るなり 智慧は甚だ微妙にして 諸の音聲を取らざるを 覺り已つ

【三】亦意を覺ることも。異譯本の此れに當る者に「其の意は虚空の如し。」とあり。

【三】因縁にて生ぜざるを。乃至。諸見も得可からず。異譯本に「多くの思念を作すを因とし、諸の邪見の起るを縁とすれば、正直ならば見る所無し。」とあり。

【四】色有。三有（有は果報の實在の謂なり。）の一にして、色界四禪天の果報の總稱なり。色界と同じ。

【五】智者は、乃至、彼の衆生を念はず。

別の異譯本には「明者は此れ、衆生を妄想せざることを成就す。」とあり。

如くなるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。化の如くなるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故たり。夢の如くなるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。鏡の像の如くなるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。聲の響の如くなるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。芭蕉の如くなるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。久しく住せざるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。牢固ならざるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。虚妄なるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。無物なるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。是れを菩薩は一切の法を覺ると爲す。

復次に、文殊師利、云何に菩薩摩訶薩は貪・恚・癡を覺るか。謂はゆる、彼の貪欲は分別に因つて起ると覺る故なり。彼の瞋恚は分別に因つて起ると覺る故なり。彼の愚癡は分別に因つて起ると覺る故なり。而して亦彼の分別も空にして有る所無く、物無く、戲論無く、説く可からず、證す可からずと覺る故なり。是れを菩薩は一切の法を覺ると爲す。

復次に、文殊師利、云何に菩薩摩訶薩は三界を覺るか。謂はゆる、彼の欲界に我・人無きを覺る故なり。彼の色界は作す所無きを覺る故なり。無色界は空にして有る無きを覺る故なり。彼の三界は皆遠離せるを覺る故なり。是れを菩薩は一切の法を覺ると爲す。

復次に、文殊師利、云何に菩薩摩訶薩は衆生の行を覺るか。謂はゆる、是の衆生は貪欲をば行すと覺る故なり。是の衆生は瞋恚をば行すと覺る故なり。是の衆生は愚癡をば行すと覺る故なり。是の衆生は等分（すなは）をば行すと覺る故なり。是くの如くに覺り已つて、是くの如くに證知せるを是くの如くに説くことを爲して、是くの如くに衆生を教化して、是くの如くに解脱を得しむるなり。是れを菩薩は一切の法を覺ると爲す。

復次に、文殊師利、云何に菩薩摩訶薩は一切衆生を覺るか。謂はゆる、一切衆生は但其の名のみ

【三】彼の貪欲は、乃至、彼の瞋恚は分別に因つて起ると覺る故なり。別の異譯本の此れに當る者には「貪欲・恚は分別心にて生ずれば、彼れ分別せずんば、常に空にして物無しと覺るなり」とあり。

意を覺るなり。文殊師利、云何に菩薩は、眼を覺り、耳を覺り、乃至、意を覺るか。文殊師利、謂はゆる菩薩は、彼の眼法の本性の空なる故を覺り、是くの如くに覺り已れど、終まで我れ能く覺知せりと念ずることを生ぜざるなり。是くの如くに耳を覺り、乃至、意を覺ること、皆本性空なりとし、是くの如くに覺り已れど、亦我れ能く覺知せりと念ずることを生ぜざるなり。菩薩は是くの如くに、眼等を覺り已つて、復彼の色の本性の自ら空なるを覺り、是くの如くに覺り已れど、亦我れ能く覺知せりと分別せざるなり。是くの如くに、聲を覺り、乃至、法を覺ること、皆本性は空なりとし、亦我れ能く覺知せりと分別せざるなり。是れを、菩薩は一切の法を覺れりと爲す。

復次に、文殊師利、云何に菩薩は彼の五陰を覺るか。謂はゆる、菩薩は陰體の本性を觀見して、自ら空なりと、斯くの如くに覺る故なり。無相なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無願なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無欲なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。寂靜なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。遠離なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無所有なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無實なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無動なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無生なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無來なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無去なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無眞なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無證なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無知なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無見なるを觀じて、斯くの如しと覺る故なり。無人なるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。無想なるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。不可説なるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。但名有るのみなるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。無我なるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。分別して起るを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。緣より生ずるを觀じて、斯くの如くなりと覺る故なり。幻の

【三〇】無人。或は「無入」なるべきか。各異譯本と對照すれども、明ならず。

の大きさ千由旬、或は九十千、乃至、五十・四十・三十・二十千の者あり。或は身の大きさ十千由旬なるあり。乃至、或は五千・四千・三千・二千の者あり。或は身の大きさ一千由旬なるあり。乃至、或は五百・四百・三百・二百の者あり。或は身の大きさ一百由旬なるあり。乃至、或は五十・四十・三十・二十の者あり。或は身の大きさ一由旬の者あり。乃至、或は五・四・三・二・一由旬の者あり。是くの如くに、乃至、或は菩薩の身量・大小・長短・寛狭あること、此の娑婆世界の人身のの如くにして異なる無し。爾の時に當つて、此の三千大千世界に大衆は充滿して、空處の、杖の頭許の如きもある無かりしが、其の中の有らゆる諸の大菩薩摩訶薩の衆は、一切多く是れ功德巍巍として、智慧深遠に、威力を具足し、神通を成就し、大光明を放つて過十方の無量なる百千の諸の佛世界を照し、乃至、一切の大威徳の天及び諸の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦・人非人等、大小の諸王は皆悉く充滿せり。

爾の時に、文殊師利は座よりして起ち、衣服を整理して偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、白して言はく。世尊、我れ今に於ては、有つ所の心の疑を、如來・應供・正遍覺に少しく諮問したてまつらんと欲するも、未だ世尊の、聽を垂れらるや不やを審にせず。と。佛は文殊師利に告ぐらく。如來・應供・正遍覺は、悉に汝の問ふ所にて、當に汝が爲めに、汝の疑ふ所を釋き決し、汝の心をして喜ばしむべし。と。文殊師利は言はく。唯然く、世尊、願はくば、宣説を爲したまはんことを。我れ當に聽受すべし。と。文殊師利の言はく。世尊、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩と爲すか。菩薩と言ふ者の義は、何の謂ぞや。佛は文殊師利に告ぐらく。汝の問ふ、何をか菩薩と爲し、菩薩に何の義ありやと云ふ者は、能く一切の法を覺了するを以ての故に、名けて菩薩摩訶薩と爲すなり。文殊師利、彼の一切の法を菩薩の覺る者を、謂はゆる言説せんに、文殊師利、菩薩は云何に一切の法を覺るか。謂はゆる、眼を覺り、耳を覺り、鼻を覺り、舌を覺り、身を覺り、

亦復是くの如し。と、汝等皆應に實の如くに了知すべし。復次に、波旬、汝の有つ所の眼は、即眼に非すと爲し、亦眼無しと爲し、眼の想無しと爲し、眼の著無く、眼の相無く、眼の攀緣無く、眼の障礙無く、眼の思無く、眼の我無く、眼の依止無く、眼の愛無く、眼の戲論無く、眼の我所無く、眼の護無く、眼の念無く、眼の取無く、眼の捨無く、眼の分別無く、眼の思量無く、眼の決定無く、眼の生無く、眼の滅無く、眼の去無く、眼の來無し。是等の如き法は、汝の境界に非ざれば、汝は是の中に於て主と爲る能はずして、法無く、力無く、自在を得ず、亦取著も無きなり。眼の如くに、乃至、身、意も亦是くの如く、又色の如くに、乃至、觸・法も亦是くの如しと、汝等皆應に實の如くに了知すべし。と。文殊師利の、是の法を説ける時に、衆中の一萬の魔王波旬は、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、八萬四千の諸の魔の眷屬は、塵垢を遠離して法眼淨を得たり。

菩薩身行品 第五

爾の時に、尊者摩訶迦葉は、佛に白して言はく。世尊、我等願はくば、文殊師利の、我れをして彼の菩薩摩訶薩等を覩見せしめんことを請ふ。所以は何ぞ。世尊、斯の諸の居士には值遇せられ難ければなり。と。爾の時に、世尊は即文殊師利に告げて言はく。汝應當に知るべし。今此の大家は、咸く皆渴仰して、十方より有らゆる諸來れる菩薩摩訶薩の身を覩見せんと思願することを。今正に是れ時なれば、汝應に顯現すべし。と。是に於て、文殊師利は聖教を蒙り已るや、即便に彼の法輪菩薩・月光菩薩・降魔菩薩・妙音菩薩・離垢菩薩・寂滅菩薩・選擇菩薩・法王吼菩薩の是等の如き無量の菩薩摩訶薩に告げて言はく。諸の居士、汝等今宜しく、各宮殿に於て自ら其の身を顯すこと分明にして、汝の本國の形狀を現すべきなり。と。文殊師利の斯の語を發し已るや。是に於て諸の菩薩衆は三昧より起ちて、各本身を現して、諸の大家をして一切咸く見しめたるに、或は菩薩の其の身の高大なること、須彌山王の若くなるあり。或は菩薩の身の大き八萬四千由旬なるあり。或は身

【二】 汝は是の中に於て、乃至、亦、取著も無きなり。別の異譯本に「汝は其の中に於て、主たる無く、力無く、自在無く、自在に取ること非ず。」とあり。

遠に是くの如き降魔三昧を成就したる三昧力の故もて、能く波旬及び諸の魔衆をして、髮白く老耄して、形・志俱に衰ふること一拉斯に至らしめたることや。と。佛は舍利弗に告ぐらく。意に於て云何。汝今此の文殊師利は、獨り是の三千大千世界にて、此の衆魔を斯くの如き老耄に變ずと言ふか。舍利弗、汝今應に是くの如き見を作すべからず。所以は何ぞ。舍利弗、今は十方の恒河沙の等の如き諸の世界の有らゆる諸魔は、一切皆悉く是くの如くに變壞し盡きたるにて、是れ文殊師利の威力の爲す所なり。と。是に於て、世尊は文殊師利に告げて言はく。文殊師利、汝今當に且く汝の神力を攝めて、彼の衆魔をして本の形に復することを得しむべし。と。

爾の時に、文殊師利は佛の教を受け已るや、諸魔に告げて曰はく。衆の仁者は、實に此の身儀を厭患すと爲すか。と。魔は報じて曰はく。唯然り、大士。と。文殊師利の言はく。若し是くの如くんば、汝今亦當に貪欲を厭患して、三界に著する勿かるべし。と。諸魔は報じて曰はく。善い哉、大士、敬んで嘉誨を聞き、豈敢て違ふことあらんや。惟願はくば、少しく威神を假して、此の慙苦を除かんことを。と。文殊師利は遂に神力を攝めて、一切の魔をして、復彼の天の形の莊嚴なること故の如くならしめたり。

爾の時に、文殊師利は諸魔に告げて言はく。波旬、汝の有つ所の眼は、何者を眼と爲し、何者は眼の想なるか。是の何の處の如きを、是れ眼と著し、是れ眼の相とし、是れ眼の攀緣とし、是れ眼の障礙とし、是れ眼の思とし、是れ眼の我とし、是れ眼の依止とし、是れ眼の喜樂とし、是れ眼の戲論とし、是れ眼の我所とし、是れ眼の護とし、是れ眼の念とし、是れ眼の取とし、是れ眼の捨とし、是れ眼の分別とし、是れ眼の思量とし、是れ眼の成就とし、是れ眼の生とし、是れ眼の滅とし、乃至、是れ眼の來・去とするか。是等の法の如きは、汝の境界たる魔業の障礙と爲す。眼の如くに、乃至、身・意も亦是くの如く、又色の如くに、乃至、觸・法も汝が境界たる魔業の障礙と爲すことも

は、外・内に有つ所をば一切能く施すなり。是れを、菩薩摩訶薩は四法を具足して、三昧を成就すと爲すなり。世尊、菩薩摩訶薩は、復四法を有たば能く三昧を得ん。何等を四と爲すか。一には、畢竟して深心なるなり。二には、實語を成就するなり。三には、常に空閑を樂むなり。四には、諸相を取らざるなり。是れを、菩薩は四法を具足して、三昧を成就すと爲すなり。復四法を有たば、菩薩は是の三昧を得ることを成就せん。何等を四と爲すか。一には、善友に親近するなり。二には、常に止足することを知るなり。三には、獨坐して思惟するなり。四には、龍狼を樂まざるなり。是れを、菩薩は四法を具足して、三昧を成就すと爲すなり。復四法を有たば、菩薩は是の三昧を得ることを成就せん。何等を四と爲すか。一には、破壞せざる戒なり。二には、缺犯せざる戒なり。三には、依る所無き戒なり。四には、報を望まざる戒なり。是れを、菩薩は四法を具足して、三昧を成就すと爲すなり。復四法を有たば、菩薩は是の三昧を得ることを成就せん。何等を四と爲すか。一には、聲聞の心を捨つるなり。二には、緣覺の心を離るるなり。三には、菩薩の忍に住するなり。四には、衆生を捨てざるなり。是れを、菩薩は四法を具足して、三昧を成就すと爲すなり。復四法を有たば、菩薩は是の三昧を得ることを成就せん。何等を四と爲すか。一には、空を修して我を捨つるなり。二には、無相にして相を離るるなり。三には、無願にして願を除くなり。四には、諸の所有を捨つるなり。是れを、菩薩は四法を具足して、能く三昧を得と爲すなり。世尊、時に彼の曼陀羅華香如來、應供・正遍覺は、此の破散諸魔の法門を説きたまへるを、我れ彼の佛より聞き已つて、初めて修したりき。次に復佛あつて、一切寶電蔽日月光如來・應供・正遍覺と號せしが、我れ時に、彼に於て具足して成就せり。彼の佛世尊の此の法門を説きたまへる時に、彼の衆會の中の十千の菩薩は、皆此の三昧門を成就することを得たり。と。

爾の時に、尊者舍利弗は、佛に白して言はく。希有なり、世尊。今此の文殊師利の、乃ち能く久

【三】畢竟して深心なるなり。異譯本には「行至誠にして、欺詐を懷かざるなり。」とあり。

【四】實語を成就するなり。異譯本の此れに當る者には「經典を啓受して、諸法を諷誦するなり。」とあり。

【五】諸相を取らざるなり。異譯本には「諸行を究竟して、非義を棄捐するなり。」とあり。

【六】依る所無き戒なり。

別の異譯本には「戒に依止せざるなり。」とあり。

【七】報を望まざる戒なり。

別の異譯本には「戒を濁さざるなり。」とあり。

【八】忍。此の「忍」は安住の義なり。第一卷、同名の解、参照。

【九】諸の所有を捨つるなり。別の異譯本には「心貪著せずして、一切をば能く捨つるなり。」とあり。

文殊師利、彼の佛世尊の名を何等と號して、是の三昧を説きて汝をして聞くを得しめたるか。と。
 文殊師利は白して言はく。世尊、我れ過去の無量・無邊・不可思議なる阿僧祇劫を憶ふに、爾の時に佛あつて、曼陀羅華香・如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と號して世に出現せる時に、是くの如き破散諸塵三昧を宣説したまひ、我れ彼の時に於て、初めて聽聞することを得たり。と。佛は文殊師利に告ぐらく。是くの如き三昧を、云何に修し得たるか。と。文殊師利は白して言はく。世尊、若し菩薩摩訶薩は、二十種の法を具足し成就せば、則ち能く是の破塵三昧を得ん。何等か二十なる。謂はゆる、一には、貪欲を訶毀して貪の心を破壊するなり。二には、瞋怒を訶毀して瞋の心を破壊するなり。三には、愚癡を訶毀して癡の心を破壊するなり。四には、嫉妬を訶毀して妬の心を破壊するなり。五には、憍慢を訶毀して慢の心を破壊するなり。六には、諸蓋を訶毀して蓋の心を破壊するなり。七には、熱惱を訶毀して惱の心を破壊するなり。八には、想念を訶毀して想の心を破壊するなり。九には、諸見を訶毀して見の心を破壊するなり。十には、分別を訶毀して分別の心を破壊するなり。十一には、取事を訶毀して取の心を破壊するなり。十二には、執著を訶毀して執の心を破壊するなり。十三には、諸相を訶毀して相の心を破壊するなり。十四には、有法を訶毀して有の心を破壊するなり。十五には、常法を訶毀して常の心を破壊するなり。十六には、斷法を訶毀して斷の心を破壊するなり。十七には、諸陰を訶毀して陰の心を破壊するなり。十八には、諸入を訶毀して入の心を破壊するなり。十九には、諸界を訶毀して界の心を破壊するなり。二十には、三界を訶毀して三界の心を破壊するなり。世尊、是れを、菩薩摩訶薩は二十法を具して、畢竟じて是くの如き三昧を成就すと爲すなり。世尊、菩薩摩訶薩は、復四法の具足修行を有たば、是の三昧を得ん。何等を四と爲すか。一には、心行を建立するに清淨調柔なるなり。二には、心性淳直にして諸の詭曲無きなり。三には、心攀緣する無くして深法忍に入るなり。四に

【一〇】 心行を建立するに、等別の異譯本に「清淨心なるなり」とあり。

【二】 心攀緣する無くして、異譯本には「深法忍に入つて、心起滅せざるなり」とあり。

師利の一の菩薩の名を聞くことを願はじ。何を以ての故ぞ。我れ即ち是の文殊師利菩薩の名を聞く時には、便ち大驚恐すること、自身を喪ふが若くなればなり。と。爾の時に、世尊は諸の魔に告げて言はく。波旬、汝今何ぞ忽ち是くの如き言を發すか。是の文殊大士の、凡そ衆生を開導し利益する所は、億百千の佛も昔より未だ作さざる所にして、今も亦作さず、當にも亦作さざらん、唯此の文殊師利のみ、去來現在に、常に衆生の爲めに斯の大事を建て、衆生をば熟し已つて解脱の中に置くなり。是の故にて、汝等は復彼の百千佛の名を聞くと雖も、苦惱を生ぜず亦驚怖無しと雖も、云何ぞ而ち、我れ今忽ち一の文殊師利の名を聞かば、皆大驚恐す。と言はんや。と。時に彼の魔衆は白して言はく。世尊我れ誠に慚恥す。此の弊老の身に、加ふるに惶懼を以てして斯の言を發せるのみ。世尊、我等今より正覺に歸依せん。惟願はくは、哀愍して、我れを本形に復したまはんことを。と。佛は之れに告げて曰はく。且く待て。須臾にして文殊師利も亦既に來り已らば、自ら汝の恥を除かん。と。

是に於て、文殊師利は三昧より起ち、遂に無量なる百千の天衆と與に、復無量なる百千の諸の大菩薩摩訶薩等及び無量なる百千の諸の龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の前後に圍遶せると與に、復無量なる百千の微妙なる樂音を作し、復是くの如き無量の妙華、謂はゆる優鉢羅華・鉢頭摩華・拘物頭華・分陀利華を雨し、大莊嚴を具へ、大神通を有ち、威德極無くして、俱に佛の所來つて頭面にて禮敬し、右に遶ること三匝し、退いて一面に住れり。

爾の時に、世尊は文殊師利に告げて言はく。文殊師利、汝は是の破散諸魔三昧耶の如きに入れりや。と。文殊師利は白して言はく。世尊、唯然く已に入れり。と。佛言はく。文殊師利、汝、何佛よりは是の三昧を聞き、修すること幾時を経て成滿するを得たるか。と。文殊師利の言はく。世尊、我れ本未だ菩提心を發さざりし時に、佛よりは是くの如き三昧を聞くことを得たり。と。又問はく。

百億の魔宮は、朽故して暗冥に、若しくは將に毀ち壞れんとし、其の變已に現するや、復と威光無く、一切の魔をして、其の所を樂まず、各自ら身を見るに、昏耄・羸瘠して杖を拄へて行き、諸の天女の輩をも、變じて老母と成らしめたり。一切の衆魔は、是の事を見る故に、心大に憂愁し、身毛皆豎ち、惶怖して思念すらく。是れ何の變怪ぞ。吾が内外をして、不祥なること斯くの若くならしむることや。將、死没の時至り、果報の離散する無からんや。是の世間の將に壞れんとする。劫災の事爲るか。彼の諸の魔衆の是くの如くに念ぜる時に、文殊師利は復神力を以て、即百億の天子を現ぜるに、魔の前に住在して、魔衆に告げて曰はく。汝憂懼する勿かれ。此れは汝の災に非ず。亦劫の盡くるにも非ず。所以は何ぞ。今此に適に不退轉に住せる菩薩大士の、文殊師利と名くるあつて、大威神を有ち道德世に超えたるが、即時に正に破散諸魔の三昧の法門に入りたるに、彼の大士の三昧の威神を以て其の事此くの若きにて、他あるに非ざるなり。と。諸の化天子の是の語を説ける時に、一切の魔王及び諸の魔衆は、諸の化天の説ける文殊師利大士の名號を聞くや、更に惶恐を増し、戦き掉うて安からず、一切の魔宮は、皆大に震動せり。時に諸の魔王は、化天に答へて曰はく。惟願はくは、仁慈もて我が危厄を救ひたまはんことを。と。諸の化天子は、復魔に語つて言はく。怖るゝ勿かれ、怖る勿かれ。汝等、今宜しく、速に疾く釋迦牟尼佛世尊の所に往き詣るべし。所以は何ぞ。彼の佛如來には大慈悲あつて、若し諸の衆生の憂恐煎迫するもの、但往いて歸依せば、皆安樂を蒙つて諸の憂苦を除けばなり。と。時に諸の化天は、是くの如くに語り已つて、即其の處に於て忽然として現れず。爾の時に、一切の魔王及び諸の魔衆は、化天の教を聞きて歡欣せざるは莫く、皆共に心を同じうして、須臾の頃に於て、羸弊を杖に拄へて、皆來つて釋迦牟尼佛の前に住り、同聲にて白して言はく。大德世尊、願はくは、救護せられんことを。願はくは、救護せられて、茲の變怪・困苦の大厄を免れんことを。世尊、我等寧ろ百千萬億の諸佛の名號を受くとも、彼の文殊

【一七】 劫災。壞劫即ち世界の破壊する際に、火、風、水の三災起つて、世界を滅盡せしむる者を謂ふ。

是くの如くに、諸の化菩薩の是の偈を説ける時に、彼の會の衆中の二萬二千の衆生は、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、五百の比丘は、漏盡き意に解して心に解脱を得、三百の比丘尼は、塵に遠り垢を離れて法眼淨を得、七千の優婆塞、優婆夷、二萬五千の諸天子も、亦塵垢を離れて法眼清淨に、三百の菩薩は、無生法忍を得たり。是に於て、三千大千世界の大地は、六種に震動せり。謂はゆる動・過動・等過動・震・過震・等過震にして、涌・過涌・等過涌、乃至、吼・起・覺の等も亦復是くの如し。

破 魔 品 第四

爾の時に、尊者舍利弗は、佛に白して言はく。世尊、今の此の瑞相は、誰れの爲す所ぞ。能く是くの如くに三千大千世界の大地をして、六種に震動せしむることや。又是の寶聲の殿堂・蓮華の座上の諸の菩薩等の、大光明を放つて斯の衆會を照し、是くの如き微妙なる深法を演説せることや。復是くの如き無量億數の諸の天子衆をして、皆來つて集會せしめたることや。復億數の諸の菩薩等のあつて、亦來り集れることや。と。爾の時に、佛は舍利弗に告ぐらく。斯れ乃ち文殊師利の威神の力の故にて、是くの如き妙莊嚴の事を現じ、亦菩薩・諸天をもして雲集せしめたるなり。所以は何ぞ。舍利弗、是に文殊師利と善住意天子とは、諸の大衆を將ひて我が所に來り、是の諸魔を破散する如き三昧の法門を請ひ問ひ、諸の不思議甚深なる佛法を具足し成就せんと欲せる故なり。と。時に舍利弗は、復佛に白して言はく。世尊、若し是くの如くならば、何の因縁の故にて、我れ此の衆を觀れども、竟に彼れ文殊師利を見ざるか。と。佛は舍利弗に告ぐらく。汝宜しく且く待つべし。今文殊師利は、已に一切の魔王・一切の魔衆・一切の魔宮に大衰耗を作すことを與へんと、神變の極妙なる莊嚴を爲す所にて、將に我が所に至らんとすれば、汝當に自ら見るべし。と。

是に於て、文殊師利は即、破散諸魔の三昧に入るに、三昧の力の故にて、即時に三千大千世界の

【二】六種に震動せり。等。謂はゆる六種震動には數種あれど、今の動、震、涌、吼、起、覺は、六相の震動を謂ひ、其の中、前の三は形容にして、後の三は聲音なり。而して、此の六相の各に小、中(過)大(等過)の三種あるを以て、之れを六種十八相の震動と稱する者とす。

法を説きたまふも亦是くの如くに 斯れ皆虚誑にして幻夢に同じと 恒沙の世界の中に満ちたる寶を 持ちて以て一切の人に布施せんも 若し能く忍を修し善く空を説かば 是くの如きは施を行ぜるに彼れに超えん 復恒沙の諸の劫中に於て 諸佛天人の上に供養して 香華及び樂具を獻じ奉り 菩提を求め世間を離れんと爲すとも 是くの如き甚深の法 衆生及び命人ある無きを聞くを得ば 當に知るべし彼れは明淨の忍を得れば 是れを十方の佛を供養すと爲すことを 無數の劫に於て 衣食象馬及び樂珍を布施するを行すとも 當に知るべし彼れ解脱の因に非ざることを 我人衆生の想あるを以てなり。 減度したまへる人中の尊に歸命したてまつる 衆生を救済したまへること無量の數なるも 諸法は皆空にして本より清淨なりとは是くの如きは解脱智の莊嚴なり 諸佛の出世は甚だ値ひ難く 正法を聞くを得て信を生ずること難く 人身も得難きに今已に獲たれば 善い哉佛の法を汝順行せよ 已に斯の八難を斷除するを得ば 永く追窄を絶てば空閑に處り 諸の正法に於て信行を得んと 應當に勇猛に精進を發すべし 若し法を聞き已らば應に正思すべく 聲を聞き即取著す可からず 汝等常に阿蘭若を行ぜば 必ず當に速疾に人雄を成すべし 善知識及び法の師に近き 應に速に諸の惡友を遠離すべく 汝衆生に於て平等に想ひ 慎んで妄に我人の心を起す勿かれ 常に多聞を樂み禁戒を持ち 舍宅を捐棄して林間に坐し 腐藥もて病を治して善を詐る無く 亦恒に乞食し糞衣を受けよ 一切の有爲は即無爲に 等同に一相にして陽焰の如しと 若し實際を了し眞如を見れば 疾く無上菩提の道を成ぜん 當に五陰は幻の如くに 内外の諸入は空舎の如しと觀すべし 世尊は常に斯くの法を説きたまふ 法の等彼れに於て著を生ずる莫かれと 食欲瞋恚は性自ら空に 愚癡我慢は分別にて起り 彼の法は已に滅し今も亦無しと 是くの如くに知る者は 佛を成ずるを得ん と。

【六】 減度したまへる。乃至。解脱智の莊嚴なり。

異譯本に「其(ソコ)に人中の上の、已に減度に歸したまへる者あつて、曾て衆生を度して、濟ひたまふ所無央數なるも、其の法は本より清淨なれば、之れを察するに所有無く、解脱、明慧等を、學ぶ所も、茲くの若しと爲す。」とあり。

【七】 腐藥もて病を治し。異譯本に「穢藥以て身を療し」とあり。

にて成ぜられ天衣もて上を覆へるに、其の牀には各化菩薩の坐せるあつて三十二大人の相を具したり。爾の時に、文殊師利は普く是くの如き莊嚴の事を現じ已つて、遂に更に彼の蓮華の化佛并に化菩薩及び此の寶鬘・重閣の殿堂の諸菩薩衆と俱に佛の所に往き、佛を遶ること七匝し、并に亦比丘の衆を圍遶し已り、踊つて虚空に在つて、光明普く衆會の道場の四面を照して住れり。

爾の時に、文殊師利は、善注意の發せるに後れたるが、忽然として前に在つて先に佛の所に至り、善注意天子は、反つて更に後に到りしかば、白して言はく、大士、吾れの發せること前に在りしに、更に後に在つて至れり。仁は何の路より乃ち斯に至れるか。と。文殊師利の言はく、天子、假に恒河に滿てる沙の諸の如來を供養し、等しく稽首して禮を爲さしむとも、終まで吾が往來・進止を見じ。と。

爾の時に、華臺の諸の化菩薩及び寶堂の中の諸の菩薩衆は、同聲にて偈を説いて如來を讚歎すらく。
已に會て恒沙に過ぎたる 不可思議の諸の世尊を供養し 熾然たる修行もて菩提を求めたまへ
る 是の故にて天人の上に超出したまへり 光明妙色は三界の雄たる 牟尼の衆寶は實に奇
特に 衆の爲めに甚深の法 壽命及び人我ある無きを宣説したまふ 世尊は施を行じ淨戒を
持ち 忍辱精進と具に禪を修め 智慧清淨にして三界の表たれば 我れ彼岸たる最勝尊に禮し
たてまつる 其れ發意して菩提を求むるあらば 則ち天人の妙供養を受け 若し深空に於て
疑惑無くんば 當に出世の大法王を納ぐべし 過去の諸佛等正覺 現在の一切の兩足尊は
常に是くの如き諸法の空にして 本來無相亦無作なるを説きたまふ 衆生の體性は得可から
ざれば 何ぞ生ずる者及び死滅あらん 本より既に來たる無く亦去る無ければ、一切の諸法
は虚空の如きなり 彼の化人に衆事を觀するに 復示現すと雖も而も眞無きが如く 世尊の

【四】天子、假に、乃至、吾が往來、進止を見じ。

異譯本に、「假使ひ江河沙の等の如來を供養して、眞に稽首して禮を爲すにも、吾が去來、進止を見る能はじ」とあり。

【五】世尊の、乃至、幻夢に同じと。

異譯本には、「説く所の法に安住すれば、其の義茲くの若しと爲す。之れを觀るに幻化の如く、亦夢に見る所の如し」とあり。

轉とせば、則ち常の邊に墮し、無法の退轉とせば、則ち斷の邊に墮すればなり。然るに世尊は、常の中に住せず斷の中に住せず、斷に非ず常に非ず。と説きたまふ。世尊の説きたまふ所は、天子、彼れは先の不眞實なる想に於て、而く彼れの證知する若きを、則ち斷に非ず常に非ずと名くるなり。是れを菩薩の退轉の法門と爲す。と。是の法を説ける時に、十千の天子は無生法忍を得たり。

文殊神變品 第三

爾の時に、善住意天子は、文殊師利に白して言はく。大士、今俱に行いて如來の所に詣り、見え奉つて頂禮して、未だ聞かざるを諍ひ受け、亦此の時に因つて法の如くに問難すべし。と。文殊師利の言はく。天子、汝、如來を分別して取著する莫かれ。善住意は言はく。大士、如來の何に在るを、而ち著する莫かれと言ふか。文殊師利の言はく。即現前に在り。善住意は言はく。若し是くの如くならば、我れ何ぞ見ざるか。文殊師利の言はく。天子、汝今若し能く一切をば見ずんば、是れを則ち名けて眞に如來を見ると爲す。善住意の言はく。若し現前せば、云何ぞ我れに如來を取する莫かれと誠むるか。文殊師利の言はく。天子、汝今の現前に、何は有ると謂ふか。善住意は言はく。虚空界あるのみ。文殊師利の言はく。是くの如し。天子、如來と言ふは即虚空界なり。何を以ての故ぞ。諸法は平等にして虚空の如くなる故なり。是の故に虚空は即是れ如來にして、如來は即是れ虚空なり。虚空と如來とは、二無く別無し。天子、是の義を以ての故に、若し人如來を見んと欲求せば、當に斯の觀を作すべし。如實の如くに眞際をば覺了せば、是の中に一物の分別す可き者ある無し。と。

爾の時に、文殊師利菩薩摩訶薩は、復神力を以て三十二所の重閣の寶堂を化作せるに、輦軒具足し、四面正方にして、四つの角に柱あつて、周く欄楯を匝し、寶網交絡うて、殊特に妙好に、高く顯るゝこと瓊瓊として、具足せる莊嚴は甚だ愛樂す可く、諸の堂閣内には咸く勝牀あつて、衆寶

【一】然るに世尊は、乃至。説きたまふ。

異譯本には「如來至眞等正覺の經法を説きたまふ若きは、斷滅を宜へず、有常を演べず、諸法を想はざるなり。」とあり。

【二】十千。一萬を謂ふ。

【三】大士、如來の何に在るを、等。異譯本には「當に何(イカ)に待つべきか。」とあり。

我見に從ふが故に退轉あり。我見を根本と爲せる六十二見に從ふが故に退轉あり。諸蓋に從ふが故に退轉あり。諸陰に從ふが故に退轉あり。諸入に從ふが故に退轉あり。諸界に從ふが故に退轉あり。佛の想に從ふが故に退轉あり。法の想に從ふが故に退轉あり。僧の想に從ふが故に退轉あり。是くの如くに、乃至、我れ當に成佛すべく、我れ當に法を説き、我れ衆生を度すべく、我れ當に魔を破り、我れ智慧を得べしとする、是の諸想に從ふが故に退轉あるなり。是くの如くなれば、天子若し能く如來の十力を分別せず、四無所畏を分別せず、十八不共の法を分別せず、一切の根・力・覺・道を分別せず、諸の相好を分別せず、莊嚴の佛國を分別せず、聲聞を分別せず、菩薩を分別せず、乃至、一切の分別して退轉する者を分別せずんば、是れを不退轉と名くるなり。と。

爾の時に、善住意天子は、復文殊師利に白して言はく。大士、若し是くの如くならば、當に何の處に於て不退轉を得べきか。と。文殊師利の言はく。大士、當に知るべし。佛慧に通達することに從ふが故に退轉せざるを得、空に從ふが故に退轉せず、無相に從ふが故に退轉せず、無願に從ふが故に退轉せず、如如に從ふが故に退轉せず、法性に從ふが故に退轉せず、實際に從ふが故に退轉せず、平等に從ふが故に退轉せざるなり。と。善住意は言はく。大士、若し是くの如くに説かば、一切の諸の分別と無分別と、二つは俱に異らざるなり。所以は何ぞ。皆思惟の分別より生ずるが故に、是の故に於て彼れに退轉有りと言ふを得ればなり。又問ふ。是くの如き退轉に法有りと爲すや。法無しと爲すや。と。文殊師利の言はく。有に非ず無に非ず。是くの如き退轉は。と。善住意は言はく。大士、若し爾らば、何の處の退轉ぞ。文殊師利の言はく。若しは有若しは無は、是れ虛妄の取。是れ顛倒の取。是れ不如の取なるに、彼れは則ち取ならず、亦不取に非ざるにて、是の義を以ての故に退轉と言ふを得るなれば、而も彼の退法は、有と説く可からず無と説く可からざるなり。何を以ての故ぞ。若し有無の中に有一つ退轉ならば、彼れ即ち過と爲ればなり。所以は何ぞ。若し有法の退

【六】佛慧に、乃至、退轉せざるを得。

異譯本に「佛の慧に通達せば、則ち退轉せず。」とあり。

【七】皆思惟の分別より生ずるが故に。

異譯本に「有法を計する故に」とあり。

【八】不如。法の變異無き實相を「如」と曰ひ、然らざるを「不如」と曰ふ。

【九】彼れは則ち取ならず、乃至、無と説く可からざるなり。

異譯本に「若し諸の受到於て、受けず捨てず、以て愚服せずんば、則ち能く一切の諸法を信ずることより退き、無道を頌宣することも有ならず無ならず、説くことも亦住せざるなり。」とあり。

【一〇】若し有無の中に、乃至、隨すればなり。

異譯本に「假し、退の念をして、此れ有此れ無ならしめば、則ち缺漏に墮して、若し有と言はば、則ち常を計するを爲し、若し無と言はば、則ち斷滅に墮すればなり。」とあり。

種の見縛けんばく無くして法を聽かば、當に知るべし、彼れは三種の淨じゆんじゆんの中に住することを。何をか三淨と謂ふ。一には、自身を見ずして、分別せず思念せず證知せざるなり。二には、説く者を見ずして、分別せず思念せず證知せざるなり。三には、説く所を見ずして、分別せず思念せず證知せざるなり。天子、是れを則ち名けて三種の淨と爲すなり。天子、若し能く是くの如くに聽くことを作すあらば、是れ平等びやうとうの聽ちやうにして、不平等に非ざるなり。と。爾の時に、善住意天子は文殊師利を讚じて言はく。善い哉、善い哉、快く斯の説を作せることや。大士、若し能く是くの如き説を作す者あらば、當に知るべし、卽是れ不退轉の説なることを。と。文殊師利は言はく。且く止めよ。天子、汝今應に菩薩の退轉を妄想し分別すべからず。何を以ての故ぞ。若し菩薩をして退轉あらしめば、彼れ終まで等正覺を成ずること能はざればなり。所以は何ぞ。是の菩提の中には退法無き故なり。と。善住は復言はく。大士、若し是くの如くならば、當に何の處に於てか斯の退轉有るべき。文殊師利は言はく。天子、當に知るべし。貪欲に従ふが故に退轉あり。瞋恚に従ふが故に退轉あり。愚癡に従ふが故に退轉あり。有愛うあいに従ふが故に退轉あり。無明むみやうに従ふが故に退轉あり。乃至、十二有分の生死の生ずる所に従ふが故に退轉あり。因いんに従ふが故に退轉あり。見けんに従ふが故に退轉あり。名みやうに従ふが故に退轉あり。色しきに従ふが故に退轉あり。欲界に従ふが故に退轉あり。色界に従ふが故に退轉あり。無色界に従ふが故に退轉あり。聲聞の行ぎやうに従ふが故に退轉あり。辟支佛の行に従ふが故に退轉あり。分別に従ふが故に退轉あり。執著しやくちやくに従ふが故に退轉あり。相さうに従ふが故に退轉あり。相を取ることに従ふが故に退轉あり。斷見に従ふが故に退轉あり。常見に従ふが故に退轉あり。取しゆに従ふが故に退轉あり。捨しやに従ふが故に退轉あり。我の想がうに従ふが故に退轉あり。衆生の想に従ふが故に退轉あり。壽命の想に従ふが故に退轉あり。士夫の想に従ふが故に退轉あり。補伽羅の想に従ふが故に退轉あり。思しの想に従ふが故に退轉あり。繫縛けんばくに従ふが故に退轉あり。顛倒てんたうに従ふが故に退轉あり。

【三】大士、若し能く、乃至、不退轉の説なることを。

異譯本の此れに當る者には「説に住する所の者は、退轉せず。」とあり。

【三】十二有分の乃至退轉あり。別の異譯本には「十二有支の退轉」とあり。

【二】補伽羅。「補特伽羅」の略なり。

【五】思の想に従ふが故に退轉あり。別の異譯本には「意思の退轉」とあり。

得る所無き句・一切法の生ずる無き句・師子の句・勇猛の句・無句の句を受くることを爲すか。斯くの如くに説き已るを、誰れは聽く者たるか。と。是に於て、文殊師利は復更に思惟すらく。今此に唯善住意天子のみあつて、已に過去に於て多くの佛を供養して、深法忍に入り辯才を具足したれば、當に我れと世尊の前に處つて、共に實義を談じ能ふべし。と。爾の時に、文殊師利は是くの如くに念じ已るや、即善住意天子に語つて言はく。天子、汝は今已に甚深なる法忍を得、又能く無礙の辯才を具足したれば、今當に我れと世尊の所に詣つて、是くの如き深妙なる義を對論すべきか。と。時に善住意天子は、文殊師利に報じて言はく。大士、我れ是くの如くに説かん。彼れ若し我れに於て、語言を有つ無く演説を爲さず、諮問を存せず、亦報答する無く、佛・法・衆を無にし、三乘を斷滅し、生死を無にし、涅槃を無にし、合せず散ぜず、啓かず發さず、聲音を出さず、諸の文字を除くこと。是くの如くにして説かば、我れ當に共に談ずべし。と。文殊師利は善住意天子に語つて言はく。我れは是くの如くに説かん。彼れ能く我れに於て、聽く無く聞か無く、讀む無く誦する無く、受くる無く持つ無く、思はず念ぜず、取らず捨てず、覺せず知せず、我が言を聞かず、他の爲めに説かさらんことを。所以は何ぞ。諸佛の菩提には、本文字無く、無心にして心を離れ、覺悟を有つ無く、假名にて説くと雖も其の名も亦空なればなり。と。善住は又言はく。大士、今は且く諸の天子の爲めに説け。斯の諸の天子は、大士の説に於て聽聞せんことを樂欲すればなり。と。文殊師利の言はく。天子、我れ終まで、聽くことを樂ぶ者の爲めに説かず、又亦聞受する者の爲めに説かざるなり。所以は何ぞ。凡べて聽受するあらば、則ち取著を爲せばなり。云何に取著するか。謂はゆる我に著し、人に著し、衆生に著し、壽命に著し、士夫に著するなり。取著の故を以て便ち聽受を有つ、是くの如き聽受は、當に知るべし、彼れ三種の縛の中に住することを。何をか三縛と謂ふ。一には、我を見る縛なり。二には、衆生を見る縛なり。三には、法を見る縛なり。天子、若し是くの如き三

卷の第一百三

善住意天子會 第三十六の二

開實義品 第二

爾すなはの時に、大に集れる衆しゆの中に、上首なる天の謂はゆる善住意天子・善寂天子・慚愧天子あつて、是等の如き九十六億の諸天子と俱に、一切皆菩薩の道を行じたるが、咸く共に文殊師利の所に往き詣り、其の門外に至つて右に遶ること七匝し、遶ること七匝し已つて然る後に天の曼陀羅華を雨ししが、其の雨す所の華は、遍く虚空を覆ふこと高さ十由旬にして、華の網臺を成して、形は寶塔の如くなりき。時に文殊師利は、此の華臺を持ちて世尊に供養し、供養し已つて、即神力を以て、此の三千大千の一切の國土の虚空の中をして、華網にて遍く覆はしめたるに、是の華の光明は普く三千大千世界を照して、皆大に明盛にして、復たの曼陀羅華を雨したり。爾の時に、文殊師利菩薩摩訶薩は、閑雅安庠として精舍より出で、更に神力を以て、居る所の地をして自然にして七寶の妙座あらしめたるに、其の座は巍巍として莊嚴を具せり。文殊師利は容を斂め服を整へて此の寶座に昇れる時に、善住意天子は、文殊師利の寶座に昇り已るを見るや、即頂を以て文殊師利の足を禮し、退いて一面に住り、一切の諸天も亦皆文殊師利の足を頂禮せり。

爾の時に、文殊師利は是くの如くに思惟すらく。誰れは今日に於て、我れと世尊の前に在つて、深法を對揚するに堪任するか。誰れは法器として、能く是くの如き思議せられざる句・甚だ證し難き句・處る所無き句・著する所無き句・戲論無き句・得可からざる句・説く可からざる句・甚深なる句・眞實なる句・礙無き句・壞る可からざる句・空の句・無相の句・無願の句・如如の句・實際の句・法界の句・形貌無き句・取らざる句・捨てざる句・佛の句・法の句・僧の句・智慧滿足の句・三界平等の句・一切法の

【一】華の網臺。
異譯本には「華の交露」とあり。

し稱讚して彼の虚空に満ちたり。時に大に集れる衆しゆの、其の數甚だ多くして稱ほり計へられ難く、此の四天下に周遍に充滿したれば、空地の一杖頭の如くなるも、而すなはち遍まからざる者ある無く、是の諸の天・人の、大威徳を具して散ぜる所の諸華は、四天下に満ちて積つて膝に至れり。

如くに常見を破り 斷じ已つて自ら餘無く 一切の相を放捨せよと 衆生の爲めに此れを説きたまふ 眞實なる際は 世間に心行を絶ちて 唯彼れは空無相 無願亦無作なりと宣明したまふ 虚空にして本より形無く 起らず亦滅せず 來たる無く亦去る無しと 智者の説きたまふ所なり 盡くる無く生ずる所無く 本より淨くして有る所無く 相貌の見る可き無く 思想の説き能ふ無し 衆生本より無生なれば 云何ぞ死を言ふを得ん 寂滅にして衆生無ければ 衆生は何處に在る 言音もて説法を爲せども 法は言音に住せず 亦文字にも在らずと 世尊は斯くの如くに説きたまふ 諸の處に遍く推求すれど 風水火を見ず 地も亦分別無しとは 慧眼の宣べたまふ所なり 色受及び想と 行識は虚空に同じく 假に彼の五陰を言へども 其の實は積聚無し 眼耳鼻舌身 心意等の諸根は 本性空なるを説くと雖も 空も亦得可からず 色聲香味觸と 及び種種なる法とは 斯に分別に由つて生ずるに 分別の體も空寂なり 欲界と色界と 及び彼の無色の天も 皆幻化の如くに 虚偽にして眞實ならずと説きたまふ 是くの如くに諸の世尊は 衆生の爲めに法を説きたまへば 衆苦を出づることを求めんと欲して 速に大導師に歸せよ と。

彼の化佛の此の偈を説ける時に、是に於て三千大千世界は、咸く之れを聞くを得たれば、九十六億の欲色の諸天の、塵垢を遠離して法眼淨を得、二萬の天子の衆欲を厭離し、三萬二千の天子の皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、一萬の菩薩乘を行ぜざる諸天子の無生法忍を得るあり。爾の時に、彼の化如來に勸召せらるゝ所にて、無量無邊の阿僧祇億那由他百千の諸天の大衆は、須臾の間に於て、悉く皆釋迦如來・應供・正遍覺の所に雲集し、足下に稽首し、右に遶ること三匝して、退いて一面に住り、天の華香、謂はゆる優鉢羅華・鉢頭摩華・拘物頭華・分陀利華・曼陀羅華・摩訶曼陀羅華及び諸の華鬘・末香・塗香を以て、世尊及び餘に散じ奉つて供養し、復種種なる天の妙樂音を以て、歌詠

【二〇】眞實なる際は、「實際」の略にして即ち眞如の法性を指す。

ならば、可ならんか。と。文殊師利は既に思惟し已るや、即神力を以て、意の如くに八萬四千億那由他の妙寶の蓮華を化成せるに、大さ車輪の如くにして、純金を莖と爲し、白銀を葉と爲し、勝藏・羅網は毘瑠璃寶にして、是の諸の華の中に、皆化佛及び諸菩薩あつて蓮華臺上に結跏趺坐せるが、身は紫金色にして、三十二相・八十種好の威德巍巍として、光明普く照したり。時に彼の蓮華は、上四天王・三十三天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天及び諸の梵天、乃至、有頂に昇りたり。是くの如きを略して説かんに、遍く此の三千大千世界、乃至、百億の須彌・百億の四天下・欲界の天宮・色界の天宮に、彼の化蓮華は遍く至らざる無かりしが、是の諸の化佛及び菩薩衆は、大音聲を出して遍く三千大千世界に告げて、偈を説いて言はく。

世尊 明慧の日は 希有に世間に出でたまふこと 譬へば彼の優曇華は 遇ひ難きも復是れに過ぎたり 釋師子 人雄は 今は世に現れ 深妙なる法を班宜して 永く衆苦の源を抜きたまふ 諸天は快樂すと雖も 誰れか能く長久を保たん 業に任して三塗に還り 復衆の苦毒を受くるなり 諸の欲事を習ふ所に 貪愛獨り増長し 三界本より樂無きに 而も愚は之れに耽著せり 已に最上の難き 謂はゆる諸佛の出でたまふを獲たれば 愚癡放逸の人も 焉んぞ苦を覺つて斷たざらんや 汝等當に速に 佛に見え正法を聞くことを求むべし 若し聖にして涅槃し已りたまはば 悔ゆと雖も追はれ難し 魔網は深く怖る可きに 汝等放逸を爲さば 既に羅網を被り已れるなれば 寧ぞ解脱の期あらん 獨り佛法を求むるあらば 汝は衆生の資と爲れば 汝等但速に 三十二の妙相を求めよ 佛は能く世間を救ひたまへども 餘には依る可を者無し 世雄は甚だ希有にして 大慈は思量し難し 無量億の數劫に 行じたまふ所は量る可からずして 功德の智慧を集めて 釋師子を成就したまへり 闡揚したまふ微妙の法は 甚深にして覺知し難きも 何處に衆生 及び我人壽命あらんと 是くの

【三】勝藏、羅網。勝藏は寶室を、羅網は花辯を曰へる者なるべし。

【四】明慧の日。佛徳の讚號なり。

【五】人雄（Brahmā）。同じく佛の德號なり。

【六】汝は衆生の資と爲れば。別の異譯本には「能く衆生の福を生ずれば」とあり。

【七】世雄。佛の德號の意なり。

時の往來の相をすら親みざることは是の如し。世尊、諸の菩薩摩訶薩の輩あつて、念じて是の如き不思議の智を求めたるは、一一の衆生の爲めに、恒河沙の劫に於て、地獄の中に生じて備もく衆の苦を受けんとてならん。世尊、彼れの菩薩道を求むる故にて、衆苦を經ゆと雖も而も捨離せざるは、是の如き甚深不思議の智の是の如くなればならん。世尊、若く我れ今は、漏心未だ盡まず、未だ解脱を得ず、諸佛の法に於て未だ知らざる所の者あれば、我が當來をして、常に生死に在つて、更に彼の不思議なる大妙乘を捨離せざらしめん。と。是に於て、世尊は須菩提を讚じて言はく。善哉、善哉。誠に汝の言ふが如し。汝は信を以ての故に斯の如き説を作せば、汝をして此の身に涅槃を取らざらしめば、斯の善根を以て、當來の世に於て、恒沙の劫を過ぎて、汝は當に轉輪王と作つて、正法にて世を治め、然る後に乃ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。又、須菩提、今此の三千大千世界の衆生の數類は、寧多しと爲すや不や。須菩提言はく。甚だ多し、世尊。甚だ多し、世尊。と。佛言はく。是の如し。是の如くにして須菩提、是の諸の世界の有らゆる衆生は、智慧を成就すること舍利弗の如くに、空を解することの第一なること須菩提の如くに、苦行の、偷とに超ゆること大迦葉の如くにして、即ち是の如き諸の大聲聞をして、共に盡く彼の菩薩を知見し求めしむること、若しは一劫に於て、若しは百劫に於て、若しは千劫に於て、乃至、無量なる恒河沙の劫にても、亦見ること能はじ。見能ふ若き者は、是の處ある無きなり。何を以ての故ぞ。須菩提、彼の諸の菩薩の凡すべて爲なす所は、是の一切の聲聞・辟支佛の行ずる所の境界に非ざればなり。是の故に、二乘は終まで見る能はざるなり。と此の法を説ける時に、是の衆會の中の八萬四千の天・人は皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、三千世界は六種に震動したり。

爾の時に、文殊師利は、己が住室に於て是の如くに思惟すらく。今此に十萬億百千數の諸の大菩薩は、皆已に集會したれば、吾れ當に復諸天の大衆を召して、咸く雲集せしむべし。是の如く

【二】若く我れ、乃至、捨離せざらしめん。別の異譯本に「若く我が漏心未だ解脱せざれば、未來の際に於て、常に生死に在つて、更に是の如き大衆を捨離せざらん。」とあり。

【三】汝をして、乃至、取らざらしめば。異譯本には「假使し、汝今、此の身を以て減度を取らずんば」とあり。

は迦葉に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如くに、是の中にては、一切の聲聞・辟支佛すら尙境界に非ず。況んや餘の衆生をや。と。

爾の時に、尊者舍利弗は是くの如き念を作さく。世尊は、我れを聲聞人の中にて智慧第一なりと稱したまふ。我れ今寧諸の菩薩の、今何所に在つて、何の威儀に住し、何の事業を作せるかを求むべきか。若し親見するを得ば亦善からずや。と。時に舍利弗は是くの如くに念じ已るや、佛の威神を承け及び自力の故にて、即三萬の諸の三昧門に入つて、周旋つて觀察すれども、彼の諸菩薩の、今何所にて何の威儀に住すと爲すかを、乃至、毫釐の如き相をも知らざるなり。

爾の時に、尊者須菩提は是くの如き念を作さく。我れも今亦當に諸菩薩の、何所に在り、何の威儀に住し、何事を造作すと爲すかを求むべし。若し親見せば亦善からずや。と。時に須菩提は是の念を作し已るや、佛の威神を承け及び自力の故にて、即四萬の諸の三昧門に入つて周遍に推求すれども、彼の諸菩薩の、何所に在り何の威儀に住すと爲すか、乃至、行・住・坐・臥も、何所より來り、去つて何所に至るかを見ざるなり。然る後に定を出で、前んで佛の所に至り、頭面にて足を禮して白して言はく。世尊、世尊は我れを聲聞人の中にて、無諍三昧を最も第一と爲すと記したまふ。是の三昧門を我れも亦已に得たることは是くの如し。世尊、我れ若し、定に入つて正使せば、人あつて大神力を具して、能く百億の四天下を以て一つの大鼓と爲し、須彌山を取つて一つの大槌と爲し、我が定の時に於て、一の大人をして我が前に住在し、彼の大槌を執つて大鼓を擗撃すること暫くの休廢も無く、乃至、劫を經しむとも、是くの如き鼓聲すら尙耳に入らじ。何に況んや、心を亂して我れをして出でしめ能ふことをや。彼の鼓聲は定の患を爲して、我れを牽き起し能ふ若き者は、永く是の處無きなり。世尊、我が今得る所の無諍三昧の弘く普きことは是くの若くにして、我れ向に四萬の三昧を經歷して周遍に推求すれども、彼の諸の菩薩を終まで見る能はず。乃至、一人の暫

【△】無諍三昧。
異譯本は「行空」とあり。
【乙】是の三昧門。
別の異譯本に「是くの如き寂靜三昧の法門」とあり。
【丙】定に入つて正使せば、定力を活動現起せしむるを謂ふ。

尊、一切の聲聞、辟支佛は、尙皆未だ會て一も是の心——我れ當に一切の衆生を阿羅漢地に安置すべし。——を發さず。況んや、佛の法にをや。と。佛言はく。迦葉、是くの如し、是くの如し。是の故に一切の聲聞、辟支佛は、悉く菩薩の行する所の隱身三昧に入り能ふこと無し。此の三昧の名をすら尙自ら知らざれば、云何ぞ入り能はんや。入り能ふ若き者は、是の處ある無し。と。爾の時に、尊者大迦葉は、復佛に白して言はく。世尊、我等今は深く彼の諸の大菩薩摩訶薩等を見んことを欲す。所以は何ぞ。斯の諸の居士には會遇せられ難ければなり。と。佛言はく。迦葉、汝宜しく且く住るべし。當に須く我が文殊師利の來らば、彼の諸の菩薩は當に定より出づべきを待ち、汝等然る後に乃ち之れを見るべきのみ。然りと雖も迦葉、汝も亦是の無量なる百千の諸の三昧門を得たれば、今當に心を攝めて、彼の菩薩摩訶薩等は、何處に在つて、何の威儀に住し、何の事業を作せるかを求むべし。と。時に大迦葉は聖教を蒙り已るや、佛の威神を承け及び己が通力にて、即二萬の諸の三昧門に入り、是くの如くにして思求すれども、彼の諸の菩薩は、今何所に在つて何の威儀に住して行歩を爲すかを而ち竟に見ず。住立を爲すかをも而ち亦見ず。倚臥を爲すかをも而ち亦見ず。端坐を爲すかをも而ち亦見ず。乃至、何の語言を以ひ、何の事業を作し、來たるに何所よりし、去るに何所に至るかを知らざるなり。是に於て定より起ち、前んで佛に白して言はく。甚だ奇なり、世尊。甚だ奇なり、世尊。我れ已に二萬の定門を經歷して、諸の菩薩を求むれども竟に見る所無し。世尊、彼の諸の菩薩摩訶薩等は、尙未だ薩婆若の處を證知せざるにすら、已に是くの如き微妙なる三昧を得たり。何に況んや、無上菩提を證するに當つてをや。世尊、諸の善男子・善女人にして、其の是くの如き神變を見聞するあつて、而も疾く阿耨多羅三藐三菩提の心を發さざる者は、是の處ある無きなり。世尊、能く是くの如き隱身三昧を得たる菩薩摩訶薩の、彼の一切衆生を度せんと欲して精進の鏡を被ることを爲すにも、然く終まで是の妙定より離るゝを得ざらん。と。佛

【一七】能く是くの如き。乃至。離るるを得ざらん。別の異譯本には「隱一切身菩薩三昧の威神の力すら、尙測る可らず。何に況んや、復其の餘の三昧を有てるをや。」とあり。

り。若し能く是の慈悲地の中に住せば、斯に則ち他を利益する事を爲し能ひ、則ち亦布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の諸波羅蜜の等をも行し能はんも、若く已に受けたる正位にては、終まで此の諸菩薩の行する所の處を行すること能はざるなり。迦葉、斯に諸の菩薩摩訶薩等は、一切、皆隱身三昧に入りたるが、是の故もて一切の聲聞・辟支佛は、彼の諸の菩薩等を見る能はず。惟諸佛及び大菩薩の斯の地に住せる者の、乃ち見能ふことを除くのみ。迦葉、初めて大乘に住せる諸の菩薩等すら尙見る能はず。何に況んや、一切の聲聞・辟支佛にして能く見ることを得んや。見るを得る若き者は、是の處ある無きなり」と。

爾の時に、大迦葉は復佛に白して言はく。世尊、菩薩摩訶薩は、幾法を具足し、何の善根を修し、何の功德を獲ば、而ち是の隱身三昧に入り能ふか。と。佛言はく。迦葉、菩薩摩訶薩は、十法を成就せば、即ち是の隱身三昧を獲能ふなり。何等を十と爲す。一には、志性柔和にして、深く正信に住するなり。二には、恒に一切の衆生を捨離せざるなり。三には、畢竟して大慈悲の心を成滿するなり。四には、一切を覺了して衆相に著せざるなり。五には、復一切の佛法を思求すと雖も、終まで妄取せざるなり。六には、亦一切の聲聞・辟支佛の智を思想せざるなり。七には、世間の有つ所をば盡く皆能く捨て、乃至、身命をすら尙捨惜する無きなり。豈に況んや、餘の物にして施さざる者をや。八には、無量なる生死の煩惱を行ふと雖も、諸の有爲の行に染著せざるなり。九には、常に無量の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を行すと雖も、而も諸の波羅蜜を分別せざるなり。十には常に是の心を生ずるなり。我れ當に一切の衆生を菩提に安立し已つて、然る後に方に佛樹下に坐するに當り、菩提及び衆生の相を取らざるべし。と。迦葉、是れを菩薩摩訶薩は、十法を具足して便ち隱身三昧を獲得し能ふと爲すなり。と。爾の時に、尊者大迦葉は、復佛に白して言はく。希有なり、世尊の快く斯の事を説きたまへることや。世尊の乃ち能く是くの如き説を作したまへることや。世

【一四】若く已に、乃至、能はざるなり。異譯本には「遵修せる志性にては、菩薩に及ぶ無し。」とあり。

【一五】大菩薩の斯の地に住せる者の、等。異譯本には「是の定を得たる者も、亦見能ふ。」とあり。

【一六】復、一切の佛法を、等。別の異譯本には「佛法を受持し、而も取著せざるなり。」とあり。

なるを現せるか。と。爾の時に、世尊は大迦葉に告げて言はく。迦葉、汝今應に是の事を諮問すべからず。何を以ての故ぞ。是くの如き境界は、諸の聲聞・緣覺の知る所に非ざればなり。若し我れ是の光明の義を説かば、一切世間の天・人・阿修羅は、皆當に驚き疑うて迷設の處に入るべければなり。是の故に、汝今應に問ふべからざるなり。と。時に大迦葉は、復佛に白して言はく。世尊、惟願はくば、大慈もて一切の諸の天・人を憐愍したまはん故に、一切の諸の天・人を利益したまはん故に、一切の諸の天・人を安樂せんに故に、此の光明の甚深なる因縁を説きて、我れをして開解せしめたまはんことを。と。爾の時に、世尊は迦葉に告げて言はく。汝宜しく諦に聽きて、善く之れを思念すべし。吾れ汝が爲めに説かん。と。大迦葉の言はく。善い哉、世尊。願はくば、樂欲して聞けば、惟敷演を垂れたまはんことを。と。時に佛は復大迦葉に告げて言はく。迦葉、今我が文殊師利は彼の普明無垢莊嚴三昧に入り、三昧の力の故にて斯の光明を放つて、遍く十方の恒沙に過ぎたる等の諸佛の國土を照して、大に集めたる爲め、彼の無量・無邊・不可數・不可量なる阿僧祇の諸の大菩薩摩訶薩等は、而ち此の娑婆世界に來り至つて、彼等は皆已に我が足を頂禮し、右に邊ること三匝し、處つて虚空に在ること高さ一多羅樹にして、皆各彼の大蓮華の座に於て結跏して坐せるなり。と。爾の時に、尊者大迦葉は復佛に白して言はく。世尊、今何等の菩薩摩訶薩の威神の徳力あつて、而ち是くの如き微妙なる華香を雨し、復是くの如き百千の音樂の、鼓たざるに自ら鳴るを出せるか。と。佛は大迦葉に告げて言はく。迦葉、是れ十方の諸の菩薩等の威神の力の故に爲つて、是くの如き勝妙なる華香を雨し、乃至、上虚空の中に於て無量の樂音は皆自ら鳴るなり。と。迦葉は復言はく。世尊、我れ是の中に於て、乃至、彼の一の菩薩をも見ず。云何ぞ、世尊は更に十方の諸の菩薩等と言ふか。と。迦葉、一切の聲聞・辟支佛等は、終まで彼の諸の菩薩摩訶薩の衆を見る能はざるなり。何を以ての故ぞ。迦葉、是の中の聲聞・辟支佛等は、大慈悲に於ては其の住する所に非ざる故な

詰問するにも 法の如き言にて 猶能く巧に説きたまふ忍辱の力 能く深空の法に通達したまへる 心意の微妙なること稱量し難く 能く他に樂を施したまふ功德の人 是の故に我れ今無垢に問ひたてまつる 諸漏久しく盡き患悉く除き 深く衆生の諸苦に設し 黑暗中に覆れたる愚癡の者の 垢濁及び我人を生ぜざるを見 諸有を憐愍して慈心を起し 百千劫を過ぎて勤めて修行し 正覺菩提の岸を開發したまへり 惟願はくば我が今の疑を除斷したまはんことを

善く神通門に出入し能ひ 隱顯自在に巧に行住し 無我を證得して我相を破り 諸法を毀壞したまへども亦空なるに非ず 佛は世中に於て染著無く 眞實なる正行及び正思もて 微妙なる寂滅にて諸垢を離れたまへり 惟願はくば我が爲めに此の疑を決したまはんことを 微妙なる寂滅にて諸垢を離れたまへり 惟願はくば我が爲めに此の疑を決したまはんことを

尊昔日修行したまへる時に 施戒忍進は暫くも廢する無く 禪定智慧をも亦常に修めて 群生を利益したまへること比ある無く 諸の功德の聚は思量し難く 深大なること海の窮盡無きが如くにして 善く往來して亦善く住し能ひたまへり 惟願はくば我が爲めに歸依と作りたまはんことを 往昔無垢にて大慈を修めたまふに 怖るる鶴の歸投するや救うて捨てず 身を剃り股を割きて血は滂流するも 肉を稱り鷹に與へて之れに代らんと 全身を秤に上せて彼れに敵れりと謂へるに 而も鶴は尙重く身は猶輕し 大明の善巧に以て慈を行じたまふこと

や 惟願はくば我が爲めに疑惑を決したまはんことを 須彌動搖し衆星落ち 諸天の宮殿盡く破れ亡び 四大海水は一朝に枯れ 阿修羅の宮は天上に處り 假日日輪をして地に墮らしめ 明月の空に處るもの忽ち闇冥なりとも 諸佛正覺兩足尊の 言ふ所は眞誠にして二つある無きなり と。

爾の時に、尊者摩訶迦葉は偈讚を説き已つて、復佛に白して言はく。大德世尊、何の因縁の故にて、世間に是の微妙なる光明あり、復何の因縁にて、忽として是くの如き未曾有なる瑞の衆相の明了

【二】無垢(Kirita)。佛徳に由る讚號なり。

【三】諸法を毀壞、乃至、非ず。異譯本に「好んで空法を樂習し」とあり。

【三】大明の、善巧に以て慈を行じたまふことや。別の異譯本には「世尊の大慈光」とあり。

意に随つて生ぜる所の無量なる百千の種種の妙色の大蓮華の座に結跏して坐し、悉く皆身を隠して復と現れざらしめたり。

爾の時に、尊者摩訶迦葉は、彼の殊特希有なる瑞相大神通の事を見、復彼の衆の大に華香を雨せるを見、亦彼の無量の樂音を作せるを見、又復彼の大光明を放てるを見、又亦此の三千大千世界の諸の四天下に、皆妙華を雨して積つて膝に至れるを見、又復彼の一切の大衆たる天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人及び非人、乃至、有らゆる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等の一切、皆悉く金色の相の身を具足し成就せるを見るや、是に於て尊者摩訶迦葉は、座よりして起ち、正しく威儀を持ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌し恭敬して、偈を以て讚じて曰はく。

歡喜して常に一切の樂を與へんと 無垢清淨なる頰を圓滿し 十力雄猛なる諸の大人 金剛なる百福の相を具足し 三界人天の間に遊びたまふに 一切能く佛に如く者無く 不可思議にして測度し難し 惟願はくば我が疑心を除斷したまはんことを 那由他百千劫を過ぎて 常に布施を行じて世間を攝め 執著を遠離して依る所無く 淨く禁戒を持ちて倫比無く 具足して忍を修すること世間に超え 一切力の中にて十力の最たる 功德備り満ちたまひて過ぐる者無し 惟願はくば永く我が疑心を絶ちたまはんことを 百千劫を過ぎて衆行を修め 衆生の諸苦を受くるを見るを以て 勇猛に精進して疲るる無く 常に歡喜を生じつつ量ある無く 頭目髓腦をば持ちて人に與へ 男女及び妻妾を棄捨し 國城及び衆具を厭離したまへり 惟願はくば我が疑網を解除したまはんことを 世尊往昔に施を行じたまへる時の 象馬輦輿は數ふ可からず 那由他に過ぎたる上衣服をも 常に歡喜を以て世間に恵みたまひ 世尊は常に先心を以て 是くの如き雜物及び衆珍 飲食陽藥并に田宅を施したまへり 是の故に今日我れ諮問したてまつる 往昔に身及び耳鼻を割きたまへども 內心無垢にして瞋を生ぜず 若しくば他の

并に彼の文殊師利及び餘の菩薩摩訶薩を見んと欲する故に。と。彼の諸の世尊は、即便に彼の諸菩薩に告げて言はく。諸の善男子、往かんと欲せば意に隨へ。汝應に時なるを知るべし。と。爾の時
 に、十方の無量なる阿僧祇・不思議・不可計・不可稱・不可量なる億那由他の百千 頻婆羅の菩薩摩訶
 薩は、各佛足を禮し已つて、猶壯士の臂を屈伸する頃の如くに、各彼の世界に於て没して此の娑婆
 國土に來現せり。是の時に、十方の諸來れる菩薩摩訶薩衆は、皆世尊釋迦牟尼如來・應供・正遍覺
 の所に詣るに、其の間に、或は能く衆香の、謂はゆる塗香・末香及び香鬘を雨して、世尊釋迦牟尼
 如來・應供・正遍覺の所に來り詣るなり。或は菩薩の、諸の妙華の、謂はゆる優鉢羅華・鉢頭摩華・拘
 物頭華・分陀利華・瞻波迦華・波吒利華・陀奴迦利華・阿他目多迦華・蘇摩那華・婆利師迦華・曼陀羅華・
 摩訶曼陀羅華・波盧沙華・摩訶波盧沙華・旃陀羅華・摩訶旃陀羅華・微妙旃陀羅華・斫迦羅華・摩訶斫迦
 羅華・最妙斫迦羅華を雨し、是の等の如き種種の華鬘を雨して、世尊釋迦如來・應供・正遍覺の所に
 來り詣るあり。或は菩薩摩訶薩の、能く百千の上妙なる諸音を出して、世尊釋迦如來・應供・正遍
 覺の所に來り詣るあり。復、菩薩摩訶薩の、能く一音を以て遍く三千大千世界に滿して、佛徳を歌
 ひ讚めつつ、世尊釋迦如來・應供・正遍覺の所に來り詣るあり。是等の如き種種なる莊嚴を以て、
 咸く世尊釋迦如來・應供・正遍覺の所に詣れり。時に彼の十方の諸來れる菩薩摩訶薩衆の、大
 に此の娑婆世界に集るや、而ち此の三千大千世界の有らゆる衆生の、地獄・畜生・餓鬼若しくは閻魔
 界は、悉く皆寂然として身心安樂に、貪欲・瞋恚・愚癡ある無く、衆毒たる嫉妬・詭譎・我慢の熱惱を
 遠離し、一切の衆生は、皆慈心を起して歡喜を具足したり。何を以ての故ぞ。彼の十方の諸の大菩
 薩の威神の力を以ての故に、其の事はくの若きなり。爾の時に、十方の無量なる百千億那由他の諸
 の大菩薩摩訶薩等は、咸く世尊釋迦如來・應供・正遍覺の所に集り、佛の所に到り已るや、頭面に
 て禮敬し、右に遶ること三匝し、虛空に住つて、即、菩薩隱身三昧に入りしが、三昧に入り已るや、

【八】頻婆羅。

第三卷「同名」の解、參照。
 異譯本には「塵の如き數」とあ
 り。

【九】陀奴迦利華(Dharmakā-
 ra)。「藏譯名義大集」には「陀
 奴劫利」の文字を當てあり。

【一〇】菩薩隱身三昧。
 別の異譯本には「隱一切身菩
 薩三昧」とあり。

善根の成就する爲めの故に、菩薩乘を行する人の、彼の不思議なる諸の佛法を満足するを得ることの爲めの故に、善男子、又彼の文殊師利は、斯の光明を放つて、十方世界の無量阿僧祇の諸の菩薩衆をして、大に集らしめんと欲したり。故は、彼の諸の菩薩をして、勝法を得しめんとてなり。故に是の因縁を以て、彼の文殊師利は大光明を放つて諸の佛土を照したるなり。と。爾の時に、十方世界の諸佛の侍者は、復各彼の諸佛に請ひ問うて言はく。世尊、彼の文殊師利は、何の三昧に住して此の光明を放てるか。と。爾の時に、十方の諸佛は、咸く各其の侍者たる弟子に告げて言はく。諸の善男子、彼の文殊師利は、普明無垢莊嚴三昧（みんぼうくさうげんさんまい）に入れる故にて斯の光明を放てるなり。と。侍者たる菩薩は、復諸佛に白して言はく。世尊、我れ初より未だ是くの如き光明の、是くの如くに清淨に、是くの如くに能く身心をして歡喜せしめたるを見ず。と。諸佛は、復諸の菩薩に告げて曰はく。彼れ將、諸の菩薩をして修行を起さしめんと欲せざらんや。彼れ將、諸の菩薩衆を大に集めんと欲せざらんや。彼れ將、諸の菩薩を集めて、斯の妙經典の如きを宣說せんと欲せざらんや。と。

爾の時に、十方の無量不可思議恒河沙の等の諸佛の世界の、一一の世界の中に、無量阿僧祇の諸の菩薩衆ありしが、各自ら彼の諸佛世尊の所に詣つて佛足を頂禮し、禮し已るや、即復彼の諸佛に請ひ白して言はく。世尊、誰れか是の光を有ち、誰れか斯の徳を有てるか。我等昔より來、未だ曾て忽として是の光を現して諸の世尊を照せるを見聞せず。と。時に彼の諸佛は、復彼の諸の菩薩衆に告げて曰はく。諸の善男子、彼に世界あつて、名けて娑婆と曰へるが、其の佛を釋迦牟尼如來・應供・正遍覺と號して、今現に說法したまへり。彼に菩薩あつて、文殊師利と名けて、大威徳を具したるが、其に大に一切の菩薩摩訶薩衆を集めん爲めの故に、斯の光明を放てるなり。と。時に彼の諸の菩薩は、復彼の諸佛に白して言はく。世尊、我等今は、願はくば娑婆世界に詣らんことを。釋迦如來に見えて、禮拜・恭敬し奉らんと意欲する故に。供養し承事せん故に。義理を請ひ問はん故に。

【七】彼れ將、諸の菩薩をして。乃至。宣說せんと欲せざらんや。
異譯本には「時に乃ち、斯の大洪曜を奮はして諸の菩薩を會し、經典を講宣して大道を開示せんとなり。」とあり。

て、若しは一を滅したる劫にて、是くの如き光明の功德を讃説すとも、終まで盡すこと能はじ。又、是くの如くなるを以て、慈・悲・喜・捨の諸善根力を共に相ひ薫修することも、此の光明をして能く歡喜を生ぜしむるなり。と。時に、彼の十方の諸佛の侍者は、各自ら殷勤に再三啓し請うて、白して言はく。唯願はくば、世尊、一切の諸の天・人を憐愍せん故に、一切の諸の天・人を安樂せん故に、一切の諸の天・人を利益せん故に、菩薩の諸の善根を成熟せん故に、我等が爲めに光明の因縁を説きたまはんことを。と。彼の諸の菩薩の、是くの如くに請ひ已るや、是に於て十方の諸佛世尊は、復各其の侍者たる弟子に告げて言はく。諸の善男子、汝宜しく諦に聽くべし。吾れ汝が爲めに説かん。と。諸の侍者の言はく。唯然く、世尊願樂して聽聞せん。と。

爾の時に、彼の佛は、各各其の侍者に告げて言はく。善男子、世界あつて、名けて娑婆と曰ひ、其の土に佛あつて、釋迦牟尼如來・應供・正遍覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師佛世尊と號せり。五濁の世に出でたれば、彼の土の衆生は、多く貪欲・瞋恚・愚癡を有つて衆惱に迫られ、彼の諸の衆生は、恭敬を有つ無く慚恥を識らず、都べて羞恥無く、爲す所の行業は多く諸の不善なるが、能く是くの如き濁惡の世の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成就し、然く今現在に、衆に處つて法を説きたまへり。善男子、彼の世界の中の釋迦如來に、二の大弟子の菩薩摩訶薩の文殊師利と名けたるあり。大功德を有つて智慧を具足し、精進勇猛に大威神を有ちたるが、能く菩薩をして威く歡喜を得しめん故に、能く菩薩をして修行を具足せしめん故に、諸の菩薩をして威力を増長せしめん故に、諸の菩薩をして勇猛を發動せしめん故に、能く一切法の句を善く分別せる故に、能く無礙なる智慧の彼岸に達せる故に、能く具足して無礙の辯才を得たるが故に、又諸の陀羅尼に於て自在を得たるが故に、已に具に一切の菩薩の不思議なる功德を成滿せる故にて、彼の菩薩をして、將に釋迦牟尼如來・應供・正遍覺に、甚深なる法門を請ひ問はんと欲せんとせしめたり。諸の菩薩の

【四】若しは一を滅したる劫。別の異譯本には「若しは餘の殘劫」とあり。

【五】又是くの如くなるを以て、乃至生ぜしむるなり。異譯本には「此の光明の耀く所に、慈愍を興して、蠲滅たること斯くの如し」とあり。

【六】能く一切法の句を善く分別せる故に。別の異譯本には「一切諸法の句義を解了し」とあり。

是くの如き光明の從つて來たる所の處と、而して普く諸佛の國土を照し能ふことを宣説したまはんことを。

爾の時に、十方の諸佛は、即十方の恒河沙の數の世界の、有らゆる一切の諸の如來の聲の、悉く同じき梵音なるを以ひ、一如來の口業にて説く所の如くに、其の説く所の事の如きも亦差別無き、是の妙聲を用ひて、各皆己れの侍者に報じ告ぐるや、彼の諸佛の聲を出して告ぐる時に當り、一切の佛利は悉く皆震動し、百千の樂音は一時に皆作り、乃至、一切の天・人・阿修羅の、有つ所の意樂は、鼓たざるに、自ら鳴り、又彼の樂音の衆の聲の中に、諸の法音を出せり。謂はゆる無常の聲・苦の聲・無我の聲・空の聲・無相の聲・無願の聲・離欲の聲・解脱の聲・法界の聲・如如の聲・實際の聲・檀波羅蜜の聲・尸波羅蜜の聲・屬提波羅蜜の聲・毘梨耶波羅蜜の聲・禪波羅蜜の聲・般若波羅蜜の聲・大慈の聲・大悲の聲・大喜の聲・大捨の聲・和合の聲・利益の聲・出離の聲と、是等の如き種種なる百千の諸法の聲を出したり。又彼の種々なる諸聲の出でし時に、無量なる阿僧祇億那由他の百千の衆生は、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることに住するを得、復辟支佛を成就せる者、聲聞を成ぜざる者、乃至、大梵天王・天帝釋・轉輪王等を成ずるを得たるものあり。

爾の時に、十方の諸佛世尊は、咸く各其の侍者たる弟子に告げて言はく。諸の善男子、汝今應に是の事を請ひ問ふべからず。何を以ての故ぞ。是の光明の因縁は、一切の聲聞・辟支佛等は其の境界に非ず。我れ若し説かば、乃至、世間の天・人・阿修羅は皆即迷ひ沒まん。是の故に、應に斯の事を請ひ問ふべからず。諸佛如來にして、若し是くの如き光明の因縁を説かば、乃ち能く不可思議なる諸の勝善根を成就することを生じ、亦是くの如き不思議なる諸の勝善根を緣として、謂はゆる布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の諸度の等の行を出生することを得、是くの如き諸行は、即是れ光明の出生する所にして、亦光明に爲つて成就せらる。是の故に、我等、諸佛如來は、若しは一劫に於

の菩薩衆を集めて、皆如來の説かるゝ是の妙法門を開きて、深法忍を證せしむべし。と。爾の時に、文殊師利は是くの如くに念じ已つて、即、普光無垢莊嚴三昧に入れり。此の三昧に入り已るや、大光明を放つて、東方の恒河沙の等の如き諸佛の世界を照すこと、普く皆柔和・潤澤・清淨・明朗・無垢・微妙にして稱し難し。而して此の光明は、遍く南・西・北方・四維・上下の十方の世界を照すに、其の間に有つ所の一切の暗冥・幽隱の處、山崖・樹林、大小の諸山、目眞隣陀山・摩訶目眞隣陀山・鐵圍山・大鐵圍山及び餘の黑山・須彌山・大須彌山の是くの如き一切を、光明は朗徹して障礙ある無かりき。

爾の時に、十方の恒河沙の世界の有らゆる諸佛の、現に法を説ける者に、彼の諸の弟子は、各其の佛に請うて言はく。世尊、何の因縁の故にて、乃ち是くの如き大なる瑞光明あつて、世間に現するか。世尊、我れ昔より來、初より未だ是くの如き光明の、是くの如くに清淨に是くの如くに微妙なるを聞見せず。世尊、此れは何の光明なれば、而く我等をして、大喜身に遍うし心に清淨なるを得しめ、亦衆生をして、復と貪欲・瞋恚・愚癡の煩惱無く、衆惡を一切行はざらしむるか。世尊、今此の光明は、誰れの作す所にして、誰れに加持せられて、來つて此に現ぜるか。と。彼の諸の侍者は是くの如くに請ひ已るに、彼の諸の世尊は、默然として報する無し。爾の時に當つて、十方世界の有らゆる諸種の音聲、謂はゆる、若しは天の聲、若しは龍の聲、若しは夜叉の聲、若しは乾闥婆の聲、若しは阿修羅の聲、若しは迦樓羅の聲、若しは緊那羅の聲、若しは摩睺羅伽の聲、若しは人の聲、若しは非人の聲、若しは象馬の聲、若しは諸獸の聲、是等の如き聲は、咸く皆止息し、若しは風の聲、若しは火の聲、若しは水の聲、若しは大海の波の聲、若しは音樂の聲、若しは歌讚の聲は、爾の時に當つて、是くの如き諸の聲は、佛力の故を以て、亦皆止息して、一切寂然たり。時に彼の十方の諸佛の侍者は、復彼の佛に請うて言はく。世尊、惟願くは、大慈もて一切の諸の天・人を憐愍せん故に、一切の諸の天・人を安樂せん故に、一切の諸の天・人を利益せん故にて、我が爲めに、

【三】普光無垢莊嚴三昧。異譯本には「離垢光嚴淨三昧」とあり。

に久しく住せるなり。復、二萬の阿修羅王あつて、羅睺阿修羅王・須彌阿修羅王と、是等の如きを而ち上首と爲して、亦皆已に菩薩道に住せるなり。復、六萬の諸大龍王あつて、阿那婆達多龍王、勝月龍王と、是等の如きを而ち上首と爲して、亦皆已に菩薩道に住せるなり。并に餘に無量の諸天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の億百千の衆、乃至、一切の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の無量の衆は、皆來つて會に集れり。

爾の時に、世尊は、是等の如き無量なる百千の衆の圍遶したるを以て、法を説かんとする時に於て、文殊師利菩薩は、即ち己れの室に於て、彼の無諍除心三昧に入つて、寂然として動かざりしが、是に於て、文殊師利は、一心に安庠として三昧より起るに、時に應じて、十方の無量無邊なる諸の佛世界は六種に震動せり。時に、文殊師利は三昧より起ち已つて、是くの如き念を作さく。彼の無量無邊なる諸の世界の中にて、乃ち一の佛・如來・應供・正遍覺の世に出興することあるは、優曇華の希に復と現するが如きのみ。是くの如くに、諸の如來・應供・正遍覺は世間に希有にして、出現すること甚だ難きに、説かるゝ所の法も、諸有の生を盡したる寂滅涅槃にして、思量す可からず分別ある無くして、甚深なること、譬ふる無く、解し難く、知り難し。然るに諸佛の出世せざるを以ての故に聞くことを得可からず。聞かざる故を以て、諸の衆生の苦は窮め盡され難し。我れ今應當に如來正遍覺に詣つて、是の義を請問し斯の義を問ふ所の故にて、諸の衆生をして善根を成就せしめ、亦一切、菩薩を行する者をして、彼の甚深不可思議なる諸の佛法の中に於て、復と疑惑無くして、皆佛菩提の事を成滿するを得しむべし。然らば、此の娑婆世界の諸の衆生等の、多く貪欲を有ち瞋恚を具足し愚癡を成就して白法を斷除し、頑鈍・誑詐にして慚愧ある無く、我慢・貢高にして諸佛に遠離し法・僧に違背せるにも、彼の衆生をして、是くの如き甚深なる妙法を聞くことを得て、淨き智眼を獲しめん。と。爾の時に、文殊師利は復是の念を作さく。我今應當に大に十方の諸

【一】阿那婆達多 (Anavatī) 龍王、謂はゆる八大龍王の一にして、阿耨達池即ち無熱池に住むと云はる。

【二】無諍除心三昧。異譯本「佛說如幻三昧經」(西晉、竺法護、譯)には「空無心離心三昧」とあり。又、別の異譯本「聖善住意天子所問經」(元魏、毘目智仙、般若流支等の譯)には「心靜三昧」とあり。

卷の第一百二

隋達磨笈多漢譯

善住會天子會 第三十六の一

緣起品 第一

是くの如くに我れ聞けり。一時婆伽婆は、王舍城の耆闍崛山の内に住したまひて、大比丘の衆六萬二千人と俱なりき。皆是れ大德にして、神通を具足せる諸の大聲聞は而ち上首爲り。爾の時に、復四萬二千の菩薩あつて、其の名を文殊師利菩薩・師子幢菩薩・彌勒菩薩・觀世音菩薩・大勢至菩薩・大辯衆王菩薩・陀羅尼自在王菩薩・善丈夫菩薩・須彌頂菩薩・須彌幢菩薩・不可動菩薩・善思義菩薩・善思義意菩薩・善思惟菩薩・思心菩薩・勇慧菩薩・善思菩薩・寶髻菩薩・山相擊王菩薩・寶手菩薩・寶意菩薩・寶印手菩薩・常舉手菩薩・常下手菩薩・常精進菩薩・度衆生菩薩・上精進菩薩・如言行菩薩・上願菩薩・燈手菩薩・心平等菩薩・除惡道菩薩・除諸憂暗菩薩・不捨重擔菩薩・日藏菩薩・月藏菩薩・金剛步菩薩・無邊步菩薩・無量步菩薩・不動行步菩薩・虛空藏菩薩・勝意菩薩・益意菩薩・増上意菩薩・成行菩薩・持地菩薩・月光菩薩・月幢菩薩・光德菩薩・明照菩薩・勇步菩薩・師子奮迅吼音菩薩・無礙辯菩薩・相應辯菩薩・捷疾辯菩薩・最勝菩薩・翳日月光菩薩・無變緣菩薩・無著意菩薩・常笑菩薩・喜根菩薩・除諸障害菩薩・轉女身菩薩・摩尼珠菩薩・燈明菩薩・毘盧遮那菩薩・火焰菩薩・衆勝王菩薩・深說者菩薩と曰ひ、是等の如き菩薩摩訶薩は而ち上首爲り。爾の時に、復四大天王・忉利天王・娑婆世界の主たる大梵天王あつて、是等の如きを而ち上首と爲して、六萬の諸天衆と俱なり。復、善住意天子・善德天子・大自在天子あつて、是等の如きを而ち上首と爲して、三萬の諸天衆と俱なりしが、菩薩道に於て皆已

※「備考」註解は、前卷まで一度出でたる者は、再掲せず。

第四十一	彌勒菩薩問八法會(卷第二百十二).....	[二〇三]	——	[二〇三四]	二九
第四十二	彌勒菩薩所問會(卷第二百十二).....	[二〇三四]	——	[二〇四五]	二八
第四十三	普明菩薩(卷第一百一十二).....	[二〇四六]	——	[二〇五〇]	二九
第四十四	寶梁聚會(卷第二百十三—二百十四).....	[二〇七]	——	[二〇六]	二九
沙門品第一	[二〇七]	——	[二〇七]	二九
比丘品第二	[二〇七]	——	[二〇八]	三五
旃陀羅沙門品第三	[二〇八]	——	[二〇八七]	三九
營事比丘品第四	[二〇八七]	——	[二〇九一]	三五
蘭若比丘品第五	[二〇九]	——	[二〇九七]	三四〇
乞食比丘品第六	[二〇九七]	——	[二一〇〇]	三四五
糞掃衣比丘品第七	[二一〇〇]	——	[二一〇六]	三四八
第四十五	無盡慧菩薩會(卷第一百一十五).....	[二一〇七]	——	[二一一五]	三五五
第四十六	文殊說般若會(卷第二百十五—二百十六).....	[二一一五]	——	[二一三八]	二六三
第四十七	寶髻菩薩會(卷第二百十七—二百十八).....	[二一九]	——	[二一九五]	二八七
第四十八	勝鬘夫人會(卷第一百一十九).....	[二一九]	——	[二二五]	三四三
第四十九	廣博仙人會(卷第一百二十).....	[二二六]	——	[二三八]	三四四

索引

卷末

目次

大寶積經

(全百二拾卷中自卷第百〇二至卷第百二拾)〔一八五〕—〔三三六〕……………(通頁)

第三十六 善住會天子會(卷第百一五)……………〔一八五〕—〔一九六〕……………一

緣起品第一……………〔一八五〕—〔一八六〕……………一

開寶義品第二……………〔一八七〇〕—〔一八七四〕……………一八

文殊神變品第三……………〔一八七四〕—〔一八七七〕……………三

破魔品第四……………〔一八七七〕—〔一八八三〕……………三

菩薩身行品第五……………〔一八八三〕—〔一八八八〕……………三

破菩薩相品第六……………〔一八九九〕—〔一九〇六〕……………三

破二乘相品第七……………〔一九〇六〕—〔一九一〇〕……………四

破凡夫相品第八……………〔一九一〇〕—〔一九一六〕……………五

神通證說品第九……………〔一九一六〕—〔一九二二〕……………六

稱讚付法品第十……………〔一九二二〕—〔一九二六〕……………七

第三十七 阿闍世王子會(卷第百六)……………〔一九七〕—〔一九三〕……………七

第三十八 大乘方便會(卷第百一頁)……………〔一九三〕—〔一九九〕……………八

第三十九 賢護長者會(卷第百一頁)……………〔一九〇〕—〔二〇八〕……………二八

第四十 淨信童女會(卷第百一頁)……………〔二〇九〕—〔二三二〕……………二七

寶積部 六

長井眞琴譯



CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

國譯一切經

大東出版社藏版

26

